

# 京都府遺跡調査概報

## 第 60 冊

国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡

- (1) 左坂古墳群
- (2) 左坂横穴群(B支群)
- (3) 芋谷遺跡
- (4) 奈具谷遺跡
- (5) 溝谷古墳群
- (6) 女布北遺跡
- (7) 薬師7号墳

1994

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



(1) 奈具谷遺跡・取水口状遺構全景（西南から）



(2) 奈具谷遺跡・取水口状遺構（東北から）



(1) 奈具谷遺跡・ミ出土状況



(2) 奈具谷遺跡・橋状遺構検出状況（東から）



(1) 左坂横穴群B支群全景（東から）



(2) 左坂B1・B2横穴全景（東から）

## 序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、発足以来はや13年を経過し、さらに新しい未来に向かって踏み出そうとしています。この間、当センターの業務遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

過去の調査をふりかえってみますと、公共事業は年々増大し、それに伴う発掘調査も単に件数の増加だけでなく、とみに大規模化の傾向にあります。当センターでは、こうした状況に対応するため、徐々にではありますが、組織・体制の強化を進め、調査・研究の充実を図ってまいりました。このような発掘調査の成果については、『京都府遺跡調査報告書』をはじめ、『京都府遺跡調査概報』・『京都府埋蔵文化財情報』等の各種印刷物を逐次刊行し公表するとともに、毎年、展覧会や埋蔵文化財セミナー等を開催し、発掘調査で出土した遺物や調査の概要を広く府民に紹介して、一般への普及・啓発活動にも意を注いでいるところであります。

本書は、平成5年度に実施した発掘調査のうち、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて、丹後国営農地(東部・西部地区)関係遺跡に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかの役に立てば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された農林水産省近畿農政局をはじめ、京都府教育委員会・弥栄町教育委員会・大宮町教育委員会・久美浜町教育委員会などの関係諸機関、ならびに調査に直接参加・協力いただいた多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成6年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター  
理事長 福山敏男

## 凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。
- (1) 左坂古墳群    (2) 左坂横穴群(B支群)    (3) 芋谷遺跡    (4) 奈具谷遺跡  
 (5) 溝谷古墳群    (6) 女布北遺跡    (7) 薬師7号墳
2. 各遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
丹後国営農地(東部・西部地区)関係遺跡			農林水産省 近畿農政局	
(1) 左坂古墳群	中郡大宮町周枳左坂	平5.5.27～ 平6.3.7		石崎善久
(2) 左坂横穴群(B支群)	中郡大宮町周枳左坂	平5.5.11～ 8.30		筒井崇史
(3) 芋谷遺跡	中郡大宮町口大野芋谷	平4.11.11～ 12.18		増田孝彦
(4) 奈具谷遺跡	竹野郡弥栄町溝谷	平4.6.25～ 10.22		田代 弘
(5) 溝谷古墳群	竹野郡弥栄町溝谷	平5.4.16～ 7.30		田代 弘
(6) 女布北遺跡	熊野郡久美浜町女布	平5.8.19～ 12.22		筒井崇史
(7) 薬師古墳群	熊野郡久美浜町女布薬師	平5.5.11～ 6.4		岡崎研一

3. 本書の編集は、調査第1課資料係が当った。

# 目 次

はじめに	1
(1) 左坂古墳群	3
1. 位置と環境	3
2. 調査経過	6
3. 左坂古墳群分布状況	8
4. 調査概要	13
5. まとめ	60
(2) 左坂横穴群(B支群)	63
1. はじめに	63
2. 調査経過	64
3. 横穴群の分布状況	64
4. 各横穴の調査概要	67
5. まとめ	106
(3) 芋谷遺跡	113
1. 位置と周辺の遺跡分布	113
2. 調査の経過	114
3. 調査概要	116
4. 出土遺物	123
5. 製鉄炉の構造	124
6. まとめ	125
(4) 奈具谷遺跡	127
1. 位置と環境	127
2. 調査経過	130
3. 調査概要	132
4. まとめ	179
(5) 溝谷古墳群	205
1. 位置と環境	205
2. 調査の経過と概要	206
3. 出土遺物	217

4. 調査の成果と問題点-----	219
(6) 女布北遺跡-----	221
1. はじめに-----	221
2. 位置と環境-----	222
3. 調査経過-----	224
4. 調査概要-----	226
5. まとめ-----	242
(5) 薬師7号墳-----	247
1. はじめに-----	247
2. 調査経過-----	247
3. 調査概要-----	248
4. まとめ-----	250
付載1 国営農地開発事業に伴う発掘調査抄報-----	261
付載2 女布城跡-----	271



# 挿 図 目 次

## 国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡

### (1) 左坂古墳群

第1図	左坂古墳群・横穴群位置図及び周辺主要古墳時代遺跡分布図	4
第2図	左坂古墳群・横穴群・里ヶ谷横穴群分布図	9
第3図	左坂古墳群C支群調査前地形測量図	11
第4図	左坂古墳群C14号墳～C17号墳調査後地形測量図	12
第5図	左坂C15号墳主体部実測図	13
第6図	左坂C15号墳出土遺物実測図	14
第7図	左坂C16号墳主体部実測図	15
第8図	左坂C16号墳出土遺物実測図	16
第9図	左坂C17号墳主体部実測図	17
第10図	左坂古墳群C18号墳～20号墳調査後地形測量図	18
第11図	左坂C18号墳主体部実測図	19
第12図	左坂C18号墳遺物出土状況実測図	20
第13図	左坂C18号墳出土遺物実測図(1)	20
第14図	左坂C18号墳出土遺物実測図(2)	21
第15図	左坂C19号墳主体部実測図	22
第16図	左坂古墳群D支群調査前地形測量図	24
第17図	左坂D12号墳調査後地形測量図	25
第18図	左坂D12号墳主体部実測図	26
第19図	左坂D12号墳出土遺物実測図	27
第20図	左坂古墳群E支群調査前地形測量図	29
第21図	左坂E9～11号墳調査後地形測量図	30
第22図	左坂E9号墳主体部実測図及び墳丘土層断面図	31
第23図	左坂E9号墳出土遺物実測図(1)	34
第24図	左坂E9号墳出土遺物実測図(2)	35

第25図	左坂E10号墳墳丘土層断面図	36
第26図	左坂E10号墳第1主体部実測図	37
第27図	左坂E10号墳第2主体部実測図	37
第28図	左坂E10号墳第3主体部実測図	38
第29図	左坂E10号墳第4主体部実測図	38
第30図	左坂E11号墳出土遺物実測図(1)	39
第31図	左坂E11号墳出土遺物実測図(2)	39
第32図	左坂古墳群G支群調査前地形測量図	40
第33図	左坂G10・11号墳調査後地形測量図	41
第34図	左坂G10号墳第1主体部実測図	42
第35図	左坂G10号墳第2主体部実測図	43
第36図	左坂G10・11号墳溝内出土遺物実測図	43
第37図	左坂G11号墳第1主体部実測図	44
第38図	左坂G11号墳第2主体部実測図	45
第39図	左坂G12・13号墳調査後地形測量図	46
第40図	左坂G12号墳第1主体部実測図	47
第41図	左坂G12号墳第1主体部遺物出土状況図(1)	48
第42図	左坂G12号墳第1主体部遺物出土状況図(2)	49
第43図	左坂G12号墳第2主体部実測図	50
第44図	左坂G12号墳第3主体部実測図	50
第45図	左坂G12号墳出土遺物実測図(1)	52
第46図	左坂G12号墳出土遺物実測図(2)	53
第47図	左坂G12号墳出土遺物実測図(3)	54
第48図	左坂G13号墳第1主体部実測図	55
第49図	左坂G13号墳第1主体部遺物出土状況図(1)	56
第50図	左坂G13号墳第1主体部遺物出土状況図(2)	57
第51図	左坂G13号墳第2主体部実測図	58
第52図	左坂G13号墳出土遺物実測図	59
<b>(2) 左坂横穴群(B支群)</b>		
第53図	調査地周辺地形図	63
第54図	左坂横穴群(B支群)地形測量図及び遺構配置図	65
第55図	B1・B2号横穴実測図	68

第56图	B 1 · B 2号横穴前庭部遺物出土状況图	69
第57图	B 1 · B 2号横穴出土遺物実測图	70
第58图	B 3号横穴実測图	72
第59图	B 4 · B 5号横穴土層断面图	73
第60图	B 4号横穴実測图	75
第61图	B 4号横穴玄室内遺物出土状況图	76
第62图	B 4号横穴前庭部遺物出土状況图	76
第63图	B 4号横穴出土遺物実測图(1)	77
第64图	B 4号横穴出土遺物実測图(2)	78
第65图	B 5号横穴実測图	79
第66图	B 5号横穴玄室内遺物出土状況图	80
第67图	B 5号横穴出土遺物実測图	81
第68图	B 6号横穴実測图	82
第69图	B 6号横穴前庭部遺物出土状況图	83
第70图	B 6号横穴出土遺物実測图	84
第71图	B 7 ~ 9号横穴土層断面图	85
第72图	B 7号横穴実測图	87
第73图	B 7号横穴玄室内遺物出土状況图	88
第74图	B 7号横穴出土遺物実測图(1)	89
第75图	B 7号横穴出土遺物実測图(2)	90
第76图	B 8号横穴実測图	91
第77图	B 8号横穴玄室内遺物出土状況图	92
第78图	B 8号横穴前庭部遺物出土状況图	92
第79图	B 8号横穴出土遺物実測图(1)	93
第80图	B 8号横穴出土遺物実測图(2)	94
第81图	B 9号横穴実測图	95
第82图	B 9号横穴玄室内遺物出土状況图	96
第83图	B 9号横穴出土遺物実測图(1)	97
第84图	B 9号横穴出土遺物実測图(2)	98
第85图	B 10号横穴実測图	99
第86图	B 11号横穴実測图	100
第87图	B 11号横穴出土遺物実測图	101

第88図	B 12号横穴出土遺物実測図	101
第89図	B 12号横穴実測図	102
第90図	B 13号横穴実測図	103
第91図	B 13号横穴出土遺物実測図	103
第92図	火葬墓実測図	104
第93図	火葬墓出土遺物実測図	105
第94図	左坂横穴群(B支群)変遷図	107

### (3) 芋谷遺跡

第95図	調査地位置図及び周辺主要遺跡分布図	114
第96図	国営農地大野団地・調査地周辺埋蔵文化財分布状況	115
第97図	芋谷遺跡遺構分布図	116
第98図	製鉄炉周辺地形図	117
第99図	製鉄炉実測図	118
第100図	木炭窯 1 実測図	119
第101図	木炭窯 2 実測図	120
第102図	木炭窯 4 ・土器埋納土坑実測図	121
第103図	土器埋納土坑遺物出土状況実測図	122
第104図	出土遺物実測図	124

### (4) 奈具谷遺跡

第105図	周辺遺跡分布図	128
第106図	奈具谷遺跡の位置と周辺の遺跡	129
第107図	奈具谷遺跡調査地位置図	130
第108図	奈具谷遺跡検出遺構実測図	133
第109図	土層堆積状況模式図	135
第110図	調査区中央断面図	136
第111図	護岸板列(部分)実測図	136
第112図	杭による板の固定方法	137
第113図	板列の配列状況模式図	137
第114図	橋状の遺構検出状況	138
第115図	橋状の遺構；杭による固定の状況	138
第116図	S D01取水口状の遺構	139
第117図	取水口周辺の遺物出土状況	141

第118図	S D01変遷模式図	142
第119図	S D01埋土出土土器実測図(1)	145
第120図	S D01埋土出土土器実測図(2)	146
第121図	S D01埋土出土土器実測図(3)	147
第122図	S D01埋土出土土器実測図(4)	148
第123図	S D01埋土出土土器実測図(5)	149
第124図	S D01埋土出土土器実測図(6)	150
第125図	S D01埋土出土土器実測図(7)	151
第126図	S D01埋土出土土器実測図(8)	152
第127図	S D01埋土出土土器実測図(9)	153
第128図	S D01埋土出土土器実測図(10)	154
第129図	S D01埋土出土土器実測図(11)	155
第130図	S D01埋土出土土器実測図(12)	156
第131図	S D01埋土出土土器実測図(13)	157
第132図	S D01埋土出土土器実測図(14)	158
第133図	S D01埋土出土土器実測図(15)	159
第134図	S D01埋土出土土器実測図(16)	159
第135図	S D01出土土製品実測図	160
第136図	包含層出土土器実測図	161
第137図	S D01出土木器実測図(1)	162
第138図	S D01出土木器実測図(2)	163
第139図	S D01出土木器実測図(3)	164
第140図	S D01出土木器実測図(4)	165
第141図	S D01出土木器実測図(5)	166
第142図	S D01出土木器実測図(6)	167
第143図	S D01出土木器実測図(7)	168
第144図	S D01出土木器実測図(8)	169
第145図	S D01出土木器実測図(9)	170
第146図	S D01出土木器実測図(10)	171
第147図	S D01出土木器実測図(11)	172
第148図	S D01出土木器実測図(12)	173
第149図	S D01出土木器実測図(13)	174

第150図	S D01出土石器類実測図(1)-----	177
第151図	S D01出土石器類実測図(2)-----	178
第152図	S D01出土管玉作り関連遺物と勾玉-----	179
第153図	弥生土器各部の文様-----	185
第154図	凸帯文と凹線文-----	186
第155図	甕の成形・調整痕-----	188

(5) 溝谷古墳群

第156図	溝谷古墳群位置図-----	206
第157図	溝谷古墳群地形測量図-----	207
第158図	溝谷1・2・3号墳調査後地形測量図-----	210
第159図	溝谷1号墳と土坑(S K01)-----	210
第160図	溝谷1号墳供献土器-----	210
第161図	溝谷2・3号墳の墳丘と主体部-----	211
第162図	溝谷2号墳主体部実測図-----	213
第163図	2号墳主体部埋土断面図-----	215
第164図	溝谷3号墳主体部実測図-----	216
第165図	溝谷1号墳出土遺物-----	217
第166図	溝谷2号墳主体部出土遺物-----	218

(6) 女布北遺跡

第167図	調査地周辺主要遺跡分布図-----	221
第168図	調査地周辺地形及び調査区配置図-----	223
第169図	A地区遺構配置図-----	224
第170図	B地区遺構配置図-----	225
第171図	黒墨層出土遺物実測図(1)-----	226
第172図	黒墨層出土遺物実測図(2)-----	227
第173図	竪穴式住居跡S H01実測図-----	228
第174図	竪穴式住居跡S H01出土遺物実測図-----	229
第175図	竪穴式住居跡S H02実測図-----	230
第176図	竪穴式住居跡S H02出土遺物実測図-----	231
第177図	竪穴式住居跡S H03B実測図-----	232
第178図	竪穴式住居跡S H03B出土遺物実測図-----	233
第179図	鶏塚古墳墳丘測量図-----	234

第180図	鶏塚古墳墳丘断面図	235
第181図	鶏塚古墳石室実測図	237
第182図	鶏塚古墳出土遺物実測図(1)	239
第183図	鶏塚古墳出土遺物実測図(2)	239
第184図	鶏塚古墳出土遺物実測図(3)	239
第185図	土器溜まり S X 01実測図	241
第186図	土器溜まり S X 01出土遺物実測図	242
<b>(7) 薬師7号墳</b>		
第187図	薬師古墳群地形図	247
第188図	7号墳墳丘測量図	248
第189図	主体部実測図	249

## 付 表 目 次

### 国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡

付表1	平成5年度国営農地開発事業に伴う発掘調査一覧表	2
<b>(1) 左坂古墳群</b>		
付表2	左坂D12号墳出土玉類法量表	28
付表3	新旧古墳番号対照表	40
<b>(2) 左坂横穴群(B支群)</b>		
付表4	左坂横穴群(B支群)一覧表	111
<b>(4) 奈具谷遺跡</b>		
付表5	奈具谷遺跡出土の植物遺存体	180
付表6	出土比率	180
付表7	S D 01出土土器観察表	190
付表8	石鏃・楔形石器・剝片	198
付表9	緑色凝灰岩原石・石鋸・勾玉	198
付表10	石庖丁・磨製石斧・敲石・凹石・砥石	198
付表11	出土木器	199
<b>(6) 女布北遺跡</b>		

## 図版目次

### (1) 左坂古墳群

- 図版第1 (1)左坂E・C支群調査前全景(北東から)  
(2)左坂C14~20号墳調査前全景(東から)
- 図版第2 (1)左坂C14~20号墳調査後全景(東から)  
(2)左坂C14号墳調査後全景(北から)
- 図版第3 (1)左坂C15号墳主体部全景(南から)  
(2)左坂C15号墳遺物出土状況(北から)
- 図版第4 (1)左坂C16号墳全景(南から) (2)左坂C16号墳主体部全景(西から)
- 図版第5 (1)左坂C16号墳遺物出土状況 (2)左坂C17号墳主体部全景(東から)
- 図版第6 (1)左坂C18~20号墳調査後全景(南から)  
(2)左坂C18号墳主体部全景(東から)
- 図版第7 (1)左坂C18号墳鉄刀出土状況(南から)  
(2)左坂C19号墳主体部土層断面(西から)
- 図版第8 (1)左坂C19号墳主体部全景(西から)  
(2)左坂C20号墳近世墓人骨検出状況(南から)
- 図版第9 (1)左坂D12号墳調査前全景(南から)  
(2)左坂D12号墳調査後全景(南から)
- 図版第10 (1)左坂D12号墳主体部全景(西から)  
(2)左坂D12号墳鉄刀出土状況(北から)
- 図版第11 (1)左坂C9~11号墳調査前全景(北西から)  
(2)左坂C9~11号墳調査後全景(北西から)
- 図版第12 (1)左坂E9号墳第1~第3主体部全景(南から)  
(2)左坂E9号墳第3主体部全景(東から)
- 図版第13 (1)左坂E9号墳第3主体部鉄鏃出土状況(東から)  
(2)左坂E9号墳墳丘土層断面(北半部、西から)
- 図版第14 (1)左坂E10号墳調査後全景(南から)  
(2)左坂E10号墳第1主体部全景(東から)



- 図版第15 (1)左坂E10号墳第2主体部全景(東から)  
(2)左坂E10号墳第3主体部(右)・第4主体部(左)全景(東から)
- 図版第16 (1)左坂E10号墳墳丘土層断面(西から)  
(2)左坂E11号墳墳丘土層断面(西から)
- 図版第17 (1)左坂G支群調査前全景(東から)  
(2)左坂G支群調査後全景(北上空から)
- 図版第18 (1)左坂G10号墳第1主体部全景(東から)  
(2)左坂G10号墳第2主体部全景(南から)
- 図版第19 (1)左坂G11号墳第1主体部全景(西から)  
(2)左坂G11号墳第2主体部全景(東から)
- 図版第20 (1)左坂G12号墳全景(東から)  
(2)左坂G12号墳第1主体部全景(東から)
- 図版第21 (1)左坂G12号墳第1主体部遺物出土状況(1)(北から)  
(2)左坂G12号墳第1主体部遺物出土状況(2)(北西から)
- 図版第22 (1)左坂G12号墳第1主体部遺物出土状況(3)  
(2)左坂G12号墳第2主体部全景
- 図版第23 (1)左坂G12号墳第2主体部遺物出土状況(西から)  
(2)左坂G12号墳第3主体部全景(南から)
- 図版第24 (1)左坂G13号墳第1・第2主体部全景(西から)  
(2)左坂G13号墳第1主体部遺物出土状況(西から)
- 図版第25 出土遺物(1)
- 図版第26 出土遺物(2)
- 図版第27 出土遺物(3)
- 図版第28 出土遺物(4)
- 図版第29 出土遺物(5)
- 図版第30 出土遺物(6)
- (2) 左坂横穴群(B支群)
- 図版第31 (1)左坂横穴群調査前風景(全景)  
(2)左坂横穴群調査前風景(丘陵斜面部分)
- 図版第32 (1)左坂B1～9号横穴全景(東から) (2)左坂横穴群作業風景
- 図版第33 (1)左坂B1・B2号横穴全景(東から)  
(2)左坂B1号横穴前庭部遺物出土状況(東から)

- 図版第34 (1)左坂B 1号横穴玄室内遺物・焼骨出土状況(東から)  
(2)左坂B 1号横穴前庭部出土遺物
- 図版第35 (1)左坂B 2号横穴前庭部遺物出土状況(東から)  
(2)左坂B 2号横穴玄室内焼骨出土状況
- 図版第36 (1)左坂B 3号横穴全景(東から)  
(2)左坂B 4・B 5号横穴作業風景(北から)
- 図版第37 (1)左坂B 4・B 5号横穴全景(東から) (2)左坂B 4号横穴全景(東から)
- 図版第38 (1)左坂B 4号横穴玄室内遺物出土状況(東から)  
(2)左坂B 4号横穴玄室内人骨出土状況(東から)
- 図版第39 (1)左坂B 4号横穴前庭部遺物出土状況(南西から)  
(2)左坂B 4号横穴板戸痕跡(南から)
- 図版第40 (1)左坂B 4号横穴須恵器大甕出土状況(南から)  
(2)左坂B 4号横穴須恵器大甕出土状況(北から)
- 図版第41 (1)左坂B 5号横穴全景(東から)  
(2)左坂B 5号横穴玄室内遺物出土状況(東から)
- 図版第42 (1)左坂B 6号横穴全景  
(2)左坂B 7・B 8・B 9号横穴作業風景(北から)
- 図版第43 (1)左坂B 7・B 8・B 9号横穴全景(東から)  
(2)左坂B 7号横穴全景(東から)
- 図版第44 (1)左坂B 7号横穴玄室内遺物出土状況(東から)  
(2)左坂B 7号横穴前庭部出土遺物(南から)
- 図版第45 (1)左坂B 8号横穴全景 (2)左坂B 8号横穴玄室内遺物出土状況(東から)
- 図版第46 (1)左坂B 8号横穴玄室内遺物出土状況(東から)  
(2)左坂B 8号横穴玄室内遺物出土状況(北から)
- 図版第47 (1)左坂B 8号横穴前庭部出土遺物(北から)  
(2)左坂B 8号横穴前庭部出土遺物(東から)
- 図版第48 (1)左坂B 9号横穴全景(東から)  
(2)左坂B 9号横穴玄室内遺物出土状況(東から)
- 図版第49 (1)左坂B 9号横穴玄室内遺物出土状況(南東から)  
(2)左坂B 9号横穴玄室内遺物出土状況(北東から)
- 図版第50 (1)左坂B 11号横穴全景(南西から)  
(2)左坂B 11号横穴前庭部遺物出土状況(南西から)

- 図版第51 (1)左坂B13号横穴全景(南東から)  
(2)左坂B10~12号横穴作業風景
- 図版第52 (1)火葬墓全景(南から) (2)火葬墓全景(東から)
- 図版第53 (1)蔵骨器検出状況(南から) (2)蔵骨器
- 図版第54 (1)蔵骨器内焼骨 (2)蔵骨器埋納土坑完掘状況
- 図版第55 (1)左坂B6号横穴全景(東から) (2)左坂B12号横穴全景(南から)
- 図版第56 出土遺物(1)
- 図版第57 出土遺物(2)
- 図版第58 出土遺物(3)
- 図版第59 出土遺物(4)
- 図版第60 出土遺物(5)
- 図版第61 出土遺物(6)
- 図版第62 出土遺物(7)

### (3) 芋谷遺跡

- 図版第63 (1)木炭窯1・2全景(東から) (2)木炭窯1近景(東から)
- 図版第64 (1)木炭窯4・土器埋納土坑全景(南西から)  
(2)土器埋納土坑遺物出土状況(北西から)
- 図版第65 (1)製鉄炉周辺全景(南東から) (2)製鉄炉検出状況(北北西から)
- 図版第66 (1)製鉄炉全景(南南東から) (2)製鉄炉全景(東から)
- 図版第67 (1)製鉄炉東側石列(北西から) (2)製鉄炉周辺全景(西から)
- 図版第68 (1)木炭窯2近景(南から) (2)木炭窯5炭化部断面(南東から)
- 図版第69 (1)製鉄炉全景(北北西から) (2)製鉄炉西側石列(北から)
- 図版第70 (1)製鉄炉中央断面(北北西から) (2)製鉄炉石列除去後全景(北北西から)
- 図版第71 出土遺物(1)
- 図版第72 出土遺物(2)

### (4) 奈具谷遺跡

- 図版第73 (1)奈具岡遺跡第4次調査地点  
(2)奈具谷遺跡と奈具岡遺跡第4次調査地点
- 図版第74 (1)板杭列検出状況(上層) (2)板杭列と加工木材(上層)
- 図版第75 (1)流路跡(S D01)検出状況(下層) (2)調査地全景(下層)
- 図版第76 (1)流路跡(S D01)埋土の土層堆積状況(板列除去後)  
(2)遺構ベースの土層堆積状況

- 図版第77 (1)板列1・板列2検出状況(東から)  
(2)板列1・板列2検出状況(南から)
- 図版第78 (1)板列1の固定状況(南西から) (2)板列1の固定状況(南から)
- 図版第79 (1)板列4の固定状況(南西から) (2)杭による板の固定状況(1)  
(3)杭による板の固定状況(2)
- 図版第80 (1)橋状の施設(東から) (2)橋状の施設(細部)  
(3)橋状の施設(細部)
- 図版第81 (1)取水口状の施設(上から) (2)取水口状の施設(南から)
- 図版第82 (1)取水口状の施設(西から) (2)取水口状の施設(南東から)
- 図版第83 (1)取水口状の施設としがらみ(南西から)  
(2)取水口に固定された槽としがらみ(南西から)
- 図版第84 (1)槽の固定状況(西から) (2)槽としがらみ(南から)
- 図版第85 (1)槽(細部) (2)槽の固定状況(北端) (3)槽の固定状況(西端)
- 図版第86 (1)木製桶の出土状況 (2)木製高杯の出土状況
- 図版第87 (1)ミ状の編み物出土状況 (2)網代状の編み物出土状況
- 図版第88 (1)弥生土器(甕)出土状況(流路跡内)  
(2)弥生土器(甕)出土状況(流路跡内)
- 図版第89 (1)木製横槌出土状況 (2)試掘坑出土木製品
- 図版第90 流路内(S D01)出土弥生土器
- 図版第91 (1)楔形石器 (2)石庖丁・磨製石斧
- 図版第92 (1)砥石・敲石・凹石 (2)玉作り関連遺物
- 図版第93 (1)土製品類 (2)勾玉
- 図版第94 流路内(S D01)出土木製品(1)
- 図版第95 流路内(S D01)出土木製品(2)
- 図版第96 流路内(S D01)出土木製品(3)
- 図版第97 流路内(S D01)出土木製品(4)
- 図版第98 流路内(S D01)出土木製品(5)
- 図版第99 流路内(S D01)出土木製品(6)
- 図版第100 流路内(S D01)出土木製品(7)
- 図版第101 流路内(S D01)出土木製品(8)
- 図版第102 (1)トチ木種子 (2)コナラ属果実

(5) 溝谷古墳群

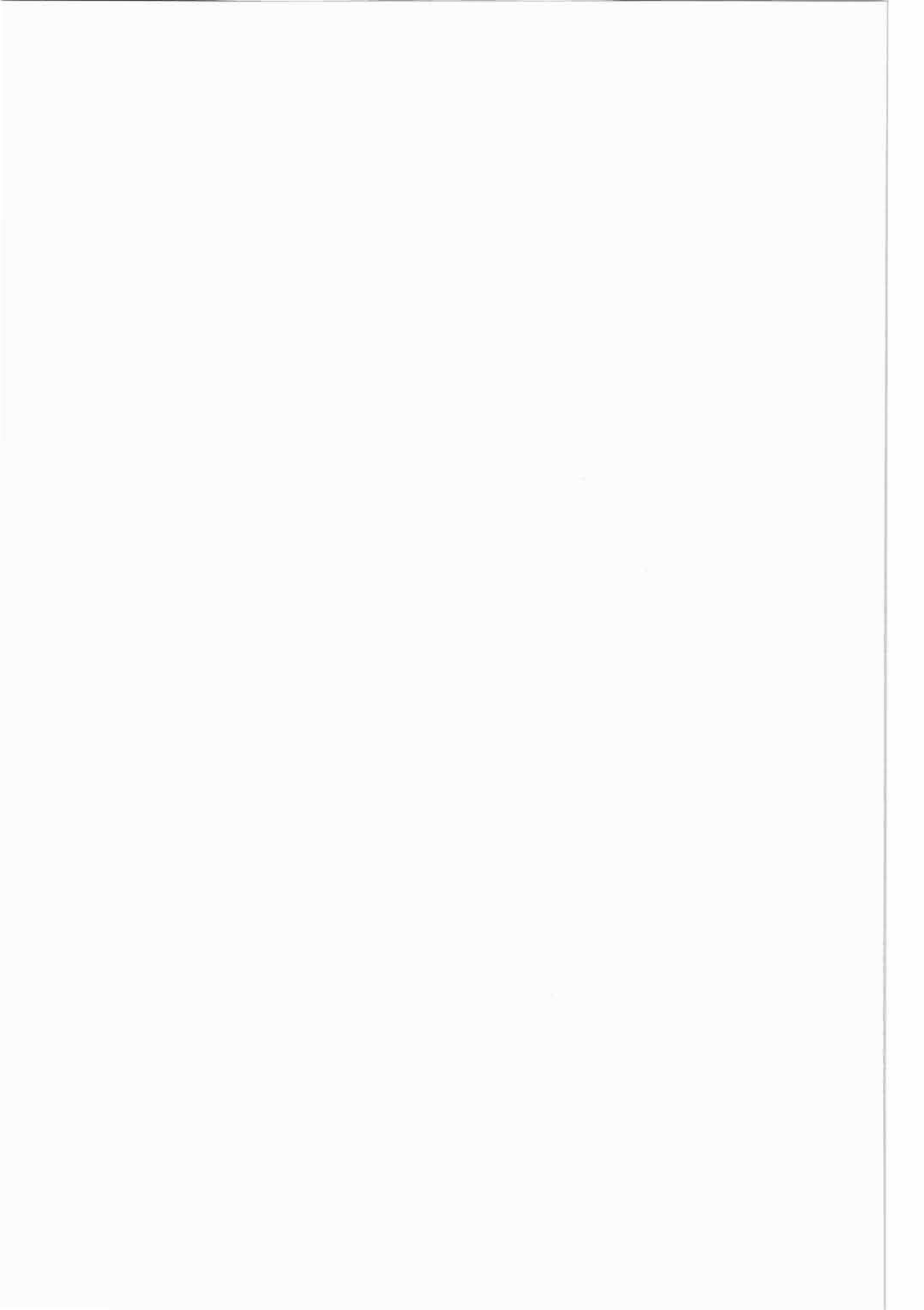
- 図版第103 (1)溝谷古墳群調査前全景(北から)  
(2)溝谷古墳群調査前全景(南から)
- 図版第104 (1)溝谷古墳群調査後全景(北から)  
(2)溝谷1号墳調査状況(北から)
- 図版第105 (1)溝谷2・3号墳調査後全景(南東から)  
(2)溝谷2・3号墳調査後全景(北上方から)
- 図版第106 (1)1号墳S K01検出状況(西から)  
(2)2号墳供献土器検出状況(北から)
- 図版第107 (1)2号墳主体部磔床検出状況 (2)2号墳主体部木棺痕跡検出状況
- 図版第108 (1)2号墳木棺痕跡(中央仕切板)(西から)  
(2)2号墳木棺痕跡(南木口板)(西から)
- 図版第109 (1)2号墳銅鏡出土状況 (2)2号墳磔床(細部)
- 図版第110 (1)3号墳主体部検出状況(南から) (2)2号墳木棺痕跡検出状況

#### (6) 女布北遺跡

- 図版第111 (1)調査地遠景(南東から) (2)調査地全景(上空から)
- 図版第112 (1)A地区全景(上空から) (2)B地区全景(上空から)
- 図版第113 (1)S H01全景(南から) (2)S H02全景(北から)
- 図版第114 (1)S H03焼土検出状況(西から) (2)S H03全景(西から)
- 図版第115 (1)S X01遺物出土状況(南から) (2)S X01完掘(南から)
- 図版第116 (1)転落石除去作業風景 (2)鶏塚古墳石室内遺物出土状況
- 図版第117 (1)鶏塚古墳全景(上空から) (2)鶏塚古墳墳丘断ち割り状況(東から)
- 図版第118 女布北遺跡出土遺物(1)
- 図版第119 女布北遺跡出土遺物(2)
- 図版第120 鶏塚古墳出土遺物

#### (7) 薬師7号墳

- 図版第121 (1)薬師7号墳調査前近景(東から)  
(2)薬師7号墳主体部検出状況(東から)
- 図版第122 (1)薬師7号墳主体部近景(北から) (2)薬師7号墳遠景(東から)



## 国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡 平成5年度発掘調査概要

### はじめに

本概要報告は、農林水産省近畿農政局が計画・推進している丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)に伴い、平成2年度に調査を実施した中郡大宮町左坂古墳群C支群、平成4年度に調査を実施した大宮町芋谷遺跡、平成5年度までに調査が終了した竹野群弥栄町溝谷城跡、大宮町左坂古墳群G支群・左坂横穴B支群、熊野郡久美浜町薬師古墳群、女布北遺跡の発掘調査概要である。

調査は、農林水産省近畿農政局丹後開拓建設事業所の依頼を受けて、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施した。国営農地開発事業に伴う調査は、昭和59年度から京都府教育委員会が実施し、昭和60年度以降からは当調査研究センターと分担して行っている。昭和60年度以降、当調査研究センターでは、多くの遺跡の調査を実施し多大な成果が<sup>(注1)</sup>あがっている。

現地調査は、平成2年度には、調査第2課調査第1係長水谷壽克、同調査員石崎善久があたり、平成4年度には、調査第2課調査第1係長伊野近富、同主任調査員増田孝彦、同調査員田代 弘があたり、平成5年度には、調査第2課調査第1係長伊野近富、同主任調査員増田孝彦、同調査員岡崎研一、黒坪一樹、田代 弘、石崎善久、河野一隆、筒井崇史が担当した。

概報執筆にあたっては、各担当者ほかに、左坂古墳群では細山田章子(京都教育大学)、中村智行(龍谷大学)が、奈具谷遺跡では佐々木理(立命館大学)が、溝谷城跡では水野聡哉(立命館大学)が執筆した。

調査期間中、地元有志の方々や学生諸氏には、作業員及び補助員・整理員として作業に従事して<sup>(注2)</sup>いただいた。また、調査にあたっては、久美浜町教育委員会、弥栄町教育委員会、大宮町教育委員会をはじめとする関係諸機関の御協力を得ることができ、現地においても多くの方々の御協力と御指導を<sup>(注3)</sup>賜った。あらためて感謝の意を表したい。なお、調査に係る経費は、全額農林水産省近畿農政局が負担した。

(増田孝彦)

付表1 平成5年度国営農地開発事業に伴う発掘調査一覧表

番号	遺跡名	所在地	調査期間	担当者
1	左坂古墳群	京都府中郡大宮町周枳 小字左坂	平成2年8月16日	調査第1係長 水谷壽克
			～平成3年3月7日	調査員 石崎善久
			平成4年6月25日	調査第1係長 水谷壽克
			～平成4年10月22日	調査員 石崎善久
			平成5年5月27日	調査第1係長 伊野近富
			～平成6年3月7日	調査員 石崎善久
2	左坂横穴群	京都府中郡大宮町周枳 小字左坂	平成5年5月11日	調査第1係長 伊野近富
			～平成5年8月30日	調査員 石崎善久
				調査員 筒井崇史
3	芋谷遺跡	京都府中郡大宮町口大 野小字芋谷	平成4年11月11日	調査第1係長 伊野近富
			～平成4年12月18日	主任調査員 増田孝彦
				調査員 田代 弘
4	奈具谷遺跡	京都府竹野郡弥栄町溝 谷	平成4年6月25日	調査第1係長 伊野近富
			～平成4年10月22日	調査員 田代 弘
5	溝谷古墳群	京都府竹野郡弥栄町 溝谷小字市場岡	平成5年4月16日	調査第1係長 伊野近富
			～平成5年7月30日	調査員 田代 弘
6	女布北遺跡	京都府熊野郡久美浜町 女布	平成5年8月19日	調査第1係長 伊野近富
			～平成5年12月22日	調査員 筒井崇史
7	薬師古墳群	京都府熊野郡久美浜町 女布小字薬師	平成5年5月11日	調査第1係長 伊野近富
			～平成5年6月4日	調査員 岡崎研一



## (1) 左坂古墳群

### 1. 位置と環境(第1図)

左坂古墳群・横穴群は、京都府中郡大宮町字周積小字左坂に所在する。

左坂古墳群・横穴群は、丹後半島を南北に貫流する竹野川により形成された沖積平野に、東から西へ向かい派生する丘陵の稜線に古墳群、南斜面に横穴群が分布している。

この丘陵では、弥生時代中期から後期の墳墓である左坂墳墓群や、110基以上の古墳が確認され、横穴群も里ヶ谷横穴群6基、左坂横穴群18基以上と、弥生から奈良時代にかけて墓域として利用されてきたことが明らかになりつつある。

左坂古墳群・横穴群をとりまく歴史的な環境について、竹野川流域の主要遺跡を中心に概観する。竹野川流域で、人々の活動の痕跡が顕著になるのは弥生時代以降である。峰山町途中ヶ丘遺跡・扇谷遺跡をはじめ、弥栄町奈具・奈具岡・奈具谷遺跡など、拠点集落の調査が実施されている。弥生墳墓としては、中期の貼り石墓である弥栄町奈具遺跡や、大量のガラス玉類や素環頭大刀が副葬された後期の太宮町三坂神社墳墓群・左坂墳墓群などが調査され、その内容が明らかになった。

古墳時代には、竹野川流域に総数2,200余基にのぼる古墳が築造されている。前期末葉の首長墓として峰山町カジヤ古墳が築造される。長径70mを測る大型円墳であり、竪穴式石槨1基・木棺直葬3基を内部主体に持ち、方格渦文鏡・石釧・車輪石・鍬形石など、石製腕飾類を副葬した畿内の色彩の強い古墳であるが、葺石・埴輪は有していない。丹後半島では、大型前方後円墳として加悦町蛭子山1号墳(全長約145m)が築かれ、次いで、網野町銚子山古墳(全長約200m)と丹後町神明山古墳(全長約190m)が臨海型前方後円墳として築造される。これら3古墳は、葺石・埴輪を具備した畿内色の強い大型前方後円墳であるが、その埴輪は丹後型埴輪と呼ばれる特殊な埴輪であり、地域色の強さを示す側面もある。なお、内部主体の調査は、蛭子山1号墳で舟形石槨・竪穴式石槨・木棺直葬の3主体が存在することが明らかにされたが、他の2古墳については実施されていない。ただし、神明山古墳にはかつて墳頂部に板石が散乱しており、竪穴式石槨が採用されたものと推測できる。出土遺物として前方部出土の鼓形器台・小形丸底壺・二重口縁壺や主体部出土と伝えられる石製合子がある。

丹後の大型前方後円墳は、神明山古墳を最後に築造されなくなり、弥栄町黒部銚子山古墳(全長105m)など、100m前後の前方後円墳が中期前半に造られ、以降前方後円墳そのも



第1図 左坂古墳群・横穴群位置図及び周辺主要古墳時代遺跡分布図(1/25,000)

- |                     |                 |              |
|---------------------|-----------------|--------------|
| 1. 左坂古墳群・横穴群・里ヶ谷横穴群 | 2. 帯城古墳群・大田鼻横穴群 | 3. 有明古墳群・横穴群 |
| 4. 大谷古墳             | 5. 小池古墳群        | 6. 十二社山古墳群   |
| 7. 通り古墳群            | 8. 新戸1号墳        |              |
| A. 大宮壳神社遺跡          | B. 谷内遺跡         | C. 菅外遺跡      |
|                     |                 | D. 裏陰遺跡      |

の築造が衰退するものと考えられる。

中期以降の首長墓として、中期初頭の大宮町大谷古墳(円墳・径30m)、中期中葉の丹後町産土山古墳(円墳・径50m)や弥栄町ニゴレ古墳(方墳か・辺30m)など中型の円墳・方墳が調査されているが、広範囲に及ぶ支配領域を有していたとは考えられず、小地域単位の首長墓であると思われる。なお、大宮町域には畿内型の前方後円墳は存在せず、前期の通り1号墳(円墳・径30m)、大谷古墳などが地域首長墓として築造されるが、その内容は貧弱である。後期になると6世紀中葉まで、峰山町桃山1号墳・大耳尾古墳群など直径20～30m級の木棺直葬墳が小地域首長墓に採用されている。

これら首長墓とは別に、丘陵上に10基以上の小古墳から構成される古墳群が多数形成される。時期も前期前半から後期前半におよび、その内容も様々である。

前期に形成された古墳群としては大田南古墳群が著名である。特に、2号墳出土の画文帯環状乳神獸鏡は例のない舶載鏡である。築造年代も丹後に大型前方後円墳が出現する以前のものであり、今後、被葬者の性格などを検討していく必要がある。また、前期の古墳群としては今回調査を実施した大宮町左坂古墳群や、同町三坂神社裏古墳群、弥栄町ゲンギョウの山古墳群などが存在する。その他、前期から後期前半の古墳群として弥栄町宮ノ森古墳群、峰山町スクモ塚古墳群・上野古墳群、大宮町小池古墳群・帯城古墳群などが調査されている。

後期後半になると、丹後半島にも横穴式石室が導入される。横穴式石室は、先にみた古式群集墳にまず導入されたものと考えられ、弥栄町遠所古墳群では木棺直葬墳から横穴式石室への移行が6世紀中頃前後になされたと考えられる。導入期の横穴式石室は、竪穴系横口式石室に類似した構造を有するもので、羨道部と玄室の間に段を有するという特色を持つ。この種の石室は、竹野川流域の遠所古墳群、スクモ塚古墳群、新ヶ尾東古墳群をはじめ、野田川流域では霧ヶ鼻古墳群・倉梯山古墳群・入谷古墳群など、佐濃谷川流域では陵神社12号墳、福田川流域では岡古墳群・離山古墳など、丹後半島全域はもとより、但馬、丹波地域にまでその分布は及んでいる。畿内型横穴式石室の導入は、これより若干遅れるようで、峰山町桃谷1号墳、丹後町高山古墳群・大成古墳群・上野古墳群などが調査されている。畿内型横穴式石室の導入とともに古墳群の立地も変化し、丘陵腹部分に数基単位で群を形成するようになる。大型の群集墳を形成しないのも丹後地域の特色といえよう。以後、横穴式石室墳は7世紀前半まで築造され続ける。また、大宮町新戸1号墳は、丹後半島最後の前方後円墳であり、内部主体に採用された横穴式石室は石棚を有する特殊な石室である点が注目される。

横穴式石室墳の盛行期に新たな墓制として横穴墓が導入される。丘陵斜面に分布し、埋没していることが多いため、その実数の把握は困難であるが、現在までに32群130余基が確認されている。現状では竹野川上・中流域に分布密度が高く、大宮町大田鼻横穴群・里ヶ谷横穴群・有明横穴群、峰山町下山横穴群などが調査されている。また、今回調査の左坂横穴群もこの地域内に所在する。これら横穴墓は、無袖長方形プランのものが導入期には多くみられ、時期が下るに従いフラスコ状プランのものへと変化すると考えられる。横穴墓の造墓時期は、6世紀末葉から8世紀中葉にまで及び、横穴式石室墳築造終焉以降も新たに横穴墓を造っている。また、横穴墓出土遺物中には、墨書土器や畿内産土師器を含み、今回調査した左坂横穴墓群では火葬墓として横穴墓が営まれているなど、律令制と密

接な関わりを持つ人々の墓制である可能性が考えられる。

このように、墳墓の実態は徐々に明らかになってきているが、古墳時代以降の集落、生産遺跡の実態には不明瞭な点が多い。大宮町内では裏陰遺跡・谷内遺跡・幾坂遺跡・大宮賣神社周辺遺跡・正垣遺跡などが古墳時代から奈良・平安時代にかけての集落として知られるが、集落構造を明らかにすることはできない。また、生産遺跡として、奈良時代の須恵器窯跡群である阿婆田窯跡群・新宮窯跡群などが調査されている。阿婆田窯跡群ではその成立が平城Ⅱ～Ⅲに認められ、器種構成・技法の変化などから丹後国府・国分寺造営などとの関連が考えられている。また、奈良時代の製鉄遺跡として芋谷遺跡が調査されているが、古墳時代にさかのぼるものは現在のところ認められない。

(細山田章子)

## 2. 調査経過

左坂古墳群・横穴群の調査は、周枳団地造成工事に先立ち実施した。調査地が立地する丘陵には左坂古墳群が分布していることが京都府教育委員会の分布調査で明らかにされており、丘陵斜面・谷部には横穴の存在を示唆する地形の変化、遺物の散布が認められた。

そこで、事前協議の上、京都府教育委員会と当センターとで造成予定地内に存在する古墳・遺物散布地の調査・試掘を実施することとなった。調査は、平成2年度から平成5年度にかけて実施し、今後も調査を継続する予定である。

### ①平成2年度の調査

周枳団地造成予定地内の調査は、平成2年度、京都府教育委員会により左坂古墳群B支群(5・15・16・18～29号墳)の調査が実施された。<sup>(注4)</sup>同年度に当センターで調査を予定したのは、C支群7基(14～20号墳)・D支群2基(11・12号墳)・E支群3基(9～11号墳)の計12基である。現地調査に際しては、掘削は京都府教育委員会の調査終了を待ち実施することとし、8月16日から先行して地形測量(1/100・25cm等高線)を開始した。また、協議の結果、造成順序の早いE支群より調査を開始し、順次、D・C支群へと調査を行っていくこととなった。なお、D支群は、試掘調査を実施し、D12号墳のみ古墳であることを確認し、12号墳を対象に拡張・調査を実施した。

調査の結果、C～E支群は木棺直葬を主な内部主体に持つ古墳群であることが明らかとなった。また、出土遺物から古墳群造営時期の一端を5世紀中葉から6世紀中葉までと考えることが可能になった。さらに、C5～20号墳の分布する丘陵西側斜面に所在する横穴状遺構の調査も併せて実施し、2基の横穴状遺構を確認した。この横穴状遺構については、

出土遺物から近世以降の掘削であると考えられ、貯蔵穴であった可能性がある。

現地説明会は、平成3年2月22日に実施予定であったが、当日は大雪のため中止せざるを得なかった。以上の経過を経て、平成3年3月7日すべての現地調査を終了した。平成2年度の調査面積は、総面積約1,500m<sup>2</sup>となった。

## ②平成4年度の調査

平成4年度は、周枳団地内に所在する遺跡として里ヶ谷横穴群の調査を実施した。その調査成果についてはすでに報告をしている。

里ヶ谷横穴群の調査と並行して、左坂古墳群C支群(5号墳～13号墳)の表土掘削を実施した。調査はラジコンヘリコプターによる空中撮影及び図化作業(1/100・25cmコンター)を行い、平成4年9月24日から平成4年11月12日にかけて表土掘削を実施した。遺構検出・遺構掘削などは実施しておらず、平成6年度以降調査する予定である。

## ③平成5年度の調査

平成5年度は、左坂横穴群B支群、左坂古墳群B支群(1～4号墳、6～8号墳、32・33号墳)・G支群(10～13号墳)・C支群(21～23号墳)の調査を実施した。左坂古墳群の調査は、当初はB支群のすべてを全面発掘し、平成4年度に表土掘削を実施したC5～13号墳の調査を実施する予定であったが、造成計画の変更に伴い、協議の結果、道路造成予定地に当たるC支群・G支群の調査を優先的に実施することとなった。現地調査は、B支群から実施し、ラジコンヘリコプターによる空中撮影・図化を行い、左坂横穴群の調査と並行して表土掘削を行った。

G・C支群の調査は、協議終了後に伐採を開始し、伐採の終了した8月17日から地形測量を行い、掘削はB支群の調査を一時中断して着手した。その結果、G支群では4基の古墳と9基の埋葬施設の存在を明らかにした。また、墓壙上面より、古墳時代前期前半頃と考えられる供献土器群を検出し、良好な資料を得ることができた。

C支群の調査は、G支群の表土掘削の終了後実施し、3基の古墳を調査することとなった。また、平成2年度に調査したC支群の枝尾根西斜面に所在する横穴状遺構の延長を重機により掘削し、1基の横穴状遺構(3号横穴状遺構)を検出した。この横穴状遺構については、1・2号横穴状遺構同様、近世以降の貯蔵穴であると考ええる。

B支群は、C支群の調査終了後に調査を再開し、9基の古墳を調査し、その内容を明らかにすることができた。なお、平成5年度調査分のB・C支群の調査概要については、現在整理中であり、次年度以後報告する予定である。

現地説明会は平成6年1月21日に実施し、大雪の降りしきる中、約80名の参加を得ることができた。3月1日にはラジコンヘリコプターによる空中撮影を実施し、3月7日すべての発掘機材を撤収し現地調査を終了した。平成5年度の調査面積は計3,300㎡である。

### 3. 左坂古墳群分布状況(第2図)

左坂古墳群は、竹野川東岸に位置し、西から東へ向け派生する尾根・枝尾根上に分布している。現在、古墳として認識される基数として総数130基を数える。これらの古墳は、直径もしくは一辺が10m前後の小規模なものが大部分を占めるが、中には直径または一辺が20mを超す比較的大きなものも群内に含んでいる。なお、現在までに古墳として認識しているものは分布図に示すとおりであるが、伐採などを実施すると、その基数は増減すると思われる。調査に際しては、古墳の分布密度・立地から便宜上、A～I支群の計9支群に分け、古墳番号を付し一定の整理を行い、調査の結果、増減した古墳については京都府教育委員会・大宮町教育委員会と調整のうえ適宜新番号を割り当てることとした。

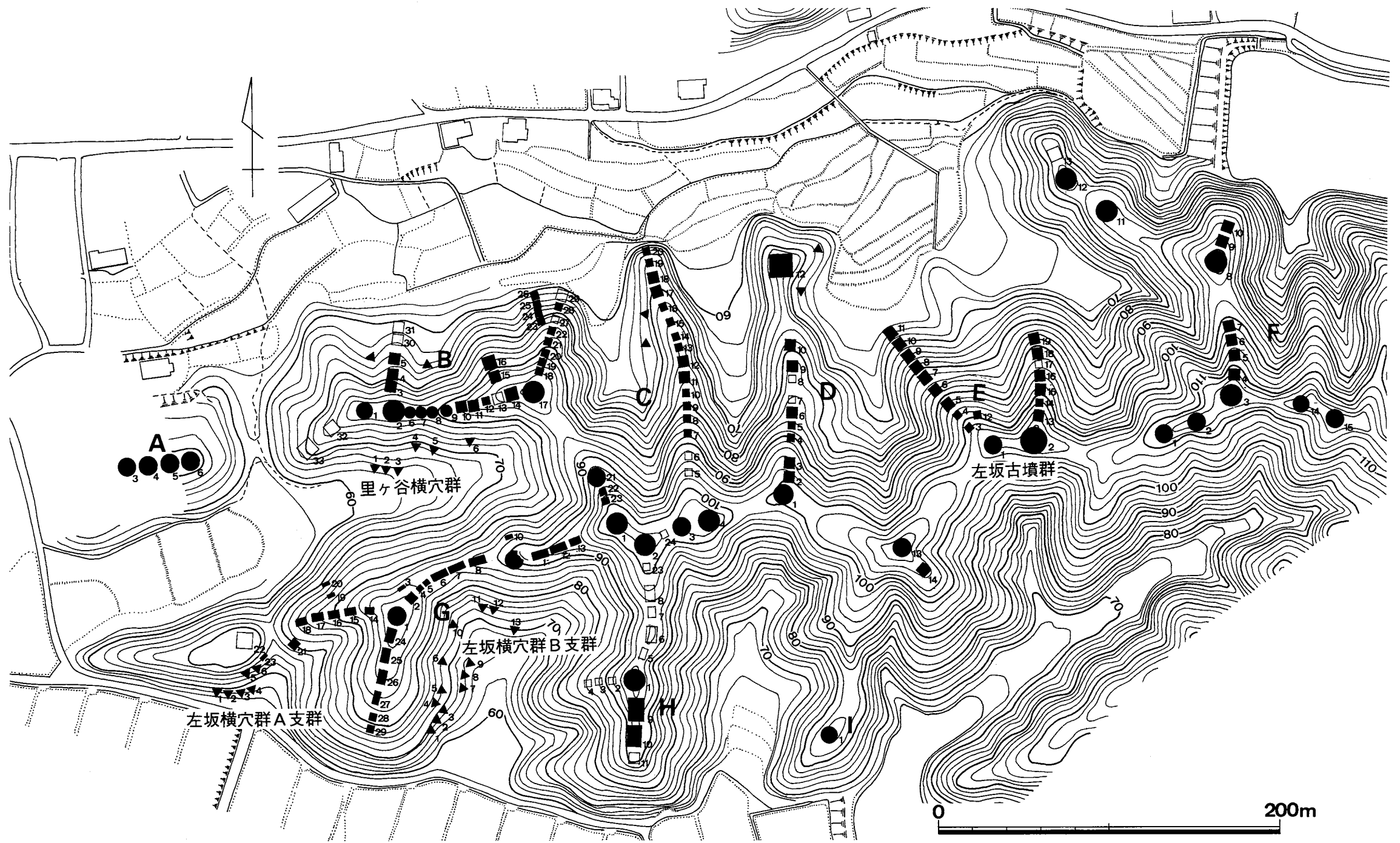
古墳の分布状況について概観すると、比較的大きな古墳は主丘陵稜線上に占地し、枝尾根上には規模の小さな古墳が立地する傾向がある。特に、B支群の北側斜面は、比較的傾斜の急な枝尾根が派生しており、この部分に階段状を呈する古墳が分布している。同様の傾向はE支群でも認められ、枝尾根上に2基の比較的大きな古墳が立地し、北側に「階段状地形を呈する古墳」が築造されている。

C支群も主尾根上に立地する比較的大きな古墳と北側斜面に立地する小形方形墳により構成されるが、C支群は北側枝尾根が比較的傾斜がゆるく、先端付近に立地する古墳は方墳と「階段状地形を呈する古墳」が混在した様相を呈している。

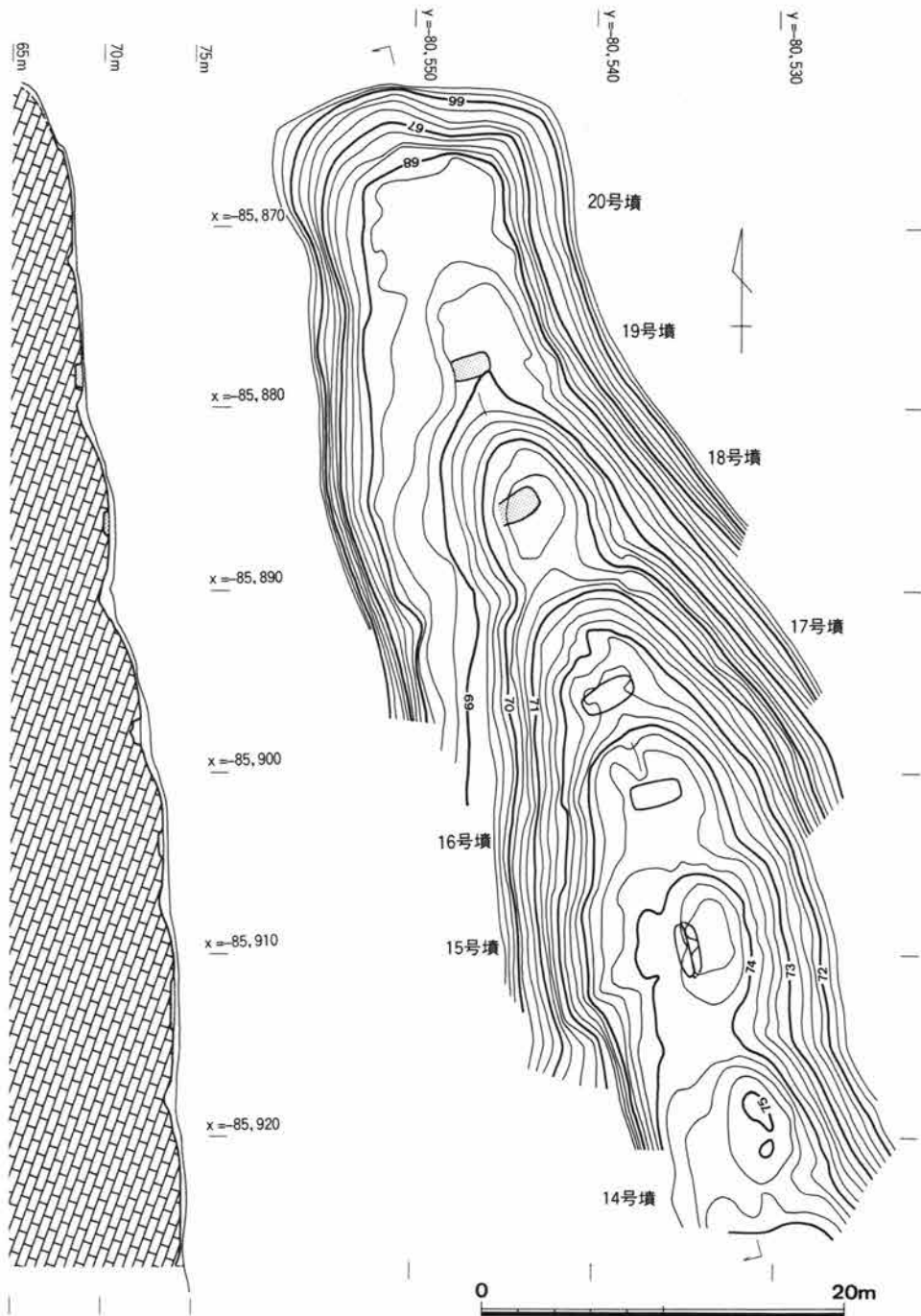
D支群は、地形的にはC支群同様、北側に比較的傾斜のゆるい枝尾根が派生しているが、先端部分にはD12号墳1基が単独で立地しており、連珠状に古墳が造られているC支群とは若干様相を異にしている。

南側主尾根上に立地しているG支群は、基本的に主尾根上に連なる古墳から構成され、斜面上に立地する古墳は10号墳のみである。古墳の密集度からみると、東側に位置する8～13号墳と、西側に位置する1～7号墳の間には空白部分があり、小支群として分離することも可能である。G支群の先端部分は、弥生中期末から後期にかけての墓域として利用されている(左坂墳墓群)。なお、G13号墳とC1号墳の間は比高差がかなりあること、平面的にもかなりの距離のあることから、C支群とG支群は分離することとした。

その他の支群については、支群を構成する古墳の基数も少なく、数基単位で尾根上に散在している。

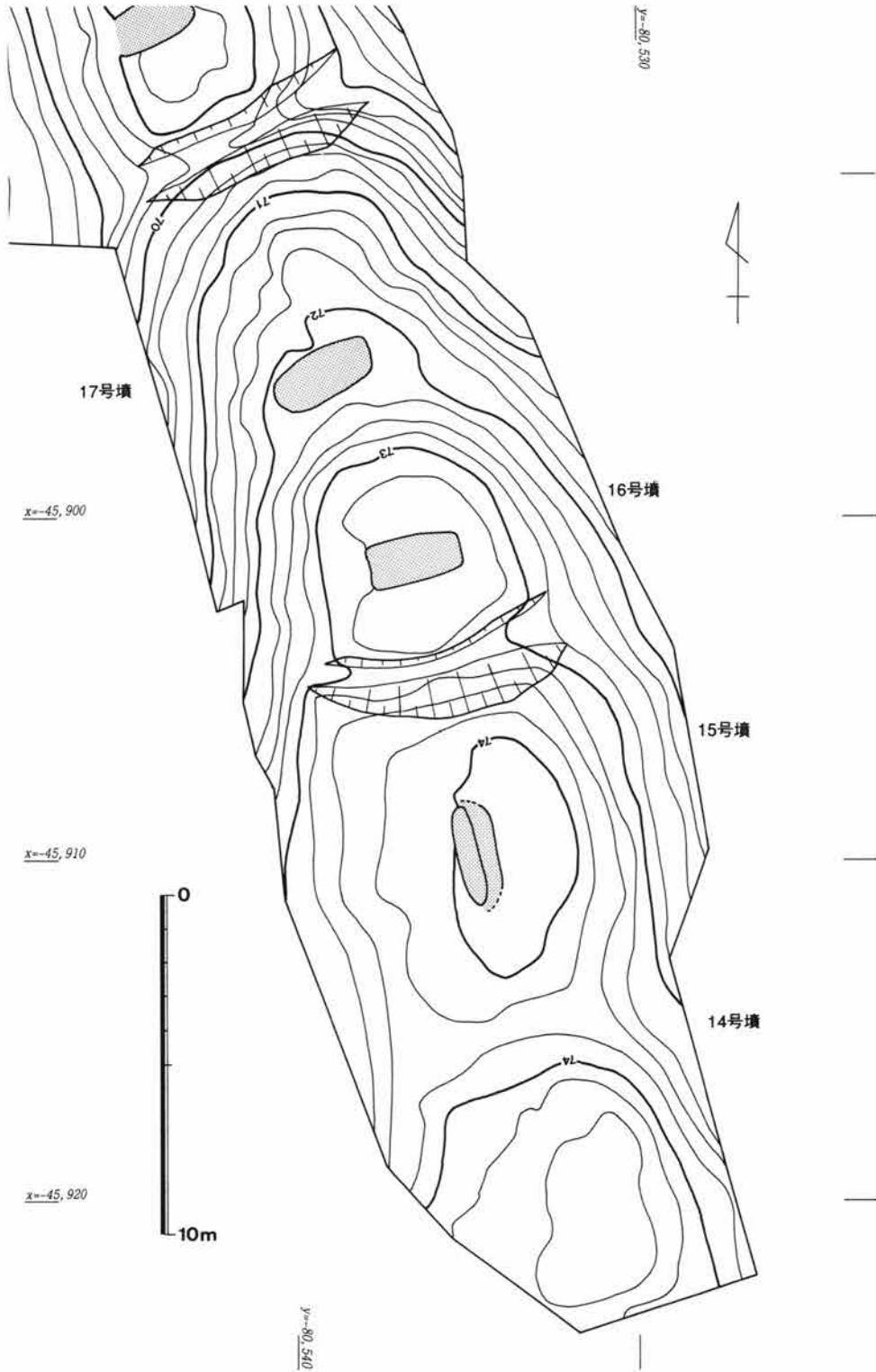


第2図 左坂古墳群・横穴群・里ヶ谷横穴群分布図(1/3,000)



第3図 左坂古墳群C支群調査前地形測量図





第4図 左坂古墳群C14号墳～C17号墳調査後地形測量図

#### 4. 調査概要

##### ① C支群の調査

C支群では、北側に派生する枝尾根先端部分に位置する14～20号墳、ならびに東斜面に開口していた横穴状遺構の調査を実施した。この枝尾根は、比較的傾斜がゆるやかであり、明確なマウンドを有する方墳と、いわゆる「階段状地形を呈する古墳」が混在している。

##### C14号墳

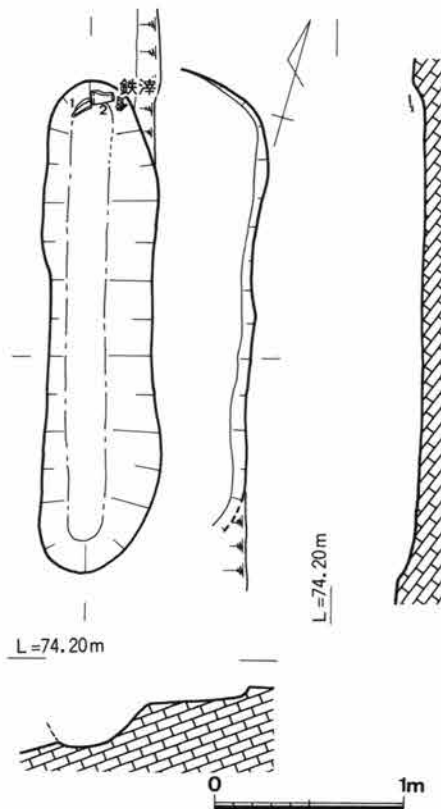
**墳丘(第4図)** 地山整形による方墳である。盛り土は認められなかった。南側にはC15号墳と共有する溝を有し、墳丘を区画している。北側にもC13号墳との間に溝が設けられているが、調査地外となっており詳細については不明である。墳丘の西側は、山道の開削により著しく破壊され、東西の規模については不明である。また、遺存状況の良好な東側部分についても、明確な傾斜変換点を見いだすことはできず、東西部分の整形は顕著ではないものと判断される。墳丘規模は、南北の溝間の値をとれば約9.5mを測る。高さは、C15号墳側の溝底部から0.9mを測る。

**埋葬施設** 埋葬施設は完全に削平されたものと判断され、検出することはできなかった。

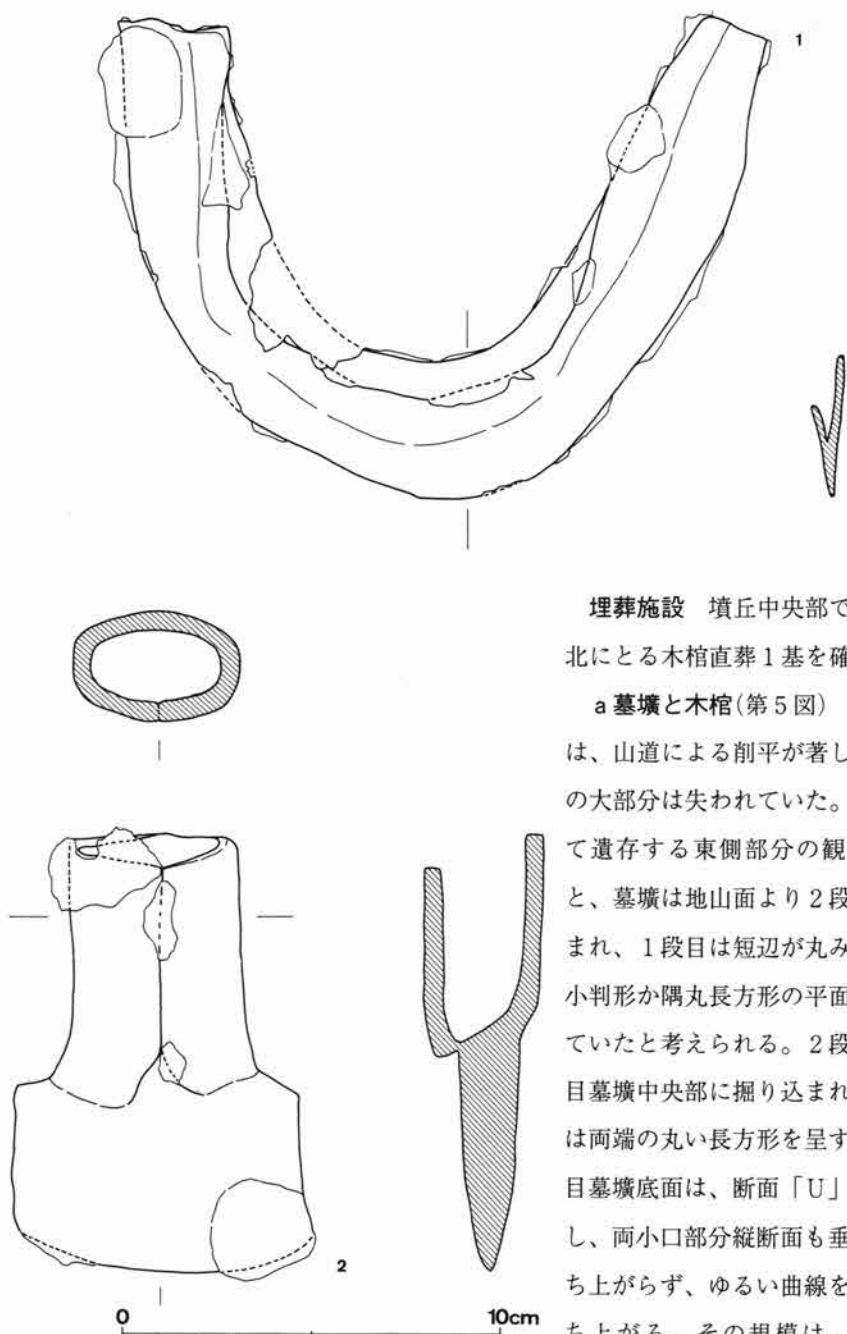
**遺物出土状況** C15号墳間の溝内から若干の土師器片が出土しているが、器形など詳細については不明である。

##### C15号墳

**墳丘(第4図)** 地山整形による方墳である。盛り土は認められなかった。南側にはC14号墳と共有する溝をもち、墳丘を区画する。北側は、C16号墳造成時に削平され、墳丘規模などは明確でない。なお、C14号墳同様、墳丘西側を山道により削平されており、東西の規模については不明瞭であるが、標高73mの等高線付近を一応の基底部分としてみることができ。その値をとれば東西約11m・南北約10.5m・高さ約1.3mの方墳と考えることができる。



第5図 左坂C15号墳主体部実測図



第6図 左坂C15号墳出土遺物実測図

埋葬施設 墳丘中央部で主軸を南北にとる木棺直葬1基を確認した。

a 墓壙と木棺(第5図) 埋葬施設は、山道による削平が著しく、西側の大部分は失われていた。かろうじて遺存する東側部分の観察によると、墓壙は地山面より2段に掘り込まれ、1段目は短辺が丸みを帯びる小判形か隅丸長方形の平面形を呈していたと考えられる。2段目は1段目墓壙中央部に掘り込まれ、平面形は両端の丸い長方形を呈する。2段目墓壙底面は、断面「U」字状を呈し、両小口部分縦断面も垂直には立ち上がらず、ゆるい曲線を描いて立ち上がる。その規模は、長軸2.6m・幅0.5m・底部からの深さ0.4m

を測る。なお、幅は、2段目西側にまで削平が及んでいるため、さらに広がったと考える。

木棺の痕跡については、土色からは明確にし得なかったが、2段目墓壙の形状から舟底状底部を有する木棺であったと考える。規模などについては、明確にし得ない。

**b 遺物出土状況** 主体部内から「U」字状鉄先1点・有肩袋状鉄斧1点・鉄滓1点が出土した。一括して北側棺小口に置かれており、その出土状況から棺蓋上に置かれたものとする。鉄先は、鉄斧の下に刃部を北に向け置かれ、棺の腐朽に伴う落ち込みにより3つに割れた状態であった。鉄斧は刃を西に向け、鉄滓は鉄斧の装着部付近から1点のみ出土した。なお、出土時・取り上げ後の錆落とし段階でも、鉄斧・鉄先とも木柄が装着されていた痕跡を見いだすことはできず、鉄製部分のみをむき身のまま安置したと考える。

**出土遺物(第6図)** C15号墳出土遺物には、主体部棺上出土の鉄斧・鉄先・鉄滓、C16号墳と共有する溝内出土の若干の土師器片がある。

土師器は極めて微細な細片であり、詳細についてはまったくわからない。

鉄製鉄先(1)は、「U」字状鉄先である。幅17cm・長さ12.6cmを測る。木柄の装着部は一方の方が短い。

鉄斧(2)は、有肩袋状鉄斧である。全長11.5cm・刃部長5cm・刃部幅7.6cmを測る。木柄装着部は、楕円形の断面を呈し、合わせ目はていねいに合わされている。

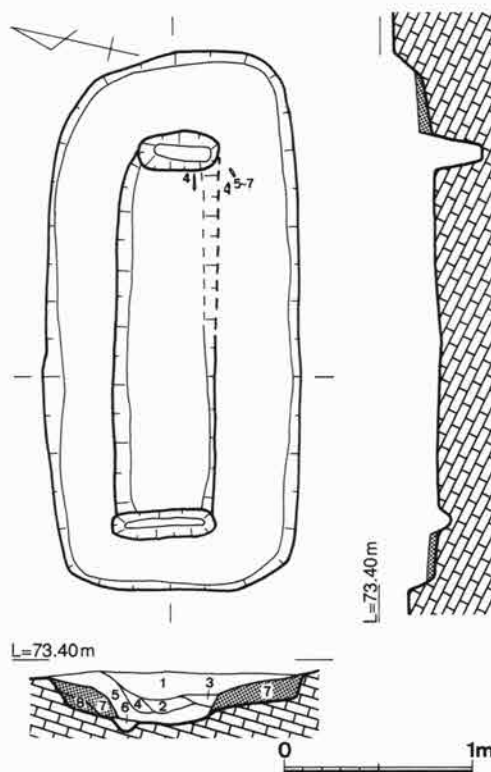
鉄滓については、鍛錬鍛冶滓であるとの分析結果を得ている。詳細については今後の報告の中で行いたい。

### C16号墳

**墳丘(第4図)** 地山整形による不整形な方墳である。高位側に当たるC15号墳との間には溝を設け墓域を区画する。溝は、C15号墳墳丘南側を削平して掘削されており、C15号墳より後に築造されたことがわかる。一方の北側は、直線的には整形されておらず、自然地形のまま弧状を呈している。平坦面規模は東西5.8m・南北6mを測る。なお、墳丘掘削中に須恵器破片(3)が出土した。

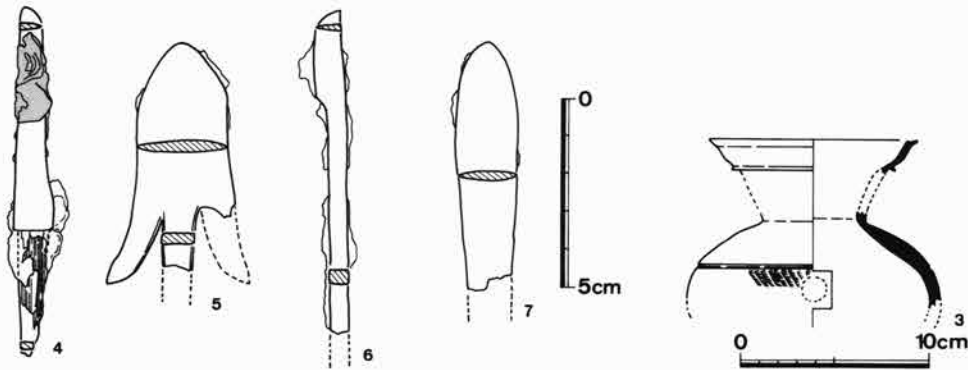
**埋葬施設** 墳頂部平坦面中央で、主軸を東西方向にとる木棺直葬1基を検出した。

**a 墓壇と木棺(第7図)** 墓壇は、地山



第7図 左坂C16号墳主体部実測図

- |                |          |          |
|----------------|----------|----------|
| 1. 暗黄褐色土       | 2. 赤褐色土  | 3. 暗黄灰色土 |
| 4. 3に同じ(やや暗い)  | 5. 黄灰色土  |          |
| 6. 淡黄灰色土       | 7. 淡黄褐色土 |          |
| 8. 7と同じ(地山粒含む) |          |          |



第8図 左坂C16号墳出土遺物実測図

面より掘り込まれ、段を持たない素掘りの形態をとる。墓壙の平面形は、隅丸長方形を呈し、検出面での規模は東西2.84m・南北1.36m・深さ0.26mを測る。なお、墓壙の両小口付近には木棺小口板材をはめ込むための溝が設けられている。溝は、西側で長さ0.56m・幅0.16m・深さ0.08mを測り、東側で長さ0.44m・幅0.23m・深さ0.25mを測る。

木棺は、墓壙を0.2m掘り下げた段階でその痕跡を確認した。南側長側板の痕跡は、根の攪乱が著しく、西側部分しか確認できなかった。木棺痕跡の状況から、組合式箱形木棺と考えられる。また、小口板固定溝よりも木棺痕跡幅のほうが狭いため、小口板が長側板を挟み込む形態をとる可能性がある。規模は、長軸2.14m・短軸0.52mを測る。

**b 遺物出土状況** 木棺固定土上面から棺上にかけて鉄鏃・刀子が出土した。切っ先方向もまちまちであり、まとめて置かれたものではない。その出土状況からみて、木棺蓋上に置かれたものが木棺の腐朽に伴い、落ち込んだものと推測される。

**c 出土遺物(第8図)** 埋葬施設内出土の鉄鏃3点・刀子1点、墳丘出土の須恵器甕1点がある。

須恵器甕(3)は、細片を図上復原したものである。復原値で口径11cm・体部最大径13.4cmを測り、大型の部類に属する。ていねいな作りであり、口縁部の稜もシャープで、焼成も良好である。肩部に1条の凹線を施し、その下部に櫛状工具による左上がりの刺突文を施す。なお、穿孔部についてはその痕跡を確認することはできず、壺の可能性もある。

刀子(4)は、小形品である。全長9.3cm・幅1.0cmを測る。関の形態については、錆が著しく不明である。刃部に若干の研ぎ減りが認められる。刀装具として、刃部に革と思われる付着物が存在し、革製の鞘に納められていたと考える。

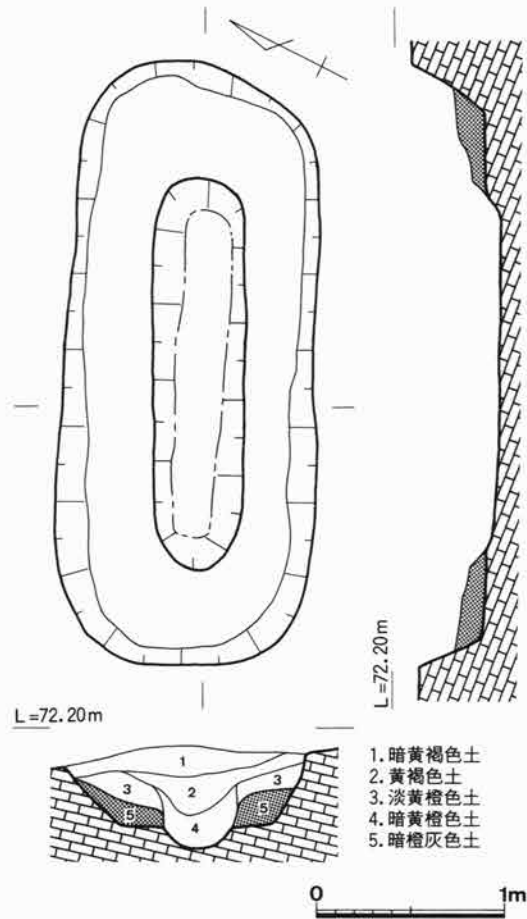
鉄鏃(5)は、腸袂を有する柳葉形鏃である。頸部と一方の逆刺を欠くが、長頸鏃になるものと考えられる。なお、鉄鏃(6)が錆着している。

鉄鍬(6)は、片刃の長頸鍬である。鍬身部は刀子形を呈し逆刺は認められない。頸部部断面は正方形に近い。刃部長3.6cm・残存長8.5cmを測る。

鉄鍬(7)は、柳葉形の鍬と考えられる。鍬身部分しか残存していないため全容については不明である。残存長6.7cm・鍬身部幅1.1cmを測る。

### C17号墳

墳丘(第4図) C17号墳は、明瞭な墳丘を持たず、丘陵稜線上の斜面を「L」字状にカットし、埋葬施設を設けるための平坦面を作り出した「階段状地形を呈する古墳」である。盛り土は認められない。高位側に溝を設けることもなく、北側斜面部分の整形も顕著ではなく、自然地形のままである。このため、墳頂部平坦面は平面舌状を呈する。規模は、平坦面で東西約5m・南北約3mを測り、C15号墳からの比高差1mを測る。



第9図 左坂C17号墳主体部実測図

埋葬施設 平坦面中央で、東西に主軸をとる木棺直葬墓1基を検出した。

a 墓壙と木棺(第9図) 墓壙は、平面小判形を呈し、地山面から2段に掘削される。検出面での規模は、上段が長軸3.18m・短軸1.38m・深さ0.4mを測る。2段目は、1段目墓壙底部中央に掘り込まれ、四周に段を残す構造をとる。平面形は、両端の丸い長方形を呈する。墓壙底面は、断面「U」字状を呈し、両小口部分も垂直には立ち上がらず、ゆるい曲線を描いて立ち上がる。その規模は、長軸1.88m・幅0.36m、1段目墓壙底部からの深さ0.12mを測る。

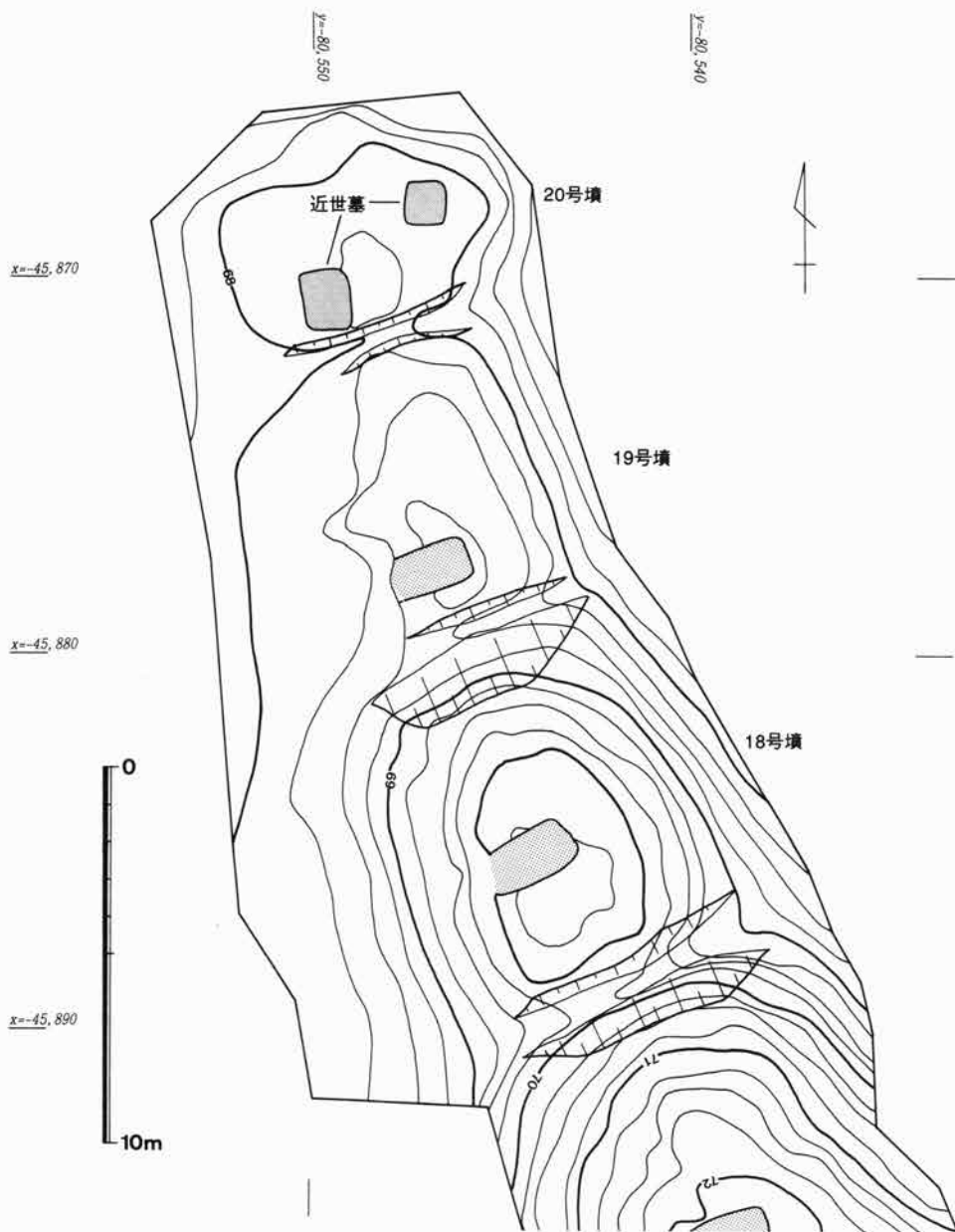
墓壙を25cm掘り下げた段階で、木棺痕跡を確認した。木棺の形状は、断面「U」字状を呈し、両小口縦断面も垂直には立ち上がらず、ゆるい曲線を描いて立ち上がる舟底状底部を有する木棺である。墓壙第2段目は、この木棺底部を据え付けるために掘られたもので

あると考える。検出面での木棺規模は、長さ2.1m・幅0.48mを測る。

b 遺物出土状況 C17号墳に伴うと考えられる遺物はない。

### C18号墳

墳丘(第10図) C18号墳は、地山整形と一部盛り土により墳丘を整形した方墳である。



第10図 左坂古墳群C18号墳～20号墳調査後地形測量図

墳丘の西側部分は、若干後世の削平により改変され、墳丘北側部分の造成に際しては、南側に幅1.8m・深さ0.6mを測る直線的な溝を掘削し、西側及び北側については地山面まで直線的に整形している。東側部分には、旧表土上に盛り土を施すことにより墳丘を方形に整えている。墳丘規模は、C19号墳との間の溝からC17号墳溝までの規模で南北10m、東西については明確な基底部分はないが、約9m程度を測る。

**埋葬施設** C18号墳では墳頂部平坦面中央で、主軸を東西にとる木棺直葬墓1基を検出した。

**a 墓壇と木棺(第11図)** 墓壇は、地山面より掘り込まれ、段を持たない素掘りの形態を持つ。主体部西側は、後世に削平され失われている。墓壇平面形は、隅丸長方形を呈し、検出面での規模は、長軸2.6m・短軸1.34m・深

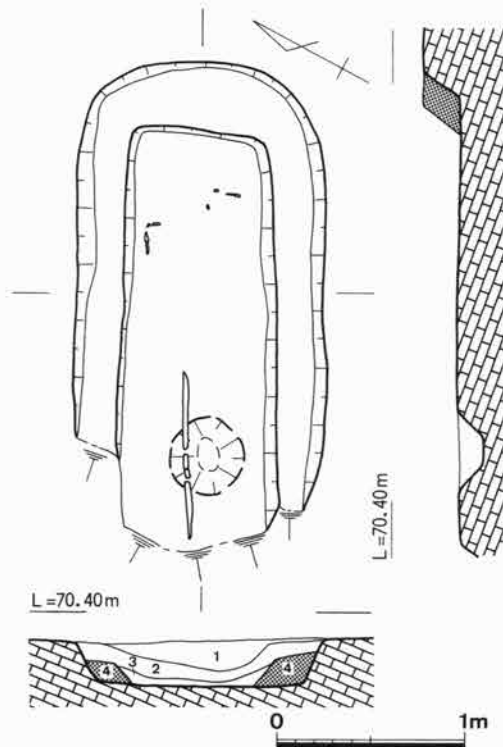
さ0.24mを測る。また、墓壇西側底面には直径0.4m・深さ0.12mの土坑が掘削されている。

木棺痕跡は、墓壇を15cm掘り下げた段階で検出した。形状から、組合式箱形木棺が想定される。木棺規模は、幅0.8m・長さ2.2m以上を測る。

**b 遺物出土状況(第12図)** C18号墳では、埋葬施設内から鉄鏃・刀子・渦巻き状鉄製品・直刀が、C17号墳側溝から須恵器高杯1点、墳頂部から土師器高杯1点が出土した。

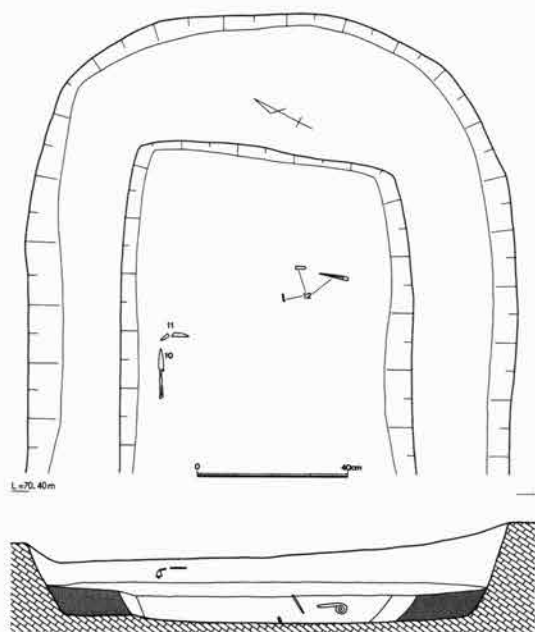
埋葬施設では、北東部分で墓壇埋土を10cm掘り下げた段階で、刀子(11)・鉄鏃(10)が出土した。鉄鏃は、切っ先を東に向け、刀子は切っ先を北に向け鉄鏃に直交する形で置かれていた。この2点については、土層の状況から棺側の裏込め土上、もしくは棺上に置かれていたものが、棺の腐朽に伴い落ち込んだものと考えられる。

渦巻き状鉄製品(12)は、3つの部品に分かれて出土した。棺底面より遊離しており、土層の状況からも本来同一個体であったものが棺の腐朽に伴い、割れて棺内に落ち込んだものと判断される。



第11図 左坂C18号墳主体部実測図  
1.暗黄褐色土層 2.暗黄灰色土層 3.淡黄灰色土層  
4.淡黄褐色土層





第12図 左坂C18号墳遺物出土状況実測図

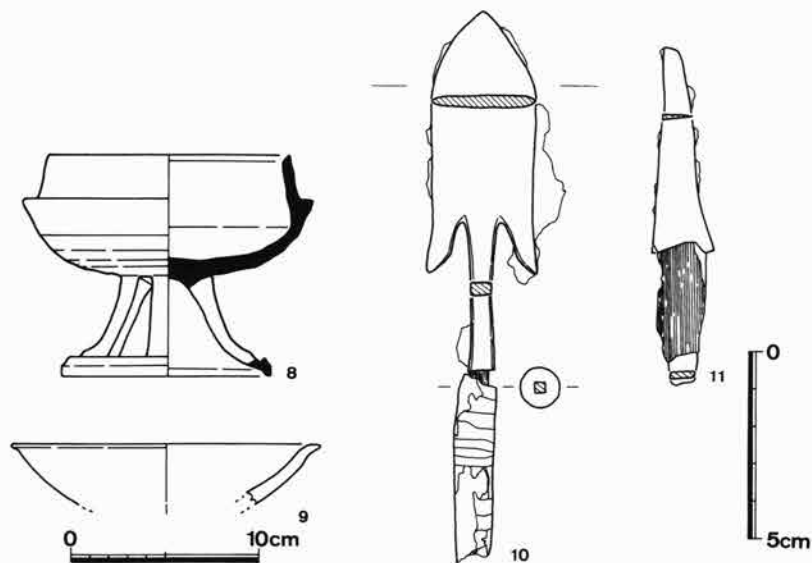
棺内からは、直刀(13) 1振りが切っ先を東に向け、北西部分から出土している。

墳丘出土の土師器高杯(9)は墳頂部から、須恵器高杯(8)はC17号墳側溝床面で脚部と杯部に分かれて出土した。この須恵器高杯については、C17号墳からの転落の可能性も考えられたが、溝中心から、若干C18号墳側に寄っており、C18号墳に伴うものであると判断した。

出土遺物(第13・14図)

須恵器高杯(8)は、短脚1段3方スカシの有蓋高杯である。杯部は、口径12.8cmを測る大型品である。

土師器高杯(9)は、杯部の細片で



第13図 左坂C18号墳出土遺物実測図(1)

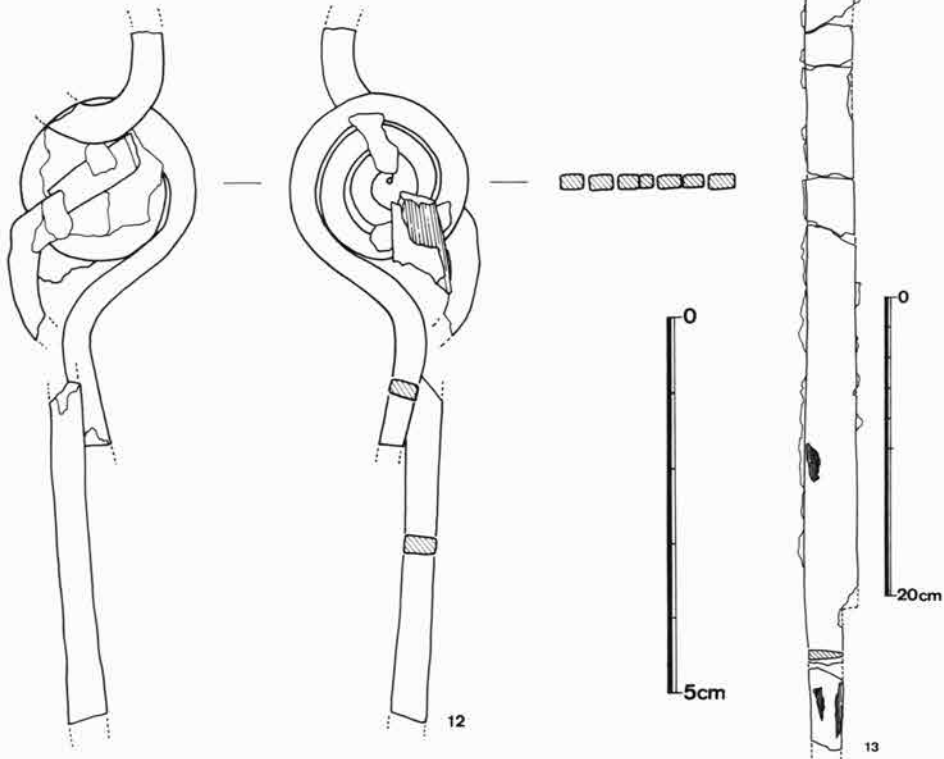
ある。端部を外方につまみ出す。内外面丹塗りである。

刀子(11)は、全長9cm・刃部幅1.6cmを測る。両関であり、刃部には研ぎ減りが観察される。また、茎部分には柄部分の木質が遺存する。

鉄鏃(10)は、平面腸袂柳葉形・断面平造りの鏃身を持つ。関は角関であり、茎断面は方形である。また、矢柄装着部分が良好に遺存する。矢柄は、竹と思われる本体に桜の樹皮と考えられるものを巻いている。鏃の茎には繊維質のものを巻き付けており、装着の際の安定を図る措置がなされている。法量は、全長14.4cm・鏃身部長7.0cm・幅2.9cm・頸部長3.6cm・幅0.5cm・茎長4.9cmを測る。

渦巻き状鉄製品(12)は、3つの部品に分かれて出土している。3点の内、渦巻き状の部品が2点、棒状の部品が1点ある。接合関係をみると渦巻き状部分に棒状部分が各々接合する。ただし、この棒状部分の先端は欠損しており、本来は一体のものであったと考える。図示したように、渦巻き状部分は双方とも癒着したような状態である。

整形は、幅0.5cm・厚さ0.2cmの扁平な棒状の鉄素地の両端を4重の



第14図 左坂C18号墳出土遺物実測図(2)

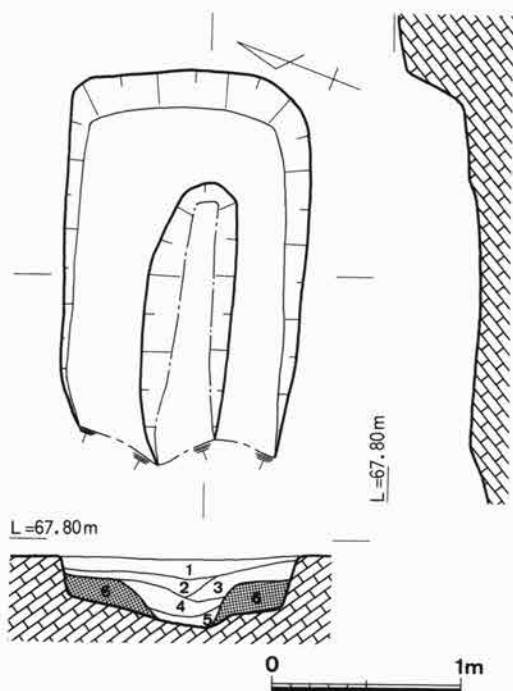
渦巻き状にすることにより行われている。各々の渦巻き状部分が対称であったのか、非対称であったのか現状では判断しがたいが、2つに折れたものが両端の渦巻き状部分で銹着したものと考えれば、各々対称になっていた可能性が高いと判断される。

このような結果から復原される本製品の形状は、両端に直径2.3cmの渦巻き状部分を対称に配置し、各々の渦巻き状部分の間を長さ7cm以上の棒状部分が介在する構造であったと考えることができる。

直刀(13)は、茎の一部を欠く。残存長9.3cm・刃部幅3cmを測る。関は片関である。

### C19号墳

墳丘(第10図) C19号墳は、地山整形により作り出された方墳である。C18号墳側とC20号墳側に溝を有する。墳丘の西側は、後世の削平により大きく破壊され、西側の構造については不明確である。C18号墳側の溝は、尾根主軸に対し直交方向に掘られ、断面はゆるい弧状を呈する。また、この溝の掘削に伴い、C18号墳墳丘北側部分をわずかに削平していることから、C18号墳に後出する古墳であると考えられる。C20号墳側の溝は、尾根主軸



第15図 左坂C19号墳主体部実測図

- |            |             |
|------------|-------------|
| 1. 暗赤褐色砂質土 | 2. 暗黄赤褐色砂質土 |
| 3. 暗黄褐色砂質土 | 4. 暗橙褐色砂質土  |
| 5. 暗黄褐色土   | 6. 暗黄灰色砂質土  |

に対し直交方向に掘られ、断面はゆるい弧状を呈する。溝の規模は幅0.8m・深さ0.2mを測る。墳丘規模は、溝間距離で8m、20号墳側の溝底部からの高さ0.8mを測る。

なお、墳丘東側斜面の古墳築造以前と考えられる弥生土器2個体分が流土中から出土している。

**埋葬施設** 墳頂部平坦面南側で主軸を東西にとる木棺直葬1基を検出した。墳丘中心部に埋葬施設は認められず、この1基のみが掘削されたものとする。

**a 墓壇と木棺(第15図)** 墓壇は、地山面より2段に掘り込まれる。主体部西側は、後世に削平され失われている。墓壇平面形は隅丸長方形を呈し、検出面での規模は、長軸2.1m以上・短軸1.3m・深さ0.36mを測る。2段目は、1段目底部

に浅く掘り込まれ、断面はゆるい「U」字状を呈する。小口部分も垂直には立ち上がらず、ゆるい弧状を呈する。

棺の痕跡については、平面的には明らかにすることはできなかったが、土層断面の観察・2段目墓壙の形状から、舟底状底部を有する木棺であったと考える。

**b 遺物出土状況** C19号墳からは、埋葬施設に伴う遺物は確認されなかった。

#### C20号墳

**墳丘(第10図)** 墳丘は大きく削平され、埋葬施設も失われた状態であった。そのため、具体的な築造方法などについて明確にすることはできなかった。ただし、C19号墳とは幅0.8mを測る溝で区画されているため、C支群通有の方墳とみて間違いのないものとする。

なお、C20号墳では墳丘中央部で近世墓2基を検出している。C18～20号墳の削平は、おそらくこの近世墓造成に伴うものと思われる。

**埋葬施設** 埋葬施設は削平されたためか、その存在を明らかにすることはできなかった。

**遺物出土状況** 墳丘掘削中に若干の土師器片が出土している。

**出土遺物** 土師器片数点があるが、すべて細片であり、形態・時期など不明である。

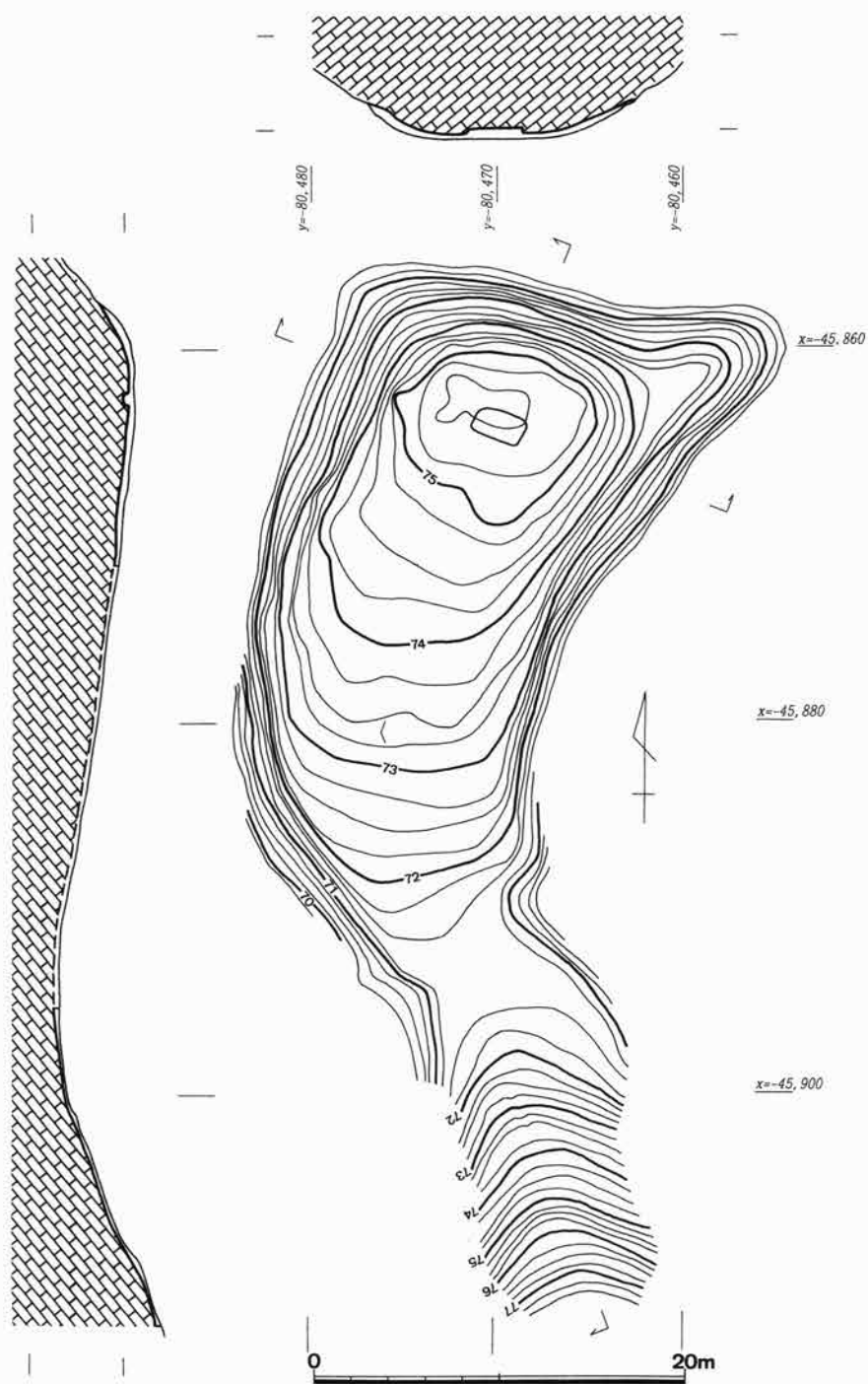
#### ②D支群の調査

D支群では、北側に派生する枝尾根先端部分に位置する12・11号墳の調査を実施した。当初、試掘対象地とされていたため、試掘トレンチを10号墳裾部まで掘削し、古墳の基数などについて検証を行った結果、12号墳のみ古墳であることが明らかとなった。そこで、12号墳のみを面的調査に切り替え、調査を実施した。したがって、D12号墳は、枝尾根先端部分に単独立地する古墳とすることができる。

#### D12号墳

**墳丘(第17図)** D12号墳は、地山整形による方墳である。東西斜面及び北側斜面には明瞭な傾斜変換点が認められ、墳丘の基底を確定することが可能である。一方、墳丘南側については明瞭な傾斜変換点を持たず、自然地形に近い状態のまま削り残されている。墳丘と自然地形の区画は、溝を設けることにより行うが、完周するものではなく、南西側のみ認められる。このような状況から、D12号墳は、平野部側にあたる北西からの見かけを強く意識した墳丘であるとする。墳丘規模は、東西13m・南北11m、傾斜変換点からの高さ1.8mを測る。

墳丘表土掘削中に須恵器・土師器片が出土している。須恵器には、杯蓋(16)・甕(14)・



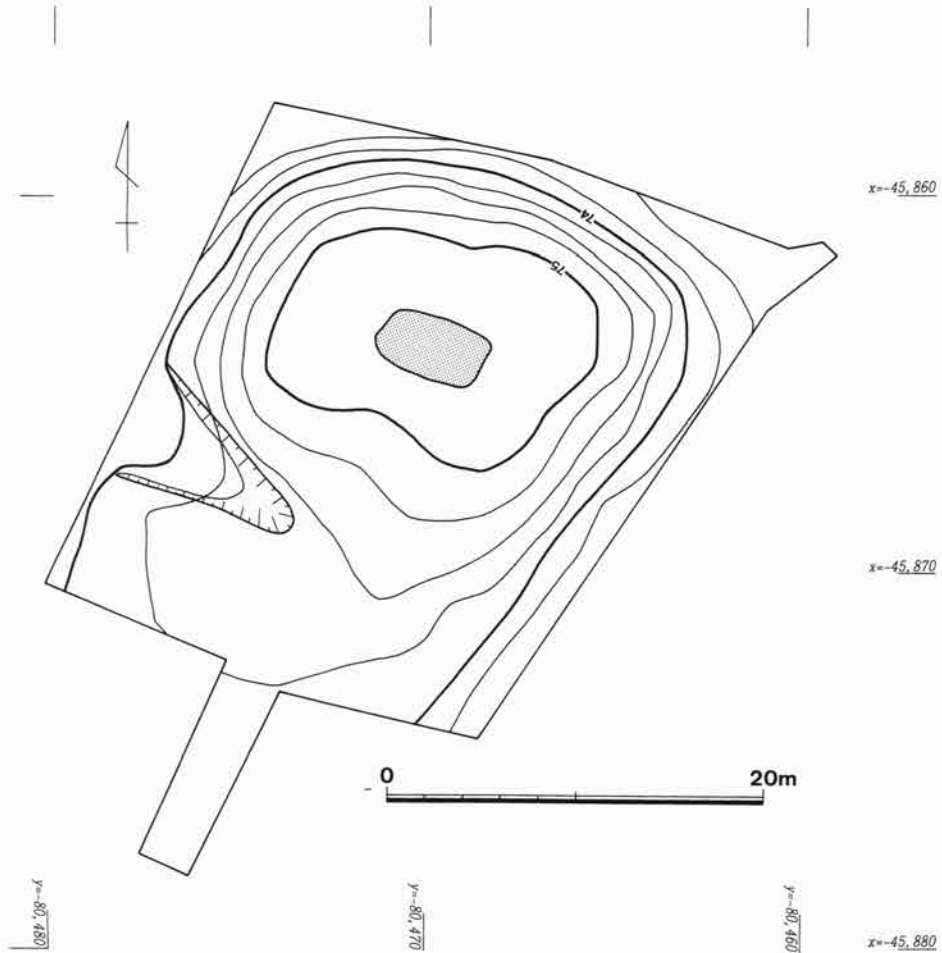
第16図 左坂古墳群D支群調査前地形測量図

跡(15)があり、土師器には高杯(17)がある。墳丘の随所から細片化した状態で出土しており、破碎されていた可能性がある。

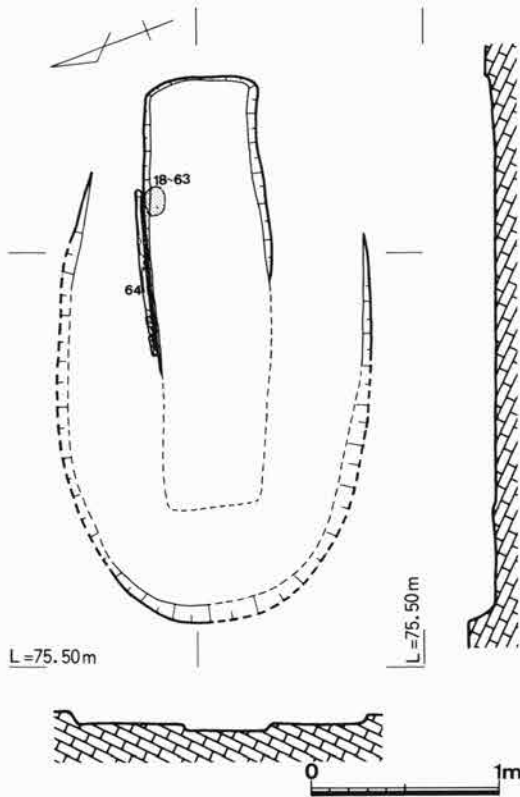
**埋葬施設** 墳頂部平坦面中央において、木棺直葬形態をとる主体部1基を検出した。主軸は東西方向にとる。

**a 墓壙と木棺** 墳丘の削平が著しく、墓壙検出時においても、その全容を明らかにすることはできなかった。特に、西側部分については残存状況が非常に悪かった。遺存する部分の観察によると、墓壙は地山面から2段に掘り込まれ、墓壙平面は小判形を呈する。規模は、長軸2.4m以上・短軸1.6mを測る。2段目は、1段目墓壙底部中央に掘り込まれ、平面長方形を呈する。規模は、長軸2.3m・短軸6.4mを測る。

木棺部分については明瞭にその痕跡を確認することはできなかった。しかし、下段墓壙の形状からみて、組合式箱形木棺が納められていたものと推測される。



第17図 左坂D12号墳調査後地形測量図



第18図 左坂D12号墳主体部実測図

出土位置から被葬者の右手に手玉として装着されていた可能性を考えることができる。また、玉類周辺からは微量ではあるが、赤色顔料が検出された。

**出土遺物(第19図)** D12号墳出土遺物には墳丘出土の須恵器・土師器、埋葬施設内出土の玉類・鉄刀がある。

須恵器甕(14)は、極めてシャープな作りであり、稜も鋭い三角形を呈する。口径22.2cmを測る。同一個体と考えられる体部は、外面平行タタキ・内面はタタキ後擦り消しである。また、頸部に施された下段の波状文が部分的にナデにより擦り消されており、頸部から上を別作りにし、体部と接合した際に消えた可能性がある。

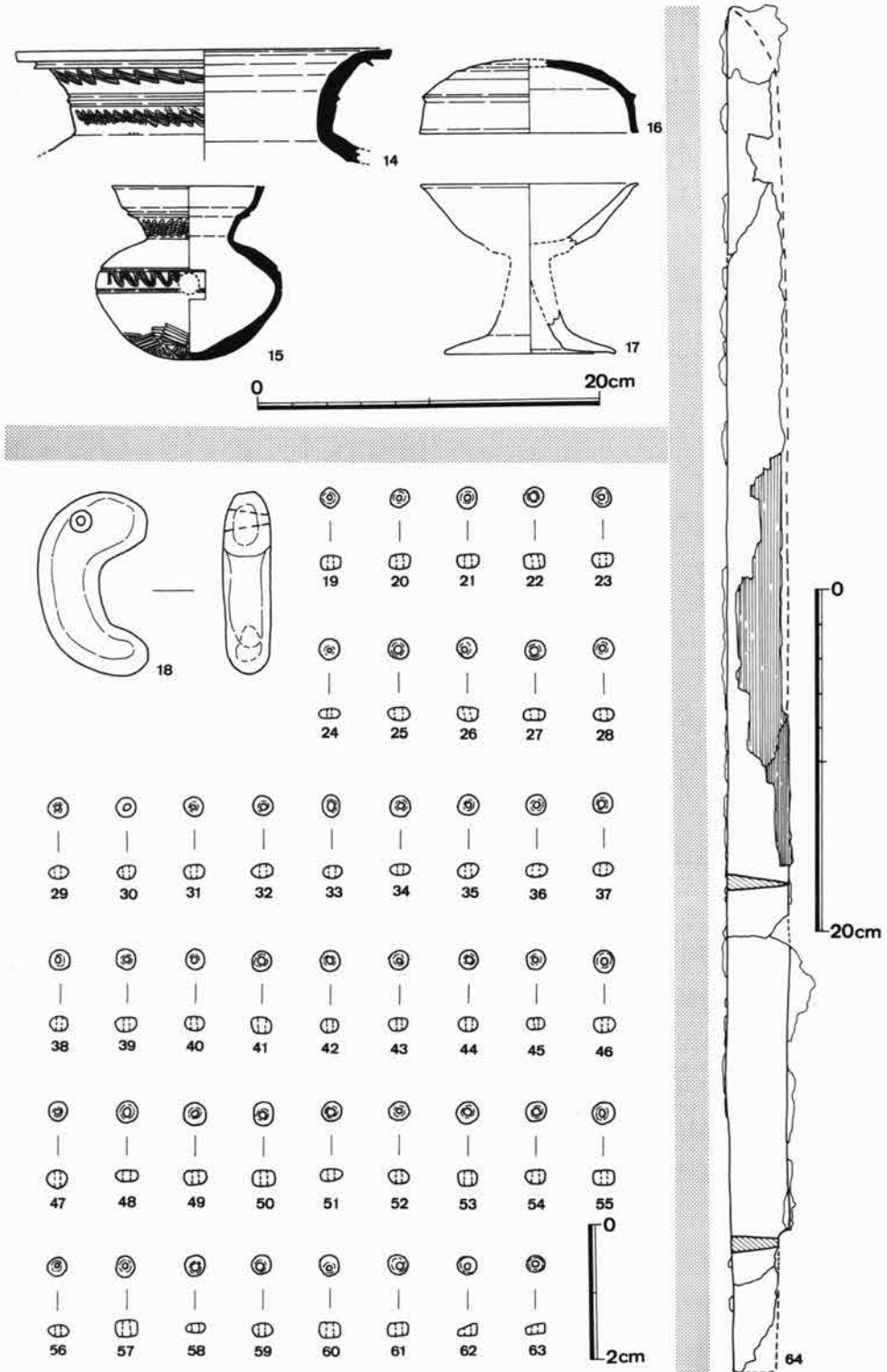
須恵器臙(15)、細片化しており、図上復原を行い図示した。ていねいな作りであり、短い頸部にタマネギ状の体部をもつ。端部は凹面をなす。頸部に9条の波状文、体部中位には2条の沈線により区画された文様帯の中に7条の波状文を施す。底部外面にはタタキが認められる。口径10cm・器高10.2cm・体部最大径10.8cmを測る。

須恵器杯蓋(16)は、全体の50%程度が接合できた。口径11.0cm・器高3.9cmを測る。稜

**b 遺物出土状況** 埋葬施設内から鉄刀1点・ガラス小玉50点・瑠璃製勾玉1点が出土した。

直刀(64)は、1段目墓壇底部で切っ先を東に向けた状態で出土した。下段墓壇内に木棺材を組んだ後に棺外遺物として置かれたものと考えられる。

2段目墓壇中央部北側から玉類が一括して出土した。この部分には松の立ち根が複雑に入り組んでいたため、平面的に掘ることはできず、根と根の隙間を掘削するしか方法がなく、詳細に出土状況を観察することはできなかった。ただし、出土したガラス小玉の中には接続した状態を保つものが存在していることから、この玉類は一連のものとして繋がれた状態にあったと考えている。その



第19図 左坂D12号墳出土遺物実測図



付表2 左坂D12号墳出土玉類法量表  
(CBはコバルトブルー・SBはスカイブルー、単位はcm)

	器種	長さ	直径	孔径	色調		器種	長さ	直径	孔径	色調
18	瑪瑙製勾玉	2.70	0.70	0.30~ (厚) 0.15	赤褐色	41	ガラス小玉	0.22	0.31	0.11	CB
19	ガラス小玉	0.20	0.30	0.12	CB	42	〃	0.22	0.31	0.11	CB
20	〃	0.22	0.29	0.09	CB	43	〃	0.22	0.31	0.10	CB
21	〃	0.21	0.34	0.10	CB	44	〃	0.23	0.31	0.14	CB
22	〃	0.22	0.32	0.14	CB	45	〃	0.20	0.32	0.11	CB
23	〃	0.19	0.30	0.10	CB	46	〃	0.22	0.30	0.10	CB
24	〃	0.25	0.35	0.10	CB	47	〃	0.21	0.30	0.12	CB
25	〃	0.18	0.32	0.07	CB	48	〃	0.18	0.31	0.11	CB
26	〃	0.20	0.32	0.10	CB	49	〃	0.21	0.35	0.14	CB
27	〃	0.20	0.32	0.12	CB	50	〃	0.23	0.32	0.12	CB
28	〃	0.18	0.32	0.13	CB	51	〃	0.25	0.30	0.11	CB
29	〃	0.22	0.33	0.11	CB	52	〃	0.17	0.31	0.14	CB
30	〃	0.16	0.33	0.12	CB	53	〃	0.20	0.33	0.13	CB
31	〃	0.20	0.32	0.11	CB	54	〃	0.21	0.33	0.14	CB
32	〃	0.19	0.29	0.13	CB	55	〃	0.18	0.31	0.14	CB
33	〃	0.20	0.31	0.11	CB	56	〃	0.20	0.30	0.10	CB
34	〃	0.19	0.31	0.12	CB	57	〃	0.23	0.32	0.12	CB
35	〃	0.20	0.34	0.13	CB	58	〃	0.21	0.30	0.13	CB
36	〃	0.19	0.32	0.12	CB	59	〃	0.22	0.34	0.09	CB(淡)
37	〃	0.20	0.31	0.11	CB	60	〃	0.20	0.29	0.11	CB(淡)
38	〃	0.21	0.32	0.11	CB	61	〃	0.18	0.28	0.11	CB(淡)
39	〃	0.18	0.30	0.12	CB	62	〃	0.17	0.27	0.10	SB
40	〃	0.23	0.30	0.11	CB	63	〃	0.19	0.27	0.11	SB

は突出度が高くシャープにつくられる。口縁端部は、わずかに凹面をなす。天井部はいていにヘラ削りされ、天井部内面には同心円状の当て具の痕跡が認められる。

土師器高杯(17)は、同一個体と考えられる杯部及び脚部、ならびに脚との接合部分の稜が出土した。そのため、鈍い稜を有する高杯と考えることができる。杯部は、やや内湾気味にのび、端部は外方へつまみ出す。脚は、大きく横方向に広がり端部をわずかに下方に突出させる。口径12.8cm・脚径10.2cmを測る。

直刀(64)は、錆化及び松の根による劣化が著しい。全長80cm・刃部幅3.6cm測る。関は片関である。なお、刃部に鞘と思われる木質が遺存する。

玉類には、勾玉1点・ガラス小玉45点がある。なお、法量については別表に示した。

勾玉(18)は、瑪瑙製であり、色調は赤褐色を呈する。穿孔は、片面穿孔であり、右側面より穿孔されている。比較的丸みを帯びたプローションを呈する。

ガラス小玉(19~44)は、小形のガラス玉である。19~61は、丸みを帯びた形態をもち、

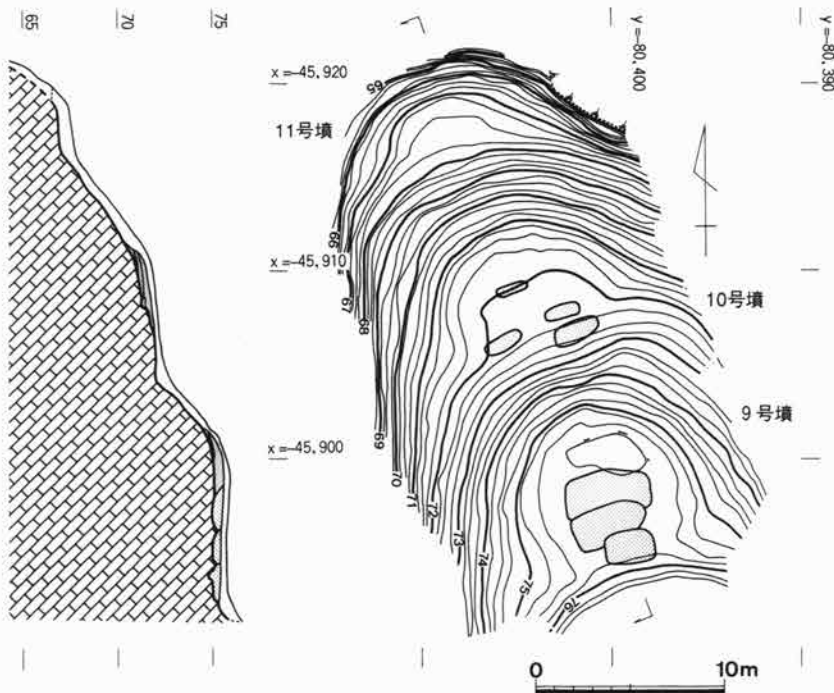
色調はコバルトブルーを呈する。法量・形態に大きな差がなく、企画性の高い製品である。62・63は、色調が透明度の高いスカイブルーであり、形態は扁平な台形を呈する。この2点は、コバルトブルーの一群の玉類とは形態・色調とも異なるが、法量的には大きな差は認められない。

### ③ E支群の調査

E支群では、主尾根から北へ派生する尾根の先端に位置する古墳3基を調査した。先端からE11号墳・10号墳・9号墳である。この3基の古墳の立地する尾根は、傾斜が比較的急であり、階段状に古墳が形成されている。

#### E 9号墳

墳丘(第20図) 盛り土により整形された円墳である。墳丘の築造は、地山を「L」字状にカットし、平坦面を作り出した後、土を低位側に盛って平坦面規模を大きくしており、墳丘の高さを得るための盛り土はなされていない。また、高位側の東西には地山を掘削する溝が設けられているが、完周するものではない。平面的には円を意識したものであるが、明確な裾部が形成されているわけではない。規模は、頂部平坦面の直径10m・E10号墳と

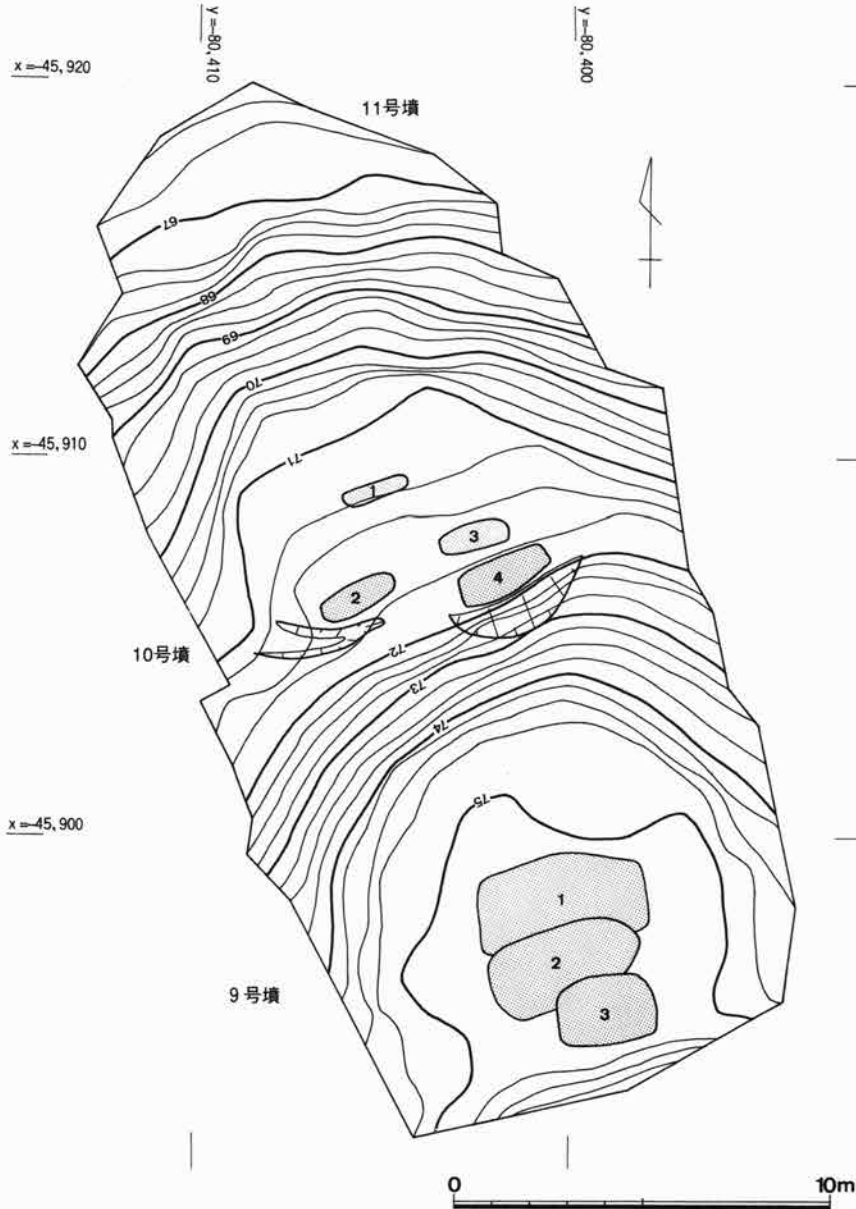


第20図 左坂古墳群E支群調査前地形測量図

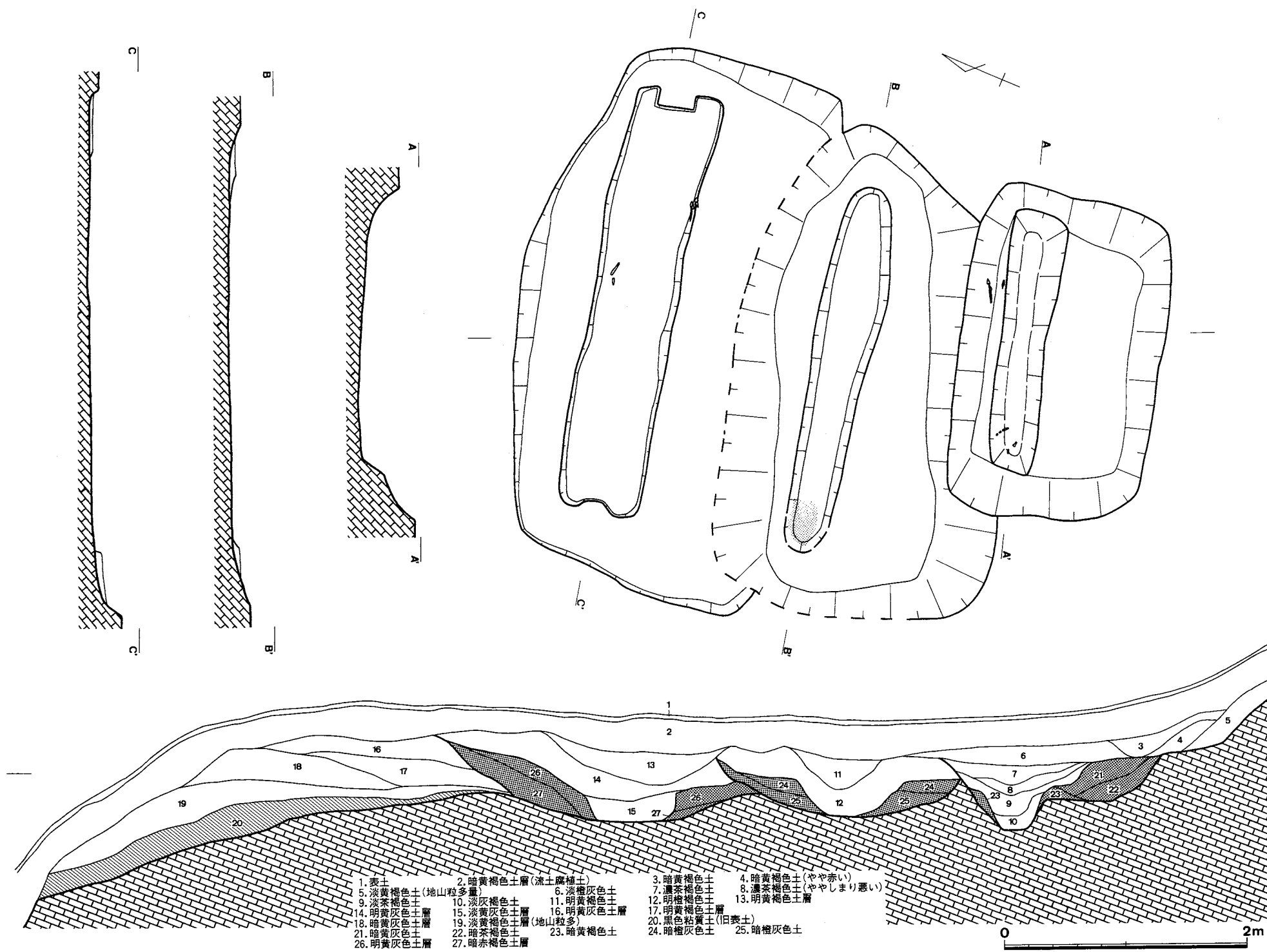
の比高差3mを測る。

**埋葬施設(第21図)** E9号墳では、墳頂部平坦面で東西に主軸をとる木棺直葬墓3基を検出した。切り合い関係が認められ、最も北に位置するものを第1主体部、第1主体部を切るものを第2主体部、第2主体部を切るものを第3主体部として説明を加える。

**第1主体部** 墳頂部平坦面中央に位置し、主軸を東西にとる木棺直葬墓である。南側部



第21図 左坂E9～11号墳調査後地形測量図



第22図 左坂E 9号墳主体部実測図及び墳丘土層断面図

分を第2主体部により切られる。

**a 墓壙と木棺(第22図)** 墓壙は盛り土より掘り込まれる。当初は、墓壙埋土の一部も盛り土と誤認して調査を進めたため、検出面は実際の掘り込み面より下になってしまった。

検出面での墓壙の平面形は、いびつな隅丸長方形を呈し、規模は長軸4.4m・短軸2.6m以上、断面からみた深さ0.6mを測る。段を持たない構造をとり、墓壙底面は中央に向かいゆるやかに傾斜し、底面部分は水平に整えられている。

木棺痕跡は、墓壙検出面より14cm掘り下げた段階で検出した。土色の変化の状況からみて、木棺の外法部分を検出したと考えられ、その形状から組合式箱形木棺が想定できる。棺材の組合せ方は、長側板が小口板をはさむ形状を呈し、両側の長側板とも突出するいわゆる「H」字形木棺である。木棺の規模は長さ3.3m・幅0.68m、西側長側板が長さ3.56m、東側長側板が長さ3.52mを測る。

**b 遺物出土状況** 第1主体部からは、棺内より刀子1点、南側木棺固定土上から鉄鏝4点が出土した。刀子は、棺内北側中央付近で切っ先を東に向けた状態で出土した。鉄鏝は、南側木棺固定土上東側で切っ先を西側に向け、東ねられた状態で検出された。

**第2主体部** 第1主体部の南に位置し、第1主体部を切り、第3主体部に切られる木棺直葬墓である。主軸は東西方向にとる。

**a 墓壙と木棺(第22図)** 墓壙は盛り土面から掘り込まれ、平面は西小口部分に底辺を持つ隅丸二等辺三角形形状を呈している。段構造を持たず、素掘りの形態をとる。墓壙底面は、中央に向かいゆるやかに傾斜し、底面部分は水平に整えられている。規模は、検出面で長軸4m・幅2m以上・深さ0.5mを測る。

木棺痕跡は、墓壙を40cm掘削した段階で検出した。木棺の形状は、断面「U」字状を呈し、両小口縦断面部分も垂直には立ち上がらず、ゆるい曲線を描いて立ち上がる舟底状底部を有する木棺である。検出面での規模は、長軸2.9m・短軸0.48mを測る。

**b 遺物出土状況** 第2主体部に伴う遺物は検出されなかったが、棺内東小口部分で赤色顔料が検出された。

**第3主体部** 第2主体部の南に位置し、第2主体部を切る木棺直葬墓である。主軸は、東西方向にとる。

**a 墓壙と木棺(第22図)** 墓壙は、北側が第2主体部ならびに盛り土面から掘削されているが、南側部分については地山面から2段に掘り込まれている。墓壙平面形は、隅丸長方形を呈し、検出面での規模は長軸2.7m・短軸1.6mを測る。

木棺は、2段目墓壙内埋土を12cm下げた段階で痕跡を検出した。木棺の形状は、断面「U」字状を呈し、両小口部分も垂直には立ち上がらず、ゆるい曲線を描いて立ち上がる

舟底状底部を有する木棺である。検出面での規模は、長軸2.2m・短軸0.36mを測る。

**b 遺物出土状況** 第3主体部からは、木棺固定土上から鉄鍬3点、棺内埋土中から刀子2点が出土した。また、墳丘掘削中に須恵器杯蓋2個体(64・65)・杯身2個体(66・67)が破碎されたような状態で出土している。この須恵器については出土位置が第3主体部直上に当たることから、第3主体部埋め戻し後に墓壙上面で破碎されたものとする。

北側木棺固定土上の鉄鍬は、切っ先を東に向け東ねられた状態で置かれていた。また、3点中2点の鉄鍬の鍬身部は、木棺の腐朽による木棺固定土の棺内流入に伴い棺内に落ち込んだ形で出土した。棺内埋土の刀子は、2点とも切っ先を西に向けた状態であった。土圧のためか、2点とも破片となって出土した。出土状況からみて、棺蓋上に置かれたものとする。

#### 出土遺物

**a 第1主体部出土遺物(第24図)** 木棺固定土上出土の鉄鍬4点、棺内出土の刀子1点がある。刀子は、劣化が著しく図示することができなかった。

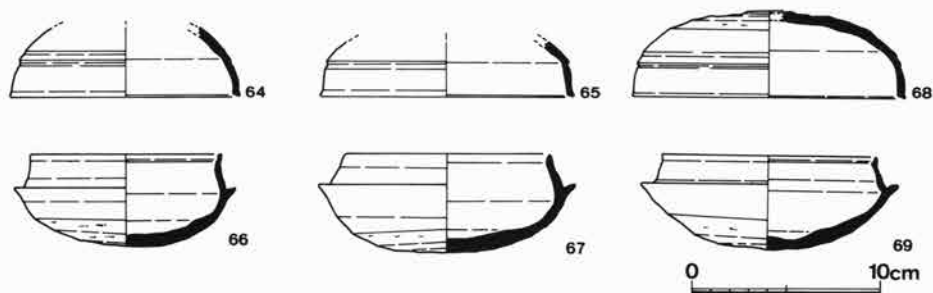
鉄鍬には、腸袂を有する柳葉鍬2点(70・71)と圭頭鍬2点(72・73)がある。関の確認できる3点は、いずれも角関である。72は、矢柄に巻かれた桜の樹皮と考えられる部分が良好に遺存する。

#### b 第3主体部出土遺物(第23・24図)

須恵器杯蓋(64)は、法量が小さく、天井部が丸いプロポーションを呈するものである。稜は上下に沈線を施すことにより表現し、口縁端部には段を持つ。復原口径12.2cmを測る。

須恵器杯蓋(65)は、64より法量の大きいものであり、天井の扁平なプロポーションのものと推測される。稜は下端に1条の沈線を施すことにより表現され、口縁端部は段をなす。復原口径は13.4cmを測る。

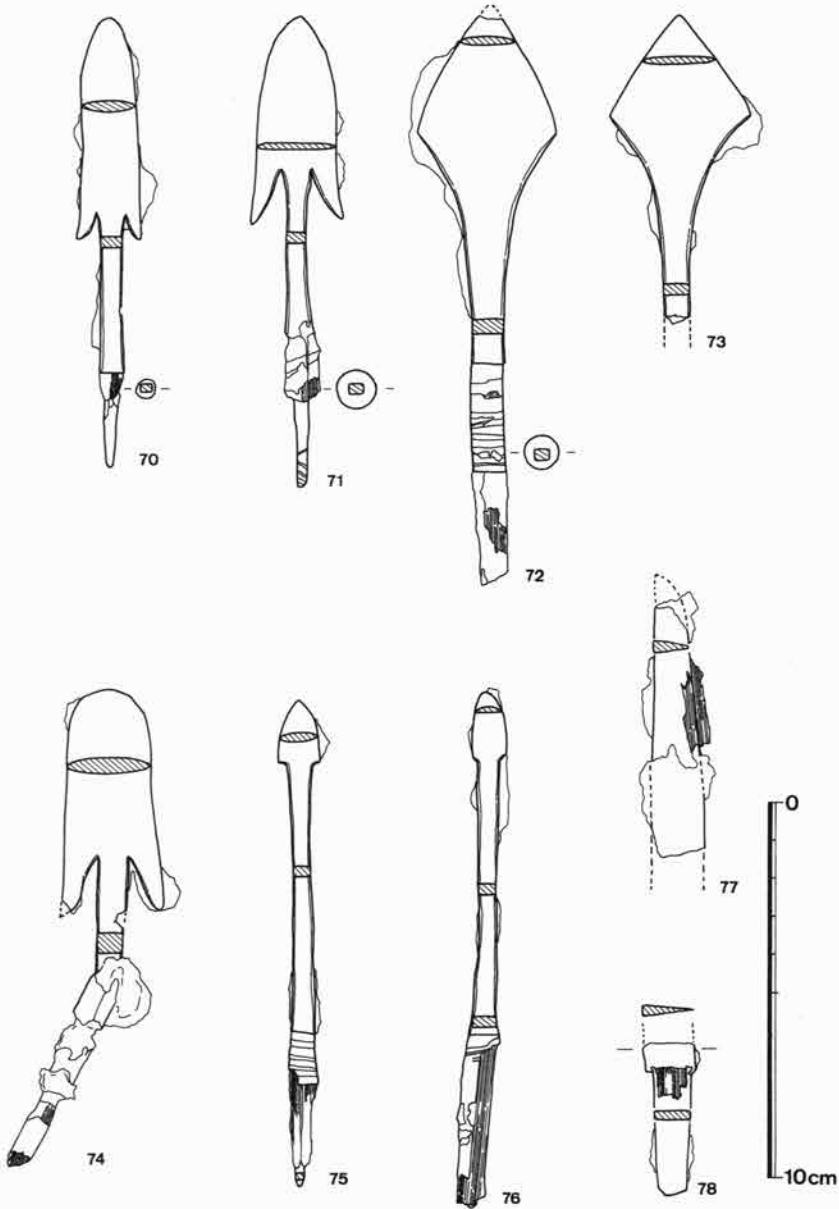
須恵器杯身(66)は、法量が小さく深手のつくりである。立ち上がりは垂直に近く高く、口縁端部は段を形成する。底部外面は、ていねいにヘラケズリされる。口径9.8cm・受け



第23図 左坂E 9号墳出土遺物実測図(1)

部径11.9cm・器高4.9cmを測る。

須恵器杯身(67)は、66より法量の大きいものである。立ち上がりはやや内傾し、端部は段をなさずに斜めに面を持つ。ヘラケズリの範囲もやや狭い。口径10.8cm・受け部径13.8cm・器高5.2cmを測る。



第24図 左坂E9号墳出土遺物実測図(2)

鉄鏃は、腸袂をもつ長頸柳葉鏃1点(74)と鏃身部が三角形を呈する長頸鏃2点(75・76)が存在する。刀子は、2点が存在する。

c 墳丘出土遺物 西側溝埋土内出土の須恵器杯身・杯蓋各1点がある。

須恵器杯蓋(68)は、口径14.5cm・器高4.7cmを測る。稜は下端に1条の沈線を施し、上端はナデにより表現され、口縁端部は段をなす。

須恵器杯身(69)は、口径11.2cm・受け部径13.7cm・器高5.0cmを測る。立ち上がりはやや内傾し、口縁端部は段をなす。ヘラケズリの範囲はやや狭い。

### E 10号墳

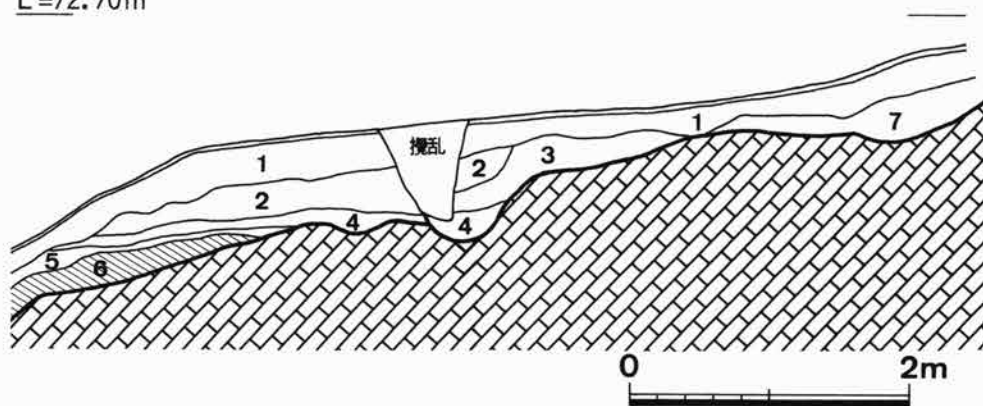
墳丘 盛り土により整形された方墳である。墳丘の築造は、E 9号墳同様地山を「L」字状にカットし、平坦面を作り出した後、土を低位側に盛って平坦面規模を大きくしているが、墳丘の高さを得るための盛り土はなされていない。また、高位側の西部分には地山を掘削する溝が設けられているが、完周するものではない。規模は、頂部平坦面で東西8m・南北7m、E 11号墳との比高差約3mを測る。

埋葬施設 E 10号墳では、墳頂部平坦面で4基の埋葬施設を検出した。墳丘中央に位置するものを第1主体部、平坦面西側に位置するものを第2主体部、第1主体部の南東に位置するものを第3主体部、第3主体部の南に位置するものを第4主体部とし、説明する。

第1主体部 墳頂部平坦面中央に位置し、主軸を東西方向にとる土壙墓と考えられる主体部である。

a 墓壙と木棺(第26図) 墓壙は、盛り土第4層を切り込んで掘削されている。墓壙平面

L=72.70m



第25図 左坂E 10号墳墳丘土層断面図(南北軸)

- |           |                |                   |          |
|-----------|----------------|-------------------|----------|
| 1. 暗褐色砂質土 | 2. 暗橙褐色砂質土     | 3. 暗橙褐色砂質土(地山粒含む) | 4. 褐色砂質土 |
| 5. 橙褐色砂質土 | 6. 黒褐色砂質土(旧表土) | 7. 明褐色砂質土(流土)     |          |



形は長楕円形を呈しており、墓壇底面はほぼ水平に整えられている。検出面での規模は、長軸1.66m・短軸0.46m・深さ0.1mを測る。この主体部は、盛り土面から切り込んでいるため検出が困難であり、本来の規模はさらに大きかったものと考えられる。断面から確認できた深さは0.3m、幅は0.6mを測る。

墓壇埋土はほぼ単層であり、平面・断面からも木棺の存在を確認することができなかった。また、墓壇の形態・規模から考えても、木棺は存在せず、土壇墓であったと考える。

第1主体部は墓壇埋め戻し後、上部を覆うような形でさらに盛り土が施されており、墳丘完成以前の主体部と考えることができる。この点から、第1主体部の被葬者の死亡がE10号墳造墓の契機となったものと推測される。

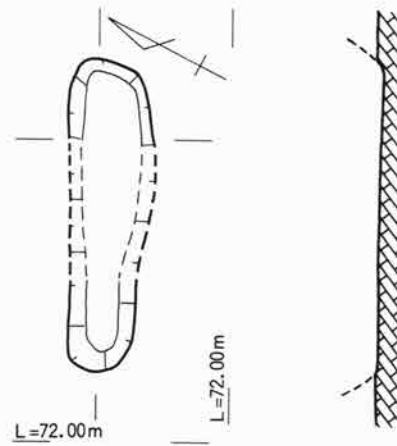
**b 遺物出土状況** 第1主体部に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。

**第2主体部** 第1主体部の南西側に位置し、主軸を東西方向にとる土壇墓と考えられる主体部である。

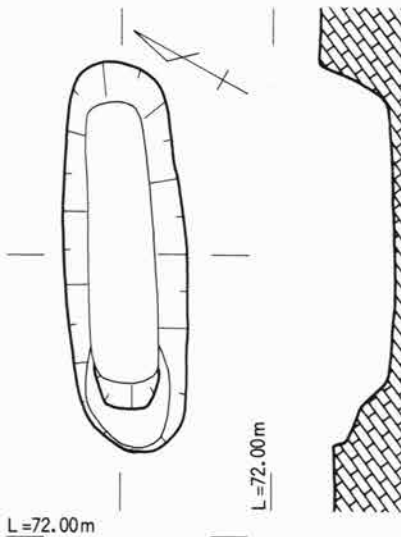
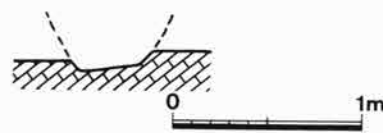
**a 墓壇と木棺(第27図)** 墓壇平面形は、隅丸長方形を呈し、地山面から掘削されている。墓壇底面は、ほぼ水平に整えられ、西側部分は傾斜のゆるい段状に削り残されている。検出面での規模は長軸2.08m・短軸0.66m・深さ0.4mを測る。

墓壇埋土は、ほぼ単層であり、平面・断面からも木棺の存在を確認することができなかった。また、墓壇の形態・規模から考えても、木棺は存在せず、土壇墓であったと考える。

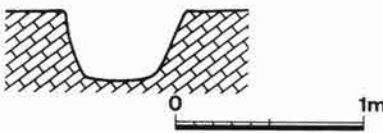
**b 遺物出土状況** 第2主体部に伴うと考えら

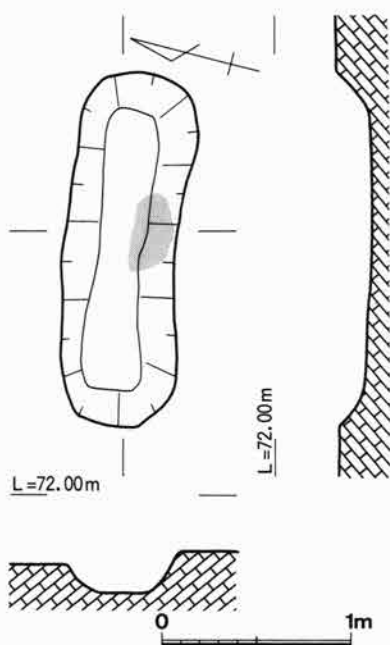


第26図 左坂E10号墳第1主体部実測図

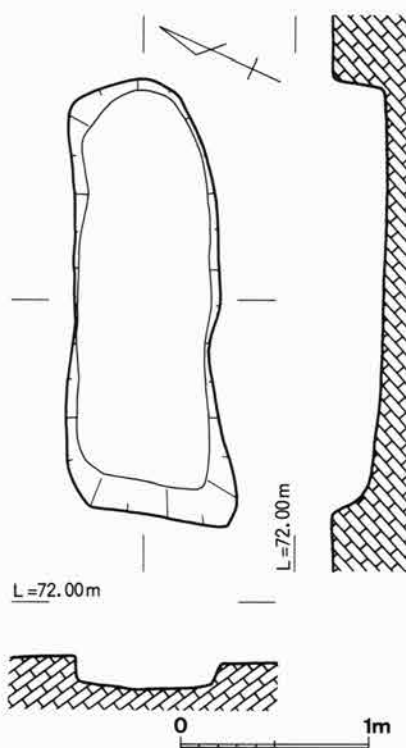


第27図 左坂E10号墳第2主体部実測図





第28図 左坂E10号墳第3主体部実測図



第29図 左坂E10号墳第4主体部実測図

れる遺物は出土しなかった。

**第3主体部** 第1主体部の南東側に位置し、主軸を東西方向にとる土壌墓と考えられる主体部である。

**a 墓壙と木棺(第28図)** 墓壙平面形は、隅丸長方形を呈し、地山面から掘削されている。墓壙底面は、ほぼ水平に整える。検出面での規模は、長軸1.9m・短軸0.6m・深さ0.22mを測る。

墓壙埋土はほぼ単層であり、平面・断面からも木棺の存在を確認できなかった。墓壙内南側で墓壙壁面に赤色顔料が密着したような状況で検出されたことや、墓壙の形態・規模から考えても、木棺は存在せず、土壌墓と考える。

**b 遺物出土状況** 第3主体部に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。ただし、墓壙中央南側部分で赤色顔料が墓壙壁面に密着した状態で検出された。

**第4主体部** 第3主体部の南側に隣接し、主軸を東西方向にとる土壌墓と考えられる主体部である。また、第4主体部造成に際し、E9号墳側の斜面を削平し、平坦面の拡張を行っていることが確認された。

**a 墓壙と木棺(第29図)** 墓壙平面形は、隅丸長方形を呈し、地山面から掘削されている。墓壙底面は、ほぼ水平に整えている。検出面での規模は長軸2.3m・短軸0.8m・深さ0.2mを測る。

墓壙埋土は、ほぼ単層であり、平面・断面からも木棺の存在を確認することができなかった。木棺は存在せず、土壌墓であったと考える。

**b 遺物出土状況** 第4主体部に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。

**出土遺物** E10号墳出土遺物には、墳丘掘削

中に出土した若干の土師器片・須恵器片がある。土師器は、甕もしくは壺の体部と考えられ、須恵器は甕の体部片が1点出土したのみであり図化することはできなかった。また、埋葬施設に伴う遺物は出土しなかった。

### E 11号墳

**墳丘** 地山整形と盛り土による方墳である。墳丘の流失が著しく、造成の方法などについては明確にできなかったが、E 9・10号墳同様、地山を「L」字状にカットし、低位側に土を盛る方法をとったものと推測される。

**埋葬施設** 埋葬施設は、削平・流失したものと考えられ、検出することはできなかった。

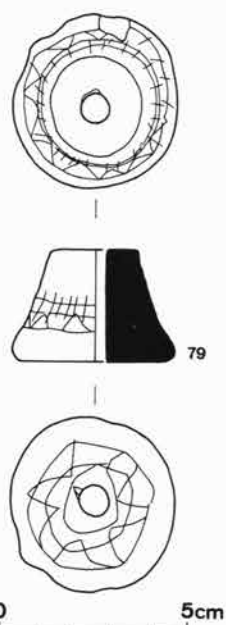
**遺物出土状況** 墳丘掘削中に須恵器蓋片・土師器片・須恵質紡錘車1点・鉄鎌1点が出土した。出土位置からみて、鉄鎌は埋葬施設に伴っていたものと考えられる。須恵質紡錘車は、墳丘平坦面西南側から出土しており、埋葬施設に伴う遺物ではないと考えている。

**出土遺物(第30・31図)** E 11号墳出土遺物には、須恵器杯蓋片・土師器片・須恵質紡錘車1点・鉄鎌1点があるが、須恵器片・土師器片については細片であり、図示することができなかった。ただし、須恵器杯蓋は、天井部に比較的ていねいなヘラ削りを施すものであり、TK43併行期以前の所産と考えられる。

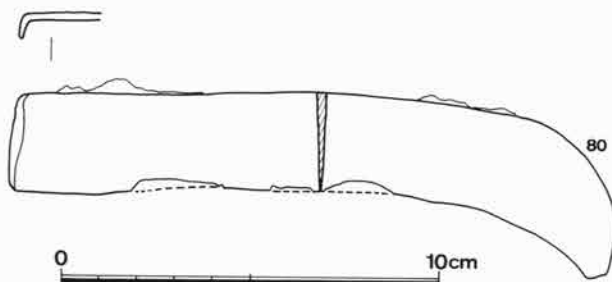
鉄鎌(80)は、曲刃鎌である。全長16.2cm・幅2.7cmを測る。柄の装着部分は、刃部に對しほぼ直角である。また、柄の装着を示すような木質の遺存は確認できない。

須恵質紡錘車(79)は、國下多美樹氏<sup>(註5)</sup>分類のI d類に相当し、側面にはヘラ状工具により稚拙な連続三角文ならびに斜行文、底部には同心円文内に巴文が施される。法量は、高さ2.9cm・直径4.3cm・円孔部径0.7cmを測る。

(石崎善久)



第30図 左坂E11号墳出土遺物実測図(1)



第31図 左坂E11号墳出土遺物実測図(2)

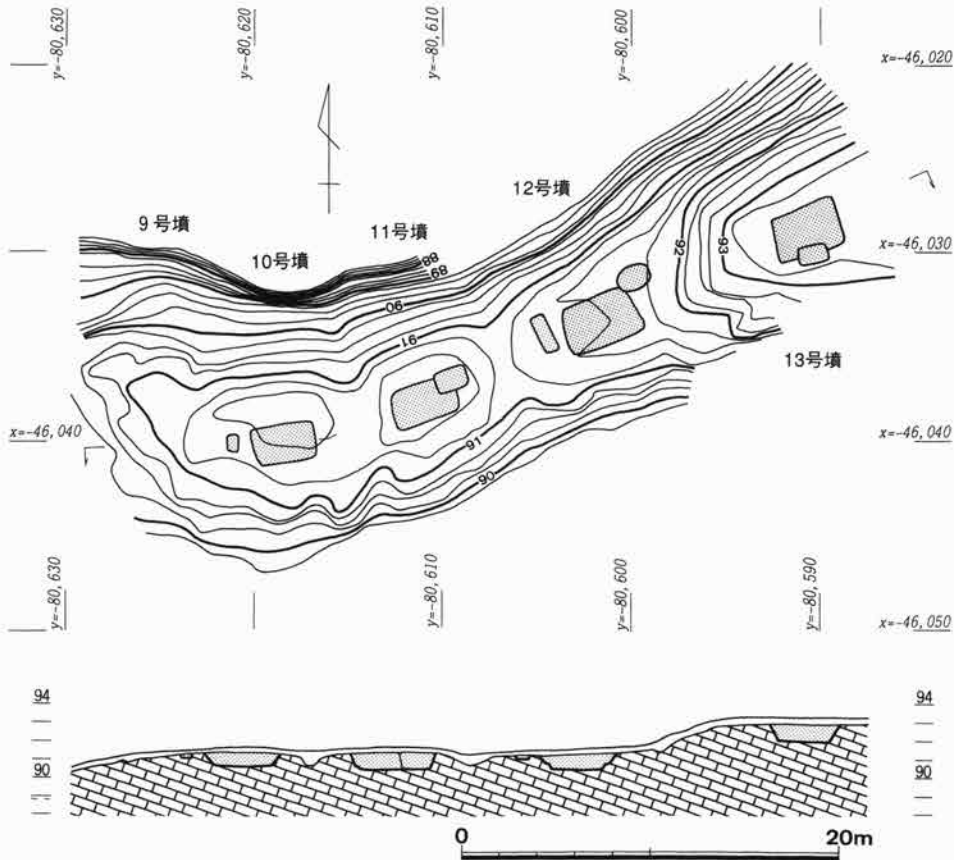
④ G支群の調査

G支群は、C支群から2本に分岐する尾根の北側尾根上に分布している。古墳として確認されたものは総数14基を数える。G13号墳が最高所に位置しており、墳頂部での標高は約93mを測る。この尾根は、G10号墳から傾斜を強めて下り、尾根鞍部を介した後、先端付近で標高を上げる。今回、当センターで調査した4基の古墳は、枝尾根東部分の平坦な部分を利用して築造されており、G10～G12号墳では墳頂部の標高がほぼ一定である。G13号墳は、他の古墳に比べ一段高いところに立地している。

付表3 新旧古墳  
番号対照表

旧番号		新番号
G11	→	G10
G12	→	G11
G13	→	G12
G30	→	G13

なお、今回使用した古墳番号は、尾根先端部分に立地する古墳をG1号墳とし、東側へ向け番号を付すこととし、大宮町教育委員会により調査が実施され弥生時代の墳墓であることが明らかとなったものは古墳番号から除外し、新たに番号を付した。そのため、調査時とは異なる名称を用いた。旧番号と新番号の対照は、付表3のとおりである。



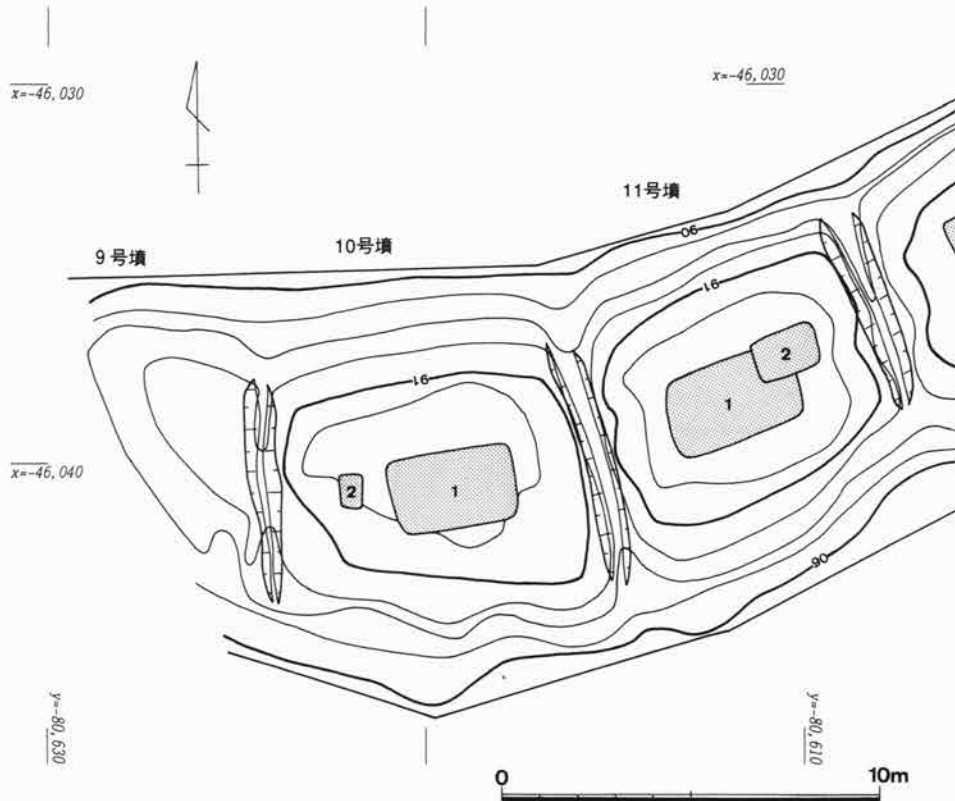
第32図 左坂古墳群G支群調査前地形測量図

G10号墳

墳丘(第33図) G10号墳は、地山整形によって造り出された方墳であり、盛り土は確認されなかった。

墳丘西側には、G9号墳と共有する幅0.8m・深さ0.2mを測る直線的な溝をもつ。溝断面はゆるい弧状を呈する。東側は、G11号墳と共有する幅0.8m・深さ0.4mを測る直線的な溝が掘削されている。G11号墳と共有する溝は、11・12号墳側ともほぼ垂直に落ち、溝底部は平坦である。南北側墳丘斜面は、自然の傾斜面とほぼ同一であり、明瞭な傾斜変換点は認められないため、墳丘基底を明確にすることはできない。墳丘規模は、南北9m、9号墳側の溝底部からの高さ0.7mを測る。墳頂部平坦面は、東西8m・南北6mの規模をもっている。

G11号墳と共有する溝南側埋土から小形器台1点が出土している。溝内堆積土、最下層の上面から検出されており、一定程度、溝が埋没した後に転落したもの、もしくは古墳築造以後に持ち込まれたものとする。ただし、この器台がG10号墳に伴うものであるのか、G11号墳に伴うものであるのかは明確にし得ない。



第33図 左坂G10・11号墳調査後地形測量図

**埋葬施設** G10号墳では、墳頂部平坦面で2基の埋葬施設を確認した。1基は木棺直葬であり、もう1基は土壙墓と考えられるものである。なお、この2基の主体部は切り合い関係を持たない。木棺直葬を第1主体部、土壙墓を第2主体部として説明を加える。

**第1主体部** 第1主体部は、墳頂部中央に位置し、主軸を東西にとる木棺直葬墓である。

**a 墓壙と木棺(第34図)** 墓壙は、平面隅丸長方形を呈し、地山から2段に掘り込む形態をとる。規模は、検出面上段が長軸2.4m・短軸2.0m・深さ0.2mを測る。2段目は、1段目墓壙底部中央に掘り込まれ、小口部分には段は認められない。規模は、長軸2.35m・短軸0.65m・深さ0.15mを測る。

墓壙2段目検出と同時に木棺痕跡を確認した。木棺の形態は、その痕跡から組合式箱形

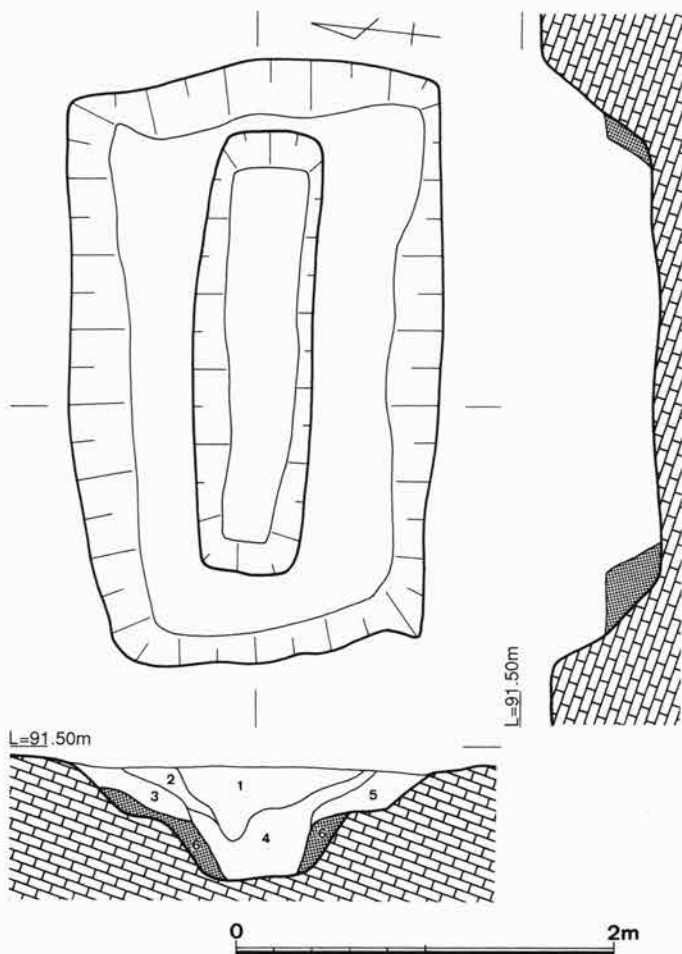
木棺であると考ええる。

木棺部分は、長さ2.15m・西側底部幅0.4m・東側底部幅0.2mを測る。西側にあたる部分の方が東側に比べて幅が広く、また、棺底も高くなっている。このことから、被葬者は西頭位で埋葬されたものと思われる。

**b 遺物出土状況** 第

1主体部からは、緑色凝灰岩製管玉1点が出土した。棺内流入土を掘削中に出土し、棺底面から遊離した状態であった。このことから、この管玉は墓壙埋土内、もしくは棺上に置かれたものと考ええる。

**第2主体部** 第2主体部は、第1主体部の

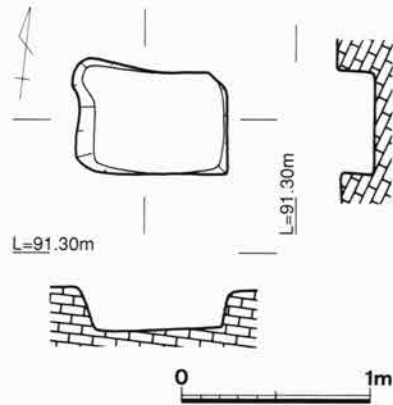


第34図 左坂G10号墳第1主体部実測図

- |            |            |                |
|------------|------------|----------------|
| 1. 明橙褐色砂質土 | 2. 暗橙褐色砂質土 | 3. 2に同じ(地山粒含む) |
| 4. 淡橙褐色砂質土 | 5. 淡灰白色砂質土 | 6. 淡灰褐色砂質土     |

西側に位置し、主軸を東西にとる。

**a 墓壙と木棺(第35図)** 墓壙は、地山面から掘り込まれ、素掘りの形態をとる。平面形は、やや南北に長い方形プランを呈し、規模は、長軸0.8m・短軸0.64m・深さ0.24mを測る。木棺の痕跡は、平面的にも土層断面からも認めることはできず、土壙墓であると考える。

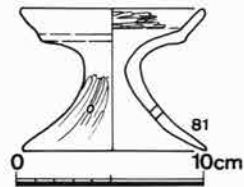


第35図 左坂G10号墳第2主体部実測図

**出土遺物(第36図)** 第1主体部埋土内出土の管玉1点、G11号墳と共有する溝埋土出土の器台1点がある。管玉は、緑色凝灰岩製である。

非常に脆く、検出時に破損し、原形を留めていない。そのため図示することはできず、その他の観察も不可能である。出土時の状況から、直径5mm前後・長さ3cm前後を測る。

器台(81)は、小形精製品である。受け部内面にやや鈍い稜を有する。調整は、磨耗が著しいが、受け部内面・脚部外面にヘラミガキが観察される。スカシは、3方に穿たれる。口径9.6cm・器高7.6cmを測る。



第36図 左坂G10・11号墳溝内出土遺物実測図

### G11号墳

**墳丘(第33図)** G11号墳は、地山整形によって造り出された方墳である。盛り土は、確認されなかった。

墳丘西側は、G10号墳と共有する溝を有し、東側はG12号墳と共有する溝を有する。この溝は、尾根主軸に対し直交方向に掘削され、溝底部はゆるい弧状を呈する。溝の規模は、幅1m・深さ0.5mを測る。墳丘の南北斜面は、自然の傾斜面とほぼ同一であり、明瞭な傾斜変換点は認められない。そのため、墳丘基底を明確に造り出していたとは考えがたい。墳丘規模は、溝間距離をとれば東西8.2m、12号墳側の溝底部からの高さ0.8mを測る。墳頂部平坦面は、東西6.4m・南北5.8mの規模をもつ。

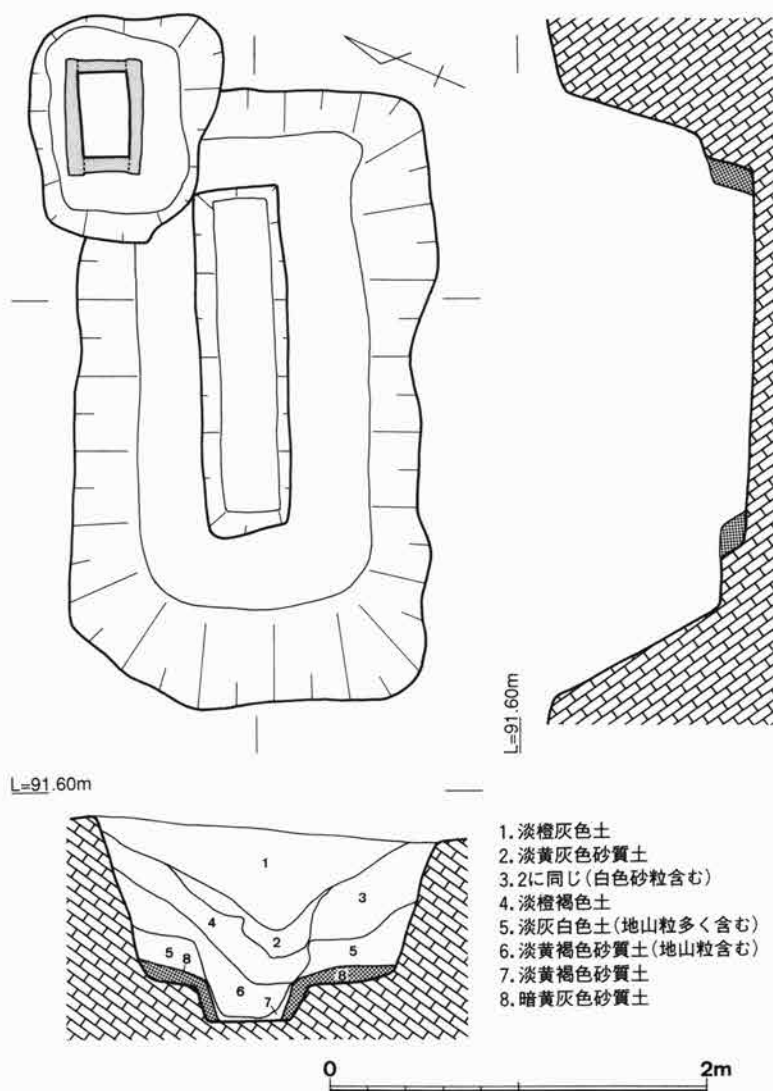
**埋葬施設** G11号墳では、墳頂部で2基の埋葬施設を確認した。2基とも木棺直葬形態をとる。この2基の主体部のうち、墳丘中央に位置する方を第1主体部、この第1主体部の北東隅に位置する方を第2主体部とし、説明を加える。なお、第1主体部と第2主体部の前後関係は、切り合い関係から第1主体部の方が第2主体部よりも早く築かれているこ

とが確認された。

**第1主体部** 第1主体部は墳頂部中央に位置し、主軸を東西にとる木棺直葬墓である。

**a墓壙と木棺(第37図)** 墓壙は、平面隅丸長方形を呈し、地山から2段に掘り込まれる。検出面での規模は、上段が長軸3.2m・短軸1.9m・深さ0.7mを測る。2段目は、1段目のほぼ中央に掘られ、小口部分にも段を残す構造をもつ。2段目の規模は、長軸1.9m・短軸0.5m・深さ0.2mを測る。

墓壙を0.9m掘り下げた段階で木棺の痕跡を確認した。木棺の形態は、その痕跡から組合式箱形木棺であると考ええる。木棺部分は、長さ1.7m・幅0.44mを測る。なお、この主



第37図 左坂G11号墳第1主体部実測図



体部に伴う遺物は検出されなかった。

**b 遺物出土状況** 第1主体部に伴う遺物は、検出されなかった。

**第2主体部** 第2主体部は、第1主体部の北東隅に位置し、第1主体部の墓壇を壊して掘削されている。第1主体部と同じく主軸を東西にとる木棺直葬墓である。

**a 墓壇と木棺(第38図)** 第2主体部の墓壇は、平面隅丸長方形を呈し、地山面から掘り込まれる。断面は、段を持たない素掘りの形態をとる。検出面での規模は、長軸1.2m・短軸0.9m・深さ1.0mを測る。

墓壇埋土を0.8m掘り下げた段階で、木棺痕跡を確認した。第2主体部では、棺材に赤色顔料が塗布されており、木棺の形態・構造について詳細な観察を行うことができた。

棺材は、痕跡の厚さ8cmを測り、長側板で小口板を挟み込む構造をとる。底板については、その痕跡を明らかにすることはできず、底板を持たない可能性がある。棺底部は、西から東へむけ傾斜する。各棺材の規模は、北長側板が長さ0.62m、南長側板が長さ0.6m、東小口板が長さ0.24m、西小口板が長さ0.26mを測る。なお、断面で観察できた棺材の高さは、0.2mである。木棺の内法は、長さ0.44m・幅0.25mを測る。

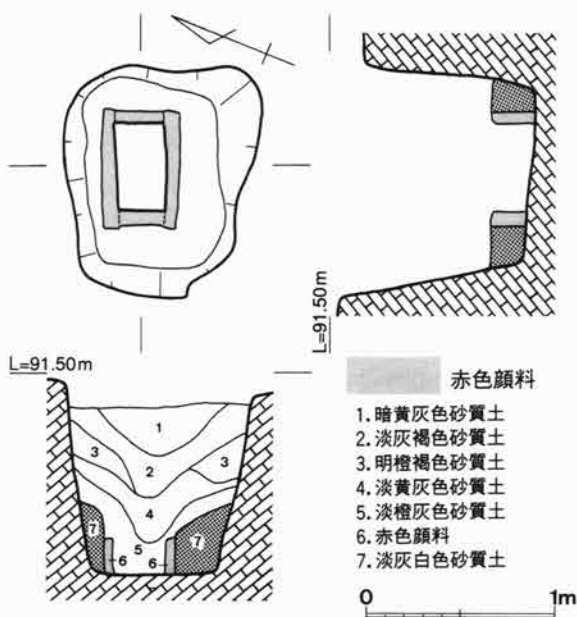
**b 遺物出土状況** 第2主体部に伴う遺物は、検出されなかった。

### G12号墳

**立地** G12号墳は、今回調査を行った古墳の中では西から3番目の標高90m付近に位置している。

**墳丘(第39図)** G12号墳は、地山整形によって造り出された方墳である。盛り土は、確認されなかった。

墳丘西側は、G11号墳と共有する溝を有し、東側はG13号墳と区画する溝を有する。この溝は、尾根主軸に対し、直交方向に掘削され、溝底部はゆるい弧状を呈する。溝平面は、

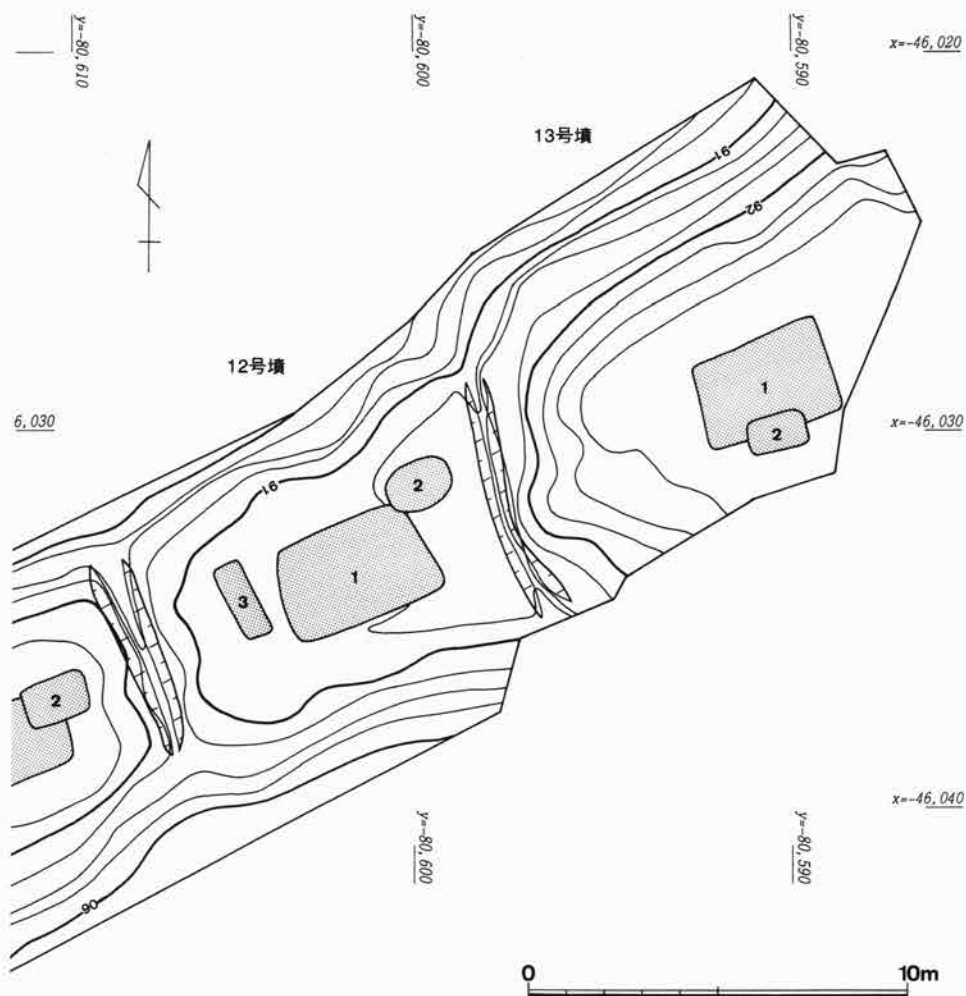


第38図 左坂G11号墳第2主体部実測図

丘陵先端部の等高線に沿うような形で弧状を呈している。溝の規模は、幅0.7m・深さ0.2mを測る。墳丘の南北斜面は、自然の傾斜面とほぼ同一であり、明瞭な傾斜変換点は認められない。そのため、墳丘基底を明確に造り出していたとは考えがたい。墳丘規模は、溝間距離をとれば東西10.2m、11号墳側の溝底部からの高さ0.8mを測る。墳頂部平坦面は、東西9m・南北6mの規模をもつ。

東側溝北側の埋土から、土師器甕(96)1点が出土している。甕は、ほぼ完形個体に復原でき、転落し、土圧により崩壊した状況を呈していた。この出土状況からみて、この甕は一定程度溝が埋没した段階で、G12号墳側から転落したものと考える。

**埋葬施設** G12号墳では墳頂部で3基の主体部を確認した。3基とも木棺直葬墓である。3基の主体部のうち、中央に位置するものを第1主体部、第1主体部の北東隅に位置する

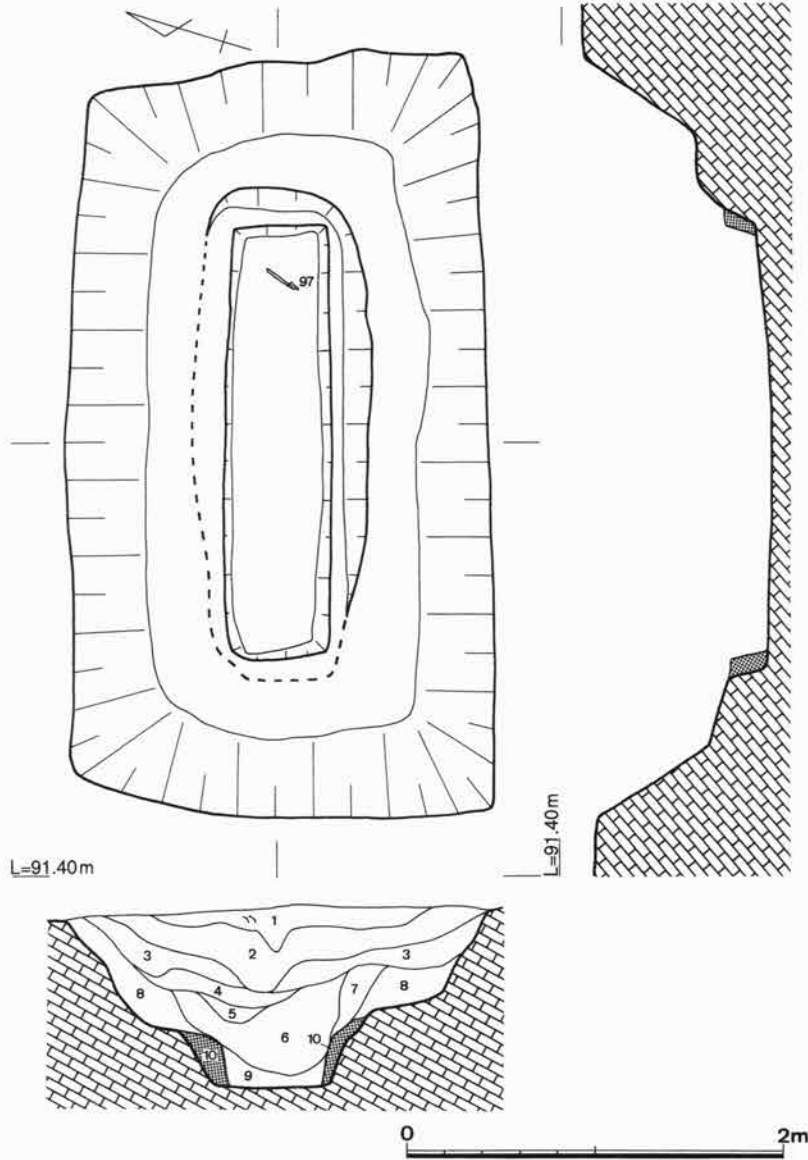


第39図 左坂G12・13号墳調査後地形測量図

ものを第2主体部、第1主体部の西側に位置するものを第3主体部として説明を加える。

**第1主体部** 第1主体部は、墳頂部中央に位置し、主軸を東西にとる木棺直葬墓である。

**a 墓壙と木棺(第40図)** 墓壙は、平面隅丸長方形を呈し、地山面から2段に掘り込まれる。検出面での規模は、上段が長軸4.1m・短軸2.2m・深さ0.6mを測る。2段目は、1



第40図 左坂G12号墳第1主体部実測図

- |                   |            |                |           |
|-------------------|------------|----------------|-----------|
| 1. 暗橙褐色土          | 2. 淡橙灰色砂質土 | 3. 淡灰褐色砂質土     | 4. 灰褐色砂質土 |
| 5. 明黄灰色砂質土        | 6. 淡黄灰色砂質土 | 7. 5と同じ(地山粒含む) |           |
| 8. 淡灰白色砂質土(地山粒含む) | 9. 淡灰白色砂質土 | 10. 暗黄灰色砂質土    |           |

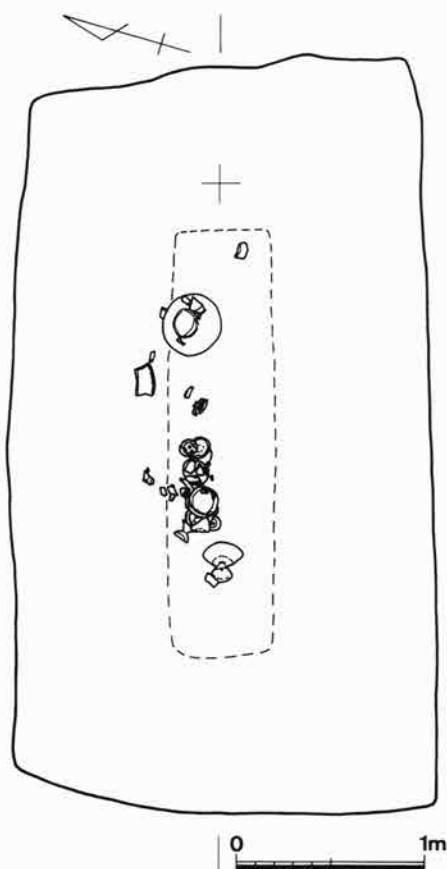
段目墓壇底部のほぼ中央に掘られ、小口部分にも段を残す形態をとる。規模は、長軸2.6m・短軸0.9m・深さ0.4mを測る。

木棺痕跡は、墓壇2段目を10cm掘り下げたレベルで検出した。その形態から、組合式箱形木棺であったものとする。棺材の組合せ方については明確にすることはできなかったが、棺内遺物が墓壇底面である地山直上から出土しており、底材は存在しなかったものとする。木棺規模は、長さ2.2m・幅0.46mを測る。

なお、棺内出土遺物が東側に置かれていること、棺底部分が東から西へ向かい、わずかに傾斜していることから、被葬者は東側に頭位を有するものとする。

**b 遺物出土状況(第41・42図)** 第1主体部からは棺内、墓壇上・墓壇内から遺物が出土している。

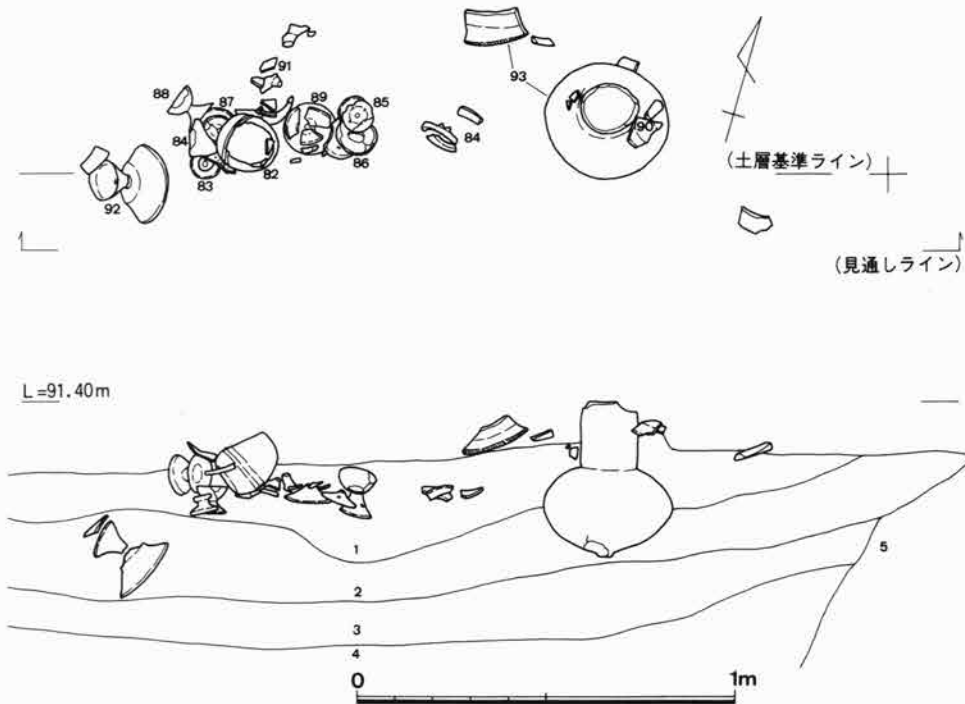
棺内からは、ヤリガンナ(97)1点が出土した。棺東側中央の棺底部分に棺主軸に直交する形で刃先を南に向けて置かれており、刃部には布が巻かれている状況が明確に観察された。被葬者の頭位付近に置かれたものとする。



第41図 左坂G12号墳第1主体部  
遺物出土状況図(1)

墓壇上面及び、墓壇埋土内から、土師器12点が発見された。これら土師器群は、土層の観察からその置かれた段階が異なることが明確となった。各々第1群・第2群として説明を加える。

まず、第1群は、墓壇埋め戻し後に供献された一群の土師器である。すべて墓壇埋土第1層中から出土した。器形には、手焙り形土器1点・小形高杯5点・小形器台3点・器台1点がある。これら総数10点の土器群は、墓壇中軸に沿うような形で西半部分から出土した。いずれの土器も正位置で立った状態で出土していることから、墓壇上面に立て並べられていたものとする。まず、墓壇中央部分には器台(85)と高杯(86)が並べられ、その西側には高杯(89)が、その西には高杯



第42図 左坂G12号墳第1主体部遺物出土状況図(2)

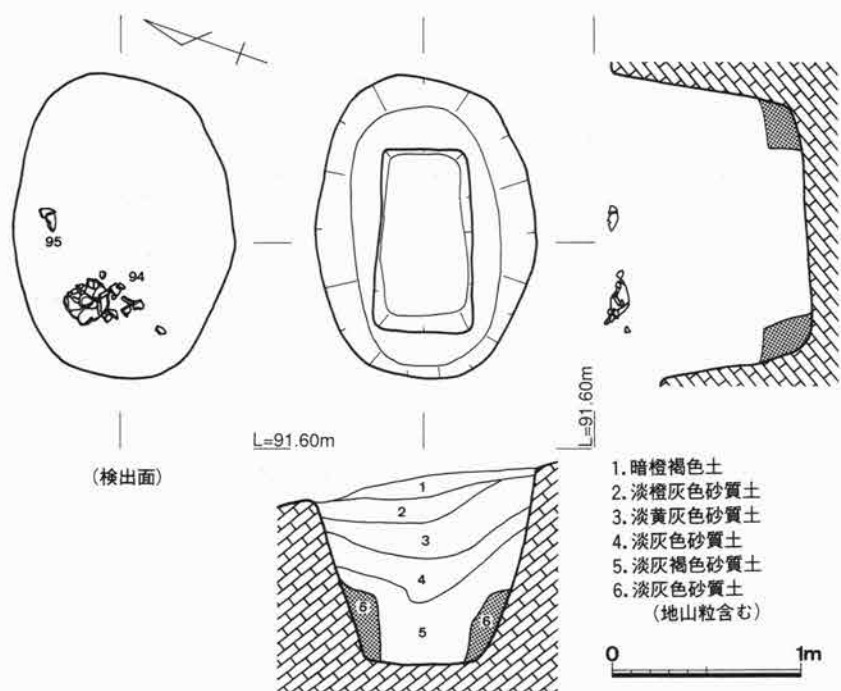
1. 暗橙褐色土 2. 淡橙灰色砂質土 3. 淡灰褐色砂質土 4. 淡黄灰色砂質土  
5. 淡灰白色砂質土(地山粒含む)

(87)と器台(83)が並べられていた。手焙り形土器(82)は、この高杯と器台の上面に開口部を上に向けた状態で横位で出土した。この出土状況からみて、手焙り形土器(82)は高杯(87)の上に乗せられていたものと推測される。高杯(88)は、高杯(87)の北西に横位で検出された。また、器台(84)は、細片化し、墓壙中央部分で杯部が、手焙り形土器の西側で脚部が出土している。高杯(91)は、手焙り形土器の北側で細片化して検出された。

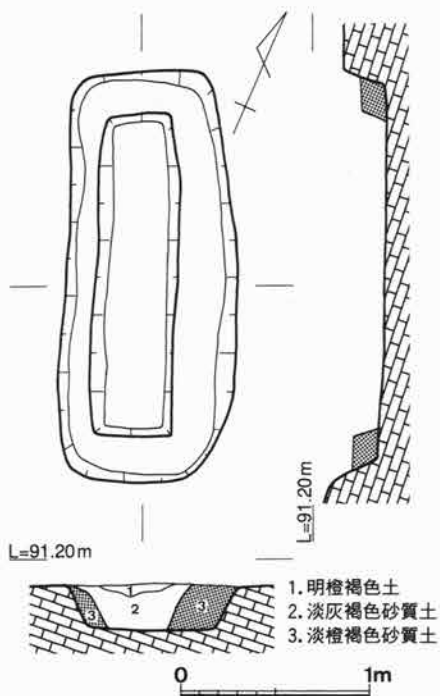
第2群の土師器には、壺形土器(93)と高杯(92)の2点がある。壺形土器は、第2層中に体部を埋め、頸部が第1層中にのびていることから、墓壙埋め戻し後も、頸部の一部と口縁部は、地上に突き出ていた可能性がある。高杯(92)は、杯部を下に向けた状態で完全に第2層中に埋没した状況を呈していた。

**第2主体部** 第2主体部は、墳頂部の北東に位置し、主軸を東西にとる木棺直葬墓である。第1主体部の北東隅を壊して掘削されており、第1主体部に後出する主体部である。

**a 墓壙と木棺(第43図)** 墓壙平面形は、東西に長い楕円形を呈し、地山面から掘り込んでいる。断面形態は、段構造をもたない素掘りの墓壙である。墓壙の規模は、長軸1.6m・短軸1.2m・深さ1.0mを測る。



第43図 左坂G12号墳第2主体部実測図



第44図 左坂G12号墳第3主体部実測図

墓壇埋土を80cm掘り下げた段階で木棺の痕跡を検出した。痕跡から組合式箱形木棺と考えられ、規模は長さ0.9m・幅0.4mを測る。棺底面は、東から西へ向かいわずかに傾斜する。

**b 遺物出土状況** 第2主体部に伴う遺物は、土師器甕1点・土師器高杯1点がある。墓壇検出面上で検出した。甕(94)は、墓壇中央南側で底部を下にし、口縁部がその中に落ち込んだ状態で検出された。高杯脚(95)は、甕の北東側から直立した状態で検出された。これらの土師器は、墓壇埋め戻し後に墓壇上面に据え置かれたものと考えられる。

**第3主体部** 第1主体部の西側に位置し、主軸を第1主体部の直交方向、すなわち南北にとる木棺直葬墓である。他の主体部との切り合い関係はない。

a 墓壙と木棺(第44図) 墓壙は、平面隅丸長方形を呈し、地山面から掘り込む。断面形態は、段を持たない素堀の墓壙である。墓壙の規模は、長軸2.2m・短軸0.9・深さ0.3mを測る。

墓壙埋土を6cm掘り下げた段階で棺の痕跡を検出した。棺は、その形態から組合式箱形木棺と考えられる。2段目に組合式箱形木棺を設置する構造をとると考えられる。規模は、長さ1.7m・幅0.4mを測る。

b 遺物出土状況 第3主体部に伴う遺物は、検出されなかった。

#### 出土遺物

a 第1主体部出土遺物(第45~47図) 第1主体部出土遺物には墓壙上面・埋土中出土の土師器12点、棺内出土のヤリガンナ1点がある。

土師器は、総数12点を数え、手焙り形土器1点、器台4点、高杯6点、壺1点がある。また、G12号墳出土の土師器の中には極めて特徴的な胎土をもつものが含まれている点が注目される。通有の透明度の低い石英結晶体のほかに、極めて透明度が高く十二面体の微細な結晶体をなす高温石英を含む。今回の報告では、この高温石英を含む胎土を胎土A、この石英を含まない胎土を胎土Bと大別して報告することとする。

手焙り形土器(82)は、完形個体である。平底碗状を呈する鉢部分に覆部を付した形態をとる。鉢部の口縁は、二重口縁状を呈し、開口部は口縁部を切り取ることにより拡張されている。覆部との接合は、鉢部口縁端部内面に覆部本体を接合し、内面から粘土紐を充填することによって補強されたものと考えられ、接合痕が2条にわたり観察される。覆部には面を有する。面の接合は、覆部の内外面に粘土紐を充填することによって行われる。また、面は2条の突帯をもち、竹管文により加飾される。全体に磨耗が著しいが、覆部外面には細かいヘラミガキ、内面にはハケが観察される。胎土はBである。

器台には、大形器台1点と小形器台3点がある。すべて器形の異なるものである。

大形器台(90)は、稜をもつ深手の受け部のみ遺存する。受け部上半は、ゆるく外反し、口縁端部付近で大きく外反する。内外面とも密なヘラミガキにより調整される。胎土はAである。

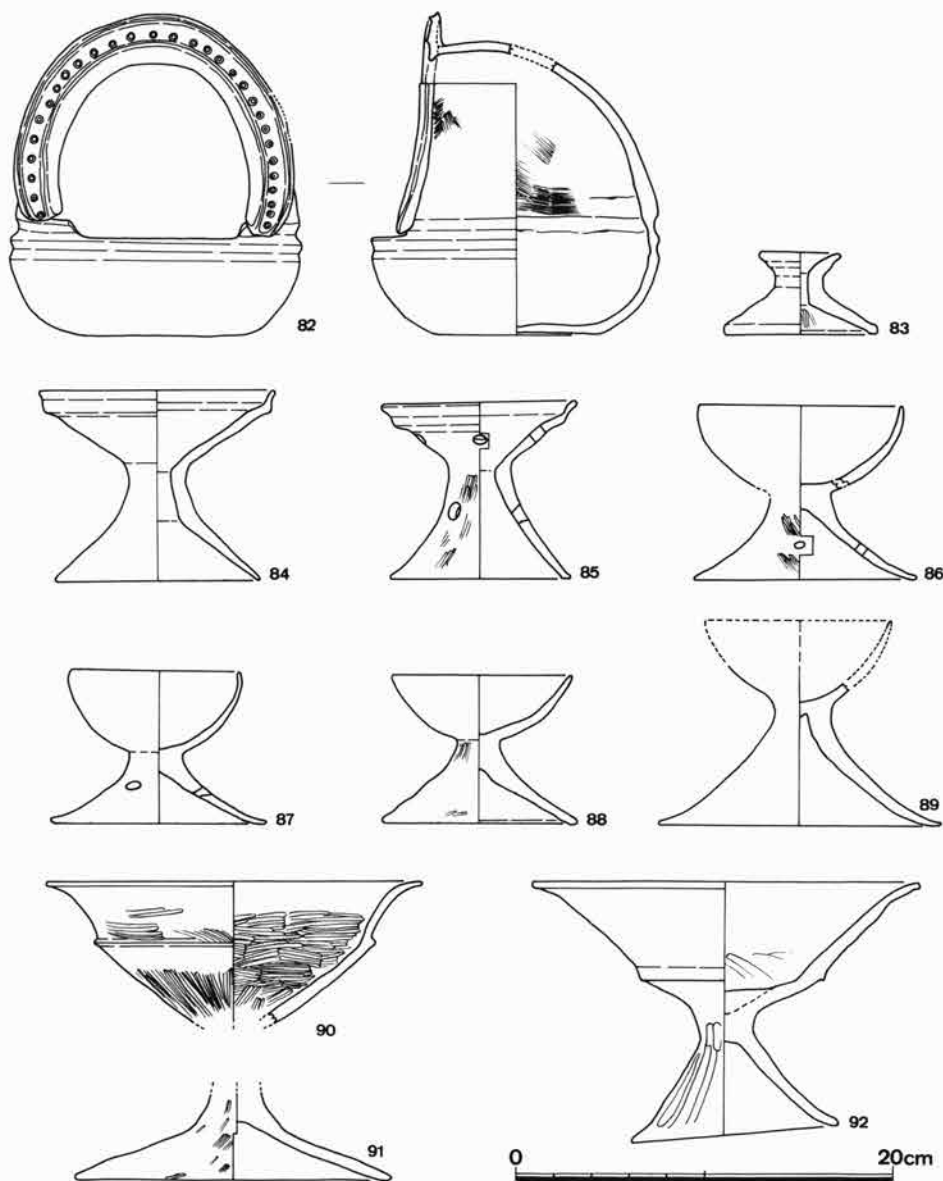
小形器台(83)は、完形品である。弥生土器の蓋に酷似したプロポーションを呈する。磨耗が著しいが、脚部内面には縦方向のヘラミガキが観察される。内外面丹塗りであり、胎土はAである。口径4.0cm・器高4.3cm・底径8.0cmを測る。

小形器台(84)は、受け部が完周するが、その他の部分については破片を図上復原したものである。そのため、スカシの有無については不明。胎土はAである。

小形器台(85)は、完形品である。脚部に3方向、受け部に4方向の円形スカシをもつ。

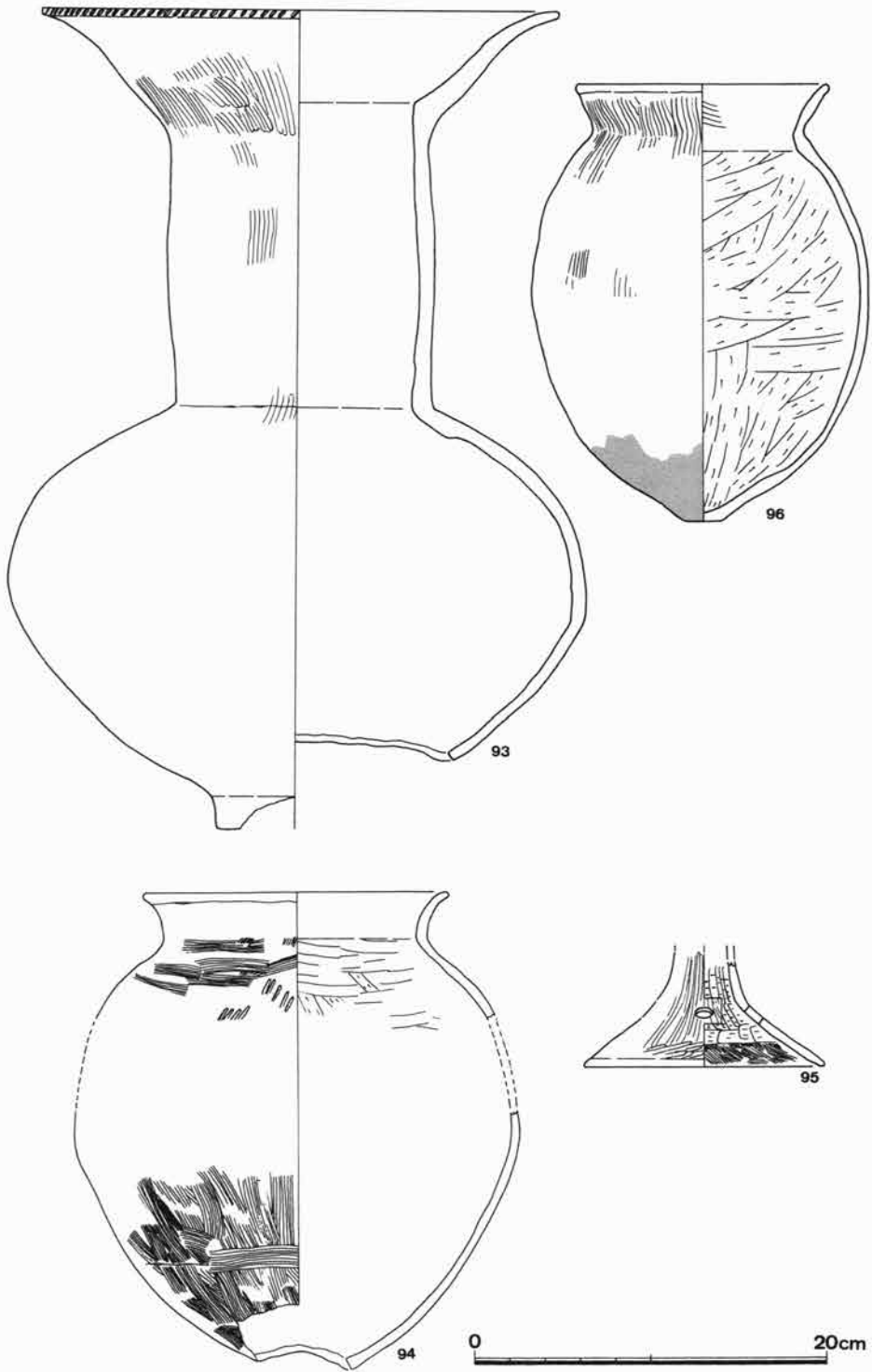
磨耗が著しいが、脚部外面に縦方向のミガキが観察できる。内外面丹塗りであり、胎土はA。口径10.1cm・器高9.4cm・底径9.4cmを測る。

高杯(86・87)は、椀状の杯部に低い脚部をもつ小形高杯である。ほぼ同形同大であり、内外面丹塗りである。調整は、磨耗が著しいが、脚部に部分的にミガキが認められる。胎土はA。法量は、86が口径10.7cm・器高9.2cm・底径11.6cm、87が口径8.9cm・器高

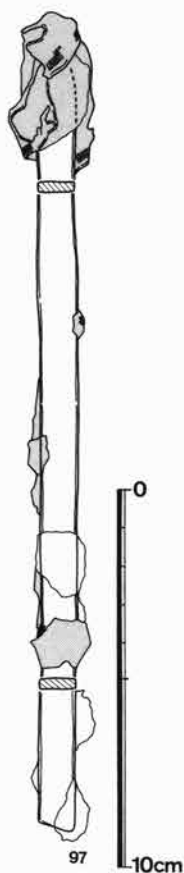


第45図 左坂G12号墳出土遺物実測図(1)





第46図 左坂G12号墳出土遺物実測図(2)



第47図 左坂G12号墳  
出土遺物実測図(3)

8.2cm・底径9.0cmを測る。86で2孔、87で3孔の穿孔が認められる。

高杯(88)は、高杯86・87と同じプロポーシオンを呈するが、胎土Bで異なる。口径9.4cm・器高7.9cm・底径10.0cmを測る。スカシはない。

高杯(89)は、出土時の状況から椀状の杯部を有するものであり、高杯86~88と同形態であるが法量が大きい。また、脚部は中空でありスカシはない。法量は、底径14.0cmを測る。胎土はBであり、胎土中に含まれる砂礫の組成も高杯(88)と酷似する。

高杯(91)は、大きく広がる脚部をもつ。胎土はB。杯部の形態は、同一胎土の破片からみて、椀状になるものと推測される。

高杯(92)は、第2層中から出土した。わずかに垂下する稜をもつ杯部を有し、杯底部の整形は底部円盤充填法による。脚は、短く傘状を呈する。スカシはない。胎土はAである。

壺(93)は、第2層中から出土した。タマネギ状の体部に突出する底部をもつ。頸部は長く、中位がやや膨らむエンタシス状を呈する。口縁部は大きく朝顔状に広がり、口縁端部には刻み目を施す。胎土はBである。底部には、焼成後の穿孔が施される。法量は、口径29.6cm・器高46.5cm・体部最大径32.5cmを測る。

ヤリガンナ(97)は、棺内副葬品である。刃部に布が巻き付いており、刃部の状況は不明である。また、柄部にも布の圧痕が認められる。全長21cm前後と推定される。

**b 第2主体部出土遺物(第46図94・95)** 第2主体部出土遺物には、墓壙上面出土の高杯もしくは器台の甕1点・脚部1点がある。

甕(94)は、細片化しており図上での復原を行った。倒卵状の体部に短く外反する口縁部が付くものと考えられる。底部は、焼成後に穿孔されているため、詳細については不明。体部外面上半はタタキの後横方向のハケ、外面下半には縦方向のハケの後部分的に横方向のハケが認められる。内面は、頸部付近が横方向のヘラケズリ。胎土はBである。

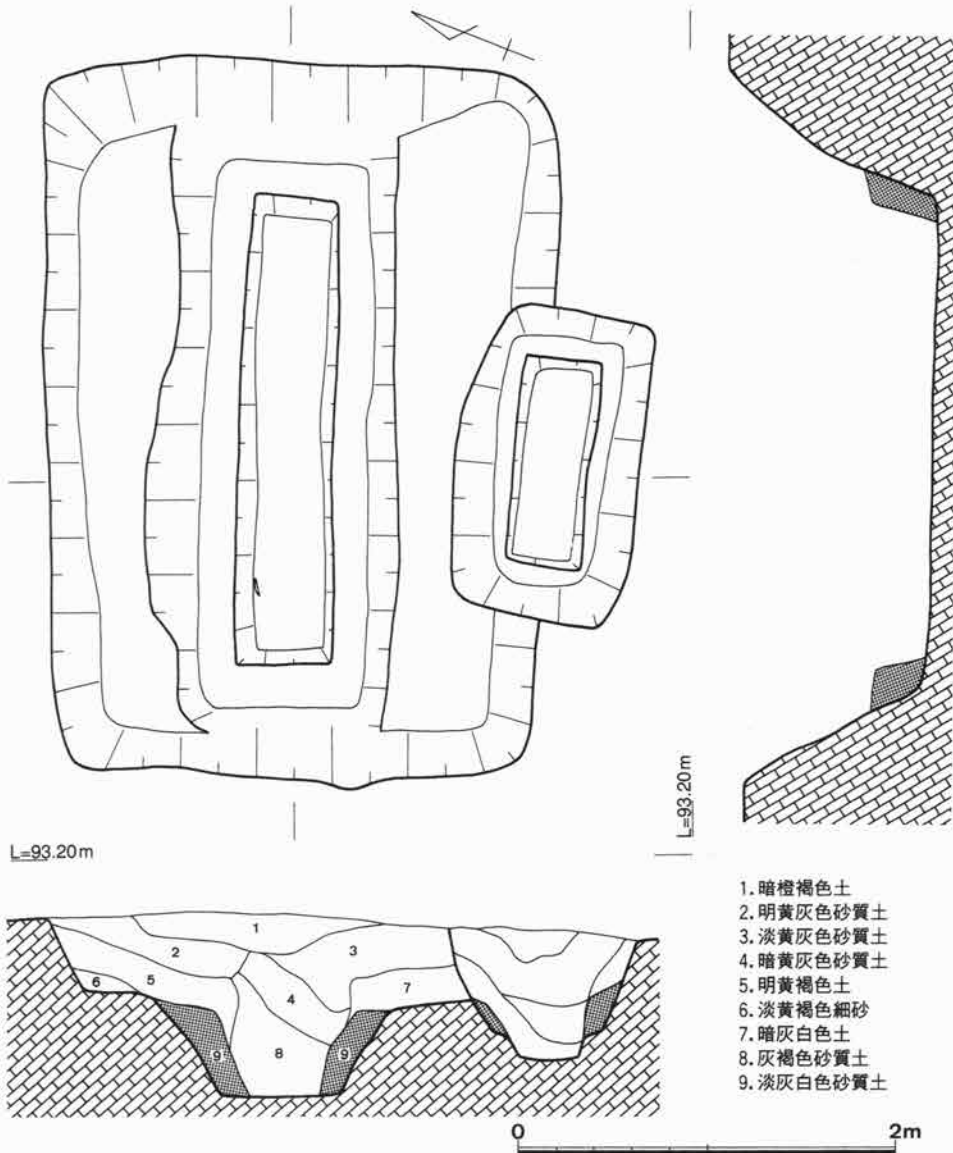
脚(95)は、中空の脚柱部から直線的に広がる脚にいたる。外面はミガキ、内面はハケのケズリを施す。スカシは、現状で2孔が確認できる。胎土はAである。底径13.5cmを測る。

**c 溝内出土遺物(第46図96)** 溝内からは甕1点が出土している。

甕(96)は、長胴気味の体部に短い「く」字状の口縁が付く。口縁端部は、外方向に肥厚し、底部は突出気味の小さな平底である。外面は、縦方向のハケ後下半部をナデで仕上げる。内面は縦方向のケズリ。底部部分に煤が付着する。胎土はBに分類される。口径14cm。

G13号墳

墳丘(第39図) G13号墳は、地山整形によって造り出された方墳であり、盛り土は確認されなかった。墳丘の整形は、尾根の南側に対して北側の方がよりていねいに整形されており、北側に向かっての意識が高いとみられる。また、この古墳の東側は、今回の調査地外となっており、その部分における墳丘の整形状況は全面的には確認できなかった。ただし、墳丘北東側に拡張した部分で溝の存在を確認しており、高位側に溝をもち墳丘の区画



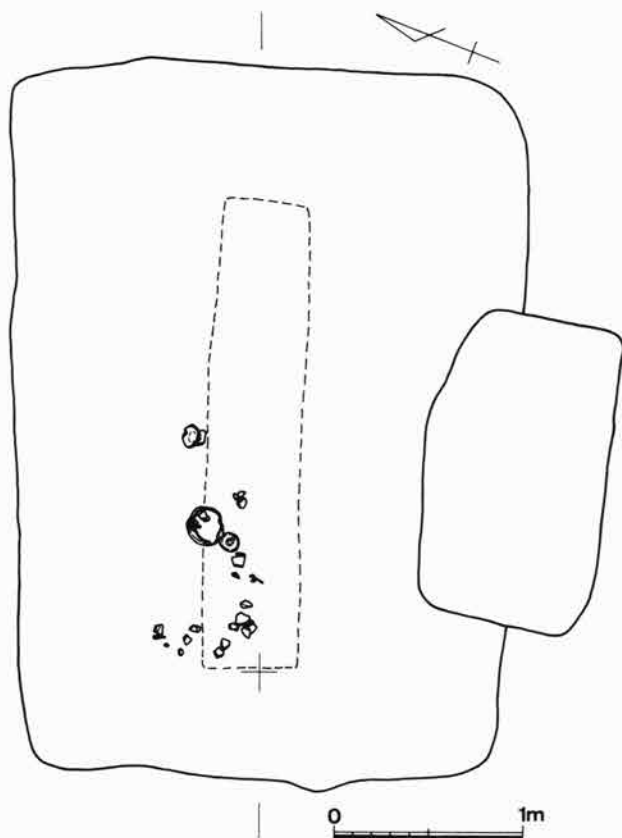
第48図 左坂G13号墳第1主体部実測図

を行っているものと推測される。

G13号墳は、他の古墳より1段高くなったところに位置しており、G12号墳との比高差は1.4mを測る。また、G12号墳側の墳丘斜面部分は、自然地形のまま舌状を呈しており、顕著な整形はなされていない。G13号墳とG12号墳との間の溝が平面弧状を呈するのは、この地形による制約を受けているものと考えられる。墳丘北側斜面は、自然の傾斜面とほぼ同一であり、明瞭な傾斜変換点は認められない。そのため、墳丘基底を明確に造り出していたとは考えがたい。墳丘規模は、溝間距離をとれば東西13m、12号墳側の溝底部からの高さ1.6mを測る。墳頂部平坦面は、東西10.8m・南北6mの規模をもつ。

墳丘出土遺物として、溝埋土内北東側出土の土師器壺(104)がある。地山面直上から細片化した状態で検出されており、溝内に供献されたものが土圧により崩壊したものと考えられる。その他、表土掘削中に高杯脚(101)が出土したが、出土位置から第1主体部に伴う遺物と考えられる。

**埋葬施設** G13号墳では墳頂部で2基の主体部を確認した。双方とも、木棺直葬墓である。



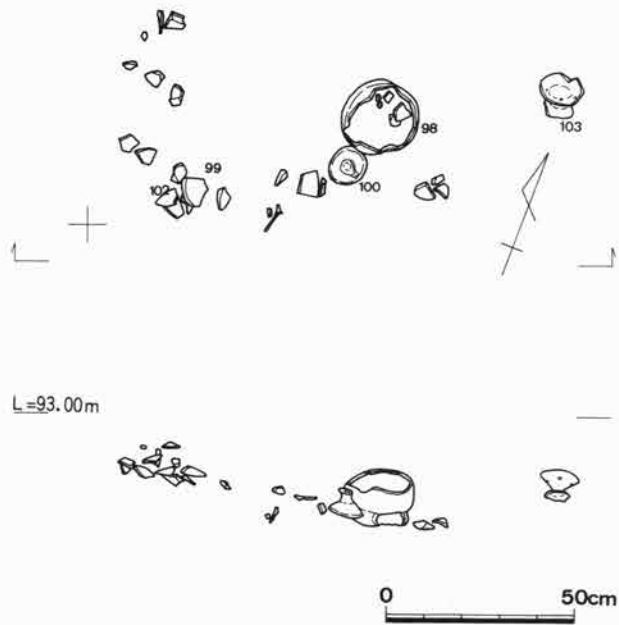
第49図 左坂G13号墳第1主体部遺物出土状況図(1)

この2基の主体部のうち、墳頂部中央に位置するものを第1主体部、第1主体部南側に位置するものを第2主体部とする。なお、第1主体部と第2主体部の前後関係は、切り合いから第1主体部の方が第2主体部よりも早く築かれていることが確認された。

**第1主体部** 第1主体部、は墳頂部中央に位置し、主軸を東西にとる木棺直葬墓である。

**a 墓壇と木棺**(第48図) 墓壇は、平面隅丸長方形を呈し、地山から2段に掘り込んでいる。規模は、検出面で上段が長軸3.8m・短

軸2.7m・深さ0.4mを測る。2段目は、1段目墓壇底部中央に掘り込まれ、小口部分には段を形成しない構造をとる。規模は、短軸1.2m・深さ0.5mを測る。2段目墓壇を約20cm掘り下げた段階で木棺の痕跡を検出した。その形態から、組合式箱形木棺が想定される。木棺痕跡は、長さ2.3m・幅0.3mを測る。また棺内遺物が墓壇底面である地山面直上から検出されており、底材は存在していなかったものと考え得る。また、棺底は、西側の方が高く、被葬者は西側に頭位を置くものと推測される。



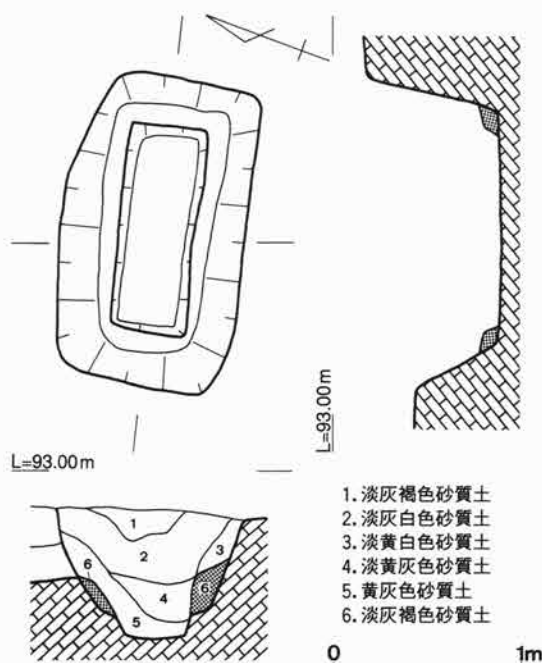
第50図 左坂G13号墳第1主体部遺物出土状況図(2)

**b 遺物出土状況(第49・50図)** 第1主体部に伴う遺物として刀子1点・土師器3点が検出された。

刀子は、切っ先を西に刃部を南側に向け、棺内西北側の棺側部分から検出された。被葬者の頭位付近に置かれたものと考えられる。鼓形器台1点・器台1点・手焙り形土器1点がある。墓壇中央西側にあたる墓壇埋め戻し後の土層(第48図第1層)上面から検出されており、墓壇を完全に埋め戻した後供献されたものと考えられる。土師器の出土状況は、西端に鼓形器台(99)が細片化し散乱していた。器台(102)もこの破片の中から出土している。鼓形器台に近接して、東側より手焙り形土器(98)と高杯脚(100)が検出された。高杯脚は、正位置で出土し、手焙り形土器は逆位で出土している。また、手焙り形土器内の流入土中から底部の破片が出土した。器台(103)は、やや離れて東側から逆位で出土している。

**第2主体部** 第2主体部は、第1主体部の南側に位置し、主軸を第1主体部とほぼ同じく東西にとる小形の木棺直葬墓である。第1主体部墓壇を切っていることから、第1主体部に後出する主体部である。

**a 墓壇と木棺(第51図)** 第2主体部の墓壇は、平面隅丸長方形を呈し、地山から2段に掘り込んでいる。検出面での規模は、長軸1.6m・短軸1.0m・深さ0.5mを測る。墓壇第



1. 淡灰褐色砂質土
2. 淡灰白色砂質土
3. 淡黄白色砂質土
4. 淡黄灰色砂質土
5. 黄灰色砂質土
6. 淡灰褐色砂質土

第51図 左坂G13号墳第2主体部実測図

内出土の土師器壺がある。また、これらの中にはG12号墳同様、胎土Aに分類される個体を含む。

第1主体部上面出土の土師器には、手焙り形土器1点・器台3点・高杯2点がある。

手焙り形土器(98)は、覆部ならびに体部下半の一部分を欠く。体部最大径19.5cmを測る。鉢部は、受け口状口縁の形態を呈し、覆部の接合は覆部を口縁部内面に接合した後、外面に粘土紐を張り付けることによって補強している。体部は、上半部が丸みを帯び、下半部が底部に向かい直線的なプロポーシオンを呈する。底部は、やや上げ底気味の小さな平底を呈する。装飾は、いっさい認められない。調整については、磨耗が著しく不明であるが、体部外面には部分的に横方向のヘラミガキ、覆部内面にはハケが認められる。

器台(99)は、鼓形器台である。細片化しており、図上復原を行った。口径が器高を上回るプロポーシオンを呈し、シャープな稜を有する。外面は横ナデ、脚部内面はヘラ削りが観察される。胎土はAである。口径22.0cm・器高11.7cm・底径17.5cmを測る。

器台(102)は、小形の器台である。受け部の一部を欠く。やや外反する受け部に傘状の脚部を持つ。スカシ穴は認められない。脚部内面にハケによる調整が観察される。胎土はBである。

器台(103)は、小形の器台であり、脚柱部のみ残存する。4方向にスカシが認められる。

2段目は、1段目のほぼ中央に掘られ、第1主体部同様、小口部分には段を持たない構造をとる。規模は、長軸1.2m・短軸0.6m・深さ0.1mを測る。2段目掘形検出とほぼ同レベルで木棺の痕跡を確認した。形態から組合式箱形木棺が想定され、長側板は墓壙2段目に接して組み合わせられ、第6層によって固定されたものとする。木棺部分の規模は、長さ1.0m・幅0.3mを測る。

**b 遺物出土状況** 第2主体部に伴う遺物は、検出されなかった。

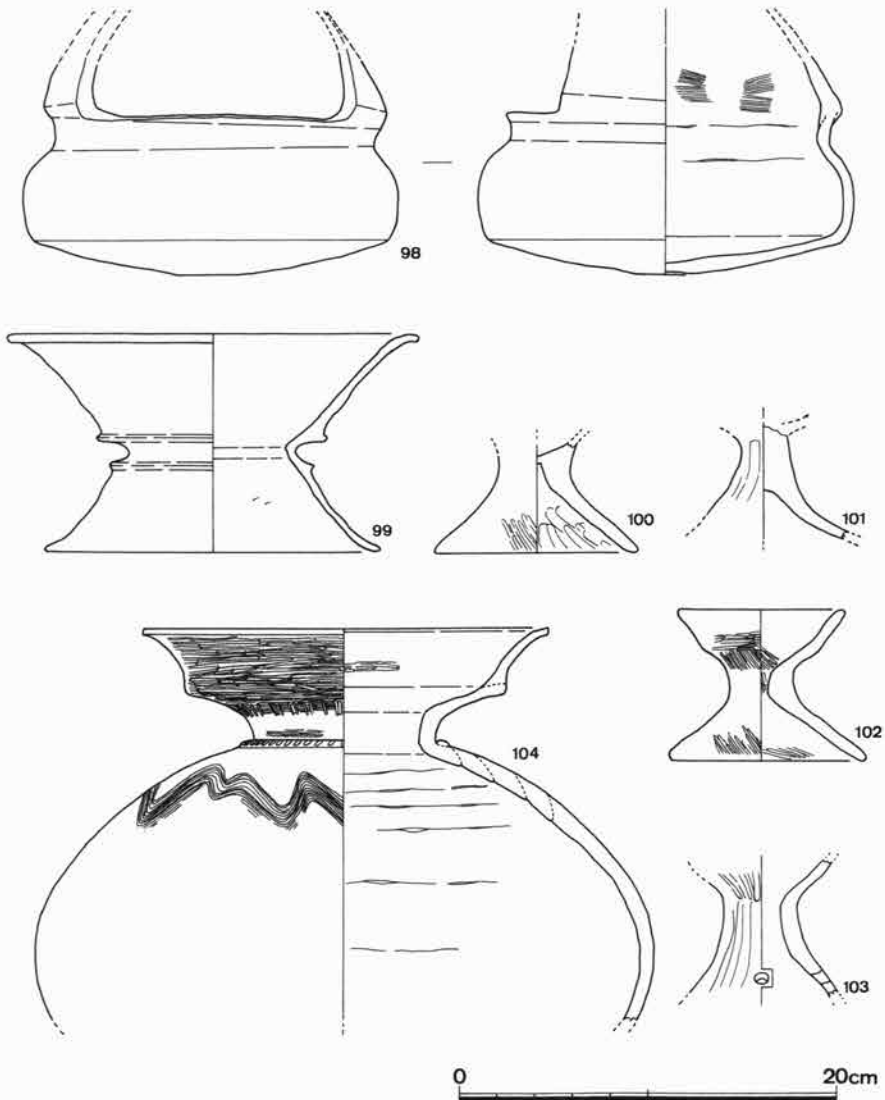
**出土遺物(第52図)** G13号墳に伴う遺物には、第1主体部墓壙上面出土の土師器群、棺内出土の刀子、溝

胎土はAである。

高杯(101)は、中実の脚柱部のみ残存する。器壁の磨耗が著しく、調整などについては不明。胎土はBである。

高杯脚(100)は、短く、脚柱部は中空である。

壺(104)は、高所側溝内から出土した。複合口縁をもつ裝飾壺である。やや直立する短い頸部に大きく外反する擬口縁をつくり、その上部に外反する口縁部を接合している。頸部と体部の間には貼り付け突帯をもち、刻み目により加飾する。体部は、上半部分のみが



第52図 左坂G13号墳出土遺物実測図

残存し、下半部分については不明であるが、体部最大径の位置から見てタマネギ状になるものと推測される。体部上半部分内面には、粘土紐を輪積みした痕跡が明瞭に残っている。また、体部外面には櫛状工具による波状文が施されている。調整については、体部は磨耗が著しく不明であるが、口縁部は内面には極めて密な横方向のヘラ磨き、口縁外面も同様のヘラ磨きである。擬口縁部外面には横方向に密なヘラ磨きを施した後に、縦方向の粗いヘラ磨きをやや間隔を置きながら施している。胎土はBである。

(石崎善久・中村智孝)

## 5. まとめ

今回報告を行った古墳のうち、大宮町教育委員会の調査分とあわせ、ほぼ全容の明らかになったG支群について簡略に問題点の整理・指摘を行い、今年度報告のまとめとしたい。なお、古式群集墳の大規模な調査という点から、古墳群全体に対する問題点の整理・指摘も行うべきであるが、調査・整理も継続中であるため、総括的なまとめは次年度以降に行いたい。

### 左坂G支群について若干の問題点とまとめ

G支群は、当センターでは4基、大宮町教育委員会で残りの9基を調査しているため、ここではこの4基のみを対象とし、若干の分析を試みたい。

G支群出土土器について G12号墳ならびに13号墳からは、中心主体墓壙上面で数多くの土師器が出土している。これらは、その出土状況から、埋葬・墓壙埋め戻し後に供献された土師器群として考えられ、一括性の高い資料として注目される。

13号墳第1主体部の墓壙上出土土師器についてみると、器種には手焙り形土器、鼓形器台、小形器台が確認される。12号墳第1主体部の土師器には手焙形土器、器台、高杯、壺が確認される。また、G12号墳第2主体部にはタタキをもつ甕が認められることも注意される。

これら、G13・30号墳から出土した土師器は、大宮町裏陰遺跡A1・B1区包含層出土遺物や、<sup>(注6)</sup>峰山町古殿遺跡<sup>(注7)</sup>などにみられる定型化した布留式土器が丹後半島に出現する以前のものとする。また、小形高杯・器台など、小形精製器種の出現、擬凹線文を施した器り形の消失など、弥生的土器様相の消滅以降の様相を示していると考えられる。また、手焙り形土器は、その存続期間が庄内式～布留式古段階に限定されると考えられていることや、タタキ技法の確認される甕の存在から、当土師器群の年代もこれから大きくずれるものではないと考える。

京都府北部で出土した墳墓出土土師器と比較すると、擬凹線文を施す台付壺や器台、河



内産庄内式土器と考えられる加飾壺を含む白米山北古墳出土土器よりは擬凹線を施す器種が消失しており、新しい様相として捉えることができる。白米山北古墳とよく似た様相を示す土器群として、内和田5号墳SX05出土土器<sup>(注8)</sup>があげられる。擬凹線をもつ器台や、山陰系と考えられる低脚杯や壺とともに小形の精製器台が出土している。小形精製器種の出現を考える上で注目される。一方、定型化した布留式土器は、墓域を同じくする左坂古墳群B支群から小形丸底壺や布留式甕が出土しているほか、青木Ⅶ期併行段階として位置づけられた網野町妹古墳出土二重口縁壺<sup>(注9)</sup>と類似する二重口縁壺が出土していることから、布留式中段階には丹後半島にも布留式土器が普及していると思われる。

また、手焙り形土器は、その機能・用途など不明な点の多い土器であるが、その分布圏は東は千葉・北陸、西は瀬戸内沿岸地域から北部九州・山陰地域に及ぶ。小竹森直子氏の集成・分類<sup>(注11)</sup>によれば、手焙り形土器はその母体となる鉢部分の形状により、大きく2つに大別されている。氏の分類に従えば、左坂古墳群出土の手焙り形土器は、I類とされた受け口状口縁系に分類され、近江周辺地域に分布の中心をもつ。本例は、鉢部分の在地化・簡略化が進んだ形態をとるものと考えられ、手焙り形土器の中でも新しい様相を示すものと考えたい。

以上の諸点から、左坂G12・13号墳出土土師器は、おおむね布留式古段階以前に併行する土器群として考えておく。近い様相を呈する墳墓資料としては、福知山市寺ノ段2号墳<sup>(注12)</sup>の小形高杯や、弥栄町大田南5号墳出土の高杯<sup>(注13)</sup>などを同形態のものとしてあげることができる。

また、左坂古墳群出土土器は、弥生後期末葉の擬凹線を主体とするような土器群や、白米山北古墳・内和田古墳群出土土器などから、在地内部で自立発展的に出現してきた土器とは考えにくい。こうした土器群の出現してくる背景や系譜問題など、今後検討していく必要があるものと思われる。

その他、G支群出土土器に存在する注目すべき一群の土師器として、極めて特徴的な胎土をもつ個体が一定の割合で存在している。胎土Aとして今回報告したものであり、胎土中に高温石英を含む。また、胎土を破碎し、実体顕微鏡によって観察を行った結果、高温石英結晶には磨耗が観察され、ある程度ローリングされた後に胎土中に混入したものと判断される。当センター調査員の田代 弘氏の分布調査によれば、この高温石英は、丹後半島では網野町琴引浜付近などで採集される。同様の高温石英を含む胎土をもつものとして、網野町遠所古墳群・弥栄町大田南5号墳などを実見する機会を得て、今後類例も増加するものと思われる。

墳丘について G支群で調査した4基の古墳は、基本的に平面方形を意識した方形墳で

ある。明瞭な盛り土による築成は行われず、墳丘を区画する溝と地山削り出しによって視覚的な墳丘を造り出しており、弥生時代の墳丘墓と基本的な構造は変わらない。規模は、自然地形に大きく制約を受けているためか、長軸方向は若干の規模の差異はあるものの、短軸の大きさはほぼ一定であり、墳丘から大きな相違点を見つけることはできない。

**埋葬施設について** G支群で検出された埋葬施設は、G10号墳第2主体部が土壙墓と考えられる他はすべて木棺直葬墓であった。木棺は、いずれも箱形木棺と判断され、くり抜き系の木棺は認められない。埋葬施設のあり方についてみると、どの墳墓も最初に墳丘平坦面中央に大形の木棺墓が埋葬され、それを切る形、あるいはその周辺に小形の木棺墓が配置されている。

墓壙の形状は、大形の木棺墓が2段墓壙、小形の木棺墓が素掘りの墓壙という共通性を持っている。また、副葬品の認められるものは、大形の木棺墓に限定され、中心の主体部と周辺の主体部間に格差を認めることができる。

このように、G支群の埋葬施設は、明瞭な中心主体部とそれに付随する小形の主体部によって構成される。主体部の数は、2基あるいは3基であり、先端に分布する弥生墳墓とはあきらかに様相を異にしている。このことは、墳墓に埋葬される成員が限定されていることを示しているものと考えられる。また、大形の埋葬施設は、成人の伸展葬が充分想定されるのに対して、小形の埋葬施設では成人の伸展葬はまず不可能であり、小児埋葬を想定しておきたい。

以上のように、G支群では古墳時代初頭頃の墳墓の実態を明らかにすることができた。丹後半島に蛭子山1号墳など大形の前期前方後円墳が出現する以前の資料として評価することができるが、当該期墳墓は近年の調査で調査数が増加してきているとはいうものの、その数はまだ少数である。今後、さらに調査数の増加、資料の蓄積が予測され、詳細な土器編年の確立など、基礎的作業が必要とされるものと考ええる。

(石崎善久)

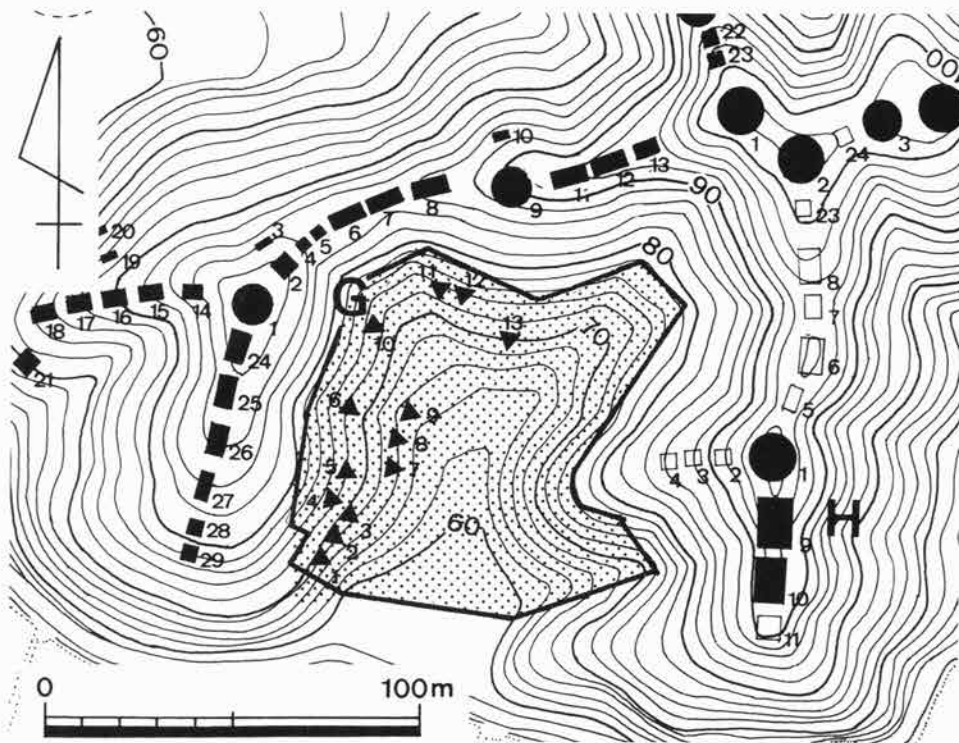
(2) 左坂横穴群(B支群)

1. はじめに

左坂横穴群(B支群)は、中郡大宮町字周枳小字左坂に所在する横穴群である。本横穴群が所在する丘陵は、丹後半島最大の河川である竹野川中流域の右岸に位置する。この丘陵は、東西方向にのびる主尾根に対して南北方向へいくつもの支尾根を分岐しており、本横穴群も主尾根から南へ向かってのびる2つの支尾根に挟まれた谷部分の西側丘陵の東斜面に位置している。

昨年度、京都府教育委員会が調査を実施した左坂横穴群(A支群)<sup>(注14)</sup>は、本横穴群が位置する谷の西隣りの谷に所在する。また、調査地周辺には、有明横穴群・大田鼻横穴群・里ヶ谷横穴群<sup>(注17)</sup>などがあり、丹後地域でも横穴群が集中している地域として注目される。

なお、今回の調査は、丹後国営農地開発事業の周枳団地造成工事に先立ち実施したものである。



第53図 調査地周辺地形図

## 2. 調査経過

現地調査は、平成5年5月11日から重機による表土掘削を開始した。表土掘削は、左坂横穴群が分布すると思われる西側尾根の東斜面をはじめ、谷の最深部や東側尾根の西斜面の標高65～76mの範囲について実施した。さらに、5月18日からは人力による精査も開始した。その結果、西側尾根の東斜面及び谷の最深部の斜面で、遺存状態の良い横穴13基と火葬墓1基を確認した。なお、東側尾根の西斜面では、横穴をはじめとする遺構の存在は確認されなかった。

検出された横穴の大半は、東に向かって開口しており、周辺地域の横穴群が、ほぼ南向きに開口しているのに比べ、やや特異である。横穴群は一部を除き、後世の攪乱を受けていないため、人骨や須恵器・土師器などを良好な状態で検出することができた。一方、平安時代末頃に再利用されていることが確認されたB9号横穴では、玄室内から多数の黒色土器が出土し、当該期の良好な資料が得られた。また、焼骨を埋納するために築造されたと思われる小規模な横穴が検出された。

各横穴の概要を知り得た8月6日には現地説明会を実施し、約80人の参加を得た。その後も遺構実測・写真撮影などを行い、平成5年8月30日にすべての現地作業を終了した。最終的な調査面積は、約4,200㎡となった。

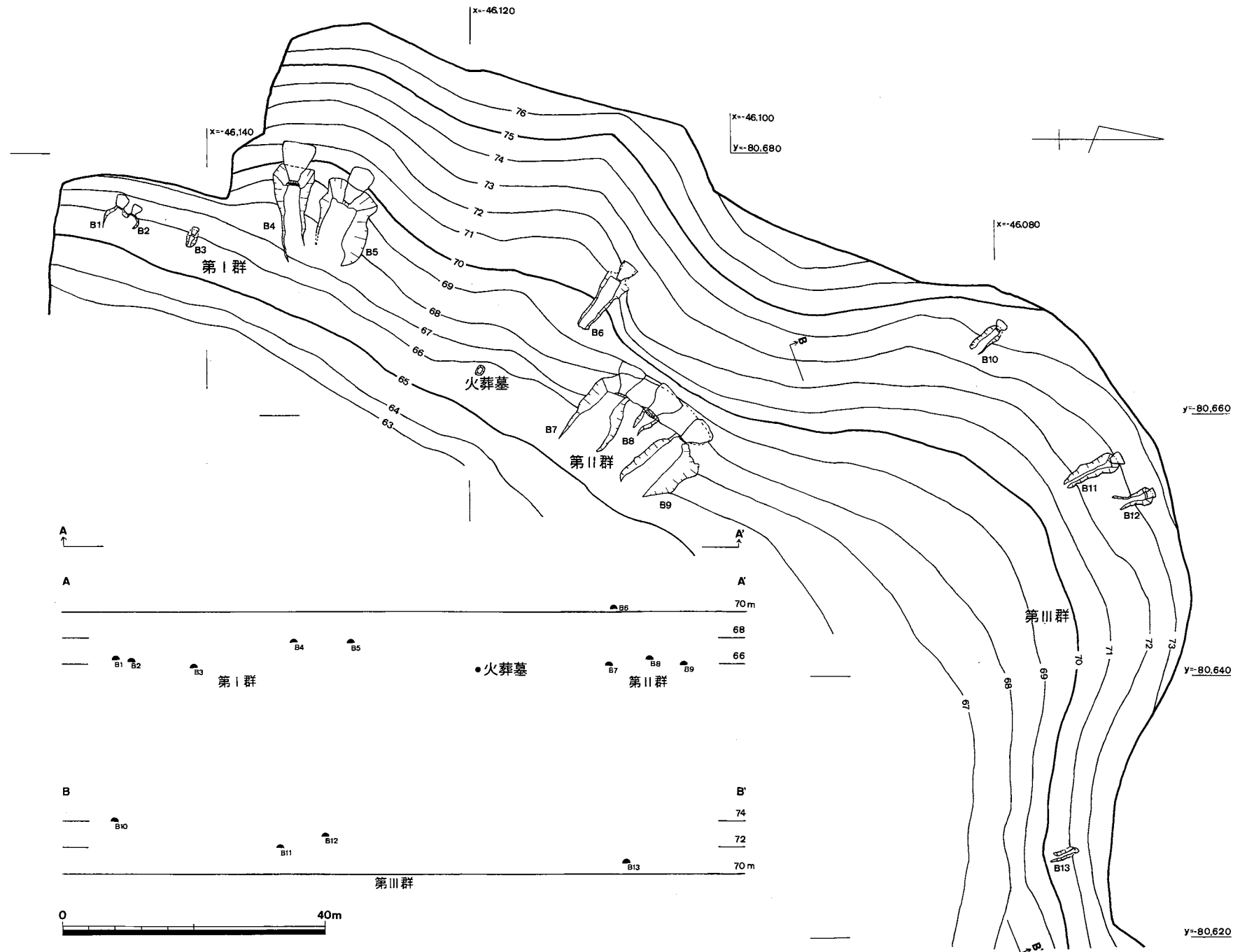
なお、各横穴は、調査を実施した順に1～13号横穴と番号を付し、現地説明会などでもその番号を使用した。今回の報告にあたっては、谷の入口側、すなわち最も南西に位置する横穴から順に時計回りに新番号を付すことにした。また、左坂横穴群のB支群であることから各横穴番号の前にBを付してB1号横穴、B2号横穴というように呼称することにした(新旧の番号対象は付表4を参照)。

## 3. 横穴群の分布状況

左坂横穴群(B支群)は、今回検出された13基の横穴から構成される横穴群である。各横穴は平面的・垂直的な分布状況から、大きく3支群に分けることができる(第54図)。

第I群は、B1～B5号横穴の5基からなる。調査地の最も南寄りに位置し、南北約20m・標高65.7～67.6mの範囲に分布する。5基の横穴のうち、B1・B2号横穴とB4・B5号横穴は、それぞれ小グループを形成するが、B3号横穴は両者の中間地点に単独で位置する。B1・B2号横穴は、前庭部を共有して築造されており、注意される。これに対してB4・B5号横穴は、小さな谷状地形に隣接して築造されているが、前庭部は完全に分離されている。

第II群は、B6～B9号横穴の4基からなる。南北約10m・標高65.9～70.2mの範囲に



第54図 左坂横穴群(B支群)地形測量図及び遺構配置図

分布し、横穴の密集度は他の2群に比べ高い。B6号は、単独で位置し、B7～B9号横穴の3基が小グループを形成する。B7～B9号横穴は、小さな支尾根状地形の先端に非常に近接して築造されている。各横穴は、個別に前庭部を有するが、B4・B5号横穴のように完全に分離されているわけではない。また、出土遺物から、中央の横穴が先行して築造され、他の2基の横穴の築造に対して規制を与えたと考えられる。

第Ⅲ群は、B10～B13号横穴からなる。谷の最深部に位置し、東西約40m・標高70.7～74.0mの範囲に分布する。B11・B12号横穴は、隣接して築造されているが、両者の位置関係が先述の小グループほど関連性がなく、単独で営まれた横穴が近接して築造されたと考えられる。このため、第Ⅲ支群の横穴はいずれも単独で営まれたと思われる。

以上のような平面的・垂直的な分布状況とともに、注目すべき点として各横穴の玄室規模の違いがあげられる。13基の横穴は、玄室長が2mを超えるものと、1m未満のものに分けることができる。これらを便宜的に、玄室長2m以上のもの=A類、玄室長1m未満のもの=B類とする。

A類は、玄室の床面プランがいわゆるフラスコ形を呈する。B4・B5・B7～B9号の5基が相当し、前2者と後3者がそれぞれ小グループを形成する。B類は、玄室の床面プランが台形を呈するもの、あるいは不整形な五角形を呈するものなど、形態は統一されていない。B類は8基あるが、B1・B2号横穴が小グループを形成するのみで、単独で分布するものが大半である。また、B1・B2・B6号横穴から焼骨が出土している。

これら横穴の規模と、先ほどの分布状況を関連させると、特に第Ⅲ群は、いずれもB類の横穴から構成されており、注意される。第Ⅱ群は、A類の横穴3基に加え、B類でも大型の部類に属し、玄室平面形もフラスコ形を呈するB6号横穴から構成されることから、比較的大型の横穴から構成されている。第Ⅰ群は、A類の横穴2基、B類の横穴3基と比較的バランスがとれている。

この他にも、蔵骨器を納めた火葬墓や弥生時代の溝状遺構などを検出している。また、皿状の落ち込みから、万年通寶(初鑄760年)が出土している。

なお、以下の遺構図では、方位はいずれも座標北を示すものとする。

#### 4. 各横穴の調査概要

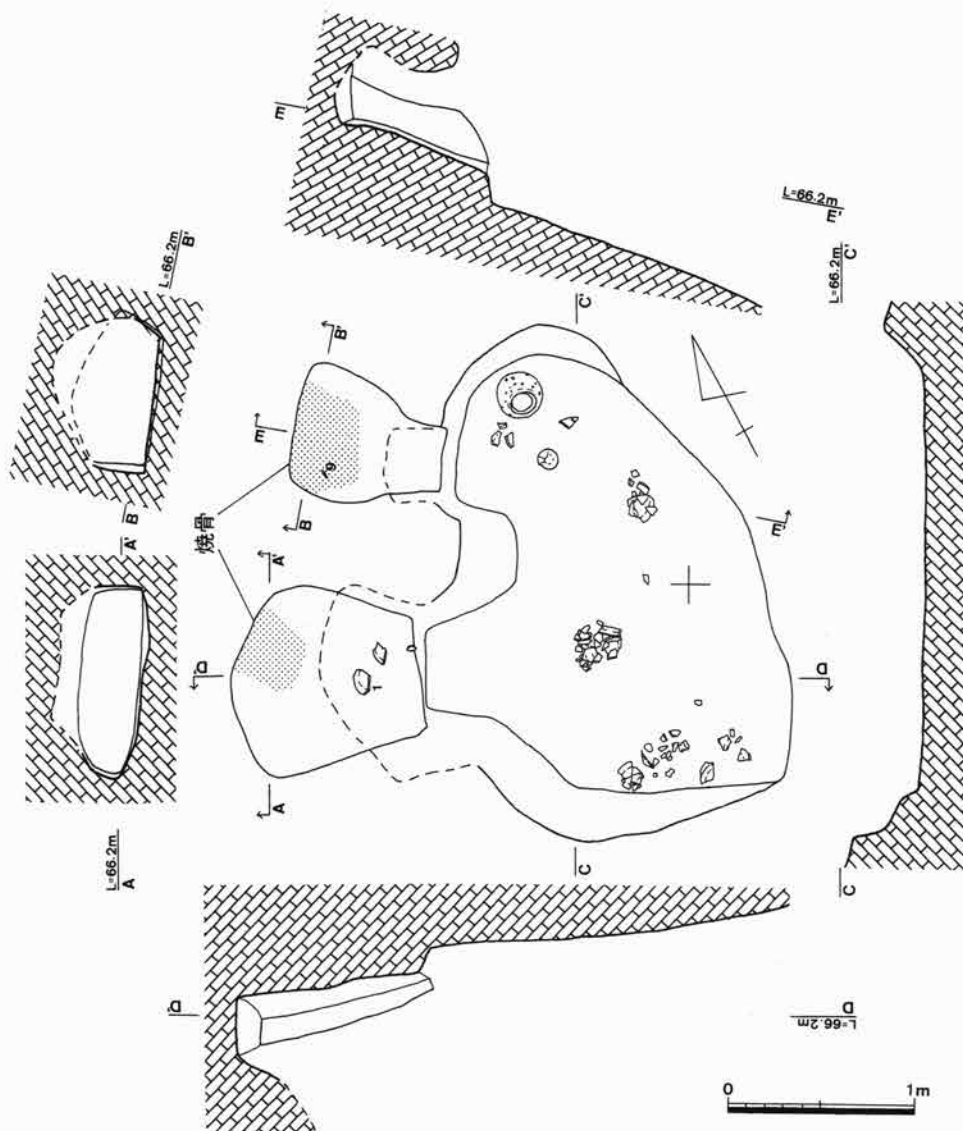
##### ①B1号・B2号横穴

位置と構造(第55図) 左坂横穴群(B支群)中、最も南寄り(谷の入口寄り)に位置する。検出当初は、天井部の崩落した大型の横穴を想定していたが、埋土の除去後に小規模な玄室を2基確認し、南側の玄室をB1号横穴、北側の玄室をB2号横穴と名付けた。また、

当初、玄室と想定していた部分が前庭部であることも判明し、B 1号横穴とB 2号横穴は前庭部を共有していることが明らかになった。

両横穴は、B類に属する小規模な横穴である。B 1号横穴は、玄室平面形がややいびつな五角形を呈する横穴である。開口部の標高は66.2m、主軸はN-63°-Wを測る。玄室の横断面形は、天井部が崩落しているものの、奥壁・側壁の残存状況からカマボコ状を呈すると思われる。玄室と前庭部の比高差は約14cmを測る。床面積は1㎡に達しない。

B 2号横穴は、B 1号横穴に接して営まれた横穴である。玄室の平面形は、フラスコ状



第55図 B 1・B 2号横穴実測図

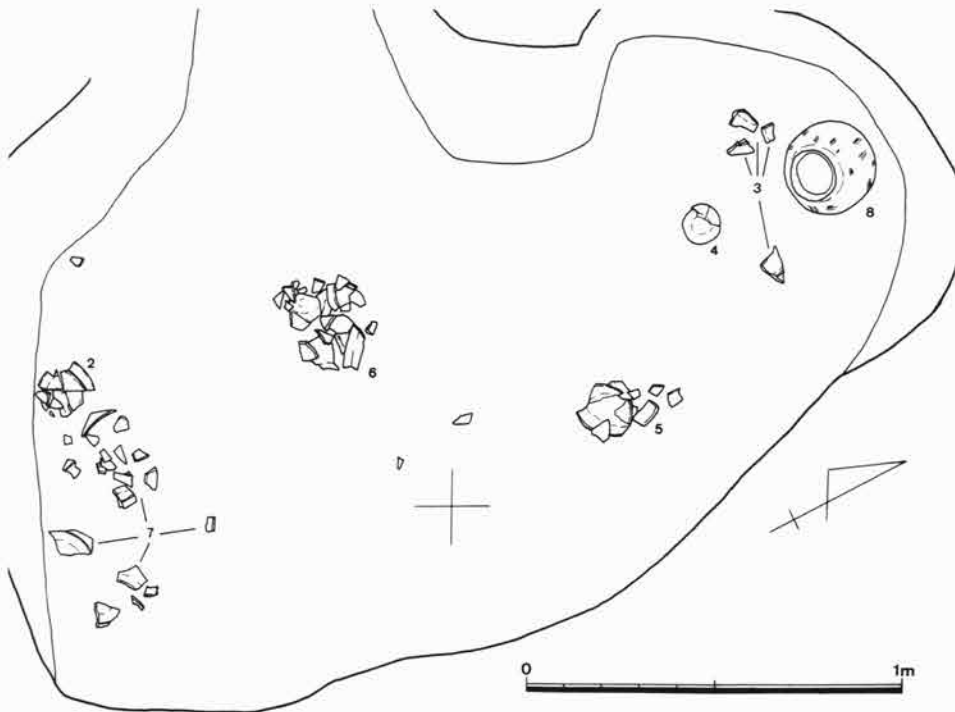
に近い。開口部の標高は65.6mを測り、B1号横穴とほぼ同じである。主軸はN-52°-Wを測る。床面積は、B1号横穴よりも小さく、0.4m<sup>2</sup>を測るにすぎない。玄室の横断面形は、天井部が崩落しているものの、奥壁や側壁の残存状況からカマボコ状を呈すると思われる。玄室と前庭部の比高差は約14cmを測る。

B1・B2号横穴が共有する前庭部は、ややいびつながら広い「コ」の字状の空間を有すると思われる。また、両横穴の間には突起状に掘り残したと思われる部分があり、これによって両横穴は、玄室直前の空間を分割していると考えられる。B1号横穴は、短い羨道状のものになっている。これに対して、B2号横穴では北側にやや拡張した「コ」の字状の前庭部をもつ。

両横穴の玄室の閉塞方法は、不明である。

遺物の出土状況(第56図) B1・B2号横穴からは、須恵器・土師器・焼骨などが出土した。両横穴とも、玄室内から焼骨を検出したが、玄室内出土の遺物はわずかであった。B1号横穴からは、土師器杯1点(1)が出土している。B2号横穴からは、鉄鏃の茎1点(9)が出土したほかに、遺物は検出されなかった。

両横穴は前庭部を共有しているが、出土した遺物は、その出土状況からある程度帰属すると思われる横穴を推定することができる。すなわち、2・6・7はB1号横穴に属し、

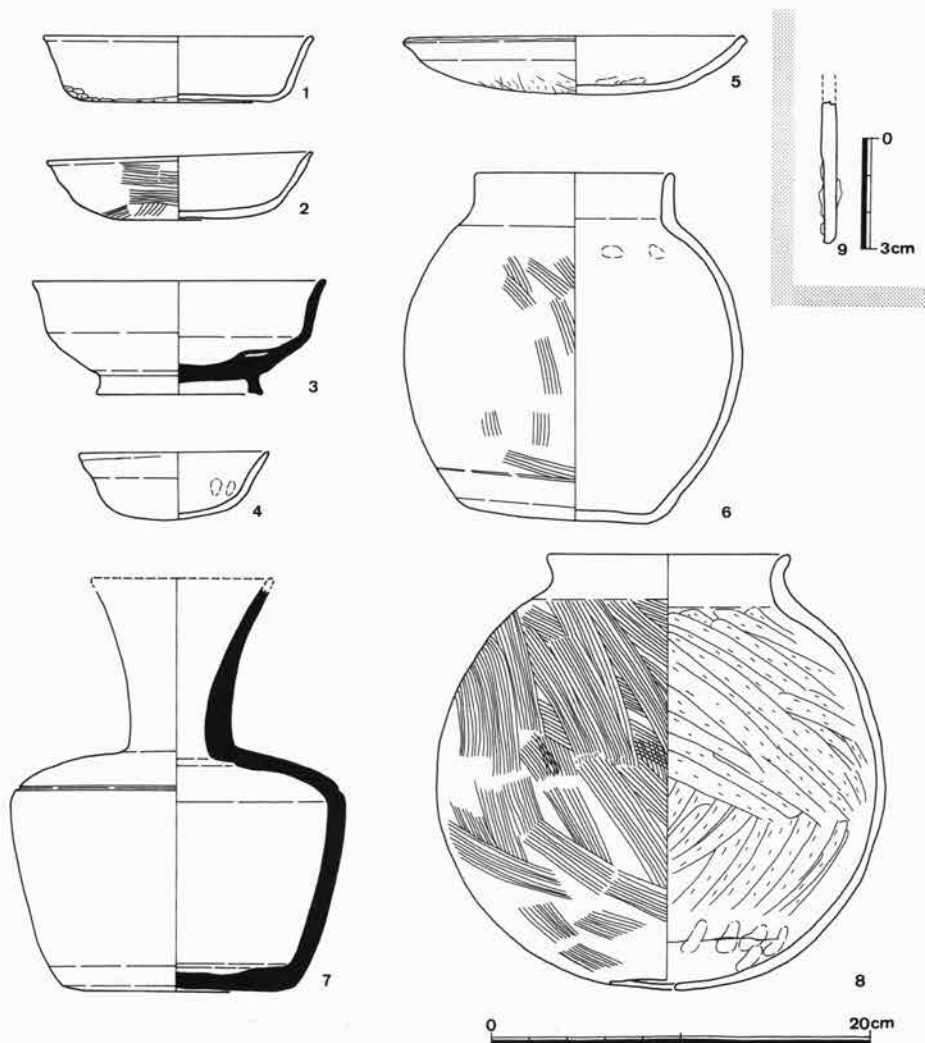


第56図 B1・B2号横穴前庭部遺物出土状況図



4・5・8はB2号横穴に属するものと考えられる。3は、床面から約20cm遊離した状態で検出されているが、B2号横穴に属すると思われる。なお、他の遺物はいずれも、床面直上で検出された。

土師器杯(2)と須恵器長頸壺(7)は前庭部南側に置かれていた。ほぼ原位置を保っている杯(2)に対して、長頸壺(7)はかなり細片化した状態で出土している。土師器壺(6)は、前庭部の中央、B1号横穴の正面に置かれており、原位置を保っていると考えられる。ほぼその場で破損したと考えられる。土師器杯(4)・甕(8)は、B2号横穴正面の前庭部北西隅付近に置かれていた。甕(8)は完形で出土したが、この空間はB2号横穴が専有的に占める前庭部と考えられる。土師器皿(5)は、前庭部の中央やや北寄りで検出された。そ



第57図 B1・B2号横穴出土遺物実測図

の出土位置からB2号横穴に属すると思われる。

出土遺物 B1・B2号横穴出土遺物には須恵器2点、土師器6点、鉄製品1点がある。

a. 須恵器(第57図) 3は、体部中位で大きく屈曲し、口縁部が外反する杯である。口径15.6cm・器高6.0cmを測る。高台を有する。7は、長頸壺である。口縁端部を欠くが、残存高21.2cmを測る。また、底部径12.2cm・体部最大径17.6cmを測る。肩部に1条の沈線を施す。底部にはケズリがみられる。高台を有さない。

b. 土師器(第57図) 1は、平底の杯である。直線的な体部に、わずかに外反する口縁部をもつ。底部外面にケズリ風のミガキを施す。口径14.3cm・器高3.5cmを測る。2も平底風の杯である。1に比べるとわずかに丸味を帯びる。口径14.1cm・器高3.65cmを測る。1・2は、赤橙褐色を呈する。4は、底部がやや丸味を帯びる杯または椀である。わずかに屈曲して外反する口縁をもつ。口径10.6cm・器高3.7cmを測る。淡橙灰色を呈する。5は、底部が丸味を帯びる土師器皿である。底部外面にケズリを施す。また、口縁端部は面をなす。口径17.8cm・器高3.2cmを測る。淡灰褐色を呈する。

6は、口縁部が直立し、平底を有する土師器壺である。口径10.1cm・器高18.4cm・底径9.6cmを測る。第79図にみられる須恵器短頸壺(55)を模倣したものかと思われる。外面は体部ハケ調整の後、口縁部及び底部をナデ調整で仕上げる。体部内面はケズリの後、ていねいなナデによって仕上げている。赤橙褐色を呈する。8は、ほぼ球形の体部に短く外反する口縁をもつ甕である。口径12.4cm・器高22.8cm・体部最大径23.6cmを測る。外面をハケ調整、内面をケズリで仕上げる。底部中央に焼成後穿孔を行う。

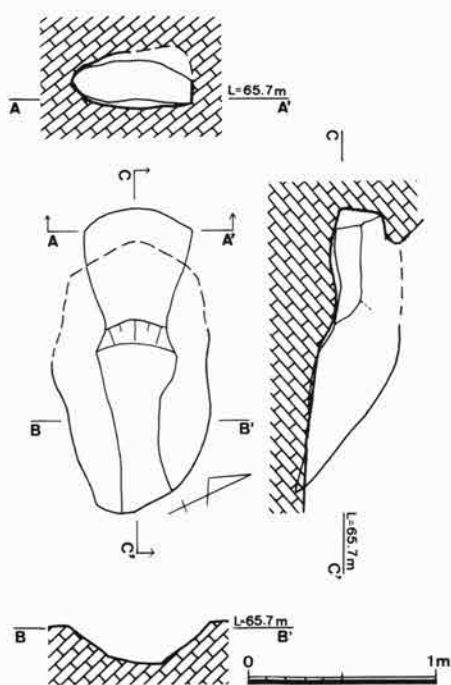
c. 鉄製品(第57図) 9は、鉄鏃の茎と思われる。残存長3.9cmを測る。B2号横穴玄室内の出土である。

## ②B3号横穴

位置と構造(第58図) B3号横穴は、B1・B2号横穴から北北東に約10mの距離において単独で存在するB類の横穴である。玄室・前庭部とも完全に埋没しており、検出当初は土坑と想定していたが、意外にも小規模な横穴であった。こうした小規模な横穴は、例外的に存在するのかと考えられたが、調査の進展に伴って、左坂横穴群(B支群)においてはむしろ多数を占める存在であることが明らかになった。

開口部の標高は約65.5mを測り、B1・B2号横穴よりも約0.7m低い。横穴の主軸はN-65°-Wを測る。

B3号横穴は、玄室と前庭部から構成される。玄室の平面形は、奥壁側がやや広い台形状を呈し、玄室の床面積は0.5m<sup>2</sup>しかない。天井部は、崩落しているものの、奥壁や側壁



第58図 B 3号横穴実測図

の残存状況は良好で、玄室の横断面形はカマボコ状を呈すると思われる。

前庭部は、断面逆台形の墓道状になる。玄室と前庭部の比高差は約10cmを測るが、明確な段差とはならず、ゆるやかなスロープ状になる。玄室の閉塞方法は不明である。

なお、この横穴からは、遺物・人骨などは出土していない。

### ③ B 4号横穴

位置と構造(第60図) B 3号横穴の北約8mに位置するA類の横穴である。開口部の標高は67.6mを測り、B 1～B 3号横穴よりも1.5mほど高所に位置する。主軸はN-82°-Wを測り、ほぼ真東に開口する。前庭部は、自然流入土によって完全に埋没し

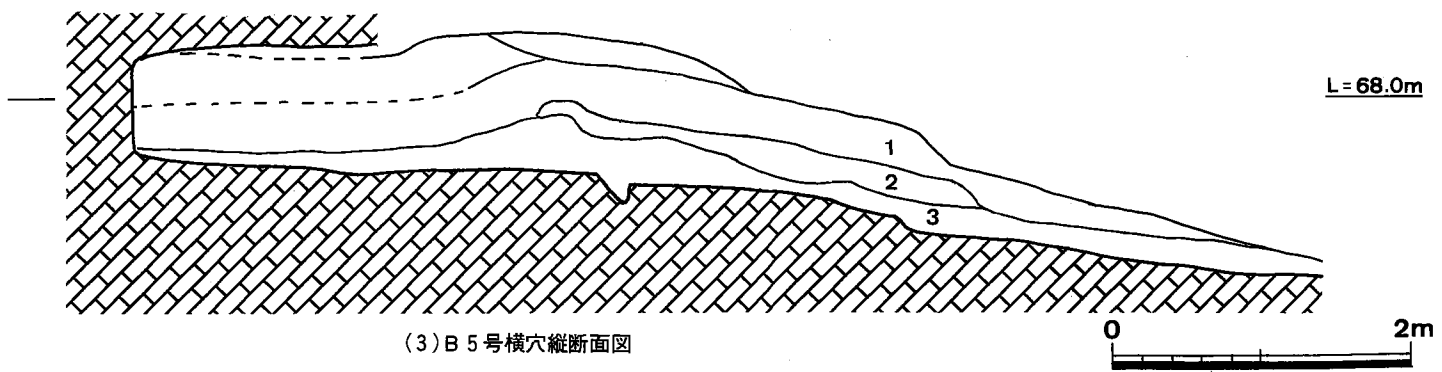
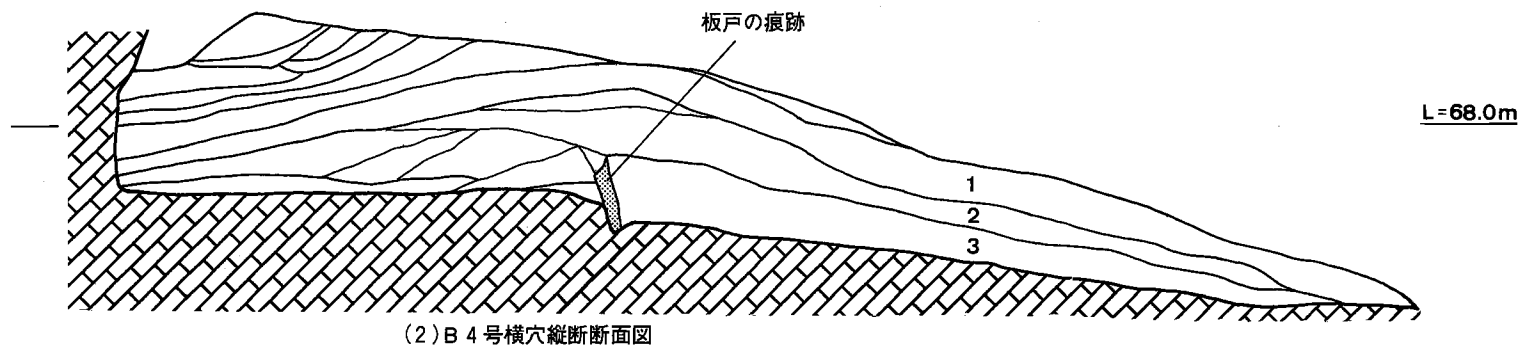
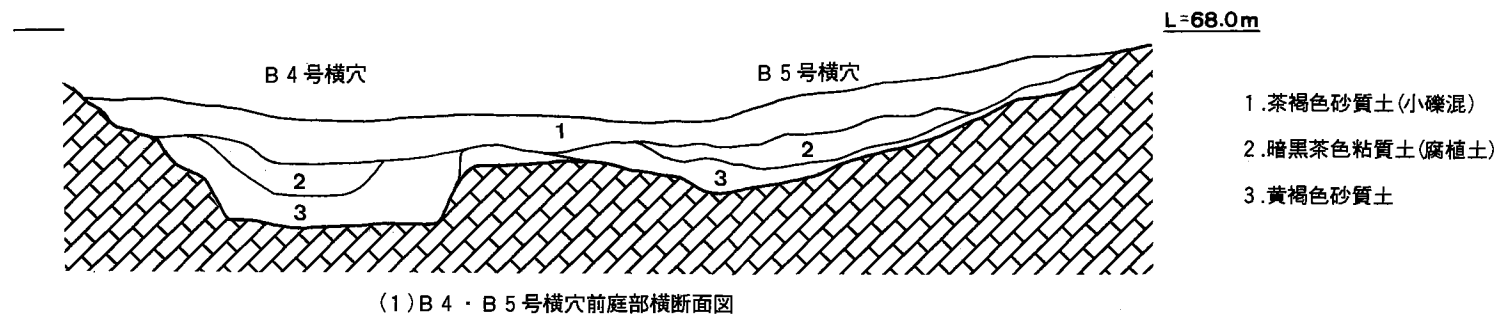
ていた。玄室内には、天井の崩落土と自然流入土が交互に堆積していたが、完全には埋没しておらず、若干の空洞が存在した(第59図(2))。

横穴は玄室と前庭部から構成される。玄室の平面形は、いわゆるフラスコ形を呈する。玄室の床面積は5.0㎡で、左坂横穴群(B支群)中最大値を示す。玄室内の堆積土を除去すると遺物が検出された。天井部は崩落していたが、奥壁や側壁の残存状況は良好であった。このため、玄室の横断面形はカマボコ状を呈していたものと推定される。

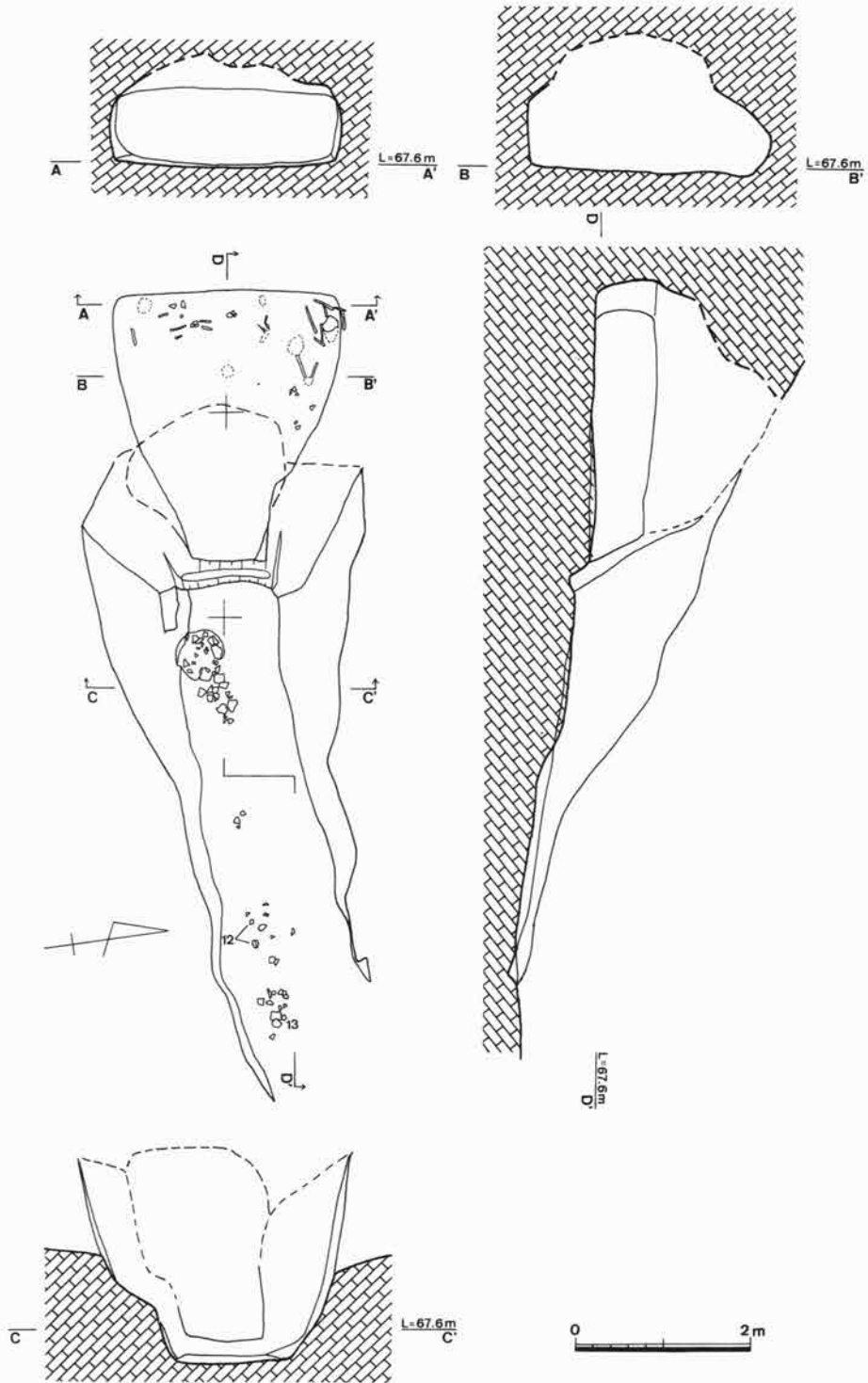
前庭部は、断面形が逆台形の墓道状を呈する。全長6.1m・幅1.3m、側壁高も最大約1.5mを測り、狭隘な前庭部である。前庭部の主軸は、玄室のそれと一致しない。

玄室の閉塞は、玄門部と前庭部の境に設けられた溝に、板戸をはめ込む方法で行われたと考えられる。なお、この部分に設定した土層確認用のセクションにおいて、板戸の痕跡と思われる土色の変化を確認した(第59図(2))。

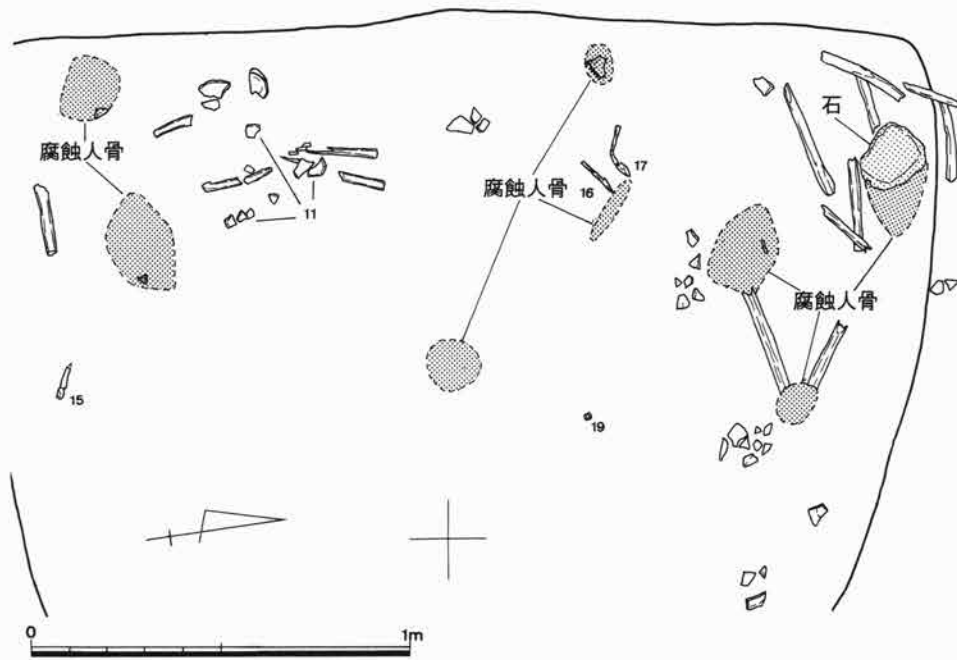
遺物の出土状況(第61・62図) B 4号横穴からは、須恵器・土師器・鉄製品・耳環・人骨などが出土した。玄室内出土遺物には、土師器杯2点・刀子1点・鉄鏃2点・鎌1点・耳環1点・人骨2体分以上があり、いずれも奥壁側で出土した。人骨は南西側の一群と北西側の一群とがあり、それぞれ少なくとも1体分はあると思われる。ただし、解剖学的に原位置を保っておらず、二次的な移動が行われているようである。出土遺物のうち、杯



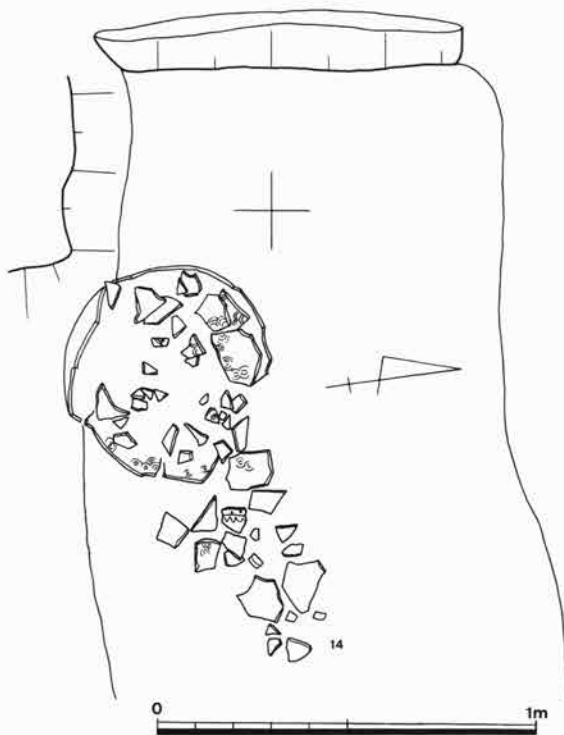
第59図 B 4・B 5号横穴土層断面図



第60図 B 4号横穴実測図



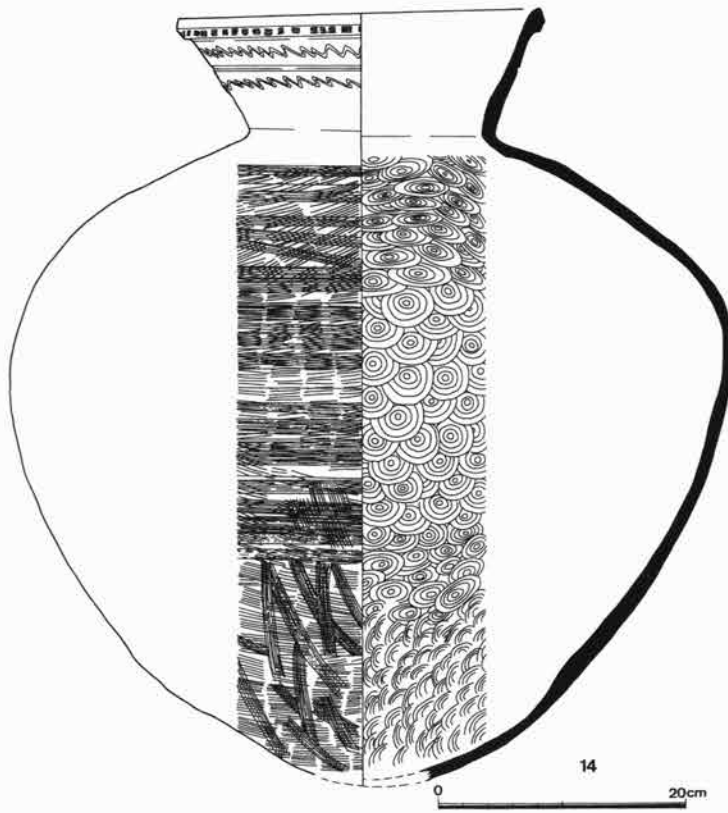
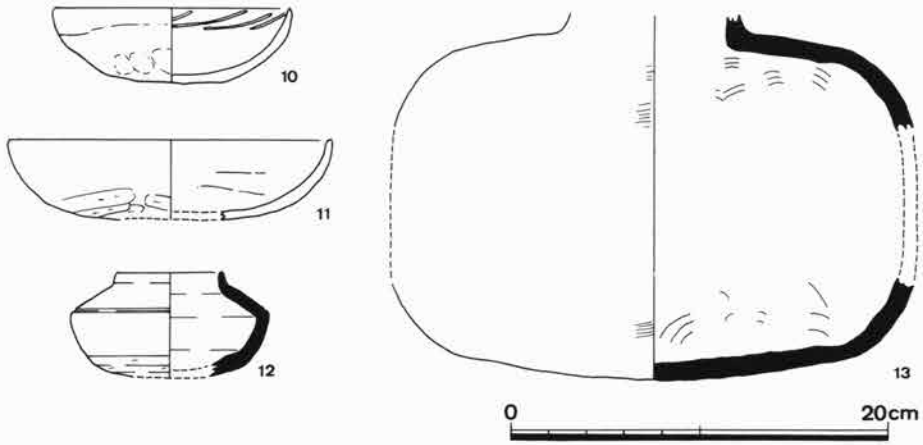
第61図 B4号横穴玄室内遺物出土状況図



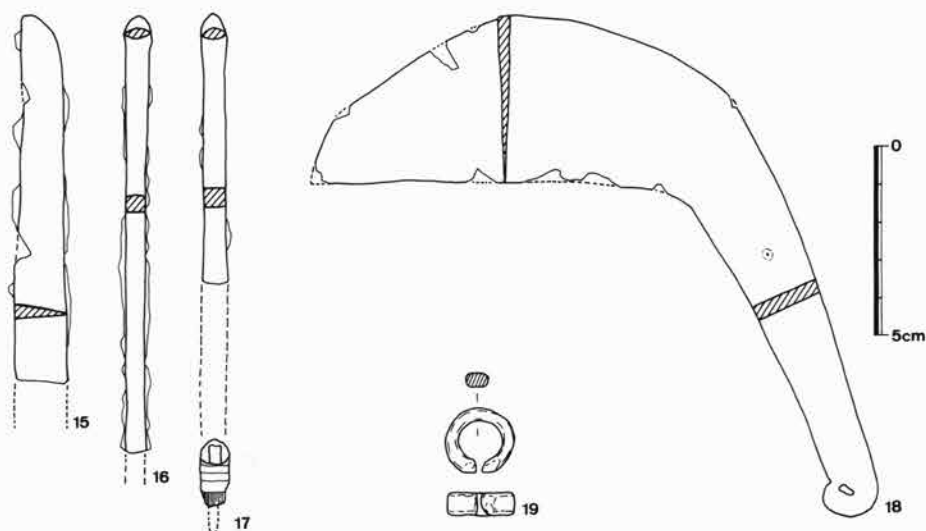
第62図 B4号横穴前庭部遺物出土状況図

(11)・刀子(15)は、南西側の人骨の周辺で検出された。また鉄鏃(16・17)・耳環(19)は、北西側の人骨に接して検出された。しかし、これらはいずれも原位置を保っていないと考えられる。奥壁に接して出土した鉄鏃(18)は、かなり遊離した状態で検出された。

前庭部出土の遺物は、図示した須恵器短頸壺・横瓶・甕各1点のほか、細片化した須恵器・土師器の破片がある。短頸壺(12)・横瓶(13)は、前庭部前端の土器が集中した部分から検出された。本来ここに置かれてい



第63図 B 4号横穴出土遺物実測図(1)



第64図 B4号横穴出土遺物実測図(2)

たものではなく2次的に移動したものと思われる。甕(14)は、前庭部南西隅に置かれていた。原位置を保っていると考えられる。

**出土遺物** B4号横穴出土遺物には、須恵器3点・土師器2点・鉄製品4点・装身具1点がある。

a. **須恵器**(第63図) 12は、短頸壺である。口径5.5cm・残存高5.65cm・体部最大径10.6cmを測る。肩部に1条の沈線を施す。底部にはケズリがみられる。13は、推定最大径28.0cm・残存高20.0cmを測る横瓶である。14は、大型の甕である。口径28.4cm・器高62.6cm・体部最大径57.6cmを測る。口縁部外面には、上から列点文、波状文、沈線、波状文の順に施文する。底部は、穿孔が行われていると推定される。

b. **土師器**(第63図) 10・11は、底部が丸味を帯びる杯である。10は、体部外面にユビオサエ痕がみられる。口径12.5cm・器高4.1cmを測る。淡黄白色を呈する。11は、底部外面にケズリがみられる。復原口径17.0cm・残存高4.2cmを測る。淡橙灰色を呈する。

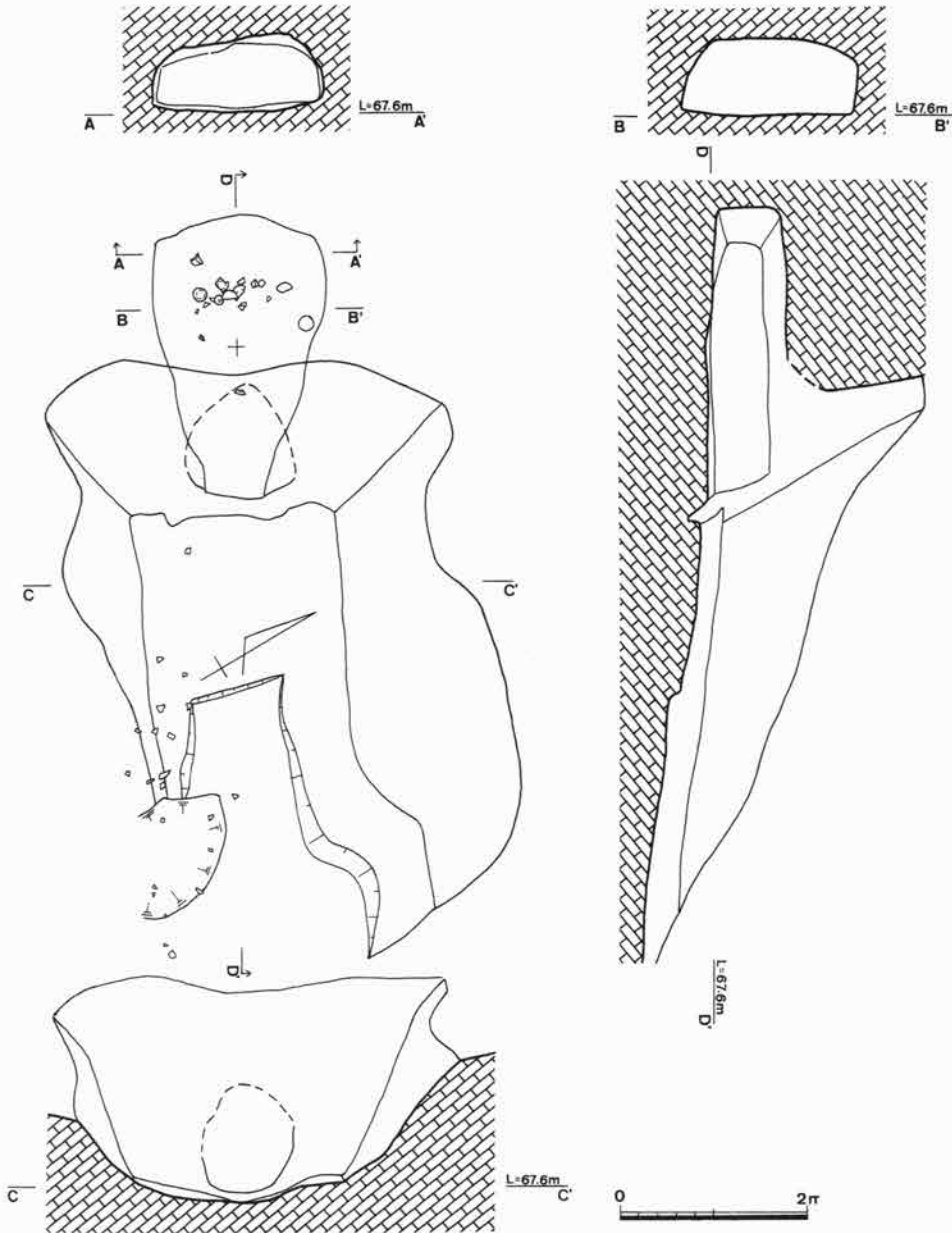
c. **鉄製品**(第64図) 15は、刀子である。刃部の一部が残る。残存長9.6cmを測る。16・17は、ほぼ同型同大の長頸鎌である。頸部は断面方形を呈する。17は、茎と木質部が残存する。16の残存長は11.7cmである。18は、鉄鎌である。刃部9.4cm・全長14.9cmを測る。茎は、断面長方形を呈する。

d. **装身具**(第64図) 19は、直径1.9cmを測る金環である。玄室内から1点のみ出土。



④ B 5 号横穴

位置と構造(第65図) B 4号横穴のすぐ隣りに造られたA類の横穴である。開口部の標高は67.6mを測り、B 4号横穴とはほぼ同じレベルである。玄室内は自然流入土が堆積していた(第59図(3))が、天井部はほとんど崩落していない。前庭部は完全に埋没していた。玄室と前庭部の主軸はほぼ一致し、N-60°-Wを測る。



第65図 B 5号横穴実測図

横穴は、玄室と前庭部から構成される。玄室の平面形はフラスコ形であるが、やや主軸方向に間延びしたプランを呈する。玄室内の堆積土を除去すると遺物が検出された。玄室の天井部は、玄門部を除いては良好な状態で遺存しており、玄室高は0.8mを測る。他のA類の横穴の天井部がほとんど崩落しているが、玄室高が最も低い横穴と思われる。奥壁・側壁の遺存状況も良好で、玄室の横断面形は、カマボコ状を呈する。

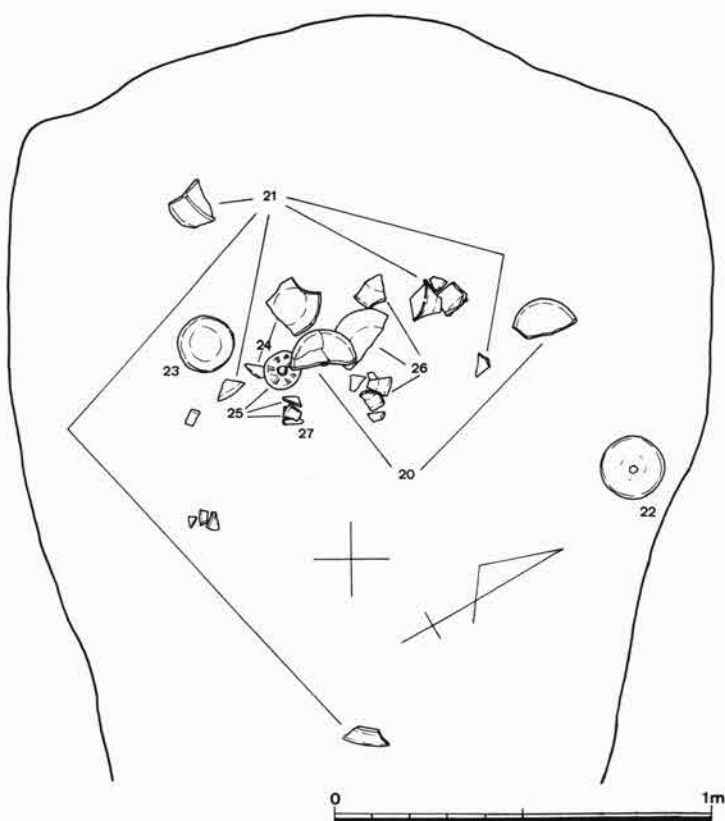
前庭部は、床面幅が約2.1mで比較的広い「コ」の字形の空間を有し、B4号横穴の前庭部とは形状が異なる。前庭部は、南側に位置するB4号横穴を意識してか、北側をやや拡張している。前庭部床面には、「コ」の字状を呈する段差がみられる。

玄室の閉塞は、B4号横穴と同様、玄室部と前庭部の境に設けられた溝に、板戸をはめ込む方法によって行われたと考えられる。

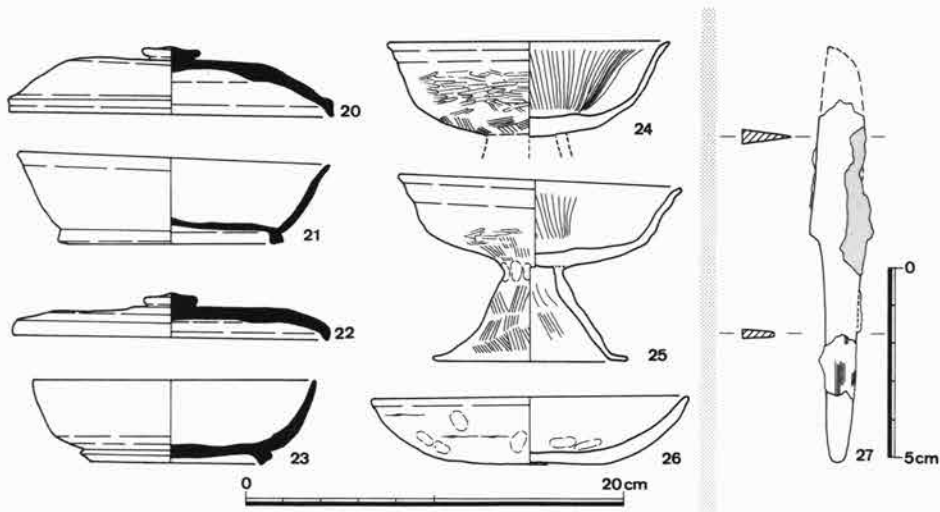
遺物の出土状況(第66図) B5号横穴からは、須恵器・土師器・鉄製品などが出土している。玄室内からは須恵器杯蓋2セット・高杯2点・刀子1点などが出土している。土器の接合関係からみて、これらは二次的な攪乱を受けていると考えられる。杯(21)は、最も

破片化され、かつ広範囲に散乱していた。他の遺物も破片化されていたが、杯(21)ほどではない。また、蓋(22)・杯(23)は完形で出土した。出土した遺物は、ほぼ床面直上で検出されたものである。

前庭部からは、須恵器甕片などが出土しているが、B4号横穴のような大型の甕の供献状況などは確認できなかった。



第66図 B5号横穴玄室内遺物出土状況図



第67図 B5号横穴出土遺物実測図

出土遺物 B5号横穴出土遺物には、須恵器4点・土師器3点・鉄製品1点がある。

a. 須恵器(第67図) 20・22は、扁平な宝珠つまみを有する、ほぼ同大の杯蓋である。20は、やや笠形を呈し、口縁端部を下方にのばす。口径17.3cm・器高3.7cmを測る。22は、扁平な形態を呈し、やや厚手である。口径16.8cm・器高2.4cmを測る。

21・22は、外上方にのびる直線的な体部と高台を有する杯である。21は、口縁端部がわずかに外反する。口径16.6cm・器高4.4cmを測る。23は、口縁部がやや内湾気味を呈する。口径14.9cm・器高4.3cmを測る。

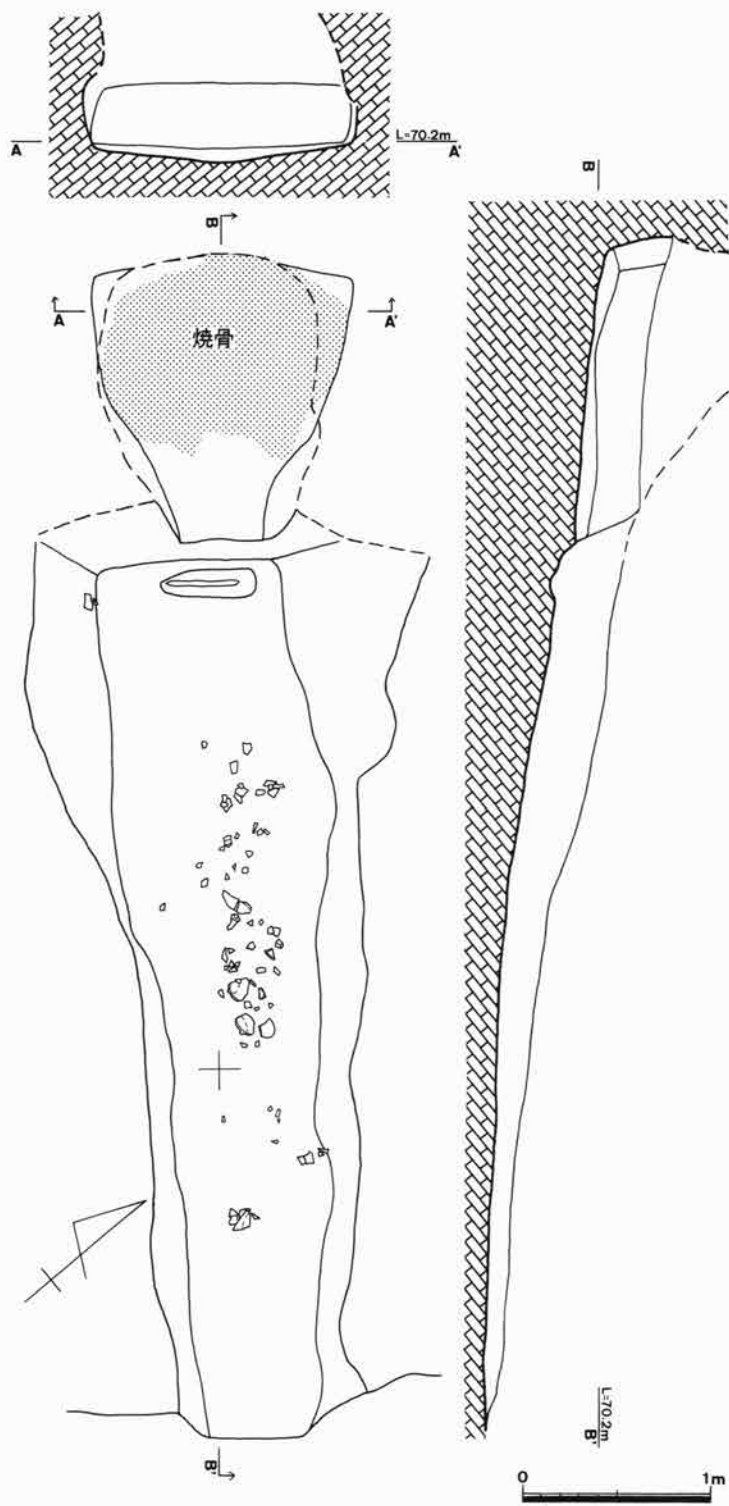
これらは、20と21、22と23がそれぞれセットになるとと思われる。

b. 土師器(第67図) 24・25は、ほぼ同形同大と推定される高杯である。ただし、24の脚部は玄室内・前庭部のいずれからも検出されていない。外上方にのびる体部にやや外反気味の口縁部を有する杯部と、「ハ」の字状に開く脚部からなる。杯部内面に放射状暗文を1段施す。25は、口径14.8cm・器高10.0cm・底径10.4を測る。ともに、暗赤橙色を呈する。24・25は、畿内産<sup>(注18)</sup>土師器の模倣品であると推定される。26は、杯である。内外面ともナデにより仕上げられる。口径16.7cm・器高3.7cmを測る。

c. 鉄製品(第67図) 27は、刃部の一部と茎が残存する刀子である。刃部には皮かと思われる付着物がみられる。残存長9.7cmを測る。

### ⑤B6号横穴

位置と構造(第68図) B5号横穴の北方約20mに単独で位置する横穴である。横穴の規模は、A類ともB類ともいいがたい。しかし、B6号横穴はいくつかの点においてA類と



第68図 B 6号横穴実測図

B類の中間的な様相を呈しており、一応B類の横穴として捉えることにする。開口部の標高は70.2mを測り、B5号横穴よりも約2.6m高所に位置する。玄室と前庭部の軸は完全に一致し、N-51°-Wを測る。

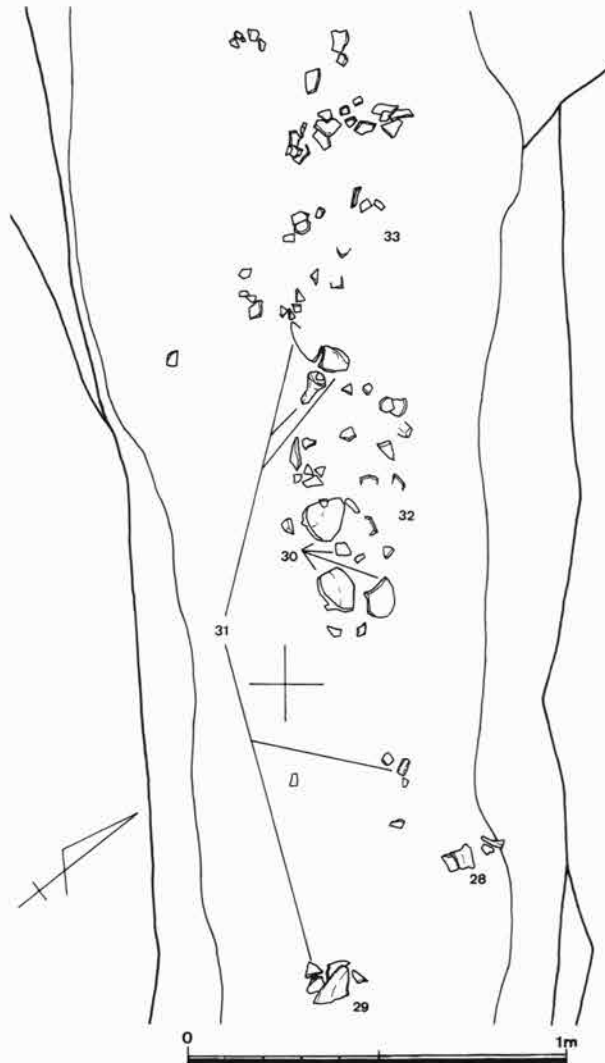
横穴は、玄室と前庭部から構成される。玄室は、平面形がフラスコ形を呈するが、床面積は1.3㎡であり、A類とした玄室の床面積の約1/4ほどしかない。玄室内は、天井部が完全に崩落していた。この崩落土を除去すると、焼骨が多数検出された。また、奥壁・側壁の遺存状況は良好であり、玄室の横断面形はカマボコ状を呈するものと思われる。玄室と前庭部の比高差は約10cmを測る。

前庭部は、断面逆台形の墓道状を呈する。玄室長に対して前庭部長が約2.8倍あり、長い前庭部である。

玄室の閉塞は、玄室部と前庭部の境に溝が設けられていることから、板戸による閉塞であったと考えられる。なお、B類とした横穴で、板戸の閉塞を行うための溝を有する横穴は、B6号横穴のみである。

**遺物の出土状況(第69図)**  
B6号横穴からは、須恵器・土師器・焼骨が出土している。玄室内からは、焼骨が多数出土したが、土器などは出土しなかった。

前庭部では、須恵器長頸壺2点・杯1点、土師器杯1点・甕2点が出土している。遺物は、前庭部におよそ2.5mの範囲にわたって破片化した状態で出土した。出土遺物の接合関係は、長頸壺(31)を



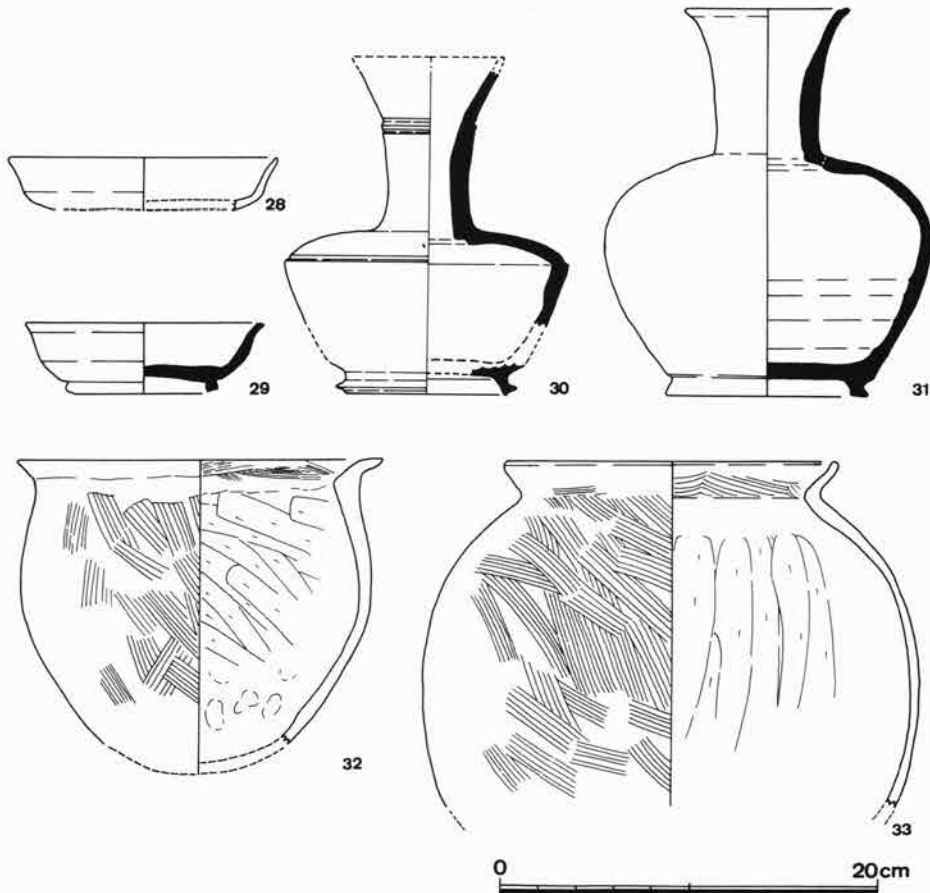
第69図 B6号横穴前庭部遺物出土状況図

除いて、一定のまとまりを有する。これを破碎行為の結果としてみることも可能である。もしそうならば、玄室側から、土師器甕(33)、同(32)、須恵器長頸壺(30)の破碎された原位置を复原することが可能である。杯(28・29)は、前庭部前方から出土したが、いずれも完形ではなく、原位置を保つかどうかは不明である。遺物は、ほぼ床面直上の出土である。

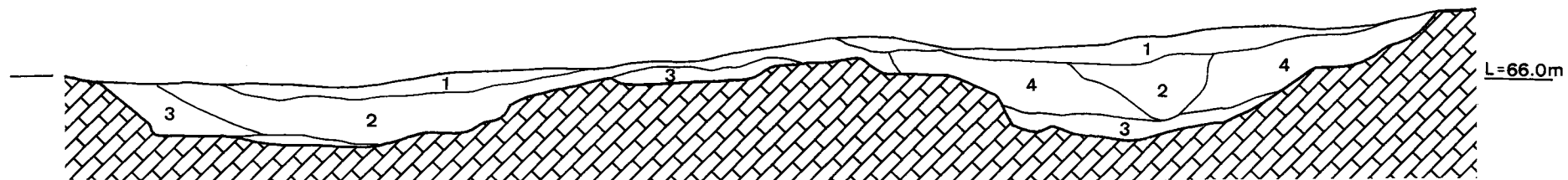
**出土遺物** B6号横穴出土遺物には、須恵器3点・土師器3点がある。

**a. 須恵器(第70図)** 29は、杯である。外上方にのびる体部と外反する口縁部をもつ。また、高台を有する。口径12.8cm・器高7.2cmを測る。30は、角張った体部に、高台端部が内傾する長頸壺である。頸部に2条の、また肩部に1条の沈線を施す。复原高16.8cm・底径8.4cmを測る。31は、丸味を帯びた体部に高台の付く長頸壺である。体部下半はケズリの後ナデを施す。口径8.5cm・器高20.6cm・底径10.6cmを測る。

**b. 土師器(第70図)** 28は、杯である。口縁端部にはわずかに段がみられる。复原口径14.2cm・残存高2.7cmを測る。32・33は、甕である。32は、口縁部が大きく屈曲する。口

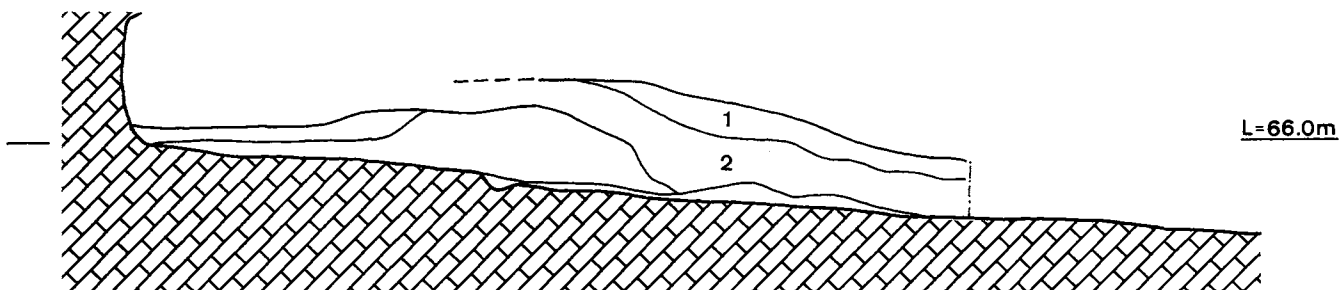


第70図 B6号横穴出土遺物実測図

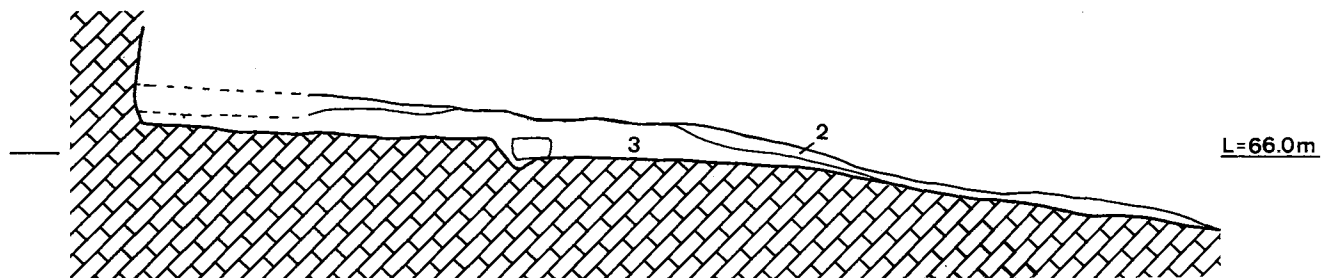


(1) B7・B8・B9号横穴前庭部横断面図

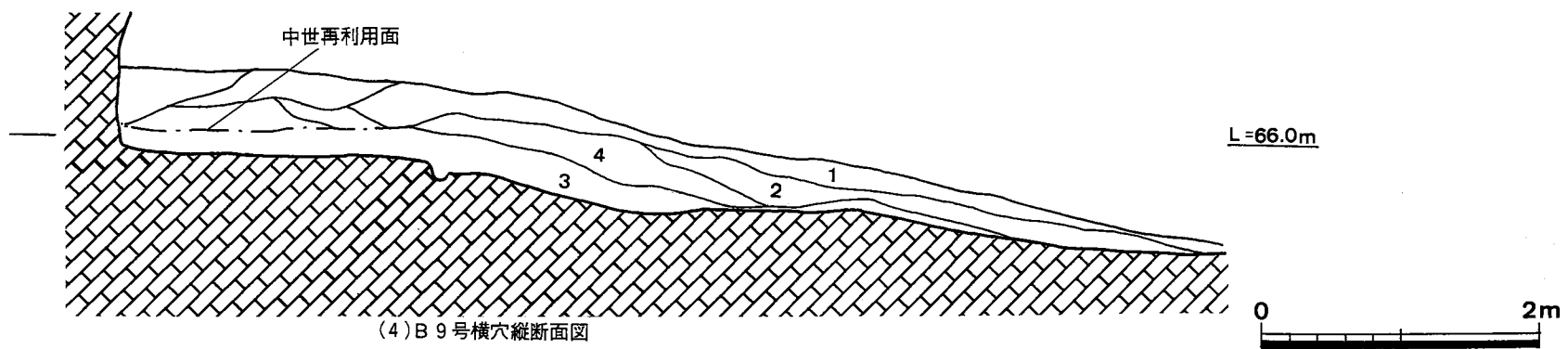
- 1. 茶褐色砂質土
- 2. 黒褐色砂質土(腐植土、中世の遺物を含む)
- 3. 橙褐色砂質土(小礫混、中世以前の埋土)
- 4. 茶褐色砂質土



(2) B7号横穴縦断面図



(3) B8号横穴縦断面図

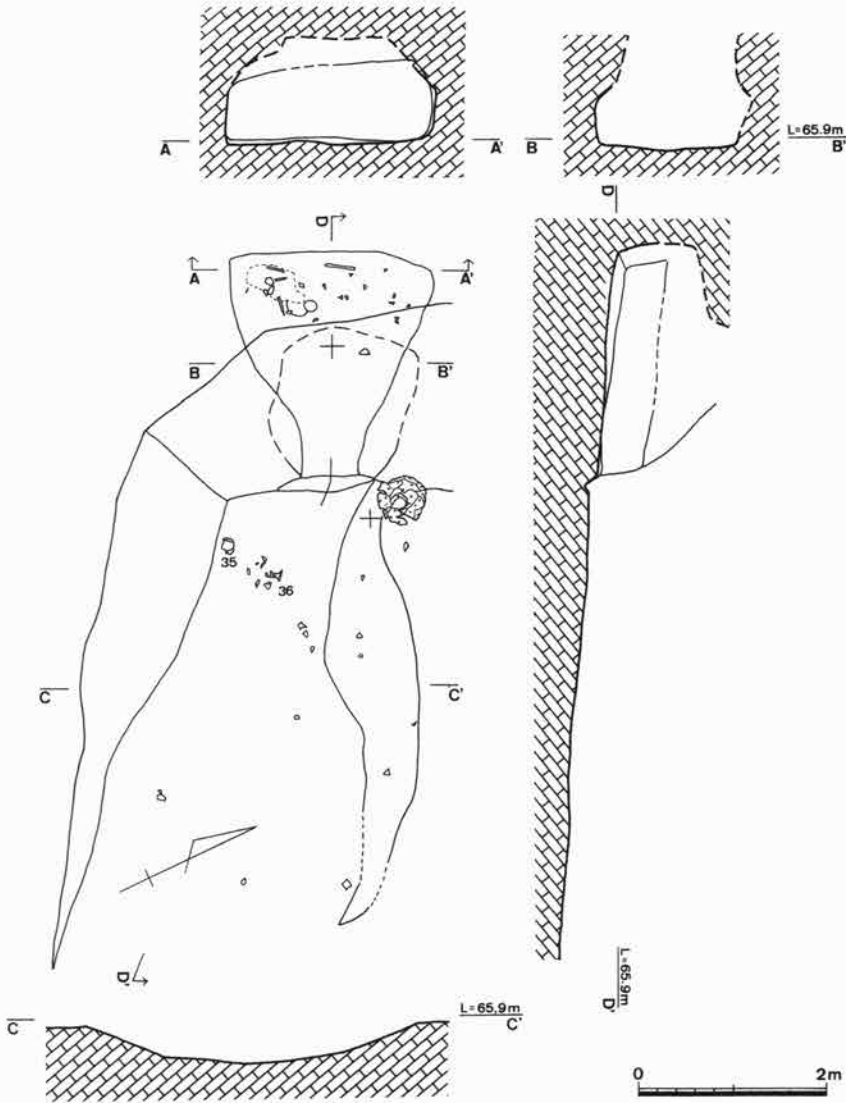


(4) B9号横穴縦断面図

縁部外面をナデ、内面をハケで仕上げる。また、体部外面を粗いハケ、体部内面をケズリで仕上げる。口縁部は歪んでおり、口径19.4cmまたは20.0cmを測る。残存高15.3cmを測る。33は、やや内湾気味の口縁部を有し、球形と推定される体部をもつ。調整は、ほぼ32と同じである。口径17.2cm・残存高18.5cmを測る。黄灰色を呈する。

⑥ B 7号横穴

位置と構造(第72図) B 6号横穴の西約8mに位置するA類の横穴である。開口部の標高65.9mで、B 6号横穴よりも約4.3mの低所に位置する。B 7号横穴は、後述するB 8



第72図 B 7号横穴実測図



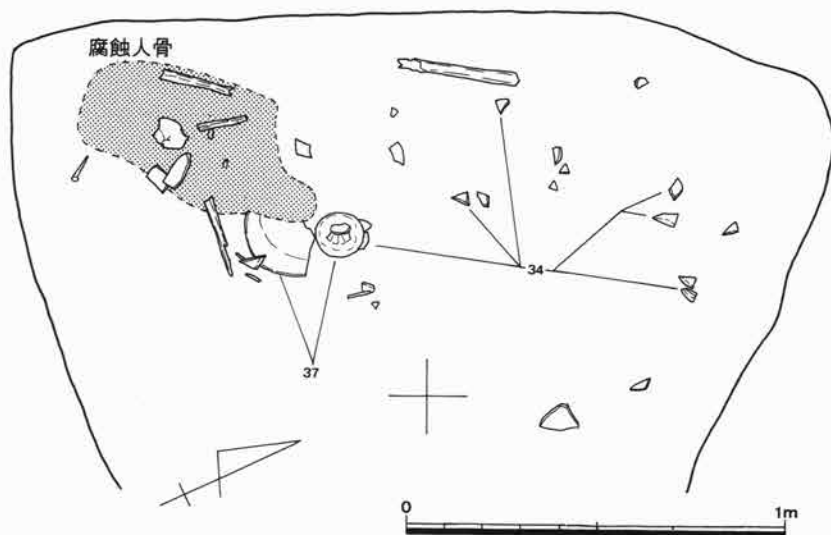
号・B 9号横穴とともに3基で小グループを構成し、3基中最も南に位置する。出土遺物の時期差からB 8号横穴よりも新しく築造されたと考えられる。玄室・前庭部ともに完全に埋設していたが、中世に再利用されているようである。玄室の主軸と前庭部の主軸は、一致せず、かなり屈曲する。玄室の主軸N-65°-Wに対して、前庭部はN-43°-Wを測る。前庭部の主軸は、B 8号横穴の主軸に一致する。

横穴は、玄室と前庭部から構成される。玄室の平面形はいわゆるフラスコ形を呈し、玄室の床面積は3.2㎡を測る。天井部はほとんどが崩落していたが、奥壁や側壁の残存状況は良好であった。このため、玄室の横断面形はカマボコ状を呈していたものと推定される。玄室内は、早い段階で天井部の崩落があったと思われるが、完全には埋没せず、中世初め頃まで一部開口していたと思われる。自然石一個が玄門部付近に本来の床面から遊離した状態でおかれており、これもその時期と考えられる(第71図(2))。

前庭部は、断面逆台形の墓道状を呈する。前庭部の主軸は、先にも述べたように、かなり屈曲するが、これは北側に接するB 8号横穴の存在を考慮して、前庭部の北壁下端ラインを北に振って前庭部を広くしようとしたためと考えられる。

玄室の閉塞は、玄室部と前庭部の境に溝が設けられていることから、板戸による閉塞であったと考えられる。

遺物の出土状況(第73図) B 7号横穴からは、須恵器・土師器・人骨などが出土している。玄室内からは、土師器高杯2点、人骨などが出土している。人骨は、玄室内の南西側でまとめて検出されたが、解剖学的な原位置はとどめていない。高杯(37)は、脚部と杯



第73図 B 7号横穴玄室内遺物出土状況図

部に分離しており、杯部は腐蝕人骨の下へ潜り込んでいた。高杯(36)は、一部の破片が玄室内に残存していたものの、脚部などは前庭部から出土した。このことから、北西側を中心に遺物が中世段階の再利用の際に攪乱を受けていることが明らかとなった。

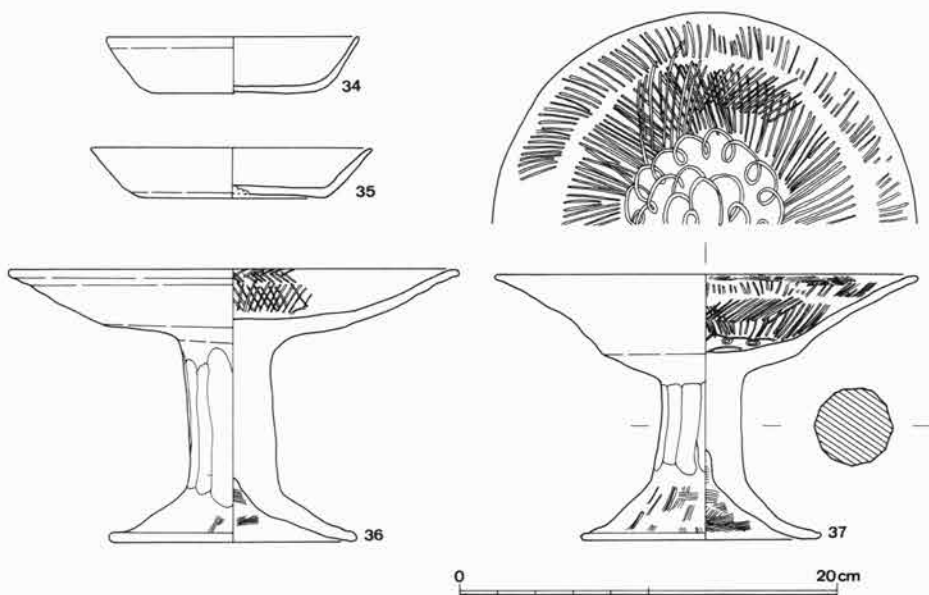
前庭部からは、須恵器甕・土師器高杯・黒色土器片が出土している。玄門部の北側、前庭部の脇におかれた甕(38)は、上方から押しつぶされたような状態で検出されており、原位置と考えられる。土師器高杯(36)や杯(35)は、前庭部床面からかなり遊離しているが、玄室内出土のものと同時期と考えられ、先述の中世の再利用の際に玄室内から掻き出されたと考えられる。

黒色土器片は、いずれも第2層中からの出土に限られる。これが中世段階の再利用面と考えられる。これらは、後述のB9号横穴内出土の黒色土器と類似しており、平安時代末～鎌倉時代初期と考えられる。

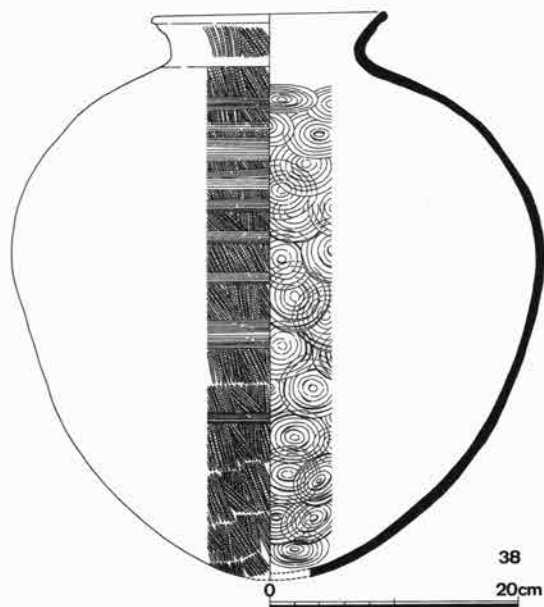
出土遺物 B7号横穴出土遺物には、須恵器1点・土師器4点がある。

a. 須恵器(第75図) B7号横穴出土の須恵器は、前庭部の脇に置かれた甕(38)のみである。38は、体部外面にタタキ調整を施す。口縁端部をナデで仕上げる。底部には、焼成後に穿孔が行われている。口径16.8cm・器高45.2cm・体部最大径42.8cmを測る。

b. 土師器(第74図) 34・35は、外上方に直線的にのびる体部を有する杯で、どちらも平底である。35は磨滅が著しいが、34は内外面ともナデによって仕上げる。なお、底部に



第74図 B7号横穴出土遺物実測図(1)



第75図 B 7号横穴出土遺物実測図(2)

はユビオサエ痕がみられる。34は、口径13.2cm・器高4.0cmを測る。35は、34よりも一回り大きく、口径は14.9cmを測る。36・37は、断面多角形の中実の脚を有する高杯である。36は、皿状の杯部内面に放射状の暗文が2段施されている。脚部は、柱状の部分では面取りを行う。裾は大きく開きハケ調整がみれる。口径23.6cm・器高14.4cmを測る。37は、わずかに屈曲して外反気味にのびる口縁部を有する。杯部の内面には2段の放射状暗文と、見込み部分に接続輪状文が施される。脚部は、36とほぼ同じである。口径22.4cm・器高14.2cmを測る。36・37は、いずれも赤橙色を呈し、畿内産土師器(注19)の模倣品と推定されるものである。

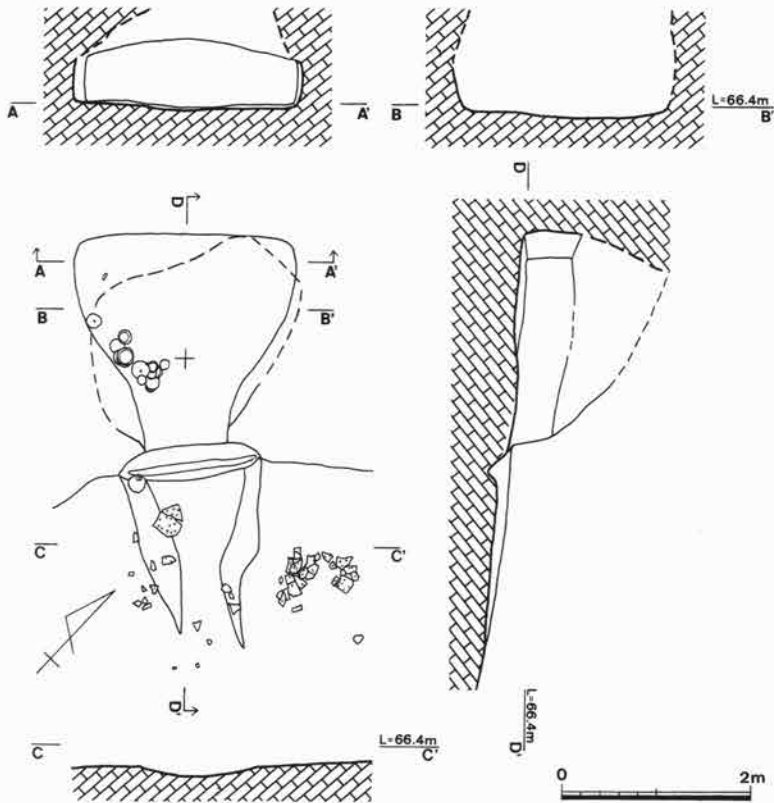
### ⑦B 8号横穴

**位置と構造(第76図)** B 8号横穴は、B 7号横穴に隣接して築造されたA類の横穴で、3基並んだ横穴の中央に位置する。開口部の標高は、66.4mを測り、両隣りの横穴(B 7・B 9号)よりも約0.5m高い。また、前庭部床面も、両隣りの横穴よりもやはり0.5m前後高い。したがって、3基の横穴の前庭部横断面形は、「凸」の字状を呈する(第71図(1))。また、出土遺物からB 8号横穴が突出したような形になる。

また、出土遺物からB 8号横穴が両隣りの横穴よりも先行して築造され、両横穴の前庭部築造に規制を与えていると考えられる。玄室・前庭部とも完全埋没していた。主軸は、玄室・前庭部とも一致し、N-43°-Wを測る。

横穴は、玄室と前庭部から構成される。玄室の平面形は、いわゆるフラスコ形を呈する。床面積は3.5㎡を測る。天井部は、完全に崩落しており、この崩落土を除去すると、遺物が検出された。玄室の奥壁・側壁の残存状況は良好で、玄室の横断面形はカマボコ状を呈していたものと推定される。玄室と前庭部の比高差は、約10cmを測る。

玄室の閉塞は、前庭部と玄室の境に設けられた溝に板戸をはめ込む方法によって行われ



第76図 B 8号横穴実測図

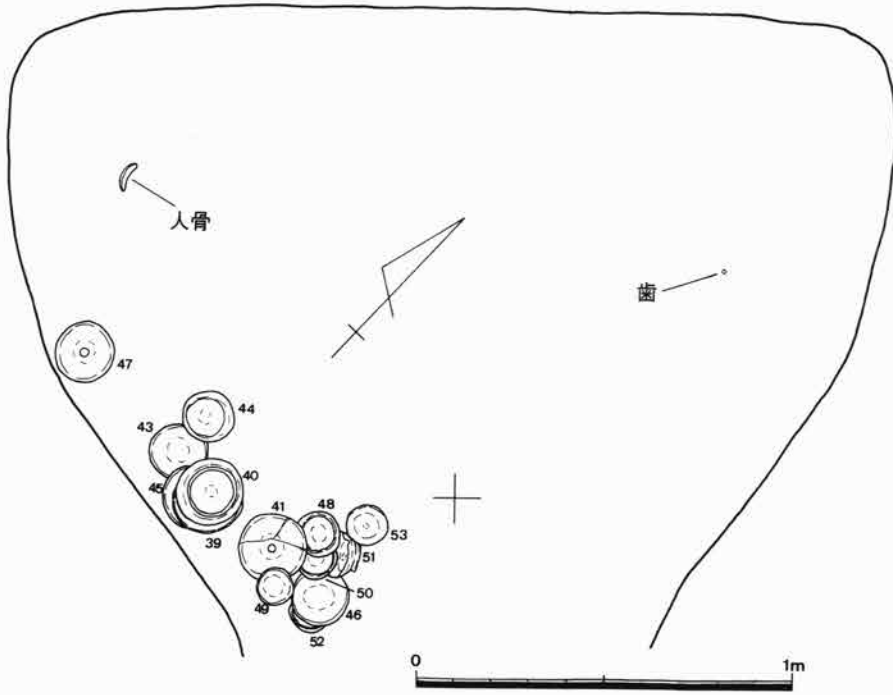
たとえられる。

前庭部は、断面形がわずかに皿状にくぼむ程度である。遺物の出土状況からみても前庭部長は、他の横穴に比べ短かったと考えられる。

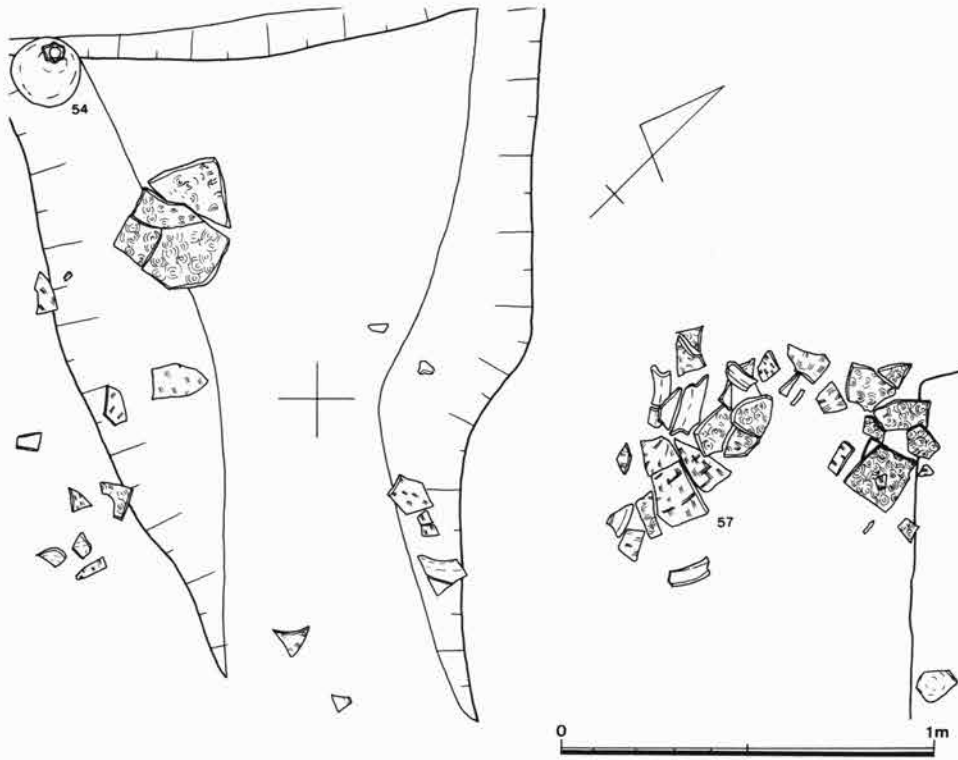
B 8号横穴は、中世段階での再利用は行われていないため、玄室は、築造後早い段階で埋没したと推定される。

**遺物の出土状況(第77・78図)** B 8号横穴からは、須恵器・人骨などが出土している。玄室内からは、須恵器蓋杯6セット・蓋3点・人骨が出土している。人骨は、腐蝕が進んでいたため、頭蓋骨と思われる骨と歯を検出したのみである。須恵器の蓋杯(39~53)は、いずれも玄室南側の玄門部に近い側壁に沿うように置かれていた。これらは、いずれも完形個体であるが、逆位に置かれたものがあること、蓋のみのものが3点あることなどから、2次的な移動が行われている可能性も考えられる。

前庭部からは、須恵器甕・平瓶・壺などが出土した。平瓶(54)は、前庭部南壁に正位置で置かれていた。原位置を保つと推定される。壺(55)は、前庭部全面に散乱しており、一部はB 9号横穴の前庭部出土の破片と接合関係にあった。甕2個体(56・57)は、B 8号横

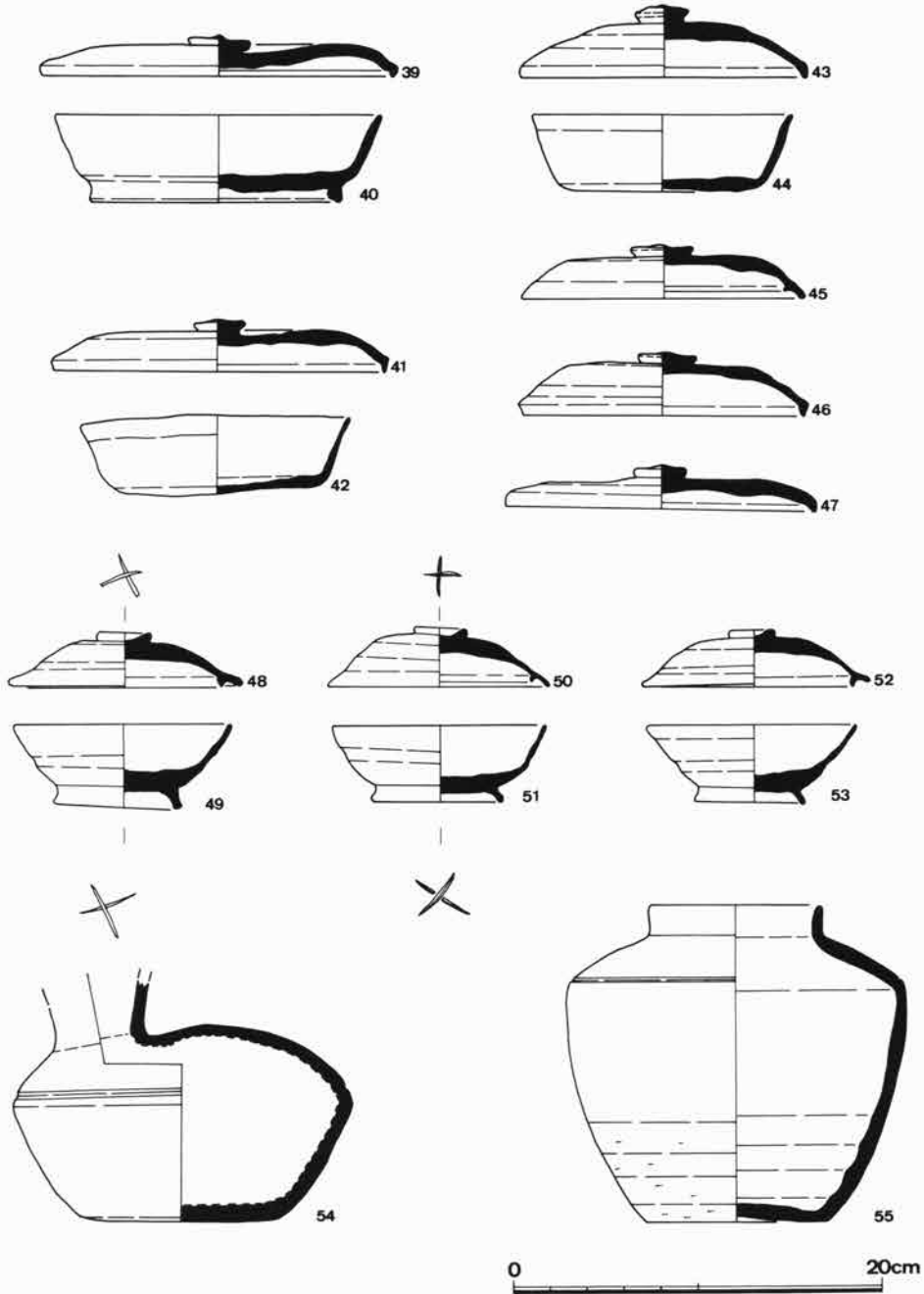


第77図 B 8号横穴女室内遺物出土状況図



第78図 B 8号横穴前庭部遺物出土状況図

穴の前庭部からB 9号横穴前庭部にかけて、多数の破片となった状態で検出された。56は、前庭部内の破片と接合関係にあり、本来B 8号横穴に伴うものであることがわかる。57は、口縁部の破片などが、両横穴間の平坦地で出土したが、一応B 8号横穴に属すると考えた。



第79図 B 8号横穴出土遺物実測図(1)

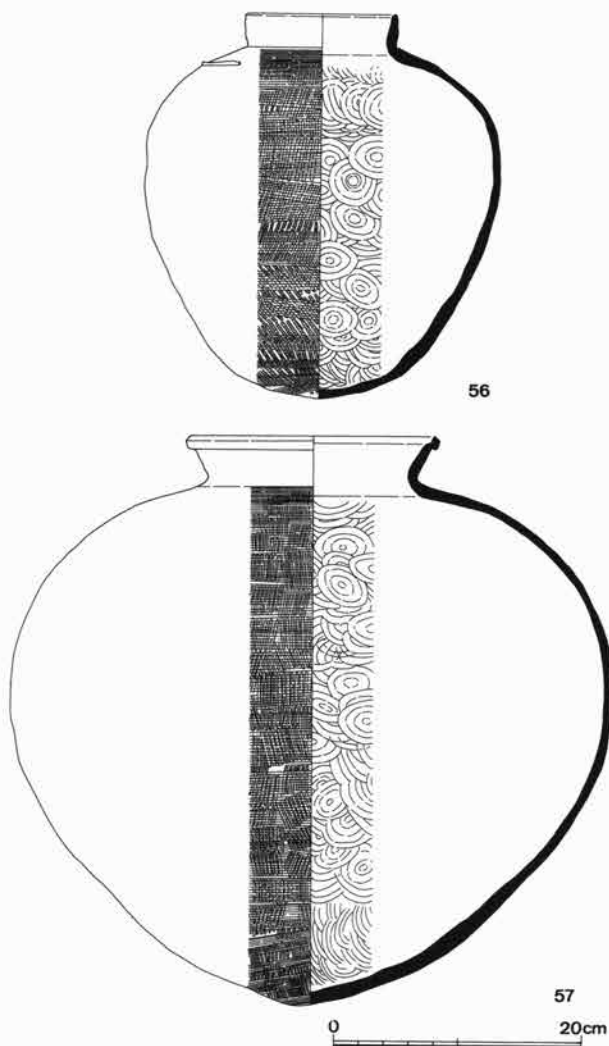
出土遺物(第79・80図) B 8号横穴出土遺物は、須恵器19点のみである。

39～47は、多様な形態の蓋・杯である。39・41・43・45～47は、杯蓋である。扁平なもの(39・41・47)と、笠形を呈するもの(43・45・46)とがあり、それぞれほぼ同大である。いずれも宝珠つまみを持つ。39は、口径19.5cm・器高2.3cmを測る。45の内面にはかなり退化したかえりがある。43は、口径15.2cm・器高4.1cmを測る。40は、外上方に直線的にのびる体部と高台を持つ杯である。口径17.8cm・器高4.7cmを測る。42・44は、40同様外上方に直線的にのびる体部を持つが、高台を有さない。44は、口径14.1cm・器高4.1cmを測る。

48～53は、ほぼ同形同大の蓋・杯各3点からなる杯蓋のセットである。蓋(48・50・52)は、笠形の体部に輪状のつまみがつく。内面にかえりを持つ。口径12.0～12.8cm・器高

3.1～3.3cmを測る。杯は、外上方に大きく開く直線的な体部とふんばる高台を持つ。口縁端部、高台端部は、ほぼ丸く仕上げる。口径11.2～11.7cm・器高4.2～4.6cm・底径5.7～6.3cmを測る。6点のうち、48～51の4点は、輪状のつまみ内、または高台内にヘラで「+」記号がつけられる。

54は平瓶で、口縁端部を欠損し、残存高13.1cm・体部最大径17.3cm・底径9.6cmを測る。肩部に1条の沈線をめぐらす。55は、短頸壺である。口径9.2cm・器高17.3cm・底径9.8cmを測る。肩部に1条の凹線をめぐらす。体部外面下半をケズリの後ナデで仕上げる。B 1号横穴出土の土師器壺(6)は、本品の



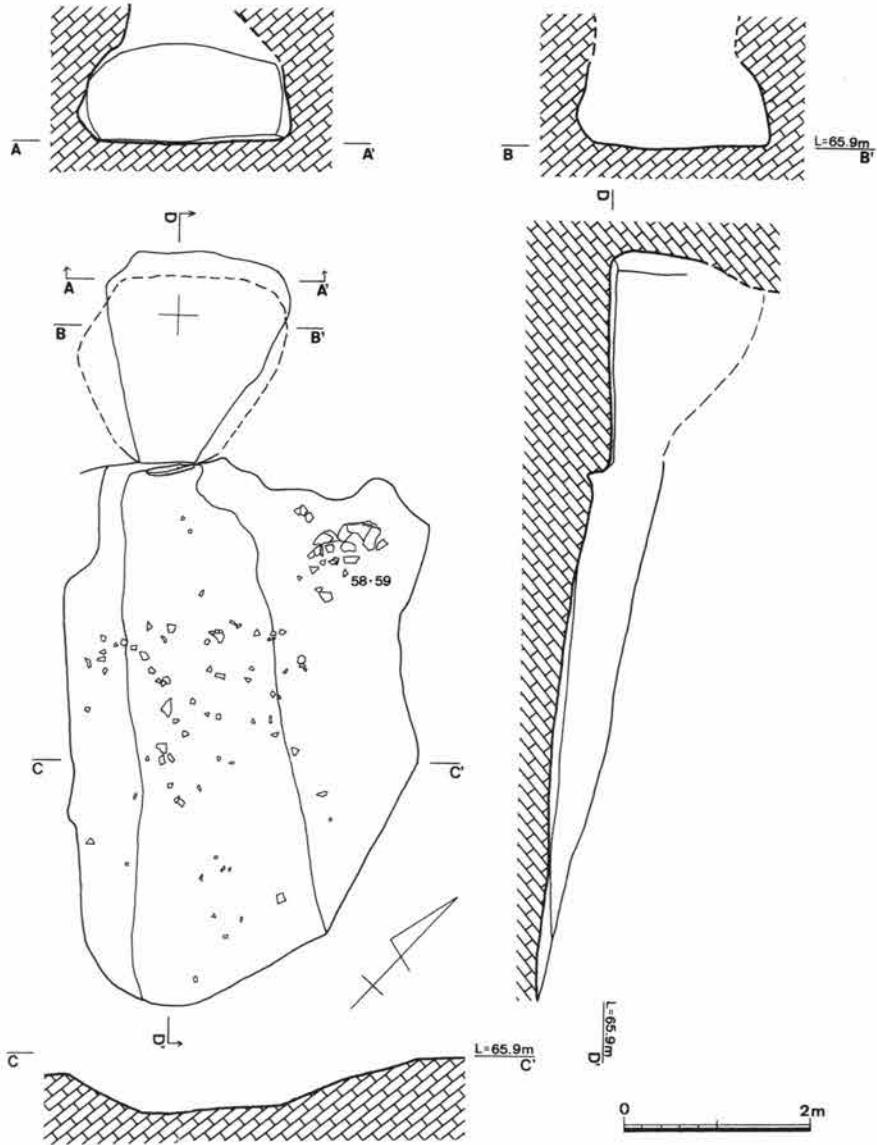
第80図 B 8号横穴出土遺物実測図(2)

ような須恵器壺を模倣して製作されたものと考えられる。

56・57は、甕である。56は、ほぼ上方に立ち上がる口縁部を有する小型の甕である。口径13.8cm・器高30.9cm・体部最大径28.6cmを測る。57は、口縁部が短く外反する大型の甕である。口径19.5cm・器高45.8cm・体部最大径48.6cmを測る。

⑧ B 9号横穴

位置と構造(第81図) B 9号横穴は、B 8号横穴に隣接して築造されたA類の横穴であ



第81図 B 9号横穴実測図

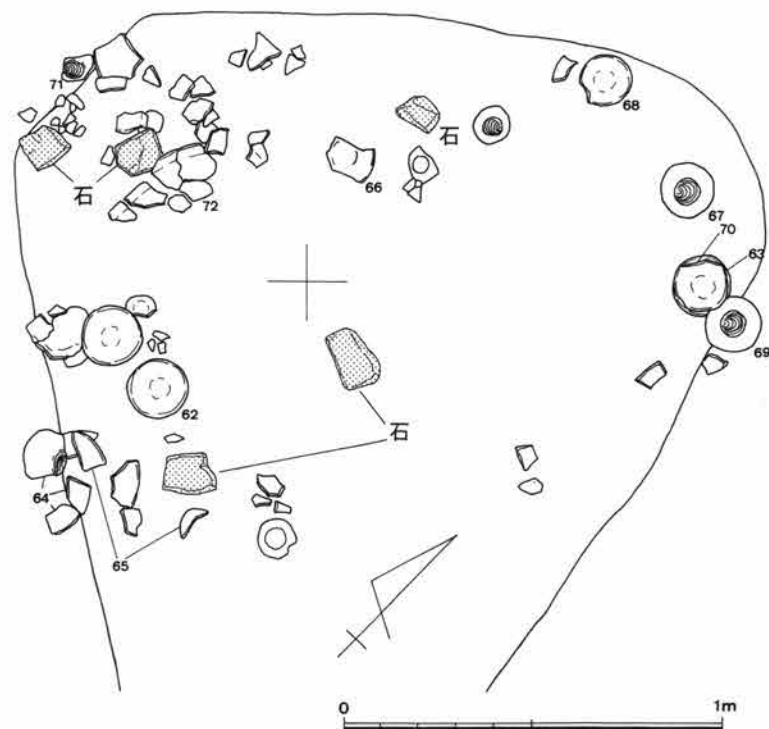


る。開口部の標高は、65.9mを測る。B 9号横穴は、玄室・前庭部とも完全に埋没していた。しかし、玄室内から黒色土器の出土をみたことから、少なくとも中世までは、なお開口して再利用されていることが明らかになった。前庭部の主軸は、B 8号横穴のそれに一致するが、玄室の主軸はN-33°-Wを測る。B 7～B 9号横穴の前庭部は、いずれも主軸をそろえるのに対して、玄室は主軸が異なり、玄室が弧状に配置されていることがわかる。

横穴は、玄室と前庭部から構成される。玄室の平面形は、いわゆるフラスコ形を呈する。床面積は2.8㎡、玄室天井部はほとんど崩落していたものの、奥壁・側壁の形状から玄室の横断面形はカマボコ状を呈するものと考えられる。

天井部の崩落土を除去すると、再利用時の遺物を検出した。玄室内は、再利用に伴うと思われる火を焚いたことによって側壁が赤く変色していた。これによって、再利用時の遺物を包含する黒色土層(炭層)が形成されたと思われる。さらに、この黒色土層を除去すると玄室床面が現れるが、横穴埋葬時の遺物は皆無であった。本来、玄室内にあった土器類は、再利用の際に前庭部に掻き出されたと考えられる。玄室と前庭部の比高差は、約10cmを測る。

前庭部は、南側に位置するB 8号横穴の前庭部を避けて築造されており、したがって北側に広く造られている。また、B 9号横穴の前庭部は、B 7号横穴同様、B 8号横穴より



第82図 B 9号横穴玄室内遺物出土状況図(再利用時)

も前庭部の床面が約0.5m低く造られており、前庭部の配置にB8号横穴の存在が重視されていたことがうかがえる。前庭部は、横断面が逆台形を呈するものの、床面幅が広いため墓道状にならず、比較的広い空間を有する。

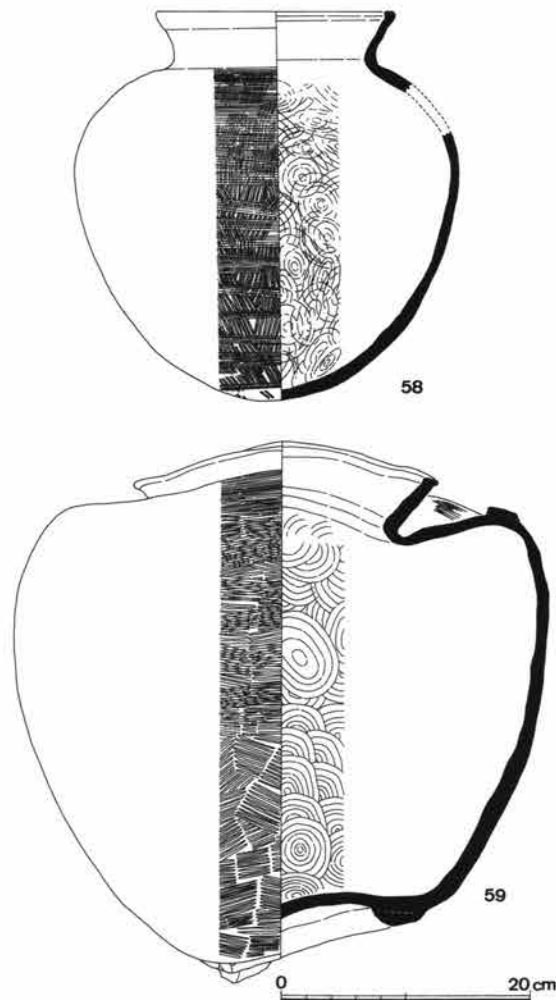
玄室の閉塞は、玄室と前庭部の間に設けられた溝に板戸をはめ込む方法によって行われたと考えられる。

**遺物の出土状況(第82図)** B9号横穴は、平安時代末から鎌倉時代初めにかけて玄室内の再利用が行われたため、横穴築造当初の遺物はすべて前庭部に掻き出された状態であった。したがって、玄室内出土遺物はいずれも再利用時のものに限られる。

再利用時の遺物は、黒色土器碗約20点をはじめ、土師器碗・黒色土器皿・土師器鍋などがある。いずれも黒色土層(炭層)中、またはこの上面から出土した。遺物は、奥壁・側壁に沿うように置かれていた。出土した土器類の大半は完形に近かったが、鍋などの大型品は細片化していた。また、自然石を5点検出したが、再利用時に関連するものかどうかは不明である。

前庭部からは北寄りのコーナー付近に置かれていた須恵器甕2点(58・59)が、比較的原位置を保っていると考えられる。土師器甕(60)は、玄室直前の前庭部床面直上から出土したものである。前庭部のほぼ全面からも多量の土器片が出土したが、先述のように二次的な移動を受けている可能性は高く、また細片化されているため、原位置のものは皆無であると考えられる。

**出土遺物** B9号横穴出土遺物には、横穴築造時の須恵器2点、土師器1点のほか、黒色土器8点、土師器3点を図示した。

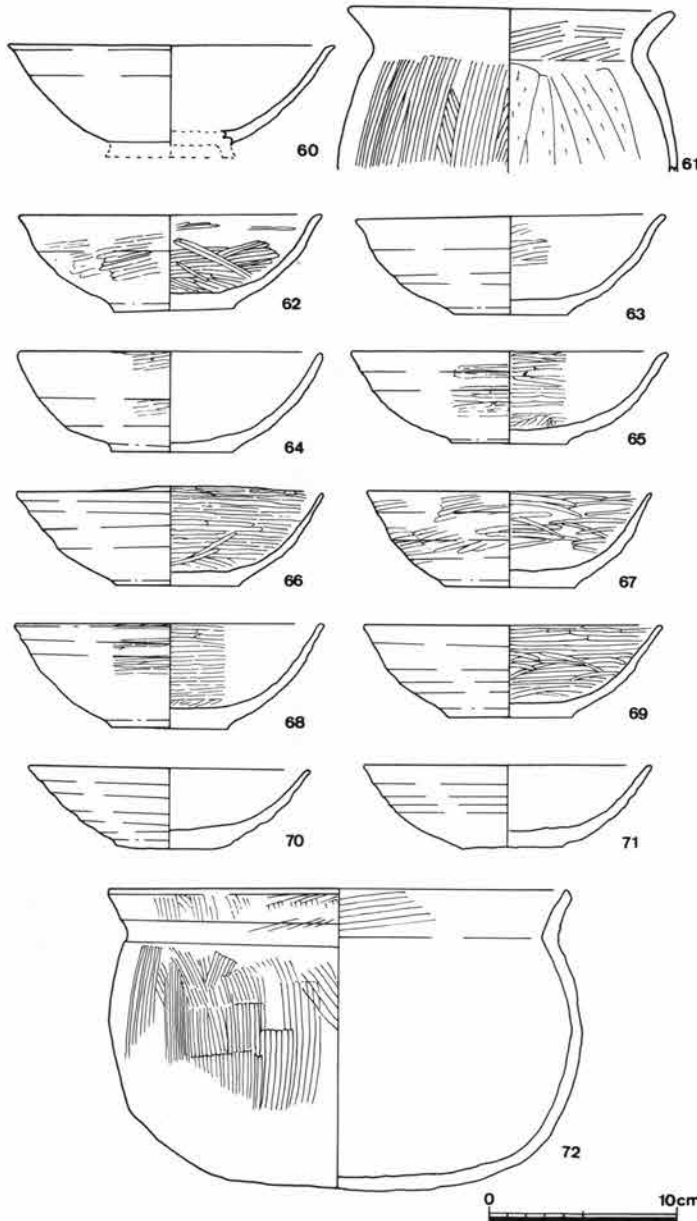


第83図 B9号横穴出土遺物実測図(1)

a. 須恵器(第83・84図) 甕2点のほか、碗1点が出土している。58は、口縁部をナデで仕上げる。体部外面をタタキ成形する。口径19.0cm・器高31.0cm・体部最大径31.0cmを測る。59は、大きく焼け歪む中型の甕である。外面をタタキで仕上げる。口径22.3cm・器高42.8cm・体部最大径42.8cmを測る。

60は、口径17.2cm・残存高5.3cmを測る碗である。前庭部の出土であるが、形態的には

黒色土器碗(63)などに類似し、横穴築造時の遺物とは考えにくい。



b. 土師器(第84図) 土師器は甕1点のみである。61は、口縁部内面に横方向のハケ、体部外面に縦方向のハケを施す。体部内面は、縦方向のケズリである。口径17.0cm・残存高8.7cmを測る。

c. 中世遺物(第84図) 図示したのは黒色土器碗8点、土師器碗2点、土師器鍋1点である。黒色土器碗と土師器碗は、その形態や製作技法がよく似ており、特に回転台の使用による成形技法と、底部の糸切

第84図 B9号横穴出土遺物実測図(2)

りといった共通点がみられる。黒色土器碗(62~69)は、いずれもわずかに内湾する体部を有し、糸切り痕が明瞭に残る平底高台を有する。内面には緻密なミガキを加えた後、黒化処理を施している。また、外面には回転台成形時の痕跡が明瞭に残る。ミガキを施すものも多くみられる。これらはほぼ同形同大で、口径14.9~16.5cm、器高4.9~5.6cm・底径6.0~6.9cmを測る。

土師器碗(70・71)も、器高がやや低い点を除けば、黒色土器碗に類似した形態である。口径14.8~15.1cm・器高4.3cm・底径5.2~5.3cmを測る。

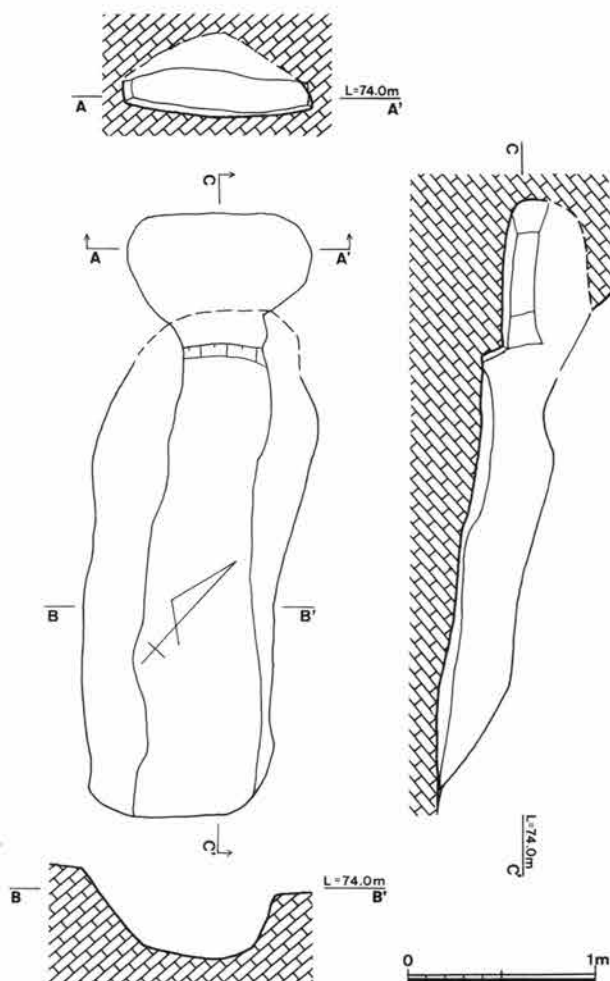
67は、鍋である。体部は丸味を帯びており、「く」の字に屈曲する口縁をもつ。頸部外面を強くなでる。口径24.1cm・器高16.1cmを測る。

### ⑨ B10号横穴

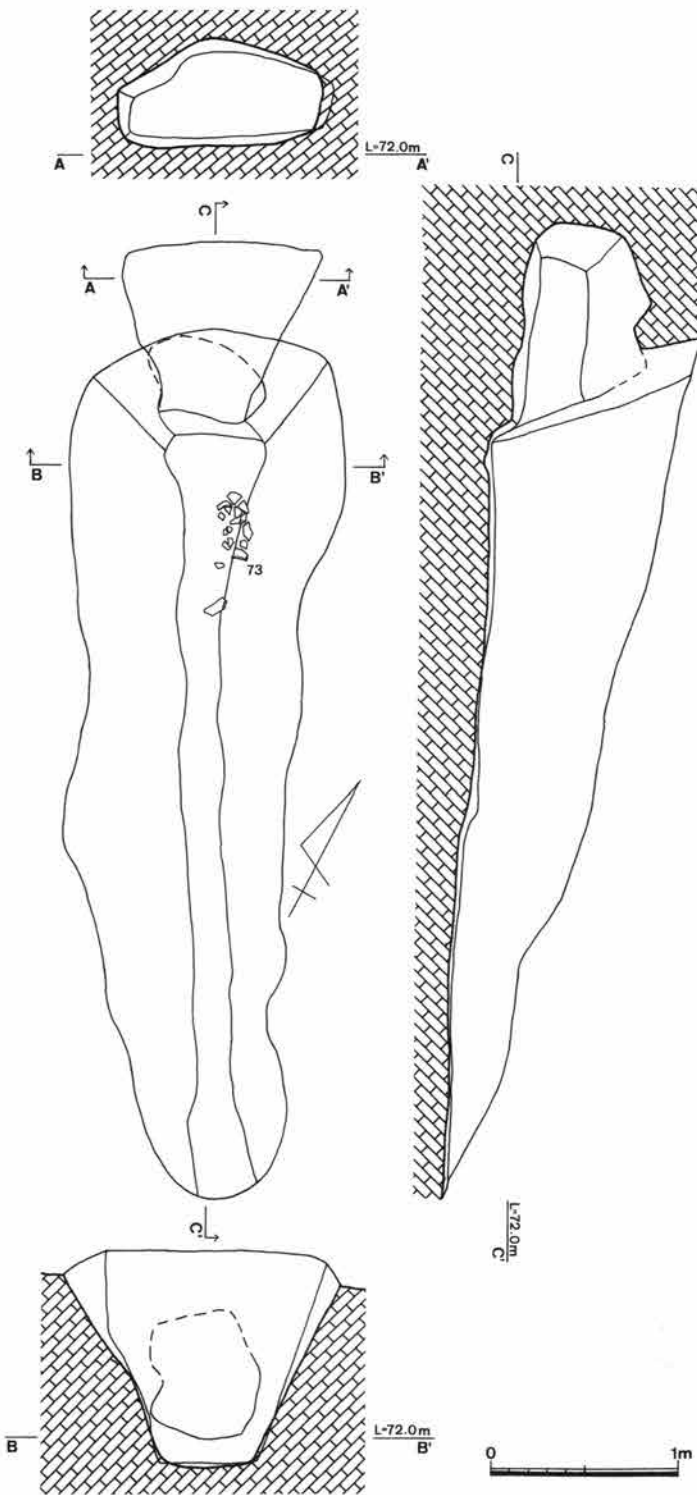
位置と構造(第85図) B6号横穴の北方約29mに位置するB類の横穴である。開口部の標高は74.0mを測り、B6号横穴より3.8mも高く、左坂横穴群(B支群)中、最も高所に位置する。主軸はN-49°-Wを測る。

横穴は、玄室と前庭部から構成される。玄室の平面形は、フラスコ状を呈する。B4~B9号横穴に比べると、奥壁幅に対して玄室長が短く、平面形がややいびつである。天井部は崩落しているものの、奥壁・側壁の残存状況は良好であり、玄室の横断面形はカマボコ状を呈していたと推定される。玄室と前庭部の比高差は約10cmを測る。

前庭部は、断面逆台形の墓



第85図 B10号横穴実測図



第86図 B11号横穴実測図

道状を呈する。A類の横穴に比べ、奥壁幅：玄門部幅の比率が小さくなり、これに対して玄室長：前庭部長の比率が大きくなるという傾向がみられる。B1～B3号横穴を除くB類の横穴、つまり第Ⅲ群の横穴はいずれもこのような傾向がうかがえる。

玄室の閉塞方法は不明である。

なお、この横穴からは人骨・土器などの出土は全くみられなかった。

#### ⑩ B11号横穴

位置と構造(第86図) B11号横穴は、B10号横穴の北東約12mに位置するB類の横穴である。横穴の遺存状況は非常によく、前底部などもあまり削平されていなかった。開口部の標高は72.0mを測る。主軸はN-27°-W

を測る。

横穴を掘削するために整えられた「コ」の字状の  
カット面も良好な状態で遺存していた。

横穴は玄室と前底部から構成される。玄室の平  
面形は、玄門部幅に対して奥壁幅が長い台形状を  
呈する。床面積は約0.7㎡を測る。天井部は、崩落  
していたものの、奥壁・側壁の遺存状況は良好で、  
玄室の横断面形はコマボコ状を呈すると思われる。  
玄室と前庭部の比高差は、約12cmを測る。

前底部は、断面逆台形の墓道状を呈し、床面幅  
は非常に狭い。また、前庭部の側壁は、最大で約1mもあり、非常に狭隘である。玄室長  
(0.96m)に対して、前庭部長(4.04m)は約4倍ある。

玄室の閉塞方法は、不明である。ただ、玄室掘削に伴うカット面が良好に整備されてい  
るので、板戸を使用して閉塞した可能性が考えられる。

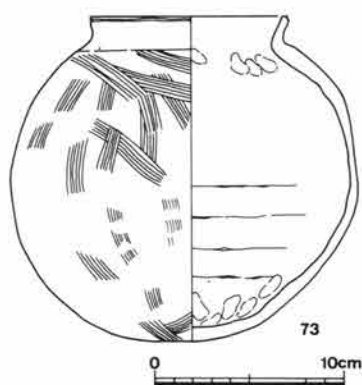
**遺物の出土状況** B11号横穴からは、土師器・須恵器片・鉄滓などが出土した。玄室内  
からの出土遺物は皆無である。玄門部前面の前庭部床面上に土師器甕(73)が置かれていた  
のみである。前庭部の埋土中からは、須恵器片や鉄滓が出土しているが、この横穴に伴う  
ものであるかどうかは不明である。

**出土遺物(第87図)** B11号横穴から出土した遺物のうち、図示し得たのは土師器甕(73)  
のみである。73は、体部外面をハケ、体部内面・口縁部内外面をナデによって仕上げている。  
口縁端部には、沈線状の成形痕がみられる。口径10.3cm・器高17.3cm・体部最大径  
18.6cmを測る。

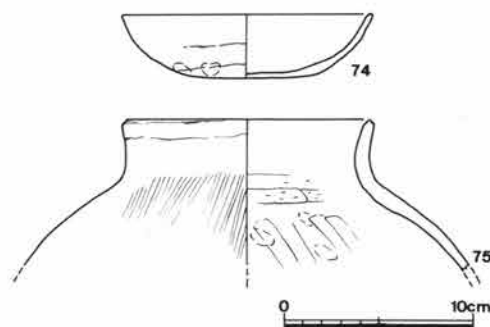
### ①B12号横穴

**位置と構造(第89図)** B12号横穴は、  
B11号横穴の東約3mの距離をおいて隣  
接するB類の横穴である。開口部の標高  
は72.8mを測り、B11号横穴よりも約  
0.8m高所に位置する。主軸はN-22°-Wを  
測る。

玄室の平面形は、玄門部よりも奥壁が  
わずかに広い台形状を呈する。玄室の床



第87図 B11号横穴出土遺物実測図

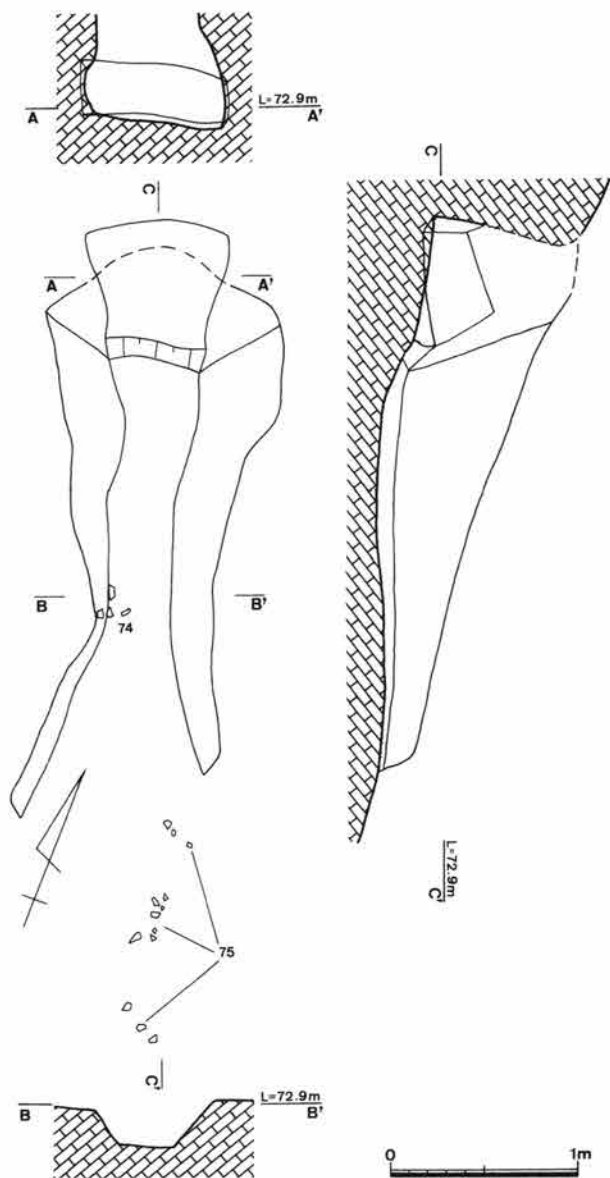


第88図 B12号横穴出土遺物実測図

面積は約0.4㎡を測る。玄室と前底部の間には20cm近くの比高差があるが、明瞭な段差とはいえず、ゆるやかなスロープ状を呈する。

前底部は、断面逆台形の墓道状を呈する。側壁高は、最大で約0.8mある。

玄室の閉塞方法は不明である。ただ、玄室掘削時のカット面がみられることから、B11号横穴と同様に、板戸をカット面にもたれかけさせるような方法が行われた可能性が考えられる。



第89図 B12号横穴実測図

遺物の出土状況 B12号横

穴からは、土師器などが出土した。玄室内からの遺物の出土はない。前底部から土師器甕(75)・杯(74)が出土した。いずれも前庭部の前方から出土しており、出土状況から2次的に移動していることも考えられる。

出土遺物(第88図) B12号横穴からは、土師器杯・甕各1点が出土している。

74は、口径13.0cm・器高3.4cmを測る杯である。内外面ともナデで仕上げる。底部付近に指頭圧痕がみられる。75は、口縁部がわずかに外反する甕である。口縁端部に段差がみられる。体部外面をハケ、体部内面をケズリで仕上げる。口径12.9cm・残存高7.7cmを測る。

⑫ B13号横穴

位置と構造(第90図) B13号横穴は、B12号横穴の東方

約26mにあり、左坂横穴群中最も東に位置する。横穴の規模は群中最小で、床面積は約0.1 $\text{m}^2$ を測るにすぎない。玄室・前庭部とも完全に埋没していた。

小規模な玄室と長い墓道状の前庭部から構成される。玄室の平面形は、フラスコ状とも台形状ともいえない形状を呈する。玄室天井部の形状はやや崩れているものの、カマボコ状を呈すると思われる。開口部の標高は約70.7m、主軸はN-19°-Wを測る。

前庭部は、断面逆台形の墓道状になる。玄室と前庭部の間に段差は認められない。

玄室の閉塞方法は不明である。

**遺物の出土状況** B13号横穴出土の遺物は、前庭部の前方に置かれていた土師器甕1点(76)のみである。出土状況からみて、原位置と考えられる。

玄室や前庭部からは、人骨・遺物の出土はなかった。

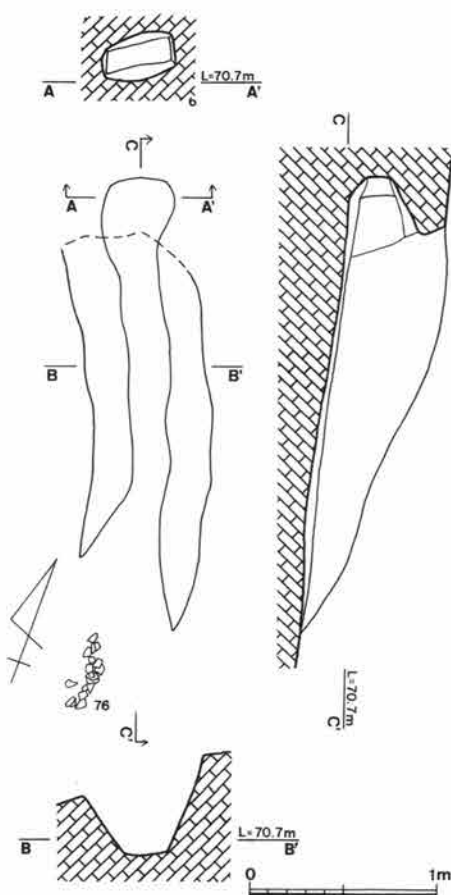
**出土遺物(第91図)** B13号横穴から出土した遺物は、土師器甕1点のみである。

76は、口縁部が「く」の字に外反し、丸底を呈する。口径17.0cm・体部最大径16.6cm・復原高14.3cmを測り、口径が体部最大径をわずかに上回る。

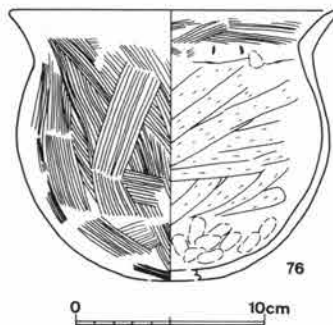
### ⑬火葬墓

**位置と構造(第92図)** 火葬墓は、B7号横穴の南方約9mに位置する。直径0.8m・深さ0.5mの円形の

土坑の中央に蔵骨器を置き、それを大型の須恵器甕で被覆している。土坑内は、ほぼ3層に分けられる。第2・3層は、甕を固定するために置かれた土と考えられる。また、第1層は土坑の埋土であると考えられる。この第3層からは、炭とともに少量の遺物が出土した。遺物は、いずれも細片化したもので、特に供献されたものではないと考えられる。

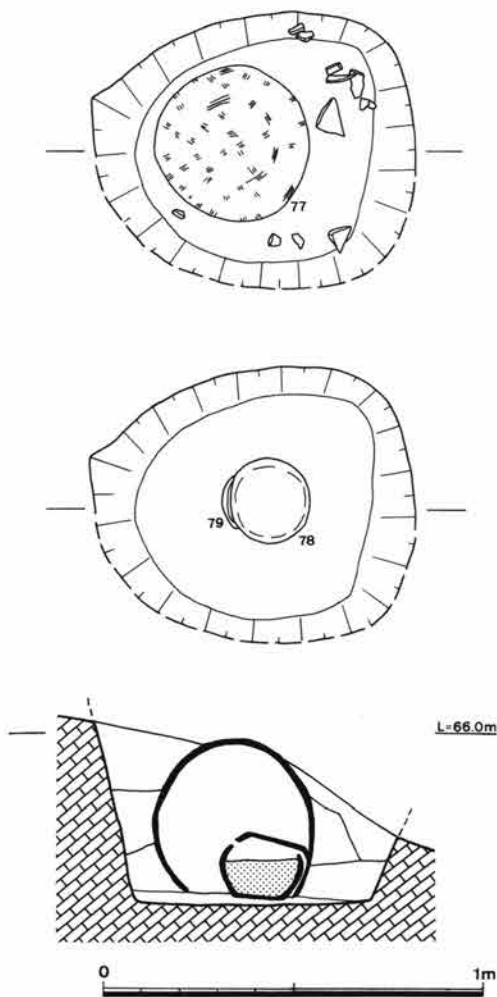


第90図 B13号横穴実測図



第91図 B13号横穴出土遺物実測図





第92図 火葬墓実測図

79は、蔵骨器(鉢)である。平底に内湾する体部をもち、体部最大径がわずかに口径を上回る。口縁端部は丸く納める。体部下半にヘラケズリを施す。口径19.1cm・器高11.2cm・体部最大径20.3cmを測る。

b. 土坑内出土遺物(第93図) 土坑内出土遺物は、細片化しており、本来副葬されたものではないが、火葬墓の時期を知る資料となりうるので、ここに図示するものである。

80・82は、須恵器蓋である。どちらも扁平で、いわゆる宝珠つまみを有する蓋と推定される。80は、口縁端部を下方に折り曲げるが、わずかに内傾する。口径18.3cm・残存高1.6cmを測る。82は、80と口縁端部の形状が異なり、一旦わずかに屈曲した後、下方に折り曲げる。口径15.1cm・残存高1.4cmを測る。

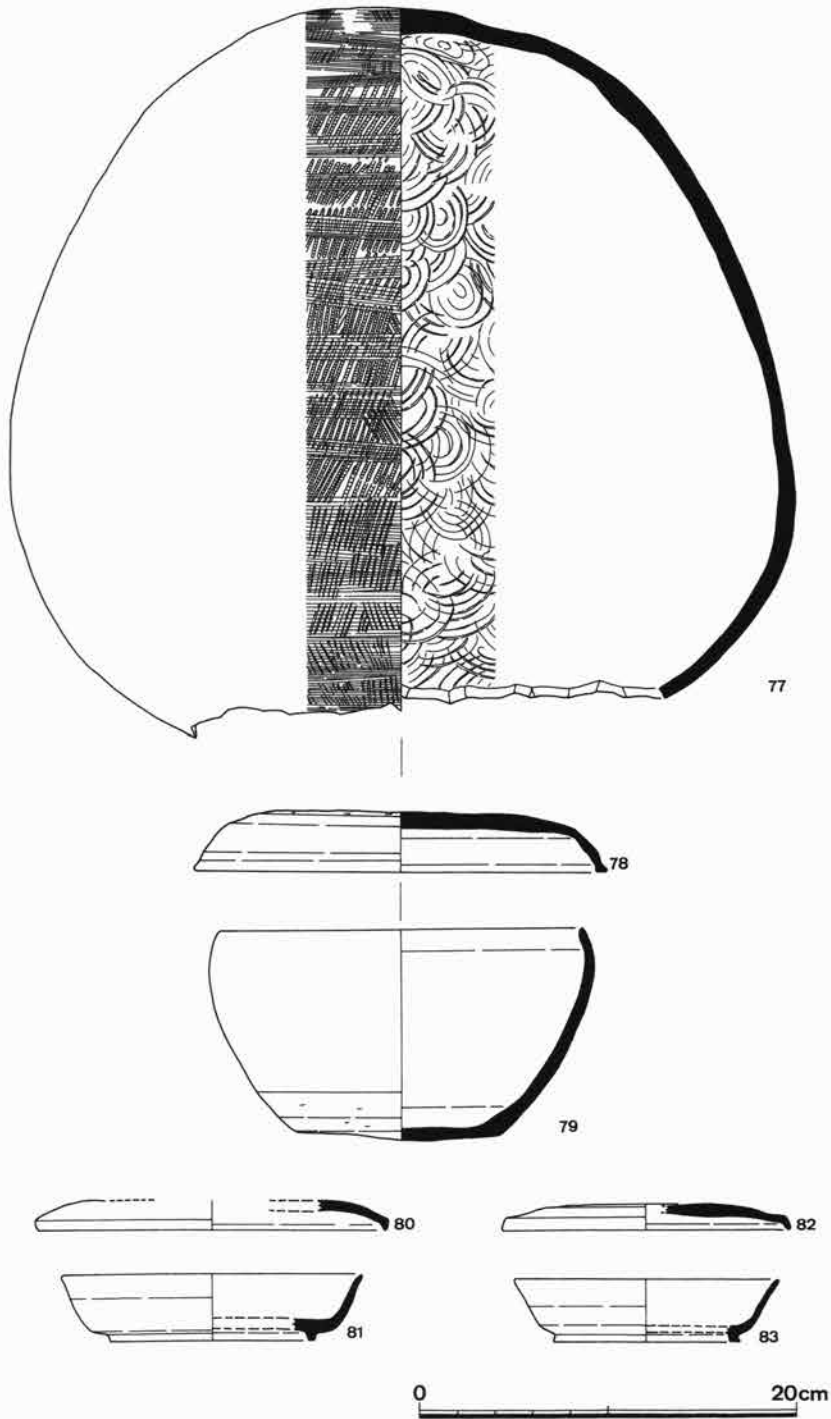
81・83は、外上方に直線的にのびる体部を有する高台付きの杯である。口縁部はわずか

蔵骨器は、須恵器の鉢と蓋からなる。鉢内部には焼骨が多数納められていたが、墓誌や銭貨などは納められていなかった。この蔵骨器を被覆していた須恵器甕は、頸部からやや下がったところで打ち欠いており、それを逆位で蔵骨器にかぶせていたものである。

出土遺物 火葬墓出土遺物には、火葬墓を構成していた須恵器3点のほか、土坑内から破片数点が出土している。

a. 蔵骨器(第93図) 77は、蔵骨器を被覆していた須恵器甕である。口縁部・頸部を打ち欠いている。打ち欠いた部分の大きさと、蔵骨器の蓋の大きさとがほぼ一致することから、口縁部などを打ち欠いたのは蔵骨器を被覆するための処置と考えられる。現状での大きさは、器高37.4cm・体部最大径41.6cmを測る。

78は、蔵骨器の蓋である。平坦な天井部と直線的に開く短い体部をもつ。口縁端部に面をもつ。天井部はヘラケズリを施す。口径21.7cm・器高3.1cmを測る。



第93図 火葬墓出土遺物実測図

に外反気味である。81は、口径15.8cm・器高3.7cmを測る。83は、口径13.9cm・器高3.4cmを測る。これらの須恵器は、同様に蓋杯のセットが出土したB5・B8号横穴よりも後出すると考えられる。

## 5. まとめ

今回の調査成果について、若干の整理と問題点についてまとめることにする。

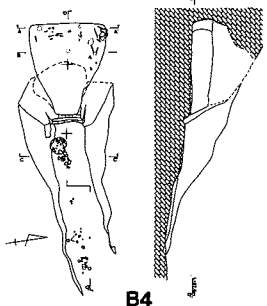
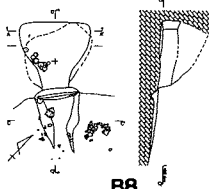
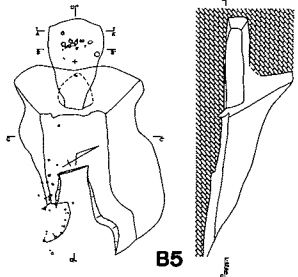
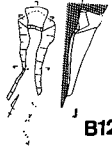
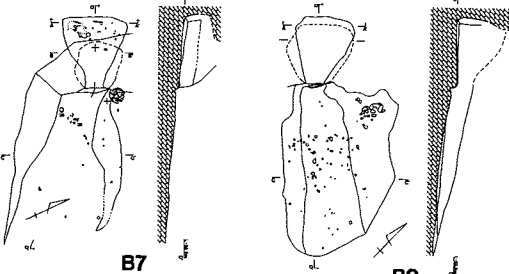

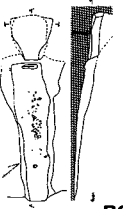
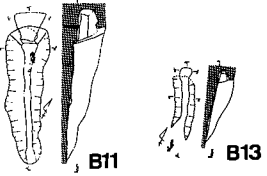
### ①小規模な横穴について

今回の調査で注目されたのは、玄室床面積が1㎡に満たないような小規模な横穴が多数検出された点である。これらは、小規模なために大型の横穴のような整った形状を呈しないが、玄室と前庭部を持ち、また遺物の出土もみられるなど、横穴としての要件を満たしているので、横穴と考えて問題のないものと考えられる。小規模な横穴の用途については、供献遺物埋納用、火葬骨埋納用、小児埋納用などの諸説があるが、<sup>(注20)</sup>具体的な検出例は知られていなかった。

今回検出した8基のうち、3基の横穴から焼骨を検出し、これら小規模な横穴の用途として、焼骨を埋納する例のあることが確認された。近隣に所在する大田鼻横穴群では、大型の横穴の追葬時に焼骨が埋納された例は知られていたが、<sup>(注21)</sup>焼骨の埋納を専用とした小規模な横穴は、少なくとも西日本には例がないという。<sup>(注22)</sup>また、焼骨が検出された横穴を含む6基の横穴から、土器の出土をみた。後述するように、土器の年代観から、これらすべてを焼骨の埋納用と考えることはできない。以下では、焼骨の埋納がみられたものと、みられなかったものについて、今、少し詳しくみていくことにしたい。

焼骨を埋納した横穴が出現した背景には、火葬の風習が広まったことと関連すると考えられる。これまでの研究によって、火葬の確実な例は、僧道昭が火葬にされた西暦700年であり、火葬の風習はこれを前後する時期に現われたと考えられている。<sup>(注23)</sup>そして、皇族・貴族層を中心に火葬の風習がしだいに広まっていったものと考えられる。一方、今回焼骨が検出されたB1・B2・B6号の各横穴からは、いずれも遺物が出土しており、おおむね8世紀前半に位置づけられるものである。大和を中心として広まりつつあった火葬の風習をいち早く取り入れた結果が左坂横穴群(B支群)であることを示すと考えられる。両者の関連性は、高いとみななければならない。

それでは、なぜ大宮町域でこのような横穴が築造されるようになったのであろうか。それは、この地域が丹後半島でも横穴が数多く築造される地域であることと関係するのであろう。すなわち、火葬の風習を取り入れることによって、この地域で一般的にみられる横穴を焼骨専用の横穴として利用したものと考えられる。

	第 I 群	第 II 群	第 III 群
	 <p>B4</p>	 <p>B8</p>	
	 <p>B5</p>		 <p>B12</p>
		 <p>B7      B9</p>	
	 <p>B1. B2</p>	 <p>B6</p>	 <p>B11      B13</p>

第94图 左坂横穴群(B支群)変遷図

ところで、B1・B2号横穴が属する第Ⅰ群には、大型の横穴としてB4・B5号横穴があり、B6号横穴が属する第Ⅱ群には、同じくB7～B9号横穴がある。これらは、後述するように、焼骨埋納用小横穴よりも先行して築造されていると考えられる。焼骨埋納用小横穴で追葬が行われたかどうかは明らかではないが、B1・B2号横穴のように、前庭部を共有しつつも焼骨を埋納する玄室を分離していることは、被葬者の個人としての人格が強調されたのではないだろうか。つまり、焼骨埋納用小横穴は、一個人のために造られたと考えることができよう。このことは、それまでの家族墓的な大型の横穴が質的に変化したことを示すものとして注意されなければならない。したがって、左坂横穴群(B支群)のうち、第Ⅰ群・第Ⅱ群としたグループでは、家族墓的な大型の横穴の築造から、焼骨を埋納する、おそらくは限られた人々のための小規模な横穴の築造へと変化していったと考えられる。

これらに対して、焼骨が検出されなかった5基のうち、B11・B12・B13号横穴からは遺物が出土しており、後述する出土遺物の編年観からB1・B2・B6号横穴よりも先行する可能性も考えられる。また、遺物の出土位置がいずれも前庭部であることは、供献されたことを物語っており、玄室内から人骨が出土しなかったものの、少なくとも供献遺物埋納用ではなく、再葬骨埋納用なり小児埋納用なりの目的をもって築造されたものと考えべきであろう。したがって、すべての小規模な横穴が焼骨埋納専用ということとはできない。焼骨を埋納しなかった小規模な横穴群がいずれも第Ⅲ群に属することからも、焼骨埋納用の小規模な横穴とは区別して考えるべきである。ただ、第Ⅲ群の小規模な横穴と時期的に併行すると考えられる第Ⅰ群・第Ⅱ群の大型横穴と比較した場合、どのような階層の人々が埋葬されたのか、併行する時期に異なった規模の横穴が築造されたのかなど、課題はあるものの、同種の資料が少ないため、今後の課題としたい。

なお、今回検出し得た火葬墓は、出土遺物から焼骨埋納用小横穴よりも後出と考えられ、小規模な横穴への焼骨の埋納行為が、やがては畿内風の蔵骨器を使用した、典型的な火葬墓へと変化していくと考えられる。

## ②土器からみた左坂横穴群B支群の変遷

今回、検出された13基の横穴の相対的な前後関係についてみていくことにしたい。各横穴の相対的な位置を決定するのは、言うまでもなく出土土器群である。しかし、各横穴においてまとまった土器の出土は希であり、土器が1、2点、あるいは出土しなかった横穴さえある。したがって、特定の器種の型式学的な前後関係の整理はむずかしいが、出土土器の個別の検討を通じて、全体の前後関係を明らかにしていくことにしたい。

まず、最古と考えられる一群として、B4号横穴出土土器群と、B8号横穴出土土器群

をあげることができる。B 8号横穴出土の須恵器群は、返りのある杯蓋を含み、飛鳥ⅣないしⅤ期併行段階に位置づけられる。これに対して、B 4号横穴出土土器群中には須恵器蓋杯類が含まれておらず、直接、B 8号横穴と比較することはできない。しかし、B 4号横穴出土の土師器杯と同型式のものは里ヶ谷6号横穴などに見られ、7世紀後半に位置づけることができる。<sup>(註24)</sup>したがって、B 8号横穴とB 4号横穴との時間差はそれほどないものと思われる。

B 5号横穴出土の土師器高杯は、畿内産土師器杯を模倣した杯部を有するものである。この杯部は比較的深手で、底も完全な平底ではなく、平城Ⅰ期段階に比定できる。また、B 5号横穴出土の須恵器蓋は、天井部の高いものと扁平なものが存在し、天井部の高い蓋のみで構成されるB 8号横穴出土の須恵器蓋杯類より後出する要素である。以上から、B 5号横穴は、B 4・B 8号横穴に次ぐ時期のものであると考えられる。

B 5号横穴同様、畿内産土師器高杯を模倣したB 7号横穴出土の土師器高杯は、明らかにB 5号横穴出土の土師器高杯よりも形式的に後出する。平城Ⅱ期段階に位置づけられよう。また、土師器杯についても直線的な立ち上がりを呈しており、B 5号横穴出土の土師器杯よりも形式的に後出するものと考えられる。B 7号横穴は、B 5号横穴よりも新しく位置づけられるものであろう。

B 7号横穴出土の土師器杯と同形態をとるものとして、B 1・B 6号横穴出土の土師器杯をあげることができる。B 6号横穴では、須恵器杯が「S」の字状を描くプロポーシオンを呈しており、B 8号横穴で出土した須恵器杯よりも後出する型式のものである。このことから、B 1・B 6及びB 2号横穴は、他の大型横穴に比べて相対的に新しく位置づけられる。

先に、第Ⅲ群としたB 10号横穴～B 13号横穴については出土遺物が極端に少なく、厳密に比較することはできない。B 11・B 12号横穴出土の土師器甕は、ほぼ球形の体部に短い口縁部が付くものである。体部球形の土師器甕は、B 2・B 6号横穴にも存在し、B 11・B 12号横穴出土のものは、これらに併行または退化した型式と考えられる。B 12号横穴出土の土師器杯は、B 4号横穴出土の土師器杯と同型式のものが出土しているが、時間的な前後関係は不明瞭である。

火葬墓から出土した須恵器杯蓋は、扁平な形状を呈しており、また端部の形状からみて、B 5号横穴出土のものよりもやや後出すると考えられる。平城Ⅱ期またはⅢ期段階に位置づけられるか。

土器については、以上のとおりであるが、すでに述べたようにB 8号横穴に規制されるような形で、B 7・B 9号横穴が築造されていると考えられることから、B 7・B 9号横

穴は、B 8号横穴よりも後出であると考えられる。ただし、B 7号横穴とB 9号横穴の先後関係は、B 9号横穴から良好な土器資料の出土をみないことから、明らかにしがたい。

以上の検討から、横穴の築造順序をまとめると、ほぼ4段階に分けることができる(第94図)。また、平面分布とした第Ⅰ～Ⅲ群をそのまま築造におけるグループとして捉えることができる。すなわち第Ⅰ群は、B 4号横穴→B 5号横穴→B 1・B 2号横穴の順と考えられる。第Ⅱ群は、B 8号横穴→B 7・B 9号横穴→B 6号横穴の順と考えられる。第Ⅲ群は、B 12号横穴→B 13号横穴→B 11号横穴の順と考えられる。なお、遺物が出土しなかったB 3・B 10号横穴については、築造順序を明らかにすることはできなかった。

この結果、焼骨が検出されたB 1・B 2・B 6号横穴が相対的に新しく位置づけられること、また焼骨埋納用小横穴とは別に、焼骨を埋納しない小規模な横穴を築造する一群の存在が明らかになった。

また、横穴の実年代については、最初に築造されたB 4・B 6号横穴が7世紀後半、B 1号横穴などの焼骨埋納用小横穴が8世紀前半と考えられる。そして、最も新しく位置づけられる火葬墓は、8世紀中葉に近い時期と考えられる。

付表4 左坂横穴群(B支群)一覧表

遺構名	旧番号	玄室		前庭部		人骨	出土遺物	備考
		全長	奥壁幅	玄門部幅	全長			
B 1号横穴	4号横穴	1.0	0.9	0.6	1.9		焼骨 須恵器長頸壺、土師器杯・壺	
B 2号横穴	8号横穴	0.9	0.6	0.4	1.6		焼骨 土師器甕・杯	
B 3号横穴	9号横穴	0.6	0.6	0.3	0.9	0.40	なし	
B 4号横穴	1号横穴	3.2	2.7	0.9	6.1	1.30	2体以上 須恵器甕・横瓶・短頸壺、土師器杯、刀子・鉄鏝、耳環	
B 5号横穴	2号横穴	3.2	1.8	0.7	5.2	2.10		須恵器蓋杯、土師器杯・高杯
B 6号横穴	3号横穴	1.6	1.4	0.4	4.5	1.20	焼骨 須恵器杯・長頸壺・土師器甕・杯	
B 7号横穴	5号横穴	2.4	2.2	0.6	5.4	1.50	1体以上 土師器杯・高杯	平安時代末に再利用
B 8号横穴	6号横穴	2.3	2.3	0.9	1.7	0.90	1体以上 須恵器蓋杯・平瓶・甕	
B 9号横穴	7号横穴	2.2	2.1	0.6	5.6	1.50	須恵器甕・土師器甕・黒色土器椀	平安時代末に再利用
B 10号横穴	11号横穴	0.8	0.9	0.5	2.6	0.65	なし	
B 11号横穴	12号横穴	0.9	1.1	0.4	4.0	0.30	土師器甕・鉄滓	
B 12号横穴	10号横穴	0.7	0.8	0.6	2.8	0.50	土師器甕・杯	
B 13号横穴	13号横穴	0.4	0.4	0.3	2.0	0.25	土師器甕	

以上の検討の結果、左坂横穴群(B支群)は、7世紀後半から8世紀中葉にかけて営まれた横穴群であり、特に小規模な横穴の存在が特徴的である。

(筒井崇史)



現地説明会風景



### (3) 芋谷遺跡

#### 1. 位置と周辺の遺跡分布

芋谷遺跡は、京都府中郡大宮町口大野小字芋谷に所在する。遺跡は、竹野川左岸の標高83m付近の東西にのびる丘陵稜線・斜面に立地し、現在の集落より500mほど谷奥に入ったところに位置する。

調査地北方周辺は、すでに大野団地造成工事に伴い、平成2年度より当調査研究センターと京都府教育委員会が分担して調査を実施しており、池田古墳群(3基)<sup>(注25)</sup>・アバタ遺跡<sup>(注26)</sup>・阿婆田窯跡群(6基)<sup>(注27)</sup>・通り古墳群(3基)<sup>(注28)</sup>・古土井遺跡<sup>(注29)</sup>・砥石場西古墳群(1基)などが調査され、多大な成果があがっている。この大野団地造成予定地内には、今後調査予定の古墳・遺跡が多数あり、遺跡の密集地となっているところでもある。

芋谷遺跡は、製鉄遺跡であることから、町内に存在する製鉄関連遺跡をみる。

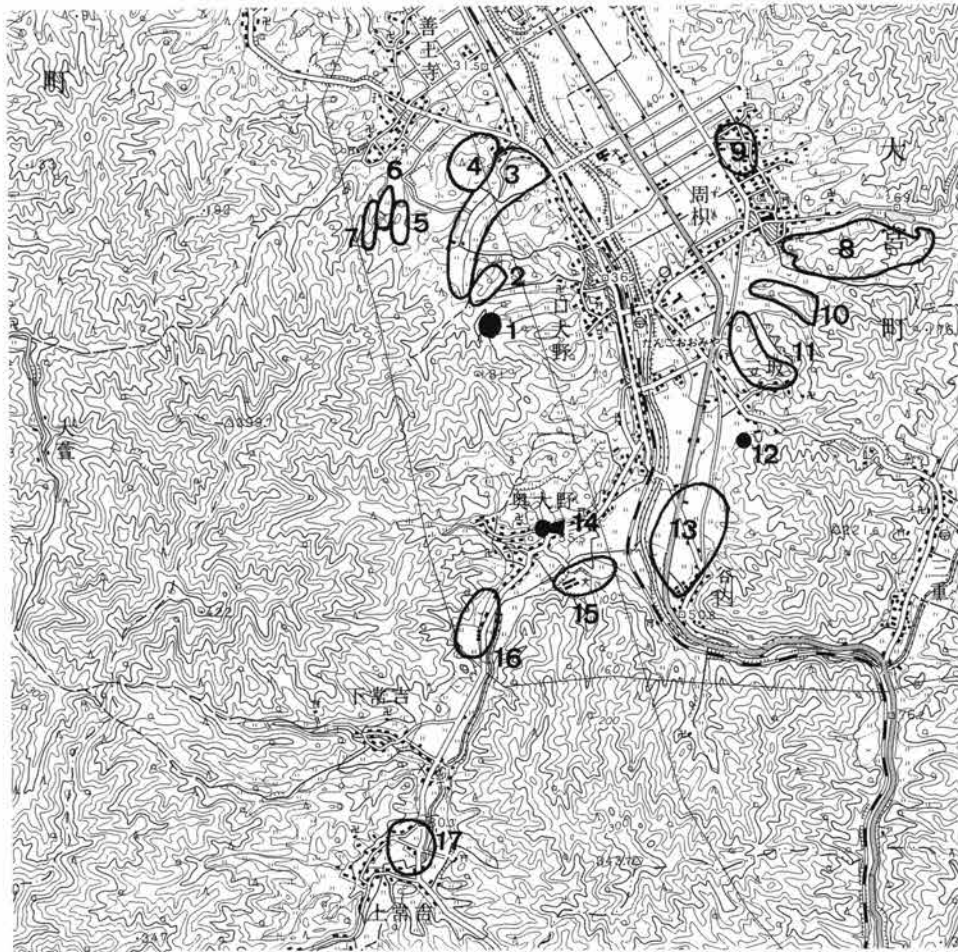
芋谷遺跡の東約1.7kmの有明横穴群(1号横穴)<sup>(注30)</sup>からは、横穴の再利用に伴うと思われる鉄滓・カマド・フイゴ羽口が多数出土し、横穴の前面の斜面からも木炭・鉄滓の出土がみられる。時期的には、横穴の最終追葬が8世紀後半と考えられるので、それ以降となる。関連しそうな遺物として、3号横穴から11世紀と考えられる甌と杯の出土が認められる。

有明横穴群の北東1kmの左坂古墳群C支群15号墳<sup>(注31)</sup>からは、5世紀後半の木棺直葬墳の墓壙上に供献されていたが、木棺の腐朽とともに内部に落ち込んだ状態で出土している。

また、芋谷遺跡より南へ3.5kmの常吉川右岸の上野遺跡<sup>(注32)</sup>からは、ほ場整備中に鍛冶滓が出土しているが、遺構に伴わないため時期は不明である。上野遺跡自体は、弥生時代後期～鎌倉時代にかけてのものである。

これらの鉄滓は、新日本製鉄株式会社の大澤正己氏に分析していただいた結果、有明横穴群出土のものは砂鉄系製錬滓、左坂古墳群C支群15号墳出土のものは砂鉄系精錬鍛冶滓、上野遺跡出土のものは砂鉄系鍛錬鍛冶滓であるという結果をいただいた。

以上、3遺跡が大宮町内で現在までに確認されている製鉄関連遺跡である。丹後地域での製鉄遺跡は、半島中央部の弥栄町を中心として広範囲に広がるが、大宮町内では今日まで分布調査によっても鉄滓の出土するところがなかったため、製鉄遺跡は存在しないものと考えられてきた。しかし、左坂古墳群C支群15号墳出土の砂鉄系精錬鍛冶滓は、弥栄町遠所遺跡群内で5世紀末～6世紀初頭に製鉄を行っていた可能性を示唆する場所も確認されており、丹後半島内での製鉄の開始時期を考える上で重要な遺跡となる。芋谷遺跡の発



第95図 調査地位置図及び周辺主要遺跡分布図

- |            |                  |                       |          |          |
|------------|------------------|-----------------------|----------|----------|
| 1. 芋谷遺跡    | 2. 通り古墳群         | 3. 菅外遺跡               | 4. 小池古墳群 | 5. 池田古墳群 |
| 6. アバタ遺跡   | 7. 阿婆田窯跡群        | 8. 左坂古墳群・横穴群・里ヶ谷横穴群   |          |          |
| 9. 大宮売神社遺跡 | 10. 帯城古墳群・大田鼻横穴群 | 11. 有明古墳群・横穴群・三坂神社古墳群 |          |          |
| 12. 大谷古墳群  | 13. 谷内遺跡         | 14. 新戸古墳              | 15. 裏陰遺跡 | 16. 正垣遺跡 |
| 17. 上野遺跡   |                  |                       |          |          |

見によって、奥大野に存在する奈良時代後期の官衙的な色彩の濃い正垣遺跡<sup>(註33)</sup>や、国分寺の造営や百万町歩開墾計画に代表されるように、地方レベルでの土木工事など鉄の需要に答える形で製産地が拡大していったとも考えられる。

## 2. 調査の経過

芋谷遺跡は、大野団地造成工事に伴う工事用道路開削中に発見された遺跡で、1988年度版『京都府遺跡地図』にも記載されておらず、遺跡空白地帯となっていたところでもある。



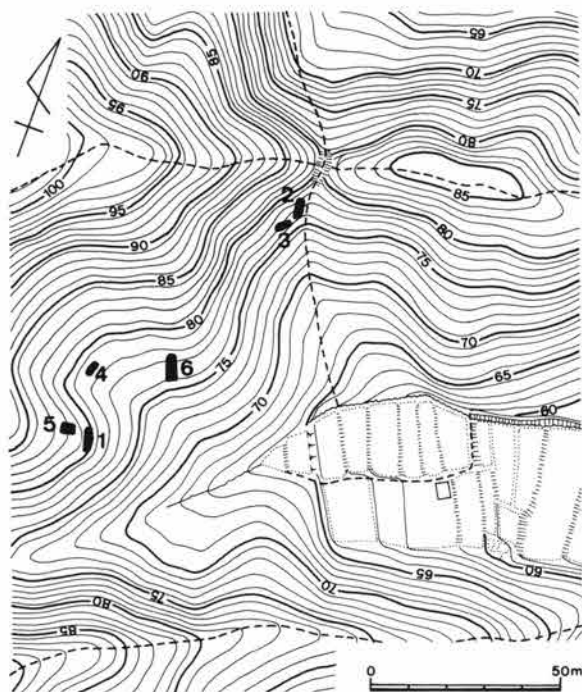
第96図 国営農地大野団地・調査地周辺埋蔵文化財分布状況

- |             |             |           |           |           |
|-------------|-------------|-----------|-----------|-----------|
| 1. 芋谷遺跡     | 2. 古土井遺跡    | 3. 砥石場古墳群 | 4. 通り古墳群  | 5. 山崎古墳群  |
| 6. 十二社山古墳群  | 7. 十二社古墳群   | 8. 十二社奥古墳 | 9. 菅外遺跡   |           |
| 10. 砥石場西古墳群 | 11. 太郎ヶ谷古墳群 | 12. 清漬古墳群 | 13. 池田古墳群 | 14. アバタ遺跡 |
| 15. 阿婆田窯跡群  |             |           |           |           |

調査対象地は、尾根稜線上に良好な状況で残存する製鉄炉1基、仮設道路で炭窯本体が大きく削平された登窯状炭窯2基、伏焼式炭窯2基である。調査は、工事中の発見でもあり早急に調査を終了する必要性に迫られ、造成区域内全体の遺構の分布状況は把握できなかった。

調査は、当調査研究センター調査第2課調査第1係長伊野近富、同主任調査員増田孝彦があたり、同調査員田代 弘が補佐した。本概要の執筆は、伊野・増田が行った。

現地調査は、製鉄炉、炭窯周辺の試掘調査を京都府教育委員会が行い、試掘調査終了後の11月10日より、重機による表土除去作業を開始した。重機掘削は11月13日まで行い、一部表土の除去ができた11日から人力による遺構検出作業に着手した。



第97図 芋谷遺跡遺構分布図

1. 製鉄炉 2. 木炭窯 1 3. 木炭窯 2 4. 木炭窯 3  
5. 木炭窯 4・土器埋納土坑 6. 木炭窯 5

説明会を実施し、調査を終了した。調査終了前日の12月17日に、製鉄炉北側斜面に新たに工事用道路を開削したところ、登窯状炭窯が1基検出された。そのため、工事で切り土された部分のみ調査を行い、残る部分は盛り土により保存されることになったため、調査は実施しなかった。

### 3. 調査概要

調査によって検出した遺構は、製鉄炉1基、登窯状炭窯3基、伏焼式炭窯2基、土器埋納土坑1基である。調査終了直前に検出された登窯状炭窯は、削平部分のみ調査した。

木炭窯の遺構番号については、調査順に付したものである。以下、概要について記す。

#### ①製鉄炉

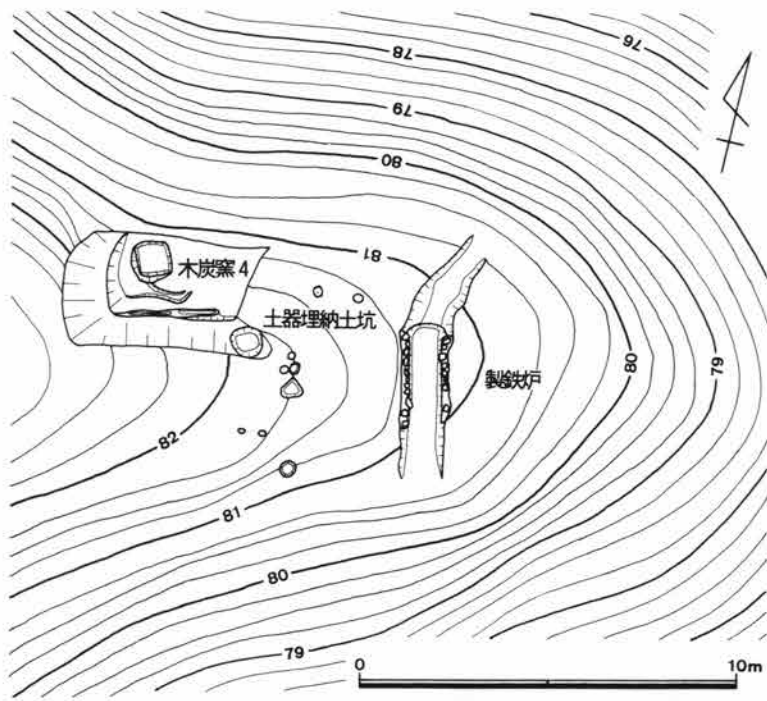
調査地南端、標高81m付近の丘陵稜線上に位置する。

製鉄炉は、本体となる基礎部分とそれにとりつく排滓溝からなる。製鉄炉の築造は、尾根稜部を削平し、平坦部を設けた後、尾根に直交する幅約1mほどの南側に開く「U」字形の本体基礎と、南側排滓溝を兼ねた掘形を掘削する。その後、本体基礎に相当する部分を焼いて乾燥させる。この時点か、次の石材を設置した時点かで北側排滓溝を掘削したよ

尾根稜線上で検出した製鉄炉は、残存状況が良好で、炉壁の芯材・防湿のため使用されたと考えられる石材や、炉壁の基礎部分、製鉄炉下部構造が明瞭にわかる堆積状況であった。

一方、登窯状炭窯は、工事用道路によって本体を1/2近く削平され、実際の規模などは不明である。伏焼式炭窯は、製鉄炉付近で検出したものは、良好な状態で遺存していたが、谷部で検出したものは、大半が削平され全体は知りえなかった。

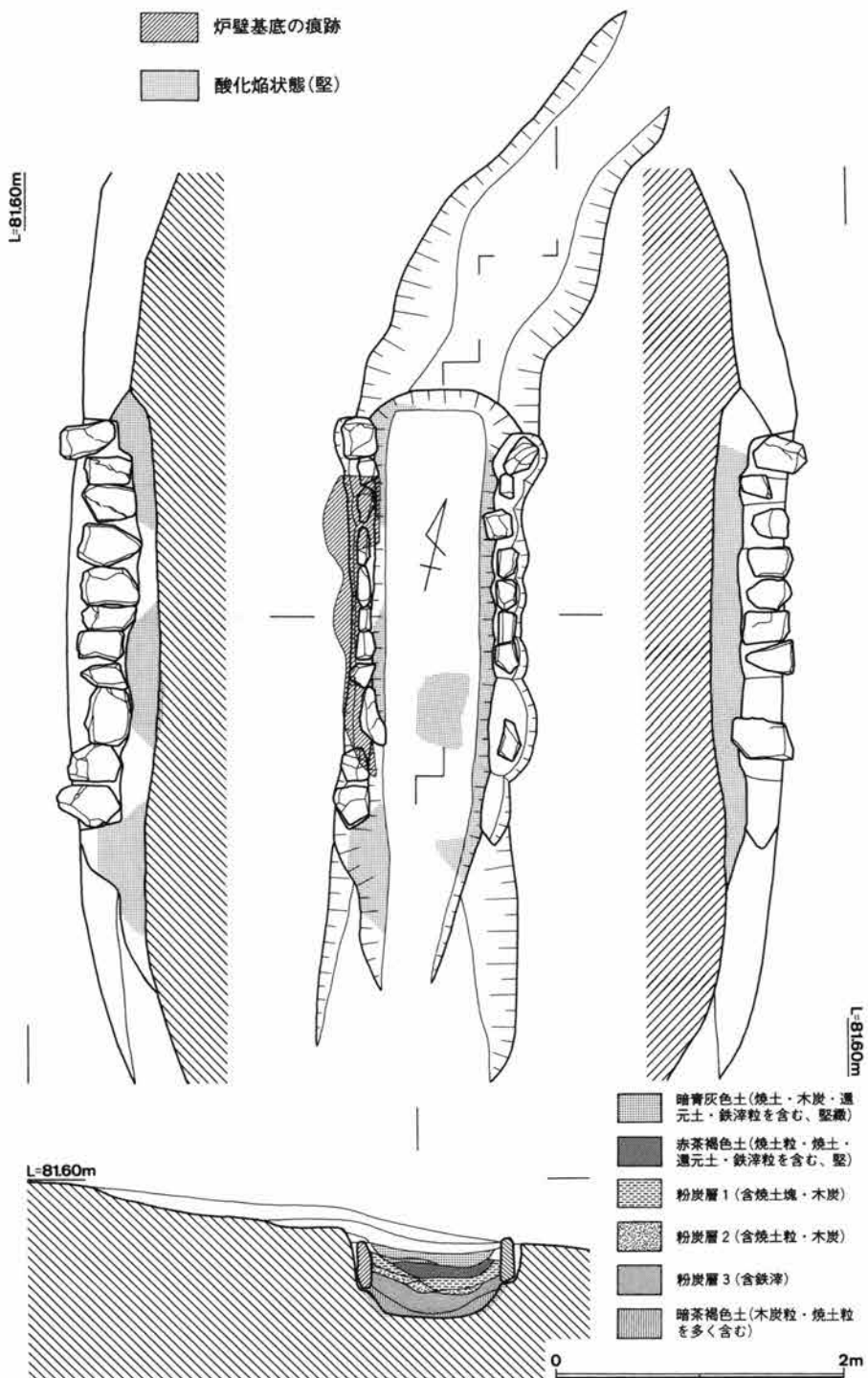
実測・写真撮影はその都度行い、12月17日にはすべての発掘器財を撤収し、18日には関係者



第98図 製鉄炉周辺地形図

うである。排滓溝は、南側は炉本体に対して直線的であるが、北側排滓溝はやや丘陵先端方向にカーブを描く。本体基礎を焼き固めた後、長軸方向に沿って両側とも幅約0.1m・長さ2.9m・深さ約0.3mにわたり掘り広げ石材を設置する。石材は、一石ずつ設置していったようで、石材の底辺の形状に合わせて、掘り広げた底面の形、深さが異なる。また、石材の底面は、炉基礎底面に達せず約20cm上方でとまる。石材は、上端が広く下方が狭い不安定な設置状況である。石材自体は、熱を受けたようで赤色変化している。また、石材の上端は、東側では掘形検出面よりも0.1m上方に飛び出る。西側の石材と掘形の間や一部石材の上端には、炉壁の下端であったと思われる厚さ5cm・幅37cm・長さ2.1mにわたる半還元状態の粘土塊が認められた。

基礎内部は、最下層に木炭混じりの焼土粒を多く含む層が認められる。その上には、掘形の約1/2ほどにまで達する砂・砂鉄・鉄滓・焼土粒・木炭粉を充填し、つき固めた2層にわたる粉炭層による防湿施設が形成される。その上には、鉄滓・木炭・焼土粒を含んだ還元された炉底であったと推定される粒状化の進んだ、厚さ10cmほどのレンズ状の堆積がみられる。さらにその上には、焼土・鉄滓・鉄塊・炉壁・木炭などが多く堆積した還元された炉底と考えられるレンズ状の堆積が認められた。2度にわたる操業を物語るものであろうか。この上面の炉底は石材に密着せず、石材との間に幅5cmの空間があく。これ



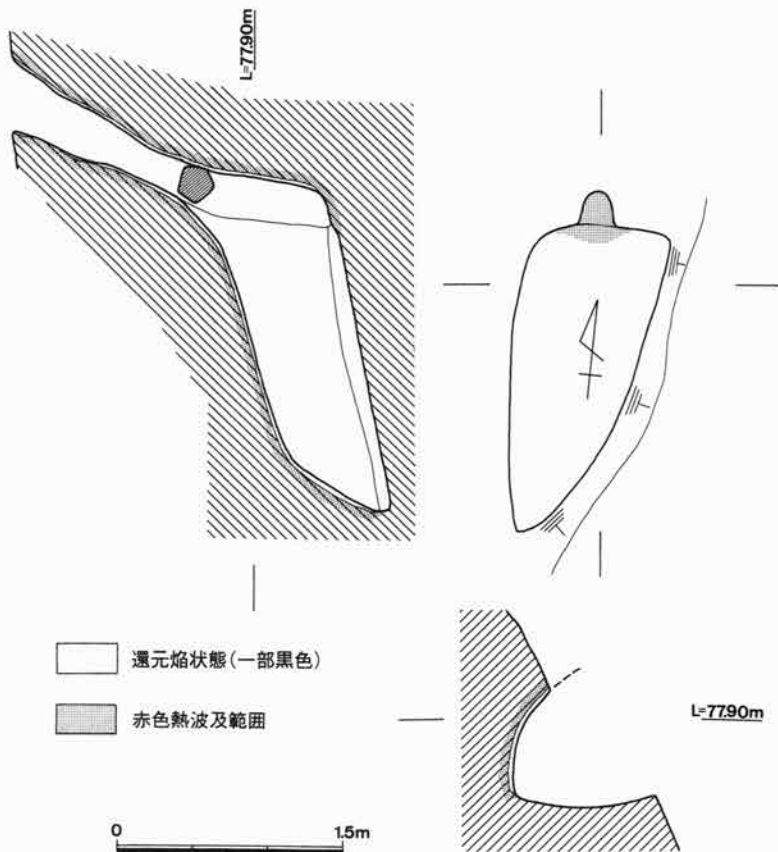
第99図 製鉄炉実測図

は、築炉段階で粘土が充填されなかった部分と考えられる。炉内は、2回にわたる炉底と考えられる痕跡が認められ、南側排滓溝でも上下2回の流出滓の堆積があったが、北側排滓溝では1回の堆積しか認められなかった。

石材の設置されている部分を炉壁中心とし、炉底と石材との空間、石材と掘形検出面に貼り付いていた炉壁粘土から炉内の内法を求めると、長さ2.0m・幅0.8mとなり、炉壁基礎部分の厚さは約0.4mとなって、長方形箱形炉が復原される。

製鉄炉西側には、3m×4mの平坦な削り出し面が造られているため、何らかの送風施設が設けられていた可能性があるものの、調査ではその痕跡を確認することはできなかった。製鉄炉周辺では柱穴状の掘り込みも確認されたが、規則性もなく炉を覆うような建物は存在しなかったようである。

廃滓場は、丘陵斜面が急なことから鉄滓の堆積もほとんど認められず、谷部に堆積していたものと考えられるが、谷部は水田の開墾によって鉄滓の堆積層はなく、基本的には廃



第100図 木炭窯1実測図

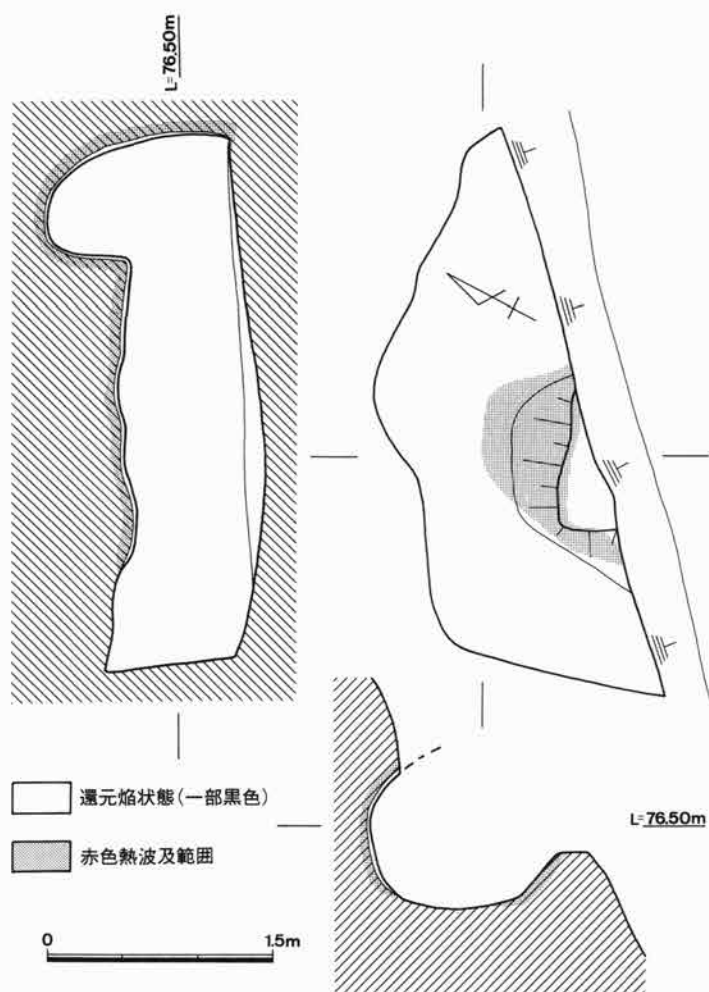
滓場は消滅したものと考えられる。

粉炭層中から流出滓・鉄塊状の遺物が出土しているが、分析の結果、芋谷遺跡の鉄滓と成分値が似ており、芋谷遺跡の周辺地域で製鉄を行い、それをこの地に運び込み、築炉段階で入れたものと考えられる。また、この中には原料砂鉄も含まれており、これらの鉄滓の原料となることも判明しており、製鉄炉築造に伴う祭祀的な意味合いの強いものといえよう。

②登窯状炭窯

調査地北端の標高77.5m付近に位置する。2基が近接して築かれているが、仮設道路により削平されて全体の規模は不明である。

木炭窯1 残存長2.3m・同幅1m・同高0.6m、床面傾斜角11°の地山を削り貫いて造



られた地下式の炭窯である。内部は、崩落した天井部で埋まり、窯壁は粘土を貼り付けておらず、素掘りのままである。炭化部床面はほとんど焼けず、煙道部付近のみ赤色被熱部分が認められる。床面からは木炭の小片・焼土塊が少量出土した。

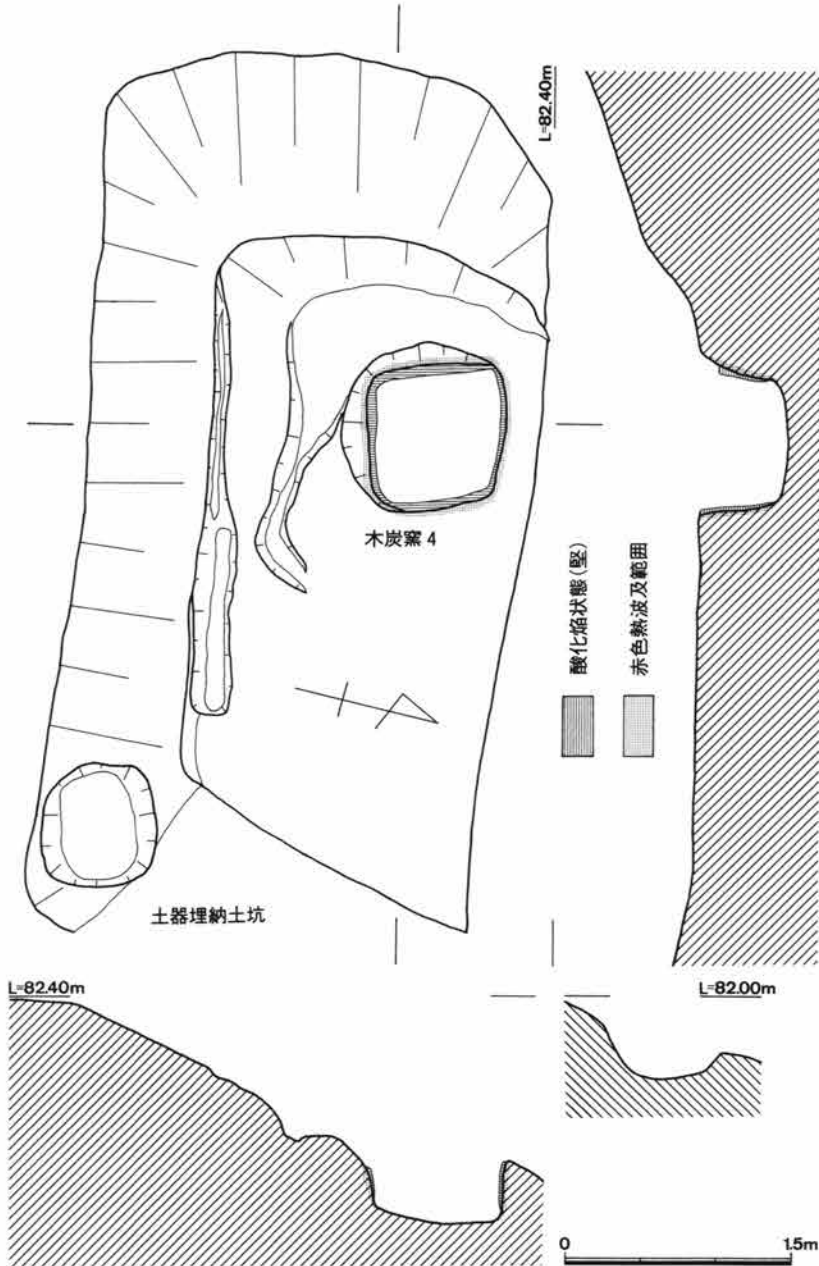
煙道は、奥壁床面中央部から右上方へ2.1mほどのびている。煙道の掘削は、その形状から内・外面から行われたようである。煙道閉塞のために置かれていたと思われる石材が、

第101図 木炭窯2実測図



窯体天井部よりやや上方の煙道部に転落した状態で検出された。炭窯本体は、等高線に直交せず約45°丘陵先端側に振っている。灰原は、仮設道路によって削平されて存在しない。

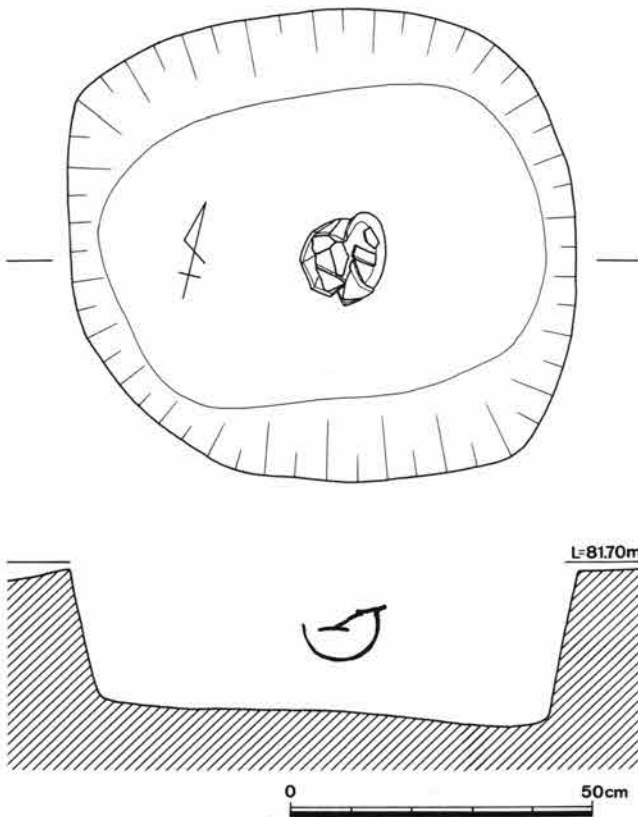
木炭窯2 木炭窯1の西側に近接して築造されたもので、奥壁付近の一部が削平される。また、天井部は自然崩落しており、その際に窯全体が埋まったようである。木炭窯1と同



第102図 木炭窯4・土器埋納土坑実測図

様、地山を削り貫いて造られた地下式の炭窯である。炭化部は、等高線に平行するが、焚き口は本体西端に直交する形で造られる。補助燃焼口(横口)付炭窯の横口が1か所だけついていたような形態をなす。炭化部は、焚き口付近で幅1m、最もよく残る部分での幅1.2m・残存長3.5m、床面傾斜角約4°を測る。焚き口付近が狭く、奥壁側ほど広がる。窯壁は、基本的には素掘りのままであるが、天井部の一部には粘土を貼り付ける。また、焚き口及び炭化部の焚き口付近の窯壁は粘土を貼らない。窯体の残存高は0.8mを測り、焚き口は幅0.6m・長さ1.5m・高さ0.9mが残存していた。煙道は、奥壁付近の炭化部側壁が天井部にかけてややえぐれたような状態を呈する部分があり、この部分が煙道部に相当する可能性がある。床面はほとんど焼けず、床面に木炭の小片が多数みられたが、北壁付近の床面には取り残されたと考えられる、やや大きめの木炭が残っていた。焚き口には、灰・木炭の小片が多数堆積していた。灰原は、仮設道路により削平され存在しない。

**木炭窯 5** 調査終了直前になり新たな工事用道路開削により、製鉄炉北側の谷を隔てた南斜面で検出されたもので、全長の約1/2が削平を受けている。削平されなかった部分については埋め戻して保存されることになり、調査は削平された部分のみ実施した。幅1.7



m・残存高1.3mを測る大型の登窯状炭窯で、木炭窯1同様、地山を削り貫いて造られた地下式の炭窯で、窯体は等高線に直交する。保存される側の断面を見ると、内部は崩落した天井部で埋まり、炭化部床面はほとんど焼けず、床面以外はすべて粘土を貼り付ける。炭化部床面には、少量の木炭が認められる。焚き口は、後世の開墾による削平のためか、灰原ともども残存していなかった。

### ③伏焼式炭窯

**木炭窯 3** 製鉄炉北側谷部の西斜面で検出したもの

第103図 土器埋納土坑遺物出土状況実測図

で、窯体の大半が削平されており、部分的な残存状況のため図化はできなかった。標高78.5m付近に位置し、等高線に平行して築かれる。窯体は、丘陵斜面を「L」字形にカットし平坦部を設け窯本体とする。掘り込み壁面周囲には粘土で被覆された後、相当な熱を受け還元状態になっている。この被覆粘土は床面までは貼られず、床面より0.1m上方で終わる。床面は、ほぼ水平で部分的に強く熱を受け還元状態になった部分が認められる。この強く熱を受けた部分には、粘土が貼られており、焼き口と考えられる。床面から若干の木炭小片が出土した。

**木炭窯4** 製鉄炉西側で検出したもので、丘陵北側肩部付近を幅3m×長さ5.7m・深さ1mにわたり削り出し、平坦部を設け炭窯を築造する。この削り出し平坦部と掘り込み側壁との間には、幅0.1~0.2mの浅い溝がとりつく。木炭窯は、削り出し平坦部中央にあり、一辺約0.9m・深さ0.5mの方形を呈する。掘り込み壁面は、粘土を薄く貼り窯壁とするが、底面から上方0.1mまでしか貼られていない。底面はほとんど焼けておらず、内部埋土も炭混じりの暗褐色土で、底面近くで木炭の細片が出土した。

#### ④土器埋納土坑

製鉄炉と炭窯4との中間付近で検出したもので、土坑は長径0.8m・短径0.75m・深さ0.4mの楕円形を呈する。内部に土師器甕を立位で置くが、土坑底面に達しておらず、埋め戻しながら置かれたようである。甕は、肩部よりも上方は土圧によって内部に落ち込んでいた。内部埋土は、基本的には炭混じりの暗褐色土であり、炭の量は、土坑底面近くが最も多く、甕上方は少量の木炭と鉄塊及び焼土粒が混入する。出土場所、内部埋土の状況からして製鉄に伴う、祭祀的な性格を帯びる土坑と考えられる。

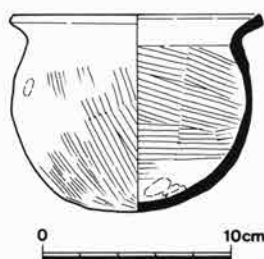
## 4. 出土遺物

芋谷遺跡から出土した遺物については、製鉄関連遺物として砂鉄・鉄滓・炉壁・木炭と土器埋納土坑出土土師器甕がある。

### ①製鉄関連遺物

廃滓場がないため、製鉄炉及びその周辺から出土したものである。

製鉄炉・排滓溝とも埋土は、すべて土砂ごとに取り上げ水洗を行った。その結果、泥状になって流出したものを除き、約671.84kgの関連遺物が採集できた。内訳は、砂鉄・砂・鉄滓・鉄塊・炉壁・粒状の溶結粘土及び焼土であり、木炭については、大半が流出したため、ほとんど採集できなかった。炉内からは約149.59kg、排滓溝及びその周辺からの出土は522.25kgとなる。炉内最下層の粉炭層中からは、木炭粉及び粗砂・流出滓・鉄塊・砂鉄が約53.6kg出土した。砂鉄は2.2kg出土し、流出滓・鉄塊は16.43kgで残りは砂となる。これ



第104図 出土遺物実測図

らは、いずれも築炉時点で入れられたものであり、流出滓・鉄塊については、当遺跡以外のところで作業されていたものを運び込み意識的にまぜたものと思われる。砂鉄についても分析の結果、すべて原料砂鉄であると判断されており、また粉炭層中の流出滓・鉄塊とも共通しており、当遺跡以外の製鉄炉も同じ原料と推定されている。<sup>(注34)</sup>砂については、粉炭層を形成するために、木炭粉と混ぜつき固めたものと推定される。

このように粉炭層中に、過去の作業炉の生成物を混入させるのは、新たな炉の作業に対する成功を祈る、祭祀的な意味あいを持つものと考えられる。

粉炭層上層の炉底と考えられる部分からは、炉底滓・炉壁・鉄塊・砂鉄・焼土・砂が出土したが、鉄塊については炉底の溶結粘土が粒状化し、鉄塊との分別が困難なため分けなかったが、総量で約95.99kg出土した。

炉壁については、排滓溝・炉内から出土したが、いずれも小片であり、保土穴などの観察ができるものはなかった。

南北の排滓溝及びその周辺から、流出滓・炉底滓・鉄塊・砂鉄が総量522.25kg出土した。鉄塊が多数認められるが判断しかねるものもあり、個々の分別はさけた。

木炭 炭窯2からは、多数の木炭が出土したが、取り上げ時に破損し原形をとどめておらず、また、製鉄炉及び排滓溝からは、少量の木炭が出土しているが、樹種については不明である。

(増田孝彦)

## ②土器埋納土坑出土土師器甕

土師器甕は、口径13cm・器高10.6cmである。口縁部はヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヨコハケを施し、同底面はユビオサエを施す。胎土は密で、1～2mmの白色砂(長石・石英)を多量に含む。焼成はあまく、色調は淡赤褐色である。時期は平城宮のⅢ～Ⅴ期に相当し、およそ8世紀第3四半期であろう。

(伊野近富)

## 5. 製鉄炉の構造

芋谷遺跡で検出された長方形箱形炉で、炉及び周辺に石組を持つ製鉄炉は、現在までのところ、京都府遠所遺跡群<sup>(注35)</sup>、滋賀県野路小野山遺跡<sup>(注36)</sup>・南郷遺跡<sup>(注37)</sup>、岡山県石生天皇遺跡<sup>(注38)</sup>・緑山遺跡<sup>(注39)</sup>、福島県向田E遺跡<sup>(注40)</sup>など、数例が知られているにすぎない。報告によると野路小野山遺跡は、排滓溝の片側のみに石が積まれており、ほかの例も炉外となっている。唯一、

炉内にあるものは、石生天皇遺跡があげられるが、芋谷遺跡よりも新しくその対象とならない。遠所遺跡群検出のものは、6世紀後半で底面に石材を並べているが、掘り込み側面に石材を立て並べていたかは、残存状況が悪く不明である。ただ、廃滓場から被熱を受けた石材が出土していることからその可能性も残る。最も近い形態をなすものとしては、南郷遺跡から、炉床の一部を構成すると思われる石列が東側のみ全長3.8m検出されている。石材は7石あり、上面の西側の一部と西側側面全体に赤色被熱しており、石列は平面中央部がやや西側に張り出す弧形をなす。中央部の2石は、板状の石材が横方向に直線的に置かれるが、ほかの石材は小口を外に向けやや雑に積まれている。残存状況から、石列は炉の作業台の東側を保持するための施設であると考えられている。そのため、類例とする事例がないものの、基礎内両側面に設置された石材は、掘形よりも石材の上端が突出していることや、炉全体の下部を覆う形をとっていることから、製鉄炉の防湿、炉壁の心材として用いられたものとして考えたい。また、尾根高位側の石材には、石材を中心としてそれを取り囲むかのように、炉壁の基礎であったと考えられる粘土塊が厚さ5cm・幅37cm・長さ2.1mにわたり残っており、このことから石材は炉壁の心材として用いられていたものであることがうかがわれる。また、炉内のレンズ状に堆積した炉底と考えられる溶結粘土と合わせて考えると、炉の内法は幅約60cm・長さ約2.0mとなり、炉壁の基礎部分での厚さは40cmほどであったと推定される。

炉基礎内の構造については、防湿用の粉炭層中には木炭粉だけでなく、粗砂を含み、祭祀的な意味合いが強いと考えられる砂鉄(原料)・製錬滓・鉄塊を混ぜ基礎を造っている。炉壁については、出土した資料が少ないため保土穴などの施設の確認はできなかった。

## 6. まとめ

今回の調査は、大宮町内で初の製鉄遺跡の調査となっただけでなく、丹後の製鉄遺跡の分布状況を考えていく上でも重要な調査となった。工事中の発見ということもあり、十分な調査を行っていないが、製鉄炉、木炭窯が狭い範囲に分布しており、同時期と考えられる一つの生産遺跡を形成していたことは明らかである。また、粉炭層中から出土した鉄滓・鉄塊をみる限り、大野田地造成予定地内またはその周辺に、新たな製鉄遺跡が存在する可能性があり、充分注意する必要がある。

現在までのところ、町内で確認されている上野遺跡、有明横穴群、左坂古墳群出土の製鉄関連遺物は単独出土であったり、遺構に伴うものの時期的に判然としないものであった。そのような中で、芋谷遺跡は8世紀後半の製鉄遺跡として位置づけられ、現在までに丹後で調査された製鉄炉・木炭窯のあり方に問題を投げかけたといえる。製鉄炉に関しては、

炉内に石材を立て並べるといふ国内の調査例でも類例の少ない構造をもつもので、石材を使用する製鉄炉が検出された地域との関係を考えていく必要があるが、今後の調査例の増加を待ちさらに検討を重ねていきたい。

木炭窯に関しては、木炭窯2が丹後では調査例の認められないものであったが、形態的には等高線に平行して造られる木炭窯3の発展型と見ることもできる。また、弥栄町遠所遺跡群の登窯状炭窯は、古墳時代と考えられるものは大型で、等高線に直交する。8世紀後半のものはすべて(兼用窯は除く)等高線に直交せず、芋谷遺跡では、大型で等高線に直交するものが共存しており、同時期でも遠所遺跡群よりも古相を示しているので、当遺跡の方が先行すると考えられる。登窯状炭窯が等高線に対して直交して造られない理由としては、角度を振ることによって煙道掘削量(長)が少なくなるため、その手間を除くために角度を振ったとも考えられる。

また、登窯状炭窯・伏焼式炭窯とも、床面まで窯体側壁が焼けないのは、築造時にいったん空焚きし、側壁を焼き固め、その後操業したと考えられる。この窯壁を焼き固めた際に、地山のハクリや炭・灰・焼土などが床面に堆積した後操業するため、これらの堆積物が操業時床面となり、側壁の一部が覆われることで、側壁が床面まで焼けないものと思われる。木炭窯4も同様で、空焚き後の床面に堆積物がある状態で粘土を貼り付けたため、その分だけ粘土が床面まで達しなかったものと考えられる。

製鉄炉内から検出された原料砂鉄は、芋谷遺跡周辺で採集されるものと二酸化チタンの含有量が異なり、原料砂鉄の方が高チタン砂鉄である。このため、砂鉄原料はどこか他の地域から移入されたものである可能性が高い。丹後の製鉄遺跡では分析の結果、その数値から見た場合、平安時代には低チタン原料となることから<sup>(註41)</sup>、地元産の砂鉄が使用開始されるようであるが、奈良時代後半では現時点まで低チタン砂鉄を原料として製錬された遺跡は確認されていない。

出土鉄滓・砂鉄などの分析は、新日本製鐵(株)八幡製鐵所TACセンター顧問大澤正巳氏に依頼したが、この結果については後日報告予定である。

芋谷遺跡の調査は、多くの問題を残したが、丹後では製鉄遺跡・製鉄関連遺跡が年々増加しており、調査も進行し、徐々にではあるが資料が蓄積されてきており、今後それらを十分に活用し検討していきたい。

なお、炉内に石列を持つ製鉄については、末尾に転載した<sup>(補注)</sup>。

(増田孝彦)

## (4) 奈具谷遺跡

### 1. 位置と環境

#### ①遺跡の位置

丹後半島は、京都府最北端に位置し、半島中央部には太鼓山(標高683m)、金剛童子山(標高613m)などを主峰とする山地が形成されている。一方、日本海沿岸部は、半島先端の経ヶ岬を境とし、東は若狭湾沿岸にかけて変化にとむ典型的なりアス式海岸となっているが、西は比較的その変化が少なく、天然の良港が随所に形成されている。

ここに報告する奈具谷遺跡は、丹後半島のほぼ中央部、竹野郡弥栄町溝谷に所在する、弥生時代中期を中心とする遺跡である。弥栄町は南北約6km・東西約1.5kmの沖積地を中心とし、竹野川がその中央を北流している。竹野川両岸には標高40mあまりの東西に長い樹枝状の丘陵がのび、その丘陵間を屈曲しながら狭長な谷が続いている。奈具谷遺跡は、竹野川東岸の谷部に位置している。

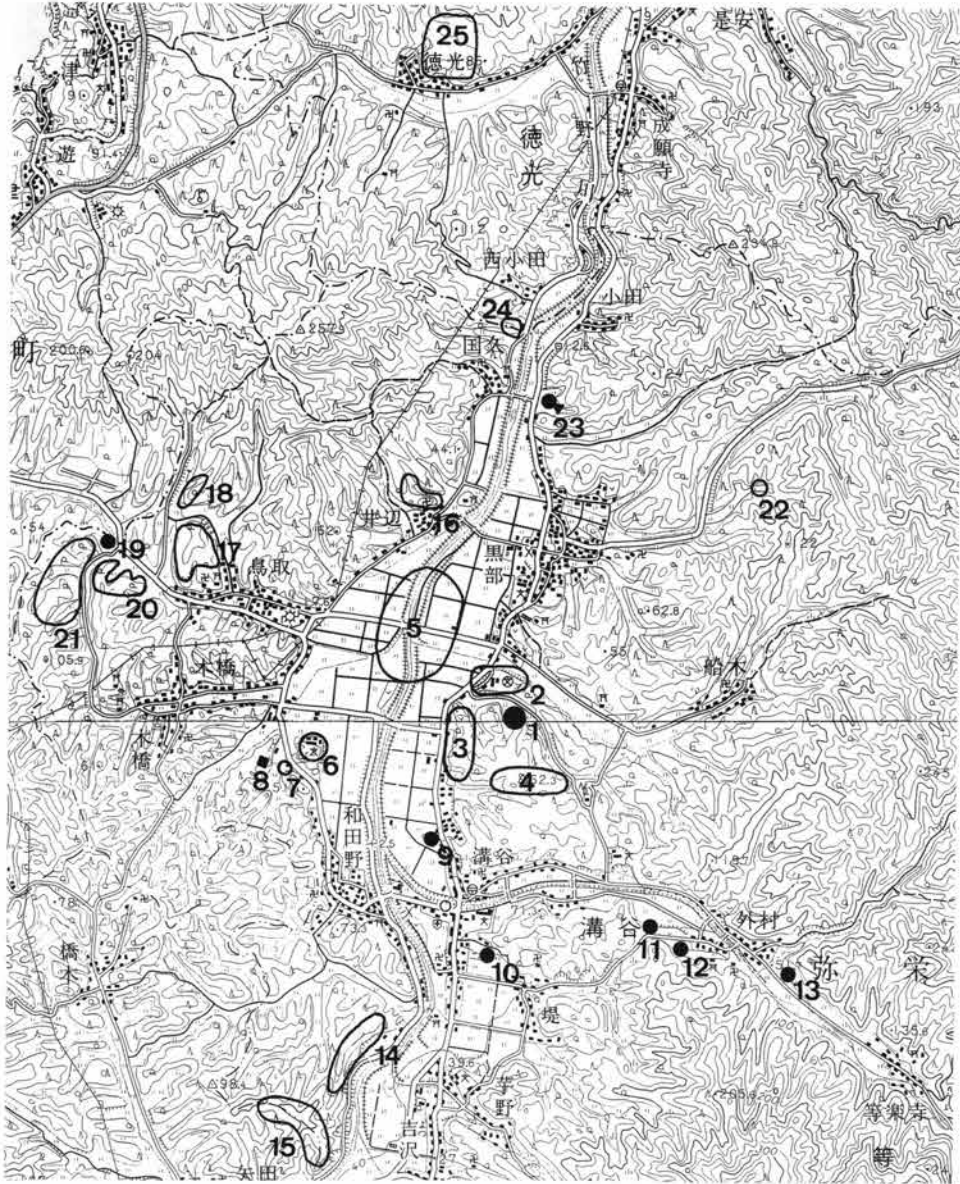
奈具谷遺跡は、東西を丘陵に挟まれた幅30mほどの沖積地上に立地している(第105図1)。隣接する北側の丘陵には弥生時代中期を中心とする奈具遺跡(第105図2)、南側の丘陵には奈具岡遺跡(第105図3)がある。奈具谷遺跡のすぐ南側の北向きの丘陵斜面は、弥生時代中期の碧玉・緑色凝灰岩製・水晶製玉類製作工房群が多数検出された奈具谷遺跡第4次調査地点(2)があり、この3地点は密接な位置関係にある。

#### ②周辺の遺跡

竹野川流域の弥生時代遺跡を中心に概観する。

弥生時代前期中頃に竹野川の河口部に竹野遺跡<sup>(E42)</sup>(丹後町)、中流域に途中ヶ丘遺跡<sup>(E43)</sup>(峰山町)などがあられ、久美町函石浜遺跡<sup>(E44)</sup>、蔵ヶ崎遺跡<sup>(E45)</sup>(加悦町)などとともに明確な生活痕跡を残すようになる。弥栄町内では、鳥取橋、舟木などでこの時期の土器が散発的に採取されている。前期末には遺跡数を増し、途中ヶ丘遺跡では集落規模が拡大の兆しをみせ、奈具岡遺跡<sup>(E46)</sup>(第2次)にも生活の跡が認められるようになる。

弥生時代中期初頭(第Ⅱ様式)には、扇谷遺跡<sup>(E47)</sup>(峰山町)のような大規模な環濠集落が出現する。浦明遺跡<sup>(E48)</sup>(久美浜町)でも同時期の環濠集落が成立する。弥栄町内ではこの時期の遺跡は未確認である。中期中頃(第Ⅲ様式)に奈具遺跡が成立し、後半(第Ⅳ様式)にかけて継続・発展を遂げる<sup>(E49)</sup>。奈具岡遺跡第4次調査地点の玉作り工房群は第Ⅲ様式に属しており<sup>(E50)</sup>、奈具遺跡と消長をともにするものと考えられる。奈具谷遺跡も位置関係、継続時期からみ



第105図 周辺遺跡分布図(1/50,000)

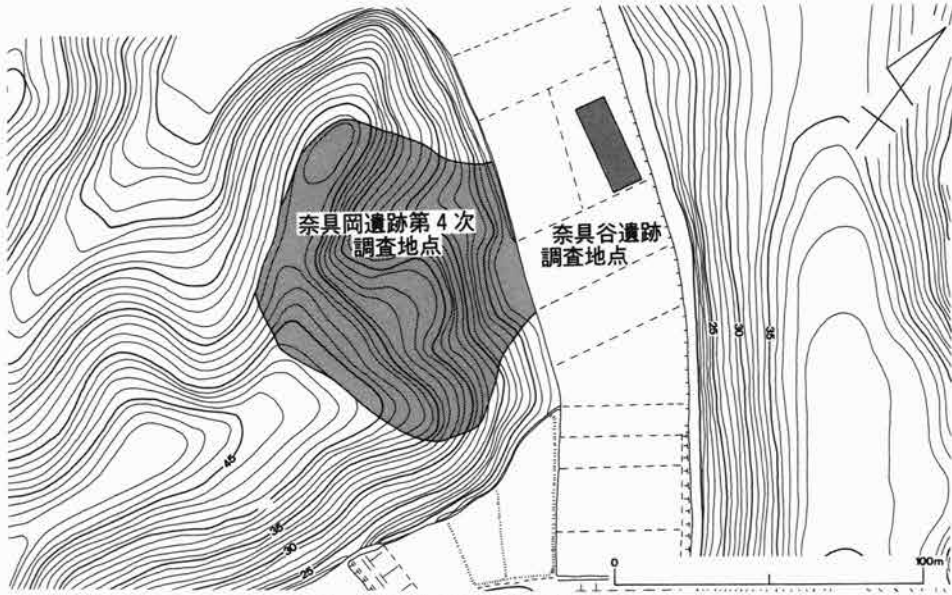
- |                |             |                  |            |           |
|----------------|-------------|------------------|------------|-----------|
| 1. 調査地         | 2. 奈具遺跡     | 3. 奈具岡遺跡         | 4. 奈具岡南古墳群 | 5. 鳥取橋遺跡  |
| 6. 坂野遺跡        | 7. 坂野岡遺跡    | 8. オテジ谷古墳・オテジ谷遺跡 | 9. 丸山古墳    |           |
| 10. いもじゃ古墳群    |             | 11. フキ岡遺跡        | 12. 城楽寺遺跡  | 13. 外村遺跡  |
| 14. 太田古墳群      | 15. 大田南古墳群  | 16. 普甲古墳群        | 17. 宮ノ森古墳群 |           |
| 18. ゲンギョウの山古墳群 |             | 19. ニゴレ古墳群       | 20. 鳥取古墳群  | 21. 遠所遺跡群 |
| 22. カセ谷遺跡      | 23. 黒部銚子山古墳 | 24. 西小田古墳        | 25. 高山古墳群  |           |





第106図 奈具谷遺跡の位置と周辺の遺跡

- |            |              |                 |             |           |
|------------|--------------|-----------------|-------------|-----------|
| 1. 調査地     | 2. 奈具岡遺跡     | 3. 奈具岡遺跡(第1～3次) | 4. 奈具遺跡     | 5. 奈具古墳群  |
| 6. 奈具岡北古墳群 | 7. 奈具岡古墳群    | 8. 奈具谷古墳群       | 9. 奈具岡西古墳   | 10. 新宮古墳群 |
| 11. 福西古墳群  | 12. 奈具神社裏古墳群 | 13. 小墓古墳群       | 14. 奈具岡南古墳群 | 15. 久原古墳群 |
| 16. 丸山古墳   | 17. 龍淵寺古墳    | 18. 溝谷城跡        | 19. 溝谷北古墳群  | 20. 八所古墳群 |



第107図 奈具谷遺跡調査地位位置図

て同様である。

この時期は、主要各河川流域に比較的規模の大きな集落遺跡が出現する時期でもある。竹野川中流域の途中ヶ丘遺跡は、中期初頭頃に一旦衰退した後、第Ⅲ～第Ⅳ様式に再び盛期を迎え、奈具遺跡とともに竹野川中流域において中核的存在となる。川上谷川流域の橋爪遺跡<sup>(注51)</sup>(久美浜町)、野田川流域の須代遺跡<sup>(注52)</sup>・桑飼小学校グラウンド遺跡<sup>(注53)</sup>(加悦町)、寺岡遺跡<sup>(注54)</sup>(野田川町)、由良川流域の桑飼上遺跡<sup>(注55)</sup>・志高遺跡<sup>(注56)</sup>(舞鶴市)なども第Ⅲ様式に出現、あるいは発展する遺跡である。オテジ谷遺跡(第105図8)は、丘陵稜線上の高所に立地する遺跡で、第Ⅳ様式の住居跡が1基、単独で検出されている<sup>(注57)</sup>。

後期には数多くの集落、墓地が営まれる。集落では大宮町裏陰遺跡<sup>(注58)</sup>・谷内遺跡<sup>(注59)</sup>・アバタ遺跡<sup>(注60)</sup>、峰山町途中ヶ丘遺跡、弥栄町奈具岡遺跡<sup>(注61)</sup>・奈具遺跡、丹後町大山遺跡などが主な遺跡である。近年、墓地関連で重要な成果があがっている。弥栄町奈具岡遺跡第3次調査で検出された後期初頭の方形貼石墓<sup>(注62)</sup>、ガラス玉が大量に埋納されていた大宮町三坂神社遺跡<sup>(注63)</sup>(後期初頭)、碧玉・緑色凝灰岩製玉類、ガラス製玉類が大量埋納されていた弥栄町坂野遺跡<sup>(注64)</sup>第2主体部(後期後半)、丹後町大山墳墓群などが代表的な例である。

(田代 弘)

## 2. 調査経過

調査地が位置する丘陵一帯では、総面積68haの奈具団地造成が計画され、すでに工事の一部が着工されている。工事に先立って埋蔵文化財の分布調査が実施され、古墳、城跡、

集落遺跡と考えられる散布地など多数の遺跡が確認されている。今回発掘調査を実施した奈具谷遺跡も新たに発見された遺跡の一つである。

平成3年度に奈具谷遺跡と奈具岡遺跡(第4次)の範囲確認を目的とした試掘調査を行い、その成果に基づいて、平成4年度に両遺跡の発掘調査を実施した。奈具岡遺跡では弥生時代中期中頃の玉作り工房群、奈具谷遺跡では弥生時代中期中頃から後半にかけての水利施設を確認し、これに伴って多量の遺物を検出した。

奈具岡遺跡については平成4年度に概要報告を刊行し、今年度、奈具谷遺跡の報告を行うことにした。

奈具谷遺跡は、奈具遺跡のある丘陵と奈具岡遺跡のある丘陵に挟まれた狭長な沖積地に位置し、奈具遺跡側から張り出す微地形を中心に広がっている。試掘調査の結果、この微地形周辺で遺存状況の良好な流路の一角を確認した。約300㎡の調査地区を設け、発掘調査を実施した。

調査地は水田の中にあり、遺構面が現地地表下2～3mと深く、調査に伴って濁水や土砂が流出するなど周辺への悪影響が懸念された。そのため、沈砂池と堤防を築いて防止策を施した後に、調査に着手することとなった。また、地盤が軟弱であり壁面の崩落も予想されたので、掘削地区の四周に7m前後の松杭を打ち矢板で防護壁を設けた。沈砂池と堤防・防護壁の工事を6月25日に開始し、7月18日に完了した。翌19日から調査に着手した。奈具谷遺跡の調査は、奈具岡遺跡の調査の都合もあり、2週間前後でメドをつける必要があったので、遺構の遺存状況の明確な弥生時代中期の遺構検出に主眼を置いて調査を進めた。その結果、杭と板で護岸した流路を約30mにわたって確認し、これに伴って第IV様式を主体とした土器・木器などを多数検出した。

発掘調査は調査第2課調査第1係調査員田代 弘を主担当とし、主任調査員増田孝彦・調査員岡崎研一がこれを補佐した。遺構実測図、写真撮影は、各担当者が随時行った。遺物写真撮影は、調査第1課資料係田中 彰が行った。

本概要報告書作成にあたっては、整理員諸氏にご助力いただき、遺構図の整理は立命館大学3回生小笠原 彰・佐々木 理の協力を得た。なお、本文の執筆は、トチノミ集積地点の種子選別の項を滋賀県埋蔵文化財保護協会中川治美が、それ以外の本文と遺物観察表を田代 弘が行った。

(田代 弘)

### 3. 調査概要

#### (1) 検出遺構

昨年度の試掘調査の結果、奈具谷遺跡は、奈具遺跡と奈具岡遺跡に挟まれた狭長な谷の半ばほどから谷の出口にかけて、約600mに及ぶことが明らかとなった(第105図1)。今回の調査地は、遺跡の東方、奈具古墳群と奈具岡遺跡の眼下にある微高地上に位置し、奈具遺跡・奈具古墳のある丘陵の南裾面にあたる(第105・106図)。この微高地の縁辺部、約300㎡を調査した。地表下約2mで、杭列、弥生時代中期の流路とそれに伴う施設、そして、土器・木器・石器など多量の遺物が出土した。

基本層序について記したのち、検出遺構の概要を記す。

#### ①基本層序

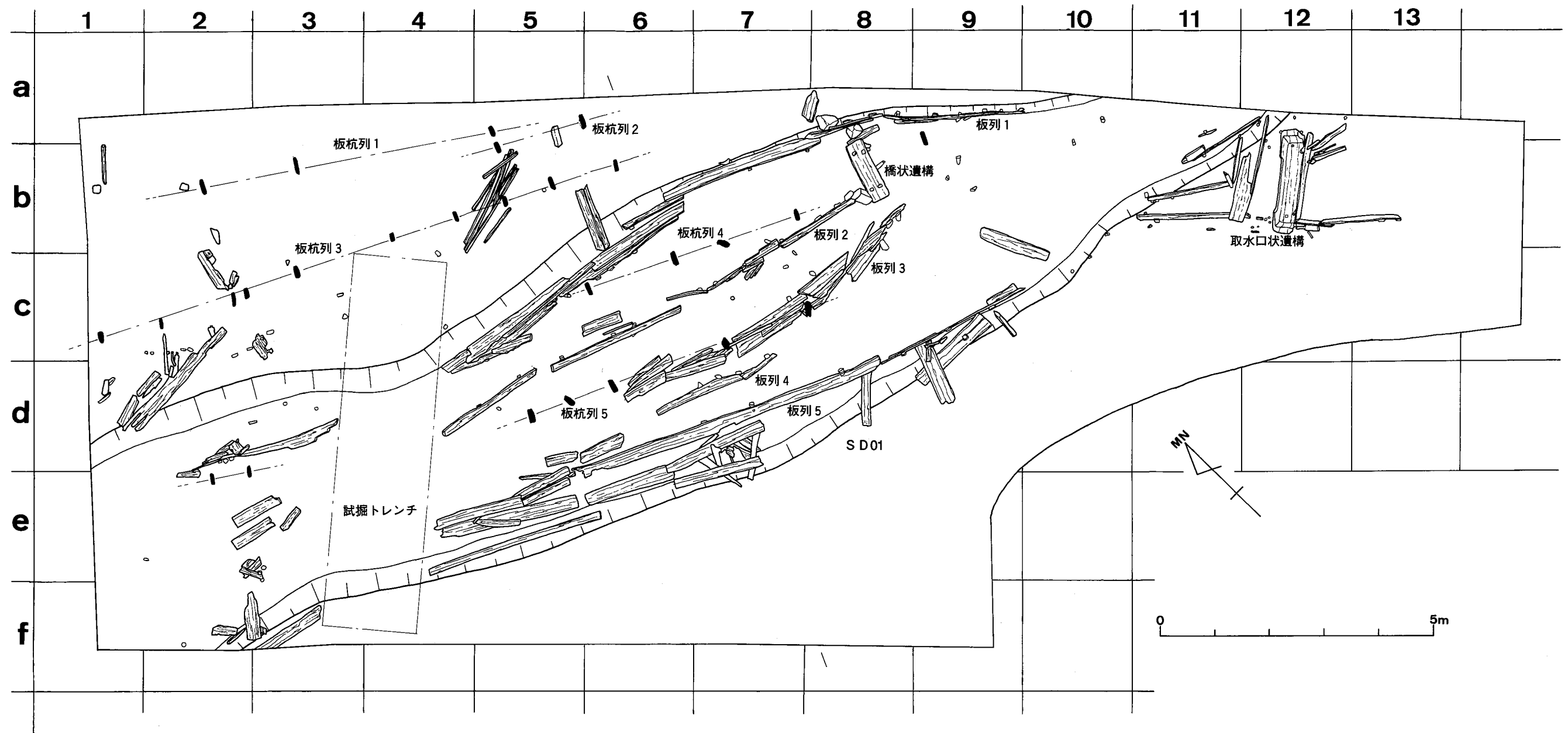
現水田面は、標高約16.8mである。水田耕作土・床土(第Ⅰ層)の下に茶褐色系の粘質土が厚く堆積している。この粘質土には石英・長石などの白色砂粒が混じっている。上位は粘性が強く、葦などの植物遺体が多くみられる。下位では白色砂粒の混在が多く、やや砂質になる。ところどころに砂のブロックがみられる(第Ⅱ層・茶褐色粘砂土)。上～中位には、平安時代から鎌倉時代にかけての遺物が混入していた。第Ⅲ層は、黒灰色を呈する粘砂土である。質感は第Ⅱ層に類似するが、色調を異にしている。古墳時代後期の須恵器が少量含まれていた。第Ⅳ層は、暗茶褐色砂質土である。磨滅した弥生土器(中期)の細片を少量含んでいる。第Ⅲ層と第Ⅳ層の間に部分的に灰色の砂層がブロック状に入る。第Ⅴ層は、黒灰色砂質土である。板列を伴う流路(S D01)埋没直後の水平堆積層である。この下に黄灰色砂層(第Ⅵ層)、黒褐色粘砂質土(第Ⅶ層)があり、それぞれ板列を伴う流路(S D01)へ北側から流れこんでおり、掘り直されて各時期のベースとなっている。この流路の開掘面は、第Ⅷ層の黒灰色粘砂質土である。黒灰色粘砂質土は、黒～褐色系の粘質土が砂層ブロックを挟みながら堆積したラミナ状を呈している。水流に伴う堆積とゆるやかな堆積が交互に繰り返されたものとみられる。

#### ②検出遺構の概要

黒褐色砂質土(第Ⅲ層)の下位まで、重機により粗掘りし、これ以下を人力で掘削・精査して遺構の検出にあたった。黒灰色砂質土(第Ⅴ層)上面において杭列を確認した。黒灰色砂質土は下層の流路埋没後の水平堆積層である。この層を除去した後、黄灰色砂土層(第Ⅵ層)があらわれ、その上面で流路跡を確認した。流路跡は幾度か埋没し、掘削を繰り返したようである。前者を上層遺構、後者を下層遺構と呼んで説明する。

#### A. 上層遺構(第108図板杭列1～5)

黒灰色砂質土(第Ⅴ層)中において杭列を検出した。杭列は東西方向に並び、4または5



第108図 奈具谷遺跡検出遺構実測図

列ある。杭は、幅30~40cm・厚さ約10cm・長さ約60~80cmほどの板状の加工木である。杭間はばらついてはいるが、約1mから1.2mで、ほぼ等間で直線的に打ち込まれている部分があり、全体として規則性を有している。杭は、下層流路埋没面ではほぼそろっており、下層流路に伴う板列を打ちぬいているものもみられる(板杭列5)。

この杭列は、下層流路埋没後に打たれたものである。杭の主軸は、下層流路の主軸に平行しており、杭列の設定にあたり下層遺構が意識されているようにみえる。

杭列が打たれた時期は明確でないが、この遺構を検出した黒灰色砂質土は下層流路埋没直後に形成された水平堆積層であり、土層中に弥生土器(第IV様式)を含んでいることなどから、下層遺構埋没からそれほど隔たらない時期と推測される。

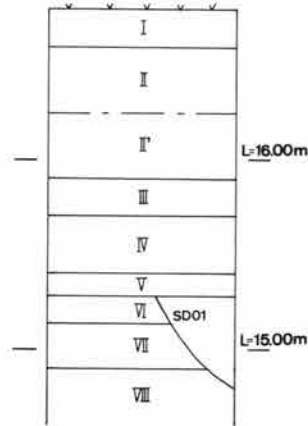
#### B. 下層遺構(第108・118図)

流路跡とそれに伴う施設を検出した。流路は、黄灰色砂土上面で確認したが、この砂層はもろく、掘形も明確でないので、最終的にその下層の黒灰色粘質土上面まで掘り下げて検出した。流路跡に伴う施設には、護岸材とみられる杭で固定された板列、橋状の遺構、取水口状の遺構などがある。

**流路跡(SD01)** 東西に主軸をもつ流路である。東から西に向かって流れる。流路は、約30mにわたって検出した。流路は、東端と西端がやや狭まっており、中膨らみの形状を呈する。流路幅は、東端の狭い部分で約3m、中程の広い部分で約5.5mを測る。深さは約0.8mである。断面形は浅い皿状である(第110図)。

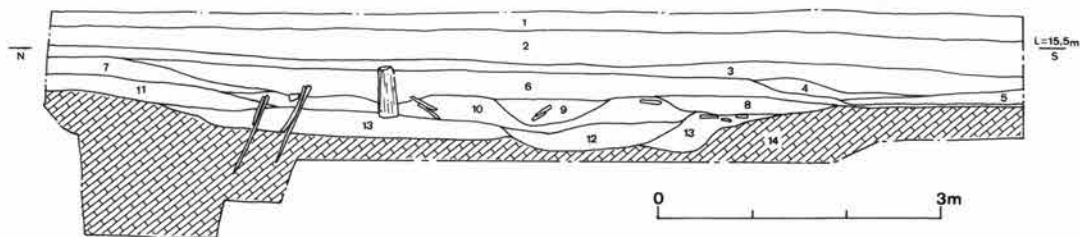
流路は、最初に黒灰色粘砂質土(14層)を穿って形成される(第1段階)。黒色粘質土が一定堆積した後に、黒褐色粘砂質土(11層)が流れこむ。11層を流路北側の肩として再び掘削され、黒色土(10層)が堆積する。その後も、北側から黄灰色砂層(7層)が流れ込んで10層を部分的に覆い、黄灰色砂層上面からさらに掘り込まれて流路に整えられる。灰色砂層(6層)により埋没するが、その過程で、護岸板列が付加され、橋状の遺構や取水口状の遺構が形成される(第2段階)。これ以降、この流路は幾度か埋没し、その度に整えられ、狭まりながら次第に埋没していく。埋没後に先に記した上層杭列が打ち込まれる(第3段階)。

流路から弥生土器(第Ⅲ~Ⅳ様式)のほか、木器類、石器類など数多くの遺物が出土した。



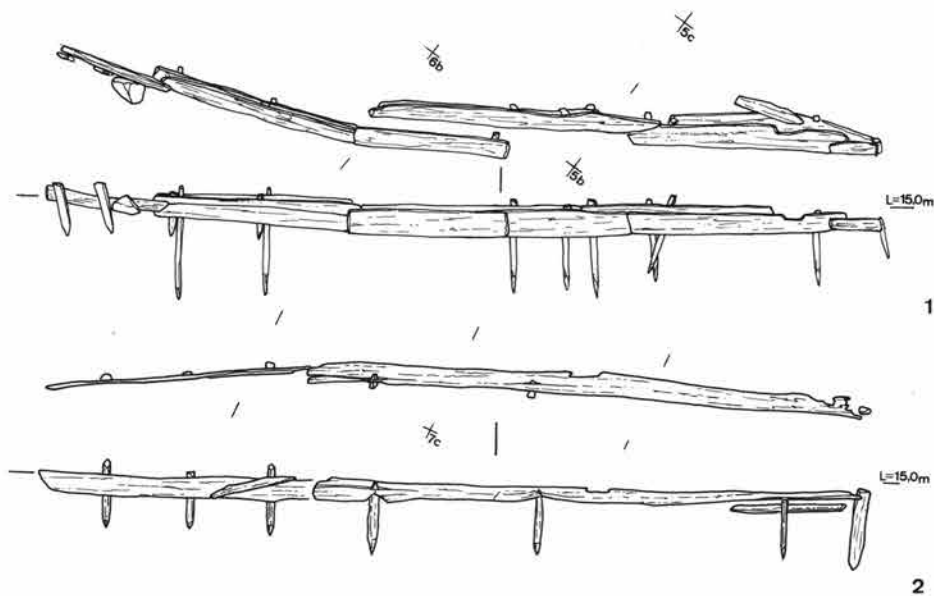
第109図 土層堆積状況模式図

- I. 床土
- II. 茶褐色粘質土
- II'. 茶褐色粘質土(砂土混じり)
- III. 黒褐色砂質土
- IV. 暗茶褐色砂質土
- V. 黒灰色砂質土
- VI. 黄灰色砂層
- VII. 黒褐色粘質土
- VIII. 黒灰色粘砂質土



第110図 調査地区中央断面図(東壁)

- |                            |                  |           |           |           |
|----------------------------|------------------|-----------|-----------|-----------|
| 1. 黒褐色砂質土                  | 2. 暗茶褐色砂質土       | 3. 黒灰色砂質土 | 4. 灰色砂土   | 5. 黒褐色粘質土 |
| 6. 灰色砂質土                   | 7. 黄灰色砂層         | 8. 黒褐色粘質土 | 9. 茶褐色砂質土 | 10. 黒色土   |
| 11. 黒褐色粘砂質土                | 12. 灰色砂と黒色粘質土の互層 | 13. 黒色粘質土 |           |           |
| 14. 黒～灰色粘砂質土(黄色砂との互層)・無遺物層 |                  |           |           |           |



第111図 護岸板列(部分)実測図(南から)

1. 板列1 2. 板列5

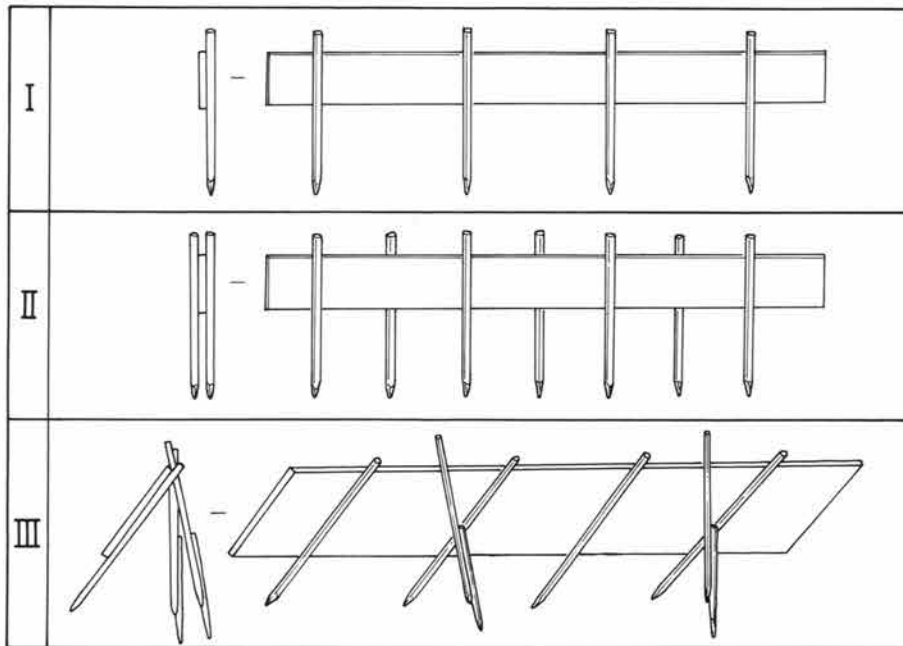
なお、流路のベースは黒～茶褐色系の粘質土と砂層の互層からなっており、水流とゆるやかな堆積が繰り返す湿地であったと考えられる。この流路は湿地の水流をまとめ、利用する目的で開掘されたものであろう。流路埋土の最下層である黒色粘質土(13層)は、第Ⅲ様式土器を主体としており、中期中頃に開掘されたと考えられる。また、橋状の遺構や取水口状の遺構が形成された6・10層は、第Ⅳ様式土器が主体をなしており、流路は中期中頃に掘削されて以降、中期後半にかけて機能していたものと考えられる。

①護岸板列

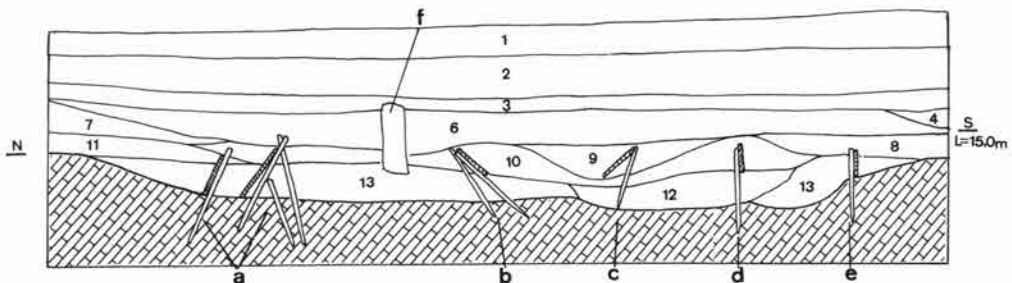
流路(S D01)の両岸には、杭と板材で固定した板列が設けられており、流路半ばほどにも同様の板列が3列、計5列の板列を検出した。板は、杭で固定されており、流路に対してほぼ平行に設置されている。

便宜的に、板列を北から順に板列1～5と名付け、説明する。

板列1は、流路(S D01)北岸に沿って設けられたものである。5cから7bにかけては、杭を60°前後の角度で打ち込み、北側に板を置いて板列としている。板は、北側(溝の内側)にむかって傾いている。杭は、板の南側にのみ打たれており、部分的に杭を垂直に近



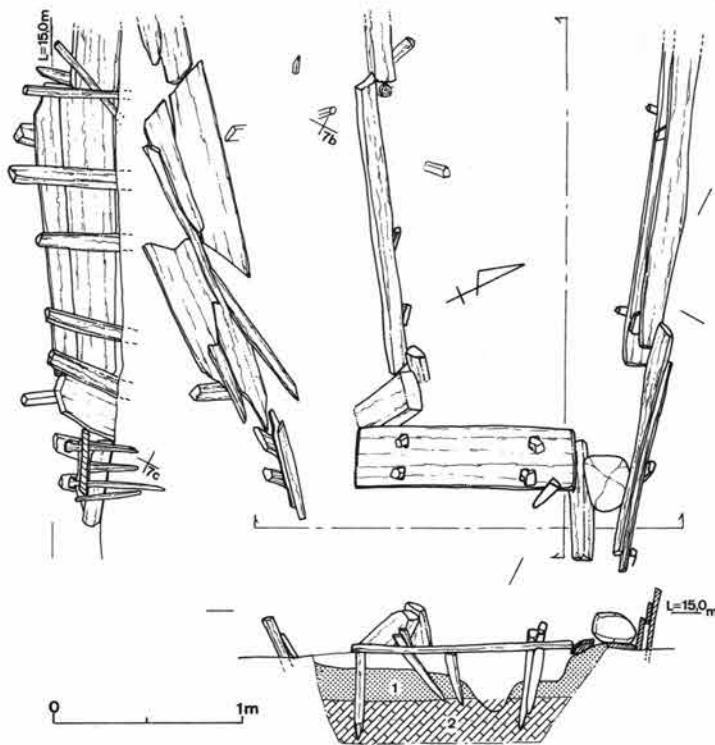
第112図 杭による板の固定方法(模式図)



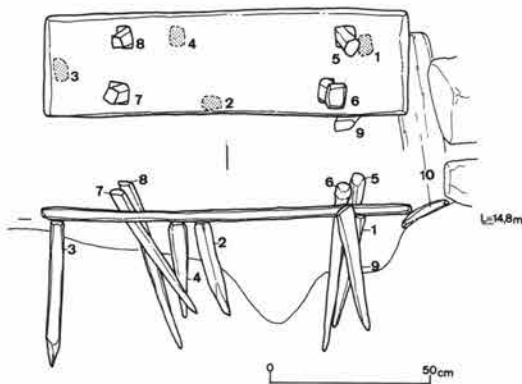
第113図 板列の配置状況模式図

a. 板列1 b. 板列2 c. 板列3 d. 板列4 e. 板列5 f. 上層杭列





第114図 橋状の遺構検出状況  
土層(1. 灰色砂層 2. 黑色粘質土)



第115図 橋状の遺構；杭による固定の状況

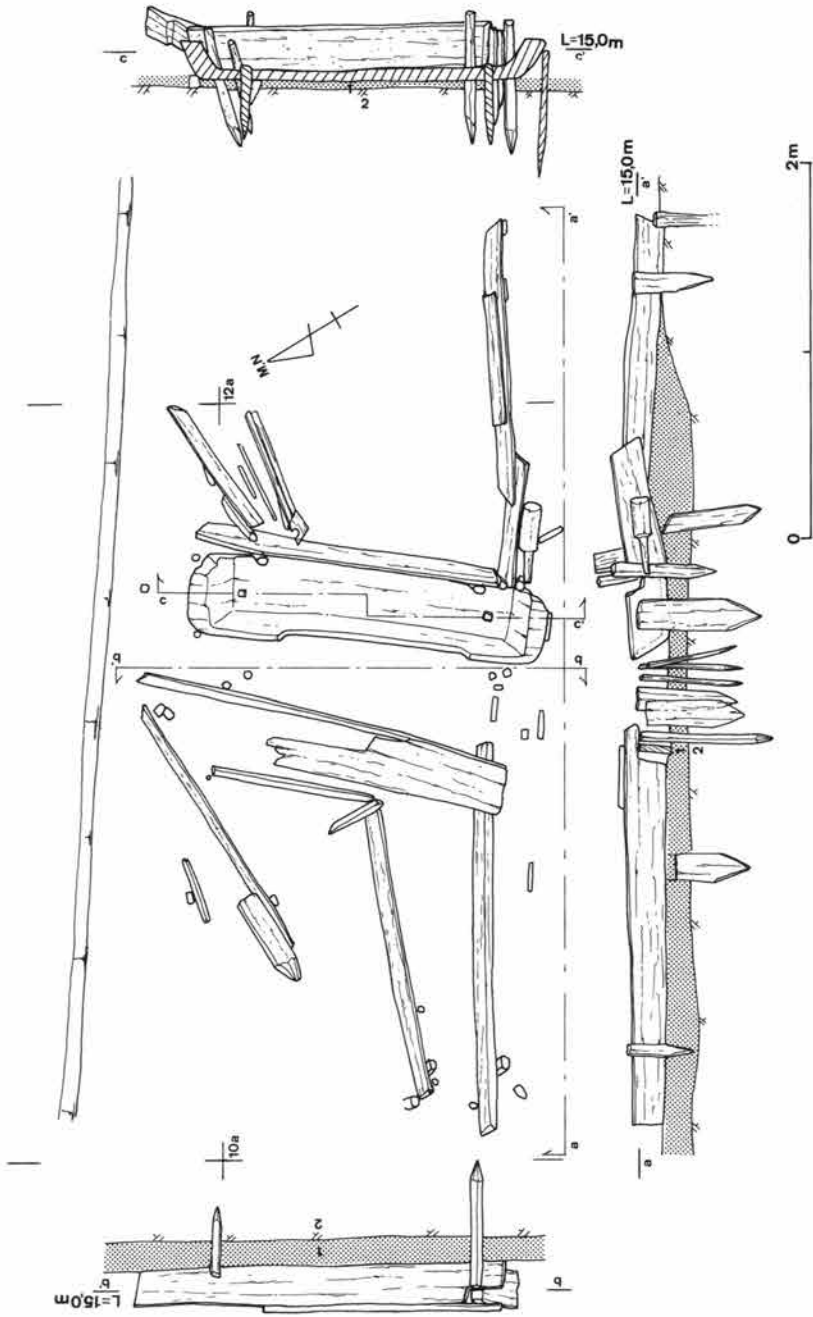
い角度で打って補強している(第112図Ⅲ)。8aから9aにかけては板の両側に杭を打って、板を垂直に固定している。

板列2の杭は、主に板の北側に打たれている。板は北側に傾いて据えられ、板列1の5c~7bと向きあって、合掌形を呈している。北端に、橋状の遺構が設置されている。

板列3は、杭を南側に打って、板を南側に傾かせて固定、板列4は北

側に杭を打って、板を北側に傾かせて固定していた。

板列5は、6dから9cにかけて比較的、遺存状態が良好である。板の北側に杭を打ち、板を垂直に固定していた(第112図Ⅰ)。



第116図 SD01取水口状の遺構  
土層 (1. 灰色砂層 2. 黒灰色粘質土層)

第113図は、板と杭の配置状況の断面を模式的に示したものである。これによって板列相互の関係をみることにしたい。

板列1と板列5は、流路の肩部に位置しており、板の基底はほぼ流路底に位置する。土層との対応関係、設置場所などからみて、流路の両岸に護岸を目的として設置されたと考えられる。板列2・3・4は、流路中ほどに位置し、流路の埋没層である第12・13層の上面に設置されている。板列1・5がある程度埋没した後に設置されたことは明らかである。

### ②橋状の遺構(第114図)

板列1と板列2を跨ぐようにして設けられた橋状の遺構である。板と杭を組み合わせて作られている。板は、長さ約1.5m・幅約45cm・厚さ約2.5cmを測る。表裏、側縁ともにていねいに加工されており、削り痕がよく残っている。この板の両端にはそれぞれ2つ、計4つの孔が穿たれている。孔は、一辺約5cmほどの方形で、この孔に長さ約70cmの有頭の杭が打ち込まれ固定されていた。杭は断面方形で、先端が板の中心方向に向かって斜めに打ち込まれていた。板の下側にはあらかじめ4本の杭(第115図1～4)が打ち込まれており、板はこの杭に乗せられている。有頭の杭(5～8)はこの後に打ち込まれたものである。また、板は、板列1側を石と横木(10)で、側縁を杭(9)で固定していた。沈みにくく、流失しにくい構造である。取水口に取り付けられていた槽でも同様の固定法がみられる。

この遺構は、流路(S D01)の埋没土層の上から造られており、板列1と板列2がある程度埋没した後に設置されたものと思われる。第I層は黒色土であり、橋状遺構の直下に断面「U」字形の灰色砂土の堆積があった。この遺構は、流路及び板列がある程度埋没して湿地化した後に、足場を確保する目的で設置されたものと思われる。

### ③取水口状の遺構(第116図)

調査地区北東端で検出した遺構である。板材を組み合わせて造られた遺構で、流路の左岸に接して、約45°の角度で設けられている。流路の埋没層である暗灰色砂層の上に設置されており、橋状遺構と同様に、埋没して流路の幅がある程度狭まった段階で敷設されたものとみられる。遺構は、主に、側板、槽を転用した付属施設、杭からなっており、排水部には、杭と板を用いてしがらみを設けている。下流には明確な溝状遺構は検出できなかったが、トチの実を主体とする植物遺体の広がりやS D01に平行するように認められ、ゆるやかな水流のあった痕跡をとどめている。

この遺構は、ベースである暗灰色砂層と同質の砂層で埋没しており、遺存状況が極めて良好である。

#### A. 構造

ア)側板 板材を「L」字形、逆「L」字形に配置し、側板としている。向かって右を右

側板、左を左側板と呼ぶ。

左側板は、2枚の板を逆「L」字形に組み、北側にも、平行に側板を設けている。これらの上には板がかけられていた。さらに北側には、南北の側板に対して45°前後の角度をもたせて2列の板を設置している。つまり、左側板は、4列からなる。

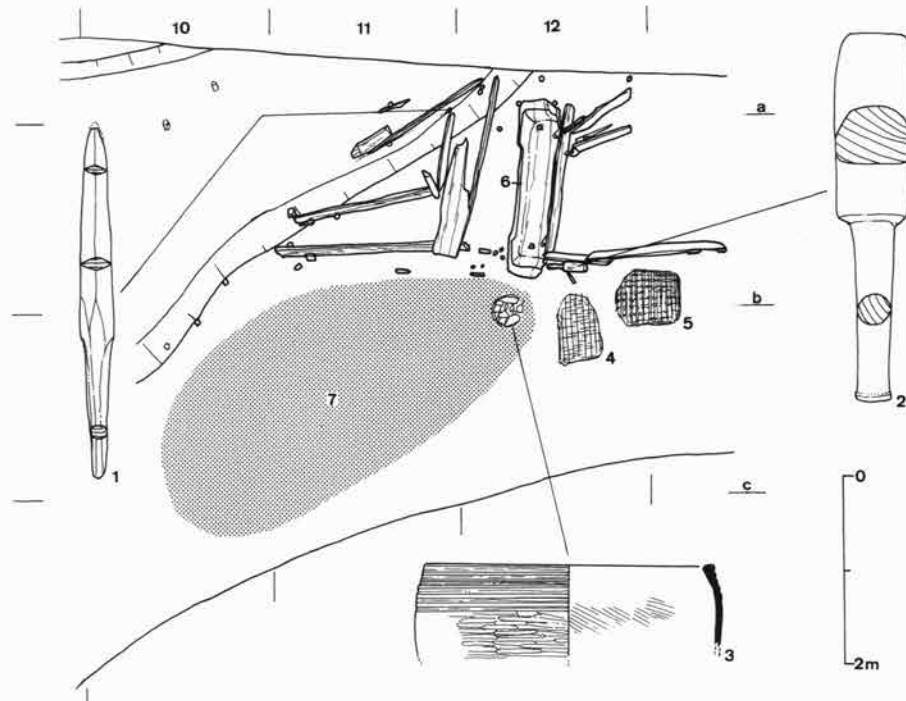
右側板は、南北に1枚板を用い、東西には3枚の板を用いて作る。北東の部分に東側に開く板を3列配置していた。

イ)槽 右側板に接して槽が据え付けられている。槽は、半割されており、割れた側を右側板に固定してある。槽の西側には抉りがみられる。槽の下には、あらかじめ数本の杭が打ってあり、槽はその杭の上に乗せられている。その後、槽底部両端に穿ておいた方向に杭を打ち込んで固定している。側面から板、杭による補強がなされている。沈みにくく、流失しにくい構造で、橋状の遺構で用いられている手法とほぼ同じである。

ウ)しがらみ 排水部に、杭や板を列状に打ってしがらみとしている。しがらみ上端は、槽の上面の高さにはほぼ等しい

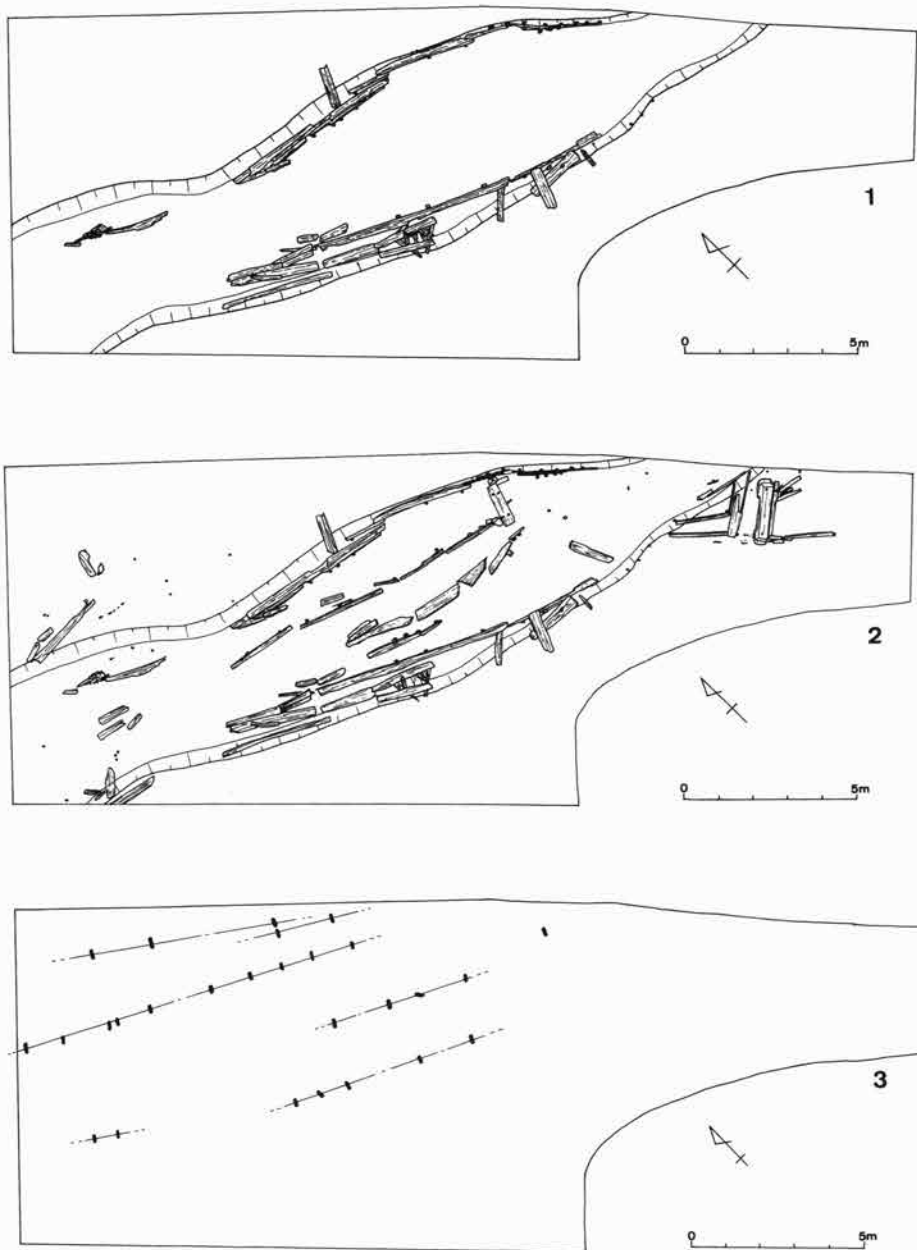
### C. 取水口付近の出土遺物(第117図)

この施設の付近からは、特徴ある遺物がいくつか出土している。1は、剣形木製品である。柄を上に向け、地面に刺さって直立した状態で出土した。2は、横槌である。側板に



第117図 取水口周辺の遺物出土状況

沿って置かれたような状態で出土した。4は、網代状の編み物である(図版第87-(2))、5はミ(図版第87-(1))であろう。3は、第IV様式の鉢形土器である。6は、先に記した槽である。この槽の中にはトチの実を主とする植物遺体が若干みられた。7で示した範囲にトチの実を主とする植物遺体が多量に集積していた。厚い部分で10cm前後の堆積があった。



第118図 S D01変遷模式図

検出面は、槽の基底面とほぼ同じ砂層中である。後述するように、この集積は8割強が橡の実であり、しかも破碎された可能性のあるものである。トチの実を利用・廃棄した痕跡であろう。

(田代 弘)

## (2) 出土遺物

遺物は主として流路(S D01)埋土中から出土している。流路内からは、弥生土器、木器、石器など多量の遺物が出土している。流路に伴う主な遺物について報告する。

### A. 土器類

#### ① 弥生土器(第119～134図)

弥生土器は、S D01埋土全般に認められ、特に、最下層である黒色粘質土層と、その上層にあたる黒色土～灰色砂質土層において多量の出土をみた。黒色土は、部分的な堆積層であり、灰色砂層との混在が随所でみられたため、両層位からの出土遺物を灰色砂層として取り上げた。

黒色粘質土層は第Ⅲ様式土器、灰色砂層は第Ⅳ様式土器を主体としているが、いずれも混在し、破片を主体としているなど、一括性には恵まれない。したがって、ここでは、これらを一括して扱い、器種ごとに説明することにした。

出土土器類には、壺、甕、高杯、鉢、台形土器、ミニチュア土器などがある。

#### 壺(1～68・79・80・95・101・102)

壺には、ラッパ状に大きく開く口縁部を有するもの(壺A)、筒状の頸部をもち口縁が短く外反するもの(壺B)、口縁部が短く「く」の字形に屈曲するもの(壺C)、無頸壺(壺D)、直立する口縁をもつもの(壺E)、口縁が外反して開いたのち上方にのびるもの(壺F)、口縁部が直線的に開き、外傾する端面をもつ大形の土器(壺G)、口縁部が短く外反する短頸の小形壺(壺H)などがある。

壺A(1～25・27～42) 壺Aには、口縁部が外反して下方にむかうもの(A1)(1・5～6・9・12～14・17・21・22)と、開いて水平におわるもの(A2)(2～4・10・11・15・16・18～20・27～37)、頸部がやや直線的に立ち上がり、口縁が屈曲ぎみに外反するもの(A3)(7・8・24・25)とがある。

1～16は、凹線文をもたないものである。A1タイプが多い。これらは、端面が概して狭く、櫛原体を用いた施文が多い。1は、端面に櫛描き波状文、見込みに扇形文を施す。4・9・13・14は口縁部に刻み目文、3・5・10・15は刻み目文と円形浮文がある。7は口縁部に列点文、8は斜格子文と円形浮文があり、見込みに刻み目凸帯をめぐらす。16は、口縁部に羽状文がある。頸部に指頭圧痕文凸帯を施すもの(2・40・41)、断面三角形の凸

帯文を施すもの(6~8・14~16)、無文のもの(1)がある。断面三角形の凸帯文には、凸帯文が一条ごとにしっかりと独立して作られているもの(aタイプ)(6・7・8・14・15)と、凸帯文と凸帯文間を強くなでるために外見が凹線文に近似するもの(bタイプ)(16)などがある。17~25・27~29は口縁端面、あるいは頸部に凹線文を有するものである。A2が大半を占め、口縁部端面を広く作るものが多い。19は、頸部に凹線文を施したのち、ヘラによる刻目文を施す。23・27~29は見込みに扇形文、28は口縁部に円形浮文を施す。

30~37は、口縁部である。30は端面に櫛描き波状文、31は口縁端面と見込みに竹管文、32は櫛描き直線文と扇形文、33~37は見込みに扇形文が施されている。32は口縁端部に円形浮文、35・37は波状文と円形浮文を施している。38~42は頸部である。40・41は、ハケ原体木口による圧痕文凸帯がめぐらされる。38・39・42は、凹線文がある。38・39は肩部に櫛描き波状文、42は凹線文の上方に竹管文をめぐらす。

壺B(26・43・44) 26は、口縁部が短く立ち上がり、広い端面を作る。口縁部見込みに扇形文、端面に波状文と円形浮文を施す。頸部に凹線文がめぐらされる。43・44は、口縁端部に上方にわずかに拡張して面をつくる。頸部に指頭圧痕文凸帯をめぐらす。

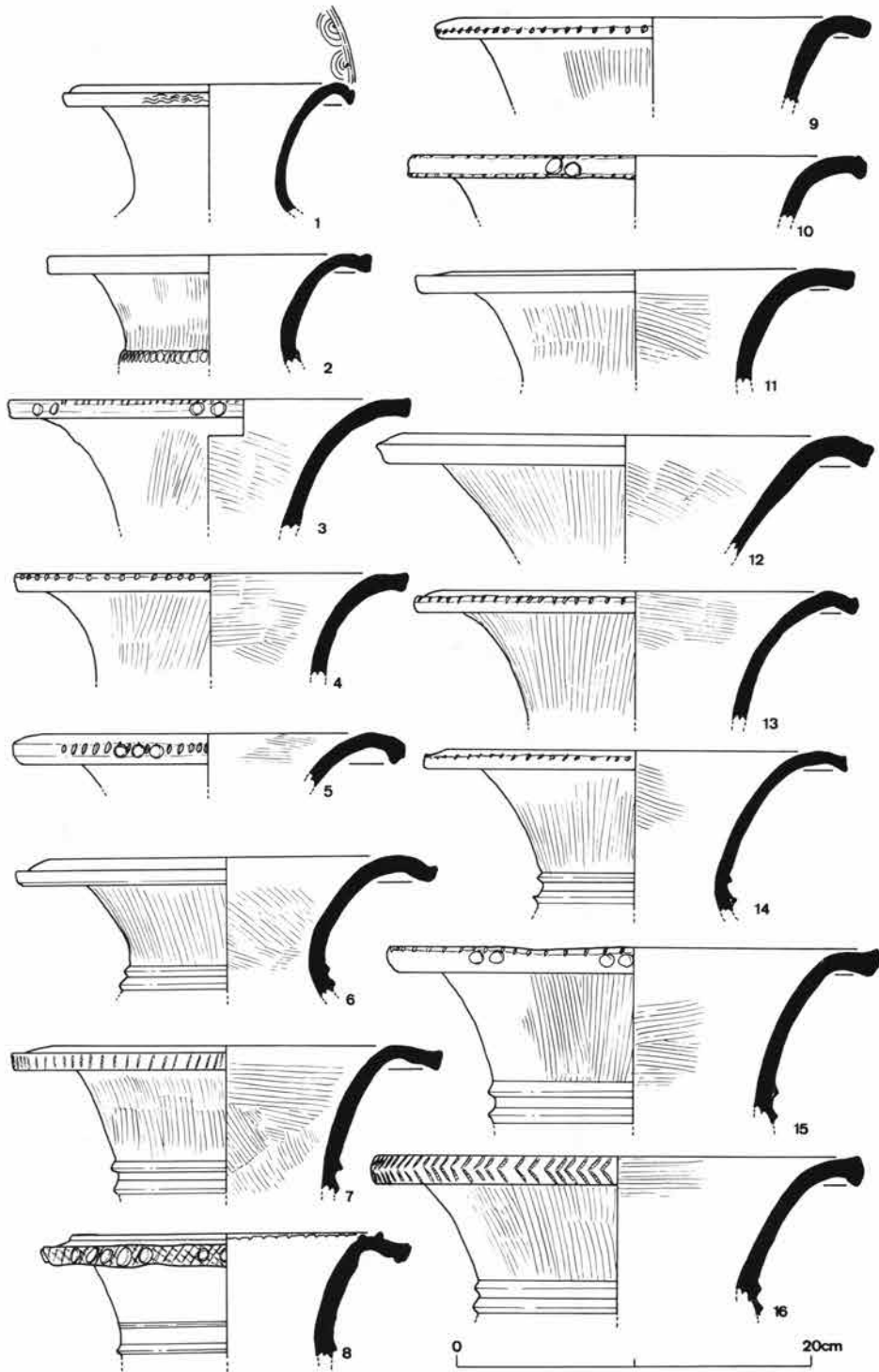
壺C(45~48・95・101・102) 口径15cm前後と小形のものが多い。口縁部がゆるやかに外反するもの(45)と、「く」の字状に屈曲するもの(46~48・101・102)などがある。46・48は、口縁端部に面を作る。48は、口縁端面に列点文と円形浮文、肩部に櫛描き直線文と斜格子文を描く。95は、最大腹径部が体部中程にある。体部外面をハケ調整した後、下半を下から上にヘラ磨きする。体部下半に焼成後の穿孔がある。

壺D(66~68) 無頸壺である。66は口縁部に4条の刻み目凸帯文、67は5条の凹線文をめぐらす。68は無文である。口縁部に紐孔がある。

壺E(49~58) 水差形土器や短頸壺など直立する口縁部をもつものを一括して壺Eとした。口縁が直線的に立ち上がるもの(E1)(49・52)、頸部が外反したのち口縁が上方へ立ち上がるもの(E2)(50・51・54~56)、口頸部が外方へ直線的に大きく開くもの(E3)(57・58)、長頸のもの(E3)(53)などがある。

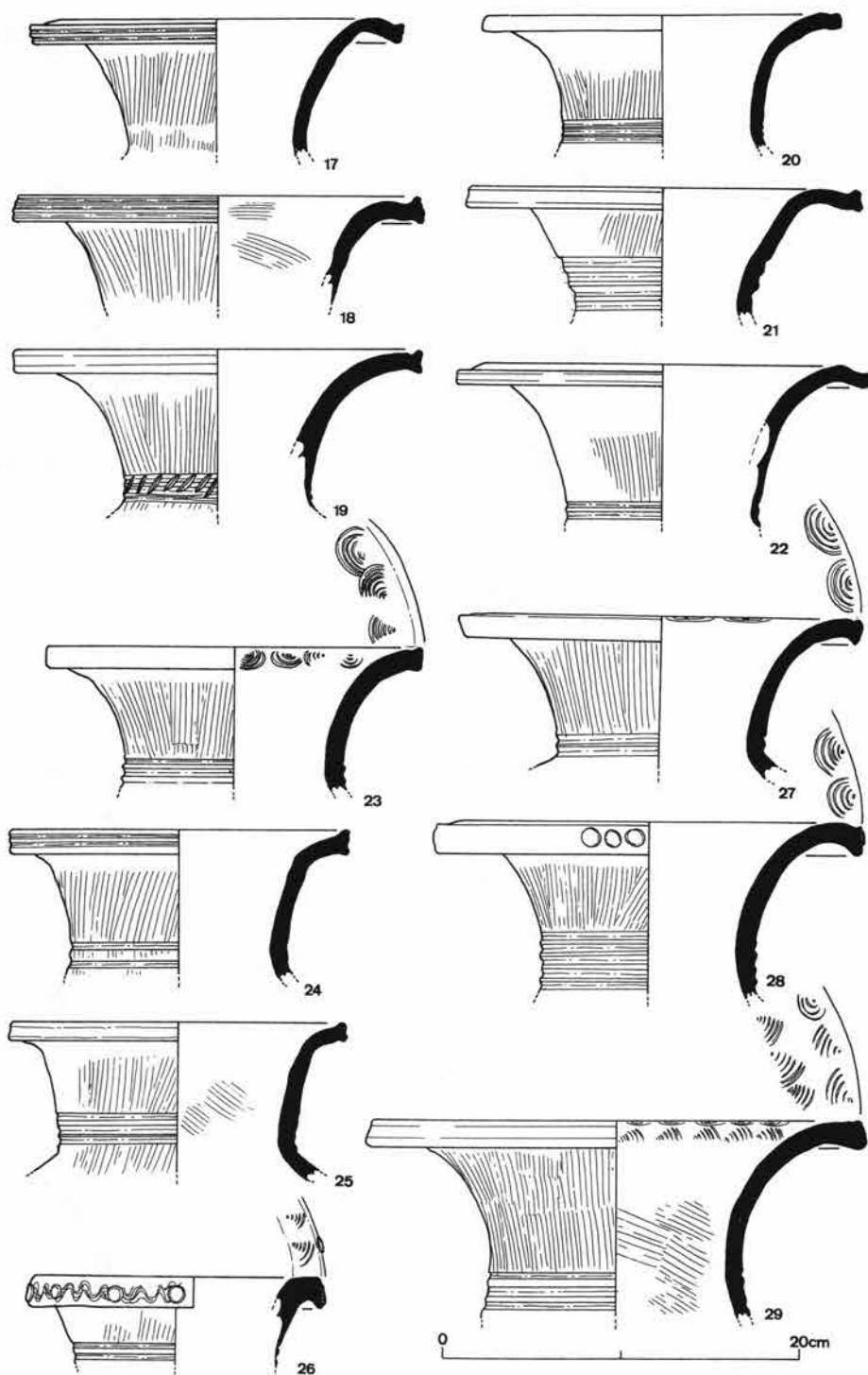
49は、口縁部の一部を切り取って注口を作る。口唇部に刻み目文、口縁~頸部外面に竹管文をめぐらす。50の頸部にはタタキ成形痕が明瞭に残る。51は、内外面を密にヘラ磨きする精良な土器である。注口がある。52は、口縁部外面に凹線文、ハケ原体木口による刺突文を二段めぐらす。53は長頸である。沈線状の細く浅い凹線文をめぐらす。55は、内面のみをていねいにヘラ磨きしている。58は、波状文と凹線文を施す。E1・E2は水差形土器、58は短頸壺である。

壺F(59~62) 無文のもの(59・60)と口縁部に凹線文を施すもの(61・62)がある。59・

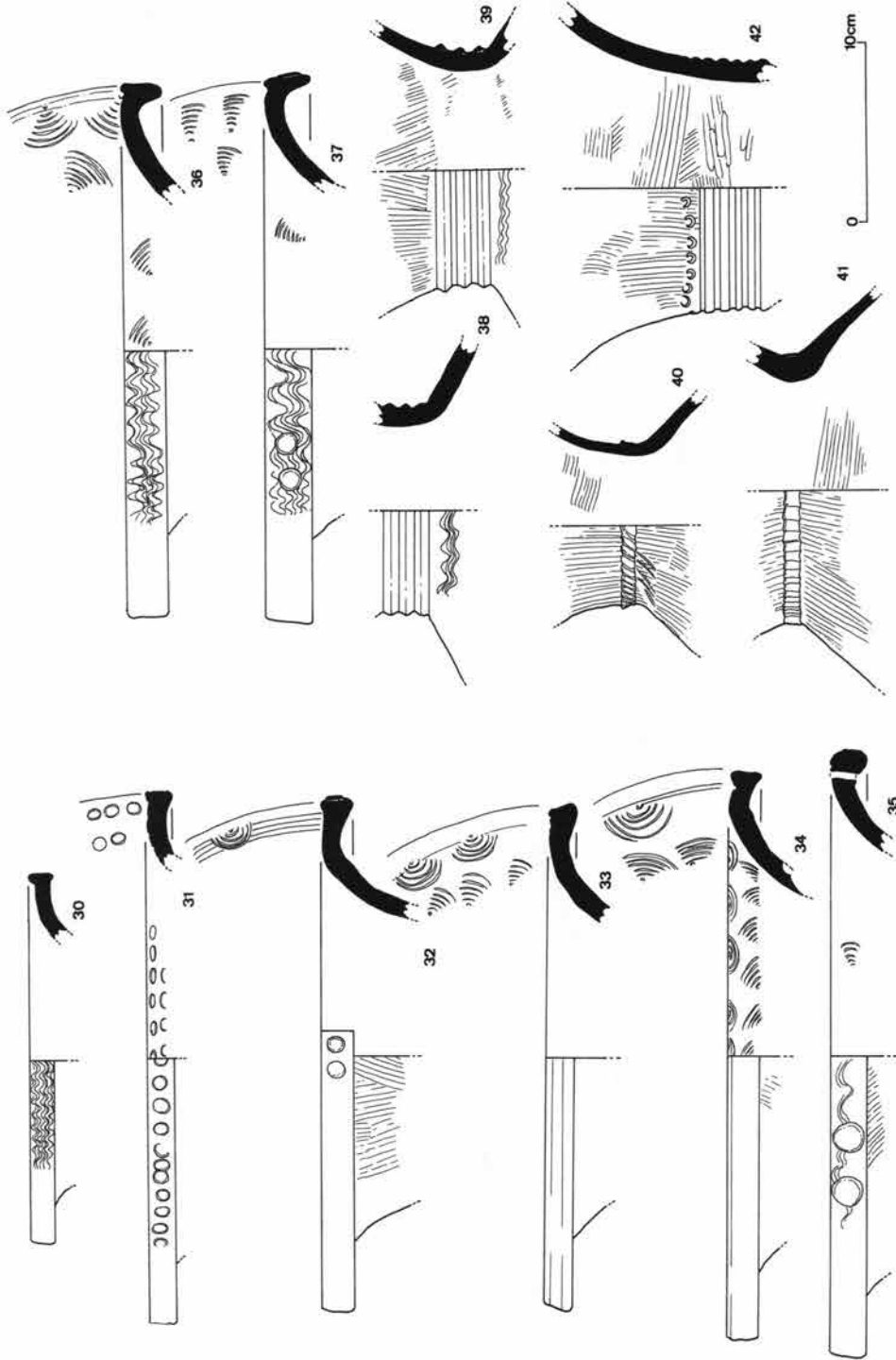


第119図 S D01埋土出土土器実測図(1)

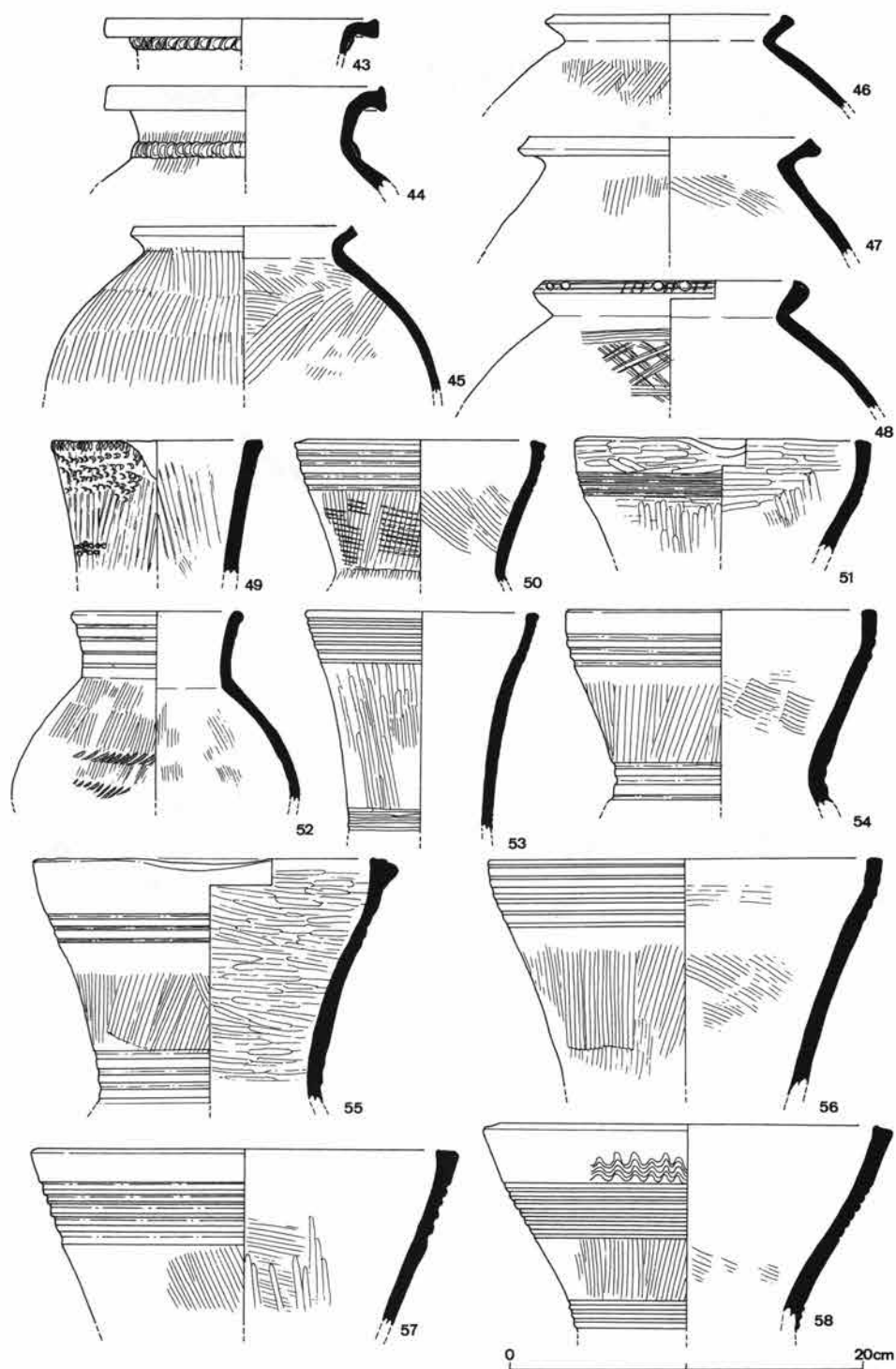




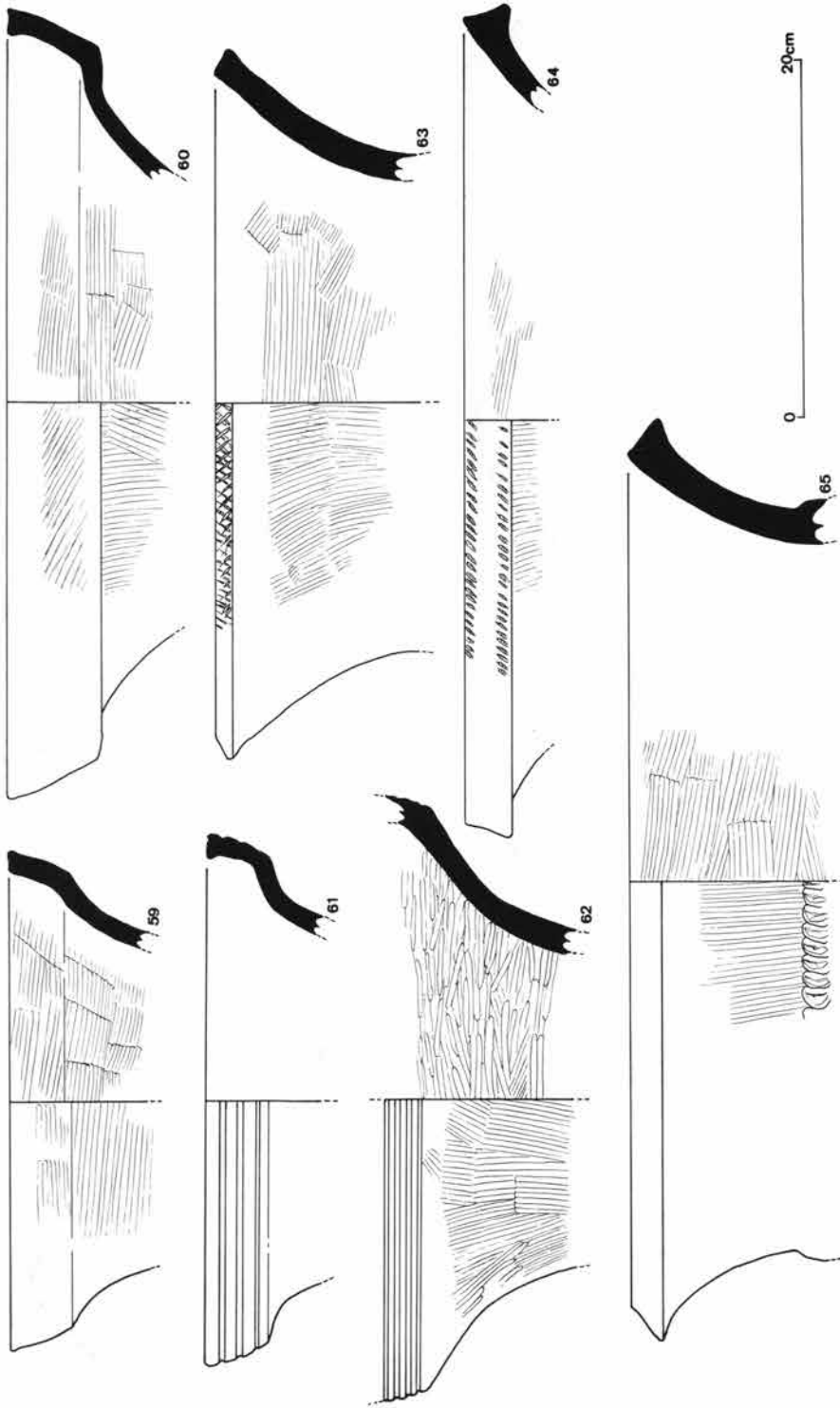
第120図 S D01埋土出土土器実測図(2)



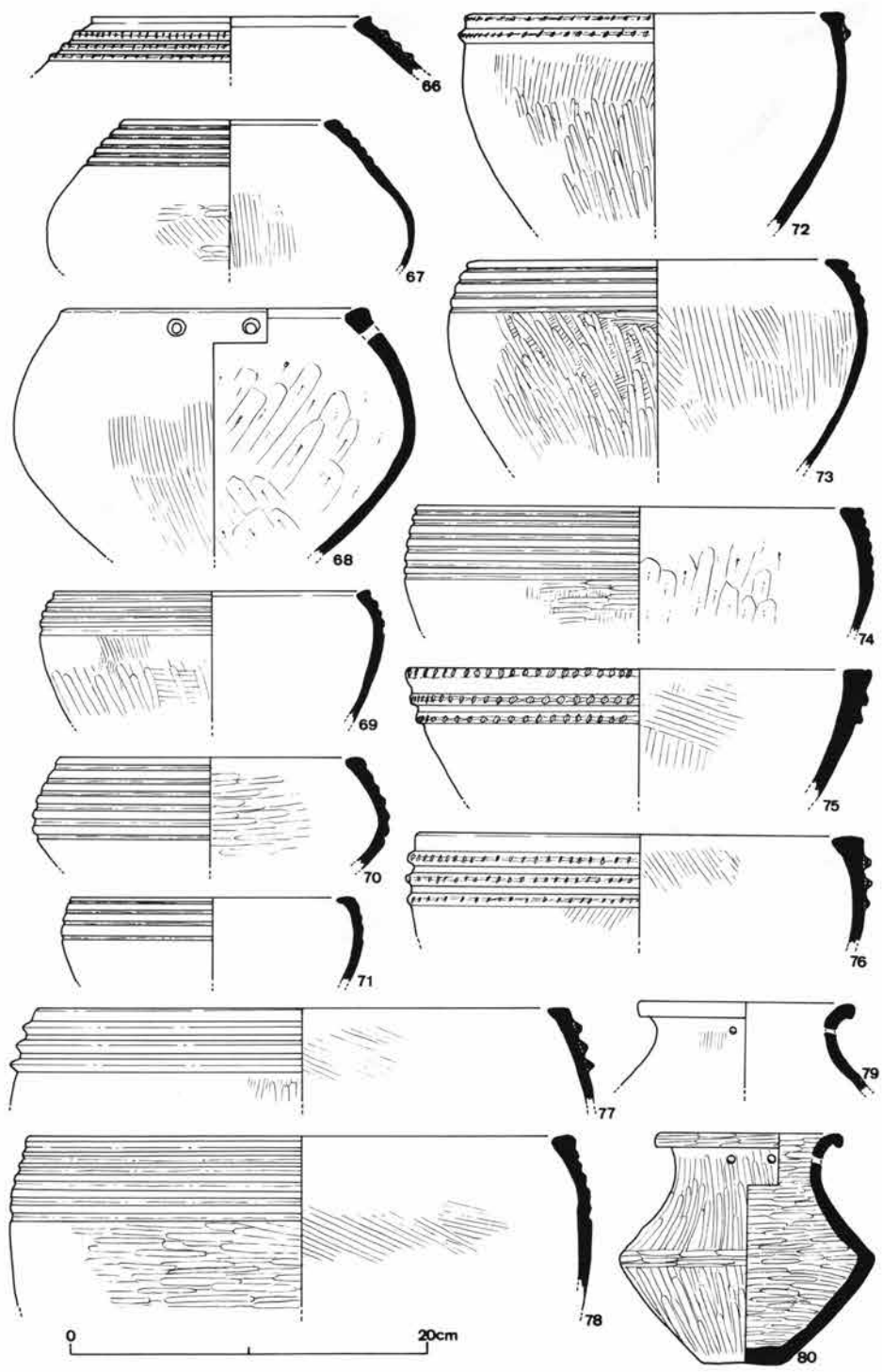
第121図 S D01埋土出土土器実測図(3)



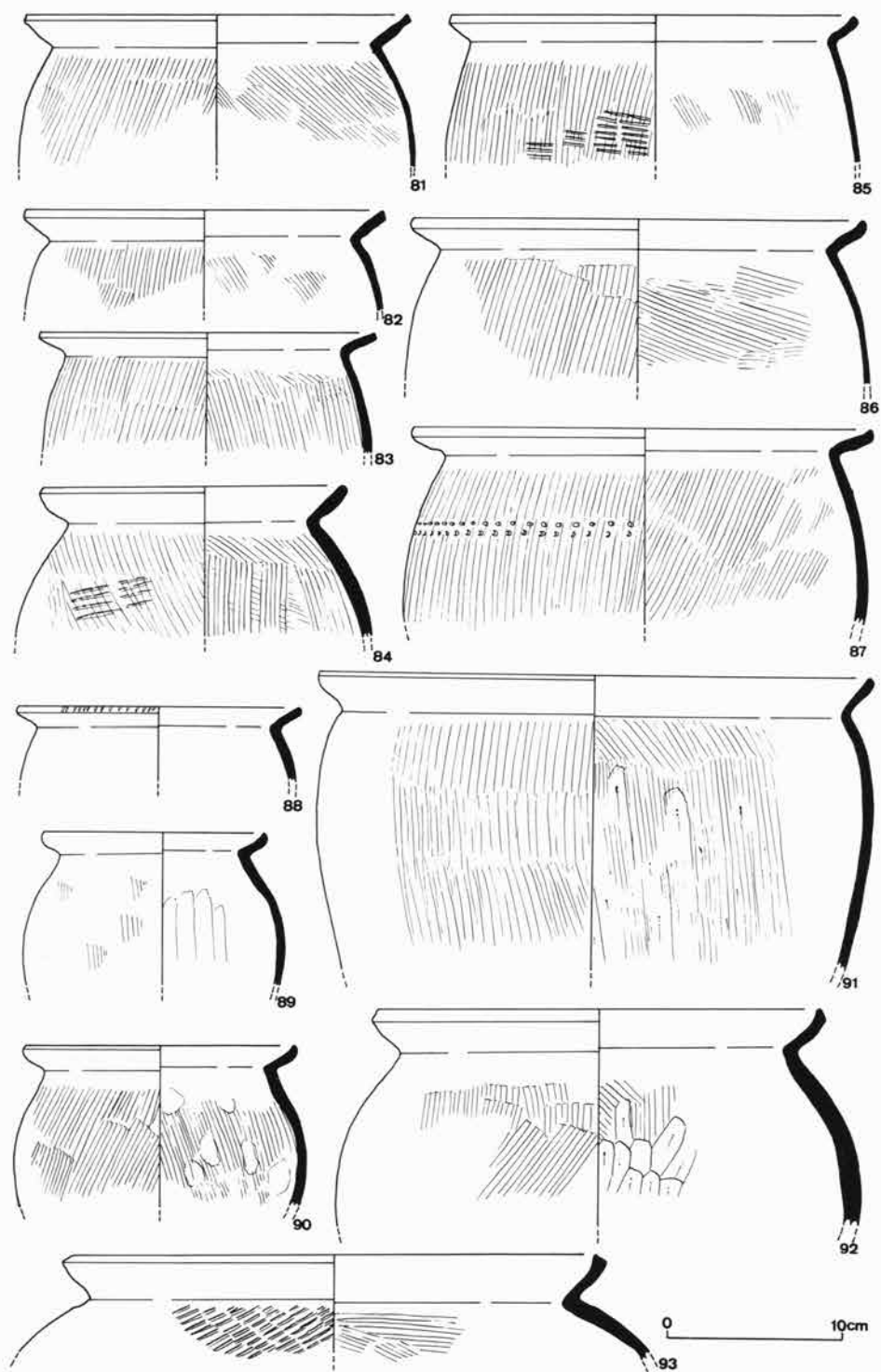
第122図 S D01埋土出土土器実測図(4)



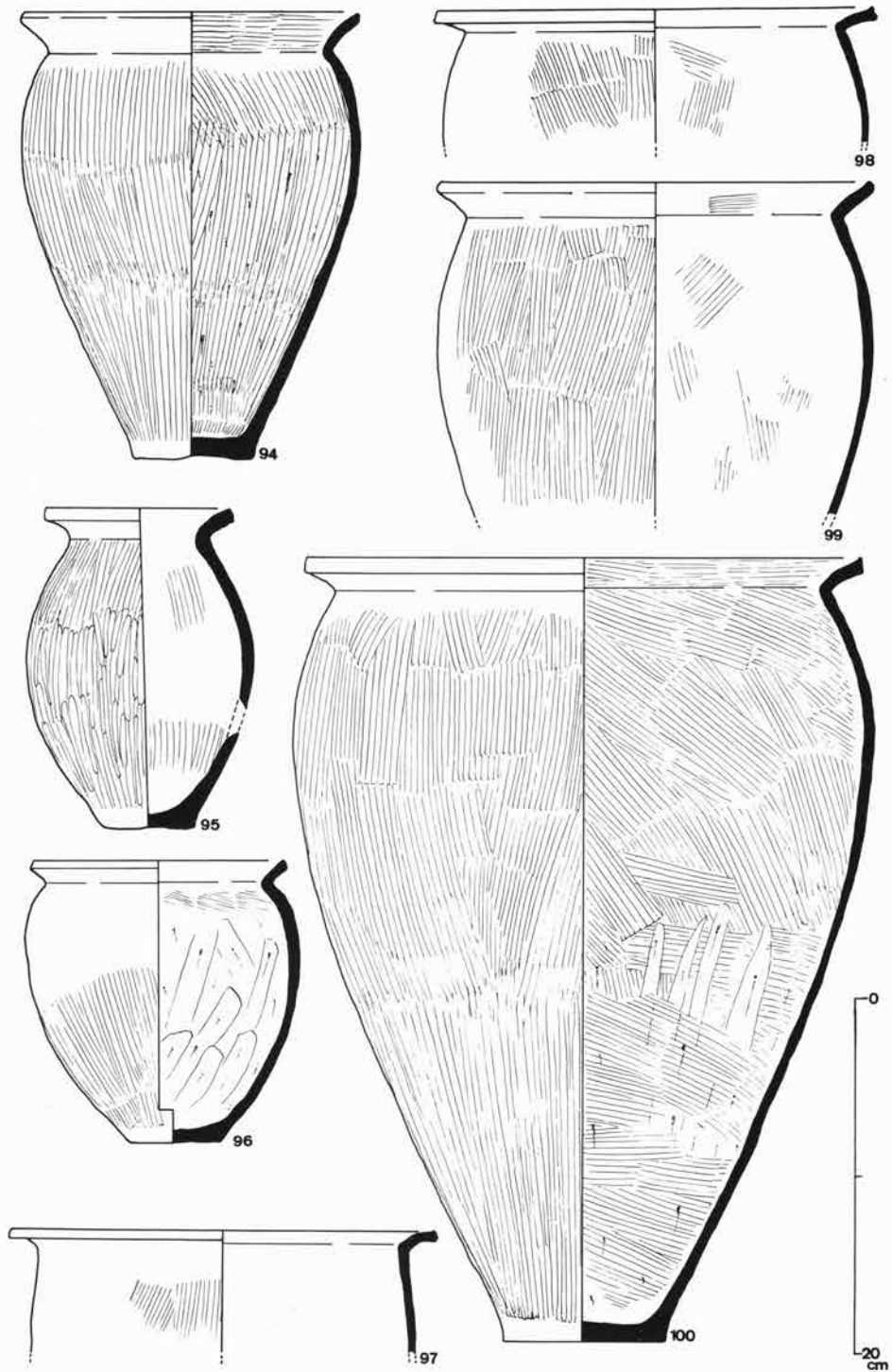
第123図 SD01埋土出土器実測図(5)



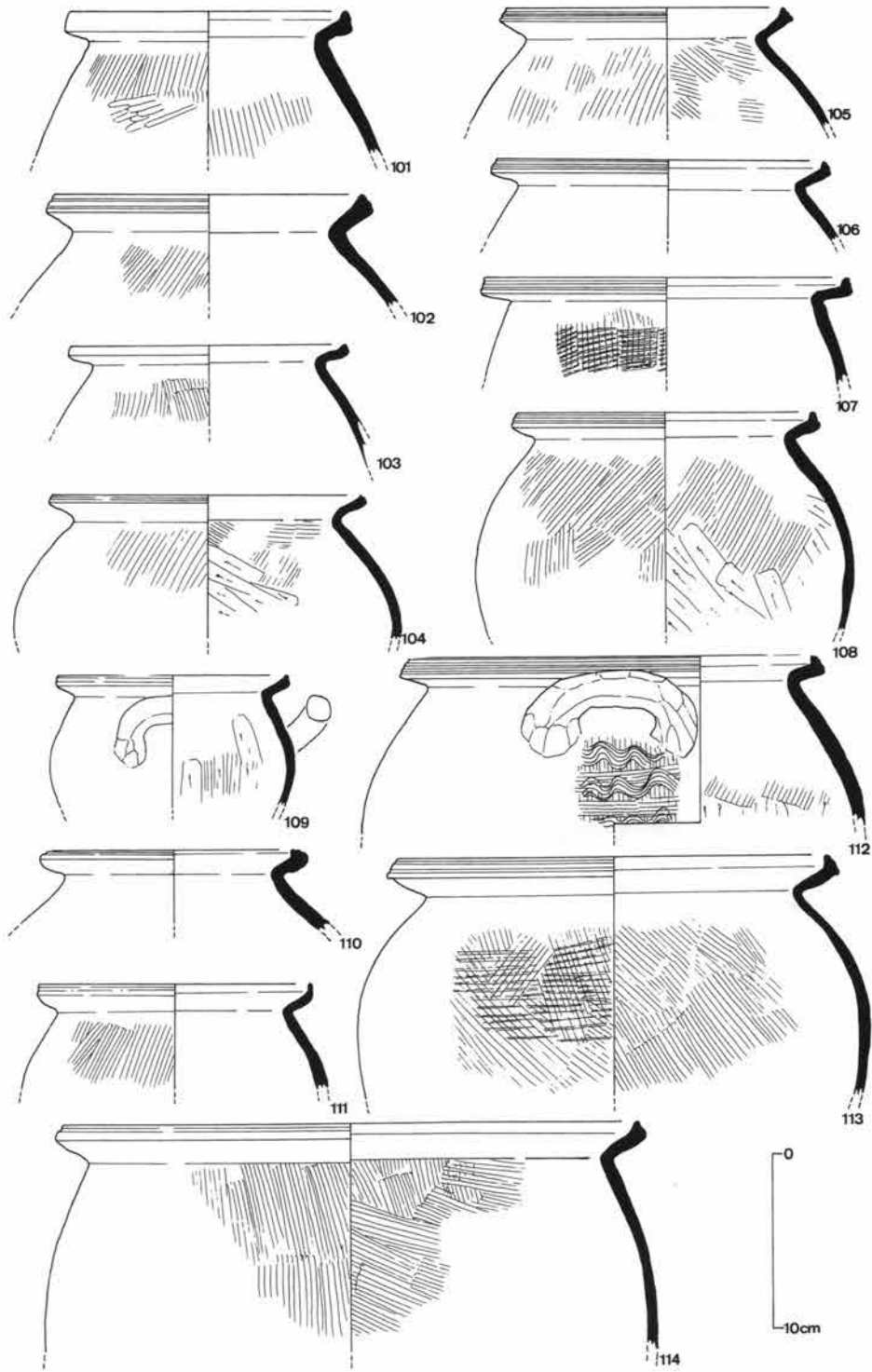
第124図 S D01埋土出土土器実測図(6)



第125図 S D01埋土出土土器実測図(7)

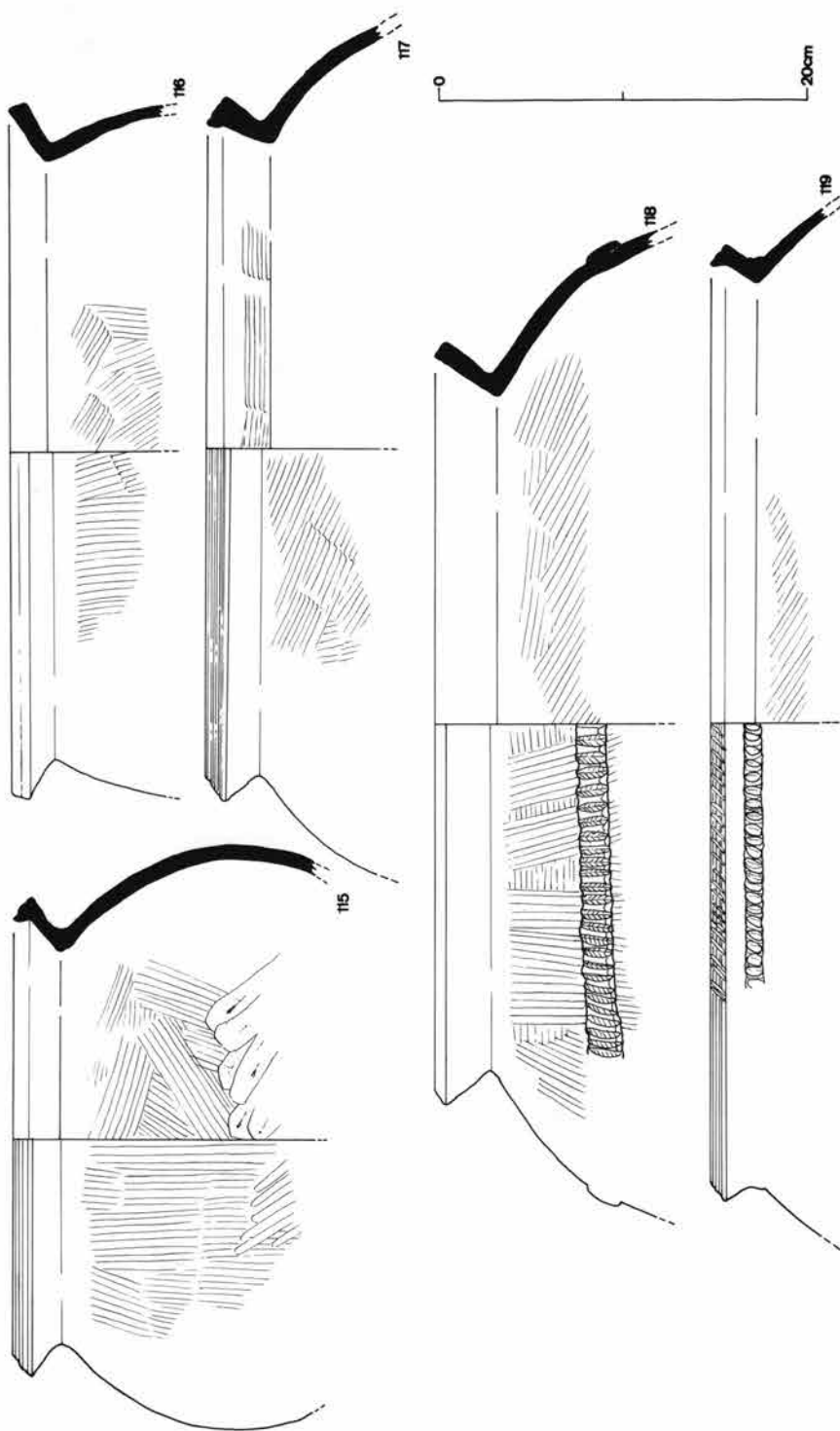


第126図 S D01埋土出土土器実測図(8)

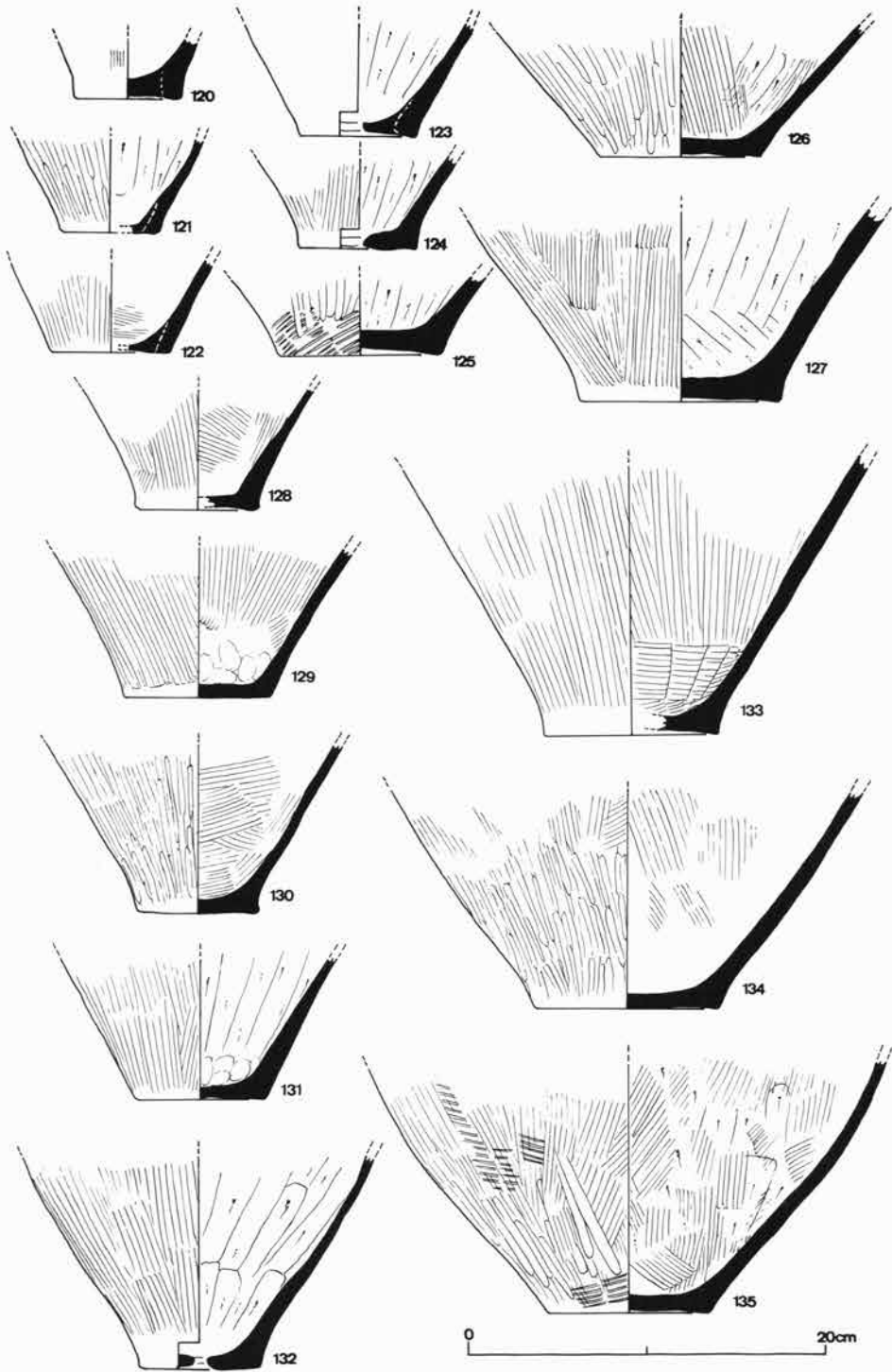


第127図 S D01埋土出土土器実測図(9)

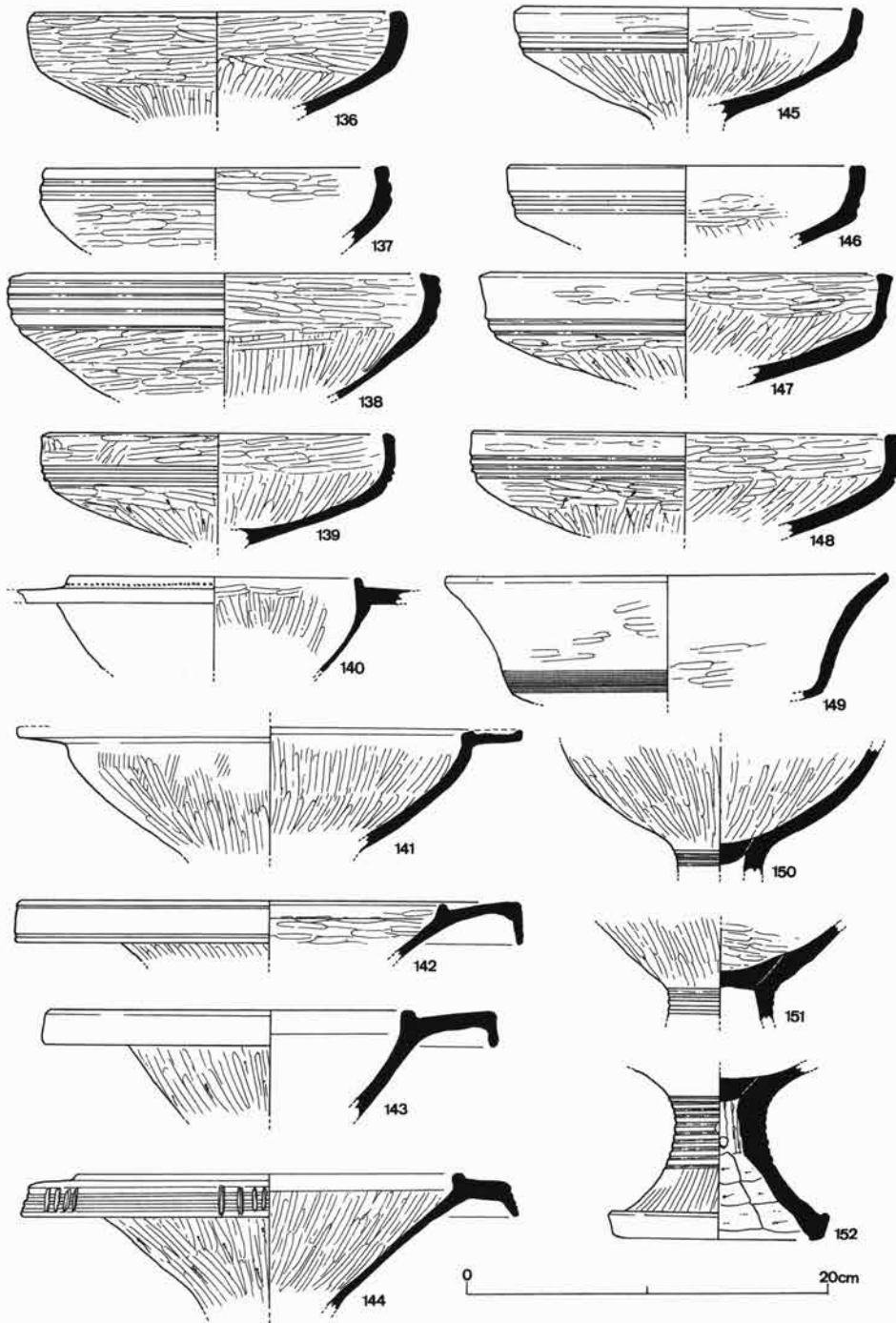




第128図 S D01埋土出土器実測図(10)



第129図 S D01埋土出土土器実測図(11)



第130図 S D01埋土出土土器実測図(12)

60は器体内外面に特徴的な粗いハケ調整を施す。62は、内面をヘラ磨きする。

壺G(63~65) 外傾する端面をもつ。63は、端面に斜格子文を描く。64・65は、端面を下方に拡張する。64は、端面の上下端にハケ原体の木口による刻み目文を施す。65は頸部に指頭圧痕文凸帯をめぐらしている。

壺H(79・80) 頸部に二孔一対の紐孔がある。79は、口縁端部に面を作る。80は、口縁部を下方に折り曲げて端面を丸く作る。内外面ともにていねいにヘラ磨きを施している。体部下半が火を受けて損傷している。79・80ともに胎土は精良である。

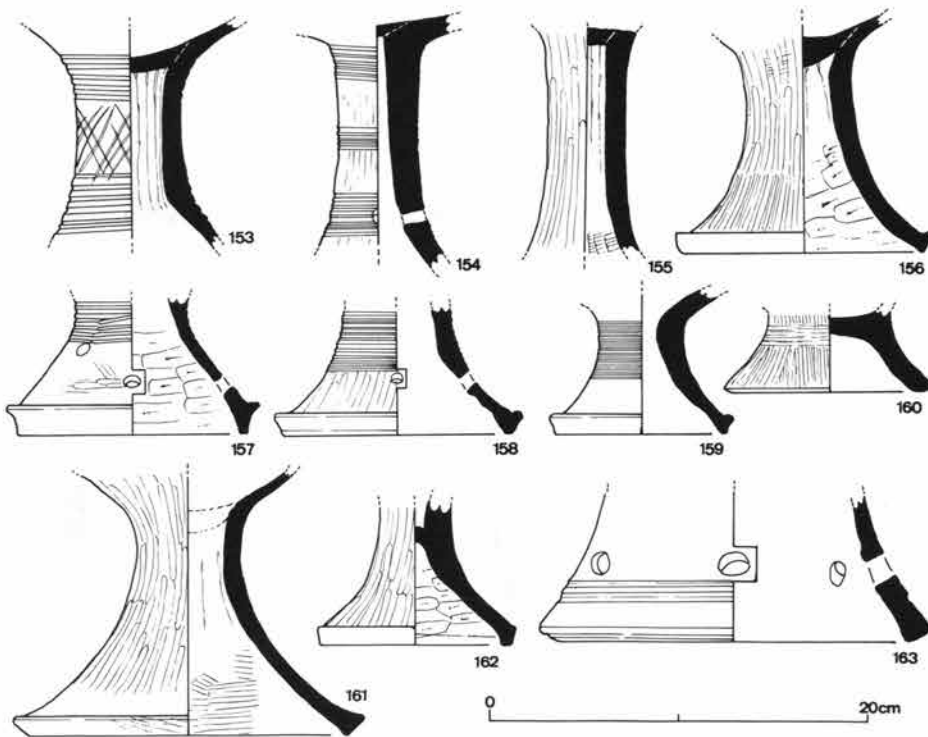
甕(81~94・96~100・103~119、第133図1・2)

甕には、口縁が「く」の字形に外反して直線的にのびるもの(甕A)、口縁が内湾して立ち上がるもの(甕B)、口縁端部を上方に拡張するはねあげ口縁系のもの(甕C)、外傾する広い端面に凹線文を施すもの(甕D)などがある。

甕A(81~83・88・94・96~100、116・118、第133図1・2)

甕Aには、口縁部端面を丸く作るもの(88・94・96)、面をもつもの(81~83・97~100)などがある。116・118は大形品である。

94・100は、全形を知り得る数少ない資料であるので、調整手法についてみておくこと



第131図 S D01埋土出土土器実測図(13)

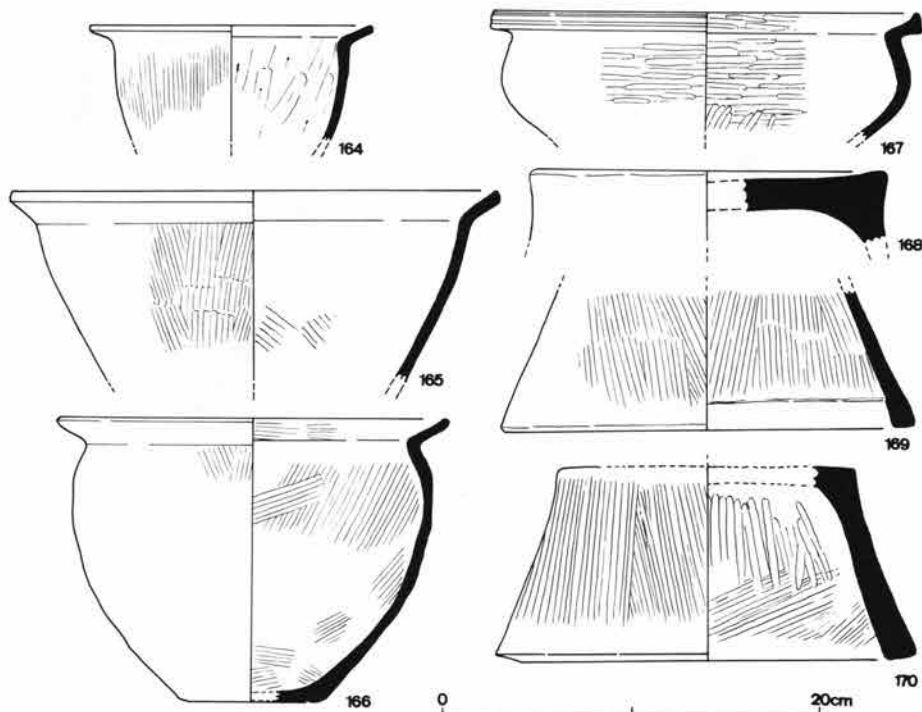
にしたい。94は、口縁部外面をヨコナデ、内面を横方向のハケ調整の後、ヨコナデ。体部外面は縦方向のハケ調整後、底部付近をヨコナデする。底部外面はハケ後ナデ調整である。体部内面は、斜め方向にハケ調整した後に、最大腹径部付近までヘラ削りをする。この後、縦方向のハケ調整を行い、ヘラ削りの跡を消している。この縦ハケの後に、底部内面をナデ調整する。100の外面調整は、94とほぼ同じである。体部内面は、斜めあるいは横方向にハケ調整した後に、体部下半を下から上にむかってヘラ削りをする。この後、横あるいは斜め方向のハケ調整を行い、ヘラ削りの跡を部分的に消している。この縦ハケの後に底部内面をナデ調整する。

118の体部にはハケ原体木口による圧痕文凸帯がめぐる。

第133図1・2は、口縁部が短くゆるやかに立ち上がるものである。外面縦ハケ、内面ナデ調整である。チャートや砂岩などの岩石を主体とする微細な円礫を多量に含む赤茶褐色の土器である。3は、その底部と考えられる。外面に粗いヘラ磨きが施されている。

甕B(84~87・89~93)

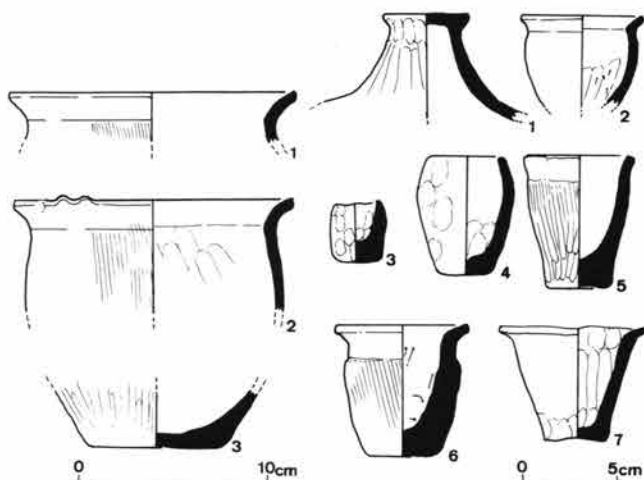
口縁部端面を丸く作るもの(86・89・90・91)、面をもつもの(84・85・87・92・93)などがある。92・93は、端面を上方につまみあげ、甕C1にやや類似する形状をもつ。87は、



第132図 S D01埋出土土器実測図(14)

肩部に列点文をめぐらす。

84・85・93の体部外面にはタタキ成形痕が残っている。タタキ目は、ハケ目によりていねいに消されており、わずかに観察できる程度に遺存している。91は、内面に左上がりのハケ調整後、体部下半に下から上に向かってヘラ削りする。その上から縦方向のハケでヘラ削りを消す。92は体部内面をハケ調整後、ヘラ削りしている。



第133図 S D01埋土出土  
土器実測図(15)

第134図 S D01埋土出土土  
器実測図(16)

**甕C (103~114)** 甕Cには、口縁部端面を短く上方に拡張するもの(甕C1; 103・104・109・111・114)と、外傾するやや広い面をつくるもの(甕C2; 105~108・110・112・113)がある。C1は、口縁部端面に1~2条の凹線文、C2は2~3条の凹線文を施すものが多い。109・112には把手がある。112の体部には櫛描き直線文と波状文が施されている。107・113の外面にはタタキ成形痕が残る。104・108・109・112はハケあるいはナデ調整の後、体部内面をヘラ削り調整している。

**甕D (115・117・119)** 大形の甕である。口縁端面を拡張して外傾する広い面を作り、凹線文を施す。113は、外面にタタキ成形痕が残る。119は、口縁端面に凹線文を施したのち刻み目文、頸部に指頭圧痕文をめぐらす。

#### 壺・甕の底部(120~135)

外面をヘラ磨きするものを壺(121・125・126・130・134・135)、ハケ目調整あるいはナデ調整するものを甕(120・122~124・127~129・131~133)として説明する。

壺外面のヘラ磨きは、ハケ目調整の後に、下から上へ向かって施される(121・126・130・134・135)。甕外面のハケ目調整も同じく、多くの場合、下から上へ向かって施されている(127・129・133)。壺・甕ともに、底部外面下端をナデ調整する。

底部内面の調整は、ハケ目あるいはナデによるもの(120・122・128~130・133・134)、ヘラ削りによるもの(121・123~125・127・131・132)、ヘラ削りの後にハケ調整するもの(126・135)などがある。

125・135にはタタキ成形痕が残る。120・121・123は底部充填手法によるものであろう。

高杯(136~163)

高杯には、皿状の杯部に直口する口縁を有する高杯A、水平にのびる口縁を有する高杯B、屈曲して大きく開く高杯Cなどがある。

高杯A(136~139・145~148) 無文のもの(136)と口縁部外面に凹線文を有するもの(137~139・145~148)がある。凹線文は幅広く浅いもの(138・145~147)や狭い沈線状のもの(139・148)などがある。

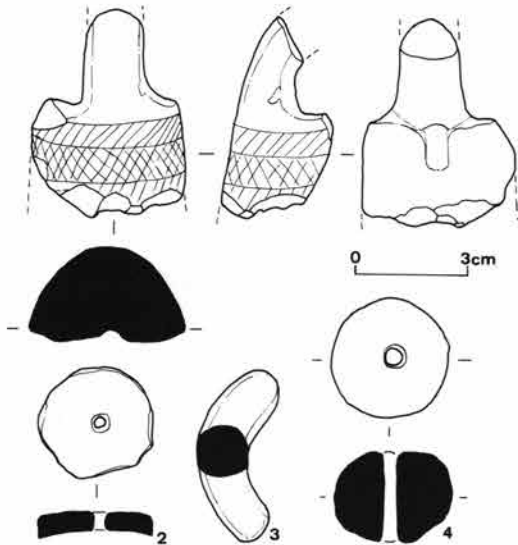
高杯B(140~144) 口縁の形状によって以下の3種に分類できる。水平にのびておわるもの(B1)、垂下するもの(B2)、外傾する面を作るもの(B3)。

140は、口縁部を欠損しており、全形は不明である。口縁部の立ち上がりに刺突文をめぐらす。141は、B1である。142・143は、B2である。144は、B3である。外傾する面に凹線文と4個一対の棒状浮文がある。

高杯C(149) 屈曲部に狭くて浅い凹線文をめぐらしている。

150・151は、杯部底面である。152~159・161・162は、高杯脚部である。ラッパ状に開くもの(152・156・159・161・162)と柱状のもの(153・154・155)がある。脚柱あるいは脚端に凹線文を施すもの(150~154・157・159)、文様をもたないもの(155・156・161・162)とがある。153は、上下2段の凹線文間に斜格子文がある。いずれも、円盤充填手法によるが、下方から充填を行う162のような例もある。

その他の脚部(第131図160・163) 160は、「ハ」の字形に開く脚部である。163は、器台の脚部であろう。



第135図 S D01出土土製品実測図

鉢(69~76・164~167)

「く」の字形に屈曲する口縁を有するもの(鉢A)、内湾して立ち上がる口縁を有するもの(鉢B)、短く屈曲し端部に面を作るもの(鉢C)、直口のもの(鉢D)がある。

164・165は鉢A、166は鉢B、167は、鉢Cである。167は、口縁端部に凹線文がめぐる。

69~76は、鉢Dである。口縁部に断面三角形の貼付凸帯文をめぐらすもの(72・75~77)と凹線文をめぐらすもの(69・71・73・74・

78)がある。72・75・76は、刻み目凸帯文である。69～71は、台付鉢であろう。

その他の土器(第134図1～7)

台形土器(168～170) 台形土器の上面は、ていねいにナデ調整されている。170の内面には部分的に粗いヘラ磨きが施されている。

蓋(第134図1) 口縁部が「ハ」の字形に大きく開く。内面に煤が付着している。

ミニチュア土器(第134図2～7) 2は、「く」の字形に外反する口縁部をもつ。3は、粗製である。4は、砲弾形の器体をもつ直口の土器である。5は、器体外面にヘラ磨きが施されている。

②土製品(第135図1～4)

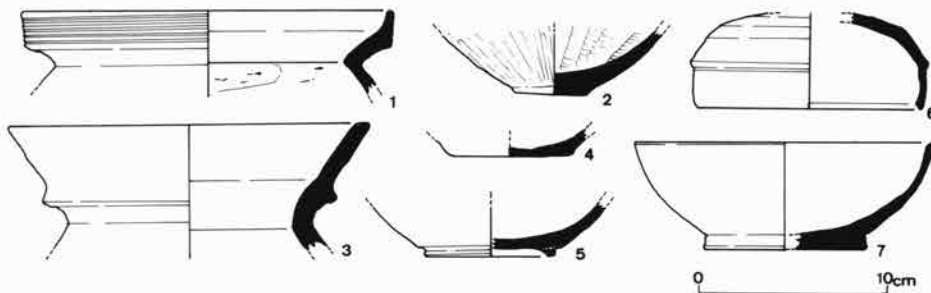
1は、銅鐸形土製品である。鈕と鐸身上半が遺存する。鱗はない。鈕は断面楕円形を呈し、鈕孔は1孔である。舞の中央には径約7mmの舞孔がある。破損し、一部が遺存している。鐸身には沈線による横帯が現状で3帯認められ、それぞれ上から単斜線文、斜格子文、単斜線文の順に文様が充填されている。胎土には稲朶が混入されている。色調は暗灰色である。流路内から、第Ⅲ～Ⅳ様式土器との混在状況で出土しており、時期を限定できない。

2は、紡錘車である。土器の体部破片を転用したものである。径約3cm・厚さ約5mmである。3は、湾曲する棒状を呈し、断面は円形である。4は、土玉である。径3.2cm・厚さ2.4cmを測る。

③包含層出土遺物(第136図1～7)

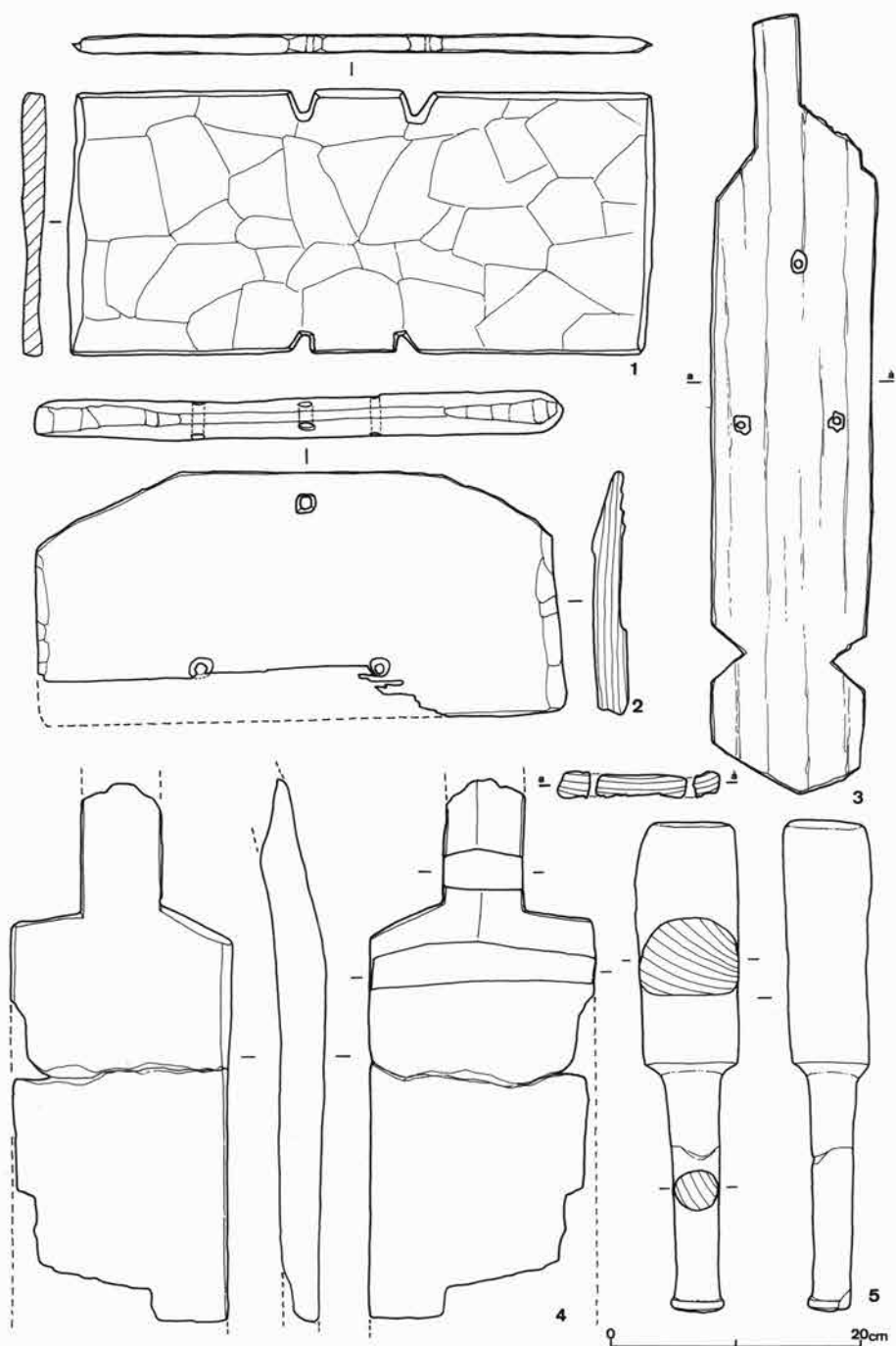
1は甕、2は小型の壺である。いずれも弥生時代後期に属する。3は、土師器である。二重口縁の壺である。古墳時代前期のものであろう。4は、土師器杯の底部である。底部外面はヘラ切りである。5は須恵器杯、7は椀である。6は、須恵器杯蓋である。6世紀前半の資料である。

(田代 弘)



第136図 包含層出土土器実測図





第137図 S D01出土木器実測図(1)

B. 木器類(第137～149図)

木器類は、流路(SD01)に伴って数多く出土している。流路の護岸施設として用いられた板材と杭が大半を占めるが、容器類や農耕具などの道具類も数多く出土している。主なものを図示して説明する。

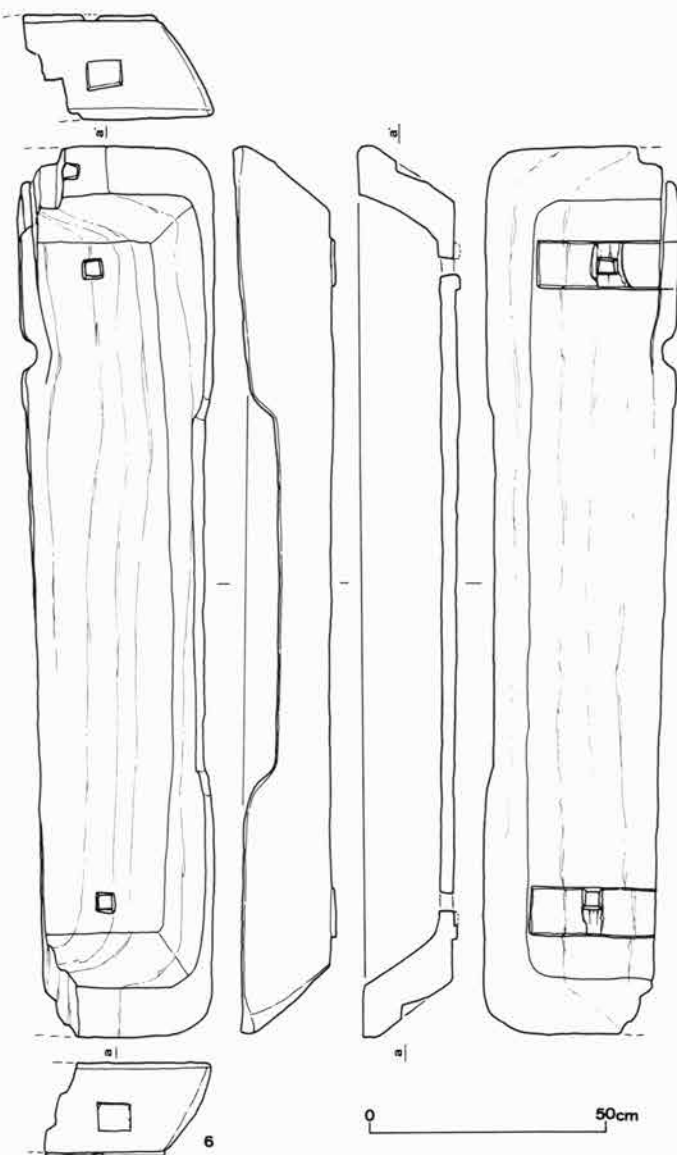
田下駄(1・3) 1は、枠無し形式の田下駄である。横型である。3は、枠付き田下駄の部材である。枠は検出していない。

えぶり(2) 下端が厚く、上端に向かって薄く作られている。3孔あるが、柄の装着孔が小さい。田下駄などの用途も考えられる。

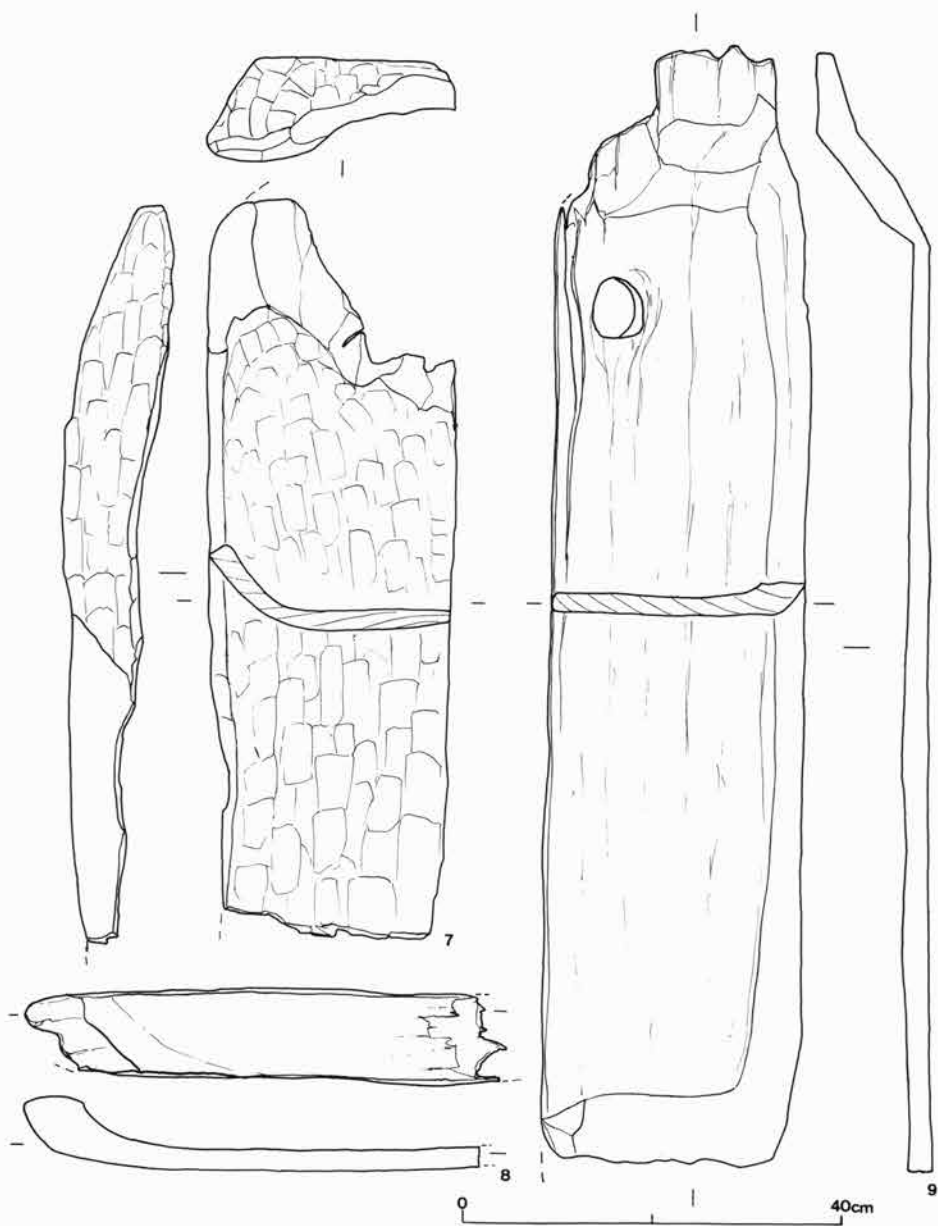
鋤(4) 鋤の未製品である。柄と先端部が失われている。

横槌(5) 取水口状の遺構に伴って出土したものである(第117図2)。槌部には顕著な使用痕が認められる。

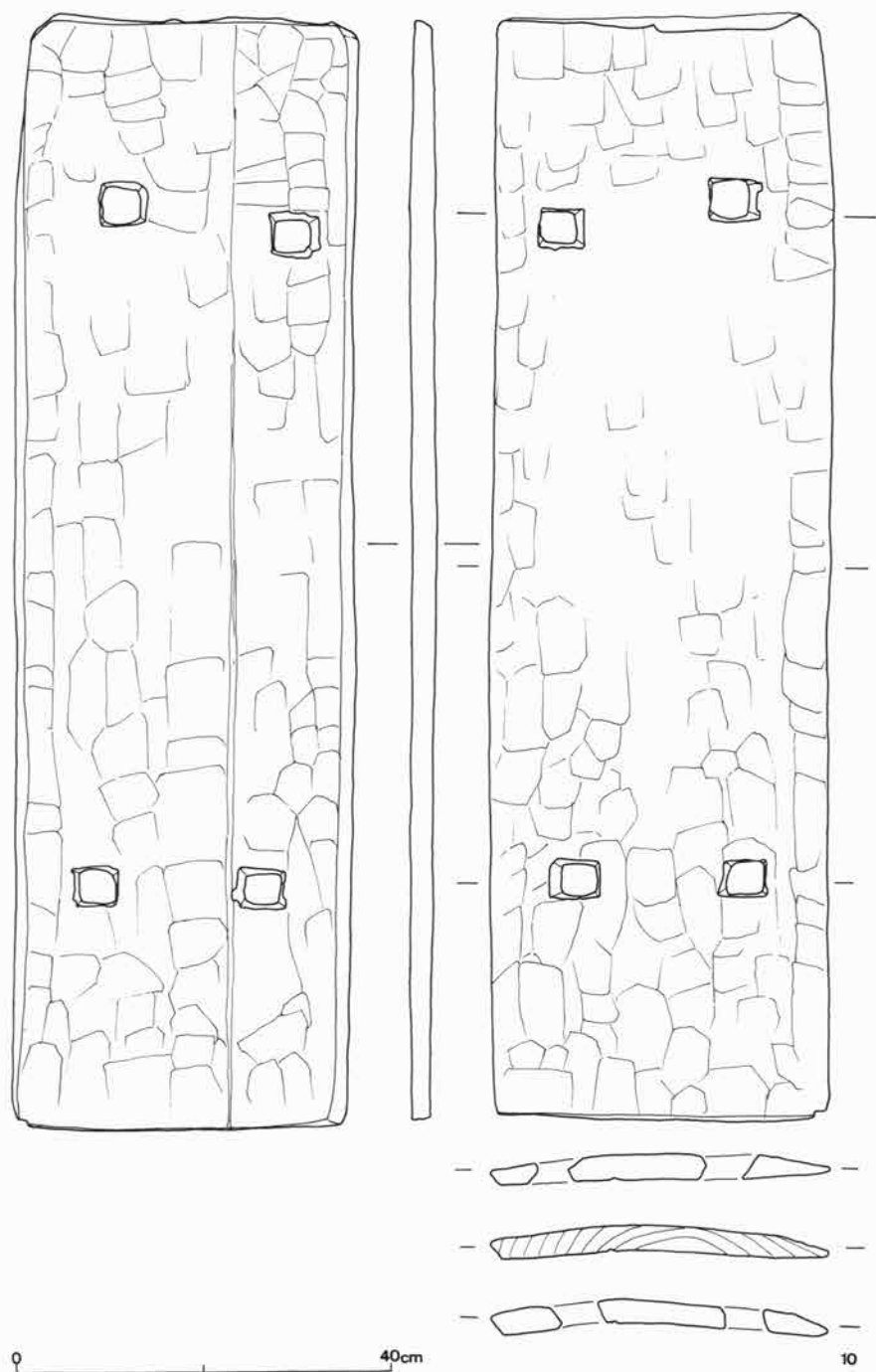
槽(6～9・12) 6～9は、大形品である。6は、取水口状遺構の一部として転用されていた槽である。長側辺の一方が失われているが、ほぼ全形を知ることができる。平面形が長方形の槽である。



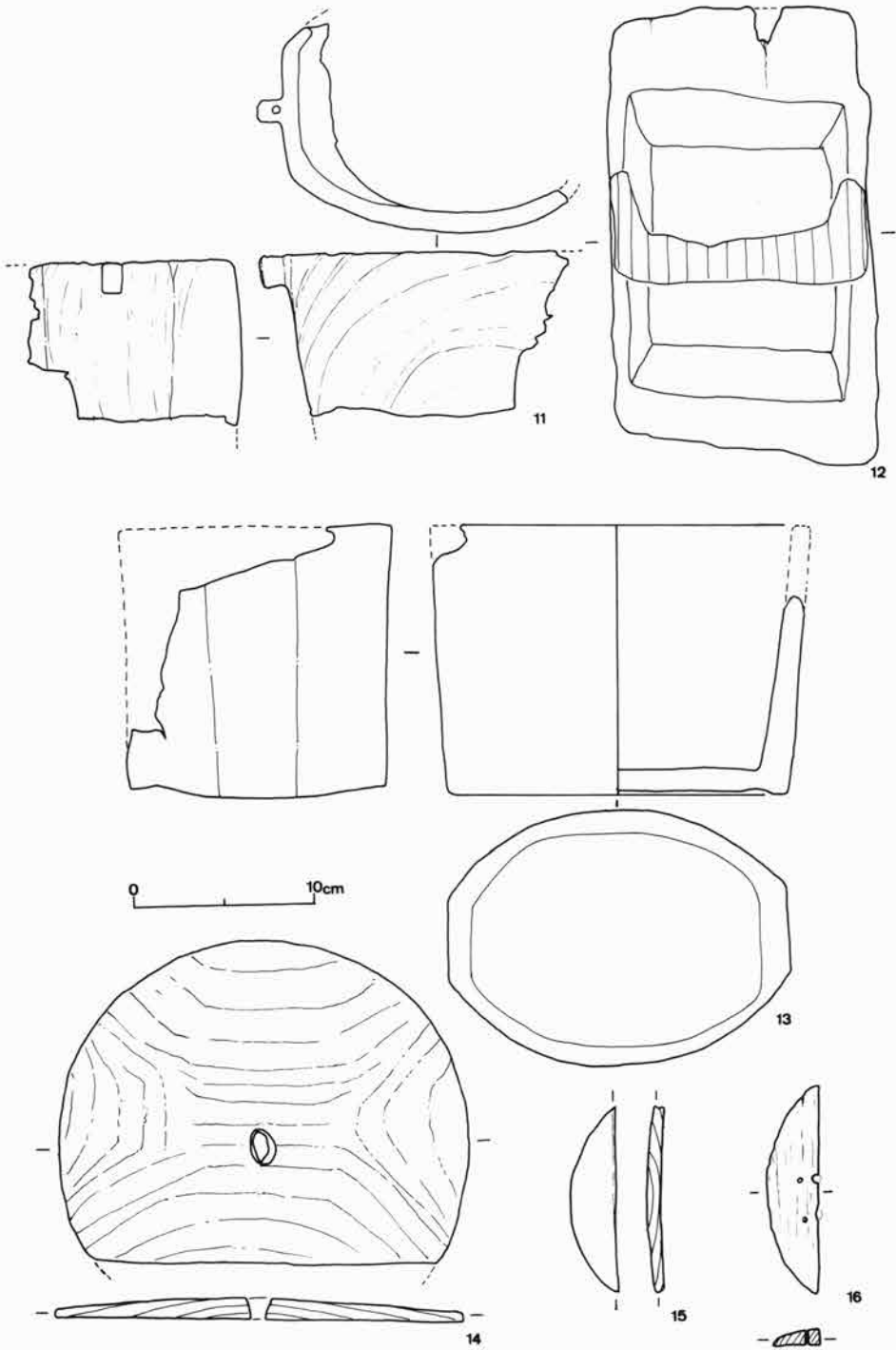
第138図 SD01出土木器実測図(2)



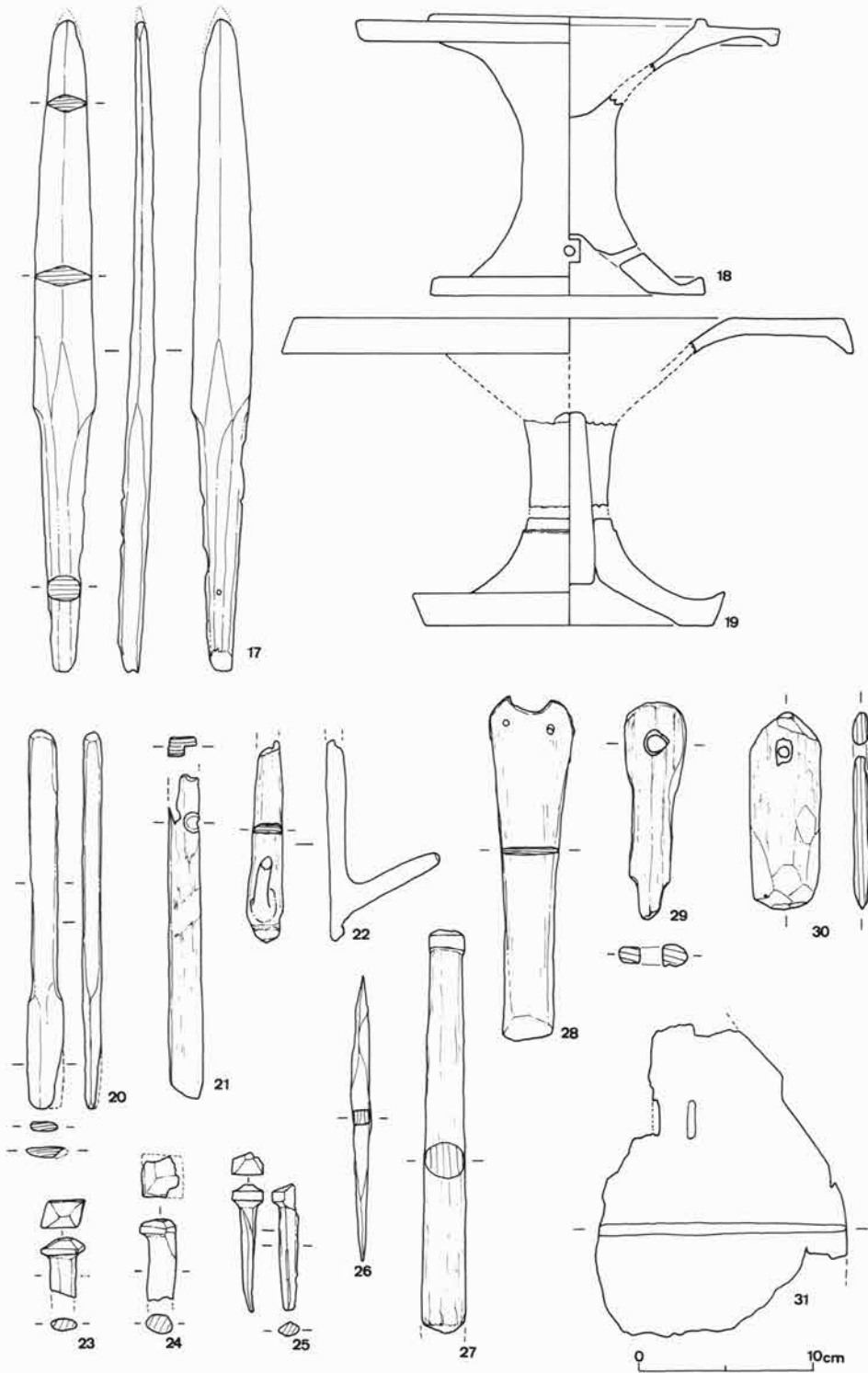
第139図 S D01出土木器実測図(3)



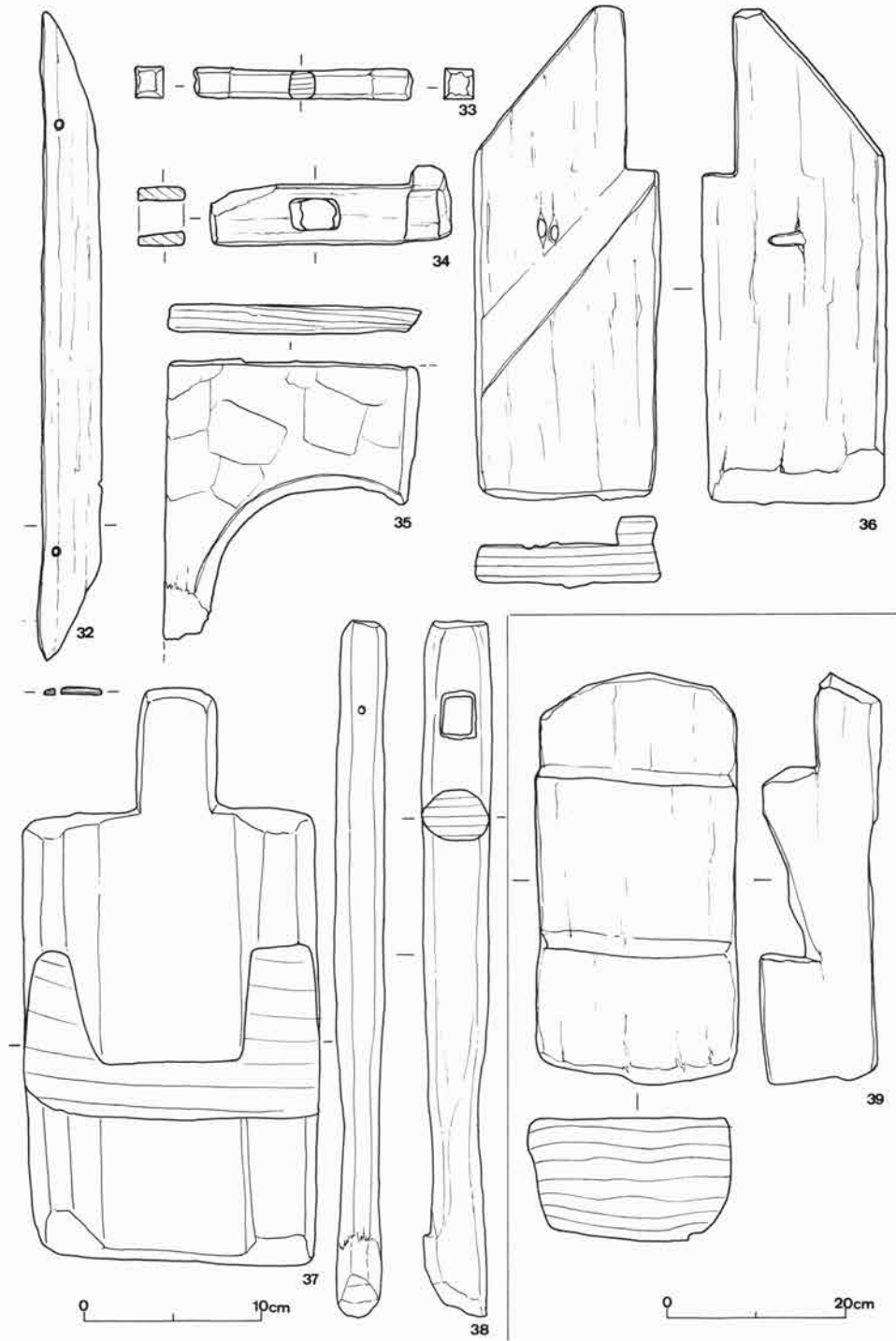
第140図 S D01出土木器実測図(4)



第141図 S D01出土木器実測図(5)



第142図 S D01出土木器実測図(6)



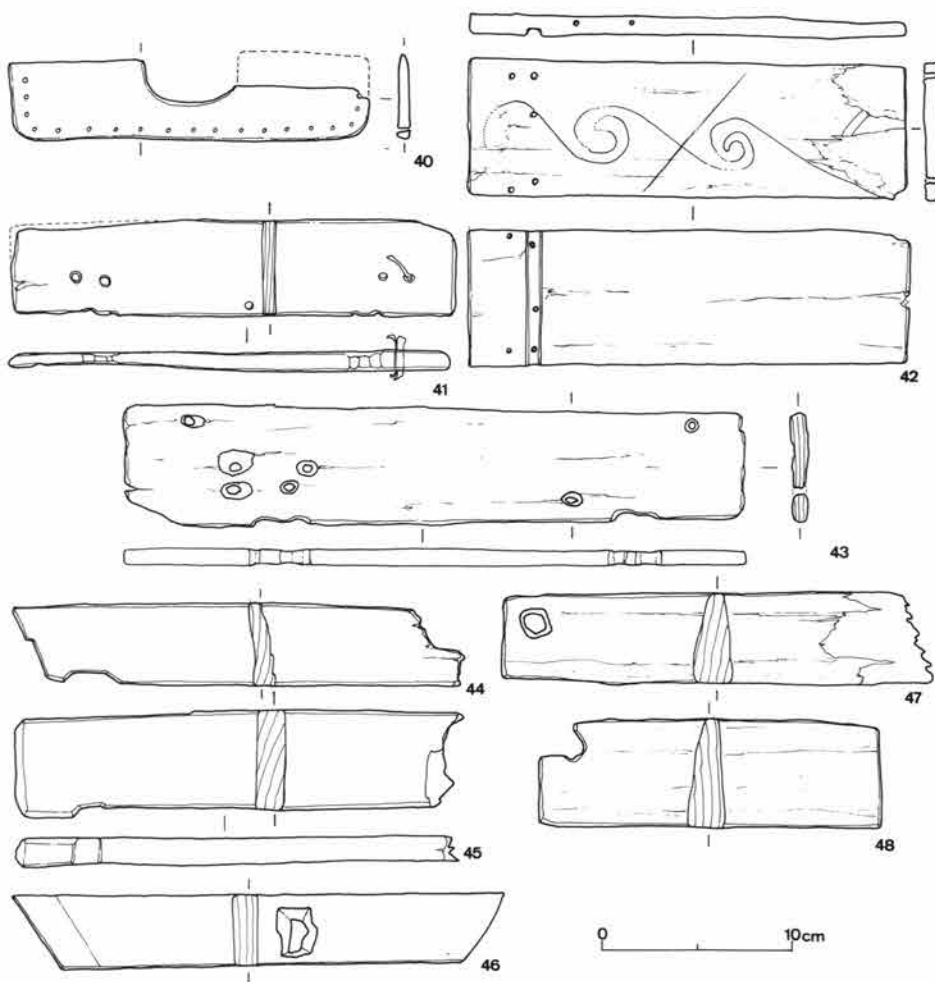
第143図 S D01出土木器実測図(7)

長側辺に抉り、短側辺には方形の刳り込みがある。外底面には台部が作られている。槽の底部には両端に方形の孔が穿たれているが、これは転用の際に加工されたものである。7～9は、いずれも断片的な資料である。7・9は長方形、8は先端の尖った長楕円形の平面形態を有するものと思われる。

12は、長さ25cmほどの小さな方形の刳り貫き容器である。

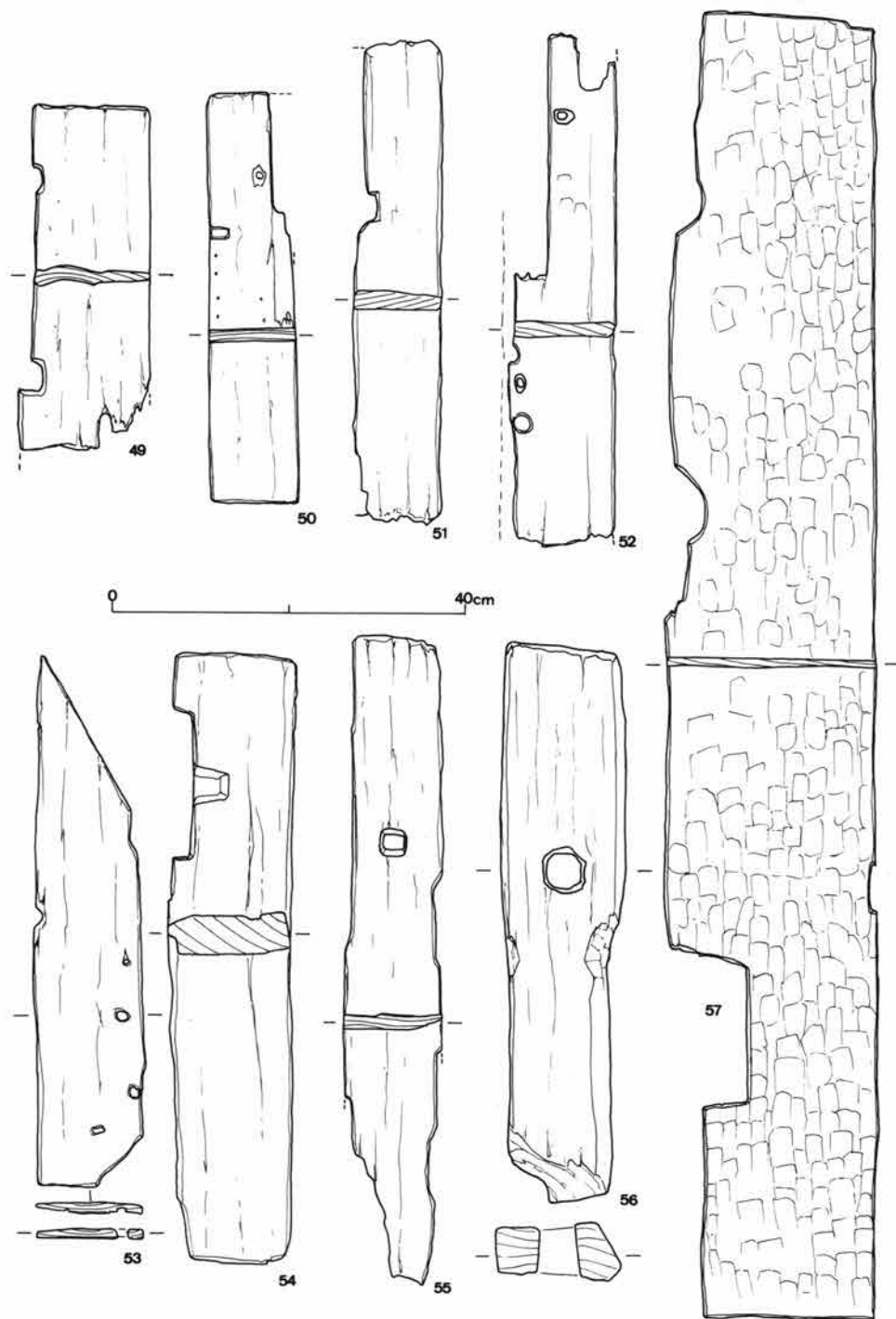
桶(11・13) 11・13ともに長楕円形の平面形態を有し、両側に面を作るタイプのものである。器壁はわずかに開きながら直線的に立ち上がる。11には耳が付き、孔が開けられている。13は、底部が完存している。内底面は平坦に作られている。外底面は周縁に沿って浅く彫られている。

高杯(18・19) 一木を刳り貫いたもの(18)と、刳り貫いて作った部材を組み合わせるも

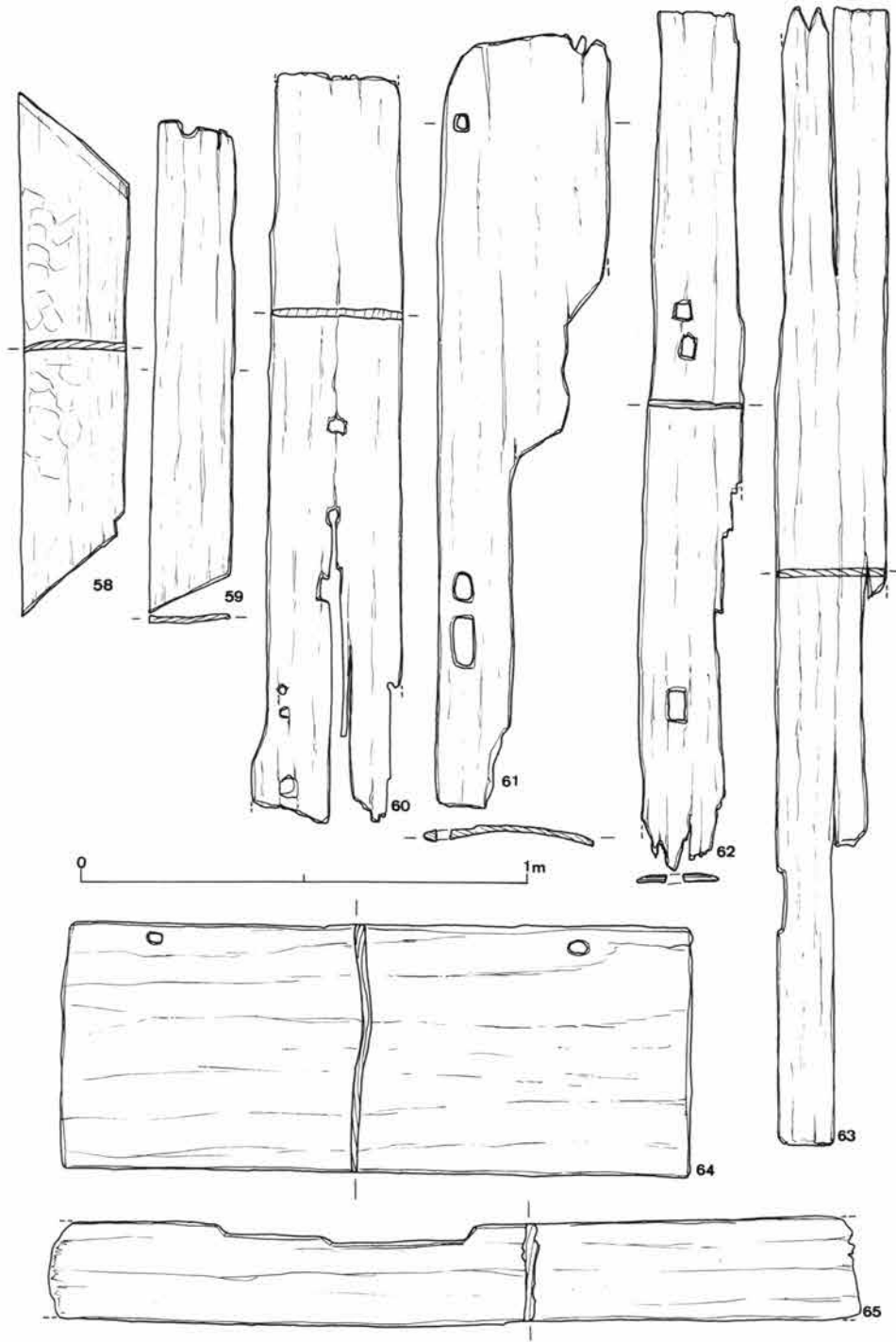


第144図 S D01出土木器実測図(8)

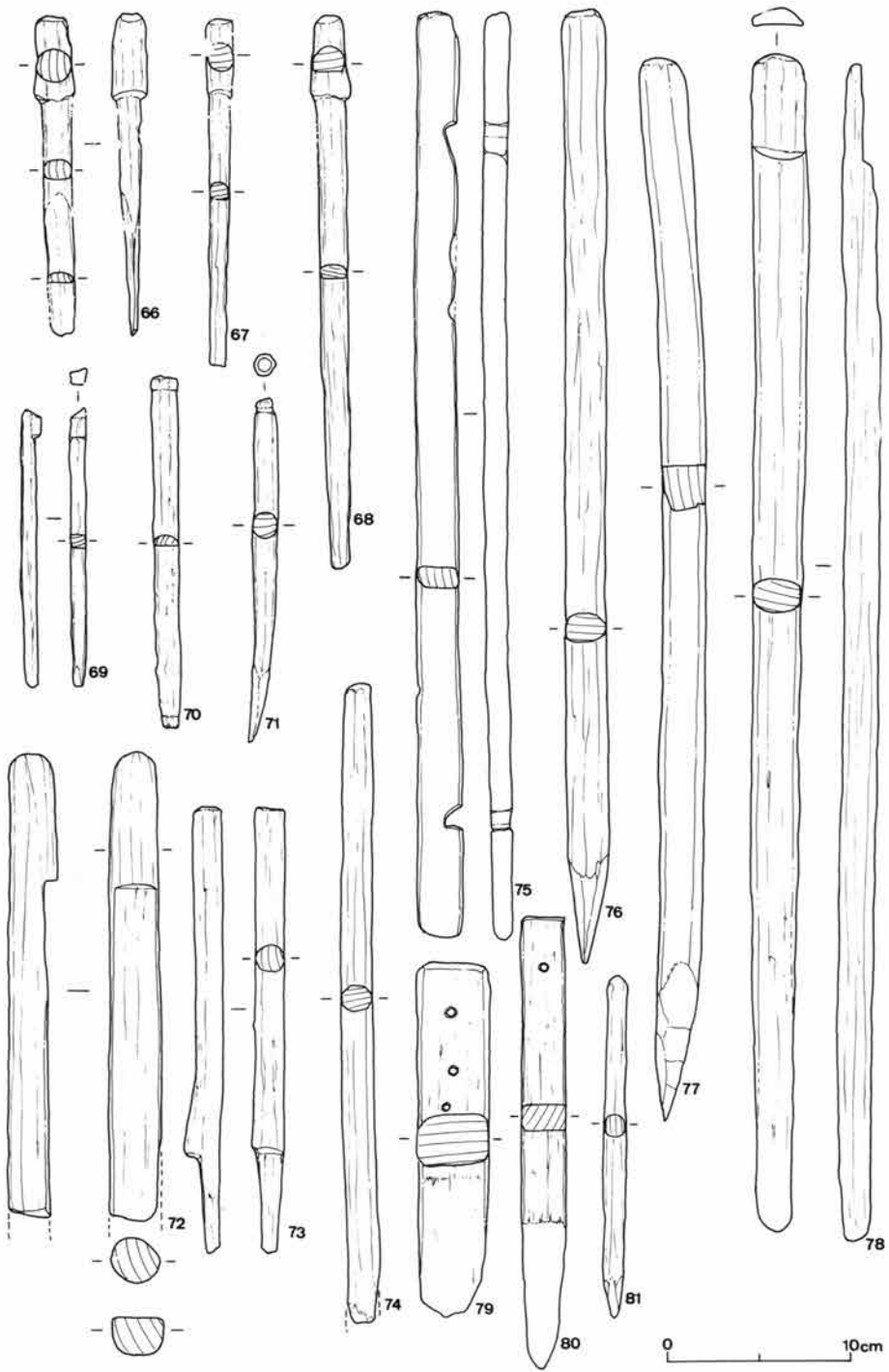




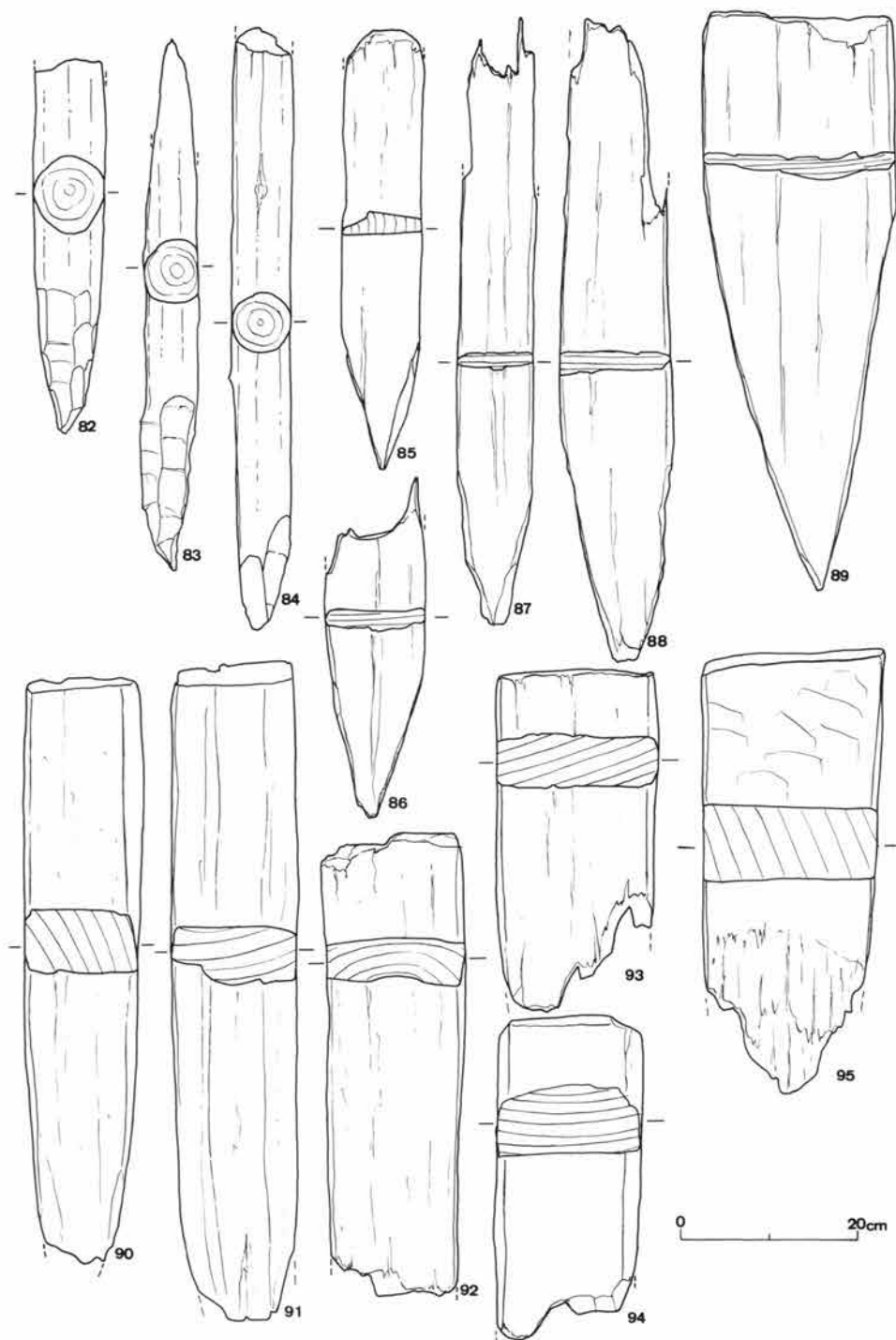
第145図 S D01出土木器実測図(9)



第146図 S D01出土木器実測図(10)



第147図 S D01出土木器実測図(11)

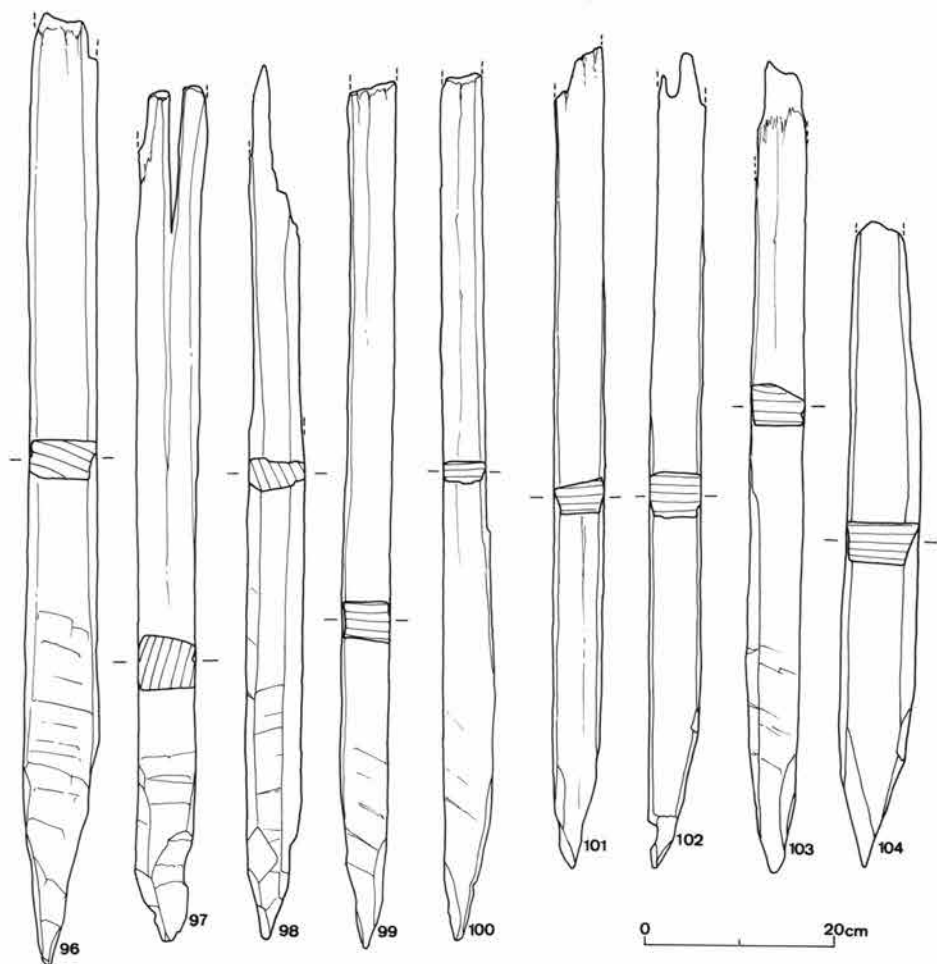


第148図 S D01出土木器実測図(12)

の(19)とがある。18は、口縁部が水平にのび、端部に面を作る。杯部が一部欠損するほかは、ほぼ完存している。19は、水平中心を円形に刳り貫いた脚部と脚柱部を別々に作り、円柱を挿入して結合している。脚柱部と杯部の関係は、破損しているため明らかでない。

蓋(14~16) 14は、中央に孔のある円形の蓋である。15・16は小形である。16には紐孔とみられる孔が開けられている。

箱材(40~43) 箱の側板として用いられた加工板材である。40は、上辺中央に抉りがあり、側辺から下辺にかけて目釘孔とみられる小孔が規則的に開けられている。41は、板の両端に二孔一対の紐孔があり、右端の孔には樹皮でできた紐の残欠が遺存している。中央下方にも一孔ある。板の下辺には両端の紐孔に対応する位置を加工している。42は、連続渦文が線刻されている。裏面には溝が彫られている。目釘孔とみられる小孔が5孔あり、



第149図 S D01出土木器実測図(13)

うち3孔は溝に対応している。43は、下辺に抉りのあるもので、41と同一形式の箱材である。

44～48は、加工された板材である。44は、側縁と下辺が調整されている。45は、下辺に調整がある。47・48は、左上方に穴、あるいは抉りがあるものである。46は、逆台形で、中央に方孔がある。

杓文字(20) 小形の杓文字形木製品である。先端の一部が欠損している。

火きり臼(21) 断面長方形の棒を臼として用いたものである。

剣形木製品(17) 取水口状遺構に伴って出土した(第117図1)。柄を上にして地面に直角に突きささった状態で出土したものである。刃部は、鑄がしっかりと作られ、断面菱形を呈する。把部の断面形は丸い。ほぼ完存する。

木釘(23～25) 方形または長方形の頭部を持つ釘状の木製品である。足は、断面レンズ形を呈する。頭部は面取りがある。飾り釘であろうか。部材に釘が打ち込まれている例がある(36)。

やす形木製品(26) 断面方形に加工した棒の両端を削り、鋭利に仕上げている。

自在鉤(22) 枝の又を利用したもの。上端は欠損して形状は不明である。下端に横方向の溝が彫られている。

柄(27) 27は、有頭の柄である。ていねいに加工されている。

梯子(39) 2段分が残っている。梯子の最上段にあたる部分であろう。

機織具(32・33・75) 32は、緯打具であろう。直線的に作られた左側の刃は刃のように尖っている。33は、かせの部材である。糸を巻く部分にあたる。両木口には、目釘が折れて刺さっている。75は、布巻き具であろう。

部材(34～37) 34は、方形の頭のついた部材で、方孔が開けられている。35は、断片である。板の中央を円形に削り貫いたものである。36は、板に木釘が打ち込まれている例である。釘は2本認められ、1本は板を打ち抜いている。37は、板を削り貫いて作られた断面凹形の部材である。

建築部材(49～65) これらは、流路跡の護岸材として転用されていた建築材である。柱材とみられる角柱状の加工木材(56)と、壁材や床材とみられる加工板材(49～55・57・65)とがある。

板には、長方形の板材の一辺を抉り込んで加工しているもの(49・51・54・55・57・61・63・65)、斜めに切るもの(53・58・59)、長方形板材を主に孔をあけて用いるもの(52・60・62・64)などがある。50には目釘孔のような径3mmほどの孔が連続してあけられている。57は、器表がていねいに調整され、半円形や矩形に抉られている。床材であろうか。58は、長方形板の両端を切って台形に作られている。切断に先立って印された刻線が

残っている。64は、長方形の整った板である。

杭(82~104) 93~95は、流路跡の上層で検出した杭列に用いられていたもの、他は護岸材として板を固定するために用いられた杭である。

上層の杭列は、すべて93~95のような角材を杭として利用していた。流路跡の護岸に用いられた杭には、芯持ちの丸太材(82~84)、薄い板の側先端を尖らしたもの(85~89)、角材(90~92・96~104)などがある。角材には、上層杭列にみられるような厚くて幅の広いもの(90~92)と、断面方形の角杭とがある。

82~84は、切断した木材の先端を加工しただけのものである。89は、幅が広く、矢板状をなす。96~104は、角材の先端を尖らせた杭である。

用途不明木製品(28~31・38・66~74・76~78・81) 28は、薄板を用いた撥状の木器である。頭部を広く作り、弧状の抉りがある。孔が2つあけられている。30は、有頭の棒である。頭部に1孔ある。30は、木札状を呈するものである。31は、漆が塗布されている。縦長の孔が2孔ある。38は下端が折損し、その後に柄のように再加工されている。方形のほぞ孔があり、その裏側から目釘孔があけられている。66~68は、先端を薄く加工した有頭棒である。69~71は、頭部に加工のある棒である。断面形は、69が方形、70が半月形、71が円形である。76・77・81は、細い棒の先を尖らして杭のようにしたもの。78は、断面楕円形に加工された棒で、頭部が調整されて薄く作られている。

(田代 弘)

#### ④石器類

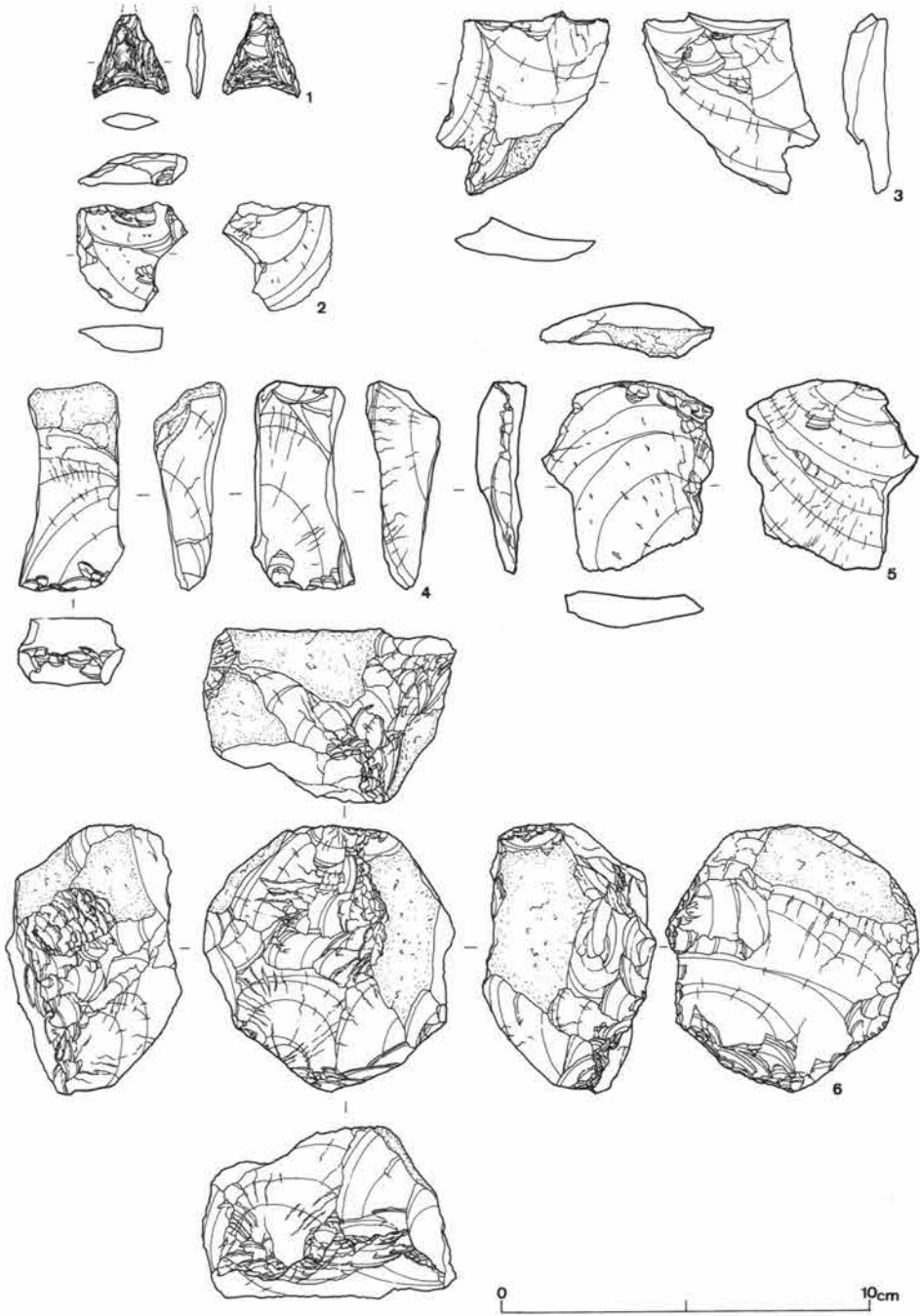
弥生土器・木器類に混在して、若干の石器類が出土している。石器類には、打製石器、磨製石器、砥石、玉類などがある。打製石器には、石鏃・楔形石器・庖丁形石器、磨製石器には石斧、石庖丁などがある。玉類には、勾玉のほか、碧玉・緑色凝灰岩製管玉未製品などがある。以下、器種ごとに説明する。

石鏃(第150図1) 凹基無茎式である。部分的に研磨が施されている。

楔形石器(第150図4・6) 剝片を用いるもの(4)と、礫を用いるもの(6)とがある。4は、剝片の両端に階段状剝離が認められるが、主に下端側から集中的に作業が行われたようである。6は礫である。上下、左右の対向する2辺に階段状剝離が密集している。器体の表裏には、上下方向の敲打時に生じた大きな剝離面が認められる。

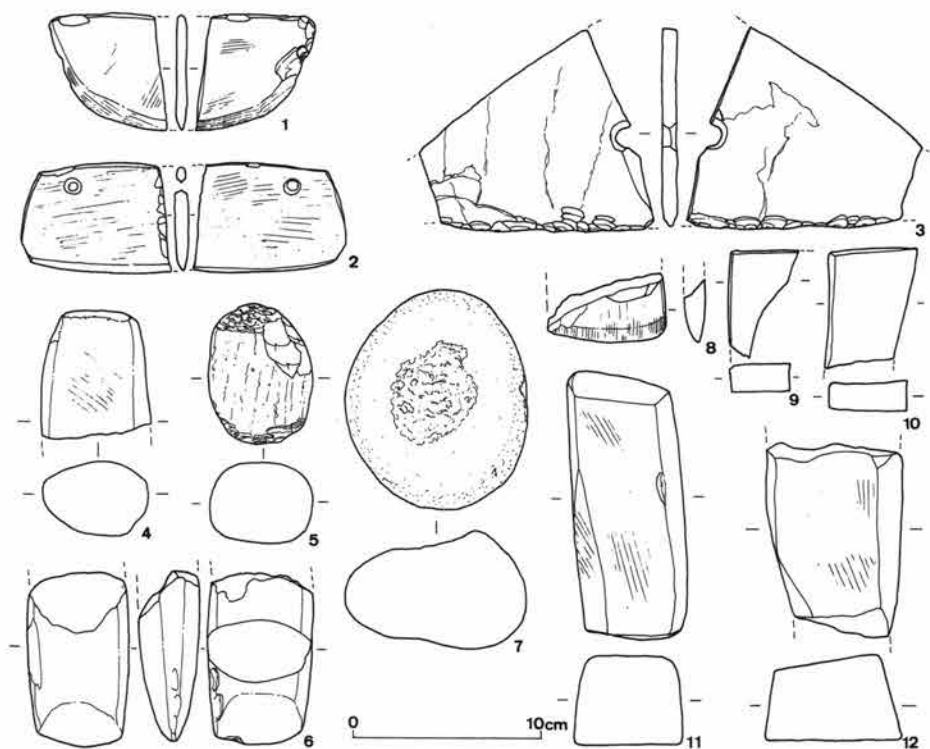
第150図3・5は剝片である。

石庖丁(第151図1・2) 1は、半月形外湾刃形態である。欠損しており、全形は不明である。2は、長方形で刃部は直線的である。紐孔が1孔ある。器体半ばで欠損している。



第150図 S D01出土石器類実測図(1)





第151図 S D01出土石器類実測図(2)

大形石庖丁(第151図3) 打製の大形品である。三角形の器体を有するものと思われる。刃部は直線的で、両刃である。

磨製石斧(第151図4・6・8) 4は、大型蛤刃石斧の基部であろう。6は、扁平な両刃石斧である。8は、扁平片刃石斧である。

敲石(第151図5) 長楕円形の礫である。両端に微細な階段状剝離が密集する。

凹石(第151図7) 礫の両面にあばた状のくぼみがある。周縁には使用痕跡はない。

砥石(第151図9～12) 9・10は、小形の砥石である。11・12は、直方体の砥石である。

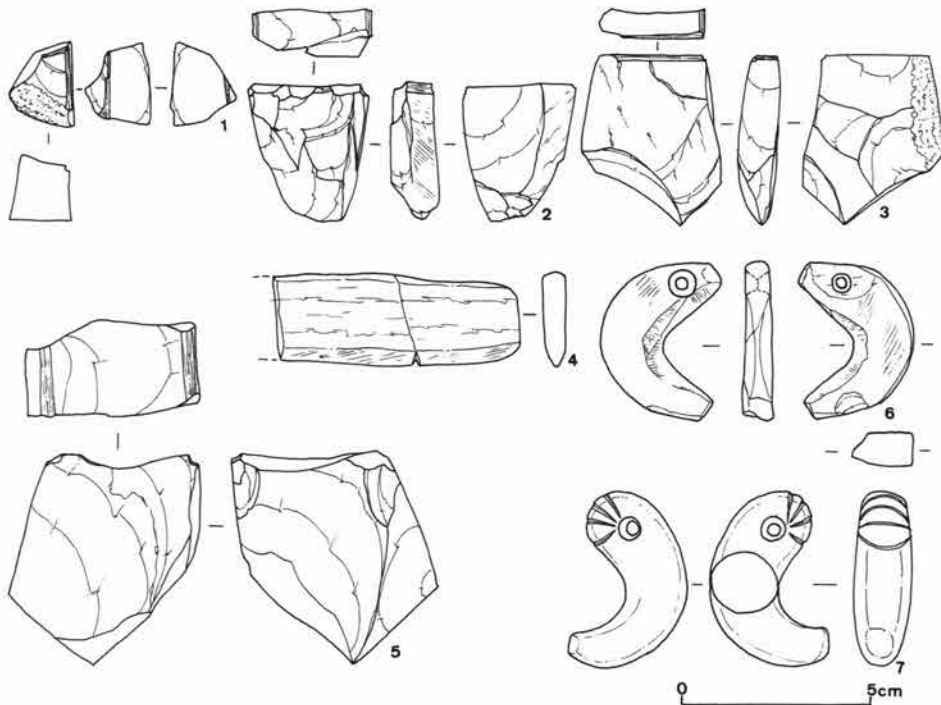
勾玉(第152図6・7) 6は、板状素材を用いて作られており、扁平な器体を有する。風化した流紋岩製である。7は、丁字頭勾玉である。アブライト製である。いずれも、流路跡(S D01)の最下層にあたる黒色粘質土層から、近接して出土したものである。

碧玉・緑色凝灰岩製管玉生産に関する遺物(第152図1～4・5)

1は碧玉製、2～4は緑色凝灰岩製である。いずれも擦切施溝分割の痕跡がある。1は、残核である。礫面がある。2～4は、板状剥片であり、管玉の石核にあたるものである。

5は、石鋸である。暗灰色の結晶片岩製で、一辺に刃部がある。

(田代 弘)



第152図 S D01出土管玉作り関連遺物(1~5)と勾玉(6・7)

#### 4. まとめ

##### (1)「トチノミ集積地点」の植物遺存体の分析

##### ①はじめに

流路跡S D01の北東端で検出した取水口状遺構の下流において、トチの種子を主体とする植物遺体の堆積層を確認した。堆積は、ブロック状を呈し、最も厚い部分で10cmほどの安定した堆積状況を示す。このブロックを「トチノミ集積地点」と仮称した。植物遺体を平面的に検出した後、任意にサンプリングを行った。サンプリング後、3mmメッシュの篩を用いて流水で若干の洗浄を行って保管した。その後、滋賀県文化財保護協会中川治美氏に当該資料の組成分析をお願いした。以下がその結果である。

##### ②分析の結果

「トチノミ集積地点」の土壌を採取し、いったん発掘現場で部分的な洗浄処理を行った。その後、保管資料をあらためて任意に4,000ccをサンプリングし、同定可能と思われるものについて選別を行った。検出した植物遺存体はそれぞれ重量、個数などを調べた。産出状況はつぎのようである。

トチノミ種子が最も多く、全体の8割以上を占める。そのほかの遺存体は若干量で、木

付表5 奈具谷遺跡出土の植物遺存体

No.	科	属	種	産出部位	重量	個数	炭化	備考	利用
1	ブナ	コナラ		果実	0.8	—	0	基部を含む	食
2	トチノキ	トチノキ	トチノキ	種子	1156.3	—	1	幼種子1	食
3	クルミ	クルミ		核	0.4		0	1/4以下の破片	食
4	バラ	サクラ	モモ	核	7.6	2	1	齧歯類による食害痕	食
5	エゴノキ	エゴノキ	エゴノキ	種子	1.2	9	1	うち完形1	×
6	クワ	カラハナソウ	カナムグラ	種子		6	0	うち完形2	×
7	クマツヅラ	ムラサキシキブ		種子		1	0		×
8	クルミ	クルミ	サワグルミ	果実		1	0		×
9	トウダイグサ	アカメガシワ	アカメガシワ	種子		2	0	完形	×
10	マタタビ	マタタビ	マタタビ	種子		2	0	完形	食
11	ウリ		ヒョウタン	種子		1	0		食
12	ウリ		ウリ	種子	0.1	3	0	完形	食
13	ツバキ	ツバキ	ツバキ	種子		1	0		食
14	スイカズラ	ガマズミ	ガマズミ	核	0.1	2	0	完形	×
15	バラ	キイチゴ	フユイチゴ	種子		1	0	完形	食
16	ウコギ	タラノキ	タラノキ	種子		1	0	完形	×
17	モクレン	モクレン	コブシ	種子		1	0		×
18	モクレン	モクレン	ホオノキ	種子		1	0		薬
19	ブドウ	ノブドウ	ノブドウ	種子	0.1	3	0	うち完形2	×
20	マタタビ	マタタビ	サルナシ	種子		1	0	完形	食
21	カヤツリグサ			果実		27	0	うち完形24	×
—					2.7			(No.5~21の合計重量)	
22	木片				69.8		1	うち炭化5.2	
23	その他	(芽・根・葉等)			0.3	(23)	0	個数は芽のみ、ほか卵のう、虫えい	
24	破片				102.9				
						①	②		③

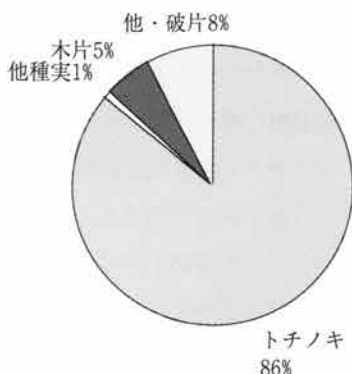
① 残欠を含めて換算した個数である。

② 「炭化」は炭化割合を表わし、0:全くナシ、1:1/4以下である。

③ 「利用」は食:食用にできる、×:食用に適さない、薬:薬用にできる、を表わしている。

\* 個数・重量の空欄は遺存体が0.0以下であったり、1個体を復原するに足る量がなかった場合などである。

□ トチノキ	■ 木片
□ 他種実	□ 他・破片



付表6 出土比率

	トチノキ	他種実	木片	他・破片
重量	1156.3	10.3	69.8	103.2
	102	0	3	4

片、コナラ属果実、クルミ属核、モモ核などが産出している。いずれも破損した状態で産出しており、炭化しているものも一部ある。このうち、モモ核には齧菌類による食痕が認められる。詳細は、別表のとおりである(付表5)。

以上のように、検出された植物遺存体は、そのほとんどが破砕されたトチノキ種子であり(付表6)、自然堆積中にみられるような果皮や幼種子、完形を保った種子などが幼種子一点を除きみられない。こうした状況は、この「トチノミ集積」地点が人為的なものであることを示唆している。

(中川治美)

## (2)調査の成果と問題点

今回の調査では、約300㎡という限られた調査面積にもかかわらず、上述したような充実した成果を得て、弥生時代中期の水利施設の一端を明らかにすることができた。以下、今回の調査によって得られた成果と派生する問題点のいくつかを列記し、まとめたい。

### ①流路跡(SD01)について

A. 流路の変遷とその時期(第118図) 湿地に形成された流路の両岸に護岸板杭列(板杭列1・5)が設けられる(第1段階)。黒色土、灰色砂層によってある程度の埋没後、流路なかほどに板杭列2・3・4が設けられ、橋状の遺構と取水口が敷設される(第2段階)。流路埋没後に水平な堆積層が形成され、杭列が設けられる(第3段階)。

第1段階では、流路最下層堆積物である黒色粘質土層の主体的土器群が第Ⅲ様式土器であり、この土器群が時間的上限をなしていることから、弥生時代中期中頃と考えられる。第2段階では、黒色土層・灰色砂層の土器群が第Ⅲ様式土器群と混在しながらも第Ⅳ様式土器が主体をなしている。中期後半の時期をあてることができる。第3段階では、流路跡埋没後の遺構であり、水平堆積層が介在するなど、一定の時間的経過が予想されるが、この水平堆積層には第Ⅲ・Ⅳ様式の土器細片が散見されるのみで、これ以降の明確な時期を示す遺物が出土していない。中期後半以降としておく。

B. 流路跡の性格 流路のベースは水分を多量に含む粘質土で、砂層ブロックと粘質土の互層からなり、不規則な水流と堆積が繰り返された痕跡を残している。この流路跡の立地する地点は、非常に水はけの悪い湿地であり、長い間土地利用されることなく放置されていたようである。今回検出した流路は、幅が5mほどで決して規模が大きいとはいえないが、板材によって護岸された本格的な水路であり、十分な排水機能を果たしていたと思われる。奈具谷遺跡の位置する谷は、幅50mほどの狭長なもので、水田として利用されているが、現在、幅・深さともにわずか50cm前後の水路を基幹水路としていることを考えれ

ば、この弥生時代中期の水路が周辺・下流へ及ぼした影響は大であったと思われる。

奈具遺跡・奈具岡遺跡が遺構・遺物のうえで顕在化するのには第Ⅲ様式期であり、この時期はすでに、昨年調査した奈具岡遺跡第4次調査地点で確認されたような専門的な玉作り工房群を経営・維持するまでに集落が拡大している。奈具谷遺跡と呼称された今回の調査地点は、両遺跡に挟まれた地点にあたり、出土遺物の時期・内容からみて同一集団が残した生活痕跡の一部とみて大過ない。今回検出した流路跡は、このような急速な集落の成長に対応すべく新たに開発された水田の関連施設—灌漑用基幹水路—として位置付けることはできないだろうか。水田遺構の確認をめざした隣接地点での充実した調査が期待されるところである。

## ②取水口状の遺構とその性格

取水口状の遺構は、流路跡(S D01)に対して約45°の角度で取り付けられている。この施設は、先に記したように、その位置・構造からみて本流であるS D01から小水路を分流して取水するための施設であることは疑いない。ここでは、取水口に敷設された槽と、これに伴う遺物、下流で検出したトチノミ集積と仮称した植物遺体に注目してその性格を考えてみたい。

槽は、一方の長辺がとり払われ、取水口の側板に接して固定され、その下流側に設けられたしがらみによって、槽に水が帯水する仕組みになっている。槽の長辺には抉り込みがあり、しがらみ頂部はこの抉り部の高さにそろえられているので、過剰な水の流入は抑制され、適量が帯水する仕組みになっている。

この遺構は、ベースと同じ灰色砂層で埋没しているので、分流路を明確に検出することはできなかったが、下流に東西に長いブロックをなして植物遺体が大量に集積しており、これが水流の方向・範囲を示すものと考えられる。植物遺体は、取水口付近から下流方向に向かって流出したのであろう。植物遺体の検出面において、横槌、箆状の網代編み物、ミと思われる編み物、第Ⅳ様式の鉢などを検出している。出土状況は、第117図に示すとおりである。これらの遺物は、砂層にバックされており、遺存状況が良好であり、比較的短時間に埋没したものと考えられる。

植物遺体は、中川治美氏の分析によると、破損したトチノミの外殻を主とするもので、自然堆積に伴う完形種子、幼種子などがほとんどみられず、他の種子や植物などの混入比率が低い(付表5)。つまり、この堆積層は、人為的に集中的に破碎・廃棄された結果生じた堆積層である可能性が考えられるのである。

本例のように、破碎したトチノミの殻が一括して大量に廃棄された痕跡が考古学的に確認されている例としては、縄文時代の例として青森県是川遺跡<sup>(註65)</sup>、滋賀県粟津湖底遺跡<sup>(註66)</sup>(第

2 貝塚堆積層)があり、岩手県石鳥谷町Ee68号住居跡<sup>(注67)</sup>では多量のトチの実が埋土から検出されているという。一括大量廃棄痕跡以外でも、低湿地の縄文時代遺跡において、むかいたトチノミ殻が食料残滓とみられる他の植物遺体とともに特殊泥炭層を形成するケースが数多く確認されていることから、これらは食料として利用された際に生じた廃棄物であろうと考えられている<sup>(注68)</sup>。本例も、同様の性格が考えられよう。

それでは、トチノミにはどのような利用例があるのでしょうか。トチノキは、北海道西南部から本州・四国の温帯落葉広葉樹林帯に属する落葉高木で、暗茶褐色の外殻を有する実をつける。実は、クルミ・クリ・ドングリなどと同様、食用に供することができるが、トチノミにはサポニン、アロインなど非水溶性成分からなるアクを含有するために、食べるためにはこれを灰などのアルカリで中和するなどして除去する技術が必要とされる。渡辺 誠氏は、縄文時代の植物食に関する一連の研究の中で、トチノミの加工技術について民俗学的に詳細な検討を行い、その食べかたとアク抜きの方法を具体的に明らかにした<sup>(注69)</sup>。氏によれば、トチノミのアク抜きの方法と食べかたには、大きくみて、モチゴメとつきあわせるトチモチと、澱粉をとって粥や団子状に固めて食べるコザワシの二つの方法がある。

トチモチとコザワシは、アク抜き工程に関して煮沸、灰ないしは灰汁の使用、灰合わせ、水さらしの工程を重要な共通要素としている。一方、トチモチはモチにつくときに結果的に実が碎かれるが、コザワシは粉食を目的とする製粉作業であることから、設備や工程に顕著な相違もみられる。コザワシでは製粉を行うために、実の形がくずれるほどの煮沸とつき碎きの工程が重要視され、水さらしの際にトチダナと呼ばれる施設を使用するのが特徴となっている。

今回検出したトチノミは、分布状況からみて取水口周辺で利用、廃棄されたものとみてよいであろう。ここで虫殺しのための水漬けや皮むき、灰合わせ、水さらしなどの作業が行われていたことは想像に難くない。取水口に取り付けられた槽は、構造的にみてこうした作業に最適であり、オケやトチダナとして多目的に利用されたのであろう。近接して出土した、箆やミと思われる編み物、横槌なども関連する資料として注目される。

コザワシでは、水さらしのためトチダナに粉を落とす際に、必ずアジカ・メカゴ・ザル・こし袋などを用い、とおして落とすという(注68文献)。想像をたくましくすれば、槽がトチダナとして利用される際、箆やミはこのようにトオシとして利用されたものと考えることができるかもしれない。

本例は、弥生時代中期におけるトチノミの加工場と位置づけておきたい<sup>(注70)</sup>。

## ③ S D 01出土の弥生時代中期土器について

A. S D 01出土土器の帰属時期 先に記したように、S D 01から多量の弥生土器が出土した。これらは、いずれも中期に属し、峰山町途中ヶ丘遺跡第Ⅲ～第Ⅳ様式の特徴を有する。当該地域の第Ⅲ・第Ⅳ様式は出土個体量には恵まれるが、現状では、一括資料が少なく、組成やその変化のプロセスについて十分な検討が行われるに至っていない。今回検出した資料も一定のまとまりを有してはいるものの、混在した資料であり、同様である。

個体レベルで出土資料の帰属様式を明確にはできないが、壺についてみると、貼付凸帯文aを有する一群のもの、壺B、壺Fのうち凹線文を持たないもの、壺Gなどが第Ⅲ様式に位置づけられよう。95の小形の壺や貼付凸帯文を有する鉢なども同様である。第Ⅲ様式の甕は、内面ヘラ削りの範囲が下半に限定され、しかもヘラ削りの後にハケ・ナデなどで消されているものがその新相に帰属するものである可能性が指摘されている。94・99・100などが該当する資料であるが、今回出土した甕の内面調整はこのタイプが多くみられる。内面削りが口縁部近くまで及ぶ例は甕Cに目立つ。今回出土した資料を上限と下限を、ある程度のまとまりを有する資料で示すと、上限は久美浜町日光寺遺跡 S P 114・久美浜町橋爪遺跡 S K 186、下限は第Ⅳ様式、弥栄町オテジ谷遺跡住居跡出土資料となろう。

当資料群中には、第Ⅳ様式の甕のうち内面ヘラ削りを顕著に有する小形の甕C(橋爪遺跡 S D 21Ⅳ層C類)はあまりみられない。このタイプの甕が卓越するのは、この資料群に後出する段階なのであろう。

B. 文様 櫛描き文(列点文・扇形文・直線文・波状文・斜格子文)、凸帯文(断面三角形凸帯文・刻み目凸帯文・圧痕文凸帯)、凹線文、竹管文、刻み目文、刺突文、浮文などがある。文様の多くは、壺の口縁部、頸部、体部上半に施されている。

櫛描き文 櫛描き文にはA種とB種がある。A種には直線文・波状文、B種には列点文・斜格子文・扇形文などがある。櫛描き文の原体には、木・竹などの先端を加工したものの(I種)、植物の枝茎などをたばねたもの(Ⅱ種)があり、I種の使用頻度が高いようである。Ⅱ種には先端が割れた藁状の柔らかな茎を何本か束ねたようなもの(a)、棒状のものを束ねたとみられるもの(b)、管状の茎を束ねたとみられるもの(c)などがある。

櫛描き文は、壺Aの口縁端部・見込み・体部外面、壺Eの口縁部外面などに施文されており、甕の体部外面に施すものもある。壺Aの口縁端部には列点文・波状文、見込みには扇形文、波状文、直線文、体部外面には直線文・波状文・斜格子文などが組み合わされて施文されている。

斜格子文は、幅3～4mmの平行する2本の線で描かれているものが多く、櫛状の原体によるものは少ない。径3～4mmの半截竹管状の原体(たとえば稲の茎を縦に割ったもの)を

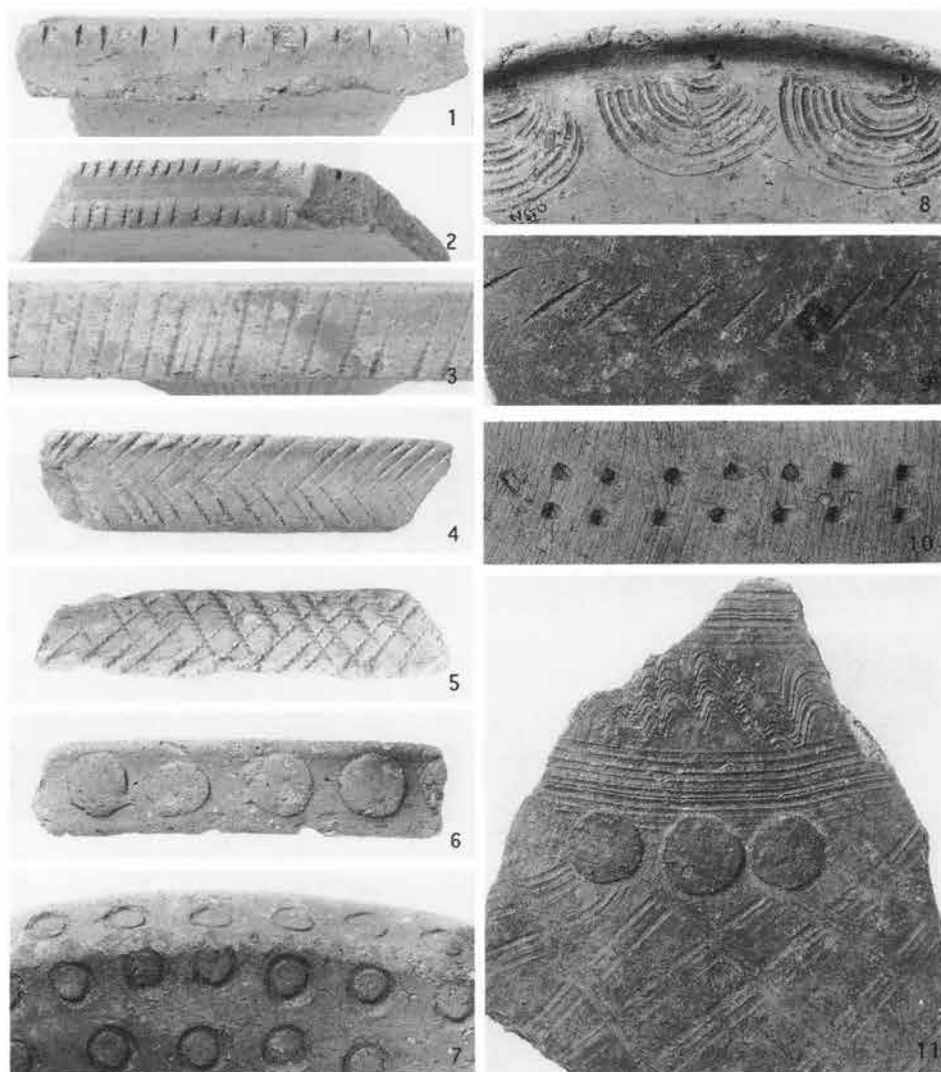
用いて施文されたものとみられる(第153図11)。

甕の体部に列点文を施すものがある。Ⅰ・Ⅱ種ともにみられるが、Ⅱ種は少ない。

凸帯文 凸帯文には断面三角形凸帯文、圧痕文凸帯がある。

凸帯文は、壺A・B・Gの頸部、無頸壺の口縁部、壺の体部などにみられる。壺の頸部には断面三角形の凸帯文・圧痕文凸帯、無頸壺には刻み目凸帯文が結びつく傾向にある。壺の頸部に断面三角形凸帯と圧痕文凸帯が施されているものもある(第154図6)。

断面三角形の凸帯文には一本、一本がしっかりと作られ、凸帯間に強いヨコナデを施さ

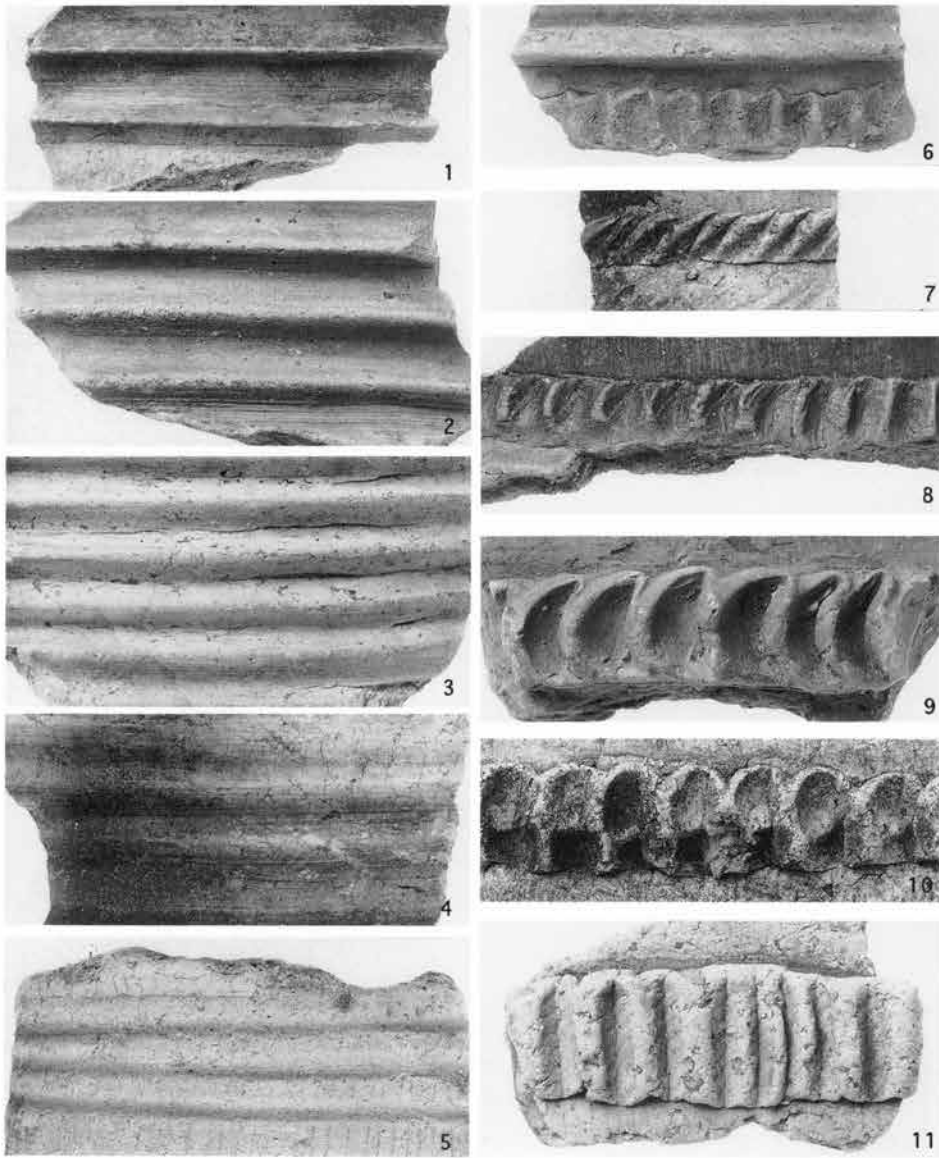


第153図 弥生土器各部の文様(1~6.口縁部端面 7・8.口縁部内面 9~11.壺体部)  
 1~3.刻目文 4.羽状文 6.円形浮文 7.竹管文 8.扇形文  
 9.板木口による刺突文 10.刺突文 11.櫛描き文(直線文・波状文・斜格子文)と円形浮文



ないもの(a)(第154図1)、凸帯間に強いヨコナデを施すもの(b)(第154図2)がある。bには凸帯が独立しているもの(b-1)と、境があいまいで凹線文に近い形状をなすもの(b-2)がある。刻み目凸帯は、aに限られる。

圧痕文凸帯には、指頭圧痕によるもの(a)、ハケ原体木口によるもの(b)がある。指頭圧痕文凸帯のなかには二段にめぐらすものもみられる。



第154図 凸帯文と凹線文(1~9. 壺頭部 10~11. 体部)

1・2. 断面三角形凸帯文                      3~5. 凹線文                      6. 断面三角形凸帯文と指頭圧痕文凸帯  
7・11. 板木口による刻み目凸帯文      8~10. 指頭圧痕文凸帯

**竹管文** 壺の口縁端部・見込み、肩部などにめぐらされている(第153図7)。径7~9mmの円形のものが多い。半截竹管文による刺突文はみられない。

**刺突文** 壺・甕の胴部に刺突文をもつものがある。二個一対のものが多く、三個一対のものもある。これらは、二個あるいは三個一単位で施文されている。刺突文は、径3mmほどの竹管文状を呈しており、ストロー状の茎を2・3本くくったものを原体としているようである。

**浮文** 壺の口縁部や肩部に円形浮文、高杯B-3に棒状浮文が施されているものがある。

**刻み目文** ハケ原体または櫛原体を用いるものが多い。刻み目凸帯文のなかにはヘラ状工具によるものがある。刻み目文は、壺A・D・E・G、鉢Dに認められる。壺Aの口縁部の装飾として多用される傾向にある。

**凹線文** 凹線文は、壺A・D・E・F、甕C・D、高杯、鉢C・Dなどにみられる。凹線文にはいくつかの種類が認められる。壺・甕の口縁部、高杯脚端部などの狭い部分に少条施されるA種、壺の頸部、無頸壺の口縁部、壺Eの口頸部などにみられる幅の太い凹線文(B種)、高杯や壺Fの口縁部などの幅の広い部分に少なく施すC種などがある。壺Aの頸部の凹線文B種には、断面がゆるやかな波状のもの(B-1)と、凸部がやや鋭くて凸帯文状をなすもの(B-2)が認められる。

**沈線文** 壺の頸部には凹線文以外に、棒状工具の先端部を用いて描いた沈線文が認められる(第154図5)。高杯脚部外面にも同様の工具で描かれたとみられる沈線文が多くみられる。

**壺Aの口縁部の文様** 壺Aの口縁端面には櫛描き波状文、ハケ原体または櫛原体による列点文・斜格子文・羽状文・刻み目文、竹管文、円形浮文がみられる。壺口縁部のキザミ目には、端部上端に施すもの、端部上・下端に施すものがあるが、前者が大半を占める。見込みに扇形文を施す例も多い。

### C. 弥生土器の成形・調整

**タタキ成形** 壺・甕の一部に平行タタキ目が認められるものがある。壺Aの体部、壺Eの頸部などにみられる。甕ではA・B・C・Dの各形式に認められる。

タタキ成形痕は、ハケやナデ調整により目立たないように念入りに消されており、器表に明瞭に認められるものは数少ない。体部破片資料をよく観察するとある程度認めることができ(50・85・93・107・113・125・135)、タタキ成形技法の存在を明確に確認することができる(第155図1)。

**ハケ目** 直線的に加工した薄い板を用いるもの(A)、植物の茎を束ねたとみられる先端の不揃いなもの(B)とがある。Aには、小口に刻みを入れたもの、柾目の凹凸をそのまま

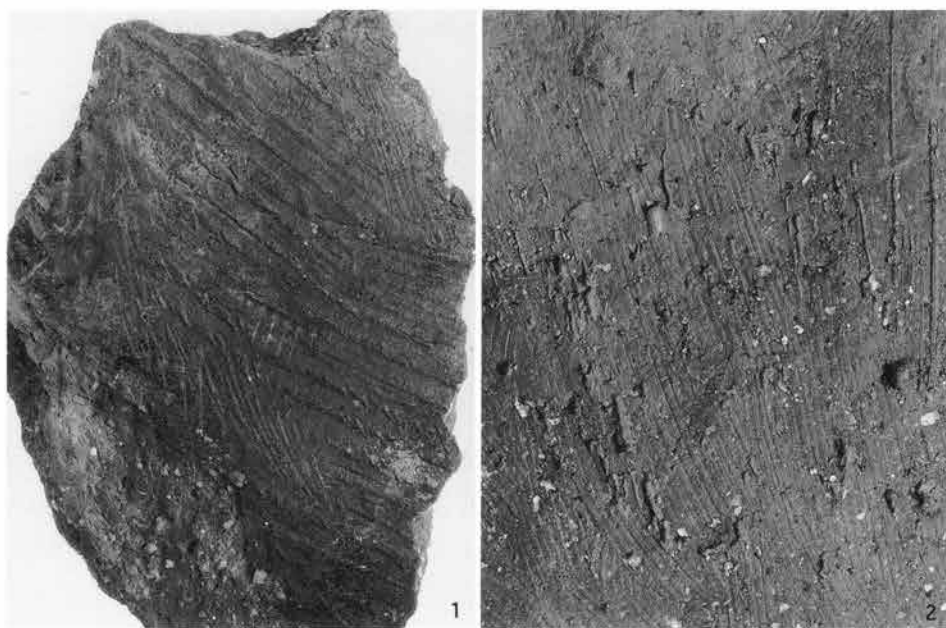
利用したとみられるものなどがあり、ハケの1単位が幅広いもの、細かいもの、浅いもの、深いものなど各種認められる。器体内外面の調整として多用される。粗いハケ目を施した後に、細かいハケ目を重ねることが多い。

ハケ目は、器体がまだあまり乾燥していない段階で器面調整を目的として行われる調整手法であるが、この溝出土資料では、ヘラ削りの後、かなり乾燥した段階で行われるものが数多く見られる。甕の体部内面下半部にその痕跡を残すものが多く、この場合、①器体内面全体にわたる右上がりのやや粗いハケ調整→②体部下半に下から上方向のヘラ削り→③ハケによりヘラ削りを消すという工程をとる(第126図100)。本資料では、③の最終ハケ調整によってヘラ削りが消されているものも多く存在するとみられる。

ヘラ削り 壺・甕・鉢の体部内面下半、高杯の杯部外面・脚部内面調整として多用されている。壺の体部外面下半にヘラ磨きに先立ってヘラ削りするものがごく少量認められる。甕・鉢類には外面にヘラ削り痕跡をとどめるものはみられない。

高杯外面のヘラ削りは、ヘラ磨きなどその後の調整で消される場合が多い。壺、甕も内面をヘラ削りした後に、ハケ、ナデ調整でいねいに消しているものが数多く認められる(第126図94・100、第155図2)。

ヘラ磨き ヘラ磨きは、壺・高杯、鉢の一部に最終調整として多用されている。壺では器表全面に施すものもあるが、体部外面下半に限定して縦位に施す場合が多い。



第155図 甕の成形・調整痕

1. タタキ成形痕(甕・体部) 2. ヘラ削り後のハケ調整(甕・内面・体部下半)

横ナデ 回転運動を伴うナデで、口縁部や頸部、底部外縁にみられる。

高杯の成形手法 高杯の成形は、脚部と杯部を連続して整形し、杯部底面に粘土板を充填して仕上げる連続成形手法である。脚柱部内面には整形時に生じた絞り目が残る。杯部内外面をヘラ磨き、脚部内面をヘラ削りして仕上げる。杯部外面のヘラ磨きに先立ってヘラ削りを施すものが多い。脚部内面のヘラ削りはほとんどの場合そのまま残されるが、ナデあるいはハケ、ヘラ磨きにより、部分的に消すものが少量みられる。脚部内面調整をハケあるいはナデのみで行いヘラ削り痕跡の認められないものは、観察した85個の資料中、3点を数えるのみである。

D. 搬入土器(第133図) 搬入土器とみられるものが少量出土している。これらは胎土中に円礫化した微細な長石・石英粒、チャート、粘板岩などを多量に含み特徴的な胎土を有している。1・2は、甕である。いずれも頸部の屈曲がゆるやかに外反する。2は、口縁部を部分的に斜め下方から棒状工具で押圧して、波状に作る。3は、壺の底部である。体部外面をヘラ磨き、底部内外面をナデ調整する。

これらの土器は、由良川中・下流域の弥生時代中期の集落遺跡で主体的に出土する土器に酷似しており、この方面からの搬入品である可能性を指摘しておきたい。一例を挙げると、1は、福知山市興遺跡<sup>(注74)</sup>で甕A1としたもののなかで主体的位置を占めるもので、綾部市青野遺跡<sup>(注75)</sup>、福知山市観音寺遺跡<sup>(注76)</sup>・石本遺跡<sup>(注77)</sup>、舞鶴市志高遺跡<sup>(注78)</sup>・桑飼上遺跡<sup>(注79)</sup>などにみられる。2の口縁部にみられる部分押圧は、この地域の第Ⅲ・Ⅳ様式甕の一部に広く認められる特徴的な手法で、上記遺跡でも出土している。3は、「搔き削るようにして施した光沢のない磨き」が器体外面に施されており、この地域の壺・甕の体部外面下半の調整として比較的多く認められるものである。

#### ④玉類について

SD01からは、上述したような弥生時代中期土器群に伴い、玉類が出土した。玉類には、勾玉の成品2品と、碧玉・緑色凝灰岩製管玉生産関連遺物がある。勾玉は、第Ⅲ様式土器が主体をなす黒色粘質土層のなかから木製高杯などとともに、近接した位置で出土したものである。勾玉は、平坦な器体を有するものと、丁字頭勾玉とがある。弥生時代中期の丁字頭勾玉の出土例は、近畿地方では兵庫県尼崎市田能遺跡<sup>(注80)</sup>出土例について2例目であり、日本海側での分布の東端となる貴重なものである。

管玉は出土していないが、管玉の生産を示す遺物として碧玉・緑色凝灰岩製の板状剥片・剥片、結晶片岩製石鋸が出土している。玉髓の石核などもあり、この遺跡を形成した集団が碧玉・緑色凝灰岩製管玉生産を行っていたことを示す資料である。奈良岡遺跡第4次調査地点で確認された玉作り工房群との関連をうかがわせる。(田代 弘)

付表7 S D01出土土器観察表

図番号	器種	法量(cm)		胎土 (mm)	焼成	色調	器体の特徴	出土層位
		口径	残高					
第119図1	壺A	16.4	7.1	○1~3	良好	灰褐色	口縁端面に波状文。見込みに扇形文。頸部外面ハケ、内面ナデ。	灰色砂層
2	壺A	18.2	6.2	○1~2	良好	灰褐色	頸部に指頭圧痕文凸帯。口縁内外面ナデ。頸部ハケ後ナデ。	黒色粘質土
3	壺A	22.6	7.2	○1~2	良好	灰褐色	口唇部に刻み目文、端部に2個一対の円形浮文。頸部内外面にハケ後ナデ。	黒色粘質土
4	壺A	22.2	6.0	○1~2	良好	暗灰褐色	口唇部に刻み目文。頸部内外面ハケ後ナデ	黒色粘質土
5	壺A	22.0	3.0	○1~2	良好	茶褐色	口唇部に刻み目文、端面に3個一対の円形浮文。口縁を下方に拡張。	黒色粘質土
6	壺A	23.8	7.8	○1~2	良好	灰褐色	頸部に凸帯文。頸部内外面ハケ。口縁内外面ヨコナデ。	黒色粘質土
7	壺A	24.2	8.4	○1~3	良好	灰褐色	頸部に凸帯文。口縁端面に刻み目文。頸部内外面ハケ。口縁内外面ヨコナデ。	黒色粘質土
8	壺A	20.8	7.0	○1~3	良好	明褐色	頸部に凸帯文。口縁端面に斜格子文+円形浮文。頸部外面ハケ、内面ナデ。	灰色砂層
9	壺A	24.5	5.0	○1~3	良好	暗褐色	口縁端部に刻み目文、頸部外面ハケ。	灰色砂層
10	壺A	25.8	6.2	○1~3	良好	暗褐色	口縁端部上・下端に刻み目文。端面に円形浮文。	灰色砂層
11	壺A	24.8	6.3	○1~2	良好	暗褐色	頸部内外面ハケ後ナデ。口縁部内外面ヨコナデ。	黒色粘質土
12	壺A	28.0	6.8	○1~3	良好	明褐色	頸部内外面ハケ。口唇部ヨコナデ。	灰色砂層
13	壺A	25.1	7.2	○1~2	良好	灰褐色	口唇部に刻み目文。内外面ハケ後ナデ。	黒色粘質土
14	壺A	23.9	9.0	◎1~2	良好	灰褐色	頸部に凸帯文。口唇部に刻み目文。	灰色砂層
15	壺A	27.8	9.6	◎1~2	良好	明灰褐色	頸部に凸帯文。口唇部に刻み目文+2個一対の円形浮文。頸部内外面ハケ。	黒色粘質土
16	壺A	27.8	9.0	○1~3	良好	明褐色	頸部に凸帯文。口縁端部に羽状文。頸部外面ハケ、内面ハケ後ナデ	灰色砂層
第120図17	壺A	21.0	7.4	○1~2	良好	暗褐色	口縁端面に凹線文。頸部外面ハケ。	黒色粘質土
18	壺A	23.0	6.4	○1~2	良好	暗褐色	口縁端面に凹線文。頸部外面ハケ、内面ナデ。	灰色砂層

19	壺A	23.0	9.0	○1~3	良好	暗褐色	頸部に刻み目凸帯文。頸部内外面ハケ後ナデ。	灰色砂層
20	壺A	20.2	7.3	○1~2	良好	明褐色	頸部に凹線文。頸部外面ハケ、内面ナデ。口縁部内外面ヨコナデ。	灰色砂層
21	壺A	22.2	7.0	○1~2	良好	暗褐色	頸部に凹線文。口縁端面に凹線文。頸部外面ハケ後ナデ。内面ナデ。	灰色砂層
22	壺A	23.2	9.0	○1~3	良好	暗褐色	頸部に凹線文。頸部外面にハケ。	黒色粘質土
23	壺A	21.1	8.0	○1~3	良好	暗褐色	頸部に凹線文。見込みに扇形文。	灰色砂層
24	壺A	19.2	8.2	○1~3	良好	暗褐色	頸部に凹線文。口縁端面に凹線文。頸部外面ハケ。内面ナデ。	灰色砂層
25	壺A	19.0	8.4	○1~2	良好	暗褐色	頸部に凹線文。頸部外面ハケ。内面ハケ後ナデ。	灰色砂層
26	壺A	16.4	5.0	○1~4	良好	明褐色	頸部に凹線文。口縁端面に波状文+円形浮文。見込みに扇形文。	灰色砂層
27	壺A	22.6	8.3	○1~3	良好	暗灰褐色	頸部に凹線文。見込みに扇形文。	灰色砂層
28	壺A	24.2	9.6	○1~3	良好	暗灰褐色	頸部に凹線文。口縁端面に円形浮文。見込みに扇形文。	黒色粘質土
29	壺A	28.2	11.1	○1~2	良好	明褐色	頸部に凹線文。見込みに扇形文。頸部内外面ハケ後ナデ。	灰色砂層
第121図30	壺A	20.8	2.1	○1未満	良好	黒褐色	口縁端面に波状文。	黒色粘質土
31	壺A	30.0	1.6	○1~2	良好	暗褐色	口縁端面に竹管文。見込みに竹管文。	黒色粘質土
32	壺A	28.8	5.0	○1~2	良好	明褐色	口縁端面に円形浮文。見込みに扇形文。	灰色砂層
33	壺A	28.5	3.5	○1~2	良好	灰褐色	口縁見込みに扇形文。	灰色砂層
34	壺A	31.9	3.1	○1~3	良好	暗灰褐色	口縁見込みに扇形文。	灰色砂層
35	壺A	34.0	3.0	○1~4	良好	暗茶褐色	口縁端面に円形浮文。見込みに扇形文。	灰色砂層
36	壺A	29.9	3.0	○1~3	良好	暗灰褐色	口縁端面に波状文。見込みに扇形文。	黒色粘質土
37	壺A	30.6	3.8	○1~3	良好	灰褐色	口縁端面に波状文+円形浮文。見込みに扇形文。	灰色砂層
38	広口壺	-	-	○1~5	良好	黒褐色	頸部に凹線文。肩部に波状文。	灰色砂層
39	広口壺	-	-	◎1~2	良好	明褐色	頸部に凹線文。肩部に波状文。	灰色砂層
40	広口壺	-	-	○1~2	良好	灰褐色	頸部に刻み目凸帯文。肩部に列点文。	黒色粘質土

41	広口壺	—	—	◎1~2	良好	明褐色	頸部に圧痕文凸帯。	黒色粘質土
42	広口壺	—	—	○1~2	良好	灰褐色	頸部に竹管文+凹線文。	灰色砂層
第122図43	壺B	15.6	2.0	○1~2	良好	暗褐色	頸部に指頭圧痕凸帯文。	灰色砂層
44	壺B	15.9	5.3	○1~2	良好	暗褐色	頸部に指頭圧痕凸帯文。	灰色砂層
45	壺C	12.9	9.2	○1~2	良好	暗茶褐色	口縁部内外面ヨコナデ。器体内外面ハケ。	黒色粘質土
46	壺C	14.0	5.0	◎1未満	良好	灰白色	体部外面ハケ後ナデ。	黒色粘質土
47	壺C	17.2	6.4	○1~2	良好	暗茶褐色	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ハケ。	黒色粘質土
48	壺C	15.6	7.0	○1~2	良好	暗茶褐色	口縁端面凹線文+列点文+円形浮文。肩部に櫛描き直線文+斜格子文。	灰色砂層
49	壺E	12.0	7.6	○1~2	良好	暗茶褐色	口唇部に刻み目文。頸部外面にハケ後竹管文。内面ハケ後ナデ。	黒色粘質土
50	壺E	14.2	8.0	○1~2	良好	暗茶褐色	口縁部に凹線文。頸部外面タタキ後ハケ。内面ハケ後ナデ。外面スス付着	灰色砂層
51	壺E	16.8	6.6	◎1	良好	暗茶褐色	注口部あり。頸部に凹線文。内外面ハケ後磨き。	灰色砂層
52	壺E	9.8	10.8	○1~2	軟	暗茶褐色	頸部に凹線文。体部に列点文。体部内外面ハケ後ナデ。二次焼成。	灰色砂層
53	壺E	13.2	12.6	○1~2	良好	灰褐色	口縁と頸部に凹線文。頸部外面ハケ後ヘラ磨き。内面ナデ。	灰色砂層
54	壺E	17.6	10.8	○1~4	良好	明灰褐色	口縁と頸部に凹線文。頸部外面ハケ。	灰色砂層
55	壺E	20.0	13.6	○1~3	良好	明灰褐色	口縁と頸部に凹線文。頸部外面ハケ。内面ヘラ磨き。	灰色砂層
56	壺E	22.2	12.6	○1~3	良好	暗灰褐色	口縁と頸部に凹線文。頸部外面ハケ。内面ハケ後ナデ。口縁部に黒斑あり。	黒色粘質土
57	壺E	24.1	9.6	○1~2	良好	暗褐色	頸部に凹線文。頸部外面ハケ。内面ハケ後ヘラ磨き。	灰色砂層
58	壺E	23.0	11.6	○1~3	良好	明灰褐色	口縁部に波状文+凹線文。頸部に凹線文。	灰色砂層
第123図59	壺F	28.0	7.8	○1~2	良好	暗灰褐色	口縁内外面ヨコナデ。頸部は内外面粗いハケ。	黒色粘質土
60	壺F	24.0	9.4	○1~4	良好	明灰白色	内外面とも粗いハケ。	灰色砂層
61	壺F	29.8	6.6	○1~3	良好	明灰白色	口縁部に凹線文。頸部外面ハケ後ナデ。内面ナデ。	灰色砂層
62	壺F	—	10.8	○1~7	良好	暗茶褐色	口縁部に凹線文。頸部外面ハケ。内面はヘラ磨き。	灰色砂層
63	壺G	39.5	11.4	○1~3	良好	明灰褐色	口縁端面に斜格子文。口縁内外面ヨコナデ。頸部内外面ハケ。	黒色粘質土

64	壺G	46.4	4.6	◎1~2	良好	暗灰褐色	口唇部上下端に刻み目文。 口縁部に黒斑あり。	灰色砂層
65	壺G	51.2	11.0	◎1~2	良好	灰褐色	頸部に指頭圧痕凸帯文。頸部外面ハケ。内面ハケ。	灰色砂層
第124図66	壺D	15.8	3.0	○1~2	良好	暗茶褐色	口縁部に刻み目凸帯文。外面にスス附着。	灰色砂層
67	壺D	12.2	8.5	○1~2	良好	暗茶褐色	口縁部に凹線文。体部外面はハケ後ナデ。外面にスス附着。	灰色砂層
68	壺D	17.4	13.6	○1~4	良好	暗灰色	紐穴あり。外面ハケ後ナデ。内面ヘラ削り後ナデ。	黒色粘質土
69	鉢D	17.8	7.4	○1~2	良好	暗茶褐色	口縁部に凸線文。体部外面はハケ後ヘラ磨き、内面ナデ。	黒色粘質土
70	鉢D	17.6	6.2	○1~3	良好	暗灰色	口縁部に凹線文。口縁外面に黒斑あり。	黒色粘質土
71	鉢D	16.0	4.8	○1~2	良好	暗灰色	口縁部に凹線文。	灰色砂層
72	鉢D	21.4	12.2	◎1~2	良好	暗茶褐色	口唇部に刻み目文。口縁部に刻み目凸帯。体部外面ハケ後ヘラ磨き。	黒色粘質土
73	鉢D	21.4	11.4	○1~3	良好	暗灰褐色	口縁に凹線文。外面ハケ後ヘラ磨き、内面ハケ。内面ヘラ削り。	黒色粘質土
74	鉢D	25.4	7.2	○1~3	良好	暗茶褐色	口縁部に凹線文。外面ハケ後ヘラ磨き。	灰色砂層
75	鉢D	26.2	7.4	○1~2	良好	明灰褐色	口唇部に刻み目文。口縁部に刻み目凸帯文。内外面ハケ。	黒色粘質土
76	鉢D	25.2	5.8	○1~2	良好	灰褐色	口縁部に刻み目凸帯文。体部内外面ハケ後ナデ。	灰色砂層
77	鉢D	30.2	5.2	○1~2	良好	灰褐色	口縁部に凸帯文。器体内外面ハケ後ナデ。	灰色砂層
78	鉢D	31.0	9.8	○1~2	良好	暗灰褐色	口縁部に凹線文。体部外面ハケ後ヘラ磨き、内面ハケ。口縁部内面はハケ後ナデ。	灰色砂層
79	壺H	12.2	4.8	◎1未満	良好	暗赤褐色	紐穴あり。内外面ヘラ磨き。外面にスス附着。	黒色粘質土
80	壺H	10.6	13.0	◎1未満	良好	暗灰褐色	紐穴あり。内外面ヘラ磨き。二次焼成を受け破損。	灰色砂層
第125図81	甕A	22.0	8.7	○1~2	良好	暗茶褐色	体部内外面ハケ後ナデ。スス附着。	黒色粘質土
82	甕A	20.6	5.6	○1~2	良好	暗茶褐色	体部外面ハケ、内面ハケ後ナデ。スス附着	灰色砂層
83	甕A	19.2	7.0	○1~2	良好	暗灰褐色	体部内外面ハケ。スス附着。	黒色粘質土
84	甕B	17.6	8.5	○1~2	良好	暗灰褐色	体部外面タタキ後ハケ、内面ハケ。スス附着。	黒色粘質土



85	甕B	23.4	8.4	○1~2	良好	暗灰褐色	体部外面タタキ後ハケ、内面ハケ後ナデ。スス附着。	黒色粘質土
86	甕B	26.0	9.2	○1未満	良好	暗灰褐色	体部内外面ハケ。スス附着。	黒色粘質土
87	甕B	26.2	11.0	○1~2	良好	暗灰褐色	肩部に刺突文がめぐる。体部内外面ハケ。スス附着。	黒色粘質土
88	甕A	16.2	4.0	○1未満	良好	暗茶褐色	口唇部に刻み。体部内外面ハケ後ナデ。スス附着。	灰色砂層
89	甕B	12.4	8.6	○1~2	良好	暗灰褐色	内外面ナデ。スス附着。	灰色砂層
90	甕B	15.8	9.0	○1~3	良好	暗茶褐色	体部外面ハケ、内面ハケ後ナデ。スス附着。	灰色砂層
91	甕B	31.6	16.6	○1~2	良好	暗灰褐色	体部外面ハケ、内面ハケ後ヘラ削り。スス附着。	灰色砂層
92	甕B	25.9	12.4	○1~3	良好	暗茶褐色	体部外面ハケ、内面中~下半ハケ後ヘラ削り。スス附着。	灰色砂層
93	甕B	31.0	5.6	○1~3	良好	暗灰褐色	体部外面タタキ、内面ハケ後ナデ。スス附着。	灰色砂層
第126図94	甕A	19.1	24.8	○1~3	良好	暗灰褐色	体部外面ハケ、内面ハケ後中~下半削り後ハケ。スス附着。ほぼ完存。	黒色粘質土
95	甕C	10.6	17.8	○1~3	良好	暗茶褐色	体部外面ハケ、下半ヘラ磨き。内面ハケ後ナデ。完存。スス附着。	黒色粘質土
96	甕A	14.4	15.8	○1~4	良好	暗茶褐色	体部外面ハケ、内面ヘラ削り。スス附着。	黒色粘質土
97	甕A	24.1	6.8	○1~2	良好	暗灰褐色	体部外面ハケ、内面ナデ。スス附着。	黒色粘質土
98	甕A	24.8	7.2	○1~2	良好	暗灰褐色	体部内外面ハケ後ナデ。スス附着。	灰色砂層
99	甕A	24.4	18.8	○1~3	良好	明灰褐色	体部外面ハケ、内面ハケ後ナデ。スス附着。	灰色砂層
100	甕A	31.4	43.9	○1~3	良好	明灰褐色	体部外面ハケ、内面ハケ後ヘラ削り、下半はヘラ削り後ハケ。底部充填。ほぼ完存。	黒色粘質土
第127図101	甕・壺C	16.2	8.4	○1~4	良好	暗灰褐色	体部外面ハケ後ナデ、内面ハケ後ナデ。スス附着。	灰色砂層
102	壺C	18.6	6.2	○1~3	良好	暗灰褐色	体部外面ハケ後ナデ、内面ナデ。口縁端面に凹線文。スス附着。	灰色砂層
103	甕C	16.0	4.6	○1~2	良好	暗灰褐色	体部内外面ハケ後ナデ。スス附着。	灰色砂層
104	甕C	18.0	8.0	○1~2	良好	暗灰褐色	口縁端面に凹線文。体部外面ハケ、内面ハケ後下半ヘラ削り。スス附着。	灰色砂層
105	甕C	16.8	6.6	○1~2	良好	暗灰褐色	口縁端面に凹線文。体部内外面ハケ後ナデ。スス附着	灰色砂層

丹後国営農地開発事業(東部・西部地区)関係遺跡

106	甕C	19.4	4.4	○1~2	良好	暗灰褐色	口縁端面に凹線文。スス付着。	灰色砂層
107	甕C	21.6	5.6	○1~2	良好	暗茶褐色	口縁端面に凹線文。体部外面タタキ後ハケ、内面ナデ。スス付着。	灰色砂層
108	甕C	17.6	12.4	○1~2	良好	暗茶褐色	口縁部に凹線文。体部外面ハケ、内面ハケ後ヘラ削り。スス付着。	灰色砂層
109	甕C	13.3	7.6	○1~5	軟	暗青茶褐色	体部内面ハケ後ヘラ削り。二次焼成痕あり。把手あり	灰色砂層
110	甕C	15.2	4.2	○1~2	良好	暗青茶褐色	口縁端部に凹線文。	灰色砂層
111	甕C	15.8	6.0	○1~3	良好	暗灰褐色	体部外面ハケ、内面ナデ。	灰色砂層
112	甕C	24.1	9.4	○1~2	良好	暗灰褐色	把手あり。櫛描き波状文+直線文。内面ハケ後ヘラ削り。	灰色砂層
113	甕C	25.6	13.6	○1~2	良好	暗灰褐色	口縁端面に凹線文。体部外面タタキ後ハケ、内面ハケ後ナデ。	灰色砂層
114	甕C	33.5	13.2	○1~2	良好	黄灰褐色	体部内外面ハケ。	灰色砂層
第128図115	甕D	26.2	16.4	○1~3	良好	暗茶褐色	口縁端面に凹線文。外面ハケ、下半ヘラ磨き。内面ハケ、下半ヘラ削り。	黒色粘質土
116	甕A	37.8	8.2	○1~3	良好	暗灰褐色	内外面ハケ。	灰色砂層
117	甕D	38.2	9.0	○1~3	良好	暗茶褐色	口縁端面に凹線文。	灰色砂層
118	甕A	41.2	12.0	○1~3	良好	灰褐色	肩部に刻み目凸帯文。	灰色砂層
119	甕D	51.8	5.8	○1~3	良好	暗灰褐色	口縁端面に凹線文+刻み目文。頸部に指頭圧痕凸帯文。	灰色砂層
第129図120	底部	底部径5.8	4.2	◎1~2	良好	明灰褐色	外面ハケ後ナデ、内面ナデ。外底面ナデ。接合痕明瞭。	灰色砂層
121	底部	5.0	5.3	○1~2	良好	暗灰褐色	外面ヘラ磨き、内面ヘラ削り後内底面をナデ。接合痕明瞭。	黒色粘質土
122	底部	6.6	4.9	○1~2	良好	暗灰褐色	外面ハケ、内面ハケ後ナデ。外底面ナデ。接合痕明瞭。	灰色砂層
123	底部	6.4	6.2	○1~2	良好	暗茶褐色	外面ナデ、内面ヘラ削り後内底面のみナデ。接合痕明瞭。底面に穿孔あり。	黒色粘質土
124	底部	6.6	5.6	○1~3	良好	黒灰色	外面ハケ、内面ヘラ削り。穿孔あり。	黒色粘質土
125	底部	8.8	4.2	○1~2	良好	暗灰褐色	外面タタキ後ヘラ磨き、内面ヘラ削り。	灰色砂層
126	底部	9.0	7.1	○1~2	良好	暗灰褐色	外面ヘラ磨き、内面ヘラ削り後ヘラ磨き。	黒色粘質土
127	底部	11.2	10.4	○1~2	良好	暗灰褐色	外面ハケ、内面ヘラ削り。	黒色粘質土

128	底部	6.9	6.7	○1~2	良好	暗灰褐色	内外面ハケ、内底面ナデ。	黒色粘質土
129	底部	8.2	8.2	○1~2	良好	暗茶褐色	内外面ハケ、内底面ナデ。	黒色粘質土
130	底部	6.8	8.2	○1~2	良好	暗灰褐色	外面ヘラ磨き、内面ハケ。	黒色粘質土
131	底部	7.0	7.8	○1~2	良好	暗灰褐色	外面ハケ、内面ヘラ削り後内底面のみナデ。	黒色粘質土
132	底部	6.8	11.9	○1~2	良好	黒灰褐色	外面ハケ、内面ヘラ削り後内底面のみナデ。	黒色粘質土
133	底部	9.8	15.0	○1~2	良好	暗灰褐色	内外面ハケ、内底面ナデ。	黒色粘質土
134	底部	10.4	12.2	○1~3	良好	明灰褐色	外面ハケ後ナデ後磨き、内面ハケ後ナデ。底面ハケ後ナデ。	黒色粘質土
135	底部	9.0	14.0	○1~3	良好	黒灰色	外面タタキ後ハケ、後ヘラ磨き。内面ハケ後ヘラ削り後ハケ。底面ナデ。黒斑あり。	黒色粘質土
第130図136	高杯A	20.2	5.8	○1~2	良好	暗茶褐色	内外面ヘラ磨き。	灰色砂層
137	高杯A	18.9	4.6	○1~2	良好	暗茶褐色	口縁部に凹線文。内外面ヘラ磨き。	灰色砂層
138	高杯A	23.6	7.0	○1	良好	暗茶褐色	口縁部に凹線文。杯部外面ヘラ削り後ヘラ磨き。内面ヘラ磨き。	灰色砂層
139	高杯A	19.6	6.0	○1未満	良好	赤褐色	口縁部に凹線文。杯部外面ヘラ削り後ヘラ磨き、内面ヘラ磨き。	灰色砂層
140	高杯B1	—	5.2	○1~2	良好	明赤褐色	杯部内面ヘラ磨き。	黒色粘質土
141	高杯B1	28.0	7.0	○1~3	良好	灰白色	内外面ヘラ磨き。	黒色粘質土
142	高杯B2	28.2	3.2	○1~3	良好	暗灰褐色	杯部外面ヘラ削り後ヘラ磨き。	灰色砂層
143	高杯B2	25.3	5.8	◎1未満	良好	明赤褐色	杯部外面ヘラ削り後ヘラ磨き。内面ヘラ磨き。	灰色砂層
144	高杯B3	27.7	7.5	○1~2	良好	暗灰白色	口縁端面に凹線文+棒状浮文。杯部外面ヘラ磨き、内面ヘラ磨き。	黒色粘質土
145	高杯A	12.4	6.3	○1~2	良好	暗灰褐色	口縁部に凹線文。杯部内外面ヘラ磨き。	灰色砂層
146	高杯A	19.6	4.4	○1~2	良好	暗茶褐色	口縁部に凹線文。杯部外面ヘラ削り後ヘラ磨き。	灰色砂層
147	高杯A	22.8	6.3	○1~2	良好	暗茶褐色	口縁部に凹線文。杯部外面ヘラ削り後ヘラ磨き。内面ヘラ磨き。	黒色粘質土
148	高杯A	23.6	5.8	○1~2	良好	暗茶褐色	口縁部外面に凹線文。杯部外面にヘラ削り後ヘラ磨き。	灰色砂層
149	高杯C	24.6	6.9	○1~3	良好	明灰褐色	杯部外面に凹線文。	灰色砂層
150	高杯	—	7.0	○1~2	良好	暗茶褐色	杯部の内外面ヘラ磨き。脚部に凹線文。円板充填手法。	灰色砂層

151	高杯	—	5.2	○1~2	良好	暗茶褐色	杯部の内外面ヘラ磨き。脚部に凹線文。円板充填手法。	灰色砂層
152	高杯脚	—	9.8	○1~3	良好	暗灰褐色	脚部に凹線文。外面ヘラ磨き、内面ヘラ削り。	黒色粘質土
第131図153	高杯脚	—	11.4	○1未満	良好	暗灰白色	脚部に凹線文+斜格子文。円板充填手法。	灰色砂層
154	高杯脚	—	12.6	○1~2	良好	明灰褐色	脚部に凹線文。円板充填手法。	黒色粘質土
155	高杯脚	—	11.6	○1~2	良好	暗灰褐色	外面ヘラ磨き。円板充填手法。	灰色砂層
156	高杯脚	底径 13.4	12.5	○1~4	良好	暗灰色	外面ハケの後ヘラ磨き、内面ヘラ削り。円板充填手法。	黒色粘質土
157	高杯脚	12.2	7.2	○1~2	良好	暗灰褐色	脚部に凹線文。外面ヘラ磨き、内面ヘラ削り。	灰色砂層
158	高杯脚	12.4	6.5	○1~2	良好	暗灰褐色	脚部に凹線文。	灰色砂層
159	高杯脚	9.2	7.2	◎1未満	良好	明赤褐色	脚部に凹線文。内面ヘラ削り。	灰色砂層
160	脚	11.2	4.2	○1~2	良好	暗茶褐色	外面ハケ、内面ナデ。	黒色粘質土
161	高杯脚	17.4	13.8	○1~3	良好	暗灰褐色	外面ヘラ磨き、内面ハケ後ナデ。ヘラ削りの痕跡は認められない。	黒色粘質土
162	高杯脚	10.2	7.3	○1未満	良好	暗茶褐色	外面ヘラ磨き、内面ヘラ削り。黒斑あり。	灰色砂層
163	器台か	21.2	7.4	○1~4	良好	暗灰褐色	調整不明。	灰色砂層
第132図164	鉢A	15.0	5.9	○1~2	良好	暗茶褐色	外面ハケ、内面ヘラ削り後ナデ。	灰色砂層
165	鉢A	26.2	10.3	○1~2	良好	明茶褐色	外面ハケ、内面ハケ後ナデ。	灰色砂層
166	鉢B	20.7	15.1	○1~2	良好	暗茶褐色	内外面ハケ。二次焼成。スス附着。	灰色砂層
167	鉢C	22.9	6.6	○1~2	良好	暗茶褐色	口縁端面に凹線文。内外面ヘラ磨き。	灰色砂層
168	台形土器	台部 径19	3.6	○1~3	良好	暗褐色	内外面ナデ。	黒色粘質土
169	台形土器	—	7.5	○1~3	良好	暗灰褐色	内外面ハケ。	黒色粘質土
170	台形土器	台部 径16	10.2	○1~2	良好	暗茶褐色	内面ハケ後粗いヘラ磨き。外面ハケ。台の上面はていねいなナデ。	灰色砂層

※胎度の○は良、◎は精良を示す。

付表8 石鏃・楔形石器・剥片

番号	器種	石材	法量(cm)			出土地点	備考
			長	幅	厚		
第150図1	石鏃	ガラス質安山岩	2.3	2.1	0.5	S D01暗灰色砂層	先端部欠損
2	剥片	流紋岩	2.7	3.1	0.7	S D01暗灰色砂層	
3	剥片	流紋岩	4.8	3.8	1.0	S D01暗灰色砂層	
4	楔形石器	流紋岩質安山岩	5.7	2.7	1.8	S D01暗灰色砂層	両側縁に潰れ痕あり
5	剥片	流紋岩	5.2	4.7	1.2	S D01暗灰色砂層	
6	楔形石器	流紋岩質安山岩	7.2	6.8	4.6	S D01暗灰色砂層	四辺に潰れ痕あり

付表9 緑色凝灰岩原石・石鋸・勾玉

番号	器種	石材	法量(cm)			出土地点	備考
			長	幅	厚		
第152図1	残核	碧玉	2.3	1.7	1.6	S D01	擦切施溝あり
2	板状剥片	緑色凝灰岩	4.3	2.8	1.3	S D01黒色粘質土	擦切施溝あり
3	板状剥片	緑色凝灰岩	4.5	3.6	1.0	S D01暗灰色砂層	擦切施溝あり
4	石鋸	結晶片岩	6.4	2.4	0.6	S D01	一端を折損
5	板状剥片	緑色凝灰岩	5.7	4.1	2.6	S D01暗灰色砂層	
6	勾玉	流紋岩	4.1	1.7	0.9	S D01黒色粘質土	C字形
7	丁字頭勾玉	アブライト	4.7	1.8	1.7	S D01黒色粘質土	逆C字形

付表10 石庖丁・磨製石斧・敲石・凹石・砥石

番号	器種	石材	法量(cm)			出土地点	備考
			長	幅	厚		
第151図1	石庖丁	砂岩	6.2	6.4	0.5	S D01暗灰色砂層	半月形外湾刃、両刃、折損
2	石庖丁	ホルンフェルス	7.9	5.8	0.6	S D01黒色粘質土	長方形、片刃、折損
3	打製石庖丁	砂岩	11.8	10.6	0.6	S D01暗灰色砂層	大形品、折損
4	大型蛤刃石斧	安山岩	6.6	5.8	4.1	S D01暗灰色砂層	頭頂部のみ残存
5	敲石	安山岩	7.2	5.4	4.6	S D01	両端に潰れ痕あり
6	大型蛤刃石斧	流紋岩質安山岩	9.2	5.4	3.4	S D01暗灰色砂層	頭部欠損
7	凹石	安山岩	10.6	9.8	6.1	S D01	両面にあばた状の凹みあり
8	扁平片刃石斧	流紋岩質安山岩	3.6	3.4	1.1	S D01暗灰色砂層	刃部のみ残存
9	砥石	砂岩	5.8	3.8	1.5	S D01	一部のみ残存
10	砥石	砂岩	6.4	4.9	1.4	S D01	一部を欠損
11	砥石	流紋岩	14.2	5.8	5.8	S D01	完存
12	砥石		10.2	7.2	4.7	S D01	両端欠損

付表11 出土木器

番号	器種	法量(cm)			出土地点	特徴
		長辺	短辺	長さ		
第137図1	田下駄	42.0	21.2	2.0	S D01黒色粘質土層	両長辺に2個一対の「V」字状の抉りあり。抉りの幅は上辺が広い。器表はていねいに調整され、平滑である。完存。
2	田下駄	42.0	19.4	3.3	S D01黒色粘質土層	長方形の板材を加工して台形の器体を形成。上端が薄く作られている。3孔あり。下端部折損。
3	田下駄	62.6	12.9	1.6	S D01灰色砂層	粹付田下駄であろう。
4	鋤	44.0	17.3	4.0	S D01灰色砂層	未製品。
5	横槌	39.3	8.0	6.0	S D01灰色砂層	水口状遺構に伴って出土。槌部に使用痕顕著。
第138図6	槽	188.0	36.4	3.4	S D01灰色砂層	転用されて水口状遺構の一部を構成していた。短側辺に手掛けたと見られる方形の加工がある。長辺上端を抉っている。底面には両端に台が作られている。槽底面には転用の際に穿たれた方形の孔が2孔ある。この孔に杭が打ち込まれ、水口状遺構に固定されていた。
第139図7	槽	76.3	25.6	9.6	S D01黒色粘質土層	部分遺存。器面全体に粗い加工痕が残る。
8	槽	48.4	9.4	3.0	S D01灰色砂層	部分遺存。
9	槽	118.0	27.5	3.8	S D01灰色砂層	部分遺存。
第140図10	橋状遺構	118.6	36.1	2.7	S D01灰色砂層	ていねいに加工した板に方孔を4孔穿っている。この孔に杭が打たれ橋状の遺構として用いられていた。
第141図11	桶	17.2	9.1	2.3	S D01黒色粘質土層	削り貫き。短辺上端に耳がつく。耳には上下方向に孔があげられている。部分遺存。
12	容器	25.4	14.8	3.4	S D01灰色砂層	やや厚手の板材を削り貫いて作られた容器。
13	桶	19.0	14.2	1.7	S D01黒色粘質土層	削り貫いて作られた桶。ていねいに作られた優品である。外底面周辺を高台状に削り残している。
14	蓋	22.7	17.9	1.2	S D01黒色粘質土層	容器の蓋であろう。中央に円孔があげられている。
15	蓋	10.3	2.6	1.8	S D01灰色砂層	部分遺存。小型容器の蓋であろう。
16	蓋	11.5	2.9	1.0	S D01灰色砂層	部分遺存。小型容器の蓋であろう。紐孔とみられる小孔があげられている。

第142図17	剣形木製品	37.3	3.6	1.4	S D01灰色砂層	刃部断面形菱形、茎部断面形楕円形。鉄剣形の木製品。水取口状遺構付近で出土。地面(黒色粘質土)に茎を上にして茎まで刺さった状態で出土。
18	高杯	口径24.2	高さ16.0	-	S D01黒色粘質土層	刳り貫き。水平にのびる口縁部を持つ脚部に透かし孔を穿っている。一部欠損。
19	高杯	口径32.3	高さ17.7	-	S D01黒色粘質土層	脚柱部と杯部は一体であるが、脚部は別に作られている。脚部を脚柱部にはめこむ、組合わせ式の高杯である。脚部内側には円柱が差し込まれており、これで固定している。
20	杓文字	21.2	2.0	0.7	S D01灰色砂層	ほぼ完存。ヘラ状の小型品。
21	火きり白	18.6	2.0	1.1	S D01灰色砂層	白部1個あり。部分遺存。
22	自在鉤	11.5	2.1	1.1	S D01灰色砂層	裏面と下端に加工あり。上端欠損。枝をうまく利用してこしらえたもの。
23	釘	3.4	2.2	0.8	S D01黒色粘質土層	菱形の頭部をもつ木製釘。
24	釘	4.7	2.1	1.1	S D01黒色粘質土層	方形の頭部をもつ木製釘。
25	釘	7.3	1.8	0.8	S D01黒色粘質土層	方形の頭部をもつ木製釘。
26	やす形木製品	16.5	1.0	0.9	S D01黒色粘質土層	断面方形の棒の両端を削ったもの。
27	柄	23.1	2.6	2.0	S D01灰色砂層	有頭である。断面円形。
28	不明木製品	19.7	4.7	0.5	S D01灰色砂層	撥状の木製品。頭部に「U」字形の挟りあり。2孔あり。
29	不明木製品	12.5	3.5	1.3	S D01灰色砂層	柄であろうか。頭部に円孔あり。
30	不明木製品	11.4	4.1	0.9	S D01灰色砂層	木札状である。
31	不明木製品	17.8	14.3	0.7	S D01灰色砂層	部分遺存。漆塗り製品である。長楕円形の孔が2孔ある。
第143図32	機織具	73.4	6.8	0.8	S D01灰色砂層	左長辺は直線的で、刃のように鋭い断面形を呈する。右辺は弧状に作られている。小孔が2孔ある。緯打具であろう。
33	かせ	25.0	3.4	3.0	S D01灰色砂層	かせの部材である。糸巻きの部分にあたる。両端は目釘が折れて刺さっている。
34	部材	27.2	8.6	1.6	S D01灰色砂層	方形の頭のついた部材。方孔あり。
35	部材	31.4	28.4	3.2	S D01灰色砂層	板の中央を円形に刳り貫いたもの。刳り貫くに先立って施されたケガキが明瞭に残っている。

丹後国営農地開発事業(東部・西部地区)関係遺跡

36	部材	55.6	0.8	7.4	S D01黒色粘質土層	木釘が打ち込まれた部材である。木釘は23~25と同様のものである。
37	部材	64.8	33.4	8.8	S D01灰色砂層	杓のような形の部材。「コ」の字形の断面形を呈する。
38	不明木製品	78.6	7.8	11.4	S D01灰色砂層	柄であろうか。上端に方孔があり、これに対応する側辺に目釘が打たれている。断面楕円形である。
39	梯子	23.4	11.5	7.0	S D01黒色粘質土層	2段分が残っている。頂部は面取りが施されており、梯子の最上部とみられる。
第144図40	箱材	18.5	4.1	0.7	S D01黒色粘質土層	中央上端に「U」字形の挟りがある。側辺と下辺に目釘孔とみられる小孔が連続して施されている。箱の小口板であろう。
41	箱材	23.4	5.1	1.2	S D01黒色粘質土層	板の両端に2孔一対の紐孔がある。右端の孔には樹皮製の紐の残欠がある。下辺には紐孔に対応する位置に加工あり。
42	箱材	22.9	7.1	1.1	S D01黒色粘質土層	表に連続渦巻文が線刻されている。裏面には板材を組み合わせるための溝が彫られ、これに沿って目釘孔があけられている。
43	箱材	32.5	6.3	0.9	S D01灰色砂層	41とよく似た作りである。紐孔があり、下辺にはこれに対応する位置に紐を結ぶためとみられる加工が施されている。
44	加工板材	22.5	4.5	1.2	S D01灰色砂層	両端を加工。
45	加工板材	23.5	5.3	1.5	S D01灰色砂層	左下端に加工あり。
46	加工板材	25.7	3.9	1.3	S D01灰色砂層	台形である。中央に方孔あり。
47	加工板材	22.7	5.1	2.0	S D01灰色砂層	左上に1孔あり。
48	加工板材	18.0	5.7	1.9	S D01灰色砂層	左上を半円形に挟る。
第145図49	建築部材	39.2	13.2	1.6	S D01灰色砂層	板。左辺に2か所、「コ」の字形の挟りがある。護岸材として転用。
50	建築部材	46.8	10.2	1.5	S D01灰色砂層	板材。左辺を加工。目釘孔あり。護岸材として転用。
51	建築部材	55.3	9.9	2.1	S D01灰色砂層	板材。「コ」の字形の挟りあり。護岸材として転用。
52	建築部材	58.2	12.0	1.8	S D01灰色砂層	板材。3孔あり。護岸材として転用。



	53	建築部 材	60.2	12.3	1.3	S D01灰色砂層	板材。上下端を斜めに切断して台形に加工したもの。右辺に沿って4孔あけられている。護岸材として転用。
	54	建築部 材	69.4	13.9	4.5	S D01灰色砂層	角材。左辺上方に加工あり。護岸材として転用。
	55	建築部 材	73.5	11.0	1.9	S D01黒色粘質 土層	板材。方孔あり。護岸材として転用。
	56	建築部 材	63.4	14.1	6.6	S D01黒色粘質 土層	角材である。中央に円孔あり。護岸材として転用。
	57	建築部 材	149.0	23.5	1.2	S D01黒色粘質 土層	左辺に半円形と「コ」の字形の抉りがある。上下、右辺は直線的につくられている。器面は平滑で、ていねいに調整されている。床であろうか。護岸材として転用。
第146図	58	建築部 材	11.7	24.2	1.8	S D01灰色砂層	板材。上下端を斜めに切断して台形に加工したもの。上段に切断に際して施したとみられるケガキがある。護岸材として転用。
	59	建築部 材	110.0	18.2	1.2	S D01灰色砂層	板材。下端を斜めに切断。護岸材として転用。
	60	建築部 材	168.0	19.6	2.2	S D01灰色砂層	板材。板材の中軸に沿って3つ以上の方孔が施されている。左辺下端がやや突出する。左辺に沿って3つ以上の孔があけられている。護岸材として転用。
	61	建築部 材	171.0	38.4	2.0	S D01灰色砂層	板材方孔あり。右辺を大きく削り取って加工。護岸材として転用。
	62	建築部 材	191.0	21.6	2.0	S D01灰色砂層	板材。方孔あり。護岸材として転用。
	63	建築部 材	236.0	25.0	2.0	S D01灰色砂層	板材。左辺下方に抉りがある。護岸材として転用。
	64	建築部 材	141.0	56.0	2.0	S D01灰色砂層	板材。長方形の大型の板。上端に円孔が2孔あけられている。護岸材として転用。
	65	建築部 材	182.0	22.0	3.0	S D01黒色粘質 土層	板材。上辺に抉りあり。護岸材として転用。
第147図	66	有頭棒	17.5	2.2	1.8	S D01灰色砂層	断面円形の頭部を持つ。下端を薄く加工。
	67	有頭棒	14.0	1.5	1.6	S D01灰色砂層	断面円形の頭部を持つ。下端を薄く加工。
	68	有頭棒	33.0	2.2	2.0	S D01灰色砂層	断面円形の頭部を持つ。下端を薄く加工。
	69	有頭棒	15.3	1.1	0.7	S D01灰色砂層	頭部に突出部を持つ。断面方形。
	70	有頭棒	19.4	1.5	0.6	S D01灰色砂層	両端に加工あり。断面半円形。
	71	有頭棒	18.9	1.3	1.5	S D01灰色砂層	断面円形の棒。小さな頭を作る。下端を尖らせる。
	72	棒	25.6	2.8	2.5	S D01黒色粘質 土層	断面楕円形の棒。上端を残して側縁を削り取っている。

73	棒	24.2	1.8	1.5	S D01灰色砂層	断面円形の棒。下端をくびれさせて細く作る。
74	棒	35.0	1.7	1.4	S D01灰色砂層	断面円形の棒。
75	機織具	50.6	2.5	1.1	S D01黒色粘質土層	布巻き具であろう。
76	棒	52.1	2.3	1.6	S D01黒色粘質土層	断面楕円形の棒。下端を尖らせている。
77	棒	58.0	2.6	2.4	S D01黒色粘質土層	断面方形の杭。下端を尖らせている。
78	棒	64.3	2.9	2.4	S D01黒色粘質土層	断面楕円形の棒。上端に加工あり。
79	不明木製品	19.5	3.9	2.8	S D01灰色砂層	目釘が打たれている。かせであろうか。
80	不明木製品	24.8	2.5	1.4	S D01灰色砂層	目釘が打たれている。かせであろうか。
81	棒	18.9	1.2	1.2	S D01灰色砂層	断面円形の棒。下端を尖らせている。
第148図82	杭	42.2	8.2	8.8	S D01灰色砂層 ～黒色粘質土層	丸杭。芯持ち材。先端のみ加工。護岸材。
83	杭	60.0	6.2	7.0	S D01灰色砂層 ～黒色粘質土層	丸杭。芯持ち材。先端のみ加工。護岸材。
84	杭	68.0	6.6	6.6	S D01灰色砂層 ～黒色粘質土層	丸杭。芯持ち材。先端のみ加工。護岸材。
85	杭	49.6	8.8	2.6	S D01灰色砂層 ～黒色粘質土層	板杭。板の先端側縁を加工して杭としたもの。護岸材。
86	杭	32.0	11.2	2.2	S D01灰色砂層 ～黒色粘質土層	板杭。板の先端側縁を加工して杭としたもの。護岸材。
87	杭	68.4	8.5	1.8	S D01灰色砂層 ～黒色粘質土層	板杭。板の先端側縁を加工して杭としたもの。護岸材。
88	杭	71.6	12.6	2.6	S D01灰色砂層 ～黒色粘質土層	板杭。板の先端側縁を加工して杭としたもの。護岸材。
89	杭	64.6	21.4	2.3	S D01灰色砂層 ～黒色粘質土層	板杭。板の先端側縁を加工して杭としたもの。護岸材。
90	杭	66.0	13.2	7.2	S D01灰色砂層 ～黒色粘質土層	角材を加工して杭としたもの。護岸材。
91	杭	74.2	14.0	6.4	S D01灰色砂層 ～黒色粘質土層	角材を加工して杭としたもの。護岸材。
92	杭	52.0	15.8	5.2	S D01灰色砂層 ～黒色粘質土層	角材を加工して杭としたもの。護岸材。
93	杭	38.4	18.2	6.4	黒灰色砂質土	角材を加工した大形の杭。上層杭列。
94	杭	36.4	16.4	7.8	黒灰色砂質土	角材を加工した大形の杭。上層杭列。
95	杭	49.8	20.4	8.6	黒灰色砂質土	角材を加工した大形の杭。上層杭列。
第149図96	杭	101.0	8.0	4.0	S D01灰色砂層 ～黒色粘質土層	角杭。ていねいに成形された杭。護岸材。

97	杭	91.0	6.8	5.8	S D01灰色砂層 ～黒色粘質土層	角杭。ていねいに成形された杭。 護岸材。
98	杭	92.8	5.8	3.4	S D01灰色砂層 ～黒色粘質土層	角杭。ていねいに成形された杭。 護岸材。
99	杭	91.8	5.0	4.3	S D01灰色砂層 ～黒色粘質土層	角杭。ていねいに成形された杭。 護岸材。
100	杭	91.4	5.5	1.4	S D01灰色砂層 ～黒色粘質土層	角杭。ていねいに成形された杭。 護岸材。
101	杭	86.2	5.4	3.8	S D01灰色砂層 ～黒色粘質土層	角杭。ていねいに成形された杭。 護岸材。
102	杭	86.2	5.4	4.8	S D01灰色砂層 ～黒色粘質土層	角杭。ていねいに成形された杭。 護岸材。
103	杭	85.8	5.6	4.2	S D01灰色砂層 ～黒色粘質土層	角杭。ていねいに成形された杭。 護岸材。
104	杭	68.2	7.8	4.4	S D01灰色砂層 ～黒色粘質土層	角杭。ていねいに成形された杭。 護岸材。

(田代 弘)

(5) <sup>MIZO TANI</sup>溝谷古墳群

## 1. 位置と環境

溝谷古墳群は、京都府弥栄町溝谷市場岡に所在する。この地は、竹野川下流域にあたり、大宮町・峰山町域に展開する沖積地に次ぐ広い沖積地が形成されている。この沖積地のほぼ中央を竹野川が貫流している。溝谷古墳群は、竹野川と溝谷川の合流点を南西に臨む標高約60mの丘陵上に位置し、平野部からの比高差は約40mを測る。

古墳時代を中心に、周辺の遺跡について概観しておきたい。

竹野川流域では、古墳時代前期に竪穴式石室を内部主体とする峰山町カジヤ古墳<sup>(注81)</sup>(円墳)の築造を契機に、前期末にかけて弥栄町黒部銚子山古墳、丹後町神明山古墳など大型の前方後円墳が築造される。中期には、首長墓として前葉に大宮町大谷古墳<sup>(注82)</sup>、中葉に弥栄町ニゴレ古墳<sup>(注83)</sup>、丹後町産土山古墳<sup>(注84)</sup>などの中規模の円・方墳が築かれる。

このように、大・中規模の首長墓系列の墳墓が拠点的に築造される一方で、明確な墳丘を持たない台状墓系の小古墳が丘陵尾根稜線上に数多く造られる。大宮町有明古墳群<sup>(注85)</sup>・左坂古墳群<sup>(注86)</sup>・帯城古墳群<sup>(注87)</sup>・小池古墳群<sup>(注88)</sup>、弥栄町宮の森古墳群<sup>(注89)</sup>・ゲンギョウの山古墳群<sup>(注90)</sup>・普甲古墳群<sup>(注91)</sup>などが調査されており、これら群小古墳は、前期から後期を通じて造営されていることが確認されている。溝谷古墳群の周辺には久原古墳群、小田谷古墳群、徳昌寺裏山古墳群、飛谷古墳群、太田古墳群、大田南古墳群など数多くの古墳群が分布しているが、多くはこれと類似する内容を持つものと思われる。

後期には横穴式石室が導入される。導入期の横穴式石室は、遠所古墳群<sup>(注93)</sup>にみるように、竪穴系横口式石室の影響がみられる。加悦町入谷A-1号墳<sup>(注94)</sup>、宮津市霧ヶ鼻古墳群<sup>(注95)</sup>などの調査で、導入期の横穴式石室の状況が明らかになりつつある。6世紀後半の例として丹後町高山古墳群<sup>(注96)</sup>・上野古墳群<sup>(注97)</sup>が挙げられる。上野2号墳は、外護列石を持つ長方形墳であることが確認された。竹野川中～下流域では、横穴式石室を内部主体とする古墳は数基単位で群をなし、加悦町入谷古墳群のような群集傾向は認められない<sup>(注98)</sup>。

竹野川中流域東岸では、後期に横穴が数多く造営されており、地域の特徴をなしている。大田鼻横穴群、有明横穴群、左坂横穴群などが調査された。左坂横穴群では開始期から終末期にわたる横穴群の変遷が明らかにされつつある。

近年の発掘調査の増加に伴って、これら墳墓の状況がある程度明らかにされつつあるのに対し、造墓集団の居住地である集落遺跡については調査事例が少なく、不明な点が多い。

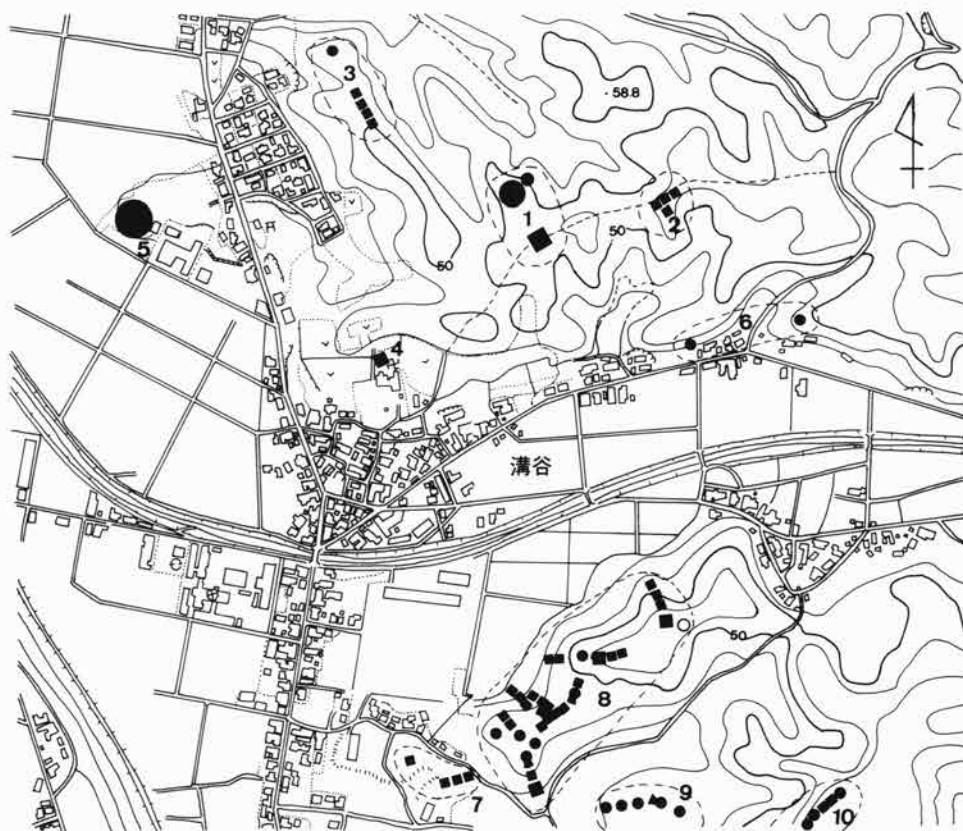
古墳時代の集落遺跡は、岩滝町定山遺跡、大宮町正垣遺跡・谷内遺跡、弥栄町遠所遺跡群などがある。遠所遺跡群では、古墳時代後期前～後半にかけて造営された古墳群の隣接地点で同時期の住居跡が確認され、集落と墳墓の関連が明らかにされた。遠所遺跡の住居跡群は、狭隘な谷部に位置し、丘陵斜面を削り出して遺構を形成している。この遺跡では、古墳時代後半に製鉄を行っていた可能性が指摘されており、古墳時代の鉄生産遺跡として重要視されている。

溝谷古墳群とかかわる集落遺跡は、今のところ明らかではない。

## 2. 調査の経過と概要

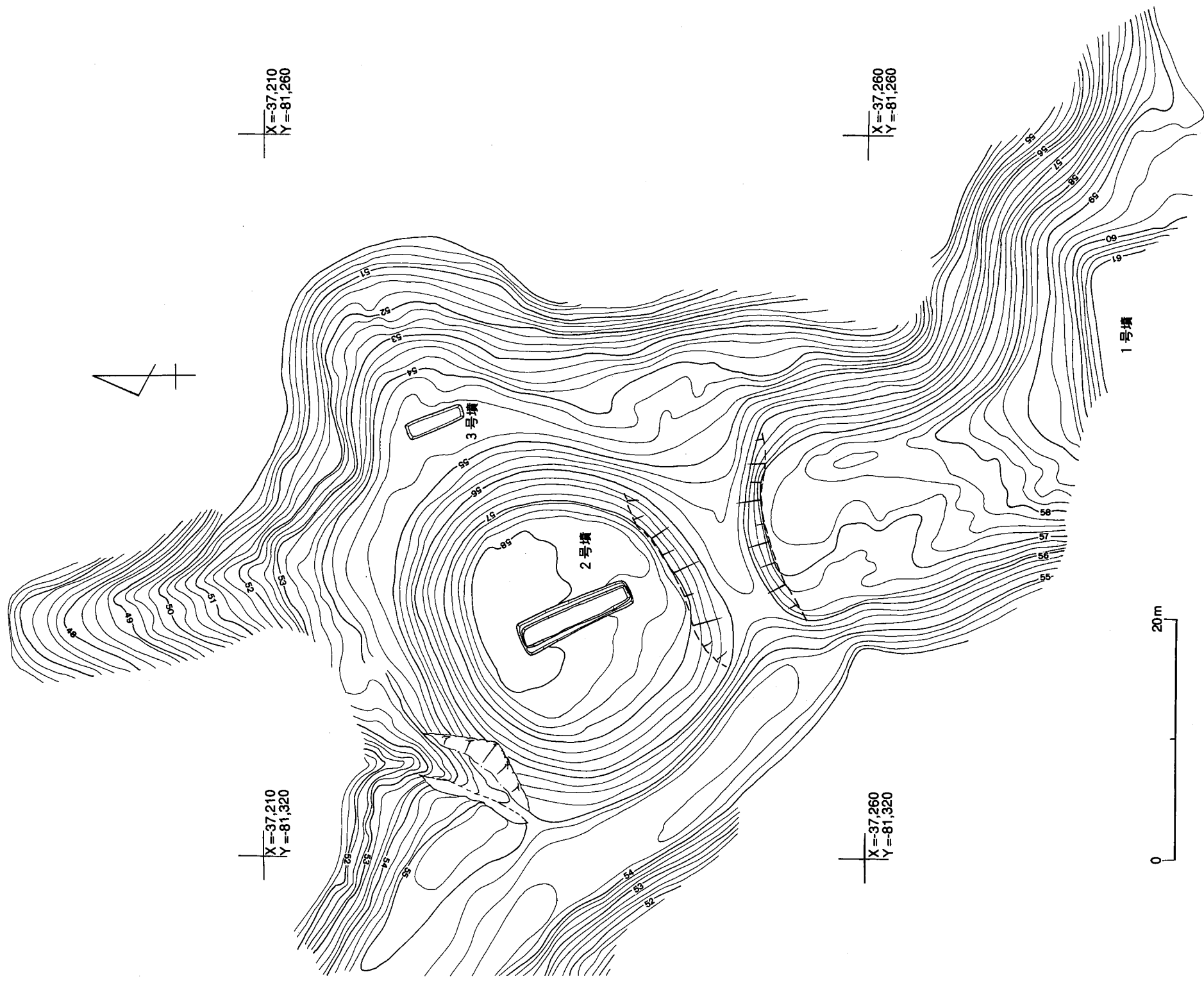
### ①調査の経過

今回の調査地は、1988年度版『京都府遺跡地図』に溝谷城跡として登録された周知の遺跡である。冒頭で記したように、国営農地造成工事が当該遺跡の範囲内に及ぶため、これ



第156図 溝谷古墳群位置図(1/10,000)

- |          |            |          |             |           |
|----------|------------|----------|-------------|-----------|
| 1. 溝谷古墳群 | 2. 溝谷北古墳群  | 3. 久原古墳群 | 4. 龍淵寺古墳    | 5. 丸山古墳   |
| 6. 八所古墳群 | 7. いもじゃ古墳群 | 8. 小田谷古墳 | 9. 徳昌寺裏山古墳群 | 10. 飛谷古墳群 |



第157图 沟谷古坟群地形测量图

に先立って調査を実施することとなった。

調査地は、標高約55mの尾根の基部にあたる。尾根最高所には方形の隆起があり、その下方に長方形の平坦地、尾根に直交する溝、円形の平坦地などが認められる。京都府教育委員会による分布調査の結果、これらの起伏は、廓や堀割りなど城跡関連遺構と推定された。

4月6日に器財を搬入し、調査を開始した。掘削に先立って立木伐採を行い、木材処理など清掃作業の済んだ26日、調査前の地形を記録するために空中撮影を実施した。その後、遺構の性格を把握するため、廓状の隆起部分や堀割り状の遺構、平坦地などに試掘トレンチを設定し、掘削を開始した。

掘削の結果、この遺跡は3基からなる古墳群であることが明らかになり、調査前にみられた隆起や溝はこれに敷設する遺構であることを確認した。古墳は、尾根高位にあるものから順に1号墳、2号墳、3号墳と名付けた。1号墳は一辺約15m前後の方墳である可能性が高まり、2号墳は直径約30m前後の円墳、3号墳は半月形の不定形な小規模な円墳であることがわかった。

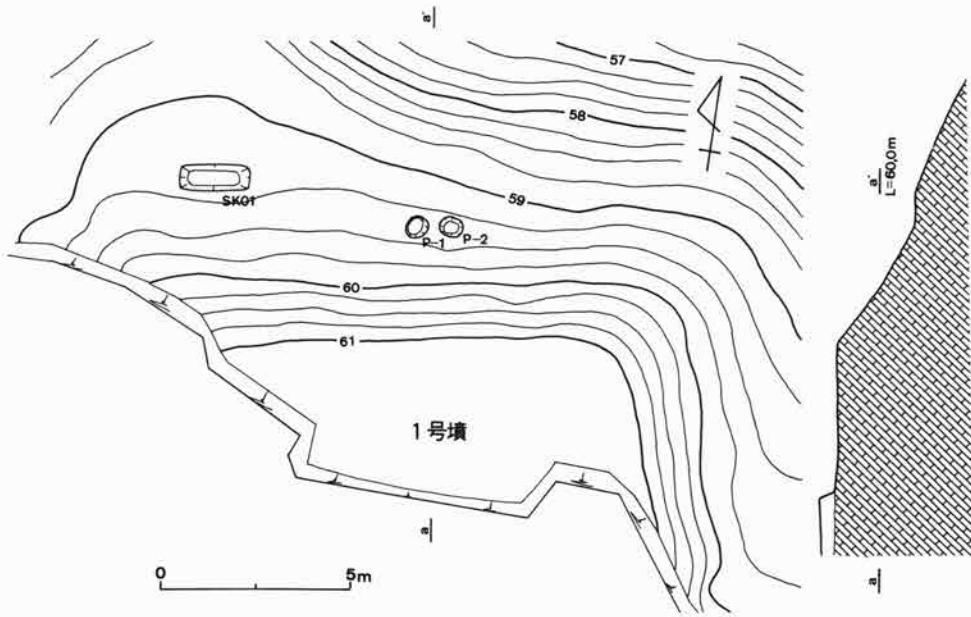
城跡に関する遺構・遺物については確認することができず、当調査地点の遺構は古墳時代に限定される可能性が高まった。このため、溝谷城跡を溝谷古墳群と名称変更し、調査の方針についても改めて検討することになった。

試掘調査の結果を受けて、原因者である近畿地方農政局、京都府教育委員会文化財保護課、当調査研究センターの三者で協議を行った。面的調査を実施して記録保存のための資料を作成することが決定した。

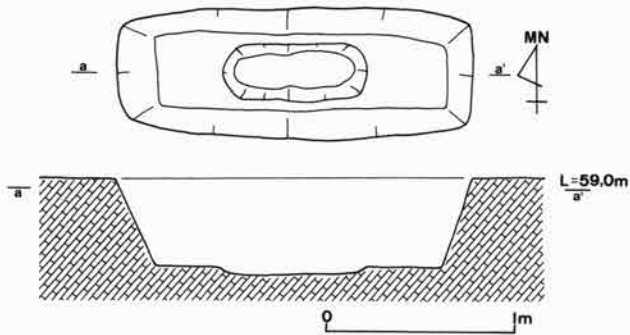
それぞれの古墳の表土除去作業を行った後、精査を行った。1号墳は方墳であることが確定的となり、2号墳は長さ約10m・幅約3mの巨大な墓壙を中心主体とする直径28m前後の円墳であることが確認できた。この墓壙底面で礫床を有する木棺の痕跡遺構を検出し、これに伴い鏡、管玉、刀子などを検出した。7月20日、空中撮影を行った。22日に記者発表、23日に現地説明会を実施して多数の参加者を得た。7月30日に現地作業を終了した。調査は、地元作業員の方々をはじめ学生諸氏の協力を得て調査第2課調査員田代 弘が担当して行った。本概要報告は、3号墳を水野聡哉(立命館大学学生)と田代が分担して執筆たほかは、田代が執筆・編集した。

#### ①遺跡の概要

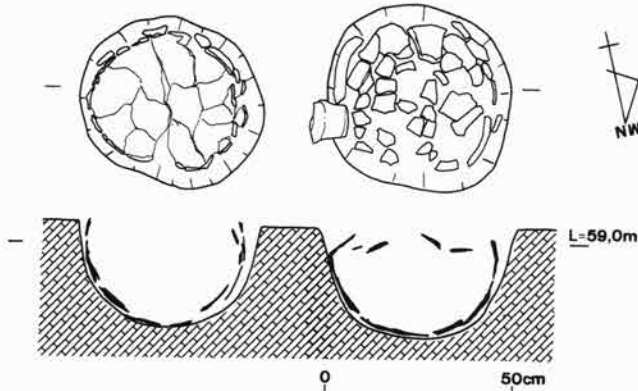
1号墳 標高61mを測る丘陵の最高所に占地する一辺15m前後の方墳である。高さは、2～2.5mを測る。墳丘は、林道や開墾のために墳丘の大半が破壊されており、墳丘西辺と北辺が部分的に遺存しているのみである。造成地内にかかる墳丘の一部(北辺と墳頂部



第158図 溝谷1・2・3号墳調査後地形測量図



第159図 溝谷1号墳と土坑(SK01)



第160図 溝谷1号墳供献土器

の一部)について調査を実施した。

表土を剥ぐと、厚さ20cmほどの暗黄褐色土があり、その下に地山である黄色粘質土があった。暗黄褐色土は、墳頂平坦面でのみ確認しており、明瞭な盛り土は確認できなかった。丘陵を削って墳丘を形成したのであろう。南側は、丘陵がやや低いので、削った土を南側に盛り出すようにして整形したものと思われる。

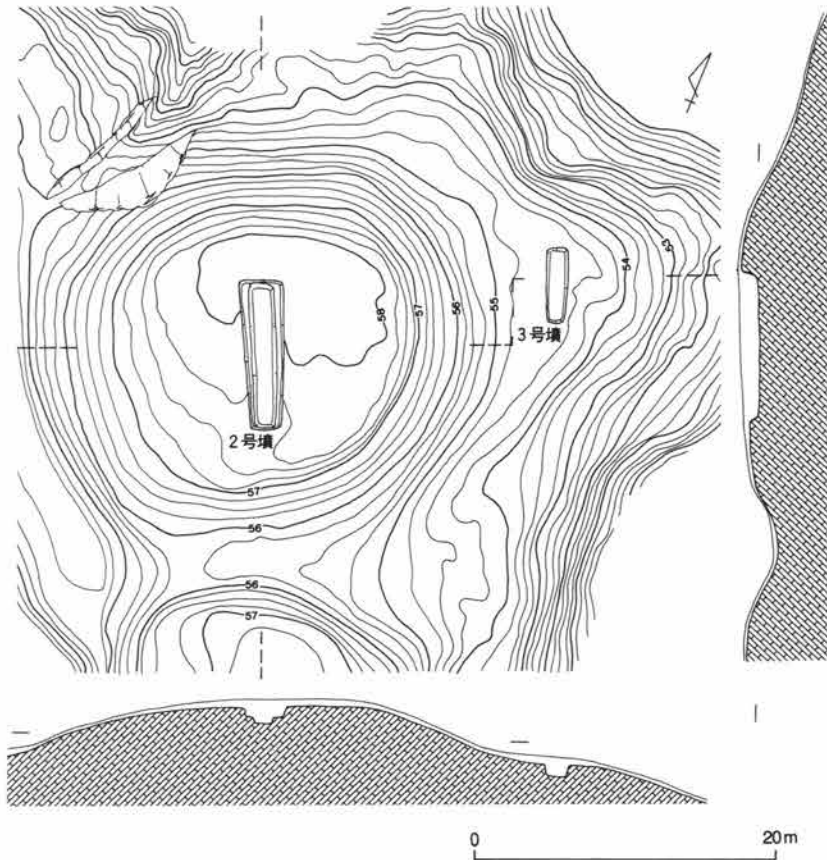
墳丘裾において、土坑(SK01)1基と供献土器とみられる土器2個体を確認した。



土坑(第159図) 墳丘北辺の裾で検出した長方形の土坑である。供献土器とみられる土器のやや西寄りの地点にある。主軸は東西にあって、墳丘北辺に平行して作られている。土坑は、長さ約190cm・幅約66cm・深さ約50cmを測る。土坑底の中央部に長さ約80cm・深さ約10cmの楕円形を呈する掘り込みがある。遺物は含まれておらず、時期・性格は明らかでない。

供献土器(第160図) 墳丘北辺裾部のほぼ中央で、供献されたとみられる土器を2個体分検出した。土器はいずれも壺形土器である。肩部以上は削平されており、全形は明らかでない。これらの土器は、体部直径よりやや大きめで深さ30cmほどの穴に据えられていた。土器は、墳丘北辺に対して平行に置かれていた。

2号墳 2号墳は、1号墳の北側に位置し、標高58mを測る尾根稜上に立地する。直径約28mの円墳である。丘陵を切断して兆域を確保し、主に地山を削り出して墳丘を形成している。盛り土は若干みられるが、封土として行われるのみで、墳丘築成としては行われ



第161図 溝谷2・3号墳の墳丘と主体部

ていないようである。

2号墳の南側には、丘陵を切断して設けられた区画溝がある。この溝は、丘陵に対して直交しており、上面幅約8m・底幅2mを測り、墳丘頂部からの深さは約2.3mである。溝を掘る際に出た排土の一部は、封土として用いられたのであろうが、おそらく、東側の谷に捨てられたようである。溝の東側に、貼り出しのような部分がみられた。この部分は、地山ではなく、不安定な堆積土であって、溝を切断した際に生じた排土によるものと思われる。

墳丘は、自然地形を最大限利用して築造しており、北側、西側、東側の墳丘裾部はほとんど改変されていない。区画溝の掘削と墳頂部の平坦面に主眼がおかれている。

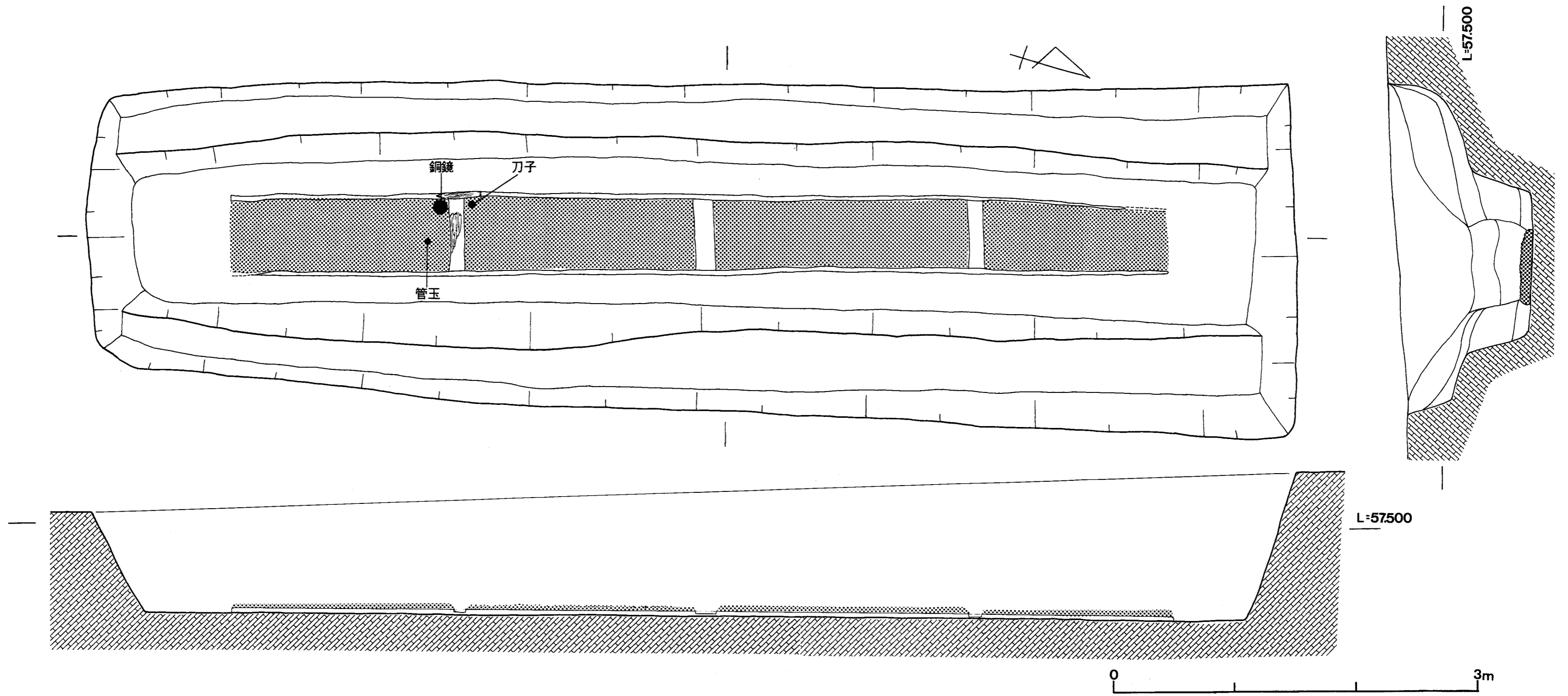
墳頂部には、径17m前後の平坦面を作り、中央に主体部が1基設けられている。主体部は、上面で全長9.9m・北端幅約2.9m・南端幅約2.2m、検出面からの深さ約1.2mを測る巨大なもので、2段墓壇である。2段目は長辺に沿って設けられている。掘形の幅は約1.4mで、平行に掘られていた。2段目から墓壇底までの深さは約60cmである。墓壇底はほぼ水平に造られていた。

墓壇断面をみてみよう(第163図)。これによると、第13・12層が棺側板に対する裏込めであろう。第11層で整えて棺蓋をそえたのであろう。二段目の掘形は、棺側板の深さに対応していることがわかる。

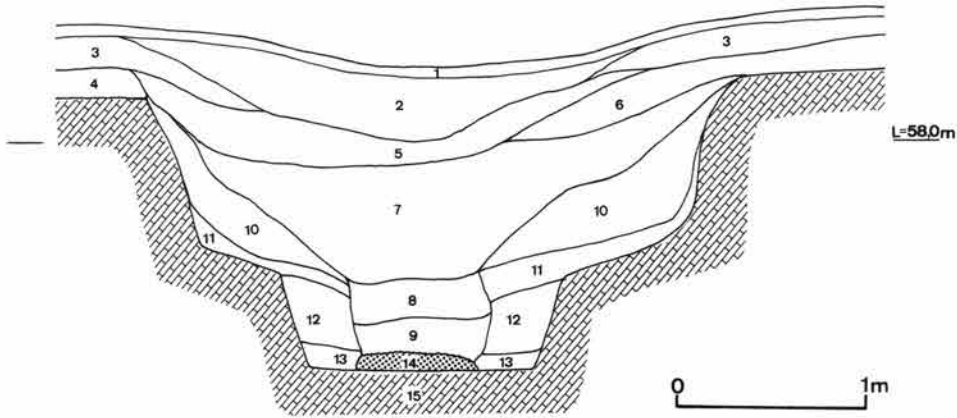
墓壇底において、礫床と木棺痕跡を検出した。礫床は墓壇中央にあり、検出当初は隅丸の長方形を呈し、木棺痕跡を覆っていた。精査を行った結果、木棺が腐蝕した後、棺内から礫がこぼれだしたようすが観察された。これをはずしたところ、地山直上で土壌化した木棺痕跡を確認することができた。木棺の痕跡は灰色を呈し、黄色粘質土の地山上に明瞭に痕跡をとどめていた。

木棺は、2枚の側板と2枚の木口板、1枚の仕切り板からなる。側板は長さ約7.7m、厚さはわずかに残っていた木質から3cm前後の板材と推定される。東西両側板ともに継目の跡を残していない。複数の板で作られたとする。縦に継いだのであろうが、1枚板である可能性もある。

木口板についてみると、南木口板は側板の端から約175cm、北木口板は約150cm内側にはいったところに設けられている。木口板は、長さ約58cm前後・厚さ12cm前後の板で作られている。両木口板で挟まれた空間が棺内である。棺内のほぼ中央に仕切り板とみられる痕跡があり、これによって棺内が2分割されている。この板は厚さ17cmである。木口板、仕切り板はいずれも側板の内側に木口面をあて、据えられている。これらは、棺底におかれた粘質土上面で検出しており、側板より3cm程度高い位置で検出した。



第162図 溝谷2号墳主体部実測図(スクリーントーンは礫)



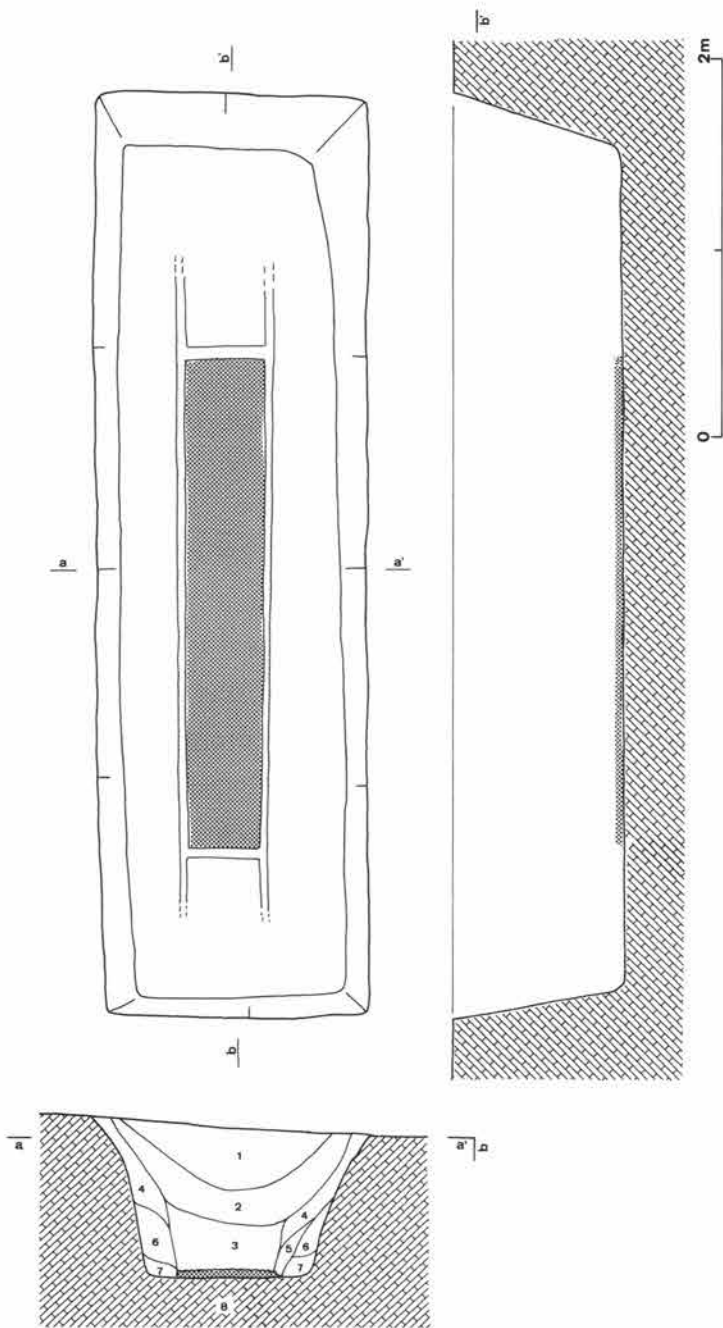
第163図 2号墳主体部埋土断面図(南から)

- |             |            |             |           |           |
|-------------|------------|-------------|-----------|-----------|
| 1. 腐植土      | 2. 暗茶褐色土   | 3. 暗黄褐色土    | 4. 赤褐色粘質土 | 5. 茶褐色土   |
| 6. 赤褐色土     | 7. 暗褐色土    | 8. 褐色粘質土    | 9. 暗褐色粘質土 | 10. 暗赤褐色土 |
| 11. 明赤褐色粘質土 | 12. 赤褐色粘質土 | 13. 淡黄褐色粘質土 |           |           |

以下、仕切り板で分割された棺内空間を便宜的に、南側を第1区、北側を第2区と呼称して説明する。

側板で挟まれたスペースには、厚さ3cmほどの粘質土がおかれており、そのうえに径5mm～1cmの円礫が敷かれていた。礫は、棺外である木口部分にもみられたが、棺内に顕著であり、第1区では5cm前後の厚さを有していた。第2区では礫とともに粘質土が混ざった状態であった。第1区では、礫に混じって朱がみられ、断片的ながら第1区全体に及んでいることを確認した。棺内出土遺物は、第1区南西隅で鉄製刀子1点が出土したのみである。その他、南木口に接した場所で銅鏡1面、管玉2点が出土した。土器類は出土していない。

**3号墳** 3号墳は、2号墳の東側に舌状に張り出す標高約55mの尾根の基部に位置する。3号墳の墳丘は、この尾根を削って10㎡ほどの平坦面をこしらえたものであり、明確な墳丘を持たない。埋葬施設は、平坦面のほぼ中央に位置し、北西を主軸として掘り込まれていた。墓壇は素掘りであり、全長約4.9m・幅1.4m、深さは約80cmである。墓壇の床面は平坦に造られ、木棺痕跡と礫床があった。礫床は、径5mm～1cmほどの円礫からなり、厚さは3cmほどである。地山と同じ黄色粘質土と混在した状況であり、2号墳ほどしっかりしたものではない。礫床は、全長約2.6m・幅約40cmの長方形を呈しており、木棺痕跡の内側に施されている。木棺痕跡は、礫に覆われた状態で地山直上で検出した。木質が土壌化して土色変化していた部分と、圧痕として遺存していた部分をつないで図のように復原した(第162図)。木棺は、側板が3.4m以上、木口板は40cmほどの規模であろう。側板が長



第164図 溝谷3号墳主体部実測図(スクリーントーンは礫)

く、木口板が側板の内側にとりつくタイプである。礫床の礫が木棺痕跡を一部覆っていたこと、礫がほぼ木棺内におさまることなどから、この礫は棺底に敷かれたものであることがわかる。したがって、この木棺は床板を持たない組合式木棺と推定される。

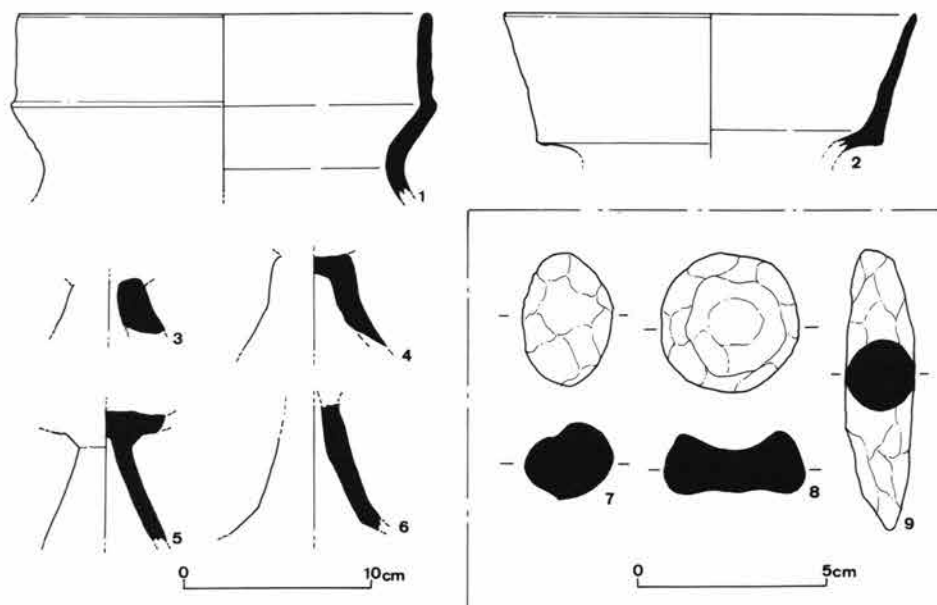
埋土の断面をみると、第5～7層が側板を自立させるための裏込めであろう。その後、天井を造り、第4層、第3層、第2層の順に埋めていったものと考えられる。

3号墳は、主体部埋土上面で土師器細片が出土したが、磨滅しており詳細は明らかでない。側板の長い組合式木棺であって礫床を有しているなど、棺構造が2号墳に共通する点、主軸が2号墳主体部と平行して作られている点、位置関係などから、2号墳築造後、それほど遠くない時期に築造されたものと考えられる。

### 3. 出土遺物

1号墳墳丘と2号墳主体部から遺物が出土している。3号墳主体部の埋土上面で壺体部とみられる土師器碎片を確認しているが、磨滅した細片であるので器形・帰属時期など詳細は不明である。1号墳と2号墳出土遺物について報告する。

1号墳出土遺物(第165図1～9) 墳丘上で出土した遺物である。墳丘北端から北斜面にかけて分布していたもので、表土直下で検出した。土師器壺体部破片、土師器高杯、土製模造品などが出土している。3～6は高杯脚部で、いずれも脚柱部のみが遺存する。6は、脚端が大きく開く形式のものである。7・8・9は、土製模造品である。7は楕円状、

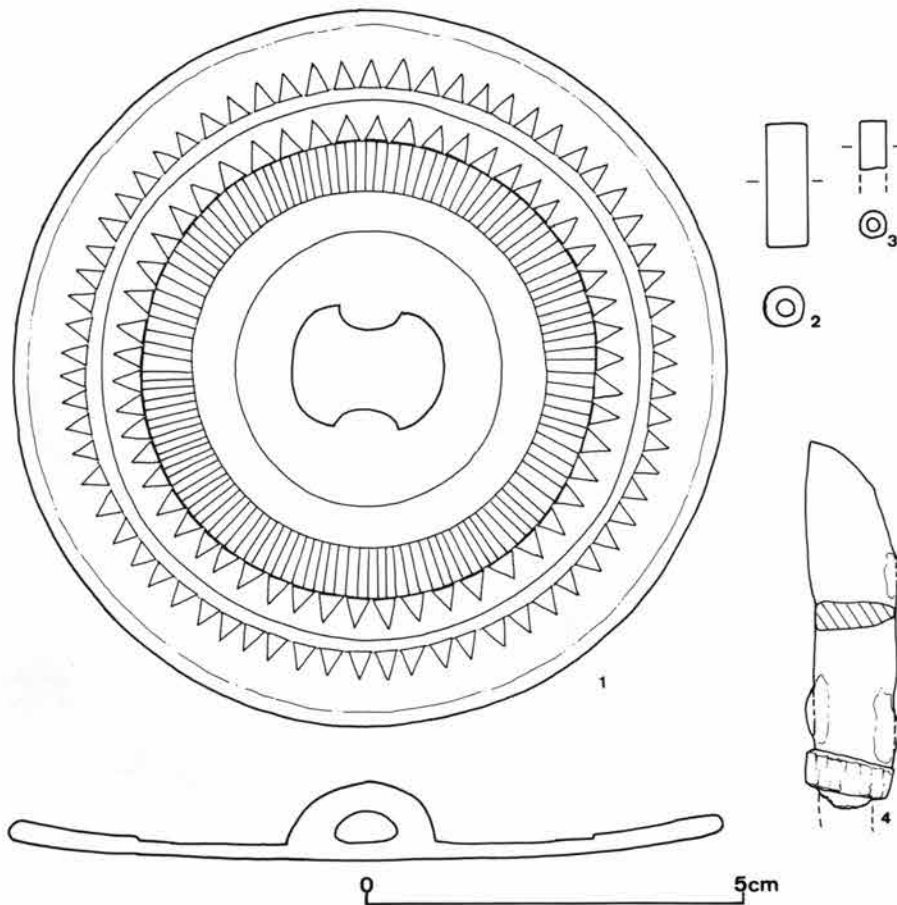


第165図 溝谷1号墳出土遺物(1・2は墳丘北裾、3～9は墳丘上)

8は円盤状、9は棒状を呈するものである。7は、長さ1.7cm・厚さ0.9cmである。楕円球状を呈している。7は、中央を凹ませた円盤である。径約1.8cmである。9は、長さ約3.8cmを測る棒で、中央は断面円形に、両端はしだいに細くなっておわる。これらと同様の形状を呈する模造品は、加悦町蛭子山古墳、作山1号墳に出土例がある。

1・2は、墳丘斜面に器体下半を埋めて置かれていたもので、供献土器と考えられる。体部下半は、細片となっていたが比較的よく残っていた。頸部を欠く。口縁部のみを図示した。1は、第158図P-2である。口縁部はいったん開いたのち直立する。端部はまるく作られている。2は、第158図P-1である。大きく直線的に開く口縁部をもつ。底部はいずれも球形である。体部上半から、頸部の形状は不明である。

2号墳出土遺物(第166図1~4) 銅鏡1面、鉄製刀子1点、碧玉製管玉2点が出土している。



第166図 溝谷2号墳主体部出土遺物

銅鏡(1) 径約9.4cmを測る。鈕の長さ約3cm・高さ約1.3cmである。平縁であり、外区文様として鋸歯文が施されている。内区と外区の間には櫛歯文帯がめぐる。内区の文様は、錆と腐蝕のため明らかでない。

鉄製刀子(4) 唯一の棺内出土遺物である。茎が錆びて欠損している。残存長4.9cm・幅1.1cmを測る。関の部分に木質が残っている。

管玉(2・3) 淡緑色の硬質の碧玉製である。2は、長さ1.6cm・径5mm・孔径2mmである。3は、折損していた。径1.5mm・孔径1.5mmを測る。

#### 4. 調査の成果と問題点

今回の発掘調査では、溝谷1～3号墳の3基の古墳を調査した。うち、1基(1号墳)については墳丘の部分的調査であったが、2基については全面的に調査を行った。成果と問題点について箇条書き的に記す。

①今回の調査地点は、城跡として周知されていたが、調査の結果、3基からなる古墳群であることが判明した。城跡については、その痕跡は確認できなかった。

②1号墳は、墳丘の調査から一辺15m以上の方墳であることを確認した。土製模造品や供献土器とみられる壺の形状から、古墳築造時期は前期末と推定される。

③2号墳は、直径約28mの円墳であり、長さ約10m・幅約3mの大規模な主体部を有する木棺直葬墳であることを確認した。棺は、長さ約8mの組合式木棺で、木口板の位置と仕切り板の存在、棺底板が用いられていないこと、棺内床面に小礫を敷きつめている点などがこの古墳を特徴づけている。遺物が少ないために、築造時期を明確に知ることができないのが残念である。

類似する棺形態を有する古墳をあげてみると、兵庫県和田山町筒江中山23号墳<sup>(注99)</sup>、鳥根県鹿島町奥才5号墳・11号墳・12号墳<sup>(注100)</sup>、京都府与謝郡岩滝町日ノ内古墳第1主体<sup>(注101)</sup>、京都府中郡大宮町左坂C21号墳<sup>(注102)</sup>などがあり、4世紀後半頃から5世紀前半頃の築造年代が与えられている。礫床を有する木棺直葬墳の類例を京都府内においてみると、岩滝町日ノ内古墳1・2・3号墳、福知山市ヌクモ2号墳<sup>(注103)</sup>、綾部市奥大石1号墳<sup>(注104)</sup>、大宮町左坂C21号墳、木津町西山古墳<sup>(注105)</sup>などがある。5世紀後半に位置付けられる西山古墳を除くと、いずれも5世紀初頭から前半に位置づけられており、この古墳もこの時期を大きく逸脱するものではない。

この特徴的な棺形態の分布範囲は、現在のところ、上述の地域に限られていることから、日本海側の地域における特徴的な埋葬形態として理解されている。

④3号墳は丘陵稜線をわずかに加工して墳丘とするものである。棺床面には2号墳同様、



の小礫による礫床がみられた。2号墳と棺主軸を同じくしており、2号墳に継続して営まれたものであろう。

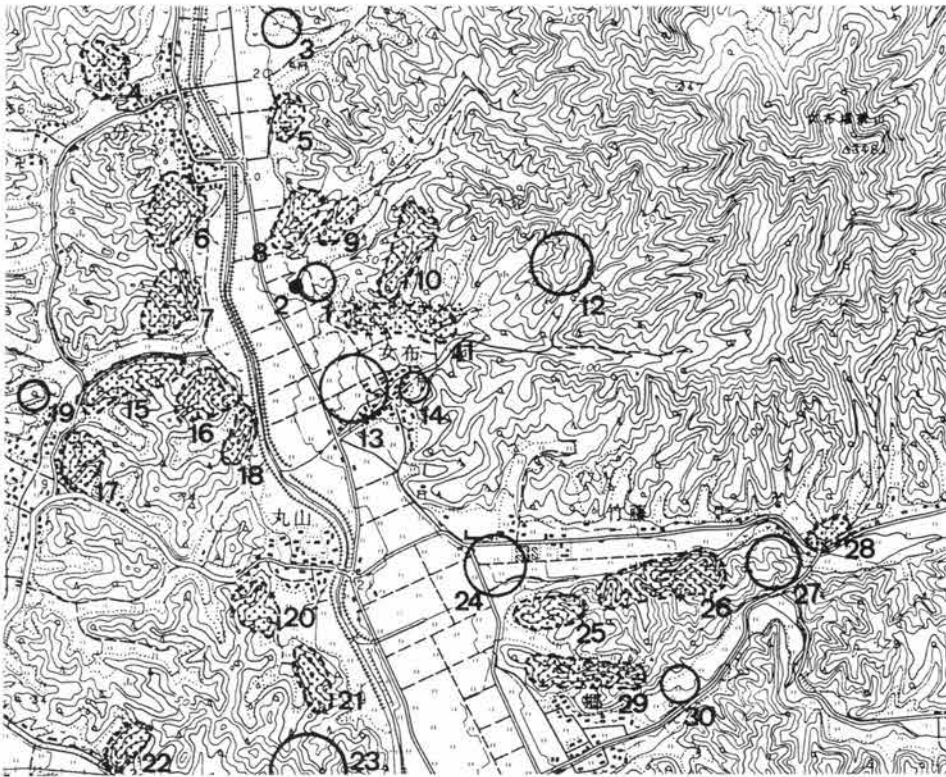
(田代 弘)

## (6) 女 布 北 遺 跡

### 1. はじめに

女布北遺跡は、京都府熊野郡久美浜町字女布に所在する。女布北遺跡は、これまで正式な発掘調査は行われていない。このため、平成4・5年度に、京都府教育委員会によって試掘調査が実施された。その結果、弥生時代や平安時代の遺物の出土をみたため、当調査研究センターが発掘調査を実施することになった。以下、その調査成果の概要を報告する。

なお、今回の調査は、丹後国営農地開発事業の女布団地造成工事に先立ち実施した。



第167図 調査地周辺主要遺跡分布図

- |                |                  |                 |            |               |
|----------------|------------------|-----------------|------------|---------------|
| 1. 女布北遺跡       | 2. 鶏塚古墳          | 3. 椎ノ坪遺跡        | 4. 上福寺古墳群  | 5. 南谷古墳群(A支群) |
| 6. 大谷古墳群       | 7. 谷垣古墳群         | 8. 南谷古墳群(B支群)   | 9. 塚ヶ谷古墳群  | 10. 北谷古墳群     |
| 11. 薬師古墳群      | 12. 女布城跡         | 13. 女布遺跡        | 14. 女布神社遺跡 | 15. 谷垣古墳群     |
| 16. サト古墳群(B支群) | 17. マンダラ古墳群(B支群) | 18. サト古墳群(A支群)  | 19. 畑山城跡   |               |
| 20. 堤谷古墳群(B支群) | 21. 堤谷古墳群(A支群)   | 22. 仲間谷古墳群(A支群) |            |               |
| 23. 野中城跡       | 25. 竹藤遺跡         | 25. 卯谷古墳群       | 26. 山部古墳群  | 27. 竹藤城跡      |
| 28. 堀坂神社古墳群    | 29. 家の奥古墳群       | 30. 郷遺跡         |            |               |

## 2. 位置と環境

女布北遺跡が所在する久美浜町は、京都府の西北端に位置する。久美浜町には東から佐濃谷川・川上谷川・久美谷川の3河川があり、いずれも北流して久美浜湾に注ぐ。これら3河川は、狭小な谷底平野を形成するが、このうち比較的発達している佐濃谷川・川上谷川両流域に多くの遺跡が分布する。今回、調査を実施した女布北遺跡は、佐濃谷川中流域の谷底平野を見下ろす河岸段丘上に位置する。

次に、調査地周辺の歴史的環境について略述する。

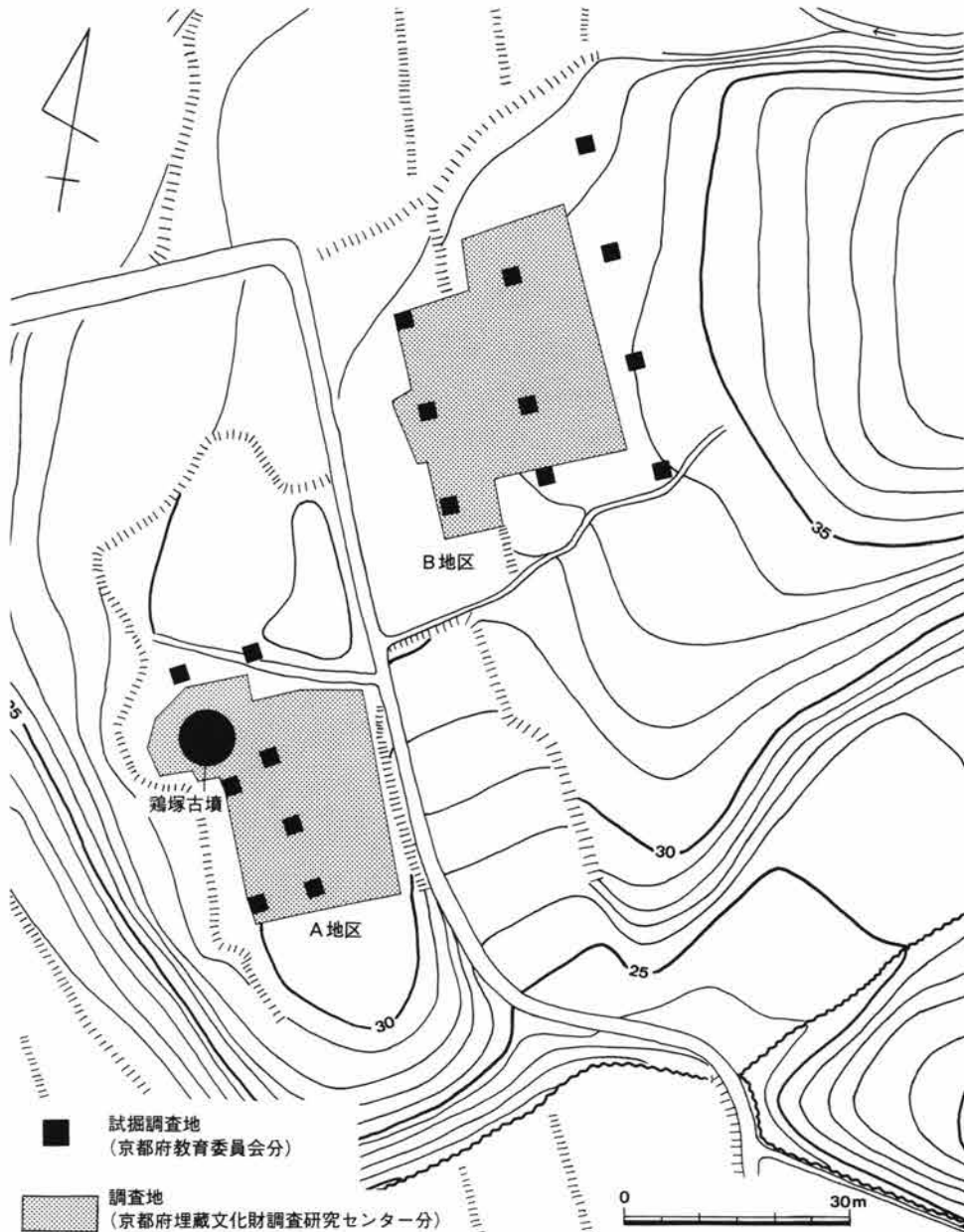
久美浜町における旧石器・縄文時代の遺物は少量であり、詳しいことは不明である。弥生時代になると、まず海浜部を中心に前期の遺跡が成立する。この時期、丹後地域の沿岸部には多くの遺跡が知られるが、これは弥生文化が日本海沿岸ルートで伝播したためと考えられる。また、中期から後期にかけて佐濃谷川・川上谷川流域に沿って遺跡が増加する。弥生時代の遺跡としては、浦明遺跡をはじめ、椎ノ坪遺跡や橋爪遺跡などが知られる。浦明遺跡<sup>(注106)</sup>は、久美浜湾を臨む台地上に立地する。弥生時代中期初頭の溝状遺構から大量の弥生土器が出土したほか、古墳時代の遺構・遺物が見つかる。椎ノ坪遺跡<sup>(注107)</sup>は、女布北遺跡の北方約0.8kmに位置する。弥生時代後期の土器片にタタキ調整を施したものが多量に含まれ、畿内の関係が注目される遺跡であるが、報告書が未刊のため詳しいことは不明である。橋爪遺跡<sup>(注108)</sup>は、川上谷川中流域東岸の河岸段丘上に位置する。過去4回の調査で、弥生時代中期後半から古墳時代前期の遺構・遺物が大量に見つかっており、大規模な集落が存在したことを示す。特に、第2次調査で検出された弥生土器群は、丹後地域の土器編年の基準資料とされるものである。

古墳時代になると、川上谷川流域を中心に古墳が築造される。久美浜町内で知られている前方後円墳は、いずれもこの地域に所在する。一方、調査地周辺には、木棺を直葬する古墳が丘陵上に多数営まれる。中でも、佐濃谷川を挟んで南方に位置する堤谷古墳群<sup>(注109)</sup>は、現在24基が確認されており、古墳時代前期後半から後期初頭にかけて連綿と営まれたことが明らかにされている。このほかにも、薬師古墳群・谷垣古墳群・南谷古墳群・北谷古墳群などが営まれる。後期になると、丹後地域にも横穴式石室が導入される。久美浜町内では金銅装双龍環頭大刀をはじめとする豊富な遺物出土した湯舟坂2号墳<sup>(注110)</sup>は、特に有名である。その他、平野古墳・塚ノナル古墳・下村岡古墳・親王の森古墳などがある。後2者や呑谷古墳などは佐濃谷川流域に分布する横穴式石室墳であるが、いずれも単独で所在し、今回調査の鶏塚古墳に類似する。また、長柄横穴群・下西谷横穴群・白川横穴群など、横穴群も比較的分布する。

堤谷古墳群<sup>(注111)</sup>の近在には堤谷窯跡群がある。同窯跡は、古墳時代末から奈良時代前半にか

けて須恵器のほか、瓦類の焼成を行った窯跡である。佐濃谷川流域では奈良・平安時代に属する遺跡はあまり知られていない。

中世以降では、先述の堤谷古墳群に隣接する豊谷遺跡<sup>(#112)</sup>で筒形容器の埋納土坑群が検出されている。また、銅製の経筒が出土した遺跡も多くあり、山の神1号経塚、栃谷経塚、西明寺経塚などが代表的である。



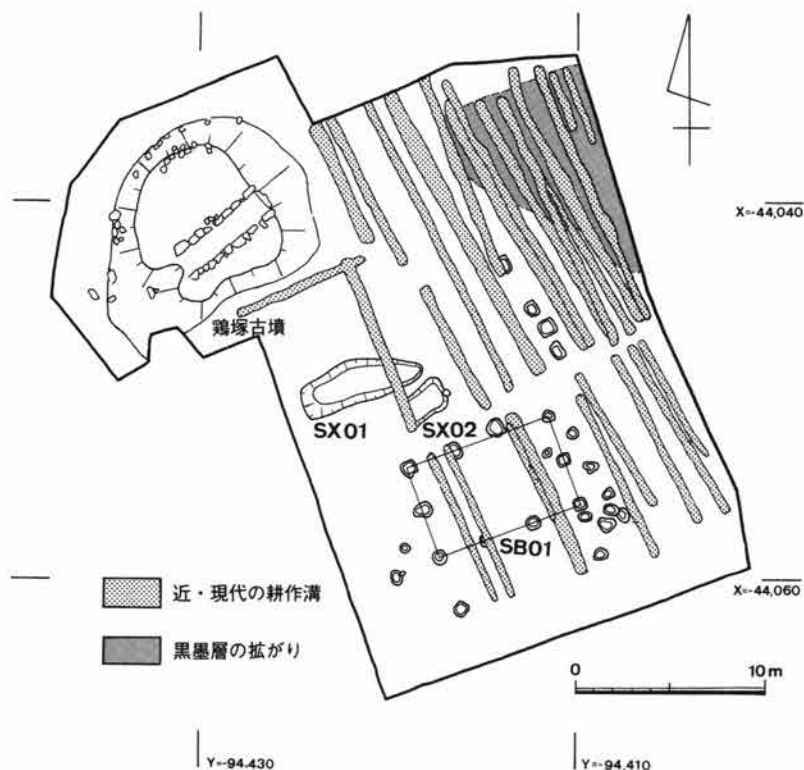
第168図 調査地周辺地形及び調査区配置図

### 3. 調査経過

先述のように、女布北遺跡は、過去に発掘調査が行われたことはなかったため、京都府教育委員会により、平成4年度に立会調査が、翌平成5年度には試掘調査が実施され、河岸段丘上の平坦地から弥生時代や平安時代の遺物が出土した。また、調査地内で横穴式石室を内部主体とする古墳1基が確認された。この古墳は、『京都府遺跡地図』に鶏塚古墳として記載されているもので、調査地内に所在することが明らかになった。

上記の立会・試掘調査の結果を受けて、当調査研究センターでは平成5年8月19日から、約1,500㎡を対象として面的な発掘調査を行うこととした。現地調査は、調査地内に作付けされていた農作物の関係上、鶏塚古墳の調査から開始した。墳丘表土を人力で掘削後、石室内の埋土を除去した。石室内は、過去に大規模な盗掘を受けているため、副葬品の供献状態などを知ることはできなかった。

農作物の収穫後、女布北遺跡の調査を開始した。調査対象地内に工事用道路をはさんで、2か所の調査区(A地区・B地区)を設定し、重機による表土(耕作土)の掘削後、人力による精査を行った。表土は、約10~20cmしかなく、それを除去すると黒墨層の堆積部分を除き、すぐ地山となる。調査区内で検出した遺構は、いずれも地山上での検出である。

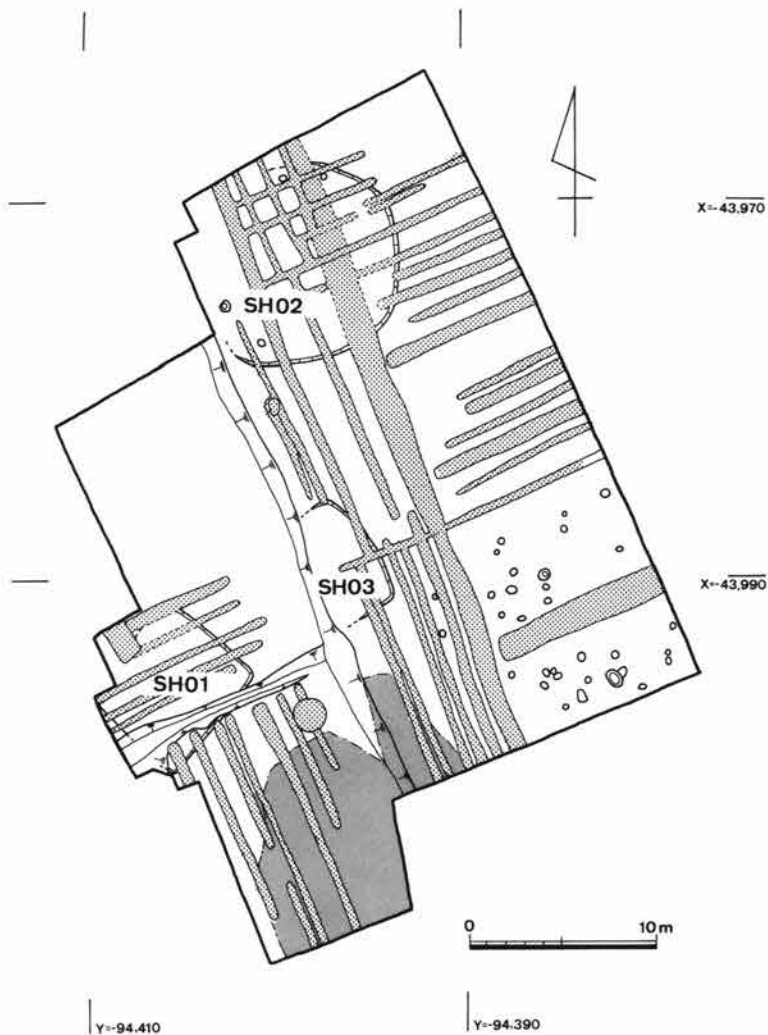


第169図 A地区遺構配置図

A地区は、鶏塚古墳が所在する調査区で、平安時代の土器溜まり1基、時期不明の掘立柱建物跡1棟、ピット多数を検出した。また、調査地の北東部では、縄文時代早期や弥生時代中期の遺物を包含する黒墨層を検出した(第169図)。

B地区では、弥生時代後期末または古墳時代前期初めの竪穴式住居跡3基を検出した。また、調査区南端でA地区同様の黒墨層を検出した(第170図)。

現地作業が最終段階を迎えつつある平成5年12月9日に現地説明会を実施し、その後図面などを完成し、平成5年12月22日に現地から器財などを撤収し、調査を終了した。



第170図 B地区遺構配置図

4. 調査概要

A. 縄文時代早期・弥生時代中～後期

調査地内の黒墨層から縄文時代早期、弥生時代中～後期の遺物が出土した。黒墨層は、A地区北端とB地区南端にみられ、調査地周辺の地形からみると、調査地の所在する河岸段丘に対して南方から入り込む小さな谷状地形に堆積していると考えられる。黒墨層は、堆積の厚いところで約1mみられたが、ほぼ30～40cmの厚さがあった。

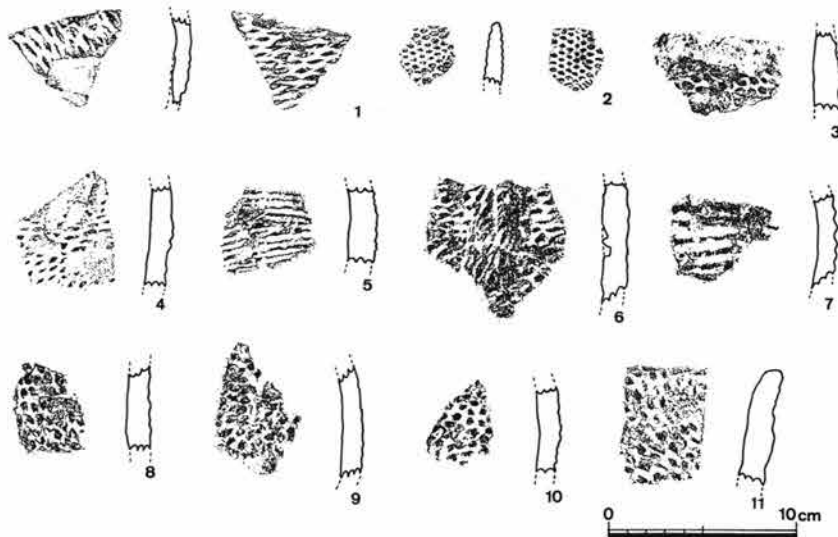
黒墨層は、2次的な堆積と考えられ、その一部を断ち割って下層の遺構の有無を確認したが、遺構は検出されなかった。

以下、出土した遺物について説明する。

**縄文時代早期の遺物(第171図)** 出土した土器は、縄文時代早期の押型文土器に限られる。いずれも破片化しており、器形のわかるものは皆無であった。

A・B両調査区で土器片約20点が出土した。破片が多く、器形・文様構成がわかる資料はない。施文原体は、楕円文が大半を占め、細長いネガティブ文が少量みられる。1～4・6・8～11は、いずれも楕円文が施文されている。5・7は、細長いネガティブ文を施文する。土器片の多くは、外面のみに施文されているが、1・2は、表裏に押型文が施文されている。

出土した土器片の大半は、体部の細片のため、押型文の施文方向を明らかにすることはできない。2・11は、口縁部の破片である。どちらも、縦か斜め方向の施文と思われる。11は、口縁端部付近まで施文しており、端部はナデによって仕上げる。

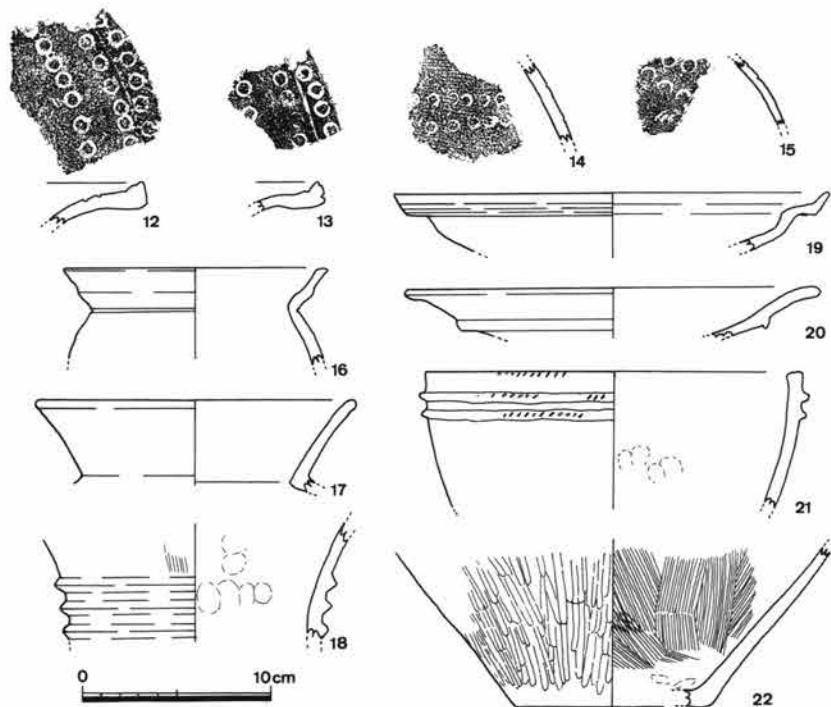


第171図 黒墨層出土遺物実測図(1)

弥生時代中～後期の遺物(第172図) 壺・甕・高杯・鉢などがある。出土点数は多いが、破片が多く、完形個体になるものはない。ここでは口縁部など、形態のわかるものを中心に図示した。12・13は、壺の口縁部の破片である。口縁端部を上方に拡張し、面をつくる。口縁端面と内面に竹管文を施す。同一個体であるかどうか不明である。14・15は、壺体部の破片である。外面に竹管文を施す。16は、いわゆる複合口縁を呈する甕である(甕A)。口縁部外面に擬凹線を施さないことから、新しい時期のものであろう。17は、直線的のびる口縁を有する。壺とも甕とも決めがたい。18は、壺の頸部と思われる。外面に、3条の断面三角形の貼付凸帯を有する。

19は、複合口縁を呈する高杯である。外面に3状の擬凹線を施す。20は、有段口縁を呈する壺、または高杯の口縁と推定される。21は、外面に2条の貼付凸帯を有する鉢である。口縁端部はわずかに内傾する面を有する。また、凸帯と口縁端部に刻み目を施す。22は、外面磨き調整、内面ハケ調整を施す平底の壺である。

以上の土器のうち、12～15・18・21・22は、弥生時代中期に位置づけられる土器である。特に、12～15・18の壺は、久美浜町に所在する橋爪遺跡において類似する資料が存在し、ほぼ時期を決定することが可能である。また、他の土器は、後期以降の時期に位置づけられ、16は、畿内庄内式併行期まで下る可能性がある。



第172図 黒墨層出土遺物実測図(2)



B. 弥生時代後期末～古墳時代前期

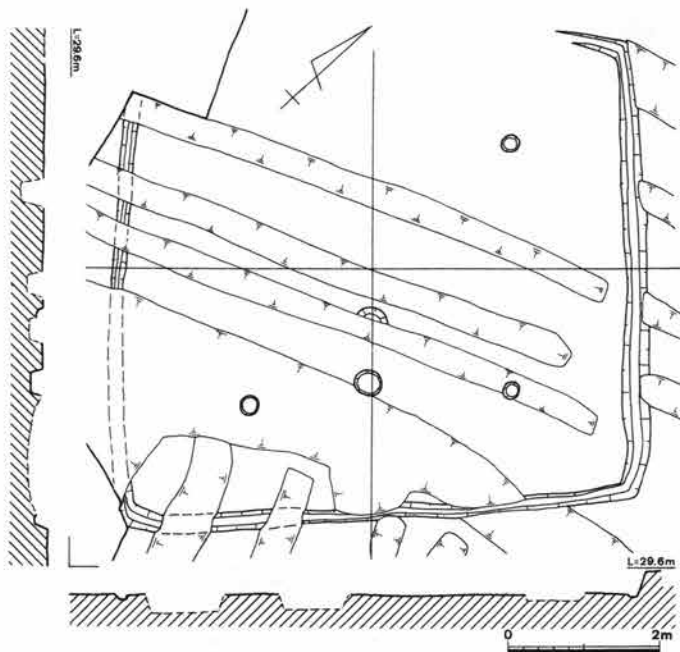
この時期の遺構としては、B地区で3基の竪穴式住居跡(SH01～03)を検出した。いずれの住居跡も地形の関係上、東側の残りがよく、段丘の先端に近い西側では、遺存状況がよくなかった。遺物は、SH01・02を中心に弥生時代後期末または古墳時代前期初頭の土器が、整理箱にして5箱ほど出土している。遺物の大半は細片化しており、完形個体に復原できるものは少なかった。

なお、A地区では、当該期の遺構・遺物は皆無であった。

①竪穴式住居跡SH01

**遺構の概要(第173図)** SH01は、B地区の東辺に位置する一辺6.0mの方形を呈する住居跡である。SH01は最近の耕作に伴う溝や境界溝によって攪乱されているが、遺構の残存状況は比較的良好であった。住居跡の埋土は、遺存状態の良好であった東側で3層確認することができたが、削平の著しい西側では、最上層の黒色粘質土層のみであった。したがって、東側から遺構内へ流土が堆積し、最終的に黒色粘質土層によって埋められたものと思われる。

東辺側壁が約30cm残存するのに対して、西辺側壁の残存高はわずか5cmを測るにすぎなかった。周壁溝は、全周するものと思われるが、削平の著しい西側のコーナー部分は確認できなかった。主柱穴は、確認した限りでは4本あるものの、南東側の柱列の中央部でも



第173図 竪穴式住居跡SH01実測図

柱穴と思われるピットを確認しており、もともと6本であった可能性がある。ただし、北西側の柱列では、ピットを確認していない。また、床面中央には炉跡と思われるピットを確認したが、耕作溝のために半壊の状態であった。

主軸はN-43°-Eを測るが、これは尾根の主軸に規制されたものと思われる。

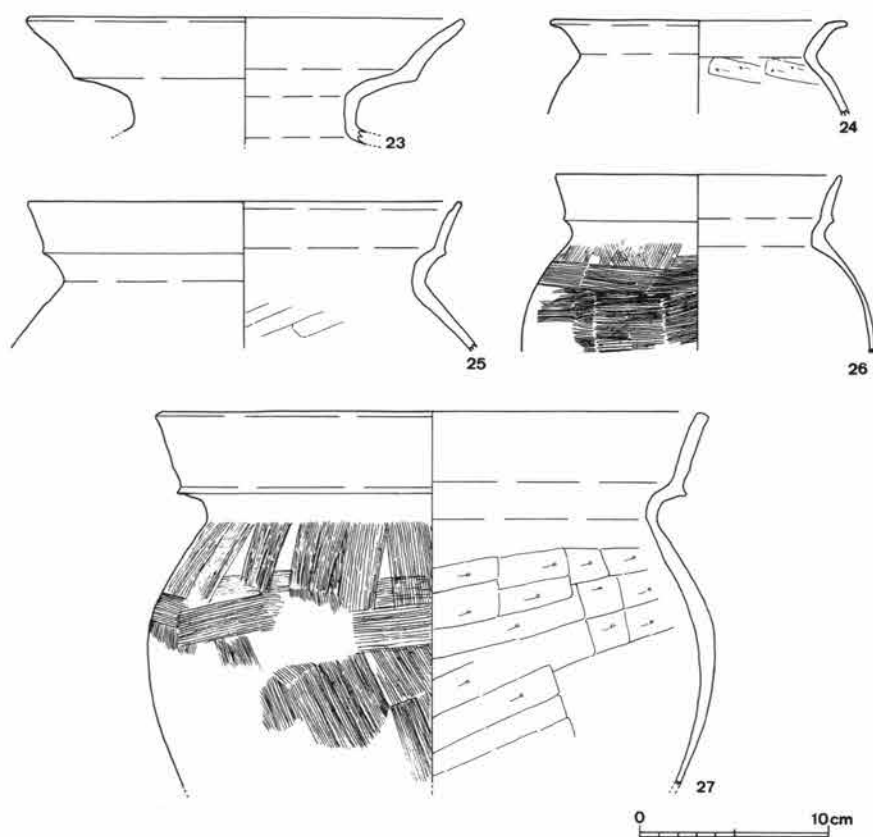
**遺物の出土状況** S H01からの出土遺物は、S H01の攪乱されている部分を除いて、住居跡のほぼ全面から出土している。その多くは、最上層の中からの出土である。最上層は、先にも触れたように、住居跡の最終埋土であるから、住居廃絶時の時期を直ちに示すものではない。一方、床面直上の遺物も少量が出土しているものの、器形がわかるものはわずかである。

S H01出土遺物の大半は、住居跡廃絶後に若干の時間幅を持って、住居後内に堆積したものであろう。

**出土遺物(第174図)** すでに述べたように、多くの遺物は細片化されており、器形のわかるものはそれほど多くない。S H01出土遺物には、図示した壺・甕などがある。

23は、二重口縁壺である。直線的に立ち上がる頸部をもち、外反する口縁を有する。

24～27は、甕である。甕は、口縁部の形態から2種類に分けることができる。甕Bは、頸部が「く」の字状に屈曲し、そのまま外反する口縁部をもつ甕である。甕Bには24がある。24は、口縁端部をやや水平方向へ開いたような形状をしている。甕Cは、頸部が「く」の字



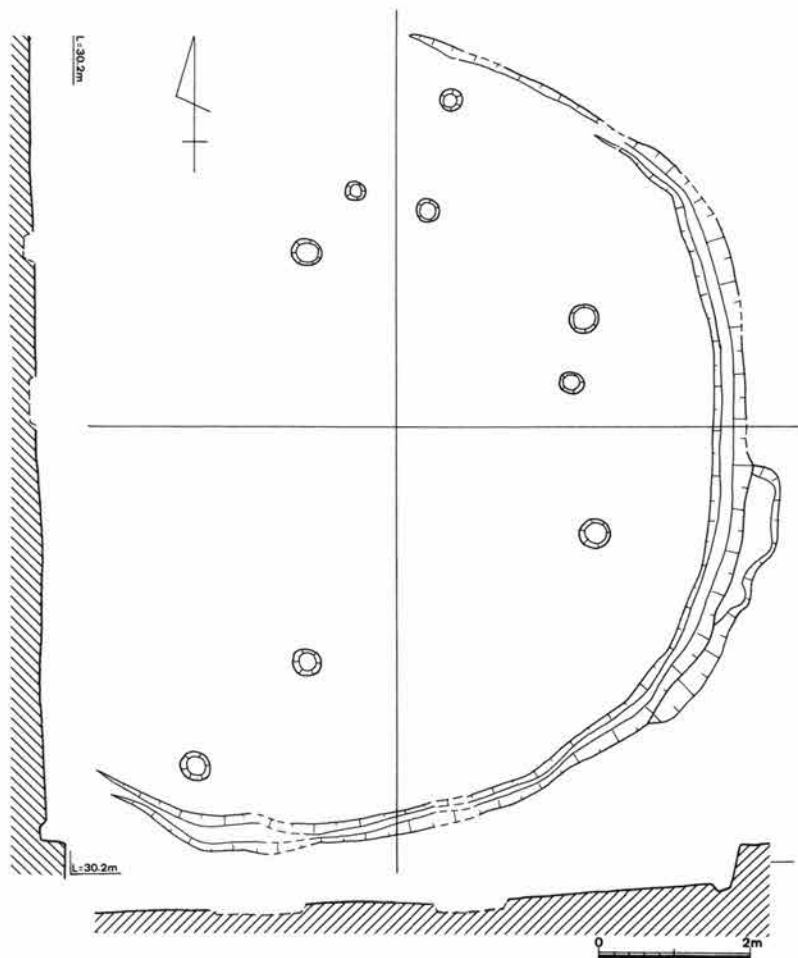
第174図 竪穴式住居跡S H01出土遺物実測図

状を呈し、外反気味、もしくは直線的にのびる口縁部をもつ甕である。甕Cには25～27がある。25・26は、やや外反気味の口縁部に、丸く納めた口縁端部をもつ。稜は、27ほど鋭くないが、しっかりした稜である。27は、口径28.4cmの大型の甕Cである。口縁部は、直線的にのび、端部は面をなす。

なお、26は床面出土、他は第1層出土の遺物である。

## ② 竪穴式住居跡 S H02

遺構の概要(第175図) S H02は、B地区の北端に位置する推定径約11mの円形を呈する住居跡である。S H01同様、最近の耕作溝によってかなり攪乱されている。遺構の埋土は、黒色粘質土1層のみであった。ただし、遺物の出土状況などからみて、黒色粘質土が住居跡内に徐々に流入して堆積した可能性は高い。S H01同様、西側の削平が著しく、若



第175図 竪穴式住居跡 S H02実測図

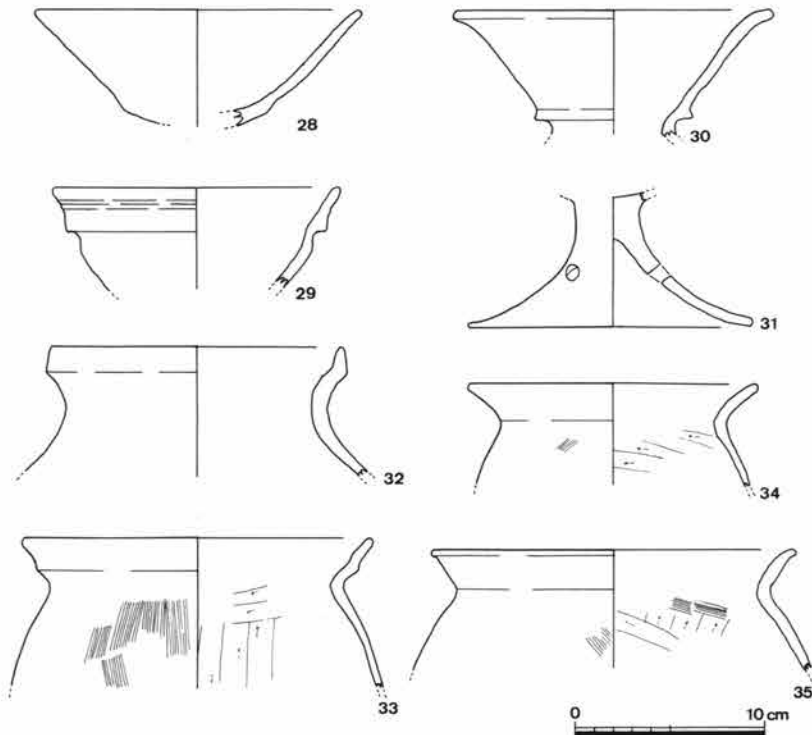
干のピットを除いて周壁溝は確認できない。この住居跡も東側壁高の残りは非常によく、約50cmを測る。

住居跡床面では、周壁溝の内側でピットを検出した。周壁に沿うように掘削されていた。ピットは、住居跡の屋根の構造物を支えるものであったと考えられる。主柱穴と思われるものは、確認できなかった。床面の標高は、約29.8mを測る。

**遺物の出土状況** 遺物は、住居跡の埋土である黒色粘質土中から多数が出土したが、その多くは細片化したものであり、ある程度器形などが明らかなものは、床面直上あるいは床面から若干遊離した位置で出土した。出土した遺物のうち、10点余が周壁溝から出土しており、住居跡の廃絶時の遺物と思われる。

遺物は、住居跡のほぼ全面から出土したが、細片化したものが多く、堆積土の厚さにもかかわらず分層が不可能であったため、出土土器の先後関係を明らかにし得なかった。

**出土遺物(第176図)** S H02から出土した遺物には、壺・甕・高杯・鉢・器台などがある。28は、高杯の杯部である。磨滅のため器面の調整などを知ることはできない。29は、高杯の杯部または鉢になると思われる。口縁部外面に擬凹線を施す。30は、山陰地方によくみられる鼓形器台である。受け部の稜は鋭く、体部の長さは短いと推定される。山陰地



第176図 竪穴式住居跡S H02出土遺物実測図

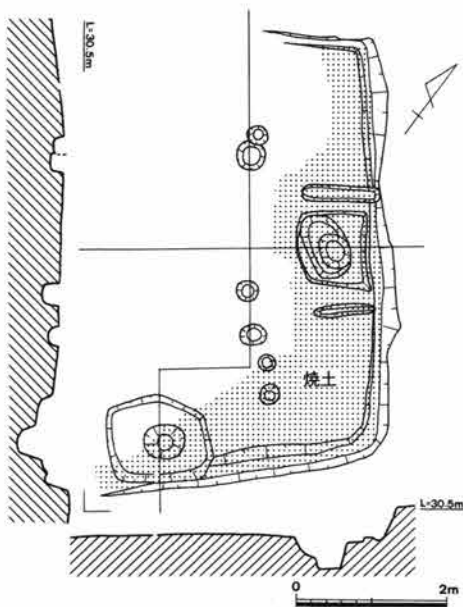
方の編年でも小谷式に位置づけられるものであろう。<sup>(注113)</sup>31は、大きく「ハ」の字状に開く高杯脚部である。3方向に穿孔する。

32は、ゆるやかに外反した後、直立する口縁をもつ壺である。33~35は甕である。33は、複合口縁を呈する甕Aである。口縁部外面に擬凹線を施さない。また、口縁部が外反する。34・35は、口縁部が「く」の字に屈曲する甕Bである。これら3点は、体部外面をハケ、体部内面をケズリで仕上げしており、技法上の特色がみられる。

### ③ 竪穴式住居跡 S H03

**遺構の概要(第177図)** S H03は、S H01の東約6mに位置する住居跡である。S H03は、畑地の造成のためか、西半分を大きく切り取られている。S H03は一度建て替えが行われているらしく、新しい方の住居跡(S H03B)に重なって古い方の住居跡(S H03A)の南辺と東南隅を確認した。S H03Aはかなり浅く、東側周壁高で約10cmを測るにすぎなかった。第177図に示したのは、S H03Bのみである。

S H03Bは、一辺5.5mを測る方形を呈する住居跡である。住居跡の大半は、焼土で覆れていた。この焼土を除去すると、貯蔵穴と思われる大型の土坑を検出した。また、主柱穴を2個確認した。主柱穴間の距離は2.4mを測る。なお、S H03Bの主柱穴は4個からなると推定されるが、残りの2個はすでに削平されて検出されなかった。他の2基の住居跡に比べると遺物が少ない。

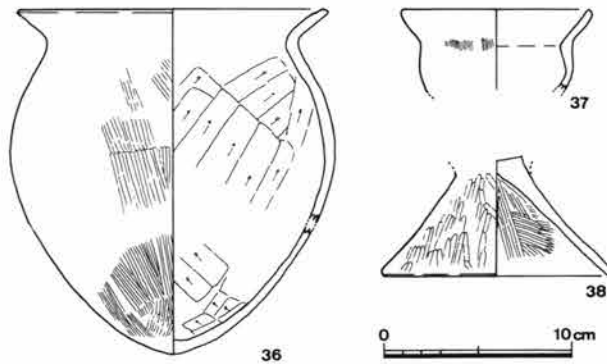


第177図 竪穴式住居跡 S H03B 実測図

**遺物の出土状況** S H03Aの出土遺物は、床面から破片が少量出土したのみで、図示できるものはなかった。S H03Bも出土遺物は少量であった。図示した遺物のうち、37・38は焼土の上から出土している。36は焼土の下、東辺に位置する大型の土坑の脇から出土した。

**出土遺物(第178図)** S H03B出土遺物には、甕・小型鉢・器台(脚部のみ)などがある。36は、口縁部が「く」の字状に屈曲する甕Bである。ほぼ完形に復原できた。口縁端部はわずかに肥厚し、体部は倒卵形を呈する。体部は、畿内地域の庄内甕に類似した形態をとり、注目される。

37は、小型の鉢である。底部は欠損するが、丸底を呈すると考えられる。38は、器台の脚部と思われる。内外面とも精緻なミガキを施す。また、胎土も良好である。



### C. 古墳時代後期

この時期の遺構は、横穴式石室を内部主体とする鶏塚古墳だけである。調査地内ではこれ以外の遺構・遺物は検出されなかった。

#### 鶏塚古墳

墳丘(第179・180図) 墳丘は、南西側が石室の主軸方向にややのびるものの、西から北にかけての墳丘裾が弧を描いており、比較的旧状をとどめていると考えられる。一方、南側と東側は、耕作に伴うと思われる攪乱が著しく、旧状がかなり改変されていると思われる。石室を中心として旧状をとどめている北西部分をもとに復原すると、鶏塚古墳は推定径約12mの円墳であったと思われる。ただし、墳丘裾の標高は、石室を挟んでかなり異なる。

墳丘は、盛り土によって形成されている。墳丘を断ち割って確認したところ、盛り土は3層からなる。また、古墳築造時の地山の高さは、周辺地域の地山とほぼ一致する。石室の開口する西側に向かって墳丘が大きく傾斜するが、これは地山を成形することによって古墳を大きく見せようとしたためとも考えられる。

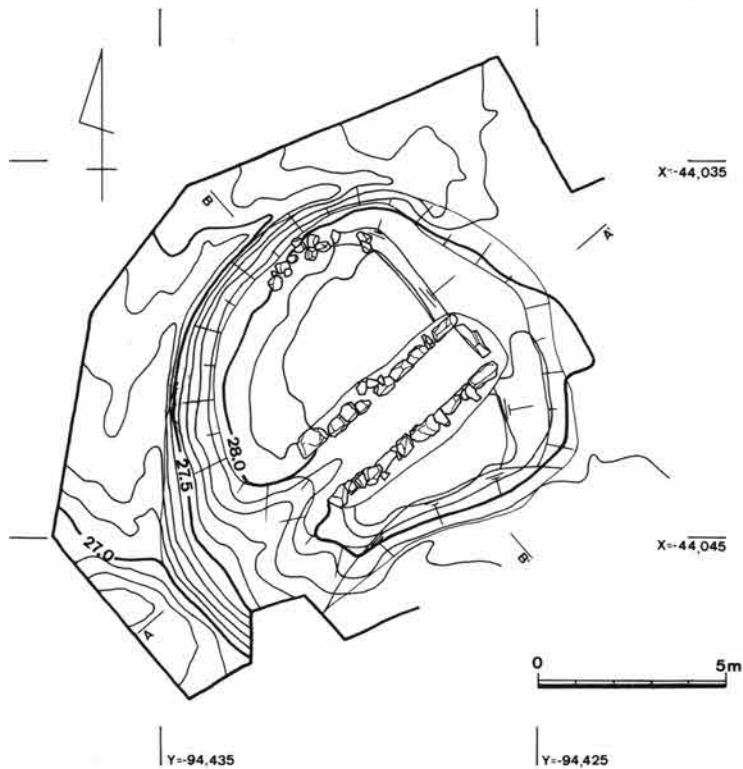
盛り土は3層からなるが、周辺部の地山の土を盛り上げたと思われる。各層とも比較的固く締まっていた。

横穴式石室(第181図) 天井石は、石室内に落ち込んだり、墳丘の脇に据え置かれていたりして、原位置のものはなかった。側壁に使用されていた石材もかなり持ち出されたようである。調査の時点で、1石か2石分しか残存していなかった。また、現在確認できる石室の前端が、石室構築当初のものであるかどうか不明であった。

このような石室の残存状況から、鶏塚古墳の横穴式石室は、残存長5.6mを測る無袖式の横穴式石室と考えられる。また、墳丘の南に人頭大の石が、多数散在していたため、玄室の閉塞は、これを使用して行われていたと推定される。

石室の構築は、盛り土を行った後に、行われたと考えられる。石材をたてるための溝がどの段階で掘削されたかについては、石室周辺部の試掘によって、表土(第1層)・盛り土

第178図 縦穴式住居跡 S H03B 出土遺物実測図



第179図 鶏塚古墳墳丘測量図

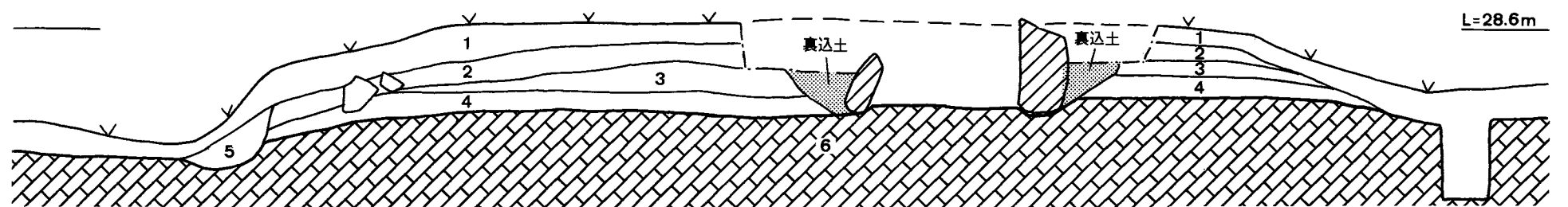
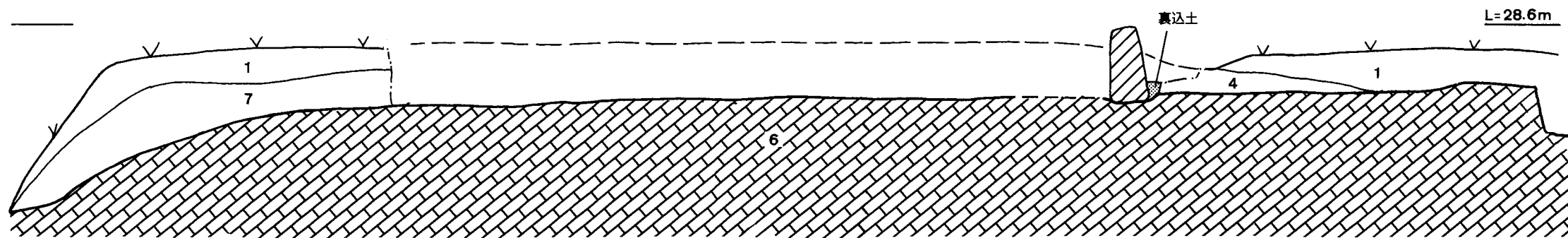
の一部(第2層)の大半が、失われていたが、一部残存していたところで確認した限りでは、第2層から掘削されている状況であった。

以上から古墳及び石室の築造過程を復原すると、地山の成形→盛り土(第4層→第3層→第2層)→石材用の溝の掘削→石室の構築、となるであろう。

**遺物の出土状況** 鶏塚古墳から出土した遺物は、大半が石室内の出土である。しかし、過去の盗掘のために副葬当初の位置をとどめるものは皆無である。出土した遺物は、須恵器・玉類・耳環などである。須恵器は、石室内に破片となっており、その後の接合作業でも完形個体になるものはなく、盗掘がかなり大規模に行われたことがうかがえる。玉類・耳環も同様で、石室の奥壁側を中心に散乱した状態で出土した。

また、墳丘表土や盛り土中からは、盗掘時に掘り出されたと思われる須恵器の細片や縄文時代早期の押型文土器の破片が出土している。

**出土遺物(第182～184図)** 図示した遺物はいずれも石室内から出土したものである。すでに述べたように、大規模な盗掘を受けているため、土器は完形個体が少ない。玉類・耳環は、比較的残りが良好である。

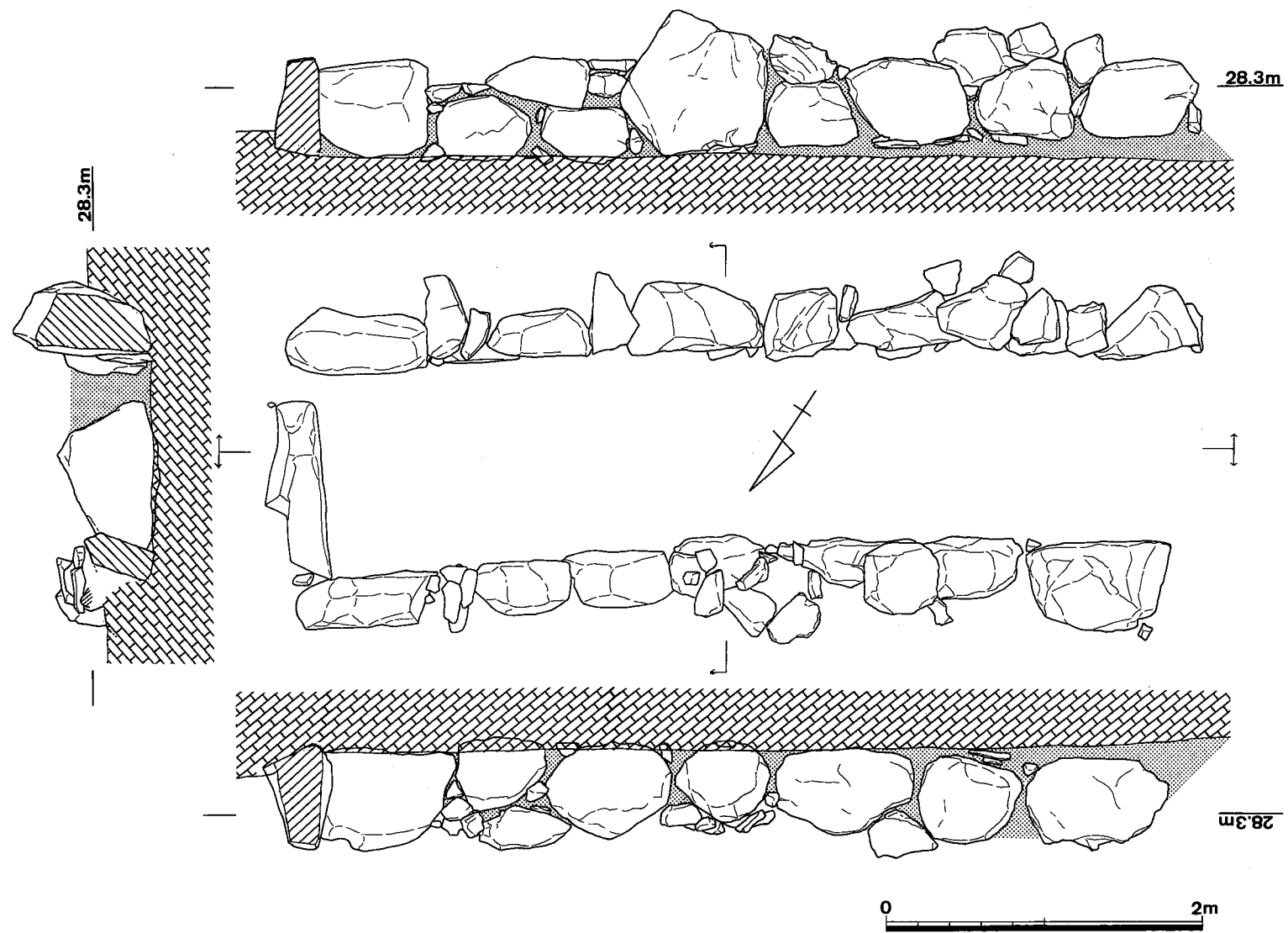


- |                 |                 |              |
|-----------------|-----------------|--------------|
| 1 黒灰色土(表土)      | 4 黄茶色粘質土(墳丘盛り土) | 7 黒灰色粘質土(流土) |
| 2 黒褐色土(墳丘盛り土)   | 5 黒茶色土(境界溝埋土)   |              |
| 3 黄褐色粘質土(墳丘盛り土) | 6 黄褐色粘質土(地山)    |              |



第180図 鶏塚古墳墳丘断面図

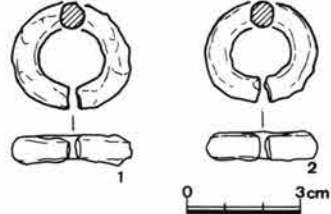




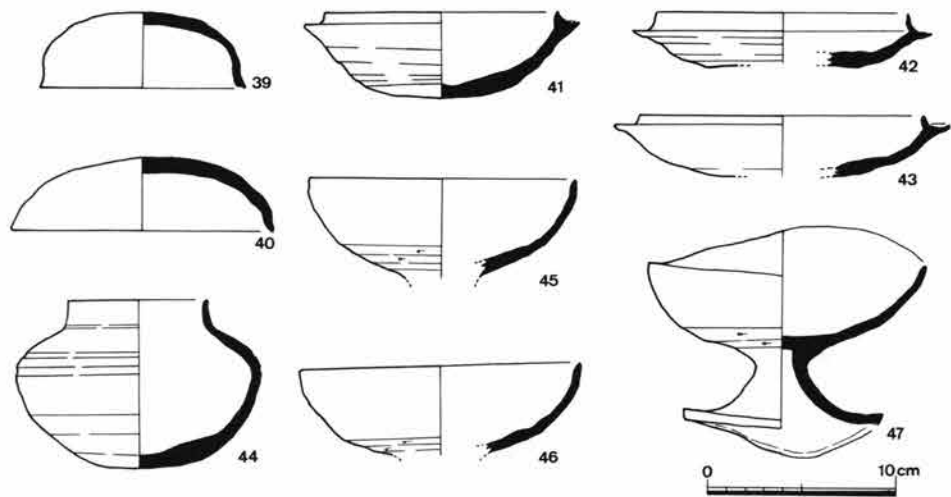
第181図 鶏塚古墳石室実測図

耳環(第182図)は、2個体出土している。両個体とも直径3.1cm・厚さ0.6cmを測るほぼ同形同大の耳環である。1は、錆化が激しい。2は、それほどでもない。2個とも銀環と思われる。

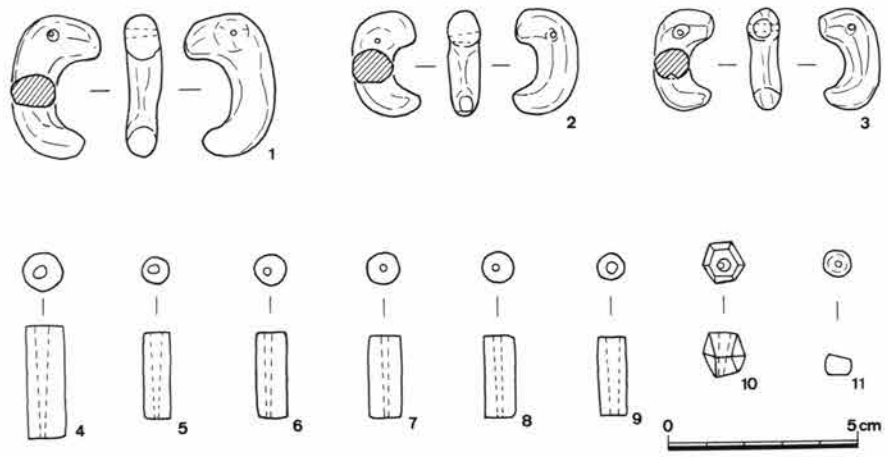
須恵器(第183図)には、蓋・杯身・短頸壺・高杯がある。39・40は蓋で、両個体ともほぼ完形に復原できた。39は、口縁部をわずかに外反させ、端部に内傾する面をもつ。40は杯蓋で、焼きが甘い。41~43は、杯身で、いずれも受け部をもつ。41は、他の2個体に比べ、やや深い。44は、完形の短頸壺である。45~47は、



第182図 鶏塚古墳出土遺物実測図(1)



第183図 鶏塚古墳出土遺物実測図(2)



第184図 鶏塚古墳出土遺物実測図(3)

高杯である。45・46は、脚部を欠損するが、47と同型と思われる。47は、大きく焼き歪んでいるが、「ハ」の字に開く脚部をもち、端部に面をもたせる。3個体とも杯部外面にはヘラ削り痕がみられる。

出土した須恵器は、ほぼTK209型式に位置づけられると考えられる。したがって、鶏塚古墳は、古墳時代後期末頃に築造されたものと思われる。なお、出土した須恵器には型式差がみられないため、追葬は行われなかった可能性が高い。

玉類(第184図)には、勾玉・管玉・切子玉・小玉がある。1～3は、瑪瑙製の勾玉である。1は、特に大型品である。3個体とも、片面穿孔である。側面は、研磨しないままである。4～9は、碧玉製の管玉である。使用されている碧玉は、非常に良質で、いずれも濃緑色を呈する。4は、かなり大型品である。5～9は、4に比べるとやや小型である。10は、水晶製の切子玉である。11は、ガラス製の小玉と思われる。

#### D. 平安時代

この時期の遺構としては、A地区で検出された土器溜まりのみが明確な時期を押さえられるものである。このほかに、掘立柱建物跡や不明土坑などもこの時期に属する可能性がある。

##### ①土器溜まりSX01

**遺構の概要**(第185図) A地区の中央やや西よりに位置する。全長6.6m・幅2.4m・深さ0.2mを測る舟底状の土坑である。周辺部では、SX01と確実に併行する遺構は検出できなかったが、そこに投棄された土器の量的な多さから当然、調査地周辺には、当該期の集落が存在したものと推定される。

土坑の埋土は、黒色粘質土1層のみで、出土遺物は一括投棄されたものとして考えられる。土坑の性格は不明である。

**遺物の出土状況** 土坑内からは、土師器碗・杯などが無造作に投棄された状態で出土している。土器類の遺存状況はかなり悪く、体部など器壁の薄い部分はほとんど遺存していない。また、底部など厚みのある部分では、磨滅しているものの比較的遺存していた。

比較的遺存度の高い底部の個体数で数えると、50点以上の土師器碗・杯などがあることが判明した。丹後地域において、この時期の資料がこれだけまとまって出土することは希有のことである。

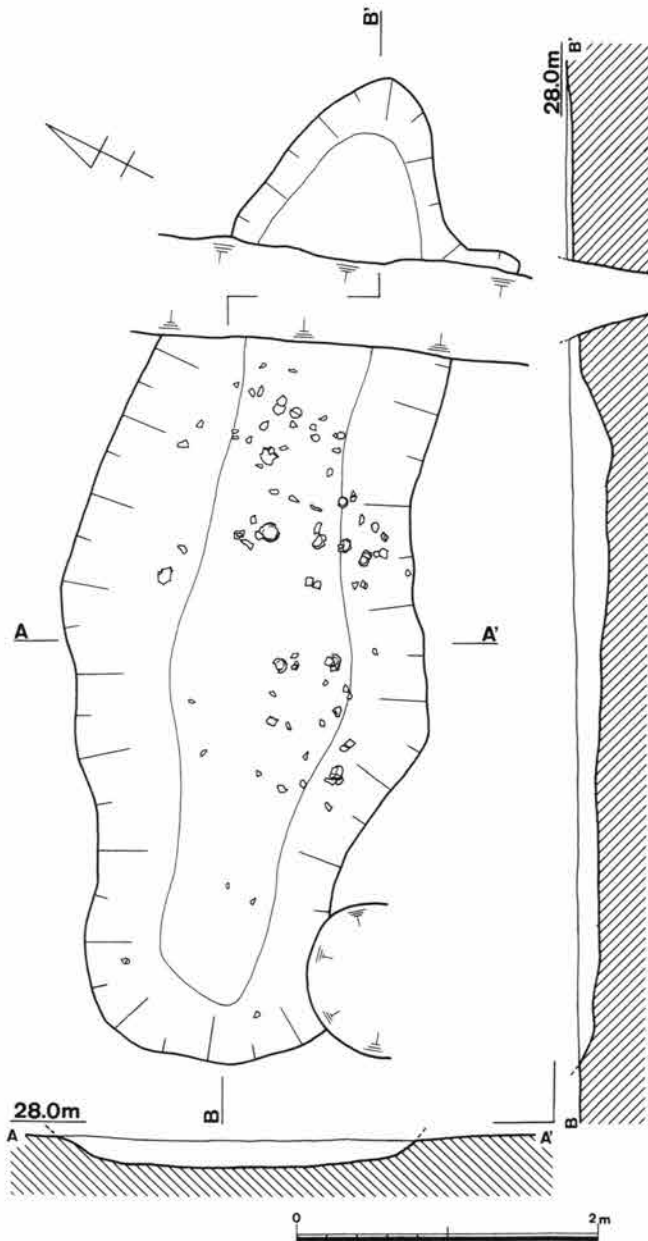
**出土遺物**(第186図) SX01からは土師器の碗・杯などが50点以上出土した。出土した遺物の大半は、遺存状態が悪く、底部のみ確認できたものも多い。図示したものはいずれも比較的遺存状態のよかったものである。

48～53は、土師器杯である。やや小さめの52を除く5点は、口径約10.4cm・器高約3.4cmを測る。底部は平底で、糸切り痕が残る。48・51は、口縁部内面にススが付着し、燈明皿として使用されたと考えられる。

54～59は、土師器碗である。法量の違いから2種類に分けられる。第1のグループは、口径12～13cm前後・器高5cm前後を測る。また、第2グループは、口径14cm前後・器高6cm前後を測る。底部は平高台、あるいは平高台気味のものが多く、いずれも糸切り痕を有する。口縁部の形態は、内湾気味のものと同外反するものがある。

60は、須恵質の椀である。口径14.6cmを測る。

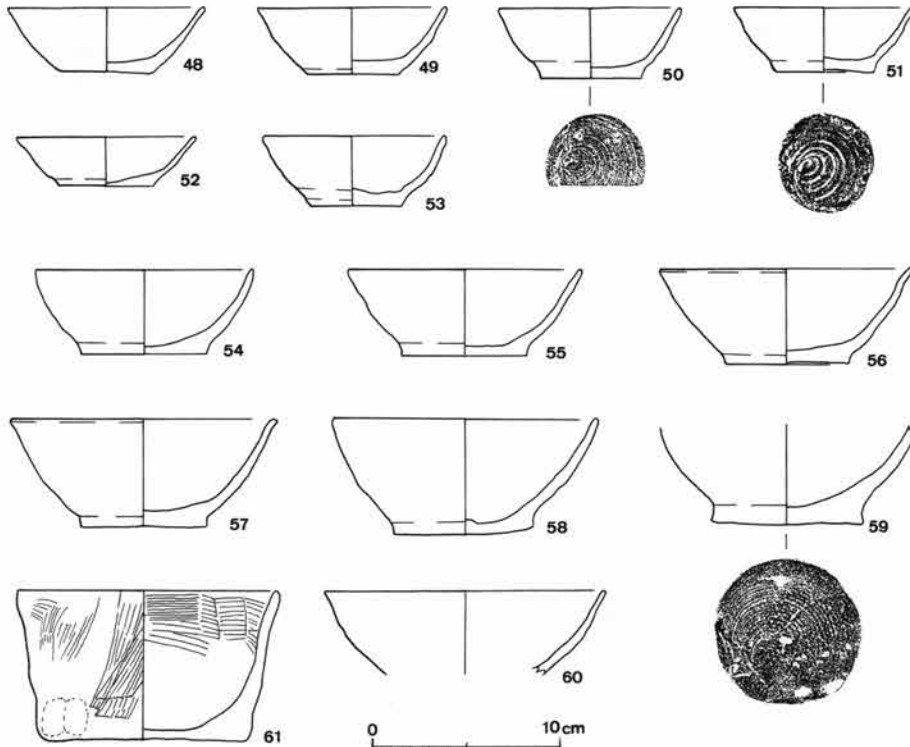
61は、鉢である。口縁部を約1/4欠損するものの、用途については不明である。



第185図 土器溜まり S X 01 実測図

## ②掘立柱建物跡 S B 01

**遺構の概要** S X 01の南西に位置する2間×3間の掘立柱建物跡である。遺物は出土し



第186図 土器溜まりS X01出土遺物実測図

ていないが、上述の鶏塚古墳と、土器溜まりS X01以外に時期のわかる遺構が存在しないこと、またS B01の東西主軸が土器溜まりS X01とほぼ一致することなどから、土器溜まりS X01と同時期と考える。

### ③不明土坑S X02

**遺構の概要** 残存長2.1m・幅1.5m・深さ0.2mを測る長方形の土坑である。西側短辺を耕作溝によって削平されているため、全長は不明である。土坑内からは、土師器片が少量出土したが、時期を決定できるものではない。S X01・S B01と同時期か。

## 5. まとめ

今回の調査で明らかになった点と、そこから提起される問題について、まとめを行う。

**押型文土器の出土** 今回の調査では、全く予想もしていなかった縄文時代早期の押型文土器の出土をみた。この時期の土器は、丹後地域ではすでにいくつかの遺跡で発見されているものの、いずれも破片であり、かつ2次堆積から出土することが多い。今回出土した<sup>(註114)</sup>

土器片についてもほぼ同様のことがいえる。

久美浜地域では、縄文時代後・晩期の土器の出土例はあるが、中期以前にさかのぼるものはない。今回は、出土資料の図示にとどめ、今後の出土例の増加を待つことにしたい。

**竪穴式住居跡出土の土器群** 今回検出した竪穴式住居跡からは、多量の土器が出土した。これらは、すでに述べたように、弥生時代後期末または古墳時代前期初頭に属すると思われる。

丹後地域におけるこの時期の土器群は、久美浜町橋爪遺跡をはじめ、峰山町古殿遺跡・大宮町裏陰遺跡・網野町林遺跡などで出土している。これらの資料を利用して丹後地域における弥生時代後期の土器編年については、すでに試案が示されているが、庄内式以降の編年については良好な資料に恵まれないこともあって充分に行われていない。

以下、今回出土した土器群の編年的位置についてみていくことにする。

S H01からは山陰系の甕が出土しており注目される。山陰地方の土器編年は、地域ごとに行われており、特に出雲地域では多くの研究成果がある。甕C(27)は、住居跡埋土の出土ながら、形態などから出雲地域でいう小谷式に併行する資料と考えられる。小谷式は、畿内編年の布留式古相に併行すると考えられている。

S H03出土の甕B(36)は、口縁部が単純「く」の字状に屈曲する甕である。体部の形態は、尖り底を有する倒卵形を呈し、いわゆる庄内甕にみられる特徴を有する。一方、丹後・中丹地域の弥生時代後期に主流を占める複合口縁の甕(先に甕Aとしたもの)は、口縁部外面の擬凹線が消失する時期が、ほぼ畿内地域の庄内式に併行すると考えられる。S H03出土の土器群が数量的にわずかであるため、確実なことはいえないが、庄内甕に類似する甕Bの存在などから、庄内式併行期と考えたい。

S H02からは、外面に擬凹線を施さない甕A(33)が出土しているが、その一方で擬凹線を施す鉢がみられるなど、擬凹線が完全に消失していない段階と考えられる。出土した土器のすべてを検討したわけではないが、ほぼ庄内式併行期と考えられる。

したがって、各住居跡は、S H02・S H03→S H01という変遷が考えられる。なお、S H02とS H03の先後関係は明らかにできないが、S H02出土資料に若干の擬凹線を施すものがあること、円形の住居跡であることから、S H02がS H03に先行する可能性は高い。

**土師器椀・杯について** A地区で検出された土器溜まりS X01からは、50点以上の土師器椀・杯が出土している。このうち、形態・調整などを知ることができるのは20点ほどである。土器の出土状況や埋土の状況から、これらは一括性の高い資料であり、丹後地域において、この時期の土器群がこれほど出土した例はない。

S X01出土の土器群は、いずれも回転台を使用しており、底部に糸切りの痕跡を有する。

いわゆる回転台土師器と総称されるものである。これらは、須恵器製作技術の影響を受けて成立したものとされるが、これまで丹後地域においてこのような土師器碗について編年的な研究が試みられたことは少ない。

こうした状況において、網野町林遺跡の調査において最初に丹後の黒色土器について触れられた高橋美久二氏は、平安時代における丹後地域の須恵器・土師器の編年について若干の見通しを述べられた<sup>(註116)</sup>。その中では、出土遺跡の検討から、宮津市荒木野遺跡→久美浜町上末遺跡・網野町長蓮寺遺跡→網野町横枕遺跡→大宮町大宮売神社遺跡→網野町林遺跡という編年観を示された。その実年代は、荒木野遺跡において9世紀の、また林遺跡において11世紀の実年代が与えられている。その後、黒色土器を含む林遺跡出土資料については、大きな年代観の変更が行われていないことから、高橋氏が示された年代観はなお有効と考えられる。

今回出土した資料は、その形態的な特徴から、ほぼ横枕遺跡または大宮売神社遺跡出土の土師器碗に類似すると考えられ、実年代としては、9～10世紀の年代観を与えてよいと思われる。

(筒井崇史)

付表12 出土土器観察表

遺構名	種類	器種	法量 (単位cm)	調整技法	胎土	焼成	色調	残存率	番号	挿図
黒墨層 出土	縄文土器	—	長6.6	内外面—楕円文	良好	良好	黄橙色	—	1	171
	縄文土器	—	長3.8	内外面—楕円文	良好	良好	橙褐色	—	2	ク
	縄文土器	—	長4.0	外面—楕円文	良好	良好	淡茶褐色	—	3	ク
	縄文土器	—	長5.2	外面—楕円文	良好	良好	淡茶褐色	—	4	ク
	縄文土器	—	長3.8	外面—ネガティブ文	良好	良好	淡茶褐色	—	5	ク
	縄文土器	—	長6.6	外面—楕円文	良好	良好	暗茶褐色	—	6	ク
	縄文土器	—	長5.0	外面—ネガティブ文	良好	良好	橙茶色	—	7	ク
	縄文土器	—	長4.2	外面—楕円文	良好	良好	淡黄茶色	—	8	ク
	縄文土器	—	長5.8	外面—楕円文	良好	良好	淡黄茶色	—	9	ク
	縄文土器	—	長4.4	外面—楕円文	良好	良好	淡黄茶色	—	10	ク
黒墨層 出土	弥生土器	壺	残存高2.2	内外面—ナデ	良好	良好	淡黄灰色	口縁部のみ	12	172
	弥生土器	壺	残存高1.2	内外面—ナデ	良好	良好	淡灰黄色	口縁部のみ	13	ク
	弥生土器	壺	残存高4.2	外面—ハケ 内面—ナデ	良好	良好	赤褐色	体部のみ	14	ク
	弥生土器	壺	残存高3.4	外面—ハケ 内面—ナデ	良好	良好	淡黄灰色	体部のみ	15	ク
	弥生土器	甕	口径14.0 残存高5.1	外面—磨滅のため不明 内面—ナデ	良好	良好	淡褐色	口縁部 20%	16	ク

## 丹後国営農地開発事業(東部・西部地区)関係遺跡

	弥生土器	壺	口径17.0 残存高4.8	磨滅著しい	やや粗	やや軟	淡褐色	口縁部 20%	17	172
	弥生土器	壺	残存高6.1	外面-ハケ後貼付凸帯 内面-ナデ	良好	良好	淡黄褐色	30%	18	✕
	弥生土器	高杯	口径23.0 残存高3.1	口縁部外面-擬凹線 内外面-ナデ	良好	やや軟	淡茶褐色	口縁部 わずか	19	✕
	弥生土器	高杯	口径22.0 残存高2.5	外面-ハケか 内面-ハケ後ナデ	良好	良好	淡褐色	口縁部 わずか	20	✕
	弥生土器	鉢	口径20.0 残存高7.2	内外面-ナデ	良好	良好	淡茶褐色	口縁部 20%	21	✕
	弥生土器	壺	残存高8.6 底径10.4	外面-磨き 内面-ハケ	良好	良好	淡橙褐色	底部 30%	22	✕
SH01 出土	古式土師器	壺	口径23.2 残存高6.6	磨滅著しい	良好	良好	淡黄褐色	口縁部 わずか	23	174
	古式土師器	甕	口径15.2 残存高5.0	外面-磨滅 内面-削り	良好	良好	淡黄褐色	口縁部 25%	24	✕
	古式土師器	甕	口径23.0 残存高7.8	外面-磨滅 内面-削りか	良好	良好	淡黄褐色	口縁部 わずか	25	✕
	古式土師器	甕	口径15.2 残存高9.3	外面-ハケ 内面-削り後ナデ	良好	良好	淡茶褐色	口縁部 75%	26	✕
	古式土師器	甕	口径29.6 残存高19.8	外面-ハケ 内面-削り	良好	良好	茶褐色	口縁部 40%	27	✕
SH02 出土	古式土師器	高杯	口径17.0 残存高6.3	磨滅著しい	やや粗	良好	淡黄褐色	口縁部 66%	28	176
	古式土師器	高杯?	口径14.8 残存高5.3	口縁部外面-擬凹線	良好	良好	乳白色	口縁部 25%	29	✕
	古式土師器	鼓形 器台	口径16.6 残存高6.7	磨滅著しい	やや粗	良好	橙褐色	口縁部 25%	30	✕
	古式土師器	高杯	残存高6.8 底径13.4	外面-磨きか 内面-ナデか	やや粗	やや軟	淡黄褐色	脚部 完存	31	✕
	古式土師器	壺	口径15.4 残存高7.0	磨滅著しい	良好	良好	淡茶褐色	口縁部 33%	32	✕
	古式土師器	甕	口径18.2 残存高8.0	体部外面-ハケ 体部内面-削り	良好	やや軟	茶褐色	口縁部 33%	33	✕
	古式土師器	甕	口径15.0 残存高5.5	体部外面-ハケ 体部内面-削り	やや粗	良好	淡黄褐色	口縁部 25%	34	✕
	古式土師器	甕	口径19.0 残存高6.5	体部外面-ハケ 体部内面-削り	良好	良好	淡橙褐色	口縁部 40%	35	✕
SH03 出土	古式土師器	甕	口径16.4 器高18.2	体部外面-ハケ 体部内面-削り	良好	良好	淡黄褐色	口縁部 40%	36	178
	古式土師器	小型鉢	口径10.1 残存高4.2	体部外面-ハケ 体部内面-削り	やや粗	やや軟	淡茶褐色	口縁部 25%	37	✕
	古式土師器	器台	残存高6.1 脚部径12.2	脚部外面-磨き 脚部内面-ハケ	良好	良好	淡橙褐色	脚部 50%	38	✕
鶏塚古墳 出土	須恵器	蓋	口径10.9 器高3.9	体部内外面-回転ナデ 天井部内外面-ナデ	良好	堅緻	灰色	ほぼ 完形	39	183
	須恵器	蓋	口径14.0 器高3.9	体部内外面-回転ナデ 天井部内面-ナデ	良好	軟	淡灰色	口縁部 70%	40	✕



	須恵器	杯	口径12.4 器高4.4	内外面一回転ナデ 底部外面一削り	良好	堅緻	青灰色	口縁部 70%	41	183
	須恵器	杯	口径13.4 残存高2.7	内外面一回転ナデ	良好	堅緻	青灰色	口縁部 66%	42	◇
	須恵器	杯	口径15.0 残存高3.7	内外面一回転ナデ	良好	軟	灰白色	口縁部 45%	43	◇
	須恵器	短頸壺	口径7.4 器高8.7	内外面一回転ナデ	良好	堅緻	青灰色	完形	44	◇
	須恵器	高杯	口径14.2 残存高5.1	杯部内外面一 回転ナデ後ナデ	良好	堅緻	暗灰色	杯部 50%	45	◇
	須恵器	高杯	口径14.9 残存高4.6	杯部内外面一 回転ナデ後ナデ	良好	堅緻	淡灰色	杯部 66%	46	◇
	須恵器	高杯	口径14.7 器高12.2	杯部内外面一 回転ナデ後ナデ	良好	堅緻	灰色	ほぼ 完形	47	◇
S X01 出土	土師器	杯	口径10.4 器高3.5	内外面一回転ナデ	良好	良好	淡黄褐色	口縁部 66%	48	186
	土師器	杯	口径9.9 器高3.5	内外面一回転ナデ	良好	良好	淡灰黄色	口縁部 わずか	49	◇
	土師器	杯	口径9.6 器高3.85	内外面一回転ナデ	良好	良好	暗橙色	口縁部 25%	50	◇
	土師器	杯	口径9.4 器高3.5	内外面一回転ナデ	良好	良好	淡黄褐色	口縁部 25%	51	◇
	土師器	杯	口径9.5 器高2.6	内外面一回転ナデ	良好	良好	淡茶褐色	口縁部 20%	52	◇
	土師器	杯	口径9.65 器高3.7	内外面一回転ナデ	良好	良好	淡茶褐色	口縁部 30%	53	◇
	土師器	椀	口径11.6 器高4.6	内外面一回転ナデ	良好	やや軟	淡橙色	口縁部 わずか	54	◇
	土師器	椀	口径12.2 器高4.8	内外面一回転ナデ	良好	良好	橙褐色	口縁部 わずか	55	◇
	土師器	椀	口径13.2 器高5.1	内外面一回転ナデ	良好	良好	橙褐色	口縁部 25%	56	◇
	土師器	椀	口径13.8 器高5.65	内外面一回転ナデ	良好	良好	淡灰色	口縁部 33%	57	◇
	土師器	椀	口径13.8 器高6.1	内外面一回転ナデ	良好	良好	淡黄灰色	口縁部 33%	58	◇
	土師器	椀	残存高5.2	内外面一回転ナデ	良好	やや軟	淡黄灰色	底部 完存	59	◇
	須恵器	椀	口径14.6 残存高4.6	内外面一回転ナデ	良好	良好	淡青灰色	口縁部 66%	60	◇
	土師器	鉢?	口径13.7 器高8.2	外面一縦ハケ 内面一横ハケ後ナデ	良好	やや軟	橙褐色	口縁部 66%	61	◇

(7) 薬師<sup>YAKU SHI</sup> 7号墳

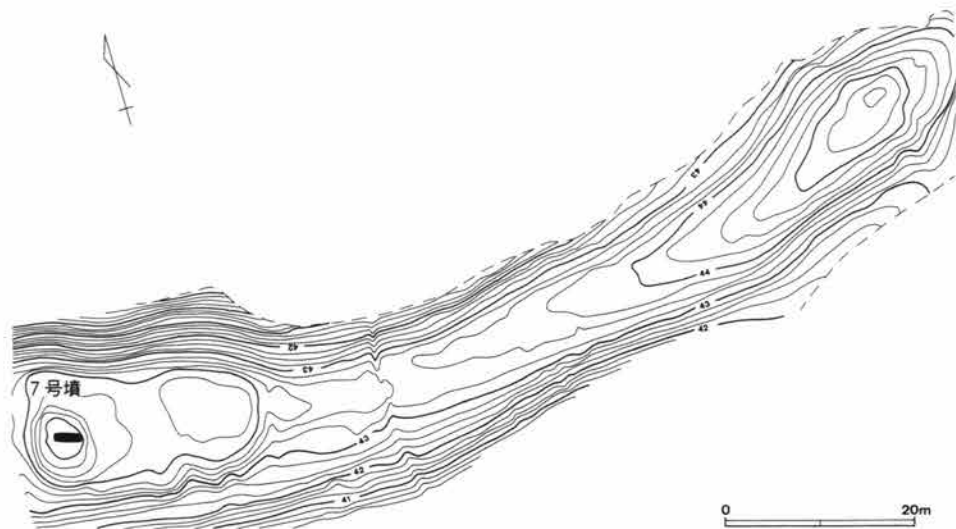
## 1. はじめに

薬師古墳群は、京都府熊野郡久美浜町大字女布に位置する。女布の集落がある谷筋に沿って西方にのびる小丘陵があり、古墳群は丘陵尾根筋から端部にかけて存在し、円墳8基からなる。その他、この付近の丘陵部には、円墳2基と方墳4基からなる北谷古墳群や、円墳6基からなる塚ヶ谷古墳群、円墳の鶏塚古墳などがある。また、丘陵裾部から田畑部にかけては、女布神社遺跡、女布遺跡、女布北遺跡など弥生土器、土師器、須恵器の散布地がある。<sup>(E117)</sup>この内、鶏塚古墳と女布北遺跡については、女布団地造成範囲にかかっており、同年度に調査を実施している。その結果、鶏塚古墳については横穴式石室を、女布北遺跡においては弥生時代から平安時代にかけての集落遺跡を確認している。

調査期間中は、地元有志の方々に作業員ならびに整理員として作業に従事していただいた。また、調査にあたっては、久美浜町教育委員会をはじめとする関係諸機関の御協力を得ることができた。ここに記して感謝の意を表したい。

## 2. 調査経過

薬師古墳群の調査は、平成4年度から行っている。その調査概要ならびに成果については以下のとおりである。この古墳群は、丘陵尾根筋の先端側に3基、基部側に5基位置す



第187図 薬師古墳群地形図

るが、その間の約120mには古墳が存在しない。この範囲と丘陵先端側の8号墳の試掘調査を行うことによって、古墳の規模ならびにその他の遺跡の有無を確認した。調査途中で造成計画が変更され、8号墳に隣接する7号墳がその範囲にかかることとなった。そこで、規模確認のための試掘調査も実施した。その結果、8号墳と考えられていたところから、中世墓8基と寺院跡の区画と思われる石列遺構を検出した。また、7号墳については、主体部の一部を確認しており、古墳であることが明らかとなった。<sup>(注118)</sup>

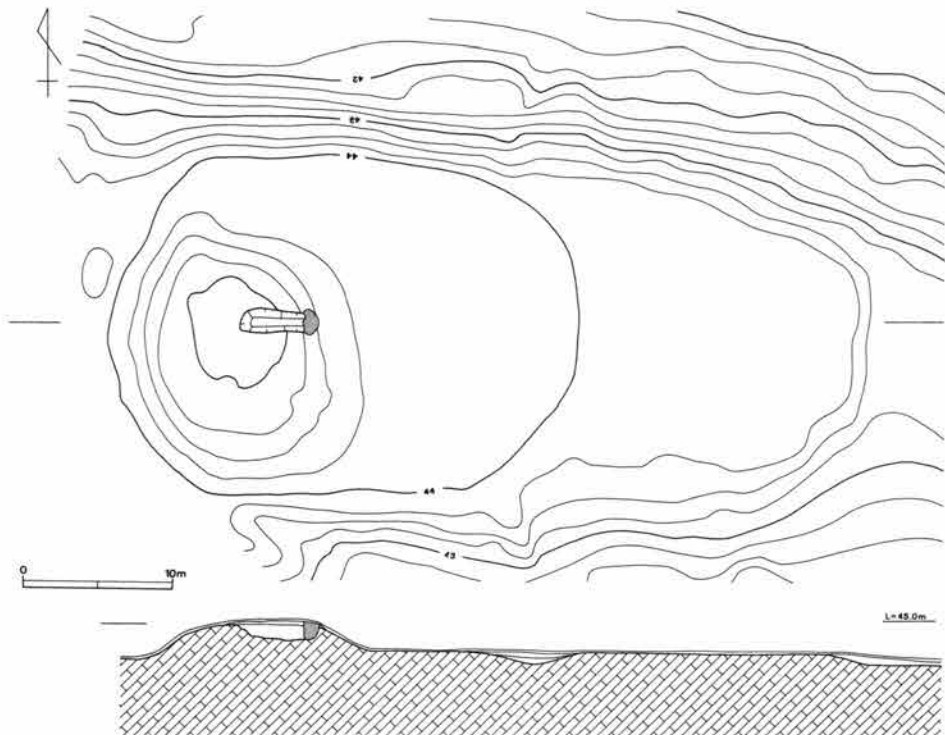
### 3. 調査概要

昨年度の試掘調査成果をもとに、7号墳の発掘調査を実施した。調査は、平成5年5月11日から同年6月4日まで行った。7号墳の表土除去を行い、主体部の輪郭ならびに古墳の全容をだすことに、調査期間の大半が費やされた。また、調査終了間際に7号墳から8号墳にかけての断ち割りも行った。

#### 7号墳

##### ①墳丘

墳丘の東側と墳頂部は、中世に削られていたが、西側の検出状況から径約10mを測る円

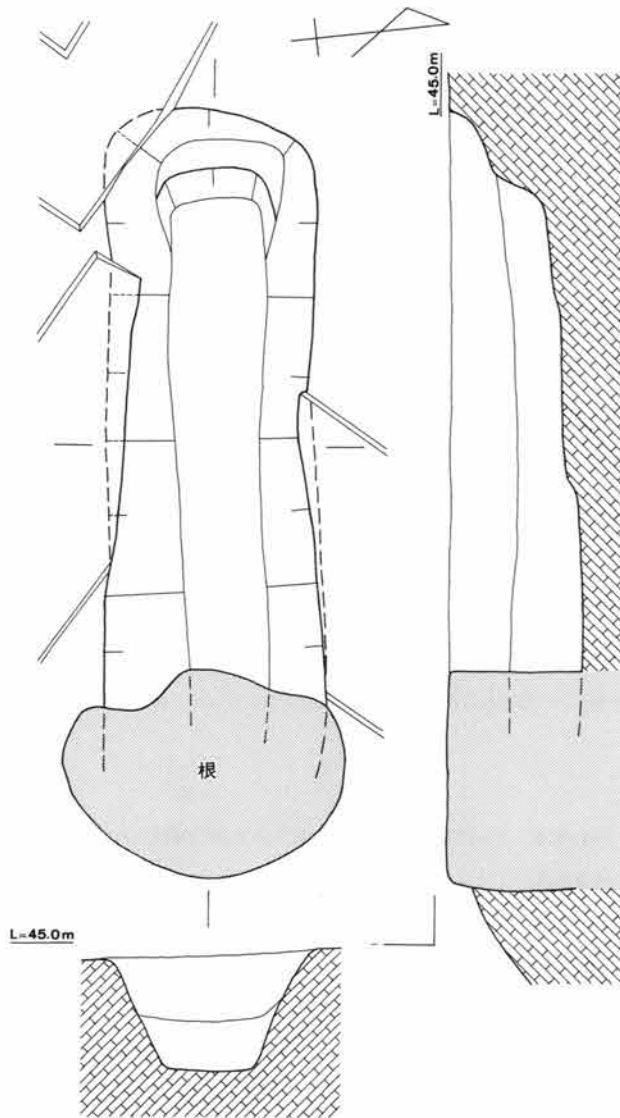


第188図 7号墳墳丘測量図

墳であることが判明した。高さは、約1mを測る。墳頂部から東西方向の主体部1基を検出した。墳丘は、地山形成後盛り土をするようであるが、盛り土は主体部付近にわずかに見られる程度であった。また、平成4年度に見つかっている寺院跡の区画と思われる石列遺構の続きは、流失しており、発見できなかった。

### ②埋葬施設

後世に墳丘が削られているため、墳丘の東寄りから墓壇1基を検出した。墓壇の東端部は、根によって攪乱を受けており、全長については不明であるが、確認した限りでは、長さ



第189図 主体部実測図

約2.4m・幅約80cm・深さ約45cmであった。主体部の主軸方向は、N-85°-Wを測る木棺直葬であった。墓壇の底面のわずかな傾斜から西側に頭部があったのではないかとと思われる。墓壇内からわずかに土器片が出土しているが、いずれも破片で、墓壇内の埋土に混入した状況で出土した。また、これらの土器片は、墓壇底直上から出土していない。

### ③出土遺物

土器は、表土除去時や墓壇内から出土しているが、いずれも破片であった。須恵器の甕

の破片が大半であるが、その内杯蓋など時期のわかる1・2点の土器片から、6世紀中頃の古墳であったと思われる。

#### ④断ち割り

7号墳から8号墳にかけて断ち割りを行った。その結果、周溝の確認により、8号墳についても古墳であることがわかった。周溝は、7号墳と8号墳の間から幅約4m・深さ約1mを測り、8号墳東側については墳丘を切り土していたにすぎない。確認した墳丘の規模は、径約15mを測り、墳形は円墳であった。墳頂部からは、主体部を検出するにはいたらなかった。おそらくは、中世墓または寺院跡の区画と考えられる石列遺構を構築した際に、削平を受けたものと思われる。

#### 4. まとめ

薬師7号墳ならびに断ち割りの結果、『京都府遺跡地図』のとおり、7号墳と8号墳は古墳であることが判明した。しかし、8号墳については、中世に削平を受けたと思われ、主体部の検出には至らなかった。7号墳の出土遺物ならびに8号墳にかけての土層観察から、6世紀中頃の古墳であると考えられた。この地域における6世紀の古墳の発見例はなく、今後この周辺の調査をするにあたっての一資料になるものと考ええる。

(岡崎研一)

注1 増田孝彦・三好博喜ほか「丹後国営農地開発事業(丹後東部地区)関係遺跡昭和60・61年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第24冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987  
増田孝彦・森 正・荒川 史ほか「丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡昭和61・62年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第29冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988

増田孝彦・中川和哉・荒川 史・森島康雄「丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡昭和63年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第34冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989

増田孝彦・石崎善久・岩松 保・森島康雄「丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡平成元年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第39冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990

増田孝彦・森 正・石崎善久・森島康雄「丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡平成2年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第44冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991

増田孝彦・岡崎研一・石崎善久ほか「丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡昭和62・63、平成3年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第50冊 (財)京都府埋蔵文化

財調査研究センター) 1992

増田孝彦・田代 弘・石崎善久・荒川 史・森 正・黒坪一樹ほか「丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡昭和63年度、平成3・4年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第55冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992

注2 調査参加者(順不同・敬称略)

北山貴美子・山本弥生・溝井麗子・小滝初代・丸谷はま子・吉村 保・小牧 勲・河崎祐子・山本和之介・木全邦之・佐々木 理・小笠原 彰・土田昌人・鳴海紀彦・成田英人・田口雄一・中高新治・畑謙 治・三黒広史・宮崎 歩・田中文美・二ノ宮優子・金保真由美・山副宏子・平林京美・谷口勝江・安達久子・高原与作・平林秀夫・河戸久夫・松村 仁・今西茂満・吉岡 茂・藤原義夫・米田武志・上田忠志・山副武志・山城金作・坪倉 仁・東宇虎次・菱川實・行待花子・平林直美・森野美智代・熊谷千代子・藤原ヒサエ・松本智枝子・由良里枝・村上五月・由良美津子・藤原あみ子・吉岡正子・尾崎三代・安達睦枝・藤原敏子・山副まつ江・植野斉志・金久真弓・松村和美・谷辻絹代・伊熊佐知子・上田奈智子・有田美恵子・川戸良一・山本稔明・斉藤 優・中前幸子・杉原美加・林田登之・中村智孝・羽生夕紀子・保坂亨・高木信一・酒井 隆・朝熊仁司・今井睦博・新保勝也・高橋あかね・澤田佳子・鈴木弥生・中村英之・細山田章子・佐藤 謙・石塚真智子・野口美乃・田中熊次郎・鈴木 豊・吉村行雄・吉村晴男・木成靖夫・小西定男・堀たつ子・平井浩政・小牧朝男・小川 伸・川村さと枝・山添喜代子・川村清喜・糸井文男・糸井 晃・吉岡喜三二・吉岡定一・山田清明・野川操・野村 功・西村久枝・真駆さく枝・長谷川ハナ・今西英二・川竹庄吉・井通敏郎・山添均・四方めぐみ

注3 現地調査ならびに本概要報告作成にあたって下記の機関及び方々からご指導・ご協力を得た。記して謝意を表します(順不同・敬称略)。

弥栄町教育委員会・大宮町教育委員会・久美浜町教育委員会・府立丹後郷土資料館・都出比呂志・杉原和雄・佐藤晃一・瀬戸谷皓・細川康晴・大崎哲人・大崎康文・西世津子・森 正・肥後弘幸・加藤晴彦

注4 肥後弘幸「〔2〕左坂古墳群」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1991)』 京都府教育委員会) 1991

注5 國下多美樹「京都府下の紡錘車について」(『京都考古』50 京都考古刊行会) 1988

注6 杉原和雄「裏陰遺跡発掘調査概報」(『大宮町文化財調査報告』第1集 大宮町教育委員会) 1979

注7 戸原和人・鍋田 勇「古殿遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第9冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988

注8 河野一隆「白米山北古墳」(『京都府遺跡調査概報』第57冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993

注9 森 正「176号関係遺跡発掘調査概要 (1)内和田古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第49冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992

- 注10 三浦 到「妹古墳発掘調査概要」(『離山古墳・離湖古墳発掘調査概要』 網野町教育委員会) 1993  
左坂古墳群B支群出土の二重口縁壺は、肩部に突帯を有するかどうかが不明であるが、口縁端部をやや横方向にのぼす点や、端部外面が面をなすように仕上げる点など、細部の処理が妹古墳出土二重口縁壺や通り古墳群出土二重口縁壺に類似する。
- 注11 小竹森直子「手焙形土器雑想-葛籠尾崎湖底遺跡出土品に寄せて-」(『紀要』3 (財)滋賀県文化財保護協会) 1990
- 注12 崎山正人「駅南地区発掘調査概要-寺ノ段古墳群・広峯古墳群-」(『福知山市文化財調査報告書』第16集 福知山市教育委員会) 1989
- 注13 『大田南5号墳現地説明会資料』 峰山町教育委員会・弥栄町教育委員会 1994  
大田南5号墳の土器については実見する機会を得た。高杯(器台)については左坂古墳群出土土器と形態が類似するのみでなく、胎土中に高温石英を含むなど、胎土の点でも共通点を認めることができる。
- 注14 肥後弘幸「国営農地開発事業関係遺跡平成4年度発掘調査概要 [2] 左坂横穴群」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1993)』 京都府教育委員会) 1993
- 注15 増田孝彦「丹後国営農地開発事業(丹後東部地区)関係遺跡昭和60・61年度発掘調査概要 (1) 有明古墳群・横穴群」(『京都府遺跡調査概報』第24冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注16 岡田晃治ほか「国営農地開発事業関係遺跡昭和61年度発掘調査概要 [2] 大田鼻横穴群」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1987)』 京都府教育委員会) 1987
- 注17 石崎善久「丹後国営農地開発事業(東部・西部地区)関係遺跡昭和63年度、平成3・4年度発掘調査概要 (2) 里ヶ谷横穴群」(『京都府遺跡調査概報』第55冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
- 注18 畿内産土師器については、林部 均氏の研究成果がある。  
林部 均「西日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」(『考古学研究』39-3 考古学研究会) 1992
- 注19 注18に同じ。
- 注20 『陰田』 米子市教育委員会 1984 59頁
- 注21 注16文献
- 注22 鳥取県淀江町教育委員会岩田文章氏の御教示による。
- 注23 黒崎 直「近畿における8・9世紀の墳墓」(『研究論集』VI 奈良国立文化財研究所) 1980
- 注24 注17文献、119~121頁。
- 注25 肥後弘幸「国営農地開発事業関係遺跡平成元年度発掘調査概要 [1] 池田古墳群」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1990)』 京都府教育委員会) 1990
- 注26 肥後弘幸「国営農地開発事業関係遺跡平成元年度発掘調査概要 [2] アバタ遺跡」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1990)』 京都府教育委員会) 1990

- 注27 森 正「丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡平成2年度発掘調査概要  
(1)阿婆田窯跡群」(『京都府遺跡調査概報』第44冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)  
1992
- 注28 石崎善久「丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡昭和62・63、平成3年度発掘  
調査概要 (3)通り古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第50冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究  
センター) 1992
- 注29 肥後弘幸「国営農地開発事業関係遺跡平成3年度発掘調査概要 [7]古土井遺跡」(『埋蔵  
文化財発掘調査概報(1992)』 京都府教育委員会) 1992
- 注30 注15に同じ。
- 注31 石崎善久「左坂古墳群」(『京都府埋蔵文化財情報』第40号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究  
センター) 1991
- 注32 岡崎研一「上野遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第37冊 (財)京都府埋蔵文化財  
調査研究センター) 1990
- 注33 竹原一彦「府営ほ場整備関係遺跡昭和60・61年度発掘調査概要 (1)正垣遺跡」(『京都府遺跡  
調査概報』第22冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注34 増田孝彦「遠所遺跡群の発掘調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第39号 (財)京都府埋蔵文化  
財調査研究センター) 1991
- 注35 増田孝彦「遠所遺跡群」(『京都府埋蔵文化財情報』第44号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究  
センター) 1992
- 注36 大橋信弥・平井寿一・大崎隆志ほか「野路小野山遺跡発掘調査報告書」(『国道1号京滋バイ  
パス関連遺跡発掘調査報告書』第4冊 滋賀県教育委員会・草津市教育委員会・(財)滋賀県文  
化財保護協会) 1990
- 注37 田中勝弘・用田政晴「南郷遺跡発掘調査報告書」 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護  
協会 1987  
村上幸雄・森田友子「椽山遺跡群Ⅳ」(『久米開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』4  
久米開発事業に伴う文化財発掘調査委員会) 1982
- 注38 近藤義郎「石生天皇遺跡」 和気町教育委員会 1980
- 注39 中山俊紀・国貞圭也・光延稲造・村瀬 隆「緑山遺跡」(『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』  
第19集 津山市教育委員会) 1986
- 注40 寺島文隆・飯村 均・吉田秀享・新堀明宏「向田E遺跡」(『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅰ(武  
井地区製鉄遺跡群)』 福島県文化センター) 1989
- 注41 増田孝彦「丹後の古代鉄生産」(『京都府埋蔵文化財論集』第2集 (財)京都府埋蔵文化財調  
査研究センター) 1991  
増田孝彦「遠所遺跡群の発掘調査について」(『歴史シンポジウムの記録 丹後と古代製鉄』  
京都府弥栄町) 1991
- 注42 「丹後竹野遺跡」 丹後町教育委員会 1983



- 注43 「途中ヶ丘遺跡発掘調査報告書」 峰山町教育委員会 1977
- 注44 梅原末治「湊村函石浜石器時代ノ遺跡」(『京都府史蹟勝地調査會報告』第2冊 京都府) 1922
- 注45 伊野近富・森 正「国道176号関係遺跡発掘調査概要 (1)蔵ヶ崎遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第54冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
- 注46 「京都府弥栄町奈具岡遺跡発掘調査報告書」 (財)古代学協会 1985
- 注47 「扇谷遺跡発掘調査報告書」 峰山町教育委員会 1988
- 注48 「浦明遺跡」 久美浜町教育委員会 1980
- 注49 釋 龍雄・杉原和雄「奈具遺跡発掘調査報告書」(『京都府弥栄町文化財調査報告』第1集 弥栄町教育委員会) 1972
- 注50 増田孝彦・河野一隆・田代 弘「丹後国営農地開発事業(東部・西部地区)関係遺跡昭和63年度、平成3・4年度発掘調査概要 (1)奈具岡遺跡(第4次)」(『京都府遺跡調査概報』第55冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
- 注51 石井清司ほか「橋爪遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-2)』 京都府教育委員会) 1981
- 注52 「須代遺跡」Ⅲ(『加悦町文化財調査報告』第17集 加悦町教育委員会) 1992
- 注53 「愛宕山9号墳発掘調査報告書」(『京都府加悦町文化財調査報告』第1集 加悦町教育委員会) 1975
- 注54 奥村清一郎ほか「寺岡遺跡」 野田川町教育委員会 1988
- 注55 岸岡貴英ほか「桑飼上遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第19冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
- 注56 肥後弘幸ほか「志高遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第12冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989
- 注57 藤原敏晃・高野陽子「オテジ谷遺跡・オテジ谷古墳発掘調査報告書」(『京都府弥栄町文化財調査報告書』第6集 弥栄町教育委員会) 1991
- 注58 「裏陰遺跡発掘調査概報」 大宮町教育委員会 1979
- 注59 細川康晴「谷内遺跡第4次」(『京都府遺跡調査概報』第28冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 注60 注26に同じ。
- 注61 平良泰久ほか「丹後大山墳墓群」(『京都府丹後町文化財調査報告』第1集 丹後町教育委員会) 1983
- 注62 「奈具岡遺跡第3次発掘調査報告書」 弥栄町教育委員会 1986
- 注63 「有明古墳群・三坂神社墳墓群・三坂神社裏古墳群現地説明会資料」 1992
- 注64 「坂野」(『京都府弥栄町文化財調査報告書』第2集 弥栄町教育委員会) 1979
- 注65 鈴木公雄「恵まれた自然の植物」(『古代史復元』2 縄文人の生活と文化 雄山閣) 1982
- 注66 「粟津湖底遺跡—大津市晴嵐町地先—」 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会

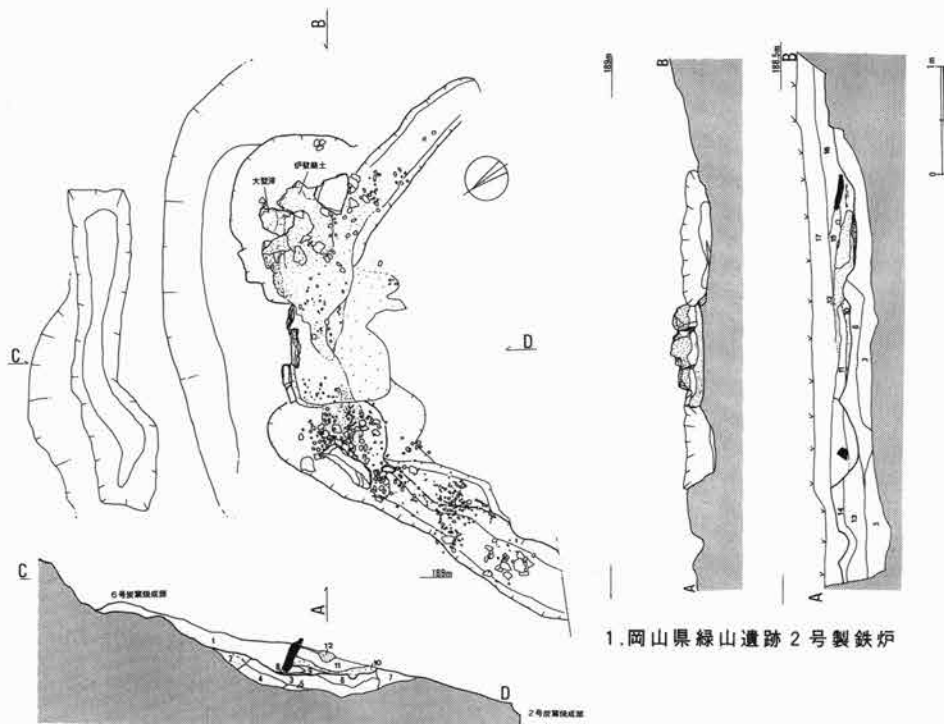
1992

- 注67 渡辺 誠「縄文人の食生活」(『季刊考古学』創刊号 雄山閣) 1982
- 注68 渡辺 誠『増補・縄文時代の植物食』3版 雄山閣 1984
- 注69 注68に同じ。
- 注70 縄文時代の加工場の例としては長野県中野市栗林遺跡、埼玉県川口市赤山陣屋跡遺跡などが知られている。  
金箱文夫「川口市赤山陣屋跡遺跡西側低湿地検出のトチの実の加工場跡～関東平野中央部における縄文時代後・晩期の経済活動復元にむけて～」(『考古学ジャーナル』325号 ニュー・サイエンス社) 1990  
岡村秀雄「長野県栗林遺跡の貯蔵穴とさらし場」(『考古学ジャーナル』354号 ニュー・サイエンス社) 1992
- 注71 森島康雄「国道178号バイパス関連遺跡昭和63年度・平成元年度発掘調査概要 (1)日光寺遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第37冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990
- 注72 石井清司ほか「橋爪遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財調査概報(1981-2)』 京都府教育委員会) 1981
- 注73 注57と同じ。
- 注74 田代 弘「近畿自動車道敦賀線関係遺跡 1. 興遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第17冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
- 注75 中村孝行「青野遺跡第12次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第15集 綾部市教育委員会) 1988
- 注76 黒坪一樹「近畿自動車道敦賀線関係遺跡 2. 観音寺遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第17冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
- 注77 辻本和美「石本遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第8冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注78 注56と同じ。
- 注79 注55と同じ。
- 注80 『田能遺跡発掘調査報告書』 尼崎市教育委員会 1982
- 注81 杉原和雄・坪倉利正ほか「カジャ古墳発掘調査報告書」(『京都府峰山町文化財調査報告』第1集峰山町教育委員会) 1972
- 注82 奥村清一郎ほか「大谷古墳」(『大宮町文化財調査報告』第4集 大宮町教育委員会) 1987
- 注83 西谷真治・置田雅昭「ニゴレ古墳」(『弥栄町文化財調査報告』第5集 弥栄町教育委員会) 1988
- 注84 梅原末治「竹野村産土山古墳の調査(上)・(下)」(『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第20・21冊 京都府) 1931
- 注85 注15に同じ。
- 注86 肥後弘幸「国営農地開発事業関係遺跡平成2年度発掘調査概要 [2] 左坂古墳群」(『埋蔵

- 文化財発掘調査概報(1991) 京都府教育委員会) 1991
- 注87 岡田晃治「帯城古墳群発掘調査概要」I(『埋蔵文化財発掘調査概報(1985)』 京都府教育委員会) 1985
- 注88 鈴木忠司ほか「京都府中郡大宮町小池古墳群」(『大宮町文化財調査報告』第3集 大宮町教育委員会) 1984
- 注89 増田孝彦ほか「丹後国営農地開発事業(丹後東部地区)関係遺跡昭和60・61年度発掘調査概要(3)宮の森古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第24冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注90 三好博喜「丹後国営農地開発事業(丹後東部地区)関係遺跡昭和60・61年度発掘調査概要(4)ゲンギョウの山古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第24冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注91 森 正「丹後国営農地開発事業(丹後頭部・西部地区)関係遺跡昭和61・62年度発掘調査概要(4)普甲古墳群・稲荷古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第29冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 注92 『京都府遺跡地図』第1分冊 京都府教育委員会 1988 40頁
- 注93 増田孝彦ほか「国営農地開発事業(丹後東部地区)関係遺跡昭和62・63、平成3年度発掘調査概要(1)遠所古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第50冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
- 注94 『加悦町入谷A-1号墳』 加悦町教育委員会 1983
- 注95 『宮津市霧ヶ鼻古墳群発掘調査概要』 宮津市教育委員会 1990
- 注96 増田孝彦ほか「丹後国営農地開発事業(丹後頭部・西部地区)関係遺跡昭和61・62年度発掘調査概要(1)高山古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第29冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 注97 『丹後町上野古墳群現地説明会資料』 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1993
- 注98 加悦町教育委員会佐藤晃一氏の御教示による。
- 注99 『日本の古代遺跡 兵庫北部』 保育社 1982 14頁、172頁
- 注100 『奥才古墳群』 鳥根県鹿島町教育委員会 1985
- 注101 「弓木城・千原遺跡」(『京都府岩滝町文化財調査報告』第7集 岩滝町教育委員会) 1985
- 注102 『大宮町左坂古墳群現地説明会資料』 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1994
- 注103 竹原一彦「近畿自動車道敦賀線関係遺跡平成元年度発掘調査概要(1)ヌクモ古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第37冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990
- 注104 小池 寛「近畿自動車道敦賀線関係遺跡平成元年度発掘調査概要(2)奥大石古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第37冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990
- 注105 伊賀高弘「京都府木津町西山塚古墳の調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第46号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992

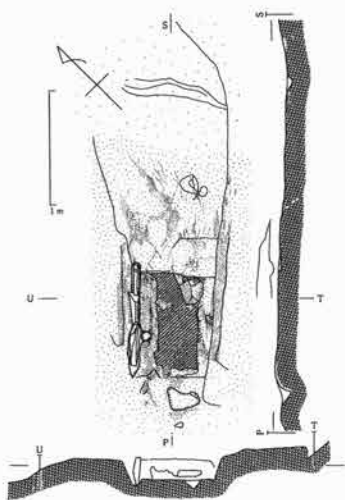
- 注106 松井忠春「浦明遺跡」(『京都府久美浜町文化財調査報告』第3集 久美浜町教育委員会) 1980
- 注107 豊岡忠雄「丹後弥生文化の視点」(『同志社考古』第10号 同志社大学考古学研究会) 1973
- 注108 平良泰久ほか「橋爪遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-2)』 京都府教育委員会) 1980
- 注109 森 正「丹後国営農地開発事業(東部・西部地区)関係遺跡昭和63年度、平成3・4年度発掘調査概要 (3)堤谷古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第55冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
- 注110 奥村清一郎ほか「湯船坂2号墳」(『京都府久美浜町文化財調査報告書』第7冊 久美浜町教育委員会) 1983
- 注111 肥後弘幸ほか「国営農地開発事業関係遺跡平成4年度発掘調査概要 [1] 堤谷窯跡群」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1993)』 京都府教育委員会) 1993
- 注112 肥後弘幸「国営農地開発事業関係遺跡平成3年度発掘調査概要 [3] 豊谷遺跡」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1992)』 京都府教育委員会) 1992
- 注113 花谷めぐむ「山陰古式土師器の型式学的研究」(『鳥根考古学会誌』第4集 鳥根考古学会) 1984
- 注114 大宮町裏陰遺跡、加悦町鳴岡遺跡などで出土例が知られる。
- 注115 石井清司ほか「京都府弥生土器集成」(財)京都府埋蔵文化財発掘調査研究センター 1989
- 注116 高橋美久二「丹後地方の平安時代土器」(『京都考古』第25号 京都考古刊行会) 1976
- 注117 久美浜町誌編纂委員会「久美浜町誌」 京都府熊野郡久美浜町役場 1975
- 注118 黒坪一樹「丹後国営農地開発事業(東部・西部地区)関係遺跡 (5)薬師古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第55冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993

補注 芋谷遺跡検出の製鉄炉の類例については、次頁に掲載した。

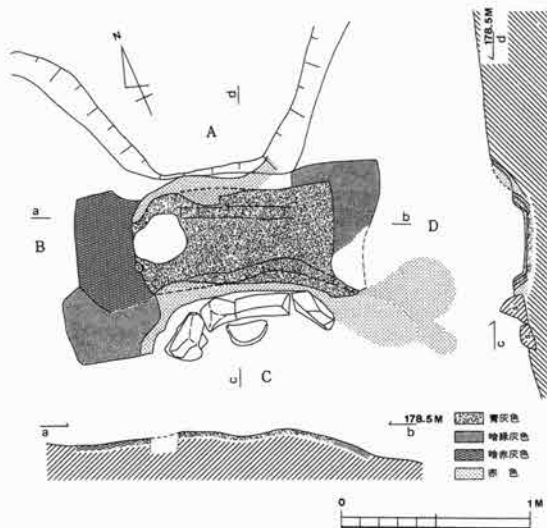


1. 岡山県緑山遺跡 2号製鉄炉

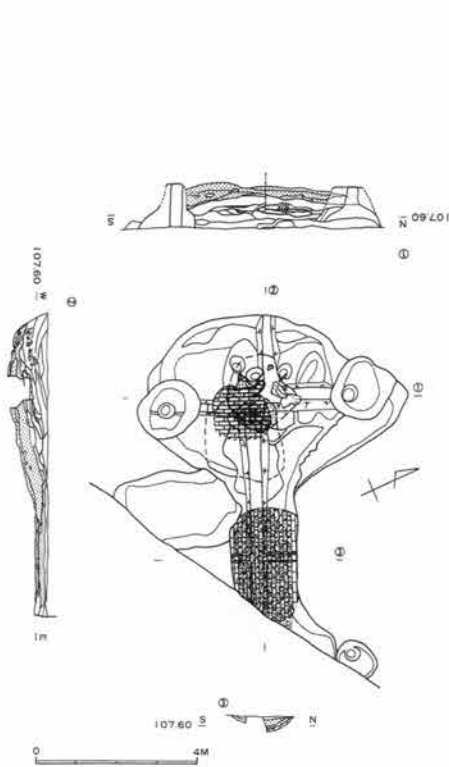
2. 岡山県石生天皇遺跡



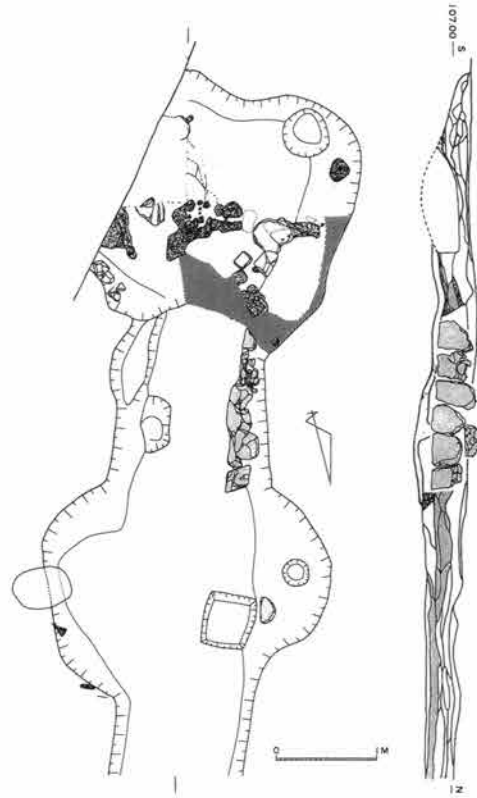
3. 岡山県大蔵池南遺跡 4号製鉄炉



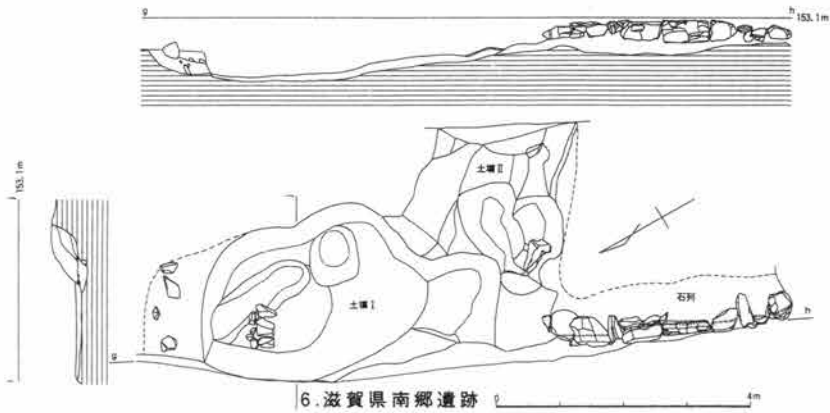
1. 中山俊紀ほか『緑山遺跡』(津山市埋蔵文化財発掘調査報告第19集 津山市教育委員会) 1986
2. 近藤義郎『石生天皇遺跡』 和気町教育委員会 1980
3. 村上幸雄・森田友子『米家山遺跡群』Ⅳ(『久米開発事業に伴う埋蔵文化財調査報告』4 久米開発事業に伴う文化財調査委員会) 1982 以上より転載。



4. 滋賀県野路小野山遺跡 7号製鉄炉



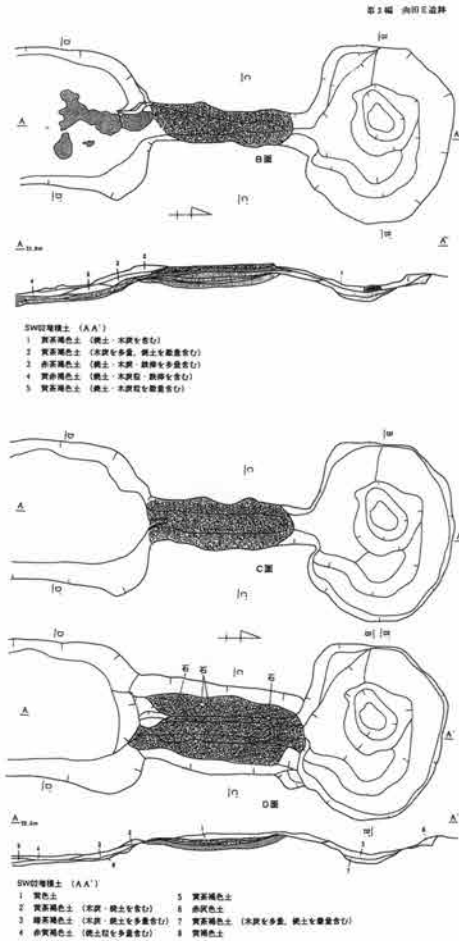
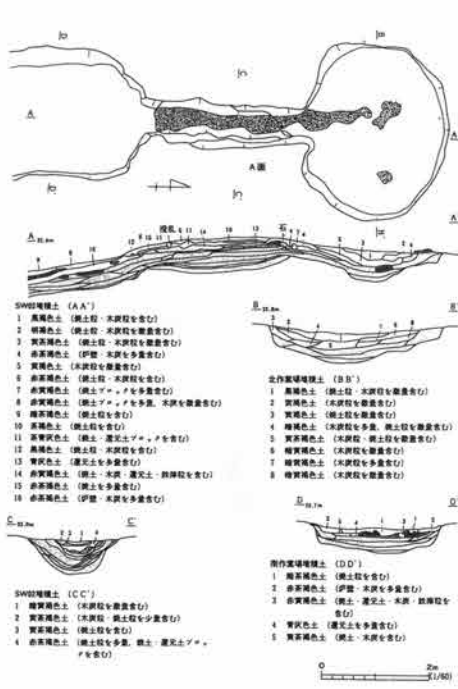
5. 滋賀県野路小野山遺跡 1号製鉄炉



6. 滋賀県南郷遺跡

4・5. 大橋信弥ほか『野路小野山遺跡』

6. 田中勝弘・用田政晴『南郷遺跡発掘調査報告書』 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会  
1987 以上より転載。



7. 寺島文隆・飯村 均・吉田秀享・新堀昭宏「向田 E 遺跡」(『相馬開発関連遺跡調査報告 I (武井地区製鉄遺跡群)』 福島県文化センター) 1989 以上より転載。

付 載 1

国営農地開発事業に伴う発掘調査抄録(当センター分)

1. 有明古墳群・横穴群

所在地 中郡大宮町三坂小字有明

調査期間 昭和60年10月～昭和61年3月

概要 階段状古墳2基。横穴3基。2号墳は13m×12m、溝幅約1.5m、高さ1.3m。埋葬施設は木棺直葬である。長さ5.2m・幅0.7m・深さ0.94mである。竪櫛3点などが出土した。

1号横穴の平面形は、フラスコ形である。玄室長2.7m・奥壁幅2.65mである。2号横穴の平面形は、フラスコ形である。3号横穴の平面形は長胴形である。これらの横穴から出土した遺物は、人骨のほか土師器、須恵器が出土している。人骨は、男2(熟年・壮年)、女2、不明2、幼児6以上。

時期は、飛鳥時代である。

2. 桃山古墳群

所在地 中郡峰山町内記小字高山

調査期間 昭和60年11月～昭和61年3月

概要 盛り土墳2基。1号墳は直径19mの円墳である。高さは尾根下方で3mである。埋葬施設は2基で、いずれも木棺直葬であった。第1主体部は棺台として河原石が置かれてあった。出土遺物には、轡、帯金具があった。第2主体部では、須恵器、鉄刀などが出土した。

2号墳は、直径11mの円墳で、高さは1.5mである。埋葬施設は木棺直葬で、木口押さえの粘土塊があった。時期はいずれも古墳時代後期である。

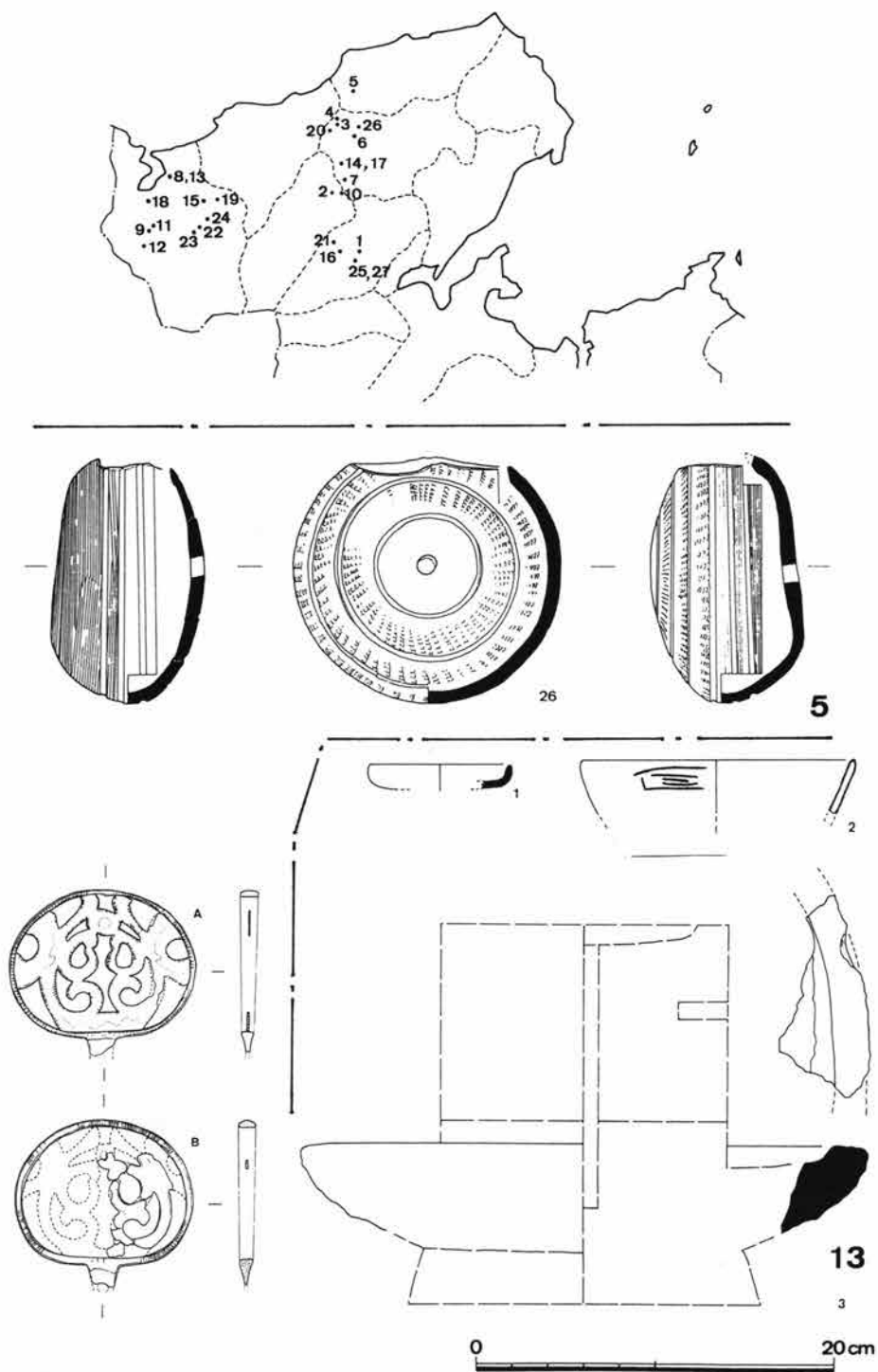
3. 宮の森古墳群

所在地 竹野郡弥栄町鳥取小字宮の森

調査期間 昭和61年4月～昭和61年7月

概要 削り出した古墳4基。1号墳は直径9mの円墳で、高さは1.3mである。外





調査遺跡ドット図、高山古墳群、鳥取城跡(番号は本文、遺跡番号に同じ)

部施設として尾根と区画する溝が設けられている。埋葬施設は、木棺直葬である。第1主体部からは、土師器、鉄刀などが出土した。第2主体部からは、碧玉製管玉や滑石製紡錘車などが出土した。

2号墳は、直径8m・高さ1mである。埋葬施設は木棺直葬で、第1主体部からは須恵器が出土した。第2主体部からは、鉄刀が出土した。3号墳は14m×11m・高さ1.2mの方墳である。第1主体部では木棺跡は検出されなかった。第2主体部からは釘やヤリガンナなどが出土した。なお、棺を2分割するかのよう掘り込みを3か所で検出した。第3主体部も同様に掘り込みを3か所で検出した。第4主体部は、長辺4.22m・短辺0.94m・深さ0.64mである。4号墳は、直径16～17m・高さ1.8mである。主体部からは、鉄剣が出土した。時期は古墳時代後期である。

#### 4. ゲンギョウの山古墳群

所在地 竹野郡弥栄町鳥取小字涼堂

調査期間 昭和61年6月～10月

概要 木棺直葬墳7基、横穴式石室墳1基、火葬墓4基、土器棺墓2基を検出した。木棺直葬墳は大宮町小池古墳群と同様に5世紀頃のものである。横穴式石室墳(1号墳)は全長4.7mで、この内玄室長3.7m・同幅0.9m・高さ1.3m程度である。出土遺物は、刀子と金環などがあつた。時期は古墳時代後期である。

#### 5. 高山古墳群・高山遺跡

所在地 竹野郡丹後町徳光小字高山ほか

調査期間 昭和61年7月～昭和62年9月

概要 横穴式石室墳6基。3号墳は直径14～15m・高さ3.5mの円墳で、石室は無袖式のものである。4号墳は、直径11m・残存高2mの円墳で、石室は無袖式のものである。5号墳は、直径12mの円墳で、石室は片袖式である。6号墳は、直径8～9mの円墳である。石室は無袖式である。7号墳は直径約8mの円墳である。石室は無袖式である。12号墳は、直径18m・残存高約2.5mの円墳である。石室は片袖式である。出土遺物は須恵器の特殊偏壺や、金銅装双龍環頭大刀柄頭などがある。

高山遺跡では、石組みのカマドをもつ住居跡を検出した。

#### 6. 普甲古墳群・稲荷古墳群

所在地 竹野郡弥栄町井辺小字普甲・小普甲

**調査期間** 昭和62年6月～12月

**概要** 普甲古墳群は、木棺直葬墳7基で、埋葬施設は、16基である。4号墳は、丘陵を階段状に削った方墳で、10m×7mである。主体部の底には木棺内を仕切るために溝が掘られていた。棺内から玉類が13点出土した。

稲荷古墳群は、木棺直葬墳4基である。17号墳の周溝からは土師器が出土した。古墳時代後期である。

#### 7. <sup>しんがお</sup>新ヶ尾東古墳群

**所在地** 竹野郡弥栄町吉沢小字半坂・坂場

**調査期間** 昭和62年12月～昭和63年1月

**概要** 木棺直葬墳2基(8・9号墳)と、竪穴系横口式石室墳1基(10号墳)である。8号墳は直径10m・高さ2mで、主体部は2基である。9号墳は直径11m・高さ2mで、主体部は2基である。10号墳は直径11m・高さ2.3mである。須恵器・土師器・鉄刀などが出土した。

#### 8. 鳥取城跡

**所在地** 熊野郡久美浜町浦明小字鳥取

**調査期間** 昭和62年5月～6月

**概要** 掘立柱建物跡など検出。測量調査主体。

#### 9. アバタ古墳群

**所在地** 熊野郡久美浜町新庄小字アバ田

**調査期間** 昭和62年7月～11月

**概要** 横穴式石室墳2基。1号墳は直径12mの円墳である。石室の全長は6.3mで、玄室長3.1m・同幅2mである。片袖式である。2号墳は直径約12mの円墳である。石室の全長は6.9m・玄室長4.4m・同幅1.9mである。片袖式である。出土遺物には馬具、鉄斧などがある。

#### 10. スクモ塚古墳群

**所在地** 中郡峰山町内記小字高山、竹野郡弥栄町吉沢小字荒木

**調査期間** 昭和63年4月～7月

**概要** 木棺直葬墳4基。埋葬施設は10基である。尾根をそれぞれ切り離したもの

である。34号墳は、直径14mの円墳である。主体部は2基である。第1主体部の底から竪櫛8点、鉄剣、刀子などが出土した。35号墳は、一辺12mの方墳である。主体部は3基である。36号墳は、10m×8.5mの方墳である。主体部は3基である。37号墳は、規模は不明である。主体部1基と土器棺が検出された。

#### 11. アバ田東1号墳

所在地 熊野郡久美浜町新庄小字アバ田

調査期間 昭和63年4月～7月

概要 直径10mの円墳である。旧状は改変されており、埋葬施設などは検出されなかった。攪乱土からは、須恵器杯が出土した。古墳時代後期。

#### 12. アサバラ遺跡

所在地 熊野郡久美浜町浦明小字鳥取

調査期間 昭和63年5月～7月

概要 一辺7mの竪穴式住居跡1基を検出した。須恵器、土師器などが出土した。古墳時代後期。

#### 13. 鳥取城跡

所在地 熊野郡久美浜町浦明小字鳥取

調査期間 昭和63年6月～8月

概要 この城は、丹後守護一色氏の武将栗田内膳正の居城で、天正10(1582)年に落城したと考えられている。遺構としては溝などがある。遺物としては青磁碗や、石臼などのように城の時期のほか、旧石器時代の可能性のある鉄石英の剥片石器がある。

#### 14. 大田古墳群・<sup>しもごう</sup>下後古墳群

所在地 竹野郡弥栄町和田野小字猪ノ蔵

調査期間 平成元年8月～10月

概要 大田古墳群では、古墳状隆起2地点を調査したが、1基は削平されており古墳とは確認されなかった。4号墳は、直径16m・高さ2.7mの木棺直葬墳である。主体部は3基である。土坑は5基検出した。第1主体部では、須恵器による転用枕を検出した。出土遺物としては、他に鉄刀や鉄鎌などがあつた。土坑1からは弥生時代後期の土器を検出した。下後古墳群では2基を調査した。うち、1号墳は直径12m・高さ1.6mで、削平

されており主体部は不明である。鉄刀1点が出土した。

#### 15. 川向<sup>かわむかい</sup>1号墳

所在地 熊野郡久美浜町大井小字川向

調査期間 平成元年4月～7月

概要 直径16m・高さ3mの円墳で、横穴式石室墳である。墳丘には列石を施している。石室は片袖式で、玄室長4.35m・同幅1.58mである。出土遺物は、須恵器をはじめ鉄刀、紡錘車、勾玉などがある。古墳時代後期。

#### 16. 阿婆田<sup>あばた</sup>窯跡群

所在地 中郡大宮町大野小字阿婆田

調査期間 平成元年8月～平成2年1月

概要 須恵器焼成窯6基を検出した。いずれも、半地下式の登り窯である。C-2号窯では環状平瓶、鉄鉢形なども出土した。なお、甕体部に車輪文のあるものもあった。奈良時代中心。

#### 17. 大田南古墳群・下後古墳群

所在地 竹野郡弥栄町和田野小字下後ほか

調査期間 平成2年4月～8月

概要 大田南古墳群では、古墳状隆起5基を調査した結果、古墳とは確認できなかった。下後古墳群では、3基の木棺直葬墳を検出した。2基は円墳で、5号墳だけが方墳であった。

#### 18. 横浦古墓

所在地 熊野郡久美浜町栃谷小字横浦

調査期間 平成2年4月～7月

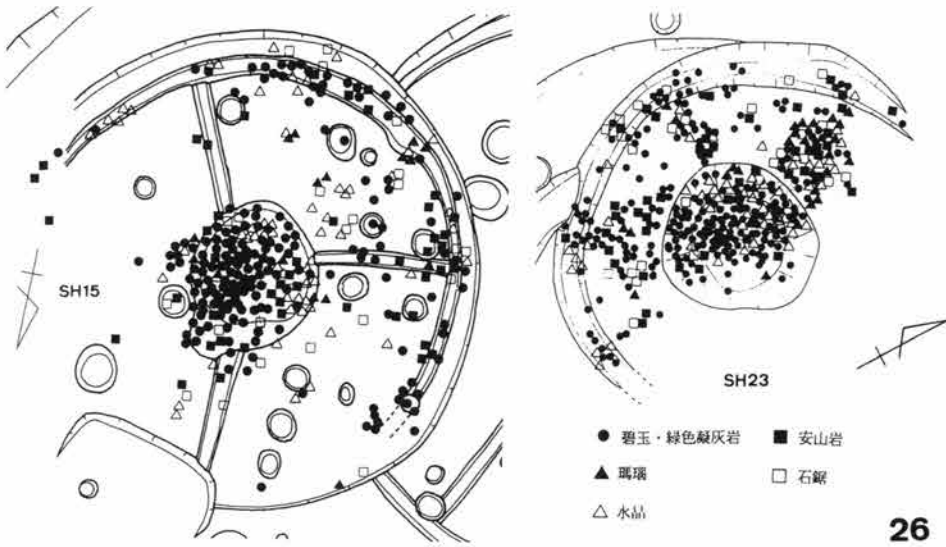
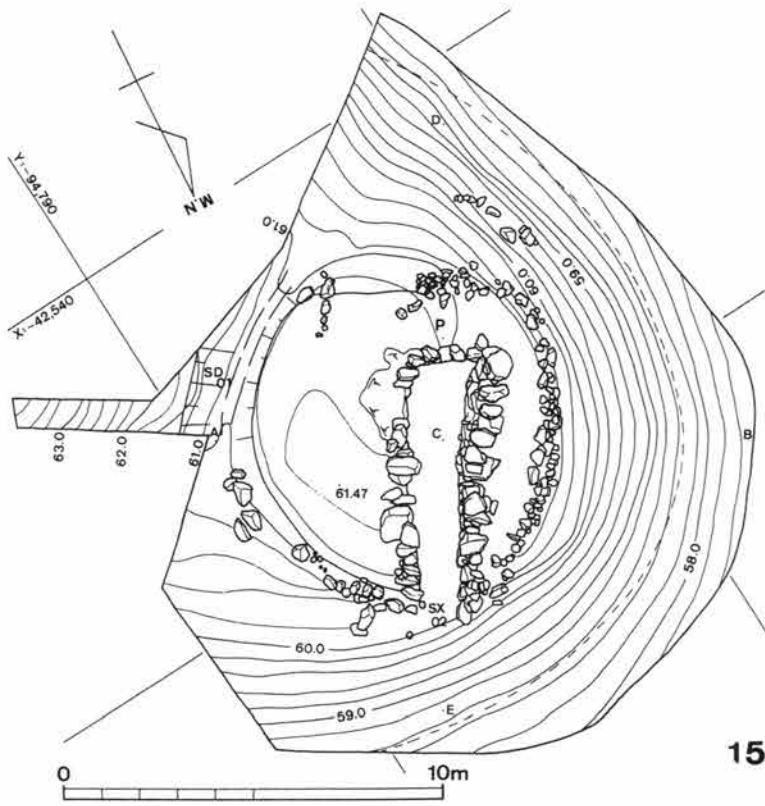
概要 近世の土壙墓1基が検出された。

#### 19. 山形古墓群

所在地 熊野郡久美浜町大井小字山形

調査期間 平成元年7月～8月、平成2年4月～6月

概要 14基の墳墓と、茶毘跡1基、建物跡1基を検出した。小石室の中に土師器



川向1号墳、奈具岡遺跡

筒形土器を入れたものもあった。時期は中世である。

## 20. 遠所遺跡・遠所古墳群

所在地 竹野郡弥栄町木橋小字遠所

調査期間 平成2年4月～平成5年2月(中断あり)

昭和62年8月～平成4年3月(中断あり)

概要 遠所遺跡では、製鉄炉8基、鍛冶炉32基、炭窯150基以上、須恵器登り窯6基、建物跡50基以上を検出した。時期は古墳時代後期から奈良時代を中心とする。注目される遺物としては、墨書土器や呪符木簡などがあり、官と深いつながりを示唆している。

遠所古墳群では、22基の古墳を検出した。この内、竪穴系横口式石室は4基で、木棺直葬墳は18基である。古墳時代後期。

## 21. 通り古墳群

所在地 中郡大宮町口大野小字通りほか

調査期間 平成3年5月～10月

概要 木棺直葬墳3基である。1号墳は直径28m・高さ3.5mの円墳で、主体部は1基である。鼓形器台や刀子が出土した。2号墳は直径20m・高さ2mの円墳で、主体部は2基である。第1主体部から歯牙を検出した。なお、頭位は西である。第2主体部からはガラス小玉が82点出土した。また、土器棺も検出された。3号墳は8m×14mの方墳である。主体部は2基である。第1主体部では、棺上で土師器高杯1点と器台1点検出された。第2主体部では微量ではあるが、赤色顔料が検出された。

## 22. 堤谷古墳群

所在地 熊野郡久美浜町丸山小字堤谷

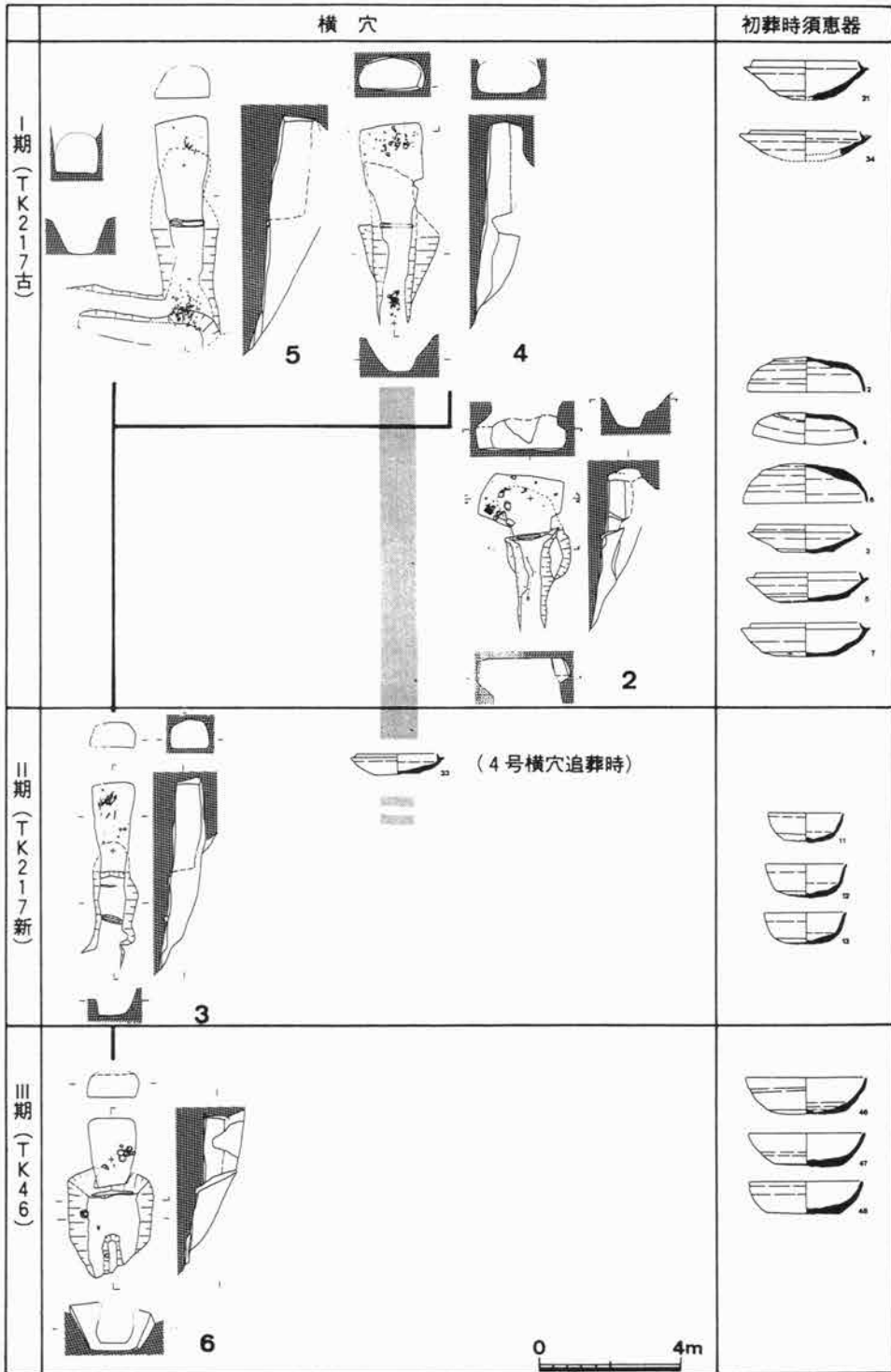
調査期間 昭和63年8月～11月、平成3年5月～9月

概要 木棺直葬墳9基を検出した。いずれも尾根を削り出したものである。埋葬施設は14基である。このうち、4基は古墳時代前期で、これ以外は中期末から後期初頭である。

## 23. 野中城跡

所在地 熊野郡久美浜町丸山小字野中

調査期間 平成3年9月～10月



里ヶ谷横穴群 横穴分類・変遷図



**概 要** 堀切1か所検出。幅10m・深さ3m。

#### 24. 薬師古墳群

**所在地** 熊野郡久美浜町女布小字薬師

**調査期間** 平成4年5月～8月

**概 要** 古墳2基。7号墳は直径11.5mの円墳である。本格調査は今年度実施した。8号墳は10m×7.5mの方形の隆起部があり、これを古墳と考えていた。調査の結果、石仏や五輪塔などを使用した中世墓であることが判明した。

#### 25. 里ヶ谷横穴群

**所在地** 中郡大宮町周枳小字里ヶ谷

**調査期間** 平成4年8月～平成5年1月

**概 要** 横穴6基。平面が無袖長方形を呈する玄室がほとんどである。丹後地方で確認されている最古の横穴は6世紀末頃であるが、今回の例は、平面形もそれと同じである。

#### 26. 奈良岡遺跡・奈良谷遺跡

**所在地** 竹野郡弥栄町溝谷小字奈良岡

**調査期間** 平成4年6月～10月

**概 要** 弥生時代中期の建物跡22基、土坑3基、奈良時代の掘立柱建物跡2棟、鍛冶炉・炭窯各1基などがある。ここでは、碧玉・緑色凝灰岩製管玉未製品などが検出され、水晶も含めた玉作り工房群のあったことが判明した。奈良谷遺跡は本概報に掲載。

#### 27. 左坂<sup>ささか</sup>古墳群

**所在地** 中郡大宮町周枳小字幾坂ほか

**調査期間** 平成2年8月～平成3年3月、平成4年9月～11月

**概 要** 平成2年はC支群7基、D支群2基、E支群3基を調査した。いずれも木棺直葬墳である。平成4年はC支群7基を一部調査した。

(伊野近富)

付 載 2

女<sup>によ</sup>布<sup>う</sup>城 跡

1. はじめに

女布城跡は、熊野郡久美浜町女布に所在する。この調査は女布団地造成に伴い実施した。調査期間は、平成4年12月17日から3月3日である。ほとんど測量調査である。担当は調査第2課、調査第1係長伊野近富と同係調査員黒坪一樹である。測量は、空中写真撮影で行った。図化対象となったのは城の本体から女布の集落側におりた丘陵端である。

なお、図化対象面積は6,000m<sup>2</sup>である(地点は第174図参照)。

2. 女布城の現状

女布城跡は、佐野谷川東岸に位置し、城の本体は女布の集落の北東側、集落と50mほどの比高差がある丘陵頂部に想定できる。

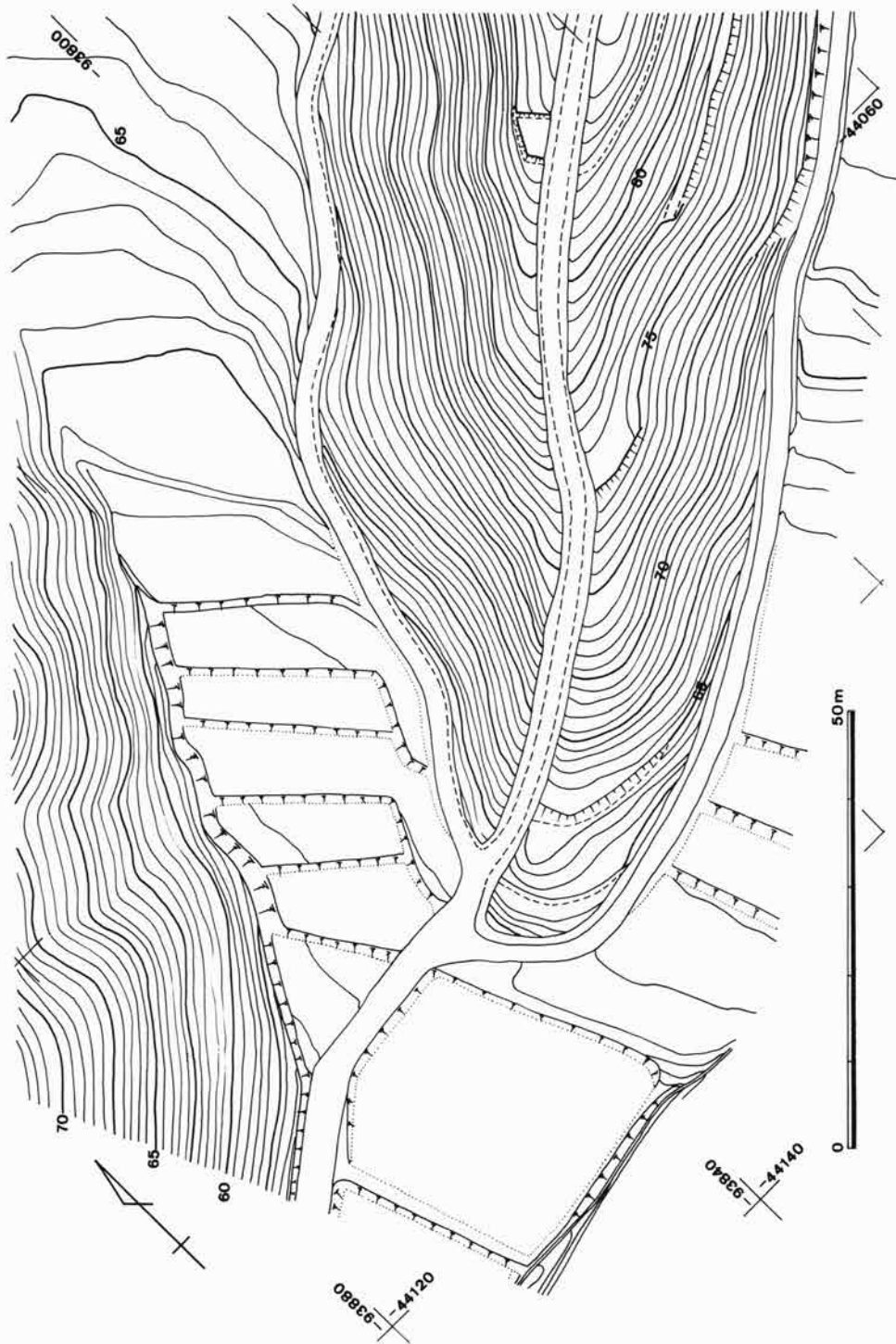
【丹後旧事記】には「天正十年(1582)正月三日 女布城 森脇宗坡」とあり、天正年間には森脇氏の居城であったことが知られる。図化した現状は、幅30~40mの丘陵中央部に山道が通っている。その規模は上端幅で9m、深さは2mである。山道を隔てた北側には、丘陵稜線に沿って幅4mほどの緩傾斜部分があり、このうち1か所に限って、人工的に地形を改変した平坦地が確認できた。現状では4m×5mの方形で、丘陵上部を10cmほど削り同下部でも10cmほどの段差を認めることができる。山道を隔てた南側では丘陵稜線に沿って幅5mほどの緩傾斜があり、これは標高70mまでで終息している。この緩傾斜より一段下がった丘陵腹部では、幅1mほどの平坦面が細長く続いており、これが城に伴う道である可能性がある。丘陵端では、6m×6mほどの平坦面がある。なお、丘陵裾部は現在小道があり、谷の奥へと続いているが、この道がいつごろ造られたかについては不明である。

丘陵両側は、現在休耕田となっている。ここに、城の痕跡を認めることは困難である。

3. おわりに

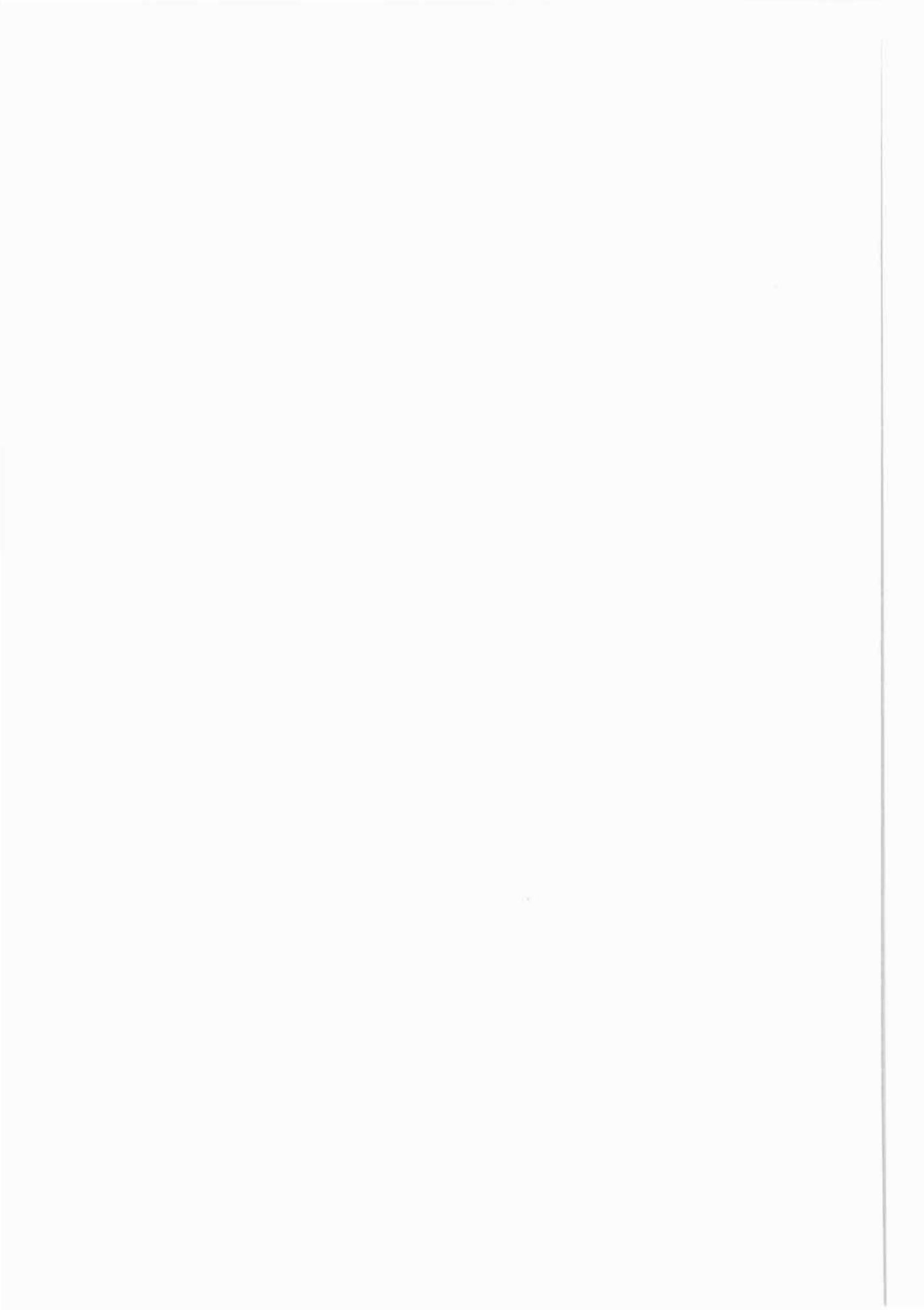
以上のとおり、図化した地点は女布城跡の最下端とおぼしきところであり、一部分で施設と思われる状況を確認した。本稿が、城の基礎資料として、活用されることを願う。

(伊野近富)



女布城跡測量図

圖 版



図版第1 左坂古墳群



(1) 左坂E・C支群調査前全景（北東から）



(2) 左坂C14～20号墳調査前全景（東から）

図版第2 左坂古墳群



(1) 左坂C14~20号墳調査後全景（東から）



(2) 左坂C14号墳調査後全景（北から）



(1) 左坂C15号墳主体部全景（南から）



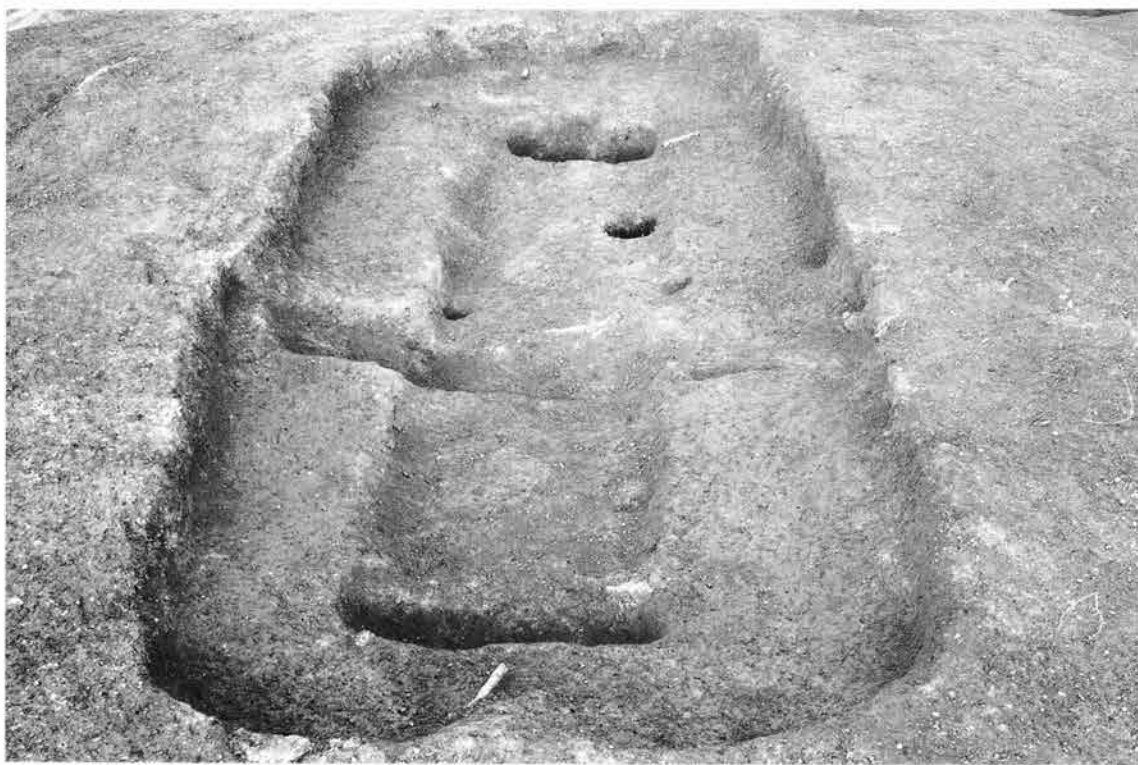
(2) 左坂C15号墳遺物出土状況（北から）



図版第4 左坂古墳群



(1) 左坂C16号墳全景 (南から)



(2) 左坂C16号墳主体部全景 (西から)



(1) 左坂C16号墳遺物出土状況



(2) 左坂C17号墳主体部全景（東から）

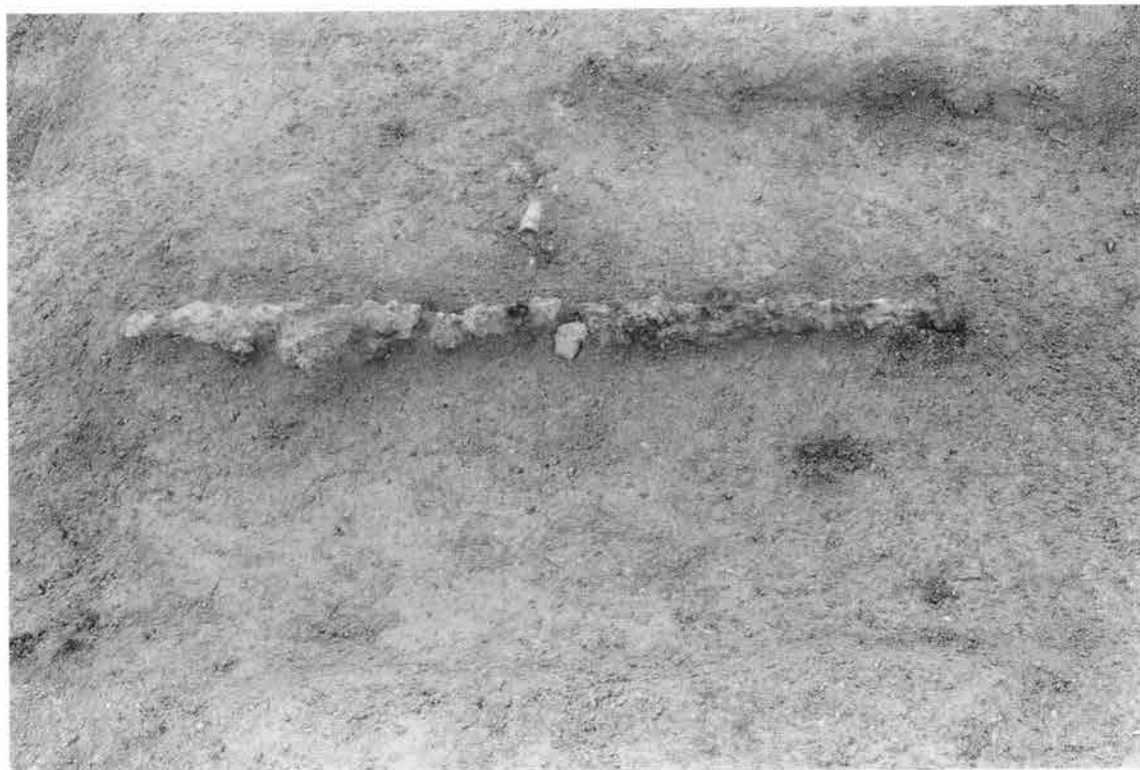
図版第6 左坂古墳群



(1) 左坂C18～20号墳調査後全景（南から）



(2) 左坂C18号墳主体部全景（東から）



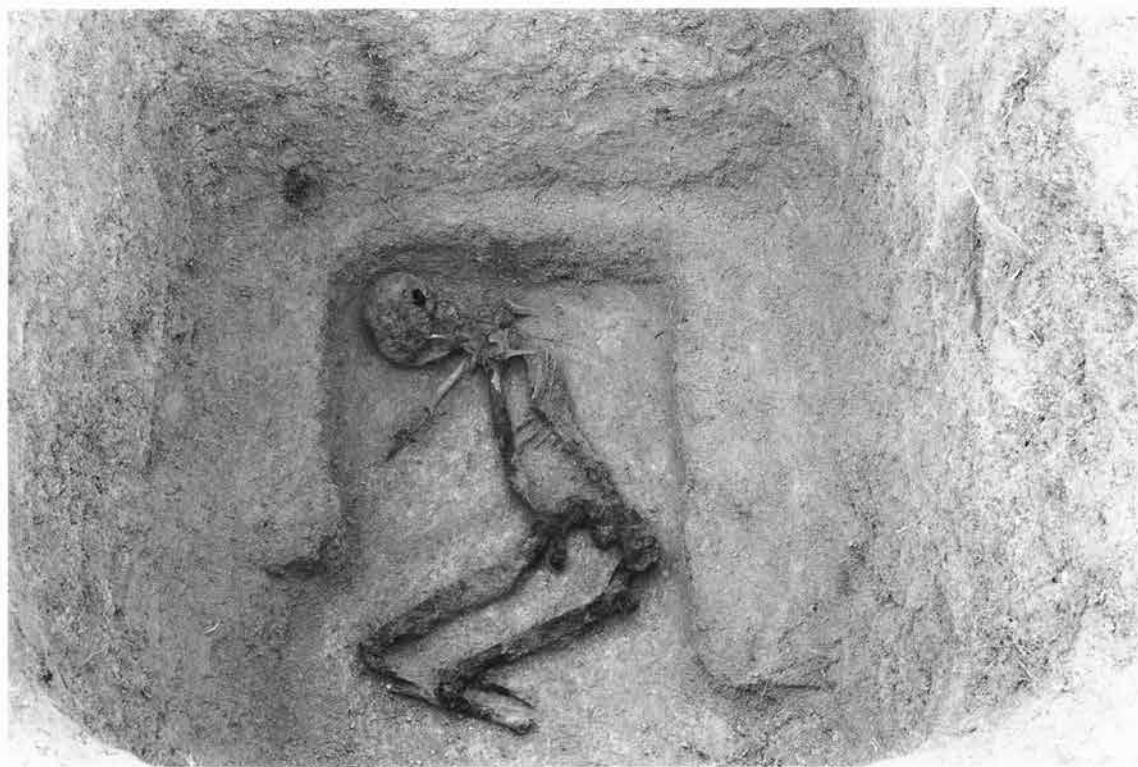
(1) 左坂C18号墳鉄刀出土状況（南から）



(2) 左坂C19号墳主体部土層断面（西から）



(1) 左坂C19号墳主体部全景（西から）



(2) 左坂C20号墳近世墓人骨検出状況（南から）



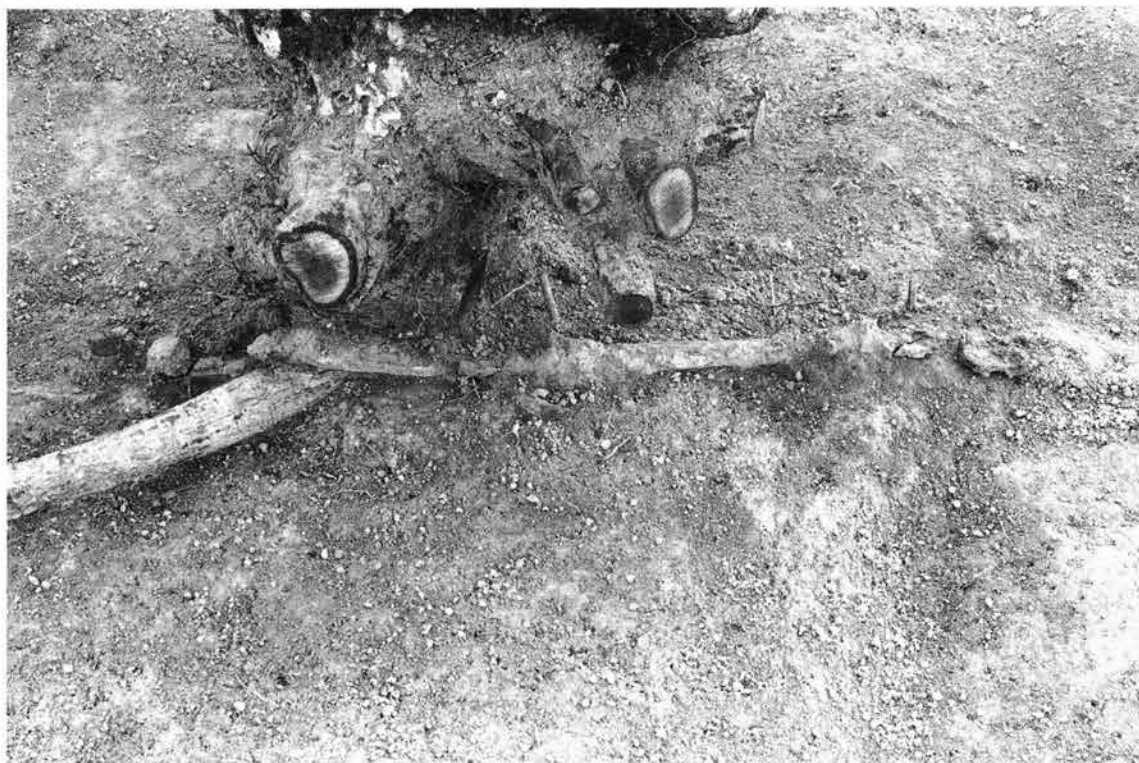
(1) 左坂D12号墳調査前全景（南から）



(2) 左坂D12号墳調査後全景（南から）



(1) 左坂D12号墳主体部全景（西から）



(2) 左坂D12号墳鉄刀出土状況（北から）

図版第11 左坂古墳群



(1) 左坂C 9～11号墳調査前全景（北西から）

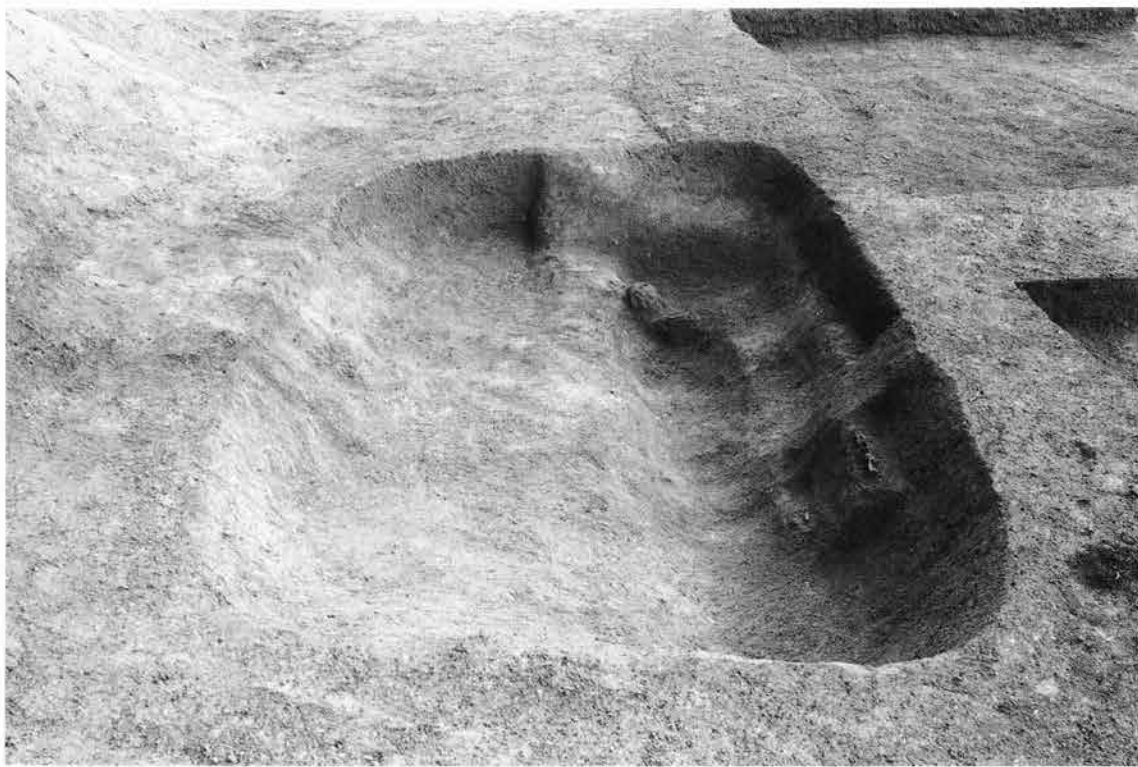


(2) 左坂C 9～11号墳調査後全景（北西から）





(1) 左坂E 9号墳第1～第3主体部全景（南から）



(2) 左坂E 9号墳第3主体部全景（東から）

図版第13 左坂古墳群



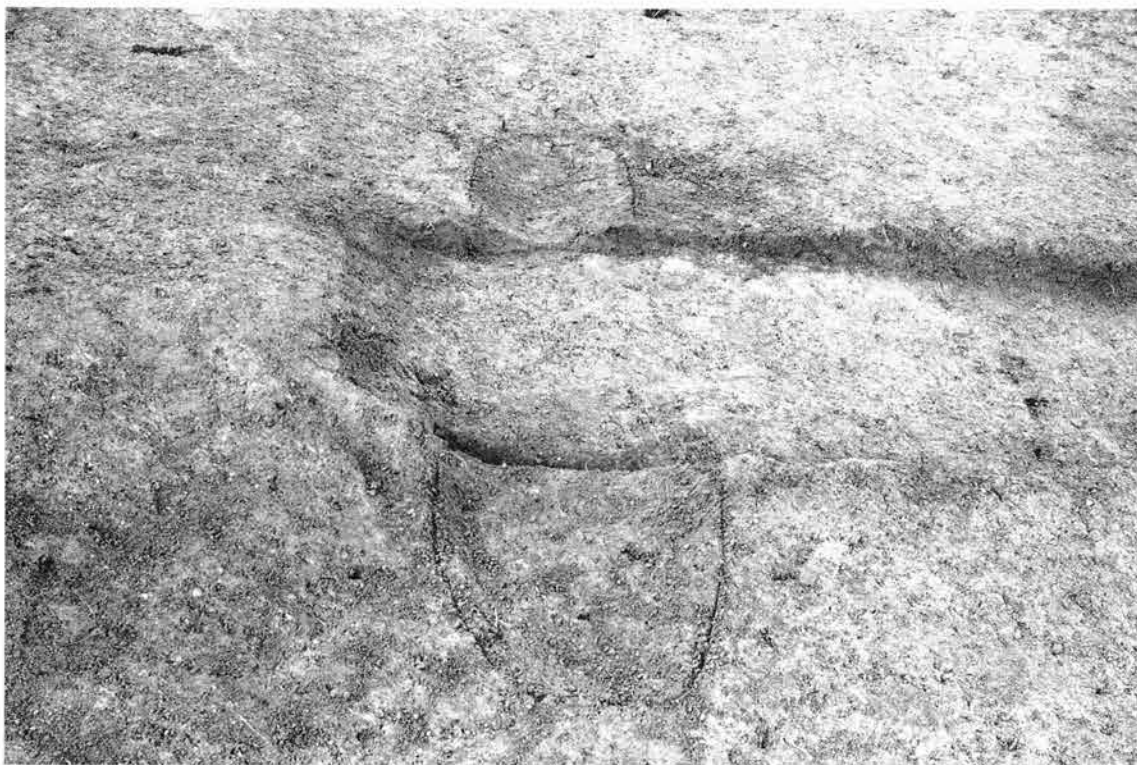
(1) 左坂E9号墳第3主体部鉄鍬出土状況（東から）



(2) 左坂E9号墳墳丘土層断面（北半部、西から）



(1) 左坂E10号墳調査後全景（南から）



(2) 左坂E10号墳第1主体部全景（東から）



(1) 左坂E10号墳第2主体部全景(東から)



(2) 左坂E10号墳第3主体部(右)・第4主体部(左)全景(東から)



(1) 左坂E10号墳墳丘土層断面（西から）



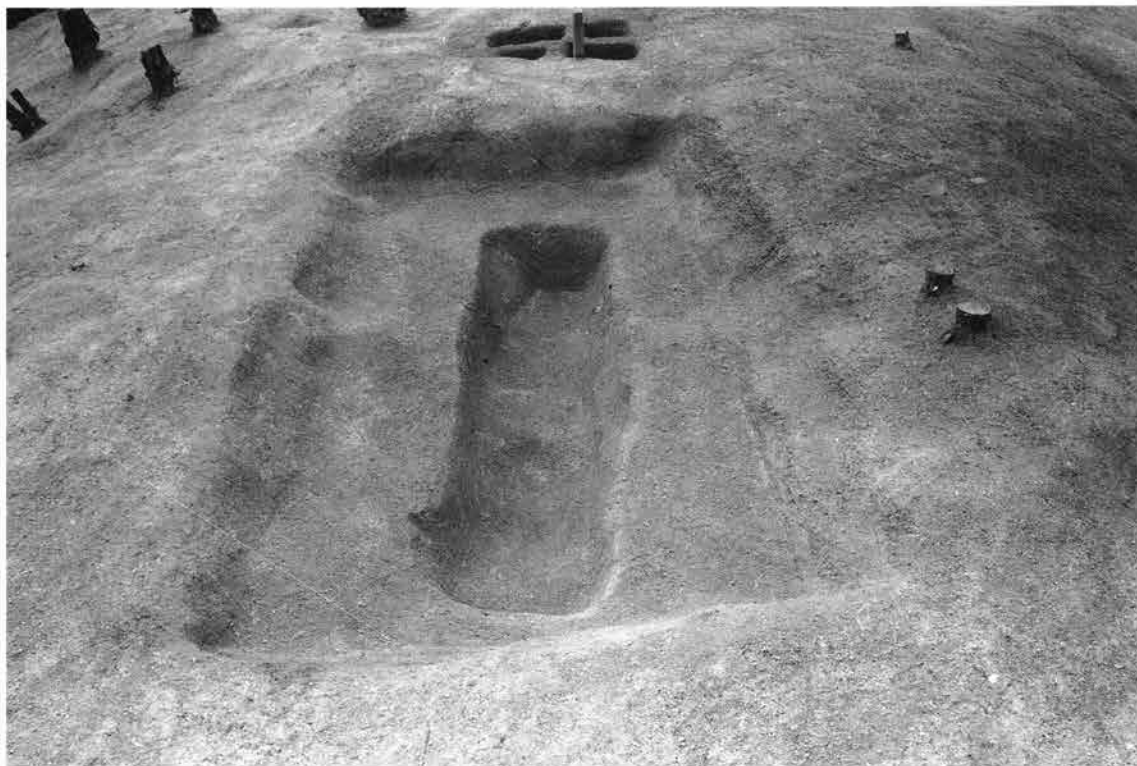
(2) 左坂E11号墳墳丘土層断面（西から）



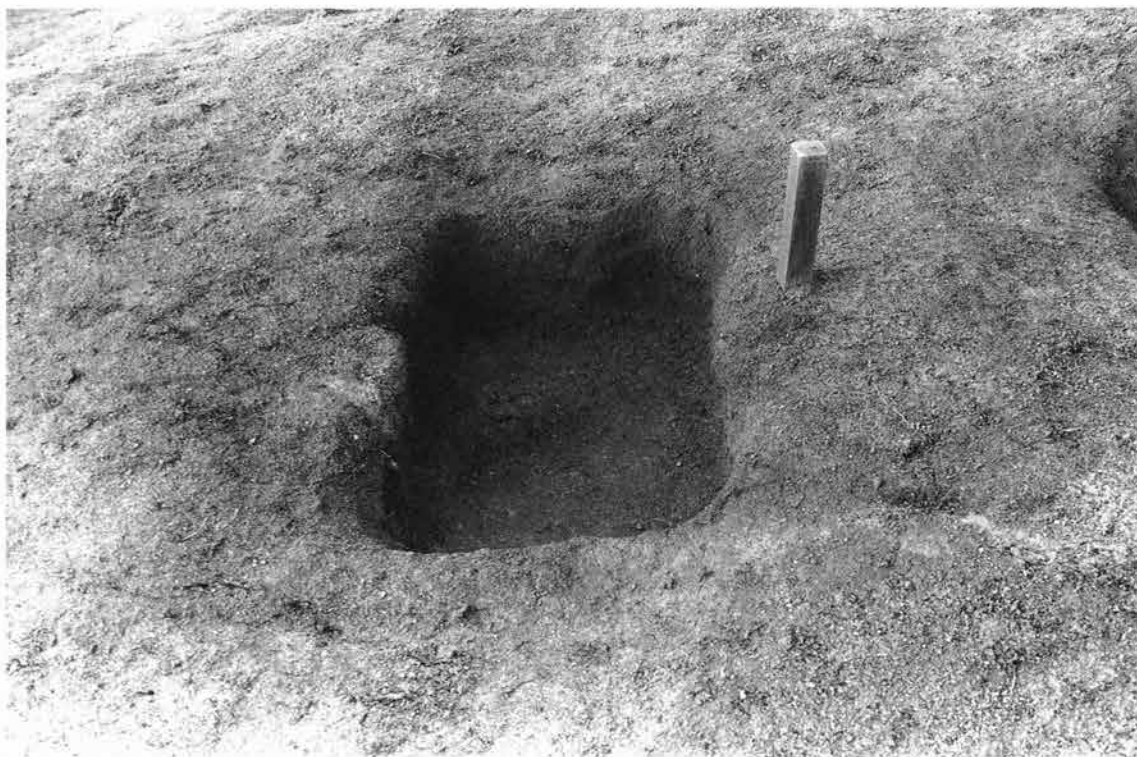
(1) 左坂G支群調査前全景（東から）



(2) 左坂G支群調査後全景（北上空から）



(1) 左坂G10号墳第1主体部全景（東から）



(2) 左坂G10号墳第2主体部全景（南から）



(1) 左坂G11号墳第1主体部全景（西から）



(2) 左坂G11号墳第2主体部全景（東から）





(1) 左坂G12号墳調査後全景（東から）



(2) 左坂G12号墳第1主体部全景（東から）



(1) 左坂G12号墳第1主体部遺物出土状況(1) (北から)



(2) 左坂G12号墳第1主体部遺物出土状況(2) (北西から)



(1) 左坂G12号墳第1主体部遺物出土状況(3)



(2) 左坂G12号墳第2主体部全景



(1) 左坂G12号墳第2主体部遺物出土状況（西から）



(2) 左坂G12号墳第3主体部全景（南から）



(1) 左坂G13号墳第1・第2主体部全景（西から）



(2) 左坂G13号墳第1主体部遺物出土状況（西から）



8



16



14



66



67



68



79



82



84



85



86



88



90



92



83



89



95



96



93

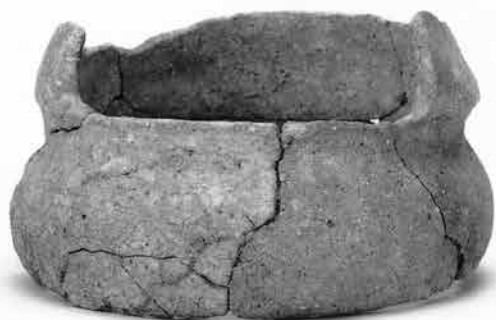




81



87



98



99



100

104



103



13



64



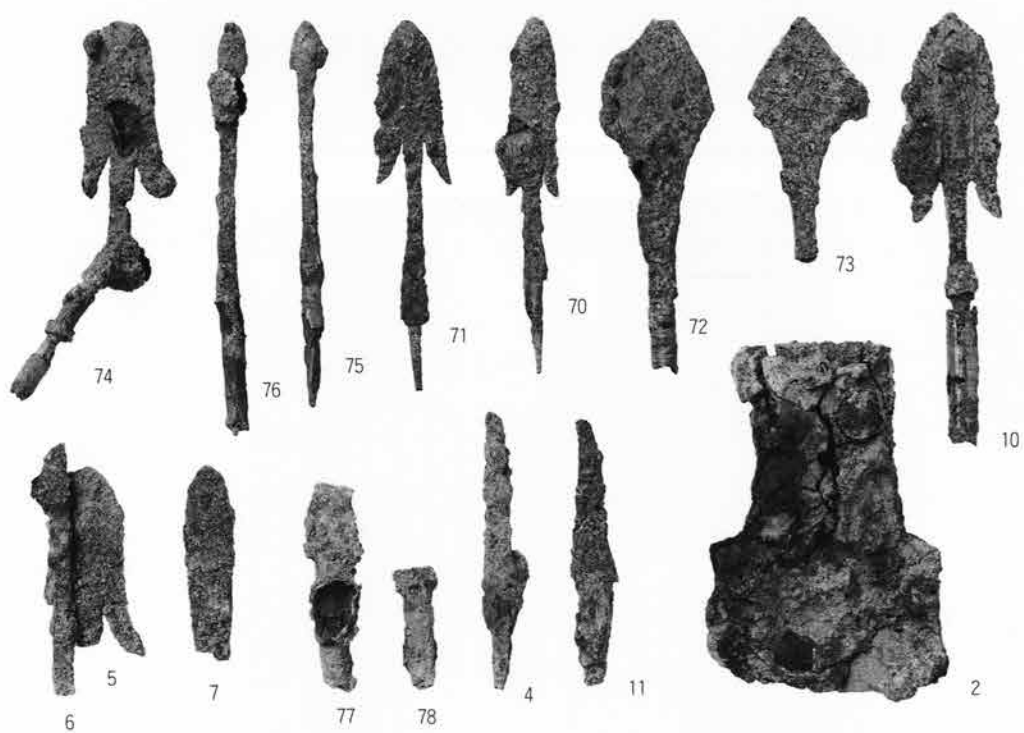
12



1



80



C15号墳出土鉄滓



(1) 左坂横穴群調査前風景（全景）



(2) 左坂横穴群調査前風景（丘陵斜面部分）



(1) 左坂B 1～9号横穴全景（東から）



(2) 左坂横穴群作業風景



(1) 左坂B1・B2号横穴全景（東から）



(2) 左坂B1号横穴前庭部遺物出土状況（東から）



(1) 左坂B 1号横穴玄室内遺物・焼骨出土状況（東から）



(2) 左坂B 1号横穴前庭部出土遺物



(1) 左坂B 2号横穴前庭部遺物出土状況（東から）



(2) 左坂B 2号横穴玄室内焼骨出土状況

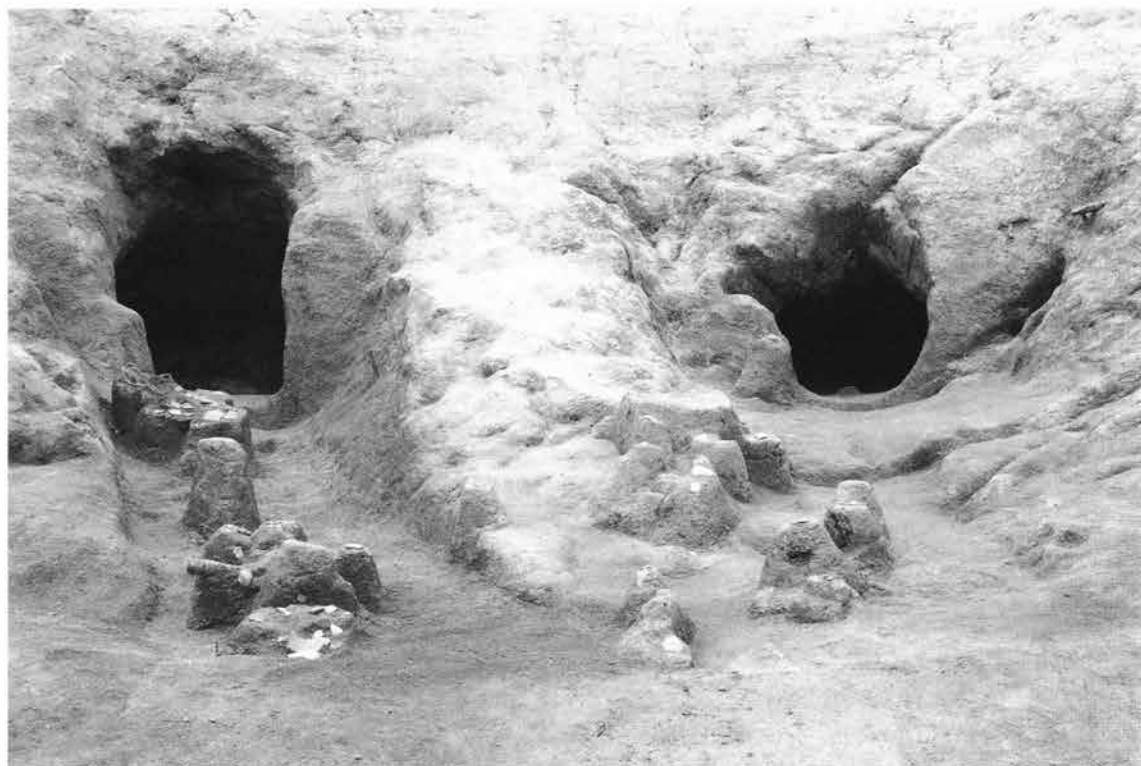




(1) 左坂B 3号横穴全景（東から）



(2) 左坂B 4・B 5横穴作業風景（北から）



(1) 左坂B 4・B 5号横穴全景（東から）



(2) 左坂B 4号横穴全景（東から）



(1) 左坂B 4号横穴玄室内遺物出土状況（東から）



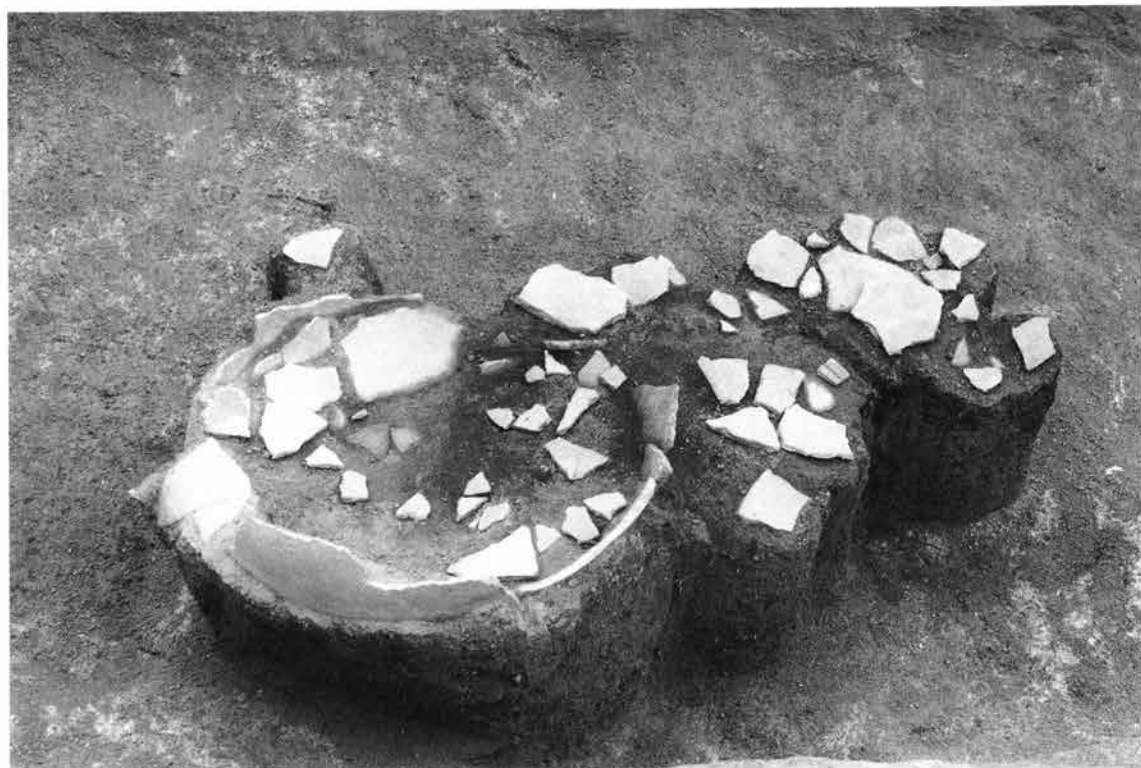
(2) 左坂B 4号横穴玄室内人骨出土状況（東から）



(1) 左坂B 4号横穴前庭部遺物出土状況 (南西から)



(2) 左坂B 4号横穴板戸痕跡 (南から)



(1) 左坂B 4号横穴須恵器大甕出土状況（南から）



(2) 左坂B 4号横穴須恵器大甕出土状況（北から）



(1) 左坂B 5号横穴全景（東から）



(2) 左坂B 5号横穴玄室内遺物出土状況（東から）



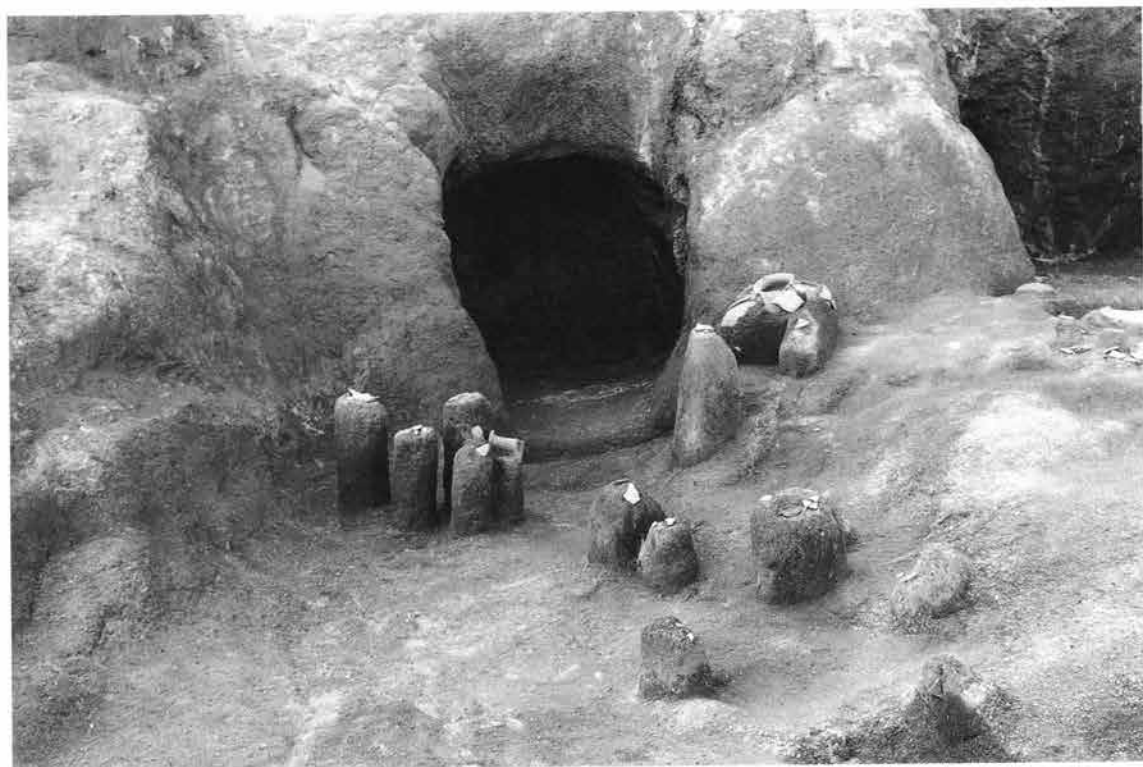
(1) 左坂B 6号横穴全景



(2) 左坂B 7・B 8・B 9号横穴作業風景 (北から)



(1) 左坂B7・B8・B9号横穴全景（東から）



(2) 左坂B7号横穴全景（東から）





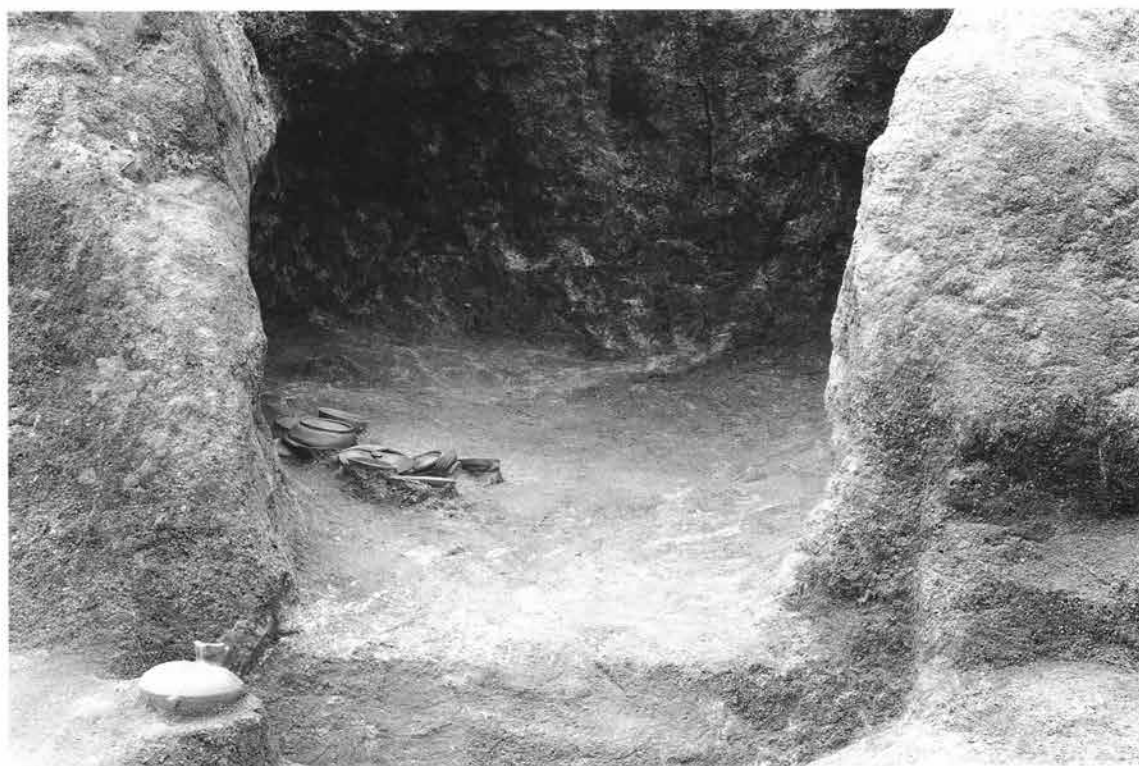
(1) 左坂B 7号横穴玄室内遺物出土状況（東から）



(2) 左坂B 7号横穴前庭部出土遺物（南から）



(1) 左坂B 8号横穴全景



(2) 左坂B 8号横穴玄室内遺物出土状況（東から）



(1) 左坂B 8号横穴玄室内遺物出土状況（東から）



(2) 左坂B 8号横穴玄室内遺物出土状況（北から）



(1) 左坂B 8号横穴前庭部出土遺物（北から）



(2) 左坂B 8号横穴前庭部出土遺物（東から）



(1) 左坂B 9号横穴全景（東から）



(2) 左坂B 9号横穴玄室内遺物出土状況（東から）



(1) 左坂B9号横穴玄室内遺物出土状況（南東から）



(2) 左坂B9号横穴玄室内遺物出土状況（北東から）



(1) 左坂B11号横穴全景（南西から）



(2) 左坂B11号横穴前庭部遺物出土状況（南西から）



(1) 左坂B13号横穴全景（南東から）



(2) 左坂B10～12号横穴作業風景





(1) 火葬墓全景（南から）



(2) 火葬墓全景（東から）



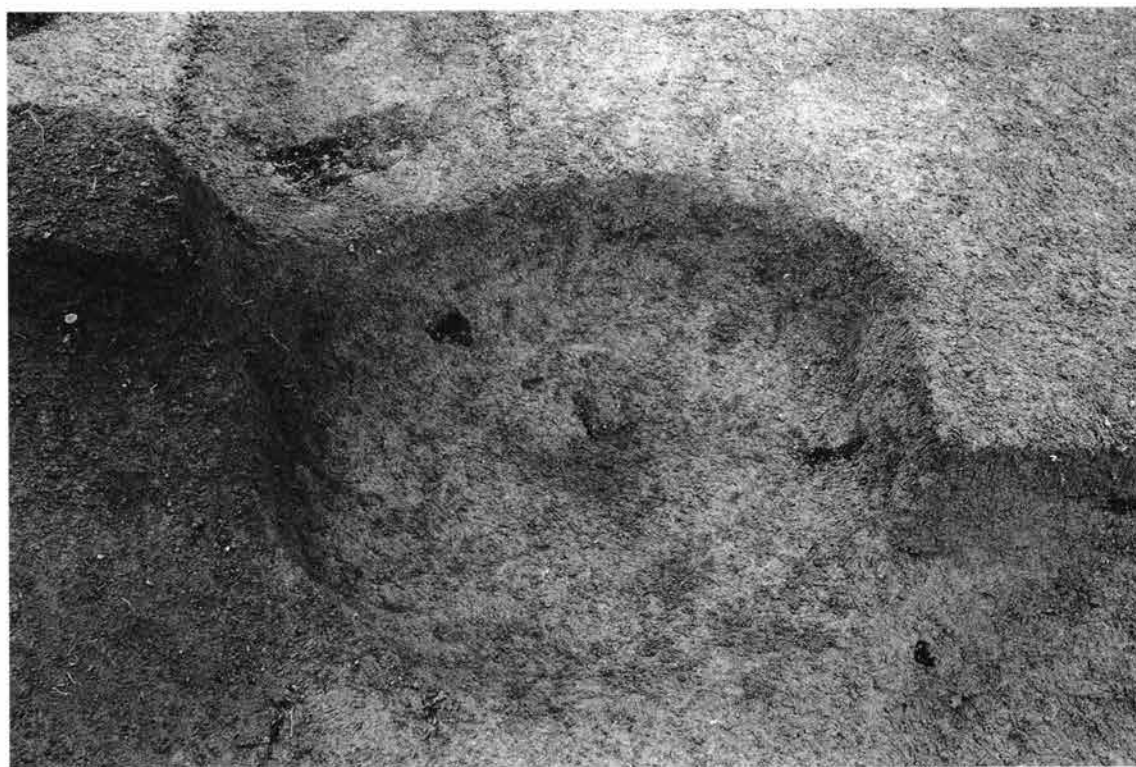
(1) 藏骨器検出状況（南から）



(2) 藏骨器



(1) 藏骨器内烧骨



(2) 藏骨器埋納土坑完掘狀況



(1) 左坂B 6号横穴全景（東から）



(2) 左坂B 12号横穴全景（南から）



1



3



2



4



5



7



6



8



10



12



11



14



13



20



24



22



25



26



30



31



36



37



34



35



38



39



45



41



46



43



47



48



49



50



51





52



53



40



42



44



55



54



58



73



76



74



78



75



79



64



78·79



66



70



67



71



68



72



出土遺物 (7)



(1) 木炭窯1・2全景(東から)



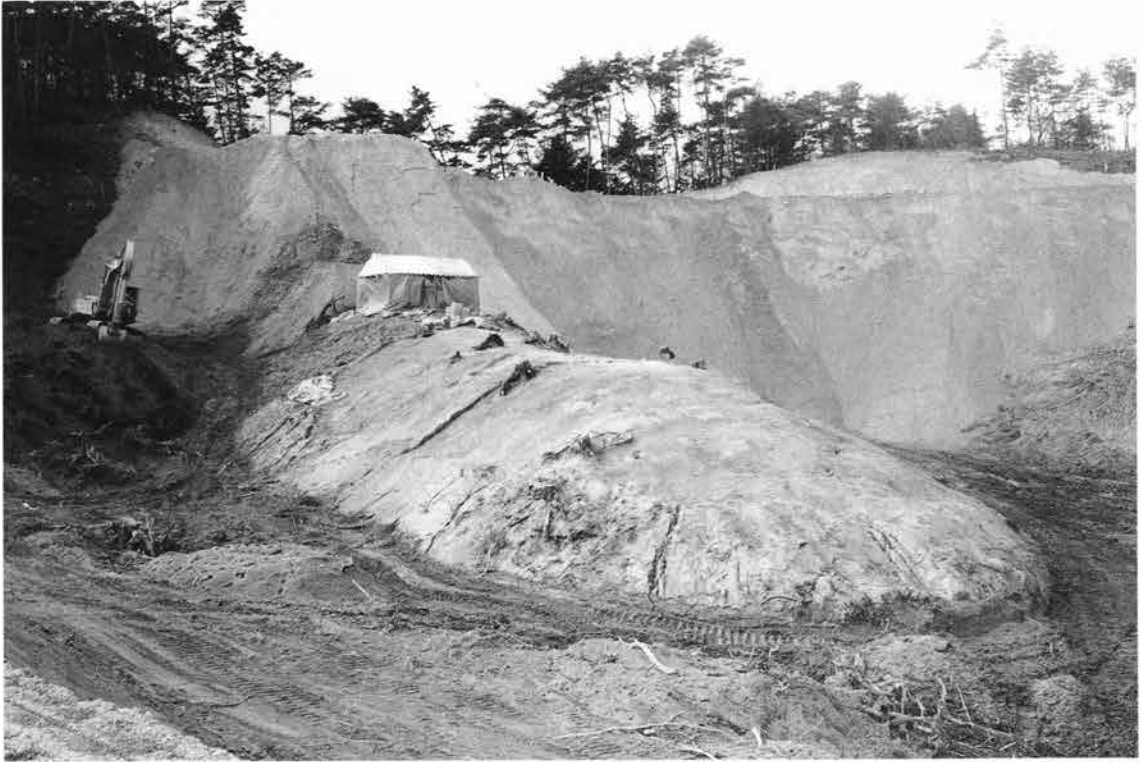
(2) 木炭窯1近景(東から)



(1) 木炭窯4・土器埋納土坑全景（南西から）



(2) 土器埋納土坑遺物出土状況（北西から）



(1) 製鉄炉周辺全景（南東から）



(2) 製鉄炉検出状況（北北西から）



(1) 製鉄炉全景（南南東から）



(2) 製鉄炉全景（東から）



(1) 製鉄炉東側石列（北西から）

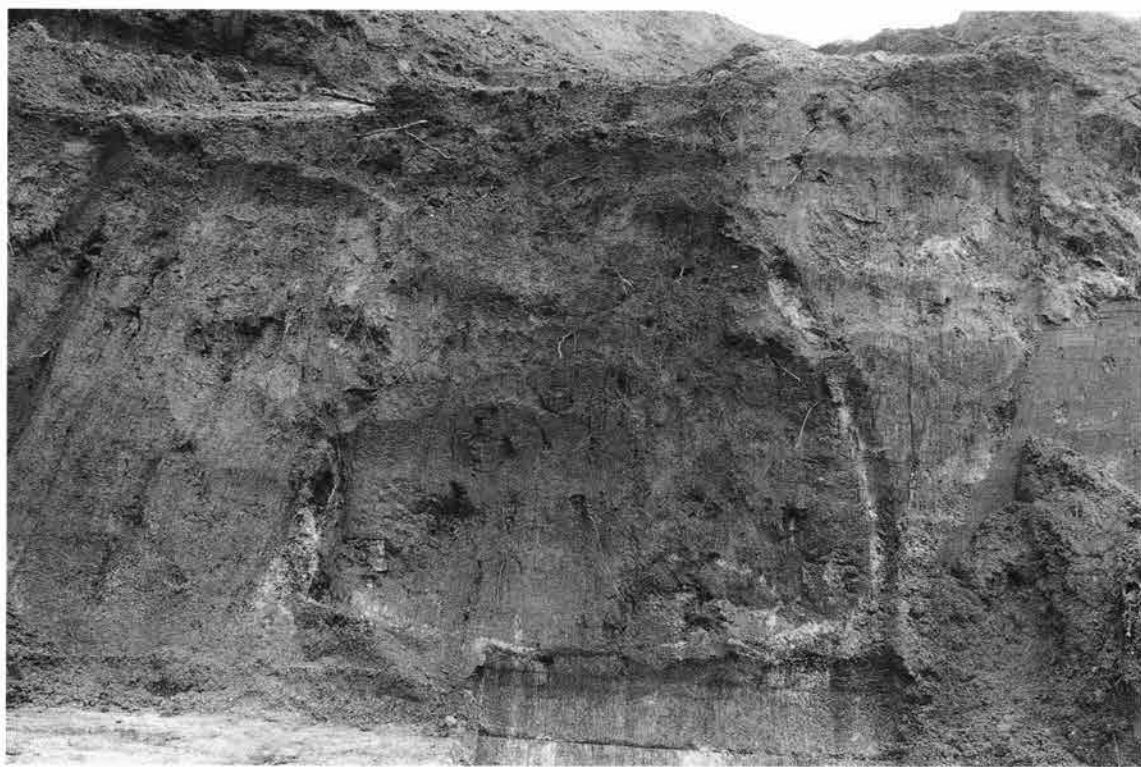


(2) 製鉄炉周辺全景（西から）





(1) 木炭窯2 近景 (南から)



(2) 木炭窯5 炭化部断面 (南東から)



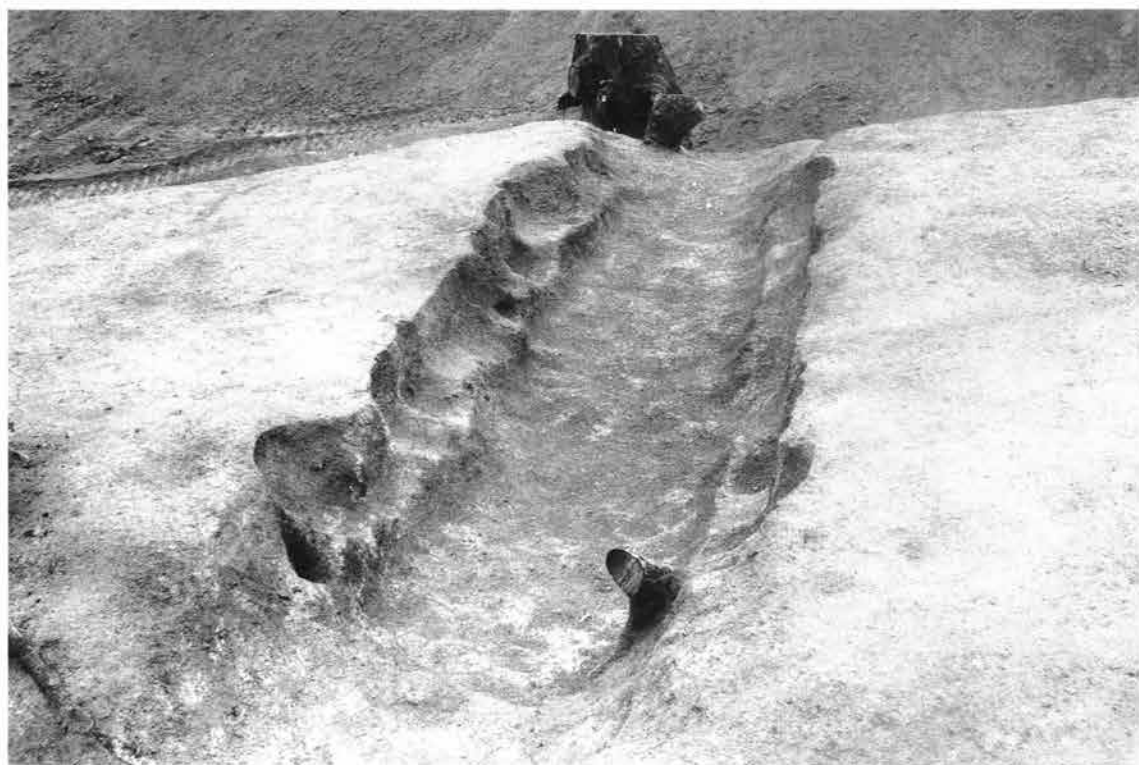
(1) 製鉄炉全景（北北西から）



(2) 製鉄炉西側石列（北から）



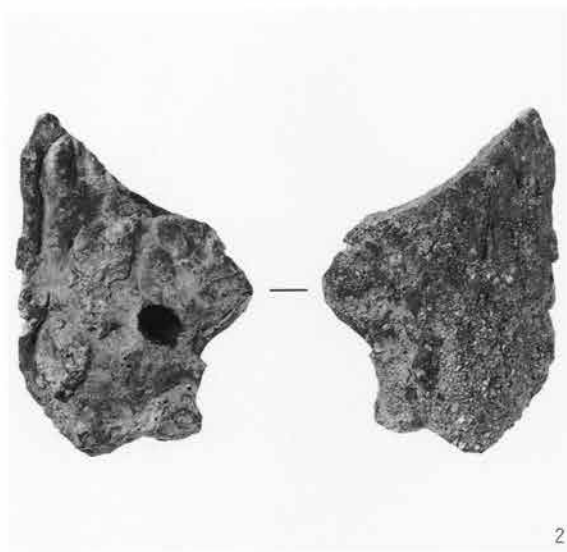
(1) 製鉄炉中央断面（北北西から）



(2) 製鉄炉石列除去後全景（北北西から）



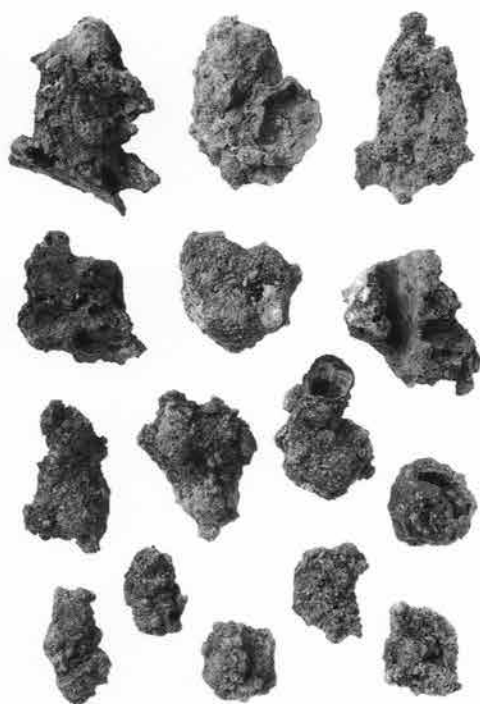
1



2



3



4



5

出土遺物 (1) 1. 土師器 2. 鉄滓 3. 流出滓  
4. 粉炭層出土鉄塊 5. 粉炭層出土鉄滓

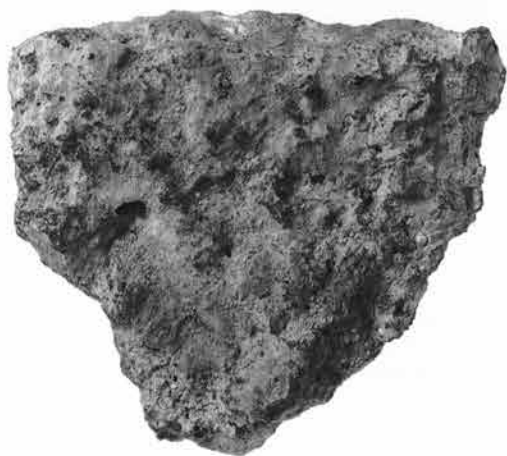


6



7

8



9



(1) 奈具岡遺跡第4次調査地点



(2) 奈具谷遺跡と奈具岡遺跡第4次調査地点



(1) 板杭列検出状況（上層）



(2) 板杭列と加工木材（上層）



(1) 流路跡(SD01)検出状況(下層)



(2) 調査地全景(下層)





(1) 流路跡(SD01)埋土の土層堆積状況(板列除去後)



(2) 遺構ベースの土層堆積状況



(1) 板列1・板列2 検出状況 (東から)



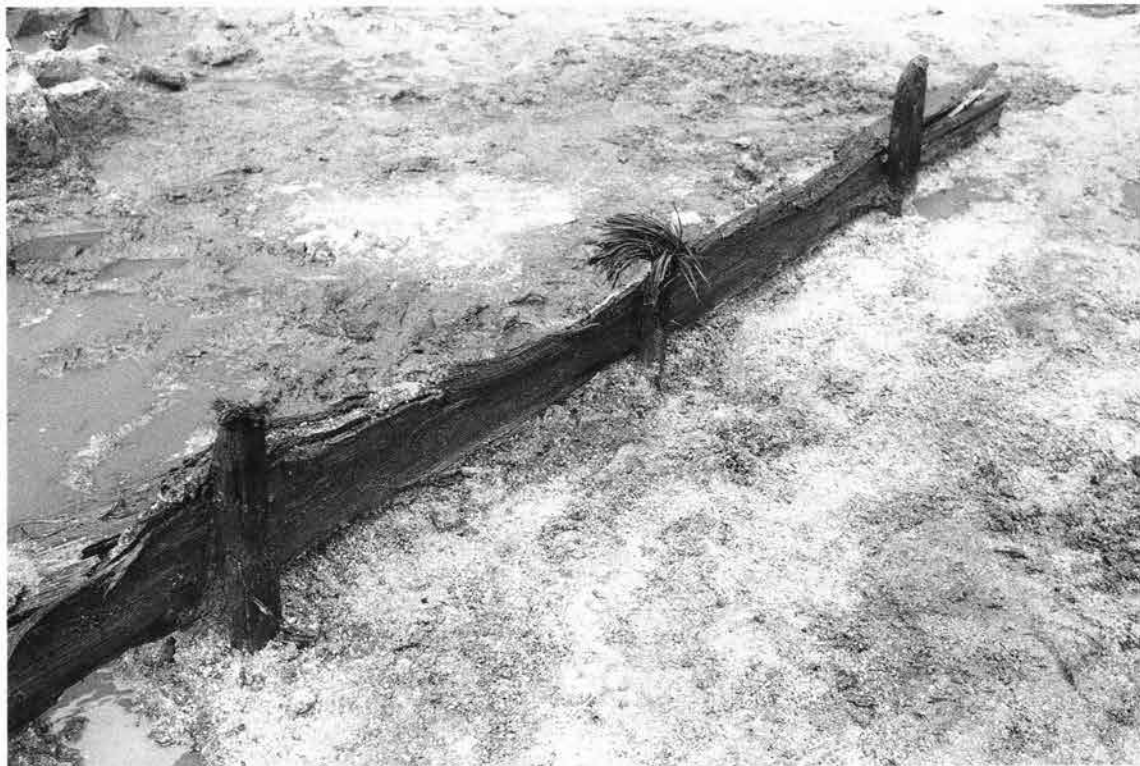
(2) 板列1・板列2 検出状況 (南から)



(1) 板列1の固定状況(南西から)



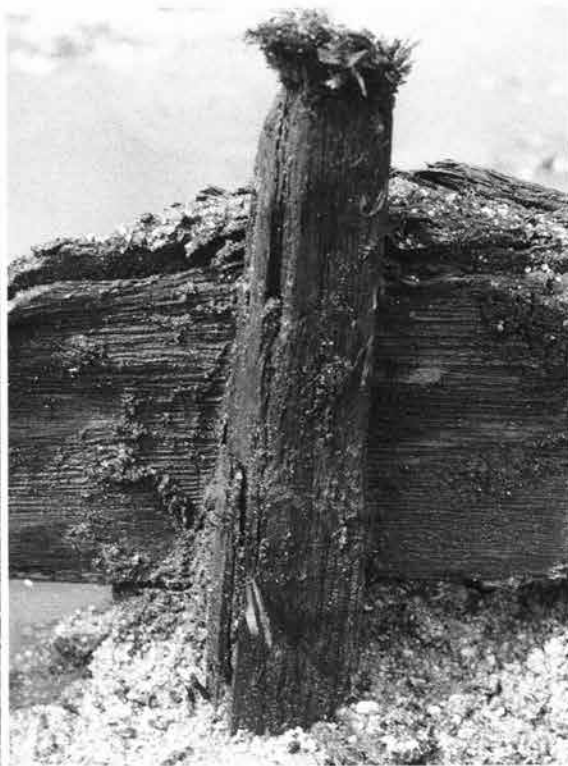
(2) 板列1の固定状況(南から)



(1) 板列4の固定状況(南西から)



(2) 杭による板の固定状況(1)



(3) 杭による板の固定状況(2)



(1) 橋状の施設（東から）



(2) 橋状の施設（細部）



(3) 橋状の施設（細部）



(1) 取水口状の施設（上から）



(2) 取水口状の施設（南から）



(1) 取水口状の施設 (西から)



(2) 取水口状の施設 (南東から)



(1) 取水口状の施設としがらみ（南西から）



(2) 取水口に固定された槽としがらみ（南西から）





(1) 槽の固定状況 (西から)



(2) 槽としがらみ (南から)



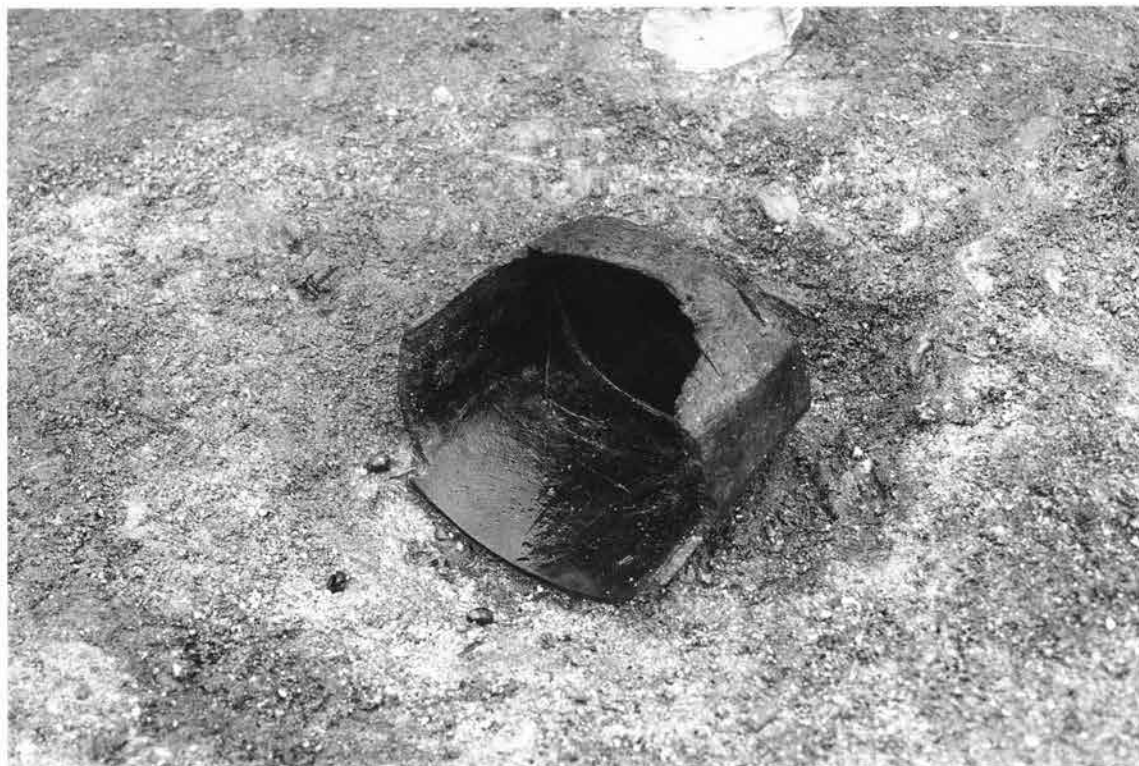
(1) 槽 (細部)



(2) 槽の固定状況 (北端)



(3) 槽の固定状況 (西端)



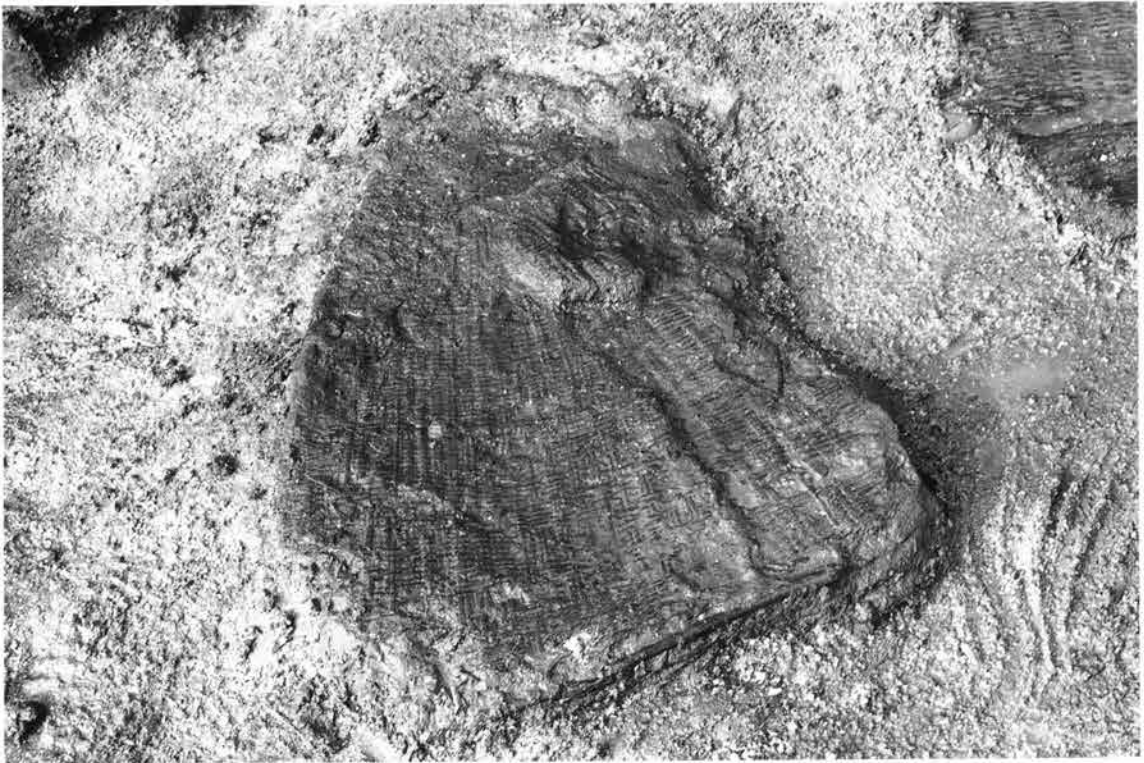
(1) 木製桶の出土状況



(2) 木製高杯の出土状況



(1) ミ状の編み物出土状況



(2) 網代状の編み物出土状況



(1) 弥生土器(甕)出土状況(流路跡内)



(2) 弥生土器(甕)出土状況(流路跡内)



(1) 木製横槌出土状況



(2) 試掘坑出土木製品



1



3



2



4



5



6



146-4



146-6



(1) 楔形石器



147-2



147-1



147-4



147-8



147-3

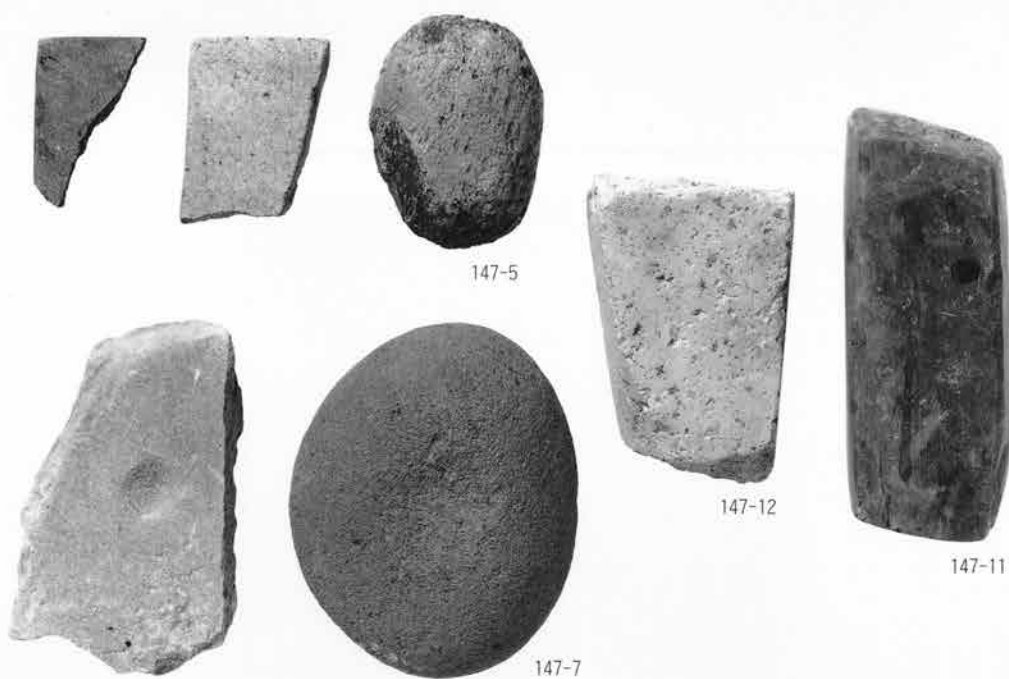


147-6

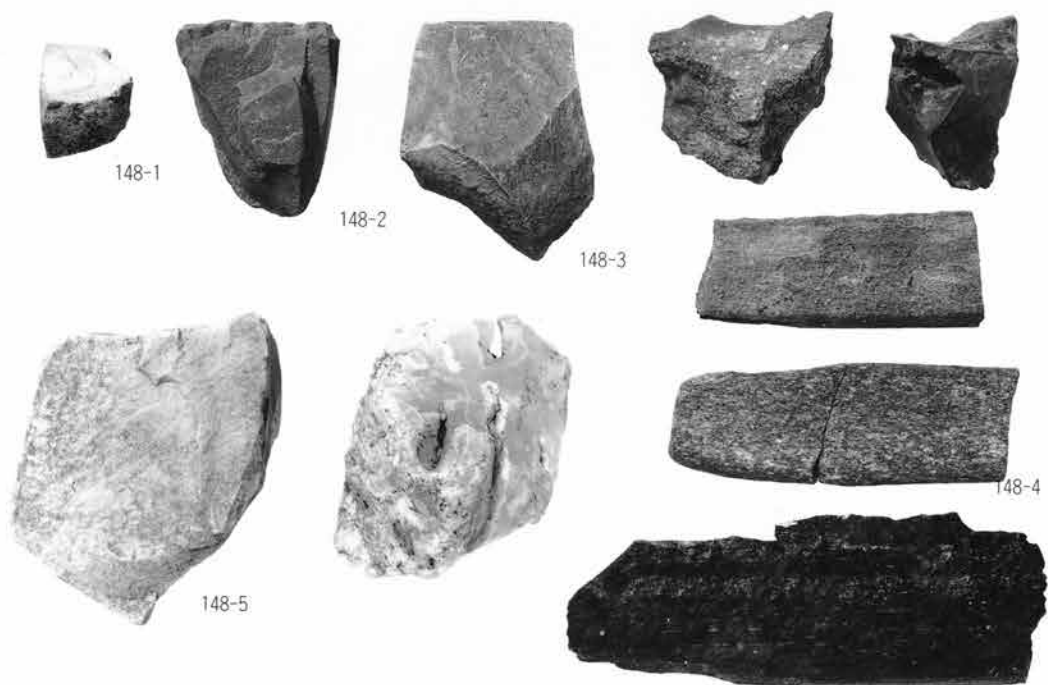


(2) 石包丁・磨製石斧





(1) 砥石・敲石・凹石



(2) 玉作り関連遺物



131-2



131-3



131-1



131-4

(1) 土製品類

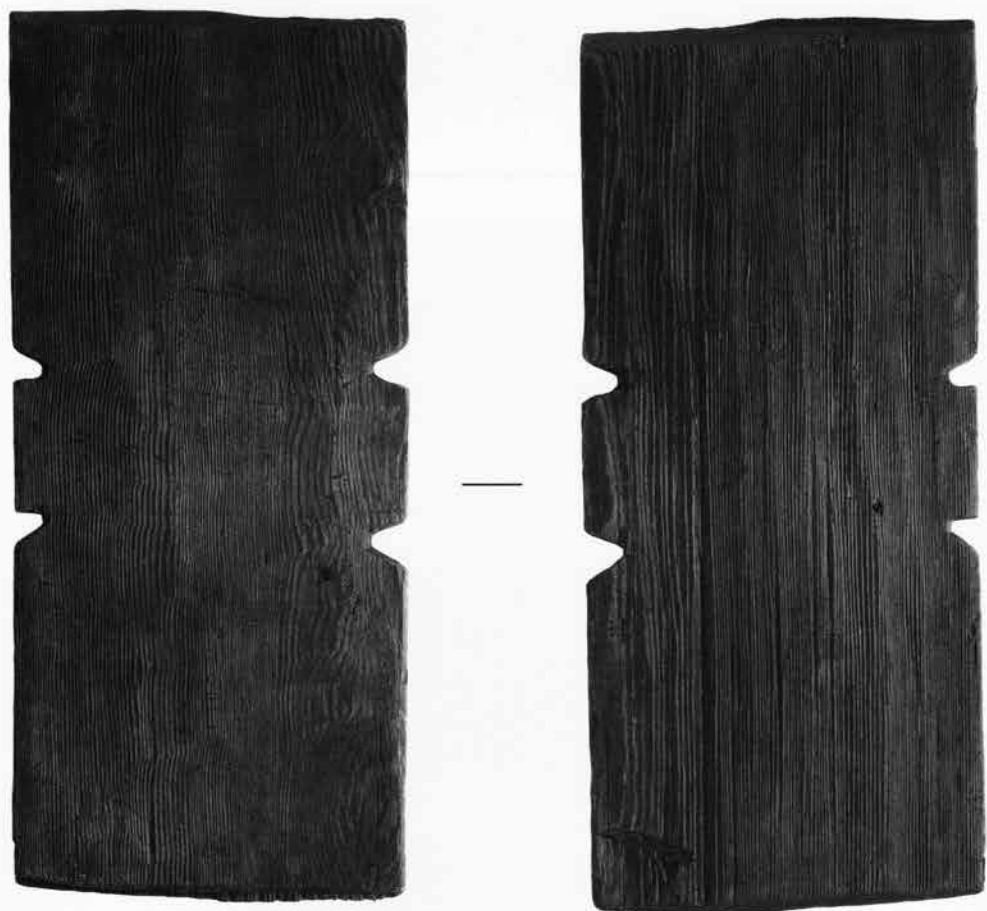


148-6

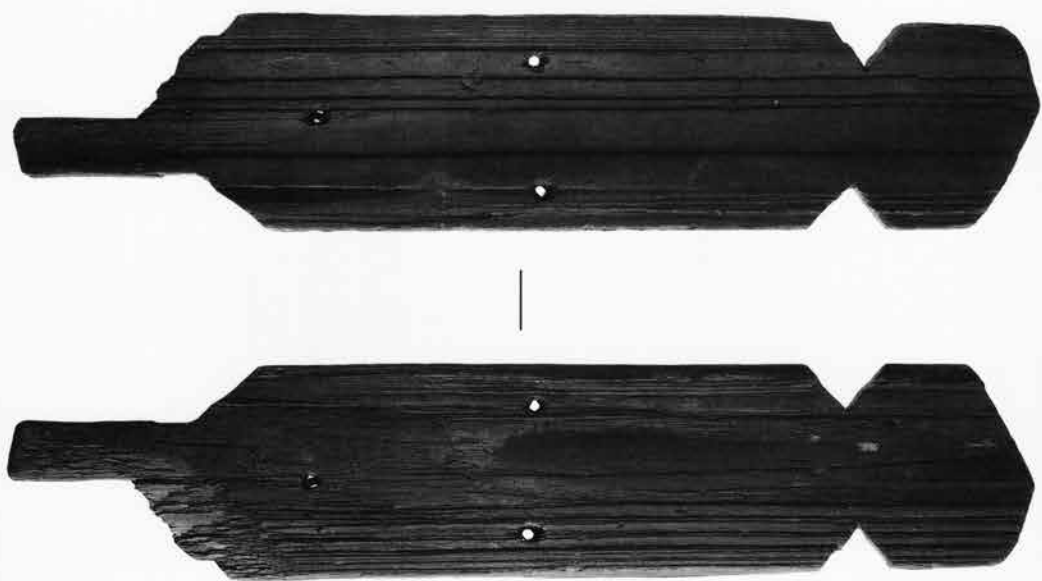


148-7

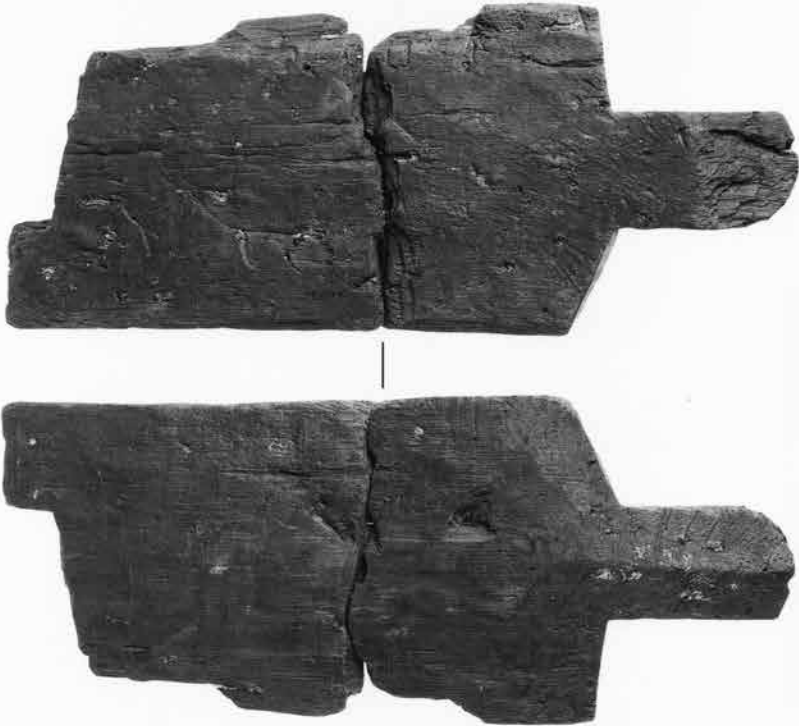
(2) 勾玉



1



3

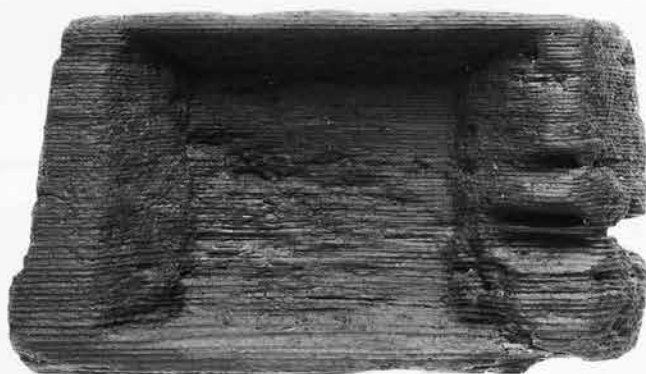




32



5



12



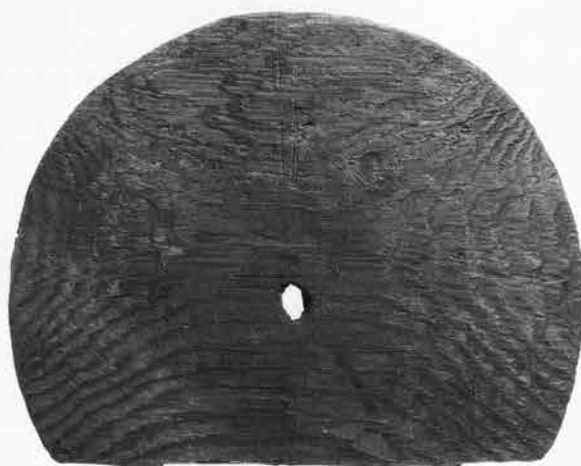
37



16



15



14



30



29



33



22



28



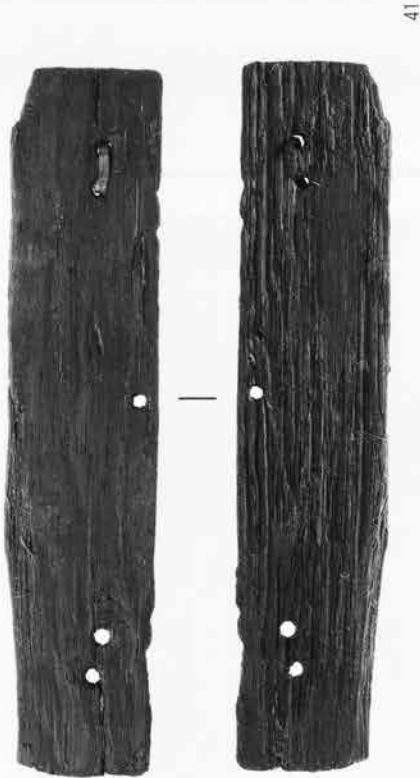
20

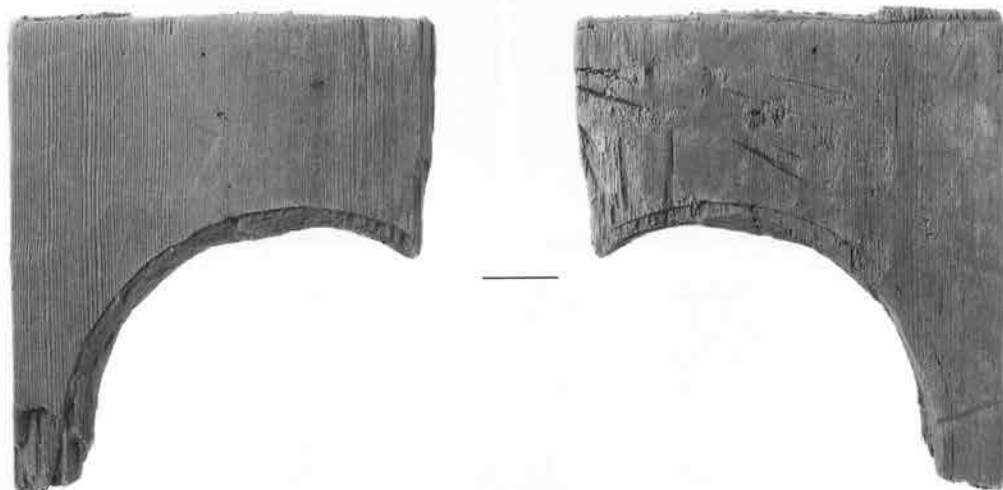


17

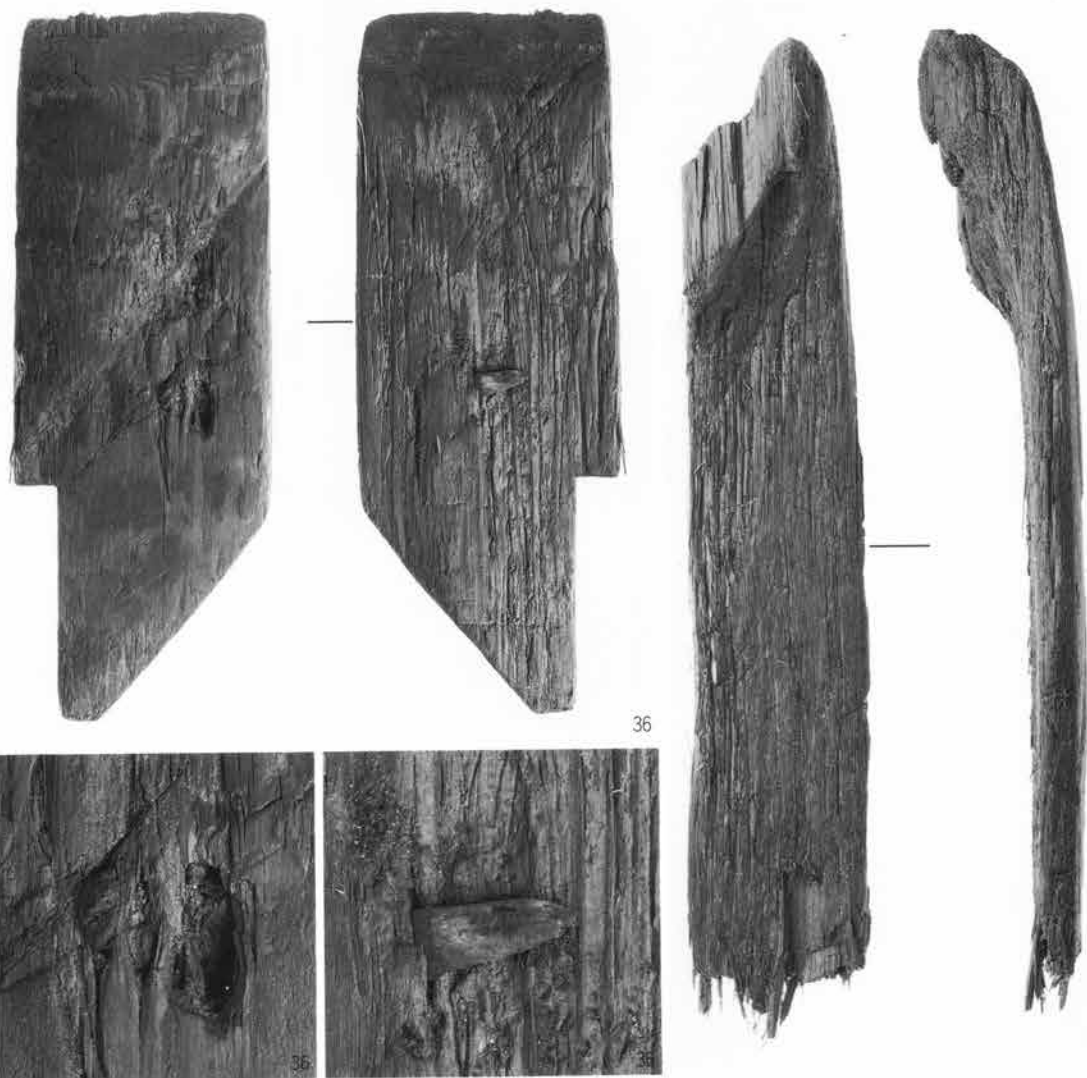


75





35

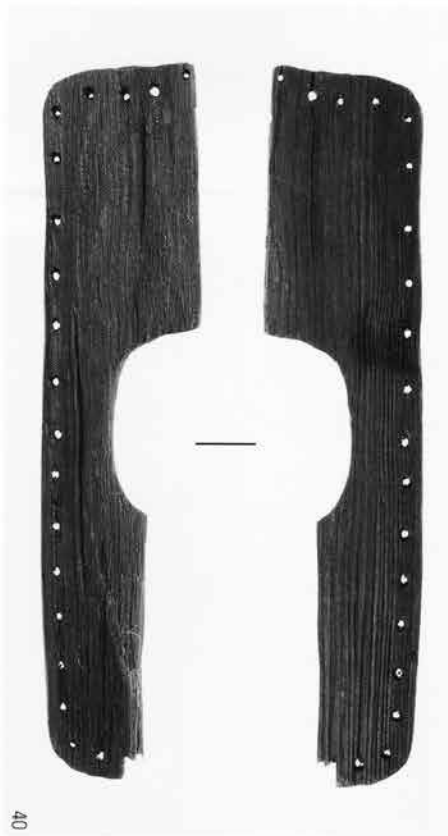


36

8

流路内(SD01)出土木製品(6)





40



46



44



47



77



流路内(S101)出土木製品(7)



49



流路内(SD01)出土木製品(8)



(1) トチ木種子



(2) コナラ属果実



(1) 溝谷古墳群調査前全景（北から）



(2) 溝谷古墳群調査前全景（南から）



(1) 溝谷古墳群調査後全景（北から）



(2) 溝谷1号墳調査状況（北から）



(1) 溝谷2・3号墳調査後全景（南東から）



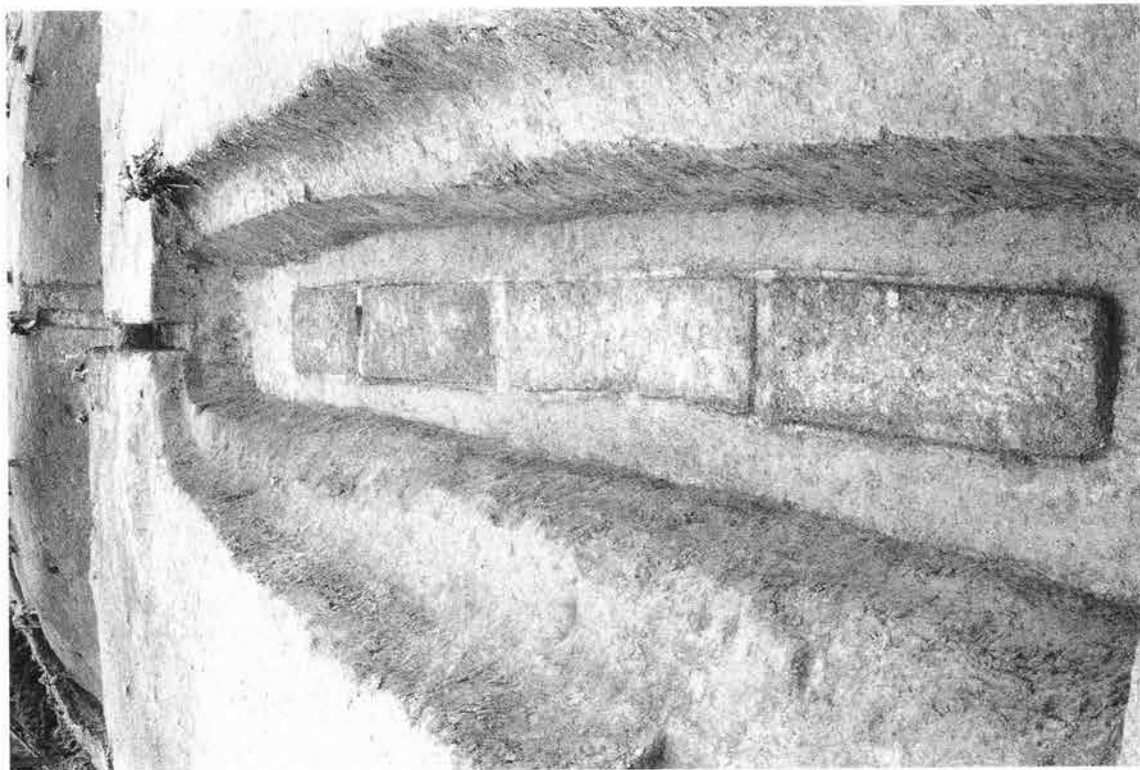
(2) 溝谷2・3号墳調査後全景（北上方から）



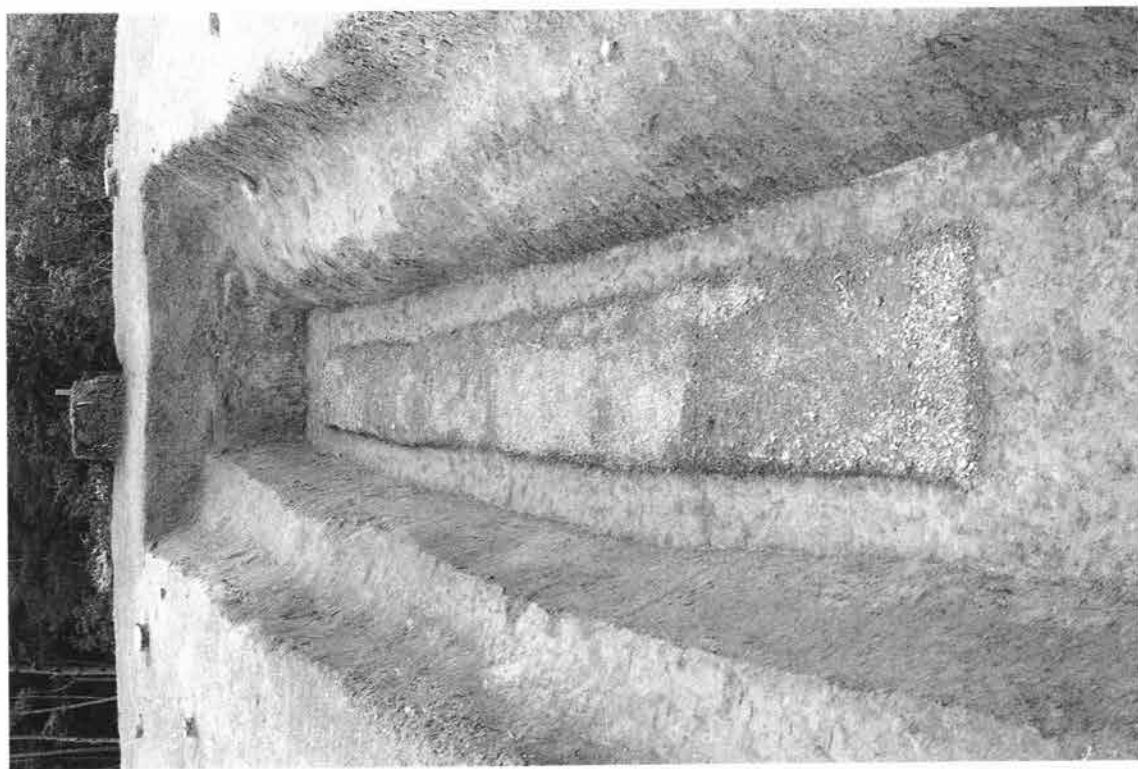
(1) 1号墳SK01検出状況（西から）



(2) 2号墳供献土器検出状況（北から）



(2) 2号墳主体部木棺痕跡検出状況

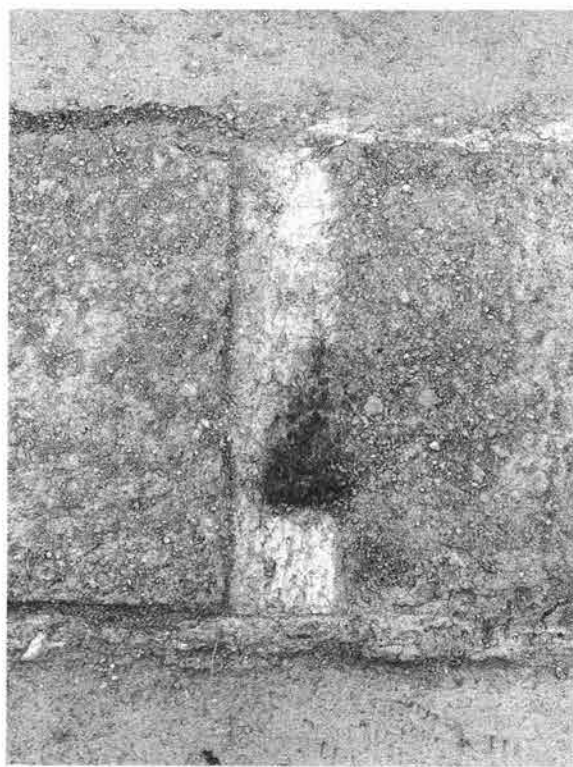


(1) 2号墳主体部礎床検出状況





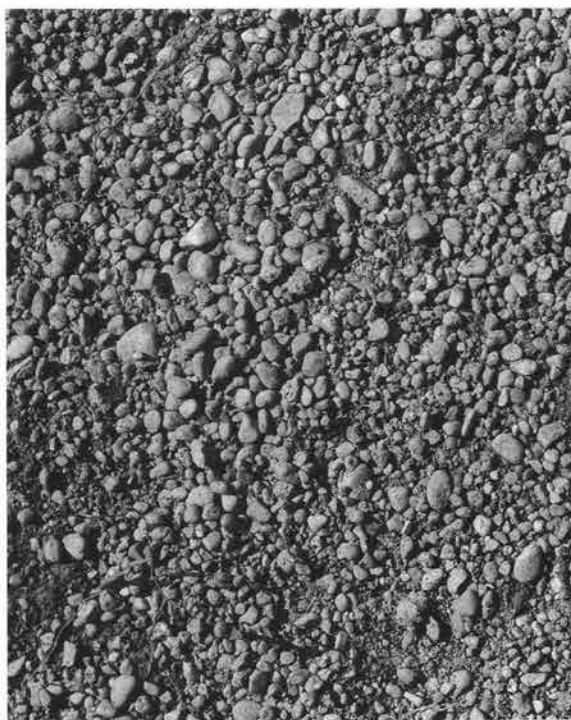
(1) 2号墳木棺痕跡(中央仕切板) (西から)



(2) 2号墳木棺痕跡(南木口板) (西から)



(1) 2号墳銅鏡出土状況



(2) 2号墳礫床(細部)



(1) 3号墳主体部検出状況（南から）



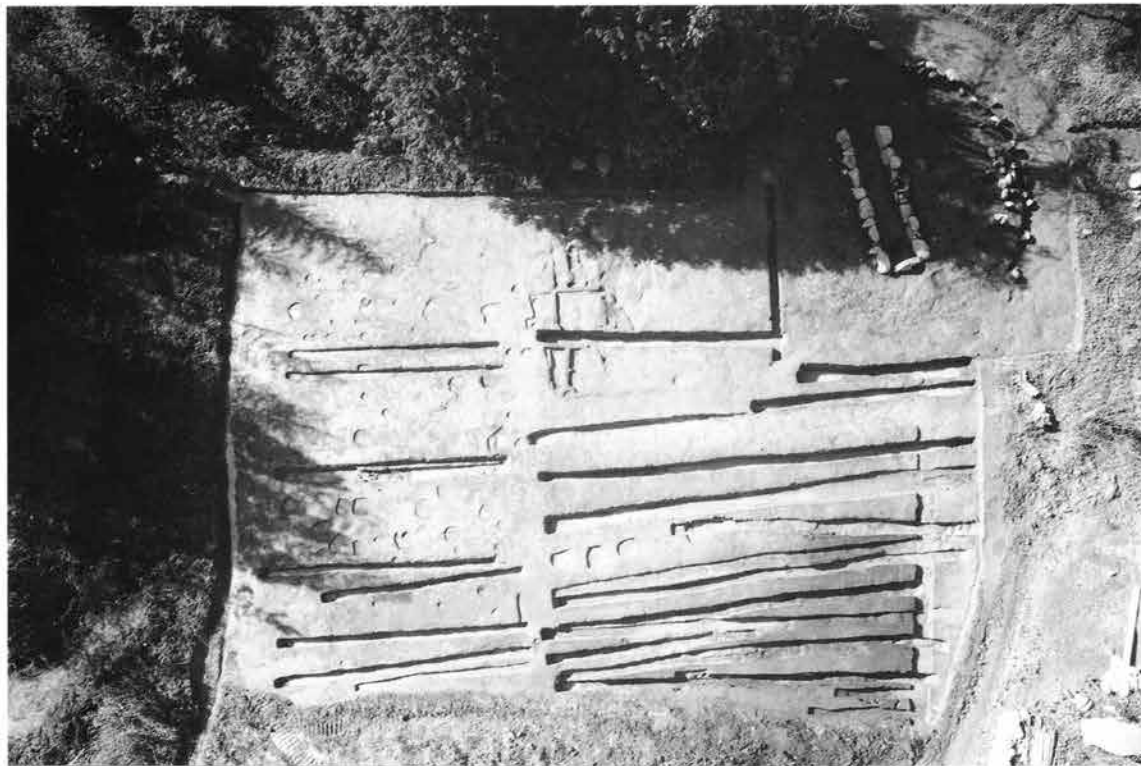
(2) 2号墳木棺痕跡検出状況



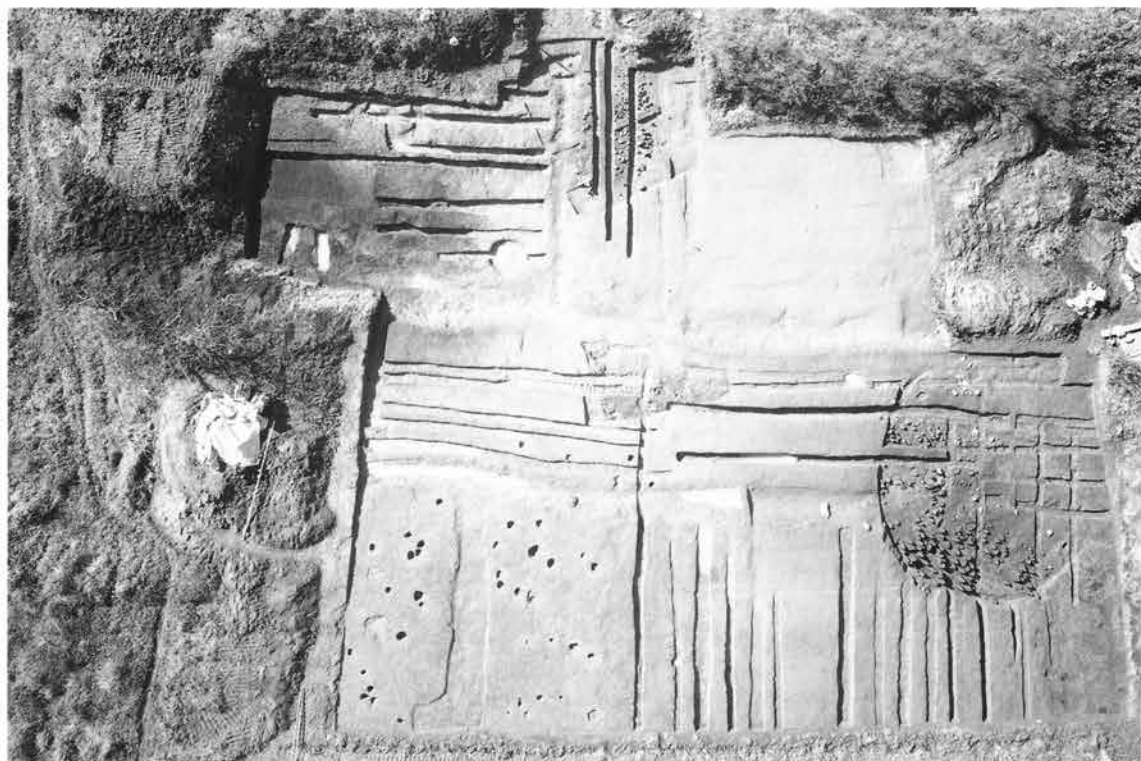
(1) 調査地遠景 (南東から)



(2) 調査地全景 (上空から)



(1) A地区全景（上空から）



(2) B地区全景（上空から）



(1) SH01全景 (南から)



(2) SH02全景 (北から)



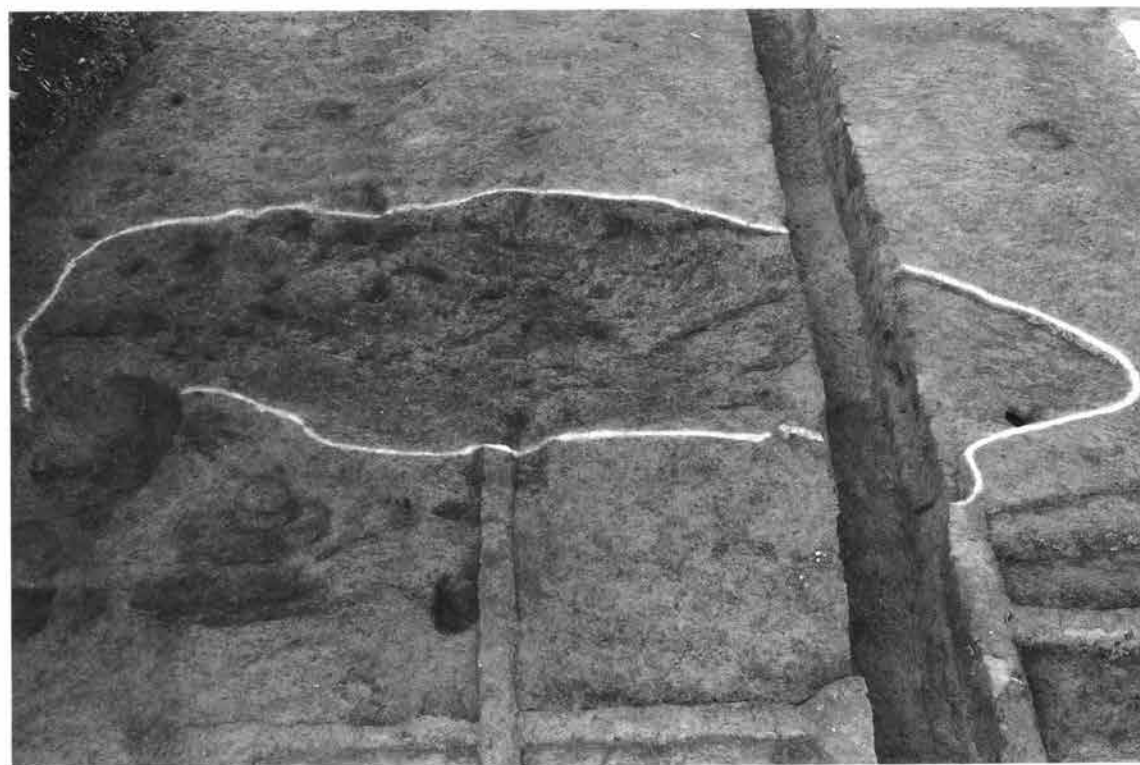
(1) SH03焼土検出状況（西から）



(2) SH03全景（西から）



(1) SX01遺物出土状況 (南から)



(2) SX01完掘 (南から)





(1) 転落石除去作業風景



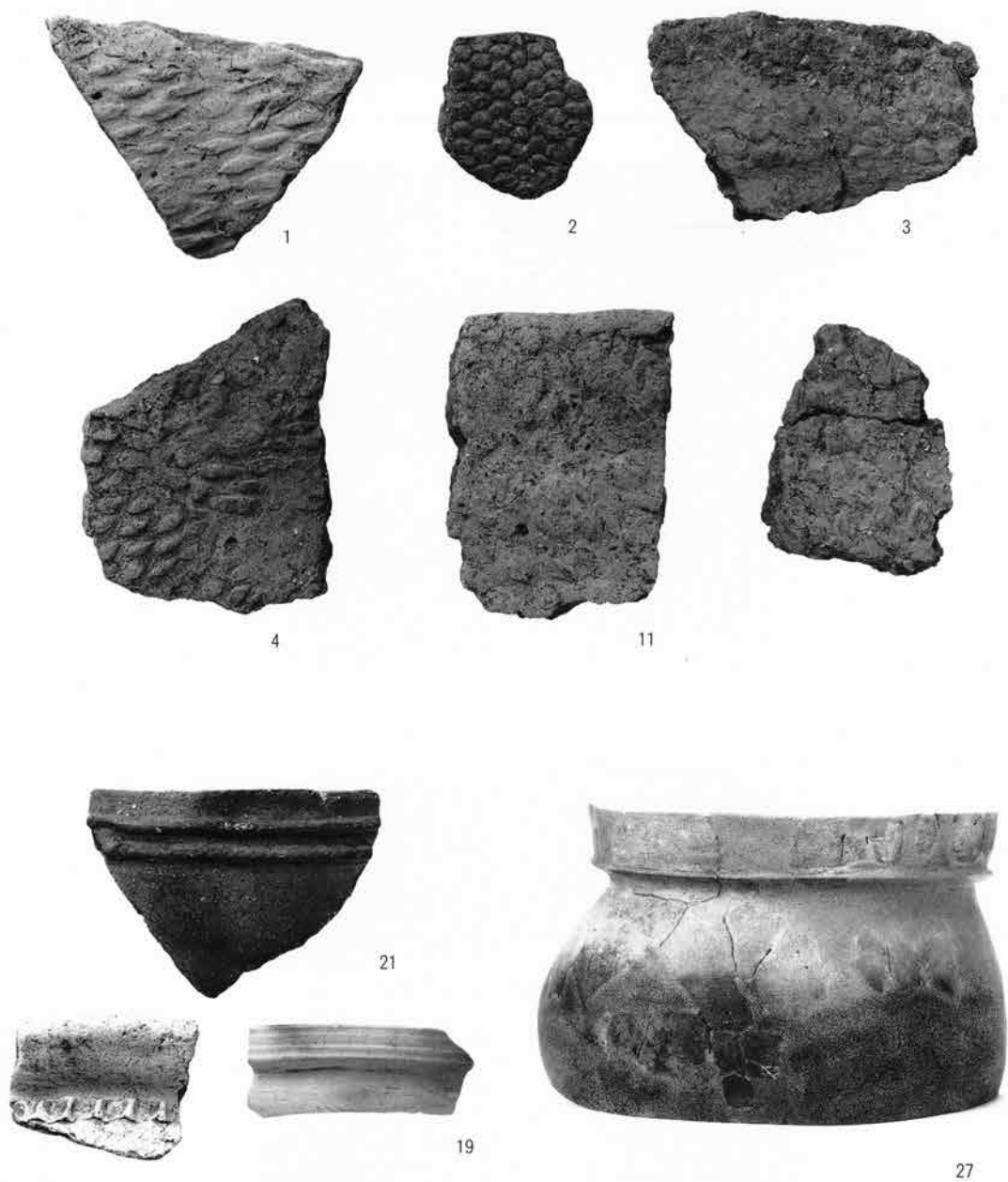
(2) 鶏塚古墳石室内遺物出土状況



(1) 鶏塚古墳全景（上空から）



(2) 鶏塚古墳墳丘断ち割り状況（東から）



女布北遺跡出土遺物 (1)



26



33



30



36



48



55



57



47



39



41



44



1



2



1



2



3



10



11



4



5



6



7



8



9



(1) 薬師7号墳調査前近景(東から)



(2) 薬師7号墳主体部検出状況(東から)



(1) 薬師7号墳主体部近景（北から）



(2) 薬師7号墳遠景（東から）

京都府遺跡調査概報 第60冊

平成6年3月25日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3  
Tel (075)933-3877 (代)

印刷 中 西 印 刷 株 式 会 社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入  
Tel (075)441-3155 (代)